

茨城県笠間市

# 埜谷遺跡 2

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会  
有限会社 毛野考古学研究所

茨城県笠間市

# 埜谷遺跡 2

県営刈地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会  
有限会社 毛野考古学研究所



調査地区空撮（南西から。中央がB区、右奥はA区、左手前は長峰東道跡。）



調査地区空撮（南東から。中央がA区、左はB3区。）



A区空撮  
(上が西)



B区空撮  
(北から)



A区54号住居跡発掘状況



A区41号住居跡カマド遺物出土状況



B2区1号石器集中地点と基本編序



遺物集合写真(弥生時代)

## 序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畑地帯総合整備事業に伴う埴谷遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、弥生時代から古墳前期と古墳後期、奈良・平安時代を主体とする集落跡が確認されました。特に弥生時代の住居跡が69軒検出され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成23年3月

笠間市教育委員会

教育長 飯 島 勇

## 例 言

1. 本書は、茨城県笠間市小原地区に所在する埴谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営畑地帯整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3. 調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導・委託を受けて、有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 遺跡の所在地、調査期間、調査面積は以下の通りである。

所在地 笠間市小原 561 番地他

調査面積 11,849㎡ (A区 10,487㎡、B1区 996㎡、B2区 254㎡、B3区 1,362㎡)

調査期間 平成20年8月18日～平成21年1月30日

整理期間 平成22年6月10日～平成23年3月15日

5. 発掘・整理担当者は以下の通りである(担当者は毛野考古学研究所)。

発掘調査 十牛朗治 (A区・B3区) 高橋清文 (B2区・B3区) 南田法正 (A区・B1区)

整理調査 土井道昭 (旧石器時代) 高橋(縄文時代) 南田・浅間陽・常深尚(弥生～古墳時代前期)

土生(古墳時代後期～近世)

6. 本書の執筆分担は、以下の通りである。

第1～Ⅲ章、第Ⅳ章第2～4節(69～103住、方形周溝状遺構)・第5節、第Ⅴ章第3節1(4住)・第4節、第Ⅴ章第1節1(2住)・第2節1・2(2周溝墓)、第Ⅴ章第3～5節、遺物観察表(古墳時代後期以降の遺物) - 土生

第Ⅳ章第1節2、第Ⅴ章第3節2、第Ⅵ章第2節・第3節(1～3住)・第5節1・2、第Ⅴ章第1節1(1住)・第2節2(1周溝墓)、第Ⅴ章第1節、遺物観察表(縄文土器) - 高橋

第Ⅳ章第1節1・第2～4節(1～67住)、第Ⅴ章第1節1・第2節・第3節 - 南田

第Ⅳ章第2節2、第Ⅴ章第1節2、第Ⅴ章第3節2、第Ⅴ章第2節、遺物観察表(弥生時代の遺物) - 浅間

第Ⅵ章第1節、遺物観察表(石器・石製品) - 土井

遺物観察表(古墳時代前期の遺物) - 常深

7. 本書の編集は、常深が担当した。

8. 調査で得られた資料は笠間市教育委員会が保管している。

9. 調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝を申し上げます。

赤井博之 飯島一生 稲田健一 海老澤稔 大木伸一郎 大賀健 大関武 川口武彦 川崎純徳 瓦吹堅

齋藤弘道 坂口一 佐々木義則 笹澤泰史 菅谷通保 鈴木徳雄 鈴木正博 鈴木素行 谷藤保彦 鶴見貞雄

鹿島清光 藤田典夫 比毛汎男 三宅敦気

スカイサーベイ(順不同・敬称略)

10. 本書の作成にあたっては、青柳美保、石田満理、石丸敦史、磯洋子、内田恵美子、大塚規子、鬼山山子

小野沢絹子、賀来孝代、加藤陽子、樺沢美枝、亀田浩子、木村宏次、小出琢磨、倉田幸子、菅谷万須美

仙波葉淨美、高橋真弓、永島美和子、根本正子、平澤利江、伴場りく、福江千英里、山下奈那子の協力を得た。

11. 発掘調査参加者は以下の通りである。

青木器、青木誠、飯田博美、飯田昭、石川克己、石川久男、海老原龍生、大山年昭、大内英雄、岡根光雄

大平昭夫、小坂部克己、大和田卓、小堤静江、小野瀬晃、小瀬靖夫、小山義則、川又誠二、川上孝子

梶山洋二、北村親、黒沢明美、小柴常光、小山範子、坂倉巡一、佐久間順美、佐藤としえ、佐藤利男

塩畑勝利、篠原一郎、白澤清三、菅谷正義、菅谷和子、鈴木とし江、鈴木浩、鈴木晃佳、関伸了、仙波由美子

高橋真弓、高岡真十、瀧江稔、高田幸江、竹内郁夫、豊島英則、飛田和郎、仲田仙、中島とみ子、中島秀雄





中村伊重、中村薫、中村柄繁次、野村正子、埴英知、広水一真、吹野昇、福島えり子、松本修晃、三河博志

武藤瑞良、山口致辰、横田忠利、吉田正子



## 凡 例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図、笠岡市発行2千5百分の1都市計画図である。
2. 出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。  
S I…竪穴住居跡 S K…土坑 S D…溝 P…ピット K…カクラン
3. 実測図で使用した縮尺は以下の通りである。  
竪穴住居跡…1/60 掘立柱建物跡…1/60 土坑・陥穴・井戸・地下式坑…1/60  
溝・道路跡…1/60、1/300 方形周溝状遺構…1/60 周溝墓…1/80、1/100  
ピット群・ピット列…1/60 石器集中地点…1/60  
土器…1/3 旧石器…3/4 石器・石製品…1/1、1/2、1/3、1/4  
土製品・金属製品…1/3
4. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著（財）日本色彩研究所）を使用した。
5. 遺構一覧表・遺物観察表の表記は（ ）内数値が計測推定値を、[ ]内数値は残存値を表す。
6. 遺物観察表（弥生土器）において附加条縄文の原体については鈴木素行1998を一部参考にし、附加条縄文の種類（軸縄の原体+附加した縄の条数と原体）のように表記した。  
（例）附加条1種縄文（L R + 2 R）= 単節L R縄文に無節R縄文を2条附加  
軸縄が不明のものについては「R - S」のように表記し、R - Sの場合は無節RをS巻き、R - Zの場合はZ巻きであることを表す。なお、小文字r、lは撚り紐（0段の縄）の撚り方向を表す。また、施文方向は基本的に横方向であるため、記述を省略し、横方向以外の場合のみ記載した。
7. 遺物観察表（弥生土器）においてコゲ等については、内容物が焦げ付き、厚く付着する場合を「コゲ」、薄く付着する場合を「ヨゴレ」、被熱によりススが消失した部分を「スス酸化消失」と表記した。
8. 実測図中のスクリーントーンは以下の通りである。

遺構		粘土		焼土
遺物		赤彩		油煙

# 目 次

等閑亭真洞版

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の経過	1
第 II 章 遺跡の位置と環境	2
第 1 節 地理的概況	2
第 2 節 歴史的環境	3
第 III 章 調査の方法と基本層序	4
第 1 節 調査の方法	4
第 2 節 基本層序	5
第 IV 章 A 区の遺構と遺物	12
第 1 節 縄文時代	12
1 隆穴	12
2 遺構外出土遺物	13
第 2 節 弥生時代	15
1 壑穴住居跡	15
2 遺構外出土遺物	109
第 3 節 古墳時代	113
1 壑穴住居跡	113
2 瓦片層及び遺構外出土遺物	153
第 4 節 奈良・平安時代	154
1 壑穴住居跡	154
2 開立柱礎形跡	235
3 方形四隅尖遺構	242
第 5 節 中世以降	243
1 地下式坑	243
2 井戸	248
3 土坑	250
4 竈井状遺構	252
5 ビット群・ビット列	252
6 溝・道路跡	255
第 V 章 B 1 区の遺構と遺物	257
第 1 節 弥生時代	257
1 壑穴住居跡	257
2 遺構外出土遺物	277

第 2 節 奈良・平安時代	278
1 壑穴住居跡	278
2 溝	280
第 3 節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物	280
1 時期不明の遺構	280
2 遺構外出土遺物	280

第 VI 章 B 2 区の遺構と遺物	281
第 1 節 内石層時代	281
1 石器集中地点	281
第 2 節 縄文時代	287
1 壑穴住居跡	287
第 3 節 弥生時代	289
1 壑穴住居跡	289
第 4 節 奈良・平安時代	290
1 壑穴住居跡	293
第 5 節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物	294
1 溝	294
2 土坑・ビット	294
3 遺構外出土遺物	295

第 VII 章 B 3 区の遺構と遺物	296
第 1 節 弥生時代	296
1 壑穴住居跡	296
第 2 節 古墳時代	329
1 壑穴住居跡	329
2 間道築	331
第 3 節 遺構外出土遺物	336

第 VIII 章 総括	337
第 1 節 縄文時代	337
第 2 節 弥生時代	338
第 3 節 古墳時代	343
第 4 節 奈良・平安時代	344
第 5 節 中世	346

写真同版  
抄 録  
典 付

# 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	2	第56図	64号住居跡・出土遺物①	68
第2図	調査地区の位置図	3	第57図	64号住居跡出土遺物②	69
第3図	基本土層図	5	第58図	66号住居跡	70
第4図	遺構全体図	6	第59図	66号住居跡出土遺物	71
第5図	A区遺構全体図	7	第60図	67号住居跡・出土遺物	73
第6図	B1区遺構全体図	9	第61図	73号住居跡・出土遺物	74
第7図	B2区遺構全体図	10	第62図	74号住居跡・出土遺物	76
第8図	B3区遺構全体図	11	第63図	77号住居跡・出土遺物	78
第9図	1・2号陥穴・出土遺物	12	第64図	79号住居跡	79
第10図	A区遺構外出土遺物①	13	第65図	79号住居跡出土遺物①	80
第11図	A区遺構外出土遺物②	14	第66図	79号住居跡出土遺物②	81
第12図	2号住居跡	15	第67図	80号住居跡	83
第13図	2号住居跡出土遺物	16	第68図	80号住居跡出土遺物	84
第14図	3号住居跡出土遺物	16	第69図	83a号住居跡出土遺物	85
第15図	3号住居跡	17	第70図	83a・b号住居跡	86
第16図	6号住居跡	18	第71図	85号住居跡	88
第17図	6号住居跡出土遺物	19	第72図	85号住居跡出土遺物①	89
第18図	9号住居跡	21	第73図	85号住居跡出土遺物②	90
第19図	9号住居跡出土遺物	22	第74図	86号住居跡	91
第20図	14号住居跡	23	第75図	86号住居跡出土遺物①	92
第21図	14号住居跡出土遺物	24	第76図	86号住居跡出土遺物②	93
第22図	16号住居跡	25	第77図	88号住居跡出土遺物	94
第23図	16号住居跡出土遺物	26	第78図	88号住居跡	95
第24図	18号住居跡	28	第79図	90号住居跡	96
第25図	18号住居跡出土遺物①	28	第80図	90号住居跡出土遺物	97
第26図	18号住居跡出土遺物②	29	第81図	93号住居跡・出土遺物	98
第27図	27号住居跡	31	第82図	96号住居跡・出土遺物	99
第28図	27号住居跡出土遺物①	32	第83図	97号住居跡・出土遺物	101
第29図	27号住居跡出土遺物②	33	第84図	98号住居跡	102
第30図	29号住居跡出土遺物	34	第85図	98号住居跡出土遺物	103
第31図	29号住居跡	35	第86図	99号住居跡・出土遺物	104
第32図	30号住居跡	37	第87図	100号住居跡	104
第33図	35号住居跡	37	第88図	100号住居跡出土遺物	105
第34図	37号住居跡	38	第89図	101号住居跡・出土遺物	106
第35図	37号住居跡出土遺物	39	第90図	102号住居跡	107
第36図	39号住居跡・出土遺物	41	第91図	103号住居跡・出土遺物	108
第37図	44号住居跡	43	第92図	遺構外出土遺物①	109
第38図	44号住居跡掘り方	44	第93図	遺構外出土遺物②	110
第39図	44号住居跡出土遺物	45	第94図	1号住居跡	114
第40図	45号住居跡・出土遺物	46	第95図	1号住居跡出土遺物①	115
第41図	48号住居跡	48	第96図	1号住居跡出土遺物②	116
第42図	48号住居跡出土遺物	49	第97図	4号住居跡出土遺物①	117
第43図	49号住居跡	51	第98図	4号住居跡	118
第44図	49号住居跡出土遺物	52	第99図	4号住居跡出土遺物②	119
第45図	50号住居跡	53	第100図	5号住居跡	120
第46図	51号住居跡	54	第101図	5号住居跡掘り方	121
第47図	52号住居跡・出土遺物	55	第102図	5号住居跡出土遺物①	122
第48図	54号住居跡	57	第103図	5号住居跡出土遺物②	123
第49図	54号住居跡出土遺物	58	第104図	8号住居跡	126
第50図	56号住居跡	59	第105図	8号住居跡掘り方	127
第51図	57号住居跡	60	第106図	8号住居跡出土遺物①	128
第52図	57号住居跡出土遺物	61	第107図	8号住居跡出土遺物②	129
第53図	58号住居跡	63	第108図	8号住居跡出土遺物③	130
第54図	58号住居跡出土遺物	64	第109図	12号住居跡	132
第55図	61号住居跡・出土遺物	66	第110図	12号住居跡出土遺物	132

第111回	13号住居跡	133	第171回	47号住居跡出土遺物③	205
第112回	15号住居跡	135	第172回	53号住居跡・出土遺物①	207
第113回	15号住居跡出土遺物	136	第173回	53号住居跡出土遺物②	208
第114回	15号住居跡掘り方	137	第174回	55号住居跡・出土遺物	209
第115回	23号住居跡	138	第175回	59号住居跡	210
第116回	23号住居跡出土遺物	139	第176回	59号住居跡出土遺物①	211
第117回	32号住居跡	140	第177回	59号住居跡出土遺物②	212
第118回	33号住居跡	141	第178回	60号住居跡	214
第119回	33号住居跡出土遺物	142	第179回	60号住居跡出土遺物	215
第120回	81号住居跡	144	第180回	63号住居跡	216
第121回	81号住居跡出土遺物	145	第181回	63号住居跡出土遺物	217
第122回	83号住居跡出土遺物	146	第182回	65号住居跡・出土遺物①	218
第123回	87号住居跡・出土遺物	147	第183回	65号住居跡出土遺物②	219
第124回	92号住居跡出土遺物	148	第184回	69号住居跡	221
第125回	92号住居跡	149	第185回	70号住居跡・出土遺物	222
第126回	94号住居跡	151	第186回	71号住居跡	223
第127回	94号住居跡出土遺物	152	第187回	71号住居跡出土遺物	224
第128回	包含層及び遺構外出土遺物	153	第188回	75号住居跡	225
第129回	7号住居跡	155	第189回	75号住居跡出土遺物	226
第130回	7号住居跡出土遺物①	156	第190回	76号住居跡・出土遺物	227
第131回	7号住居跡出土遺物②	157	第191回	78号住居跡	228
第132回	10号住居跡	158	第192回	78号住居跡出土遺物	229
第133回	10号住居跡出土遺物	159	第193回	82号住居跡出土遺物	230
第134回	11号住居跡	160	第194回	82号住居跡	231
第135回	11号住居跡掘り方	161	第195回	84号住居跡	232
第136回	11号住居跡出土遺物	161	第196回	84号住居跡出土遺物	233
第137回	17号住居跡	163	第197回	95号住居跡	234
第138回	17号住居跡出土遺物	164	第198回	95号住居跡出土遺物	235
第139回	19号住居跡	166	第199回	1・3号掘立柱建物跡・出土遺物	237
第140回	19号住居跡出土遺物	167	第200回	4・6号掘立柱建物跡	238
第141回	21号住居跡	168	第201回	7号掘立柱建物跡	239
第142回	21号住居跡カマド・掘り方	169	第202回	7号掘立柱建物跡出土遺物	240
第143回	21号住居跡出土遺物	170	第203回	11・12号掘立柱建物跡	241
第144回	22号住居跡	172	第204回	1号方形周溝状遺構	242
第145回	22号住居跡出土遺物	173	第205回	1号地下式坑	243
第146回	24号住居跡	174	第206回	2号・3号地下式坑	244
第147回	24号住居跡出土遺物	175	第207回	4号・5号地下式坑	245
第148回	26号住居跡	176	第208回	6号・7号地下式坑	246
第149回	26号住居跡出土遺物	177	第209回	地下式坑出土遺物	247
第150回	31号住居跡出土遺物	179	第210回	1号井戸・出土遺物	249
第151回	31号住居跡	180	第211回	2号井戸	249
第152回	38号住居跡	182	第212回	72号上坑出土遺物	250
第153回	38号住居跡カマド・掘り方	183	第213回	河井状遺構出土遺物	252
第154回	38号住居跡出土遺物①	184	第214回	1号ピット	253
第155回	38号住居跡出土遺物②	185	第215回	1号ピット列	253
第156回	40号住居跡	187	第216回	2号・3号ピット列	254
第157回	40号住居跡掘り方	188	第217回	7号溝・1号道路跡	256
第158回	40号住居跡出土遺物	189	第218回	溝・道路跡出土遺物	256
第159回	41・42号住居跡	191	第219回	1号住居跡	258
第160回	41・42号住居跡・42号住居跡出土遺物	192	第220回	1号住居跡出土遺物	259
第161回	41号住居跡出土遺物	193	第221回	2号住居跡	261
第162回	43号住居跡	195	第222回	2号住居跡出土遺物	262
第163回	43号住居跡出土遺物	196	第223回	3号住居跡	264
第164回	46号住居跡	197	第224回	3号住居跡出土遺物①	265
第165回	46号住居跡カマド・掘り方	198	第225回	3号住居跡出土遺物②	266
第166回	46号住居跡出土遺物	199	第226回	5号住居跡	267
第167回	47号住居跡	201	第227回	5号住居跡出土遺物	268
第168回	47号住居跡掘り方	202	第228回	6号住居跡	270
第169回	47号住居跡出土遺物①	203	第229回	6号住居跡出土遺物	271
第170回	47号住居跡出土遺物②	204	第230回	7号住居跡・出土遺物①	273

第231回	7号住居跡出土遺物②	274
第232回	8号住居跡	275
第233回	8号住居跡出土遺物	276
第234回	9号住居跡	277
第235回	遺構外出土遺物	278
第236回	4号住居跡・出土遺物	279
第237回	遺構外出土遺物	280
第238回	1号石器集中地点(器種別)	282
第239回	1号石器集中地点(石材別)	283
第240回	1号石器集中地点出土遺物①	284
第241回	1号石器集中地点出土遺物②	285
第242回	1号住居跡出土遺物	287
第243回	1号住居跡	288
第244回	2号住居跡	289
第245回	2号住居跡出土遺物	290
第246回	3号住居跡	291
第247回	4号住居跡・出土遺物	292
第248回	5号住居跡・出土遺物	293
第249回	1号溝	294
第250回	1号～5号土坑	295
第251回	ビット・遺構外出土遺物	296
第252回	1号住居跡出土遺物	296
第253回	1号住居跡	297
第254回	2号住居跡	298
第255回	2号住居跡掘り方・出土遺物①	299
第256回	2号住居跡出土遺物②	300
第257回	3号住居跡	302
第258回	3号住居跡出土遺物①	303
第259回	3号住居跡出土遺物②	304
第260回	3号住居跡出土遺物③	305
第261回	4号住居跡	308
第262回	4号住居跡出土遺物①	309
第263回	4号住居跡出土遺物②	310
第264回	4号住居跡出土遺物③	311

第265回	5号住居跡出土遺物	312
第266回	5号住居跡	313
第267回	6号住居跡・出土遺物	315
第268回	8号住居跡・出土遺物	317
第269回	9号住居跡出土遺物	318
第270回	9号住居跡	319
第271回	10号住居跡・出土遺物	321
第272回	11号住居跡	322
第273回	11号住居跡出土遺物	323
第274回	12号住居跡	325
第275回	12号住居跡出土遺物①	326
第276回	12号住居跡出土遺物②	327
第277回	13号住居跡・出土遺物	328
第278回	7号住居跡出土遺物①	329
第279回	7号住居跡	330
第280回	7号住居跡出土遺物②	331
第281回	1号周溝墓・出土遺物	332
第282回	2号周溝墓	334
第283回	2号周溝墓出土遺物	335
第284回	遺構外出土遺物	336
第285回	茨城県における縄文前期前半の6本木柱穴住居跡	337
第286回	弥生土器の変遷図(2～4期を抜粋)	339
第287回	典型的な「土台式土器から外れる個体	339
第288回	弥生集落の変遷	341
第289回	付図・弥生土器のスズ・コゲ	342
第290回	「貯蔵穴の移動」より	343
第291回	長峰東・彌谷遺跡 住居の比較	343
第292回	聚穴住居の変化	344
第293回	特殊な器形の須恵器	344
第294回	須恵器大形高台付鉢	345
第295回	8世紀の土師器供膳具	345
第296回	「山守」麻書(60住)	345

## 表 目 次

表1	1号陥穴出土遺物観察表	13
表2	A区遺構外出土遺物観察表	14
表3	2号住居跡出土遺物観察表	16
表4	3号住居跡出土遺物観察表	16
表5	6号住居跡出土遺物観察表	17
表6	9号住居跡出土遺物観察表	21
表7	14号住居跡出土遺物観察表	22
表8	16号住居跡出土遺物観察表	24
表9	18号住居跡出土遺物観察表	27
表10	27号住居跡出土遺物観察表	31
表11	29号住居跡出土遺物観察表	35
表12	37号住居跡出土遺物観察表	39
表13	39号住居跡出土遺物観察表	40
表14	44号住居跡出土遺物観察表	42
表15	45号住居跡出土遺物観察表	47
表16	48号住居跡出土遺物観察表	47
表17	49号住居跡出土遺物観察表	50

表18	52号住居跡出土遺物観察表	56
表19	54号住居跡出土遺物観察表	56
表20	57号住居跡出土遺物観察表	62
表21	58号住居跡出土遺物観察表	63
表22	61号住居跡出土遺物観察表	67
表23	64号住居跡出土遺物観察表	67
表24	66号住居跡出土遺物観察表	70
表25	67号住居跡出土遺物観察表	72
表26	73号住居跡出土遺物観察表	75
表27	74号住居跡出土遺物観察表	75
表28	77号住居跡出土遺物観察表	77
表29	79号住居跡出土遺物観察表	81
表30	80号住居跡出土遺物観察表	82
表31	83a号住居跡出土遺物観察表	86
表32	85号住居跡出土遺物観察表	87
表33	86号住居跡出土遺物観察表	93
表34	88号住居跡出土遺物観察表	94

表35	90号住居跡出土遺物觀察表	97	表85	76号住居跡出土遺物觀察表	228
表36	93号住居跡出土遺物觀察表	97	表86	78号住居跡出土遺物觀察表	229
表37	96号住居跡出土遺物觀察表	100	表87	82号住居跡出土遺物觀察表	230
表38	97号住居跡出土遺物觀察表	100	表88	84号住居跡出土遺物觀察表	233
表39	98号住居跡出土遺物觀察表	103	表89	95号住居跡出土遺物觀察表	235
表40	99号住居跡出土遺物觀察表	104	表90	3号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	236
表41	100号住居跡出土遺物觀察表	105	表91	7号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	240
表42	101号住居跡出土遺物觀察表	106	表92	地下式坑一覽表	243
表43	103号住居跡出土遺物觀察表	108	表93	地下式坑出土遺物觀察表	248
表44	A区遺構外出土遺物觀察表	111	表94	井戸一覽表	248
表45	1号住居跡出土遺物觀察表	113	表95	井戸出土遺物觀察表	248
表46	4号住居跡出土遺物觀察表	119	表96	72号土坑出土遺物觀察表	250
表47	5号住居跡出土遺物觀察表	124	表97	A区土坑一覽表	251
表48	8号住居跡出土遺物觀察表	125	表98	溜井状遺構出土遺物觀察表	252
表49	12号住居跡出土遺物觀察表	133	表99	溝・道路跡出土遺物觀察表	253
表50	15号住居跡出土遺物觀察表	134	表100	1号住居跡出土遺物觀察表	257
表51	23号住居跡出土遺物觀察表	139	表101	2号住居跡出土遺物觀察表	260
表52	33号住居跡出土遺物觀察表	143	表102	3号住居跡出土遺物觀察表	263
表53	81号住居跡出土遺物觀察表	145	表103	5号住居跡出土遺物觀察表	268
表54	83b号住居跡出土遺物觀察表	146	表104	6号住居跡出土遺物觀察表	272
表55	87号住居跡出土遺物觀察表	146	表105	7号住居跡出土遺物觀察表	272
表56	92号住居跡出土遺物觀察表	148	表106	8号住居跡出土遺物觀察表	276
表57	94号住居跡出土遺物觀察表	150	表107	遺構外出土遺物觀察表	278
表58	包含層及び遺構外出土遺物觀察表	153	表108	4号住居跡出土遺物觀察表	279
表59	7号住居跡出土遺物觀察表	154	表109	B1区土坑一覽表	280
表60	10号住居跡出土遺物觀察表	159	表110	遺構外出土遺物觀察表	280
表61	11号住居跡出土遺物觀察表	162	表111	1号石器集中地点出土石器組成表	283
表62	17号住居跡出土遺物觀察表	162	表112	1号石器集中地点出土石器一覽表	285
表63	19号住居跡出土遺物觀察表	165	表113	1号住居跡出土遺物觀察表	287
表64	21号住居跡出土遺物觀察表	171	表114	2号住居跡出土遺物觀察表	290
表65	22号住居跡出土遺物觀察表	173	表115	4号住居跡出土遺物觀察表	291
表66	24号住居跡出土遺物觀察表	175	表116	5号住居跡出土遺物觀察表	294
表67	26号住居跡出土遺物觀察表	178	表117	B2区土坑一覽表	294
表68	31号住居跡出土遺物觀察表	181	表118	ピット・遺構外出土遺物觀察表	296
表69	38号住居跡出土遺物觀察表	186	表119	1号住居跡出土遺物觀察表	295
表70	40号住居跡出土遺物觀察表	188	表120	2号住居跡出土遺物觀察表	301
表71	41号住居跡出土遺物觀察表	191	表121	3号住居跡出土遺物觀察表	302
表72	42号住居跡出土遺物觀察表	194	表122	4号住居跡出土遺物觀察表	307
表73	43号住居跡出土遺物觀察表	196	表123	5号住居跡出土遺物觀察表	314
表74	46号住居跡出土遺物觀察表	200	表124	6号住居跡出土遺物觀察表	316
表75	47号住居跡出土遺物觀察表	202	表125	8号住居跡出土遺物觀察表	315
表76	53号住居跡出土遺物觀察表	206	表126	9号住居跡出土遺物觀察表	318
表77	55号住居跡出土遺物觀察表	208	表127	10号住居跡出土遺物觀察表	320
表78	59号住居跡出土遺物觀察表	213	表128	11号住居跡出土遺物觀察表	323
表79	60号住居跡出土遺物觀察表	215	表129	12号住居跡出土遺物觀察表	324
表80	63号住居跡出土遺物觀察表	217	表130	13号住居跡出土遺物觀察表	328
表81	65号住居跡出土遺物觀察表	217	表131	7号住居跡出土遺物觀察表	331
表82	70号住居跡出土遺物觀察表	221	表132	1号周溝墓出土遺物觀察表	333
表83	71号住居跡出土遺物觀察表	224	表133	2号周溝墓出土遺物觀察表	333
表84	75号住居跡出土遺物觀察表	224	表134	遺構外出土遺物觀察表	336

## 写真図版目次

- P.L. 1 A区の遺構 (縄文時代・弥生時代) 1・2号陥穴、6・14・16・27・29・37号住居跡  
 P.L. 2 A区の遺構 (弥生時代) 44・45・48・49・54・56・57・58号住居跡  
 P.L. 3 A区の遺構 (弥生時代) 67・73・77・79・85・86・88号住居跡  
 P.L. 4 A区の遺構 (弥生時代・古墳時代) 93・97・102・1・4号住居跡  
 P.L. 5 A区の遺構 (古墳時代) 5・8・15・33・87・92号住居跡  
 P.L. 6 A区の遺構 (奈良・平安時代) 7・10・11・17・19号住居跡  
 P.L. 7 A区の遺構 (奈良・平安時代) 21・22・24・26・31・38号住居跡  
 P.L. 8 A区の遺構 (奈良・平安時代) 38・40・41・42・43号住居跡  
 P.L. 9 A区の遺構 (奈良・平安時代) 43・46・47・53号住居跡  
 P.L. 10 A区の遺構 (奈良・平安時代) 55・59・60・65・75・84号住居跡  
 P.L. 11 A区の遺構 (奈良・平安時代) 1・3・4・6・7・11・12号掘立柱建物跡、1号方形周溝状遺構  
 P.L. 12 A区の遺構 (中世以降) 1・2・3・4・7号地下式坑、1・2号井戸、土坑群  
 P.L. 13 A区の遺構 (中世以降) 溜井状遺構、1・2・5・7・8・9号溝、1号道路跡、1号段切り  
 P.L. 14 B1区の遺構 1・2・3・4・6・7・8号住居跡  
 P.L. 15 B2区の遺構 1号石器集中地点、1・2・4号住居跡、1号溝  
 P.L. 16 B3区の遺構 (弥生時代) 1・2・3・4・5・8・9号住居跡  
 P.L. 17 B3区の遺構 (弥生時代・古墳時代) 10・11・12・7号住居跡、1・2号周溝基  
 P.L. 18 A・B1～3区の遺物 (縄文時代) A区1号住居跡陥穴・遺構外出土遺物、B1区遺構外出土遺物、  
 B2区1号住居跡・遺構外出土遺物、B3区遺構外出土遺物  
 P.L. 19 A区の遺物 (弥生時代) 14・18・27・44号住居跡出土遺物  
 P.L. 20 A区の遺物 (弥生時代) 48・49・54・57・58・66号住居跡出土遺物  
 P.L. 21 A区の遺物 (弥生時代) 64・79・80・86号住居跡出土遺物  
 P.L. 22 A区の遺物 (弥生時代) 85・100号住居跡・遺構外出土遺物  
 P.L. 23 A区の遺物 (弥生時代) 16・37・49・52・57・58・66・74・77・85・86・90・98号住居跡・  
 遺構外出土遺物  
 P.L. 24 A区の遺物 (古墳時代) 1・4・5号住居跡出土遺物  
 P.L. 25 A区の遺物 (古墳時代) 5・8・33号住居跡出土遺物  
 P.L. 26 A区の遺物 (古墳時代、奈良・平安時代) 7・10・11・15号住居跡出土遺物  
 P.L. 27 A区の遺物 (奈良・平安時代) 17・19・21・22・24・26号住居跡出土遺物  
 P.L. 28 A区の遺物 (奈良・平安時代) 31・38・40・41・43・46号住居跡出土遺物  
 P.L. 29 A区の遺物 (奈良・平安時代) 47・53・55・59・60号住居跡出土遺物  
 P.L. 30 A区の遺物 (奈良・平安時代以降) 26・65・76・84・87・92・94・95号住居跡・溜井状遺構出土遺物  
 P.L. 31 B1区の遺物 (弥生時代) 3・6号住居跡出土遺物  
 P.L. 32 B2区の遺物 (旧石器時代) 1号石器集中地点出土遺物  
 P.L. 33 B3区の遺物 (弥生時代) 2・3号住居跡出土遺物  
 P.L. 34 B3区の遺物 (弥生時代) 3・4・5号住居跡出土遺物  
 P.L. 35 B3区の遺物 (弥生時代) 9・11・12号住居跡出土遺物  
 P.L. 36 B3区の遺物 (弥生時代・古墳時代) 1・7・11・13号住居跡・2号周溝基・遺構外出土遺物  
 P.L. 37 A・B1～3区の遺物 (金属製品・石製品・石器) A区83a・66号住居跡、B1区2・8号住居跡、  
 B3区3・4・5・7・11号住居跡出土遺物  
 P.L. 38 A・B1～3区の遺物 (土製紡錘車) A区18・48・61号住居跡・遺構外出土遺物、B1区1・2・3・  
 11号住居跡、B2区2号住居跡・遺構外出土遺物、  
 B3区4・11号住居跡出土遺物

## 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は、農業に伴う道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、反収の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、平成13年に小原地区土地改良組合が設立され、茨城県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年に三本松遺跡の発掘調査、平成16・17年に小原遺跡の発掘調査、さらに平成20年に埴谷遺跡（一部）の発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は埴谷遺跡の範囲内であることから、笠間市教育委員会は平成19年度・20年度に笠間市文化財保護審議会委員の能高清光氏に試掘調査を依頼した。その結果トレンチから住居跡が確認され、出土遺物などから弥生時代を主体とした集落があることが推定された。

工事主体者である水戸土地改良事務所（現原史農林事務所）は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成19年7月10日付けで遺跡について文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成19年11月2日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は有限会社毛野考古学研究所と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・水戸土地改良事務所・有限会社毛野考古学研究所は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、平成20年7月18日付けで文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能高清光氏を指導委員として平成20年8月18日から平成21年1月30日まで、発掘調査を実施することとなった。

### 第2節 調査の経過

平成20年8月18日、重機による表土除去作業をA区から開始する。8月20日からは、作業員による遺構確認作業を開始し、A区からは住居跡が100軒余り確認される。9月1日からは、竪穴住居跡の掘り込み作業を開始する。9月中旬には竪穴住居跡の調査を進めるとともにB区の遺構確認作業を行い、20軒余りの竪穴住居跡が確認される。9月末からB区の遺構調査を行い、10月中旬にB1・B2区の竪穴住居跡の調査を終了し、B3区とA区の調査を開始する。11月も引き続き、A区とB3区の調査を継続し、12月中旬にはB3区の調査を終了する。平成21年1月10日現地説明会を実施し、最後まで残っていたA区の調査は1月19日で終了し、図面作業を含むすべての調査は1月末で終了する。



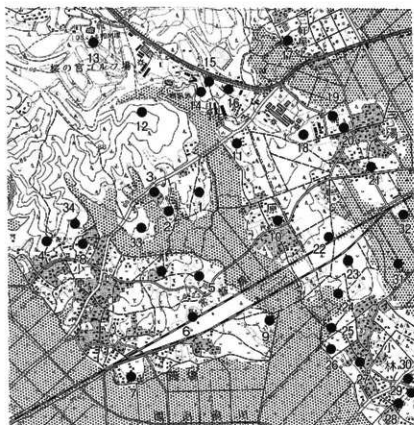
## 第II章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

笠岡市は茨城県のはほぼ中央にあり、東は水戸市、西は桜川市、南は石岡市・小美玉市、北は城里町・栃木県茂木町にそれぞれ接している。市域の北部は八溝山系鶏足山塊から連なる友部丘陵が水戸市の西部にかけて広がる。一方、南西部は筑波山塊に接し、鶏足山塊と並んで県西と県央を東西に隔てている。市域の東部から南部は平坦な東茨城台地が展開しており、茨城町から大洗町まで伸長する。この台地上を涸沼川が下刻し、茨城県の中央を東走して太平洋に注ぐ。加えて、市域西部の飯田川・片庭川・稲田川、市域東部の涸沼前川・枝折川などが涸沼川に合流し、それぞれの流域で沖積世低地を形成する。

塙谷遺跡は小原地区の東寄りに位置する。友部丘陵南東端の緩斜面上にあり、涸沼前川に繋がる小支谷に接する。塙谷遺跡から北側は傾斜面が続き標高100 m前後の丘陵尾根部に至る。

現在は小河川の upstream に溜池を配し、丘陵緩斜面地を畑地、小支谷の平坦地を水田として利用している。また、立ちはだかる筑波山塊と鶏足山塊の合間を見越して、北側の丘陵部には国道50号、南側の平地には鉄道の常磐線が通う。古代においても、地形的な制約から小原地区を通るルートが東西を結ぶ幹線に選ばれていたものと思われる。北関東地方における東西間交通ルートの結節点であるとともに、豊かな水と山野の資源に恵まれており、農耕や交易にも適した立地環境であると言える。



- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1 塙谷遺跡    | 2 長峰東遺跡   |
| 3 喜平塚古墳   | 4 高寺古墳群   |
| 5 小原遺跡    | 6 一本松古墳群  |
| 7 深崎古墳    | 8 行者遺跡    |
| 9 三本松遺跡   | 10 原塚古墳群  |
| 11 原古墳    | 12 大日山古墳群 |
| 13 和高塚古墳  | 14 柳沢古墳群  |
| 15 三軒塚遺跡  | 16 三軒塚古墳群 |
| 17 杉崎遺跡   | 18 沢山遺跡   |
| 19 宮前遺跡   | 20 三浦館跡   |
| 21 舞台遺跡   | 22 舞台西遺跡  |
| 23 向山遺跡   | 24 新溜池北遺跡 |
| 25 新溜池南遺跡 | 26 達中宮遺跡  |
| 27 中の内遺跡  | 28 大塚古墳群  |
| 29 六郎塚    | 30 小林遺跡   |
| 31 竜岡遺跡   | 32 西川遺跡   |
| 33 長峰西遺跡  | 34 寺上遺跡   |

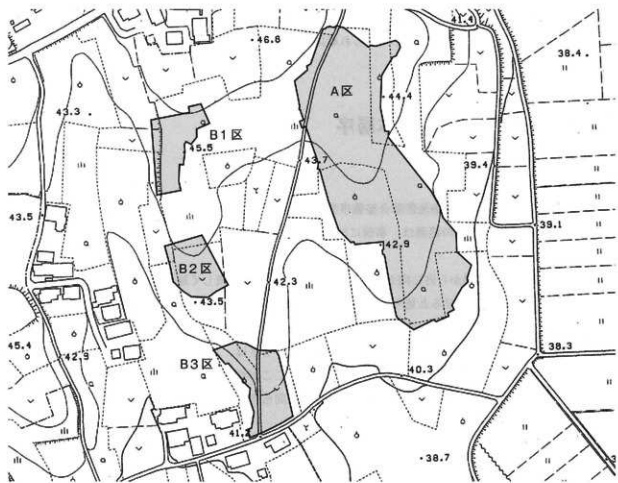
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

## 第2節 歴史的環境

小原地区は、これまで高寺古墳群や一本松古墳群、中世小原城跡の存在がよく知られていた。近年、小原地区では三本松遺跡(板野他 2003) から始まり、小原遺跡(吉田他 2005・能島 2007)、長峰東遺跡(土生 2010)、長峰西遺跡(大賀他 2010)、行者遺跡と広範囲に発掘調査が行われている。それらの成果から、小原地区の丘陵や台地上には、旧石器時代から中・近世にわたって繰り返し広げられてきた人々の生活跡が残っていることが明らかとなってきた。

旧石器時代では、長峰西遺跡から珪質頁岩製のナイフ形石器が、行者遺跡から瑪瑙製の削器が出土している。本遺跡からも旧石器のユニットがB2区から確認されている。

縄文時代では、小原地区内における遺構・遺物の出土はやや少ない。陥穴が平成19年度調査の埴谷遺跡C区、長峰東遺跡、小原遺跡などに散在する。加えて、本遺跡で前期中葉の堅穴住居跡が認められた。また、遺構に伴わないものの、長峰東遺跡で前期中葉の関山Ⅱ式や黒浜式等、長峰西遺跡で早期前葉の無文土器および前期中葉・中期後半・後期前半といった縄文土器が報告されている。



第2図 調査地区の位置図(1:2,500)

弥生時代では、後期後半期に竪穴住居跡の数が非常に多くなる点が注目される。三本松遺跡で15軒、小原遺跡で2軒、平成19年度の埴谷遺跡C区で10軒、長峰東遺跡で9軒、長峰西遺跡で7軒、行者遺跡で1軒である。本遺跡を含めると弥生時代後期後半の住居軒数は県内でも特に多い地域と見られ、弥生時代後期後半から終末期にいたる地域的な特性が窺える。

古墳時代では、小原地区内からは古墳時代前期・中期・後期の集落が見られる。長峰東遺跡では弥生時代終末から古墳時代前期へ移行変わった時期の竪穴住居跡で弥生時代終末期の竪穴との配置関係や構造に関連性があると思われる竪穴住居跡が見られる。埴谷遺跡では古墳時代前期に住居数が多く、方形周溝墓も造られている。古墳時代後期には三本松遺跡や小原遺跡、長峰西遺跡等に集落の広がりが見られる。これは後期古墳の造成の盛んな時期に対応しているものと思われる。小原地区の古墳群では、高寺古墳群があげられる。高寺2号墳は花崗岩の割石積の横穴式石室を持ち、墳丘南東部から武人埴輪や円筒埴輪が、石室内からは、玉類、刀や鎌などの鉄製品が出土している。高寺古墳群に属すると見られる行者遺跡からは、高寺2号墳に先行する時期の2基の古墳が確認され、人物・馬形の形象埴輪と多数の円筒埴輪が出土している。

奈良・平安時代の集落は、三本松遺跡他、地区内で発掘調査が行われた遺跡すべてにおいて確認されており、いずれも8世紀後半頃から急激に竪穴住居跡は数を増し、9世紀～10世紀にかけて集落が継続している様子が窺える。奈良時代になってからの急激な集落の増加は、この地域の東西に隣接する、笠間市大淵窟や水戸市木葉下窟など須恵器生産地帯の成長との関わりも想定される。

中世のこの地区には、戦国期の城跡と伝えられる小原城が本遺跡の南西約1.2kmの位置にある。小原城は16世紀の初めころ、里見氏の居城として造られ戦国末期には佐竹氏との激しい攻防の末、滅ぼされている。

## 第三章 調査の方法と基本層序

### 第1節 調査の方法

埴谷遺跡の発掘調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴うに伴う埋蔵文化財発掘調査として行われた。畑地帯整備事業にかかる埴谷遺跡の範囲は、事前に試掘調査によって範囲が絞られ、A・B1・B2・B3区の各名称が使用されている。

調査範囲は、調査区の内側から外に向かって住居跡などの遺構が連続して延びる場合調査区の拡張をした。A区では、調査区外に長く延びると見られる溝と道路については、調査区内のみ調査を実施した。B1区とB3区については、調査区の外側で確認された遺構の中で、県営畑地帯総合整備事業による切り上の実施されない部分については、保存区域として調査から除いた。B2区は、当初予定していた調査区の北側で、IH石器のユニット、竪穴住居跡2軒、ビット群が確認され、ここが切り土される地区に当たるため調査区を拡張して調査を行った。その際、竪穴住居跡については、笠間市教育委員会が調査を実施し、本報告の中にも含めた。

埴谷遺跡の平面測量は世界測地系第Ⅸ系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上で、各調査区の全体を含む範囲の北西角のX軸、Y軸の交点を起点として、南方向と東方向に20mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目には各区の全体図にあるようにA1、K7等のようにグリッド名をふり遺構の位置を示した。

調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

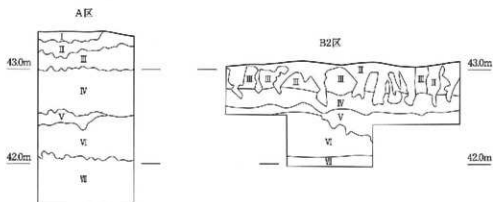
遺構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、1/10、1/20、1/40縮尺を使用した。遺跡全測図は1/200で作成した。

写真撮影は、白黒35mm判、リバーサル35mm判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に随時行った。

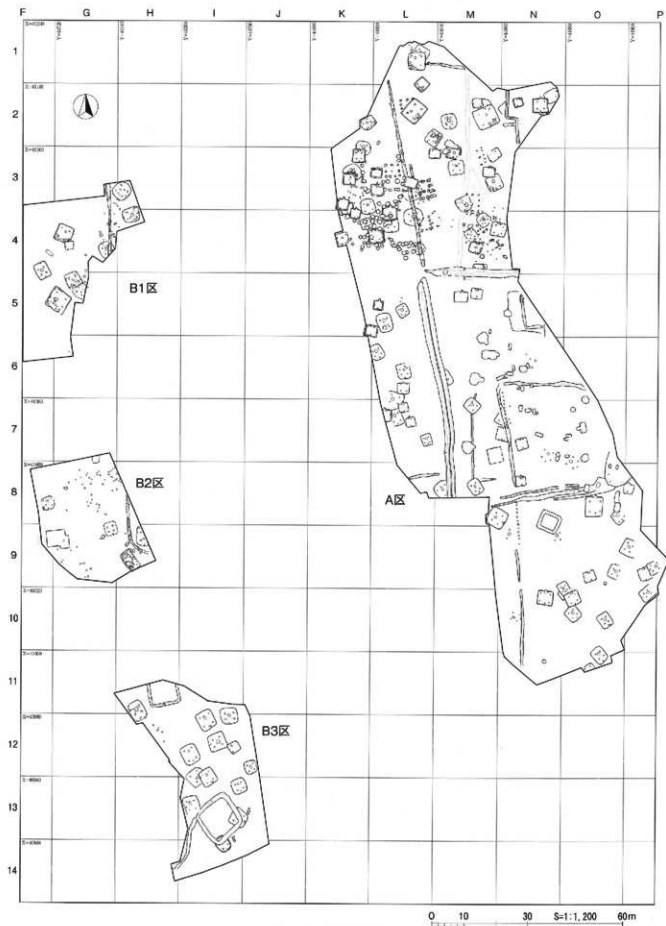
## 第2節 基本層序

基本層序はA区およびB2区において観察した。A区は調査区中央部に位置する4号地下式坑の主室西面(M6グリッド)、B2区は調査区南西部の試掘坑(F9グリッド)で記録している。

層序はIからⅦ層まで認められた。I層はにぶい黄褐色を呈するソフトローム層で、径2mmほどの浅黄色粒や微細な白灰色粒を少量含む。B2区の観察地点では削平されていたが、2mほど東側に位置する旧石器時代の調査地点で見ることができた(第238図)。II層はハードロームへの漸移層であり、I層に比べて色調が暗い。B2区では層位の高低差が一定していなかった。III～V層は黄褐色ないしにぶい黄褐色を呈するハードローム層で、III層はIV・V層に比べて色調が明るい。IV・V層には赤城-鹿沼テフラ(Ag-KP: 31,000～32,000年前)が混入する。とくにV層で多量に含まれており、一部に窪み状の層位が見受けられた。VI層は赤城-鹿沼テフラの一次堆積層に相当し、複数のフォールユニットが認められる。VI層は粘性のある暗褐色土で、混入物が非常に少ない。

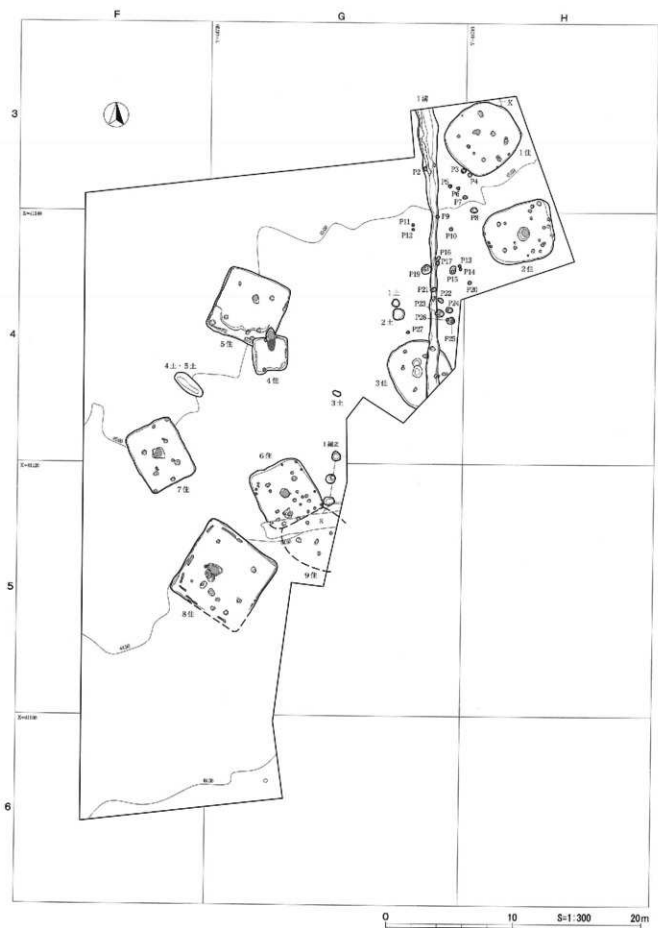


第3図 基本土層図 (1:40)

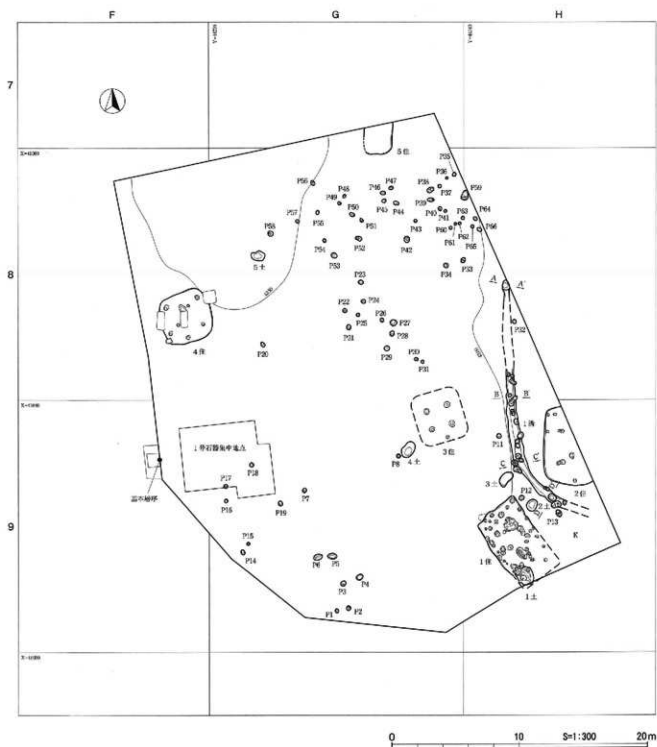


第4图 遗址全体图



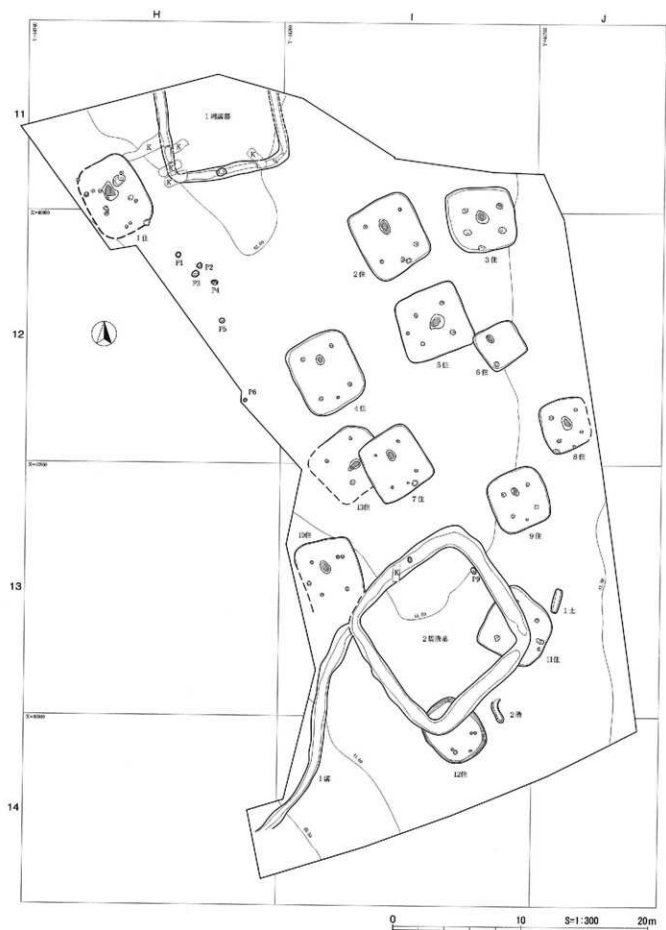


第6图 B1区遗物全体图



第7图 B2区遺構全体图





第8图 B3区遺構全体图

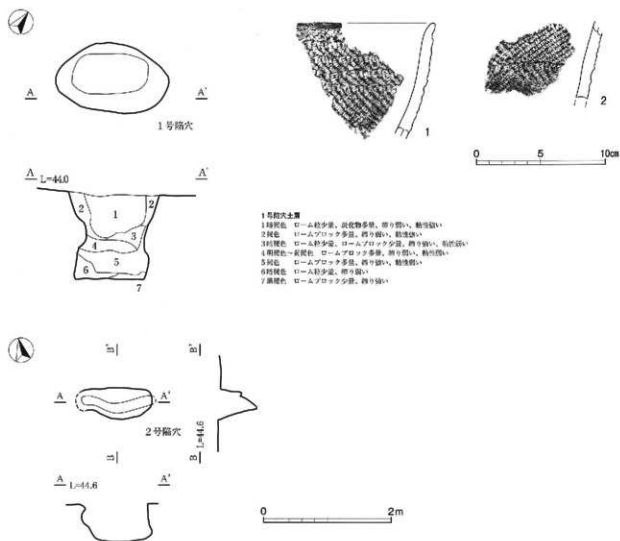
## 第四章 A区の遺構と遺物

### 第1節 縄文時代

#### 1 陥穴

##### 1号陥穴 (第9図)

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。平面形・規模 長軸1.65m×短軸1.08m、深さ1.4m。平面は長楕円形を呈し、底面は不整隅丸長方形に近い。横断面形はわずかに袋状を呈する。主軸方位 N-57°-E 覆土 暗褐色土や褐色土がレンズ状に自然堆積する。遺物 覆土上層から、同一個体の縄文土器片が4点出土し、そのうち3点が接合した(1・2)。縄文前期中葉関山Ⅱ式に比定される。なお、著しい被熱痕を有する安山岩の破損礫が1点検出されている。所見 典型的な陥穴の形状である。関山Ⅱ式の土器しか認められないが、覆土上層で出土しているため、構築時期は前期中葉以前と幅をもたせておきたい。



第9図 1・2号陥穴・出土遺物

## 2号陥穴(第9図)

位置 A区北部、L3グリッドに位置する。平面形・規模 長軸推定1.33m×短軸0.50m、深さ0.6m。平面は不整長楕円形を呈し、47号住居跡に西端を破壊される。主軸方位 N-74°-W 覆土 中央部は暗褐色土、壁際はローム質の褐色土が堆積する。遺物 — 所見 規模は小さいが、いわゆる溝型陥穴である。構築時期は縄文時代早・前期と推測する。

表1 1号陥穴出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	- - -	口縁・胴部片、頸部残存半部陶文(RL-0段3条)を横位編文、口縁部には頸部帯を前後に配す。内面は刷位のイガキ。	織羅	不貞	外：黒・暗褐色 内：にぶい黄褐色	関山Ⅱ式
2	縄文土器 深鉢	- - -	胴部片、頸部残存半部陶文(RL-1R-0段3条)を横位刷次編文。内面は刷位の「字」なナギ。	織羅	不貞	外：橙色 内：にぶい黄褐色	関山Ⅱ式

## 2 遺構外出土遺物

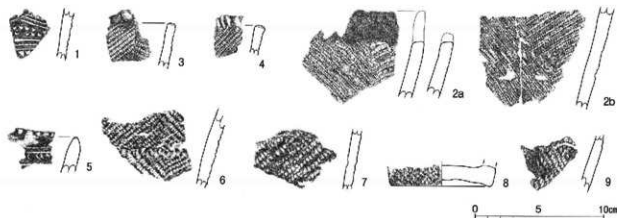
## 縄文土器(第10・11図)

弥生後期・古代の遺構や表土層等から36点の破片が出土した。調査区中央の未検出地点を挟んだ北側(M2~4・N2~4グリッド)および南側(N8~10・O8~11・P9グリッド)に偏在する。細別は早期中葉田戸下層式(1)・前期中葉関山Ⅱ式および黒浜式(2~8)・前期後葉諸磯a式(9)・中期前半(10)・後期初頭称名寺Ⅱ式(11)・後期前葉堀之内Ⅰ式(12)に比定され、前期中葉のものがほとんどを占める。

前期中葉の資料は調査区北側および南側の両方で認められ、37・38・82号住居跡に集中する。37・38号住居跡出土の遺物は、近在する1号陥穴のものとの関係も踏まえて検証する必要がある。一方、他の時期の資料は調査区南側のみに分布する。検出点数が少ないうえに有意な傾向は把握しづらいが、丘陵先端部を主体とした活動が予想される。

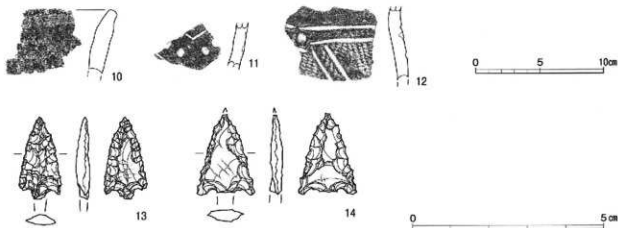
## 石器(第11図)

古代の遺構から2点の石鏃が出土した(13・14)。いずれも凹基有茎で、縄文晩期に多い形態を呈する。本調査区において該期の痕跡は希薄であることから、遺構や土器を伴わない活動ないし弥生後期に帰属する可能性等を考慮する必要がある。



第10図 A区遺構外出土遺物①

第IV章 A区の遺構と遺物



第11図 A区遺構外出土遺物②

表2 A区遺構外出土遺物観察表

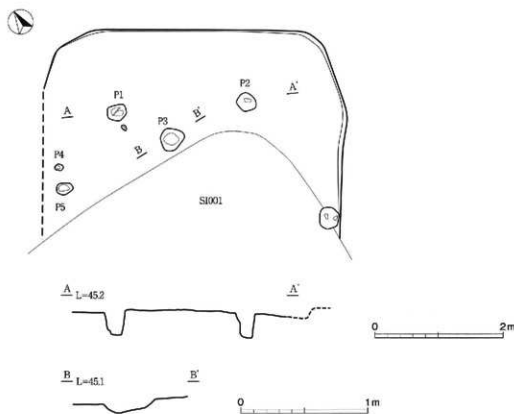
図版番号	種別 種別	口徑 器底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	-	胴部片、尖頭状工具による数条の平行沈線で横位・三角形状に区画→区画内に横位の良段縦線状・角溝状工具による刺突列、内面はナデ。	角閃石	不良	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	A区88号住居跡出土 田口下層式
2	縄文土器 深鉢	-	口縁一断部片。附加糸縄文1条（RL+L・L、LR+R・R）を羽状に横位施文。口唇部に輪歯状・板状突起。内面は横位のミガキ。	磁器・多量の白色粒	不良	外：灰黄褐色・褐色 内：灰黄褐色・褐色	A区1号方形周溝状遺構出土 阿山1式
3	縄文土器 深鉢	-	口縁部片。単部縄文（LR、0段3条）を羽状に横位施文、釜文端部が逆り上がる。口唇部にヘラ状工具によるキザミ（を加えた突起）。内面は横位のミガキ。	磁器	不良	外：灰黄褐色 内：褐色	A区82号住居跡出土 新築中層
4	縄文土器 深鉢	-	口縁部片。単部縄文（LR、0段3条）を横位施文。口唇部にヘラ状工具によるキザミ（を加えた突起）。内面は横位のミガキ。	磁器	不良	外：明黄褐色 内：明黄褐色	A区82号住居跡出土 新築土器 前期中層
5	縄文土器 深鉢	-	口縁部片。手轆竹等状工具による横位の平行沈線→沈線に沿って同様の工具による刺突列、口唇部に丸棒状工具によるキザミ、内面はミガキ。	磁器	不良	外：褐色 内：褐色	A区86号住居跡出土 新築土器 新築式
6	縄文土器 深鉢	-	胴部片。胴部縦糸単部縄文（RL・LR、0段3条）を横位羽状施文。内面はミガキ。	磁器	不良	外：黄褐色・灰黄褐色 内：明黄褐色	A区37号住居跡出土 新築土器 阿山1式
7	縄文土器 深鉢	-	胴部片。単部縄文（LR）を横位施文。内面はナデ。	磁器	不良	外：褐色 内：明黄褐色	A区6号住居跡出土 前期中層
8	縄文土器 深鉢	- 7.8	底部片。龍越縄文を施文。内面は指痕状。底面はナデ。	磁器・多量の赤色粒	不良	外：明赤褐色 内：褐色	A区西側 阿山1式
9	縄文土器 深鉢	-	胴部片。基部を伴う単部縄文（RL）を横位施文。内面は横・斜位のナデ。	海綿体骨粒	良好	外：灰褐色 内：明赤褐色	A区98号住居跡出土 阿山1式
10	縄文土器 深鉢	-	口縁部片。横位のナデ。口唇下に指痕状。内面はナデ。	多量の石英・雲母	良好	外：明赤褐色 内：褐色	A区84号住居跡出土 中期前半
11	縄文土器 深鉢	-	胴部片。尖頭状工具による平行沈線→比喩間にヘラ状工具による刺突列。内面は横位のナデ。	多量の白色粒	良好	外：灰・黒色 内：灰・黒色	A区92号住居跡出土 新築土器 新築2式
12	縄文土器 深鉢	-	胴部～体部片。体部に単部縄文（LR）を横・斜位施文→頸部・体部等を丸棒状工具による平行沈線で横位区画→平行沈線上に施文。体部に新位の平行沈線。内面は横位のミガキ。	多量の砂、角閃石	良好	外：褐色 内：褐色	A区西側出土 新築之内1式
13	石器 石鏃	-	側面有茎。基部先端が欠損。石材：チャート。残存長215cm・幅11cm・厚さ0.35cm・高さ0.7g。				A区7号土坑
14	石器 石鏃	-	側面有茎。先端部・基部が欠損。小根筋片の縁部に削道加工。石材：チャート。残存長215cm・幅15cm・厚さ0.35cm・高さ0.9g。				A区19号住居跡出土

## 第2節 弥生時代

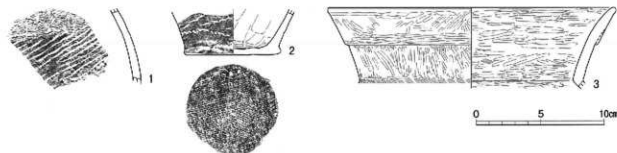
## 1 竪穴住居跡

## 2号住居跡 (第12・13図)

**位置** A区北端、L1グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は不明ながら、東西方向は約4.7mと推測する。平面は隅丸方形か。南西側は1号住居跡に、西側は攪乱によって壊され、3号住居跡とも重複する。**主軸方位** N-57°-W 壁 壁高は北東辺で5~7cmを測り、垂直気味に立ち上がる。床 全体に平坦で、硬化面は認められない。ピット5箇所ある。P1・P2が主柱穴、P4・5は壁柱穴と推測される。炉 P3が炉の可能性がある。**覆土** 褐色土主体で、自然堆積状。**遺物** 覆土中から少量の弥生土器片が出土している。**所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。3号住居跡との新旧関係は、攪乱のため不明である。A区において、弥生時代の住居跡同士が重複する例は、本例を含め2例(61住と64住)ある。



第12図 2号住居跡



第13図 2号住居跡出土遺物

表3 2号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- -	胴部輪漚不明の附加糸縄文(r・S)→頸部糸7本の 横位区画状文→底部輪位状文(下→上)。	会雲母	普通	にぶい黄褐色	胴部外面スス付 着、内面あばた 状剥離
2	弥生土器 壺	- 7.5	胴部ナデ→輪漚不明の附加糸縄文(L・S)、底部糸1本の、内 面は斜位のナデ。外面まばらにスス付着。	石灰、白色粒	普通	にぶい黄褐色	胴部外面にスス 付着
3	土器 壺	(22.6) -	口縁部内外面ヘラミガキ、胴部内外面ハケメ後にヘラミガ キ。	角閃石、骨針	良好	にぶい黄褐色	口縁部内外面あ ばた状剥離

### 3号住居跡 (第14・15図)

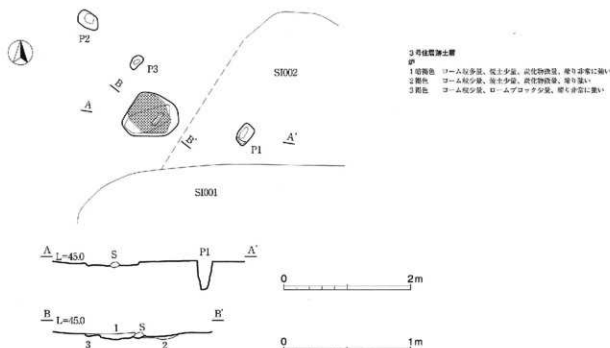
**位置** A区北端、L1グリッドに位置する。規模と平面形 攪乱や重複によって不明である。南西半分は1号住居跡に、西側は攪乱によって壊されている。また、3号住居跡と重複する。 **主軸方位** N-2°-W **壁** - **床** - **ピット** 3箇所ある。P1・2が支柱穴と推測される。 **炉** 平面不整形円で、浅い皿状を呈する。中央に不整形な砂岩製の炉石が設置されている。 **覆土** - **遺物** 床面から弥生土器片が僅かに出土している。 **所見** 2号住居跡との新旧関係は不明である。住居跡の時期は、弥生時代後期後半と推定される。



第14図 3号住居跡出土遺物

表4 3号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- -	胴部輪漚等々条→口縁部4本の横位状文(下→上)、 胴部縦位直線文→横位直線文(下→上)。	会雲母、骨針	普通	にぶい褐色	



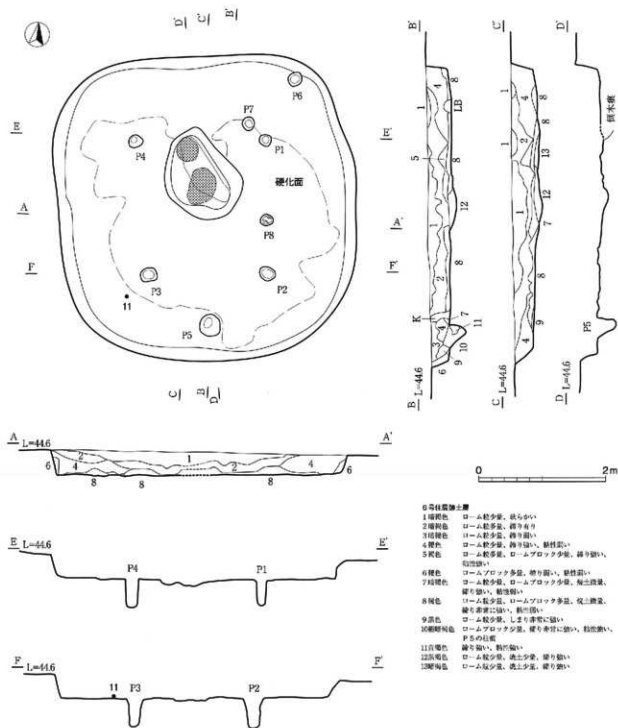
第15図 3号住居跡

## 6号住居跡 (第16・17図)

**位置** A区北端、M2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向4.85m、東西方向4.7mを測り、不整隅丸方形を呈する。床面には時期不明の複数のピットが不規則にある。竪穴の北壁側は風倒木痕を破壊して構築している。主軸方位  $N-11^{\circ}-W$  壁 壁高は38cmを測り、垂直に近い。床 炉の北側と壁際以外の中央部が硬化する。ピット 6箇所ある。P1~4が主柱穴、P5が出入り口ピット、P6が壁柱穴と考えられる。P7・8は浅く、補助的柱穴であろうか。P1・4・5・6で明瞭な柱痕が観察された。炉 平面不整楕円形で、浅皿状を呈する。顕著な被熱部が2箇所認められた。覆土 壁際には褐色土、竪穴中央最上層には暗褐色土が堆積し、自然埋没と考えられる。床面直上の黒色土9層は非常に強くしまり、敷物等の存在、もしくは埋没初期過程での踏みしめ行為などを暗示させる。遺物 覆土中から弥生土器片が出土している。遺物の出土量はやや多く、小破片が多い。十王台式土器主体で、10・11・14など二軒屋式土器も目立っている。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

表5 6号住居跡出土遺物観察表

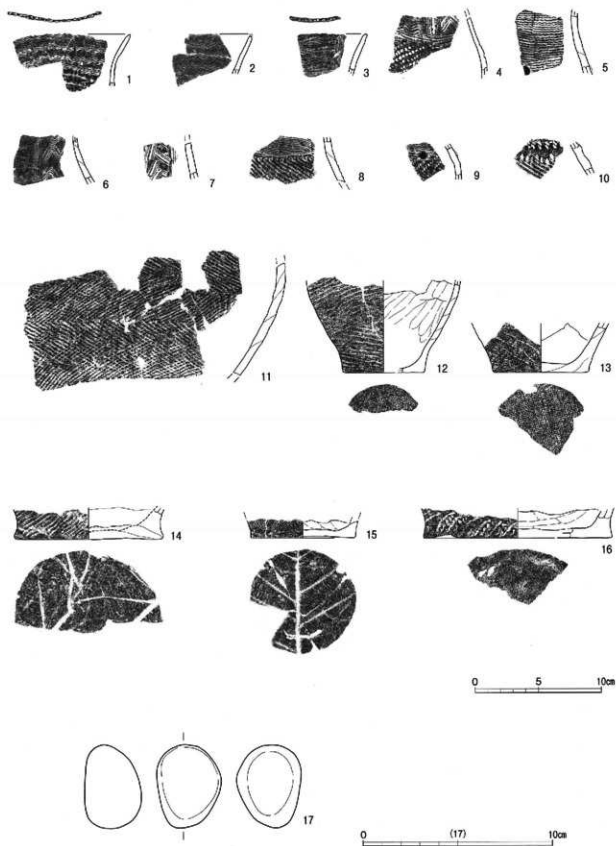
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部3本歯の横位波状文(時計回り)。腹部系底のある深い幹線隆帯3条、内面は横位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい藍色 内：褐色	十王台式
2	弥生土器 甕	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、長石	良好	にぶい青褐色	十王台式
3	弥生土器 甕	- - -	口唇部ヘラキザミ。腹部は8本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英、長石、金剛砂	普通	外：にぶい青褐色 内：灰黄褐色	十王台式



- 6号住居跡断面
- 1 褐色土 rome土少量、灰らしい
  - 2 褐色土 rome土少量、硬りあり
  - 3 褐色土 rome土少量、硬り強い
  - 4 褐色土 rome土少量、硬り強い、礫石多い
  - 5 褐色土 rome土少量、romeブロック少量、硬り強い、勾当強い
  - 6 褐色土 romeブロック多量、硬り強い、粘性強い
  - 7 褐色土 rome土少量、romeブロック少量、粘土少量、硬り強い、粘性強い
  - 8 褐色土 rome土少量、romeブロック多量、灰土少量、硬り多量に強い、粘性強い
  - 9 褐色土 rome土少量、石灰骨灰に強い
  - 10 硬質褐色土 romeブロック少量、硬り骨灰に強い、粘性強い、P5の柱礎
  - 11 白褐色土 硬り強い、粘性強い
  - 12 灰褐色土 rome土少量、粘土少量、硬り強い
  - 13 硬質褐色土 rome土少量、硬り強い

第16図 6号住居跡



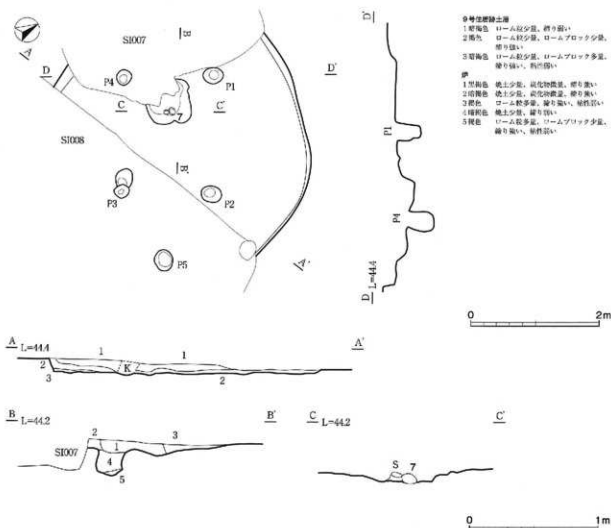


第17图 6号住居跡出土遺物

図版番号	検出経緯	口径器高 形状	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	-	胴部輪郭不明の附加条縄文(R・S・L・Z)→頸部4本首の縦位直線文(反時計回り)→横位直線文→縦位直線文・横位直線文。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい藍色	十五台式
5	弥生土器 壺	-	胴部4本首の縦位直線文(F→上)→円形刻付文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石、赤色粒	普通	外:にぶい黄褐色	十五台式
6	弥生土器 壺	-	胴部4本首の縦位直線文→縦位文。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石	普通	外:にぶい黄褐色	十五台式
7	弥生土器 壺	-	胴部4本首の縦位直線文→縦位刻付文(L→下)。内面は横位のナデ。	石英、長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:明赤褐色	十五台式
8	弥生土器 壺	-	胴部輪郭不明の附加条縄文(L)→胴部6本首の縦位文(T→上)。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、赤色粒	良好	外:褐色 内:黒褐色	
9	弥生土器 壺	-	胴部輪郭不明の附加条縄文(R・S・L・Z)→胴部4本首の縦位直線文→縦位直線文→円形刻付文。内面は横位のナデ。外側にスス付着。	石英、白色粒	普通	外:にぶい黄褐色	十五台式
10	弥生土器 壺	-	胴部輪郭不明の附加条縄文(R・S)座部を伸ばし、沈凹による条文部、胴部は胴部と同様な縄文部を伸ばす。内面は横位のナデ。	石英、多量の白色粒、赤色粒	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	
11	弥生土器 壺	-	胴部輪郭不明の附加条縄文(R・S・L・Z:L→下)。内面は横・斜位のナデ。割傷が多い。	多量の石英・長石	不良	外:灰青褐色 内:にぶい黄褐色	十五台式
12	弥生土器 壺	(64)	胴部輪郭不明の附加条縄文(R・S・L・Z:L→上・下、反時計回り)。胴部も同様。内面は横・斜位のナデ。外側スス・内面ヨゴレ付着。	石英、長石	良好	灰青褐色	床面直上 十五台式
13	弥生土器 壺	(74)	胴部附加条2種縄文(LR・R)。底部有目紋。内面はナデ。外側スス付着。	石英、角閃石	良好	外:にぶい黄褐色 内:褐色	十五台式
14	弥生土器 壺	(118)	胴部は附加条1種縄文(LR+2R)。底部本葉部。内面は縦位のナデ。不明。	多量の石英・長石	普通	外:灰青褐色 内:褐色	二軒無式
15	弥生土器 壺	(83)	胴部輪郭不明の附加条縄文(LR+r)→胴部下横位刻のナデ。底部本葉部。内面は横位のナデ。	石英、赤色粒	普通	外:にぶい黄褐色	
16	弥生土器 壺	(150)	胴部輪郭不明の附加条縄文(L・S)。底部砂点、柄杓痕等。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、金剛砂、骨針	良好	外:にぶい黄褐色	十五台式
17	石器 磨石		小型の石英・黄銅合金に磨耗面。裏面は平滑。石材:頁岩。長さ44cm・幅34cm・厚さ3.0cm・重さ992g。				

9号住居跡(第18・19図)

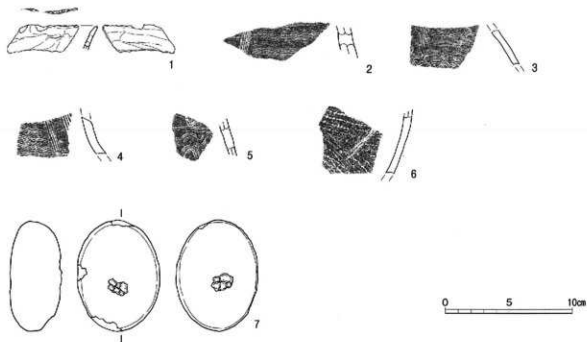
位置 A区北端、M2グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向約4.0m、東西の主軸方向約4.4mの不整形形状と推測される。7号住居跡・8号住居跡に壊され、全体の約1/3を失っている。主軸方位 N-58°-W 壁 壁高は13cmを測り、垂直に近い。床 やや凹凸があり、硬化面は認められない。ピット 5箇所ある。P1~4が主柱穴、P5が出入り口ピットと考えられる。P3・5は8号住居跡掘り方で、P4は7号住居跡床面で確認した。炉7号住居跡のカマドによって一部壊されている。平面形は不整形丸方形と推測され、浅い皿状を呈する。7の磨石と小円礫が並んで置かれていた。覆土 褐色土を主体とし、最上層には暗褐色土が堆積する。遺物 覆土中から少量の弥生土器片が出土している。3~5は頸部と胴部の区画が直線文で、十五台式土器でも前半期の様相を呈している。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第18図 9号住居跡

表6 9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色類	備考
1	弥生土器 甕	— — —	口縁部ヘラナゼミ。内・外面とも斜・横位のナデ。	石英	普通	黒褐色	十五台式
2	弥生土器 甕	— — —	頸部8本歯の縦位直線文→横位放状文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十五台式
3	弥生土器 甕	— — —	頸部縁部不明の附加垂線文(L・Z)→頸部8本歯の横位直線文→上部き透線文・縦位直線文→横位放状文。内面は横位のナデ。	石英、長石、骨針	良好	黄褐色	十五台式
4	弥生土器 甕	— — —	頸部4本歯の横位直線文→縦位直線文・横位放状文。内面は縦・横位のナデ。外面にスス付着。	石英、長石、角閃石、赤色鉄	不良	灰黄褐色	十五台式
5	弥生土器 甕	— — —	頸部は4本歯の横位放状文→横位直線文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十五台式
6	弥生土器 甕	— — —	頸部縁部不明の附加垂線文(R・S、L・Z：下→上)。内面は横位のナデ。内面に帯状のヨグレ付着。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十五台式
7	石器 磨石		磨→凹。楕円形の磨を素材とし表・裏面全体に磨耗面。表・裏面の中央に縦打痕。表面は積熱により変色。石材：石英安山岩。長さ875cm・幅64cm・厚さ41cm・重さ332.46g。				磨石



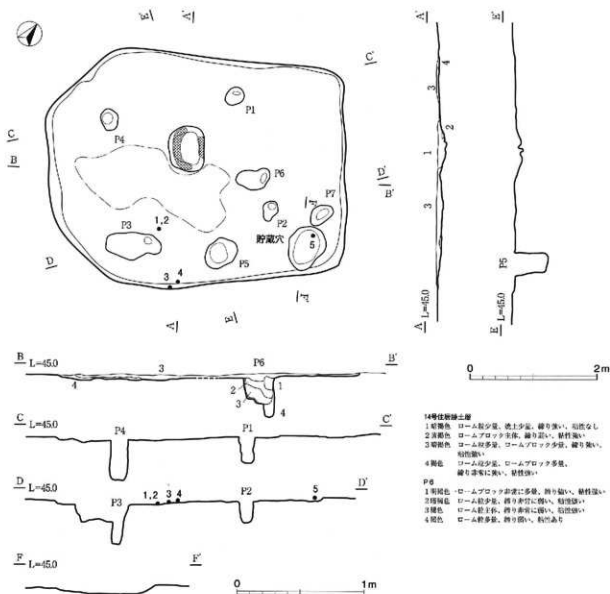
第19図 9号住居跡出土遺物

14号住居跡 (第20・21図)

**位置** A区北端西側、K2グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向3.72m、東西方向4.63mの不整隅丸方形を呈する。東壁の位置と平面形に違和感があるが、覆土の堆積状況などからこの形状と判断した。北壁は調査区外の擾乱によって破壊されている。主軸方位 N-50°-W 壁 壁高は3cmを測る。  
**床** 炉の南側が帯状に硬化する。全体にやや凹凸がある。ピット 7箇所ある。P1~4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられ、P6・7は性格不明である。P3は擾乱によって破壊を受けている。P1・2は黒褐色土の柱痕を、P4・5ではロームブロックを多量に含む軟弱な柱材採取痕を断面で観察した。また、南東隅には不整楕円形の浅い土坑があり、貯蔵穴と考えられる。炉 平面形は不整隅丸方形で、浅い皿状を呈する。覆土 褐色土を主体とした自然堆積層である。遺物 P3脇の覆土中からほぼ完形の弥生土器(1)が出土している。所見 住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

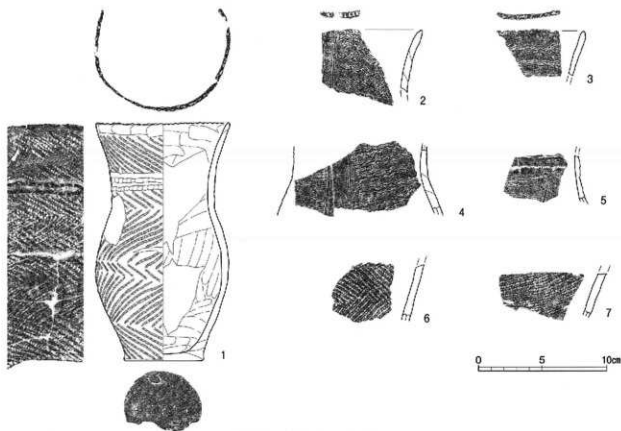
表7 14号住居跡出土遺物観察表

図号番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	弥生土器 壺	10.9 18.9 6.1	口唇部ヘラキザミ。口縁部輪周不明の附加条構文(L-Z) →横位のナデ。底→唇部輪周不明の附加条構文(L-Z) R・Sの順に添文)。底部有目痕。内面横・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい褐色 内：黒灰色	覆土下層 十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部の内側にヘラキザミ。口縁部は3本雷の縦位条構文 →横位条状文(下→上)。内面の口唇部有足は横位の丁 字なナデ。他は縦位の丁字なナデ。外面にスス付着。	石英、角閃石	良好	にぶい黄褐色	覆土下層 十王台式



第20図 14号住居跡

図面番号	埋 葬 種 類	口徑 深さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	赤生土器 壺	- - -	口唇部へうろつき、口縁部5本並の縦位直線状文。内面は縦・斜位のナデ。外面にスス付着	石英、多量の金雲母	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄色	床面直上 十五台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部5本並の縦位直線文→横位直線状文(時計回り)。内面は縦位のナデ。外面にスス付着	石英、角閃石、金雲母	普通	外：浅黄褐色 内：にぶい黄色	床面直上 十五台式
5	弥生土器 壺	- - -	頸部2条の押捺隆起→5本並の縦位直線文(上→下)→横位直線状文(下→上)。内面は斜位のナデ。外面にスス付着。4と同一個体か。	石英、角閃石、金雲母	普通	浅黄色	床面直上 十五台式
6	弥生土器 壺	- - -	胴部縦横不明の附加条線文(R・S・L・Z)。内面は器面完れが著しい。	多量の石英・炭石多量、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	床面直上 二群原式
7	赤生土器 壺	- - -	胴部縦横不明の附加条線文(R・S)。内面は器面完れが著しい。	石英、長石	良好	浅黄色	床面直上 十五台式カ



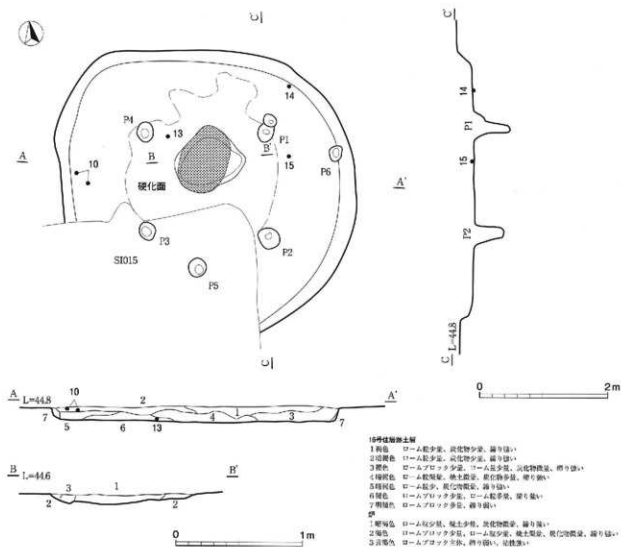
第21図 14号住居跡出土遺物

16号住居跡 (第22・23図)

位置 A区北西部、K2～K3グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向4.56m、東西方向4.70mの不整隅丸方形を呈する。堅穴の南西隅を、古墳時代後期の15号住居跡によって壊されている。主軸方位N-8°-E 壁 壁高は20cmを測る。床 平坦で、中央部が硬化する。ピット 6箇所ある。P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられ、P6は壁柱穴であろうか。P3・5は15号住居跡掘り方面で確認した。P1～3は暗～黒褐色土の軟弱な柱痕と褐色土の根固め層が土層断面で観察できた。炉 平面不整形で、浅い皿状を呈する。火床面の被熱は強い。覆土 下層は褐色土、上層は暗褐色土を主体とする自然堆積と思われる。遺物 出土した弥生土器の遺物量は比較的多いが、小片主体で時期にまとまりがない。15は紡錘車で、表面・側面に櫛描直線文・波状文が施される。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半代と考えられる。

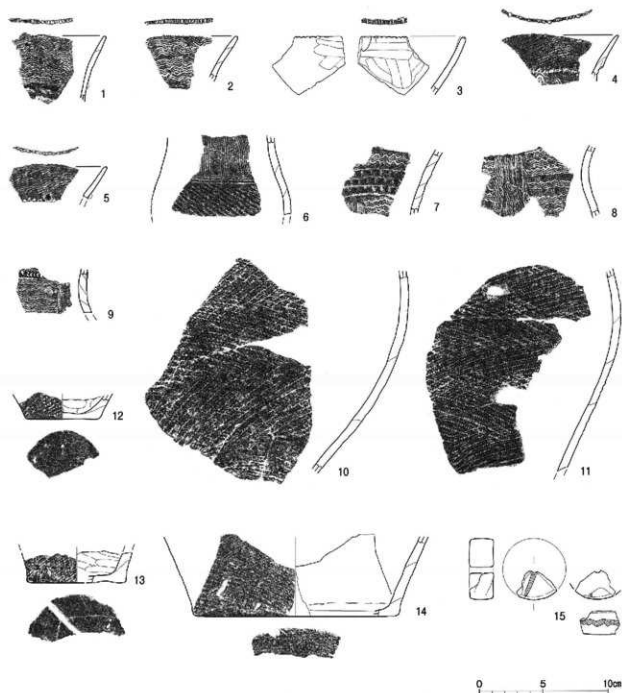
表8 16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁 器高 器径	特 徴	胎土	焼度	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ、小突起。腹面深い押捺線帯→口縁部4本線の横位波状文(上→下)。腹部横位波状文。内面は口縁部横位のナデ、以下は横位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	床面直上 十五台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本線の横位波状文(上→下)。内面は横位のナデ。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十五台式



第22図 16号住居跡

図層番号	区別	口縁部高	特徴	胎土	焼成	色類	備考
3	弥生土層	-	口縁部ヘラキザミ、小突起。口縁部は無文(横・斜位のナデ)。内面は横位のナデ。	石英、長石	普通	外: にぶい褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
4	弥生土層	-	有段口縁。口唇部ヘラキザミ。口縁部は無縁純文(L)→下層にヘラキザミ→頭部2本面以上の横位波状文。内面は口唇部付近横位のナデ。外面は斜位のナデ。口唇部外面に帯状にス付着。	石英、角閃石	普通	外: にぶい黄褐色 内: にぶい灰色	
5	弥生土層	-	有段口縁。ヘラキザミ。口縁部無縁純文(L)→下層にヘラキザミ→凹形筋付文。内面は口唇部付近横位のナデ。外面は斜位のナデ。口唇部外面に帯状にス付着。	石英	普通	外: にぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	
6	弥生土層	-	断面不明の追加糸縄文(L・Z)→頭部界に6本面の横位波状文→頭部埋立五線文。外面全面にス付着。内面は頭部が横・斜位のナデ。頭部が縦・斜位のナデ。口唇部付近にコゴレ付着。	石英、長石、角閃石、赤色粒	良好	外: 黒褐色 内: にぶい黄褐色	十五台式
7	弥生土層	-	口縁部4本面の横位波状文。口縁部は横位の縞波状4条へ1次潤滑を付与。頭部4本面の縦位波状文→横位波状文。内面は丁寧な縦・斜位のナデ。外面ス付着。	多量の石英、角閃石	普通	黒褐色	十五台式
8	弥生土層	-	頭部5本面の横位波状文3条→横位波状文(下上)。内面は縦・斜位のナデ。外面ス付着。	多量の石英、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十五台式



第23図 16号住居跡出土遺物

図版 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
9	弥生土器 釜	- - -	胴部は前面三角形の棒状工具によるキズと常帯→5本面の 稜位直線文→横位直線状文。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、骨 針	普通	外：灰黄褐色 内：赭灰色	十王台式
10	弥生土器 壺	- - -	胴部軸線不明の羽加典縦文（R・S・L・Z：上→下）。 内面は斜位のナデ。	石英、長石	普通	にぶい黄褐色	十王台式



図版番号	種別 器種	口徑 器高 底徑	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 甕	-	胴部輪軸不明の附加糸縄文(R・S・L・Z:上-下)。内面は胴中～下位が縦位のナデ。底縁付近が斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	十五台式
12	弥生土器 甕	(5.6)	胴部輪軸不明の附加糸縄文(R・S)。底部半円痕。内面は横位のナデ。	石英、長石	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	十五台式
13	弥生土器 甕	(7.8)	胴部附加糸1種縄文(L+2L)。底部木葉痕。内面は横位のナデ。	多量の石英・角閃石	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	二軒式か
14	弥生土器 甕	(15.4)	胴部輪軸不明の附加糸縄文(R・S・L・Z:F-上)。底部半円痕。内面は横位のナデ。	石英、長石、角閃石、金剛砂	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	十五台式
15	土器品 紡錘車	-	径(4.9)、高1.83、孔径(0.33)、重量10.7g。奥面側に4本歯の直線文。側面に4本歯の横位波状文。表面をナデ・ミダキ肌。	石英	普通	外: 黄褐色 内: 黄褐色	十五台式

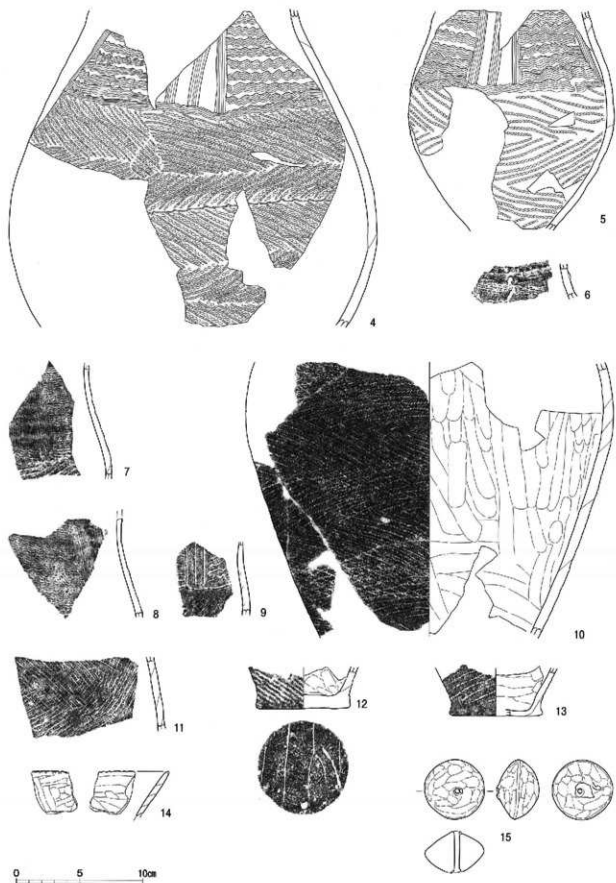
## 18号住居跡(第24～26図)

**位置** A区北西端、K3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は5.42mを測り、東西方向は5.7m前後と推測する。平面はやや円形に近い不整隅丸正方形形状を呈する。古代の17号住居跡によって、南西傾約1/3を失う。3号掘立建物跡の柱穴と25号土坑によって一部破壊される。主軸方位 N-33°-Wで、北北西を指向する。壁 壁高は23～28cmを測り、やや傾斜する。床 全体に平坦で、炉周辺が硬化する。ピット P1～4が新主柱穴、P6～9が旧主柱穴、P5は出入口ピットと考えられる。P1～4の底面には段差があり、それぞれ柱材端部の硬化片痕(いわゆる、あたり)を検出した。浅い方の上面はいずれも貼床で閉塞されていた。よって、同一地点で2回利用したものと判断できる。P8は17号住居跡によって消滅したものと推測した。P6・7・9(各深度20cm・52cm・15cm)はその配置から主柱穴と判断した。主柱穴配置の変遷は、P6・7・(8)・9 → P1・2・3・4 → P1・2・3・4と想定する。土坑1は深さ21cmと浅く、貯蔵穴と推定される。P10は深さ約12cmで底面に凹凸があり、用途不明である。炉 浅く掘り込まれた炉が2箇所ある。洋梨状の不整楕円形(126×84cm)を呈する方が新炉と考えられ、堅穴中央に位置する不整円形(61×49cm)の方は被熱が弱く、旧炉と考えられる。新炉も平面形・規模から推測すると、隣り合う2基の炉であった可能性が高い。覆土 下層は褐色土、上層は暗褐色土が主体で、自然堆積状を呈する。遺物 北東部の覆土下層から、やまとまって出土した。遺物の出土量は多く、大半が十五台式後半期の土器である。所見 主柱穴と炉は2回更新し、同一堅穴を3回利用したものと推察する。主柱穴配置の拡張にともなって、炉は堅穴中央から北東方向へと移設されたのであろう。堅穴自体の更新や拡張の痕跡は見いだせなかった。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表9 18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底徑	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	(18.3)	胴部へラキガミ、小突内。胴部深い折線器唇3条→1線部4本歯の横位波状文(上→下、反時計回り)。胴部縦位器唇文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外周全面にスス、内周全面にロプレ付着。	石英、金剛砂	普通	黄褐色	十三台式
2	弥生土器 甕	-	1)胴部へラキガミ。口縁部6本歯の横位波状文(上→下、時計回り)。内面は1条半横位のナデ。	石英	普通	灰黄褐色	十二台式
3	弥生土器 甕	-	胴部へラキガミ。口縁部は3本歯の横位波状文(下→上、反時計回り)。内面は横位のナデ。	石英、赤色粒	普通	外: 黄褐色 内: 黄褐色	十五台式



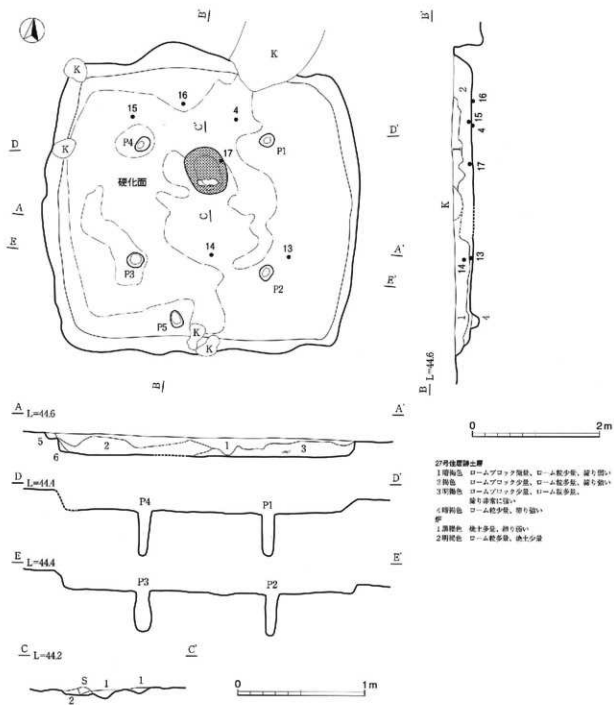


第26圖 18号住居跡出土遺物②

図説番号	種別	口徑器高さ	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	-	頸部附加2種縄文(RL+2R, LR+2L: T→E)→胴部5本の段状縄文→横位(△)底状文(上→下、反時計回り)。内面は横位のナデ。裾部は縦位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外: 灰黄色 内: 灰黄褐色	S2017カマドと 連台 十五台式
5	弥生土器 壺	-	頸部軸線不明の附加縄文(R・S・L・Z: T→E)→胴部5本の横位段状縄文→3本1単位の縦位段状縄文→横位底状文(T→E)。内面はナデ。外面スス付着。	石英	普通	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
6	弥生土器 壺	-	頸部附縁部→胴部5本の縦位段状文→横位底状文。内面は横位のナデ。4と同一形状。	多量の石英・長石、角閃石	良好	外: 灰黄色 内: 灰黄褐色	十五台式
7	弥生土器 壺	-	頸部附縁部。頸部軸線不明の附加縄文(R・S)→胴部7本の縦位段状文→横位底状文(T→E)。内面は縦位のナデ。外面スス付着。胴部より上にスス付着。内面は縦位のナデ、パツナ状の突起。8と同一形状。	石英	普通	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
8	弥生土器 壺	-	頸部附加2種縄文(RL+2R, LR+2L: D→E)。内面は縦位のナデ。外面は帯状の凸凹付着とパツナ状の突起。7と同一形状。	石英	普通	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
9	弥生土器 壺	-	頸部軸線不明の附加縄文(R・S)→胴部3本の横位段状文→3本1単位の縦位段状文→横位底状文(T→E)。内面は縦位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、赤色粒	普通	外: 黒褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
10	弥生土器 壺	-	頸部附加2種縄文(RL+2R, LR+2L: D→E)。内面は頸部半ド位が縦位のナデ。底部付近が縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石、赤色粒	良好	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
11	弥生土器 壺	-	頸部附加1種縄文(RL+2L, LR+2R: T→E)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。内面は下位に帯状の凸凹付着とパツナ状の突起。	石英、角閃石	普通	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
12	弥生土器 壺	7.3	頸部軸線不明の附加縄文(R・Z)。底部未調査。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石	普通	外: 灰黄褐色	軒屋式
13	弥生土器 壺	(7.3)	胴部下層部のナデ→頸部不明の附加縄文(R・S)。底部不明。内面は横位のナデ。	石英、長石、金雲母、赤色粒	普通	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
14	弥生土器 高坪	-	口縁部ヘラケテリ。口縁部縦・横位のナデ。内面は縦・斜位のナデ。	石英	良好	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十五台式
15	土器品 紡錘車	-	径(47)、高33、孔徑(0.3)、重量(883)g。表面黒と黒ナメ。片側穿孔。	石英、角閃石	普通	黒褐色	

## 27号住居跡(第27～29図)

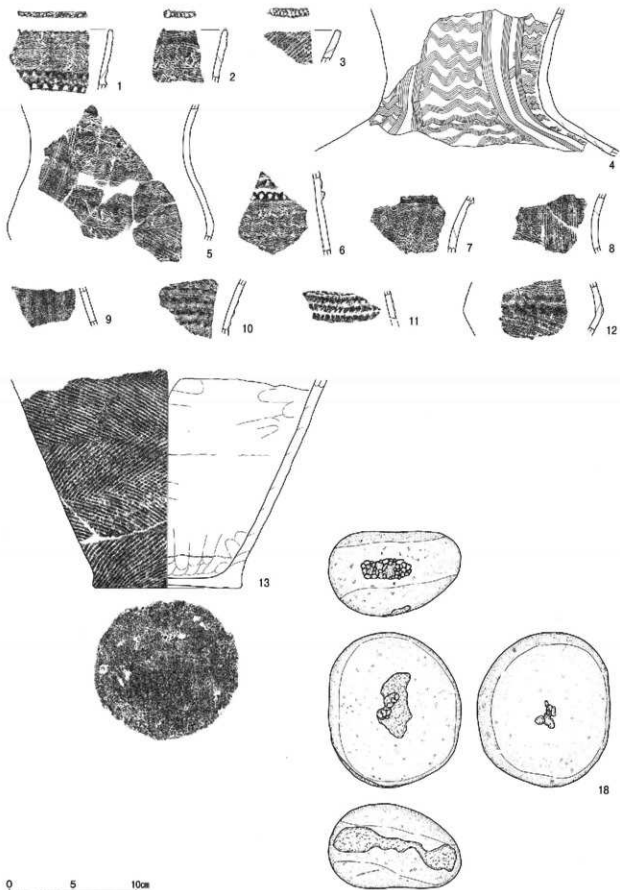
位置 A区北端部付近、M3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は4.26m～4.56mを測る。北壁は崩れているため、最大値は4.95mとなる。東西方向は4.38m～4.96mを測る。平面は東西辺がわずかに膨らんだ隅丸正方形形状を呈する。北壁の一部が攪乱で壊され、床面にはピット状の攪乱が認められる。主軸方位 N-6°-Wで、真北に近い。壁 壁高は15～33cmを測り、傾斜がやや強い。床 はほぼ平坦で、窓穴の西側2/3が硬化する。特に、P1～4を結んだラインの内側が最も硬く、炉の南側床面が軟弱で、硬化面が馬蹄形に残存している。ピット P1～4が主柱穴と考えられる。P5は出入口ピットの可能性がある。南壁際にピット状の攪乱があるため、出入口ピットが失われている可能性もある。主柱穴の覆土はいずれも軟弱で、P2では直径14cmの柱痕とローム質の根固め土を断面観察で確認した。炉 床面中央北寄りに構築される。平面不整形円形で、規模は76cm×59cmを測り、浅く掘り込まれている。被熱は著しく、南側に三角柱状の自然礫を炉石として設置している。炉石は平坦な面を上向きにしている。覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。遺物 P2北東の覆土下層から13が、炉の北側床面から4の口頸部破片が出土している。炉から17の高坪の破片が出土している。遺物の出土量は多く、遺存状況は比較的良好である。十五台後半期の土器が主体だが、二軒屋式系の壺(15・16)も少量出土している。4は十五台式の壺形土器だが、肩が極端に張る。17は体部と脚部に横位の縞帯状文を施文する高坪である。所見 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



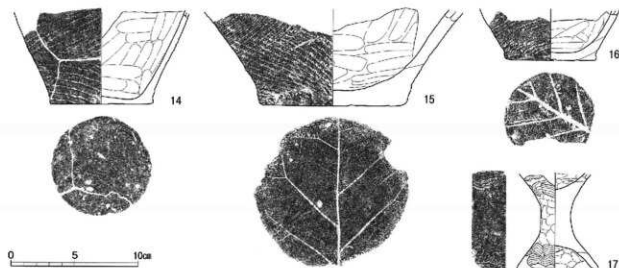
第27図 27号住居跡

表10 27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	- - -	口野部ヘラキザミ。胴部押捺線帯→口縁部6本歯の横位波状文(下→上、反時計回り)。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、金雲母、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十平台式
2	弥生土器 甕	- - -	口縁部ヘラキザミ、小突起。口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英、基石、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十平台式



第28图 27号住居跡出土遺物①



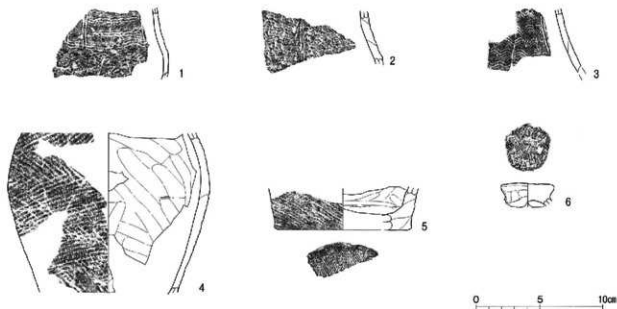
第29図 27号住居跡出土遺物②

図版 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 壺	-- --	口唇部輪溝不明の附加条縄文(L・R+R+)を両面 施文。口縁部は同様の単体を横位施文。内面は横位のナデ。	石英	普通	にぶい黄褐色	
4	弥生土器 壺	-- --	胴部5本の縦位直線文(3~4条を一単位)→横位波 状文(下→上)→横位直線文(一部)。内面は縦位上位が 横位のナデ、中→下位が斜位のナデ。潤色濃い。	多量の石英・黒石、 角閃石、金雲母	良好	褐色	覆土下層 十三台式
5	弥生土器 壺	-- --	胴部附加条1種縄文(R・L+Z1)→胴部押捺塗帯→縦 位5本條の縦位直線文→横位波状文(下→上)12段。内 面は胴部上位が縦位のナデ、中→下位が横位のナデ。外 面スス付着。	石英、角閃石、骨 針	普通	外：灰褐色 内：灰黄褐色	十五台式
6	弥生土器 壺	-- --	遠部深い押捺塗帯→6本の横位波状文(下→上)。内面 はナデ。	角閃石、金雲母、 赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十五台式
7	弥生土器 壺	-- --	胴部割距三角形の深い塗帯→4本の横位波状文(上 →下)。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石	不良	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
8	弥生土器 壺	-- --	胴部4本の縦位直線文(3条一単位)→横位波状文、 縦位直線文(中央)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、黒石	良好	外：黒褐色 内：にぶい褐色	十五台式
9	弥生土器 壺	-- --	胴部3本の縦位直線文(4条一単位)→横位波状文、 内面は縦位のナデ。	石英、角閃石、赤 色粒	普通	にぶい黄褐色	十五台式
10	弥生土器 壺	-- --	胴部深い押捺塗帯4条→口縁部5本の横位波状文、胴 部縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外 面スス付着。	石英、長石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十五台式
11	弥生土器 壺	-- --	遠部爪痕のある深い押捺塗帯→口縁部輪溝不明の横位波 状文。内面は縦位のナデ。	石英、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十五台式
12	弥生土器 壺	-- --	胴部押捺塗帯→胴部5本の横位波状文、胴部輪溝不 明の附加条縄文(L・Z)。内面は縦位のナデ。	石英、長石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい褐色	十五台式
13	弥生土器 壺	-- 11.5	胴部輪溝不明の附加条縄文(R・S・L・Z；下→上、 反対計並り)。底部は布目紋で底縁部ナデ無し。内面は 斜位中位半横・斜位のナデ。底部分布が縦・斜位のナデ。 影は別掲。	多量の石英・黒石、 赤色粒	不良	外：にぶい黄褐色、 灰白色 内：にぶい褐色	覆土下層 十五台式 <sup>o</sup>
14	弥生土器 壺	-- 80	胴部輪溝不明の附加条縄文(R・S・L・Z；下→上)。 底部分布目、横物押子 <sup>o</sup> 正底。内面は横・縦位のナデ、 内面全体に薄いコゲ付着。	石英、骨針	良好	外：にぶい褐色 内：灰黄褐色	覆土上層 十三台式
15	弥生土器 壺	-- 11.4	胴部輪溝不明の附加条縄文(R・S・L・Z；下→上)、 胴部下層横位のナデ。内面は胴部下位が縦・斜位のナデ、 底部分布横位のナデ。	多量の石英・白色 粒、角閃石、赤色 粒。	普通	にぶい黄褐色	覆土下層 二層形式 <sup>o</sup>

図面番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
16	弥生土器 壺	- - (70)	胴部附加糸1種縄文(L・R=2R・時計回り)。底筋本葉状。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・白色 粒、角閃石。	良好	外：黒褐色 内：黄灰色	横面直土 二軒屋式
17	弥生土器 高杯	- - (63)	体部・底部下位に5本線の横位波状文(時計回り、下→上)。胴部中位は横・斜位のナデ。内面は体部が横・斜位のナデ、脚部が横・縦位のナデ。	多量の石英・白色 粒、角閃石、赤色 粒。	普通	にぶい黄褐色	9 十王台式
18	石器 板石		自然礫を素材とし表・裏面中央上・下面に削打痕。 石材：石英安山岩、長さ12.25cm・幅10.33cm・厚さ2.75cm・重さ12764g。				

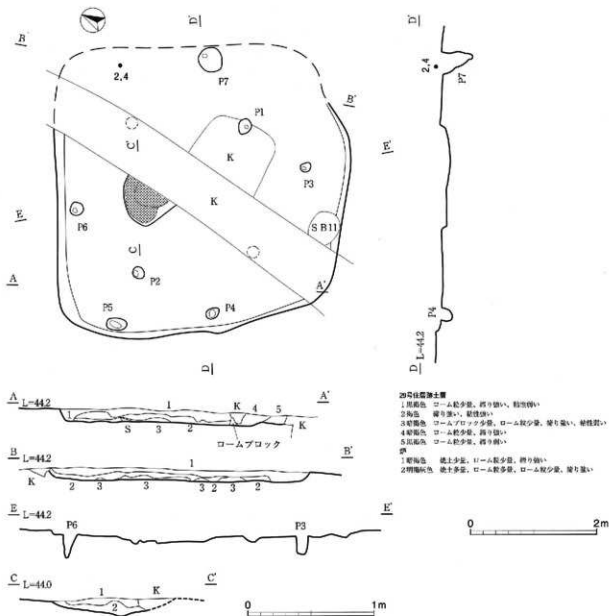
29号住居跡(第30・31図)

位置 A区北部、M3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は4.4m～4.66mを測る。東壁は残存しないため、東西方向は約4.5mと推測する。平面は、不整形な隅丸逆台形もしくは隅丸正方形と思われる。北東部は風倒木痕を壊して構築しており、中央部は攪乱の溝・土坑によって大きく壊され、11号掘立柱建物跡とも重複する。主軸方位 N-31°-W 壁 壁高は7～29cmを測り、傾斜する。床はほぼ平坦で、顕著な硬化面は認められない。ピット P1・2(各深度31cm・39cm)が主柱穴、P3が出入口ピットと考えられる。北東・南西の主柱穴は攪乱で消滅しており、推定位置を破線で示した。P3・4・6・7は各辺(壁)の中央あるいは中軸付近に位置している。炉 床面中央北寄りに構築され、南東部は攪乱によって壊されている。残存規模は89cm×56cmを測り、浅く掘り込まれている。被熱は顕著である。覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。遺物 わずかに弥生土器片が出土している。P2・P3脇の覆土下層から、破砕した同一個体と見られる自然角礫が出土している。遺物の出土量は少なく、大半が小破片で出土している。十王台式後半期の土器が主体で明確な二軒屋式系の土器は出土していない。6は蓋形土器の柄み部である。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第30図 29号住居跡出土遺物





第31図 29号住居跡

表11 29号住居跡出土遺物観察表

図面番号	種別 器種	口縁 器表 高径	特徴	土質	構成	色調	備考
1	弥生土器 盃	- - -	胴部附加糸2種渦文(L+L)→胴部4本線の横位区 間波状文→胴部縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜 位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：明赤褐色 内：にぶい黄褐色	覆土上層 十王台式
2	弥生土器 盃	- - -	胴部4本線の縦位直線文→縦位波状文(下→上)。内面は 横・斜位のナデ。	多量の石英・白色 粒、赤色粒	良好	外：オリブ褐色 内：明赤褐色	覆土上層 十王台式
3	弥生土器 盃	- - -	胴部5本線の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は 横位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	にぶい黄褐色	覆土上層 十王台式

図面 番号	建 物 種 類	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色澤	備考
4	弥生土器 壺	-	制形不明の附加糸縄文(R・S・L・Z・下→上)。内面は胴部上～中位が斜位のナデ。下位～底部付近は横位のナデ。外面胴部1/3位に凹状のスス。内面はコゲ付着。	石灰、多量の白色 粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	瓦土上層 土台式
5	弥生土器 壺	(110)	制形不明の附加糸縄文(R・S・R・Z・下→上)。底部も目新。内面は横・斜位のナデ。	石灰、黄褐色	良好	外：明赤褐色 内：緑色	瓦土上層 土台式
6	弥生土器 壺	-	積み厚195cm。積み部側面にナデ(沿縁圧痕)。裏腹に積物粒子の圧痕。内口は体部がナデ。	石灰	不良	外：明赤褐色 内：赤褐色	

### 30号住居跡(第32図)

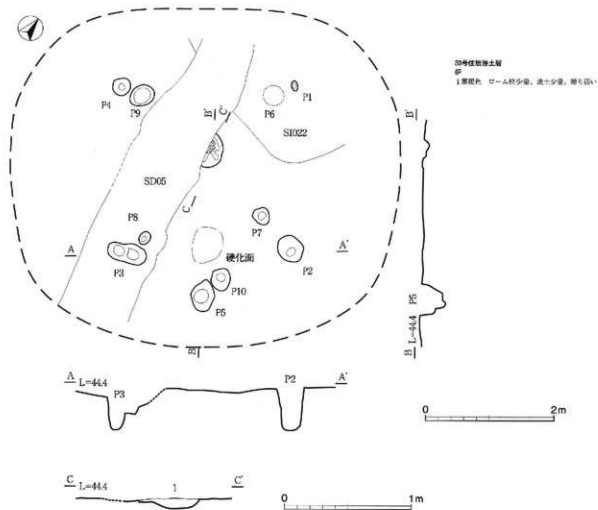
**位置** A区北部、L3グリッドに位置する。**規模と平面形** 確認面では竪穴は残存しなかったため、柱穴配置と49号住居跡を参考にして竪穴規模を推定復元している。本住居跡は5号溝・22号住居跡・7号掘立柱建物跡・時期不明の土坑群によって一部壊されている。**主軸方位** N-40°-W **壁** - 床 床面は、ほとんど残っていない。P5・10の北側に硬化面がわずかに残存している。**ピット** P1~4が新主柱穴、P6~9が旧主柱穴、P5・P10(深さ38cm)が新・旧の出入口ピットであろう。P6は推定位置を破線で示した。P1も22号住居跡掘り方面にわずかな窪みとして残存するのみである。P7・8が深さ38cmと35cmあるのに対し、P9は深さ13cmしかないが、その位置から主柱穴と判断した。**炉** 床面中央やや北寄りに位置する。北東部は5号溝によって壊されている。残存規模は57cm×25cmを測り、浅い掘り込みを伴う。**覆土** - **遺物** 柱穴内から弥生土器の小片が出土した。**所見** 住居跡の時期は弥生時代後期後半と考えられる。本遺跡の弥生時代の住居跡の中では、比較的規模が大きい。

### 35号住居跡(第33図)

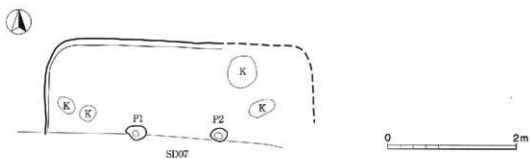
**位置** A区北部、M4グリッドに位置する。**規模と平面形** 竪穴の壁の一部が残存している。東西は推定4.2m、南北は不明である。大半は7号溝・1号道路跡によって壊されている。**主軸方位** N-1°-E **壁** やや傾斜し、最大で5cmを測る。**床** ほぼ平坦である。**ピット** P1・2は、深さ24cm・30cmを測り、主柱穴の可能性がある。**炉** - **覆土** - **遺物** - **所見** 残存する壁やピット等の構造から、弥生時代の住居と推測する。

### 37号住居跡(第34・35図)

**位置** A区北部、M1グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は4.11m、東西方向は3.7m~4.21mを測る。平面は不整形な隅丸台形状であるが、西壁については主柱穴配置や主軸と整合しない。漸移層に掘り込まれた西壁が木の根等によって侵食された可能性があり、本来は隅丸長方形であったと推測する。床面にはピット状擾乱が点在する。**主軸方位** N-59°-W **壁** 壁高は9cmを測り、傾斜する。**床** やや凹凸のある地床で、炉の周りに不整形な硬化面が広がる。**ピット** P1~4が主柱穴、P7が壁

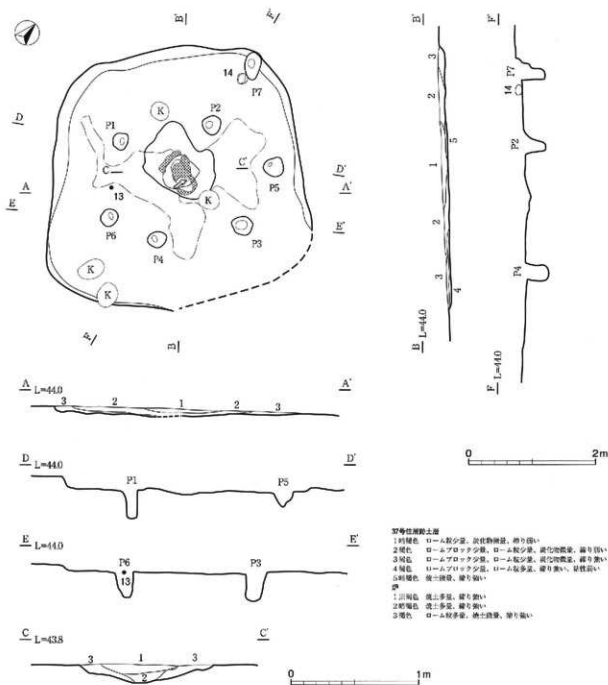


第32図 30号住居跡

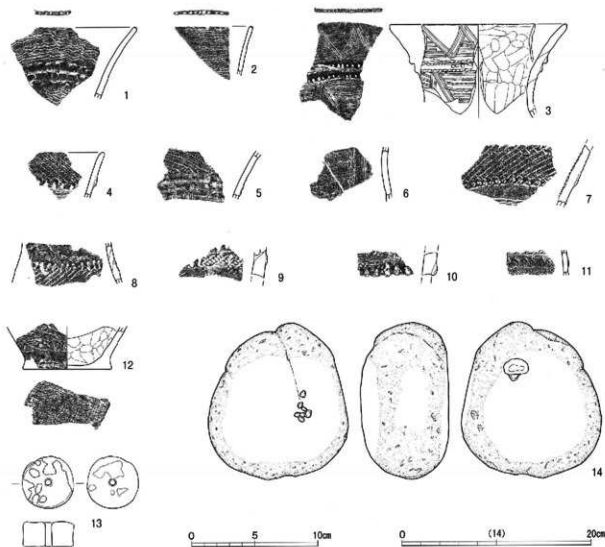


第33図 35号住居跡

柱穴であろう。P5・6は補助柱穴と推測するが、出入口ピットの可能性も残される。 炉 床面中央に位置し、土坑状に広く、やや深く掘り込まれている。不整形な棒状礫を炉石としている。 覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。 遺物 少量の弥生土器片が出土している。P7脇の床面からは14の台石が出土している。遺物の出土量はやや少なく、大半が小破片で出土している。十王台式前期の土器と二軒屋式系の土器が混在する。3は十王台式の範疇であるが、口縁部と頸部に描繪鉛筆文を施文する。4・7・8は二軒屋式系の土器である。 所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第34図 37号住居跡



第35図 37号住居跡出土遺物

表12 37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色面	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。頸部爪痕のある盛り出しの縁帯2条→口縁部・頸部5本条の縦位波状文(上→下)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石灰、多量の白色粒、赤色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	覆土上層 十三台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部4本条の縦位波状文→横位波状文。内面は横位のナデ。	石灰	良好	外：灰黄褐色 内：橙色	覆土上層 十三台式
3	弥生土器 壺	(13R) - -	口唇部ヘラキザミ。丸棒状工具による刺突のある厚い帯帯2条→口縁部・頸部山形文(反時計回り)→山形文間を一周おきに縦位波状文で充填(上→下)。外面全面にスス付着。内面は縦・斜位のナデ。	石灰	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	覆土上層 十三台式
4	弥生土器 壺	- - -	口縁部下縁に筒文帯部を併せて輪轉不明の周加条状文(R・Z)。頸部6本条の縦位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石灰、角閃石、赤色粒	普通	にぶい橙色	覆土上層
5	弥生土器 壺	- - -	縁部深い筒輪縁帯3条→口縁部附縁帯2條網文(上→下)。頸部5本条の縦位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面はゴレ付着。	石灰、角閃石	良好	外：にぶい橙褐色 内：黒褐色	覆土上層 十三台式

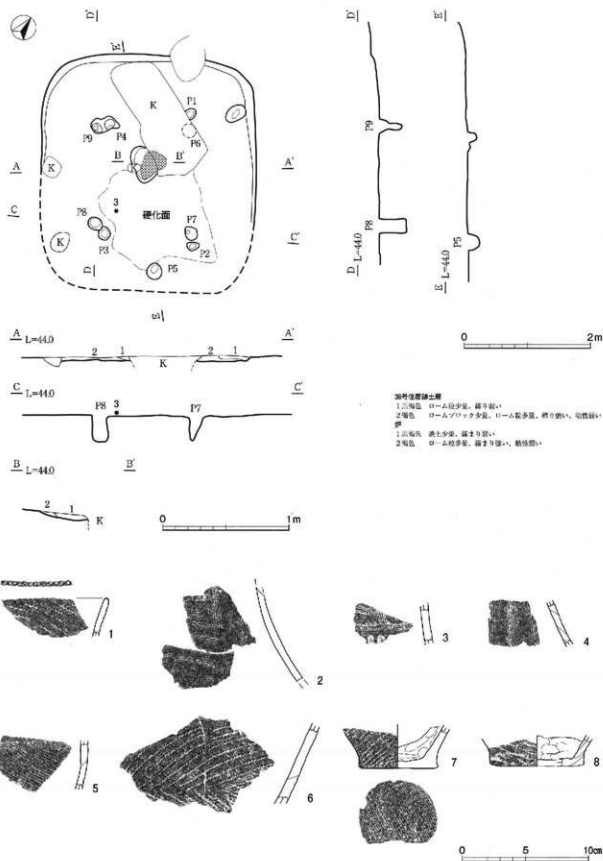
図版番号	種別 器種	口徑 總高さ	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器 壺	--	胴部軸組不明の附加条編文(R・S)→胴部5本並の足位 迄編文→階位段状文。内面は横・斜位のナデ。外面スリ管 状。	石灰、赤色粒	不良	外：灰褐色 内：灰青褐色	甕土上層 十土台式
7	弥生土器 壺	--	口縁部附加条1條編文(LR+2R+)と軸組不明の足 位条編文(R・S)をトから上へ編文。口縁部下層に同 様の編文条体部部を併設編文。胴部3本並以上の段状成 状文。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・灰石、普通 赤色粒	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	甕土上層 二軒層式
8	弥生土器 壺	--	胴部附加条1條編文(LR+2R)を軸組編文した際、条 体部→胴部軸組不明の附加条編文(R・S)。内面は横位の ナデ。	多量の石英・灰石、 赤色粒	不良	外：にぶい灰色 内：にぶい黄褐色	II 二軒層式
9	弥生土器 壺	--	胴部附加条1條編文(LR+2R)を軸組編文した際、条 体部は横位のナデで覆装。内面は横位のナデ。	多量の石英・灰石	良好	にぶい黄褐色	甕土上層
10	弥生土器 壺	--	胴部附加条1條編文(LR+2R)を軸組編文した際に、 胴部下層に同様の条体部部を併設。内面は斜位のナ デ。	多量の石英・灰石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	甕土上層
11	弥生土器 壺	--	胴部下層のある横・斜位の条。甕土上層部に附加条2條 編文(LR+2L)。内面は斜位のナデ。	石英、チャーン、 骨針	不良	にぶい藍色	甕土上層
12	弥生土器 壺	--	胴部軸組不明の附加条編文(R・Z)。底部を目録。内面は 斜位のナデ。	石灰	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	甕土上層 十土台式
13	土器片 紡錘車	--	塊(11)、高2.0、乳径(0.5)、重量「43.2g」。表面滑 とも滑らかなが、ナデ編装。	多量の石英・白色 粒	不良	黄灰色	甕面土上
14	石器 石臼	--	大原産の巻・巻石や右側部に磨耗面。磨耗範囲の一部に磨研面とみられる凹穴。 石臼：石灰安山石。長さ16.45cm・幅14.85cm・厚さ9.22cm・重さ3990g。				甕面土上

39号住居跡(第36図)

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は推定3.75m、東西方向は3.40mを測る。南側はローム層上面では残存しないが、平面は不整隅丸長方形であろう。中央部は長方形の攪乱に破壊される。主軸方位 N-35°-W 壁 壁高は5cmを測り、やや傾斜する。床 やや凹凸があり、炉の周りに不整形な硬化面が広がる。ピット P7~9が主柱穴、P5が出入口ピットであろう。P6は不明ながら、推定位置を破線で図示した。P1~4は深さ13cm~27cmと浅いが、P7~9とほぼ同位置であり、古い主柱穴の可能性もある。炉 床面中央やや北寄りに位置し、浅い皿状を呈する。攪乱によって一部を失うが、被熱範囲が検出できた。覆土 自然堆積状を呈するが、ロームブロック・ローム粒がやや目立つ。遺物 少量の弥生土器片が出土している。遺物の出土量は少なく、小~中破片で出土している。十土台式後半期の土器が主体で明確な二軒層式系の土器は出土していない。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表13 39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 總高さ	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	--	口唇部ヘラキリ等、口縁部附加条2條編文(LR+2L)。 内面に口唇部付点横位のナデ。他は斜位のナデ。	石灰、灰石	普通	灰青褐色	十土台式
2	弥生土器 壺	--	胴部5本並の縦位条編文・縦位段状文→階位段状文。外 面滑いスス。全面コゲ付着。	石灰	普通	外：にぶい黄褐色 内：黒色	十土台式
3	弥生土器 壺	--	胴部条5本並の横位区面段状文。その下にナデ(編装 工前)→胴部軸組不明の附加条編文。内面は斜位のナデ。	石灰、角閃石、赤 色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰青褐色	甕土下層 十土台式



第36図 39号住居跡・出土遺物

図版番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	—	頸部5本条の縦筋直線入、間に縦位成状文を挟む。内面は縦位のナデ。	石英	普通	外：灰青褐色 内：黒色	十三古式
5	弥生土器 壺	—	胴部附加条2種縄文(L・R+2L)→胴部5本条の横位区画成状文。内面は斜位のナデ。外面全面にスス、内面全面にコゲ付着。	石英	不火	灰青褐色	十三古式
6	弥生土器 壺	—	胴部附加条2種縄文(R+R)と軸綫不明の附加条縄文(R-Z:1→下)。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石、赤鉄 金粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十三古式
7	弥生土器 壺	— 5.9	胴部軸綫不明の附加条縄文(R・S)。蓋部半月痕。内面は胴部が斜位のナデ、蓋部付近が横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石、良灯 角閃石	—	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	十三古式
8	弥生土器 壺	— (7.4)	胴部軸綫不明の附加条縄文(R・Z)。蓋部半月痕。内面は横位のナデ。	石英、長石、赤鉄 金粒	不良	にぶい黄褐色	十三古式

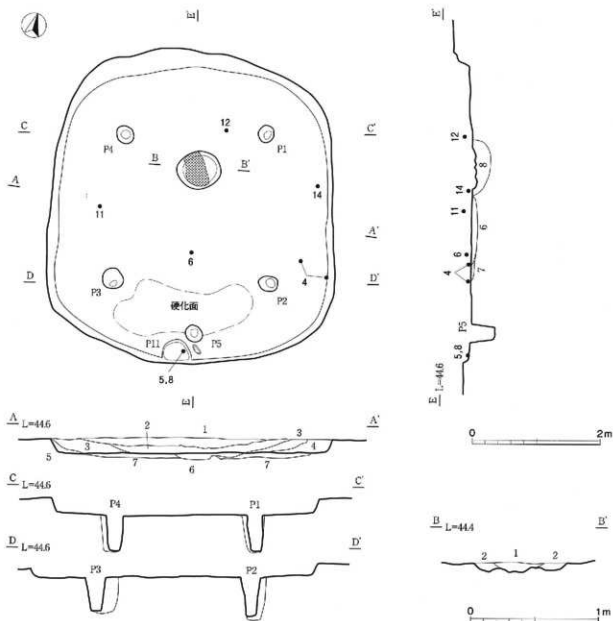
44号住居跡(第37~39図)

**位置** A区北部、K3~K4グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北(主軸)方向は5.00m、東西方向は4.52mを測る。平面形は隅丸長方形。 **主軸方位** N-15°-W 壁 壁高は8~22cmを測り、傾斜する。 **床** 新旧2面あり、堅穴を拡張・更新している。新床面は平坦で、中央部は旧床面を埋め戻した貼床である。出入口部前面が帯状に硬化している。旧床面は中央部がやや窪んでいる。その他の部分で新しい床面とは明瞭な高低差がなかった。 **ピット** P1~4が主柱穴、P6~9(深さ34~46cm)が旧主柱穴、P5が出入口ピット、P10(深さ33cm)が古い出入口ピットであろう。いずれも柱痕は検出できず、抜取と思われる。P11は深さ5~8cmと浅い。 **炉** 床面中央部北寄りに位置し、被熱は顕著で、浅い皿状を呈する。 **覆土** 自然堆積状を呈する。1・2層の暗~黒褐色土と、3~5層の褐色土が明瞭に別れる。 **遺物** 3~5層から少量の弥生土器が出土している。P11の直上からは5・8の壺が出土し、P5脇の床面には棒状の自然罅が置かれていた。また、2層からは土師器の高坏(15)が出土し、注意される。遺物の出土量はやや多く、中~大破片の割合が高い。十三古式後半期の土器が主体である。7は縄文地の胴部に凹形刺突文が施文される。8は撚り紐rをS巻きにした軸綫不明の附加条縄文と附加条2種縄文(附加2条)を非羽状構成で施文している。15は土師器高坏の口縁部片で赤彩が施されている。 **所見** 堅穴と柱穴の拡張・更新が明瞭で、上層を含む建て替えと判断できる。旧堅穴の推定規模は南北4.0m×東西3.7mで、平面形は新堅穴と相似形と推定し、破線で図示した。如を移設・更新した痕跡が全く認められないため、連続的な建て替えであろう。遺物の出土状況から、少なくとも1・2層は古墳前期以降の埋没と想定される。住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表14 44号住居跡出土遺物観察表

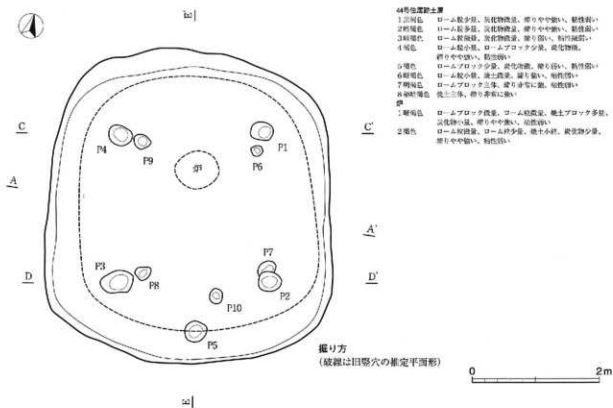
図版番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	—	口部部縄文と直線施文を、口部部縦位成状文(上→下)。内面は横位のナデ。	石英、赤雲母、良灯 角閃	—	灰黄褐色	十三古式
2	弥生土器 壺	—	口部部九棒状1具によるキザム。口部部6本条の横位成状文(1→下)→縦位成状文。内面は横位のナデ。	石英	良好	にぶい黄褐色	十三古式





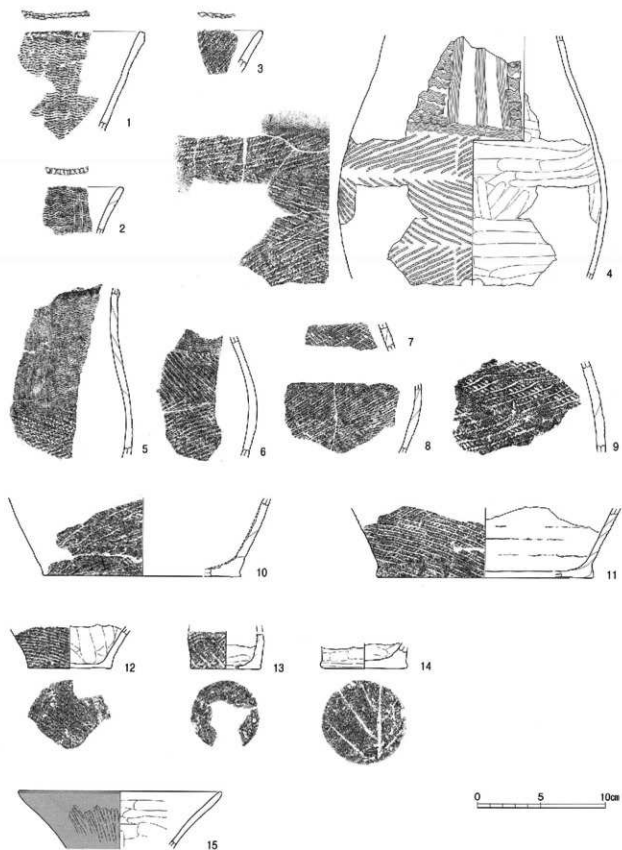
第37図 44号住居跡

図面番号	種別 器種	口徑 鉢高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土群 類	- -	口唇部縄文取付によるキギミ。口縁部輪周不明の習加条 理文(R・S)。内面は横位のナデ。外面に濃いスス付着。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十五台式
4	弥生土群 類	- -	頸部輪周不明の習加条細文(R・S、L・Z:下→上、 反輪斜向き)→第四卷7本面の横切区画成状文→頸部縦 位直線文2条一単位→横位波状文(左側:下→上、右側: 上→下)。内面は頸部斜位のナデ、頸部が縦・斜位のナデ →横位のナデ。緻密な胎土。外側頸部→横上位に濃いスス、 腹中部に薄いスス。内腹部下部に帯状のコケ付着。	石英	良好	にぶい黄褐色	腹上下部 十五台式
5	弥生土群 類	- -	頸部押捺強帯、頸部輪周不明の習加条細文(L・Z、L・ S:下→上)→5本面の縦位直線文→横位波状文(下 →上)、頸部縦切区画成状文。内面は頸部が横・斜位の ナデ、頸部が横位のナデ。外側頸部→頸部にスス、内 腹頸部に帯状のコケ付着。	多量の石英・長石、 骨針、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	腹上下部 十五台式



第38図 44号住居跡掘り方

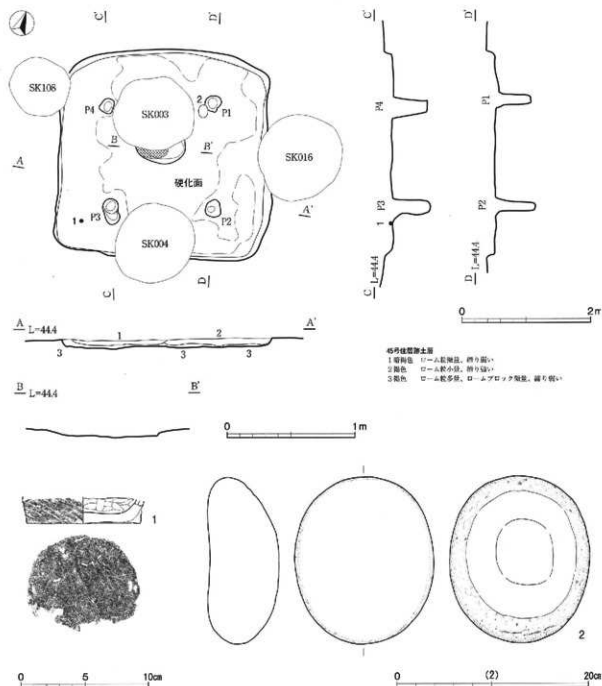
図面番号	種別	口縁器蓋	特徴	土質	規模	色調	備考
6	弥生土器	-	胴部輪縁不明の附加条縄文 (R・S・L・Z:下→上)、底部5本指の縦位直線文・横位直線文、胴部半横位区別直線文、内面は割部縦位のナデ、他は彫面浅れ、外面スス付着。	多量の石英・白色灰	普通	外: ぶい黄褐色 内: 褐色	覆土中層 十五台式
7	弥生土器	-	胴部輪縁不明の附加条縄文 (R・S・L・Z) → 深い丸棒状工具による縦位斜線文1条、内面は横位のナデ。	石英、チャート、角閃石、赤色灰	普通	外: ぶい黄褐色 内: 浅黄褐色	
8	弥生土器	-	胴部輪縁不明の附加条縄文 (r・S)、附加条2條縄文 (R+2L・s) の間に上→下へ縦文→胴部5本指以上の縦位区別直線文、内面は横・斜位のナデ、外面スス、内面ヨレ付着。	多量の石英・白色灰、角閃石	普通	外: ぶい黄褐色 内: ぶい黄褐色	覆土下層 十五台式
9	弥生土器	-	胴部附加条2條縄文 (R+R)、内面は斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、多量の金雲母、赤色灰	普通	ぶい黄褐色	十五台式
10	弥生土器	-	胴部附加条2條縄文 (R+R s)、底部砂痕、内面は割溝。	石英、長石、角閃石、金雲母、赤色灰	小片	明黄褐色	十五台式
11	弥生土器	-	胴部附加条2條縄文 (LR+2L、RL+2R:下→上)、底部砂痕、内面は割溝。	石英、長石、角閃石、金雲母	普通	ぶい黄褐色	十五台式
12	弥生土器	-	胴部輪縁不明の附加条縄文 (L・Z)、底部布目痕、内面は斜位のナデ、外面煎熱による赤色化、スス付着。	石英、角閃石	普通	ぶい黄褐色	覆土中層 十五台式
13	弥生土器	-	胴部附加条1條縄文 (R1+2L)、輪縁不明の附加条縄文 (R・S)、底部布目痕、内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	普通	外: ぶい黄褐色 内: 黒褐色	
14	弥生土器	-	胴部輪縁不明の附加条縄文 (1・Z s)、胴部下輪縁位のナデ、底部木炭痕、内面は横位のナデ。	石英、角閃石	普通	ぶい黄褐色	覆土下層
15	土師器	-	外面縦位のミガキ、内面は横位のナデ、外面赤彩。	石英、角閃石	普通	外: 褐色 内: ぶい黄褐色	



第39图 44号住居跡出土遺物

45号住居跡（第40図）

位置 A区北部、K4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は3.32m、東西方向は3.41mを測る。平面は隅丸正方形を呈する。3・4・16・108号土坑に壊されている。主軸方位 N-20°-W 壁 壁高は13cmを測り、やや傾斜する。床 中央部が硬化している。ピット P1~4が主柱穴である。P1・2・4では直径15cm前後の柱痕を断面で検出した。炉 床面中央に位置し、3号土坑によって北半分を失っている。浅い皿状を呈し、被熱は顕著である。覆土 自然堆積状を呈する。遺物 P1



45号住居跡土層  
 1 褐色 ローム灰層状、微り腐い  
 2 褐色 ローム灰小塊、微り腐い  
 3 褐色 ローム灰多量、ロームブロック散見、微り腐い

第40図 45号住居跡・出土遺物

脇の床面には2の石台が置かれており、P3付近の床面直上からは弥生土器の底部破片(1)が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、大半が小破片で出土している。十王台式を主体とする。所見 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

表15 45号住居跡出土遺物観察表

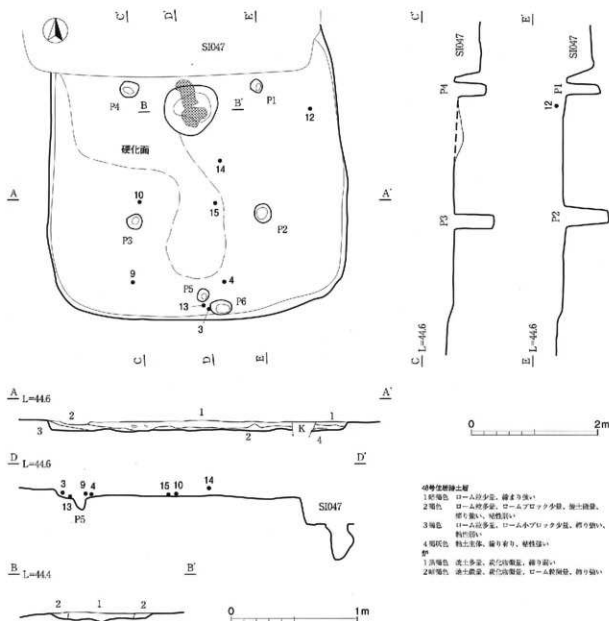
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — 9.0	口唇縁不明の附加垂線文(R・Z)。底唇帯目縁。内面は縦・斜位のナゲ。底唇も筋上。	石炭、角閃石、金雲母	良好	外: 灰白色 内: 灰白色	現下層 十王台式
2	石器 石台	—	大型の表・裏面に磨耗痕。裏面は顕著な磨耗により中央部分が浅く窪む。石材: 砂岩。長さ17.5cm・幅14.7cm・厚さ7.5cm・重さ2719.1g。	—	—	—	床面直上

## 48号住居跡(第41・42図)

位置 A区北部、L4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は推定5.00m、東西方向は北側で4.46m、南側で4.76mを測る。平面は隅丸形状を呈する。47号住居跡および18・19号土坑によって、北側を壊されている。主軸方位 N-3°-W 壁 壁高は10~15cmを測り、やや傾斜する。床 ほぼ平坦で、P5から堅穴北西部にかけて帯状に硬化している。ピット P1~4が主柱穴、P5が出入りピットであろう。P1とP3では、それぞれ直径11cm・13cmの柱痕を断面で検出した。P6(深さ26cm)はいわゆる貯蔵穴であろう。炉 床向中央部北寄りに位置し、浅い皿状に掘り込まれ、被熱は著しい。覆土 2・3層はローム粒・ブロックがやや多く、人為的埋没の可能性がある。また、4層は白色粘土主体である。遺物 堅穴中央の覆土下層からは土製紡錘車(15)が、P5脇の床面直上からは弥生土器の高坏(13)が出土している。また、堅穴中央部の1層からは土師器(14)が出土している。遺物の出土量はやや多く、中~大破片の割合が高い。十王台式後期の土器が主体である。明確な二軒屋式系の土器は確認できない。13は無文の弥生系高坏、14は外面に刷毛目を施す土師器(壺か)である。15はほぼ完形の土製紡錘車である。所見 古墳時代前期の土師器が、埋没最終過程の時期を示している。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

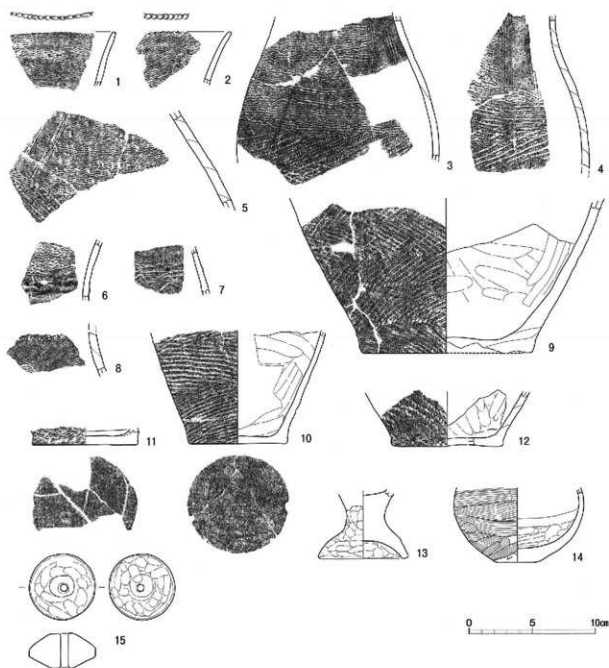
表16 48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部角形状二層によるキズミ。口縁部4本歯の横位波状文(上→下)。内口は口唇部付点の丁字なナゲ、外は斜位の丁字なナゲ。外面はスズ付着。	石英	良好	外: 黒褐色 内: 灰白色	十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	口唇部角形状1層によるキズミ。口縁部4本歯の横位波状文(概ね上→下)。内面は横位の丁字なナゲ。	石英、金針	良好	外: 灰白色 内: 灰白色	十王台式
3	弥生土器 壺	— — —	胴部輪縁不明の附加垂線文(R・S・L・Z;下→上、反時計回り)→胴部厚4本歯の横位波状文→横位波状文3本歯→横位波状文(下→上)。内面は胴部下空→胴部上位が縦・斜位の丁字なナゲ、胴部上位が横位の丁字なナゲ。外面は全体に濃いスズ付着。	石英、金針	良好	外: 灰白色 内: 灰白色	土器上層 十王台式
4	弥生土器 壺	— — —	胴部輪縁不明の附加垂線文(R・S・L・Z;下→上)→胴部厚5本歯の横位波状文(時計回り)→横位波状文→横位波状文(下→上)。内面は胴部下空→胴部上位が縦・斜位のナゲ。外面は胴部の縦位部に斜位のヨコレ付着。	石英、角閃石、金雲母、多数の白色炭	良好	外: 灰白色 内: 灰白色	土器中層 十王台式
5	弥生土器 壺	— — —	胴部輪縁不明の附加垂線文(L・Z)→胴部厚5本歯の縦位波状文→縦位波状文(概ね上→下)。内口は縦・斜位のナゲ。	多量の石英・長石、赤色粒	良好	外: 灰白色 内: 灰白色	十王台式



第41図 48号住居跡

原簿番号	類別器種	口径 底径 底径	特徴	胎土	焼成	色面	備考
6	弥生土器 壺	- - -	頸部薄い呼吸環帯3条→縦位直線文→、口縁部傾位波状文(下→上、反時計回り)。内面は削位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外: 暗褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	胴部輪縄不明の彫刻的直文(R-S)、頸部肩4本筋の横位直線文→上開きの逆直文、胴部縦位直線文→傾位波状文→彫刻的付文。内面はナデ、外面は自然による赤色化。	石英、多量の白色 鉄、赤色粒	不良	外: 淡赤褐色 内: 残黄色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	頸部4本筋以上の傾位波状文、単線直文(RL+)。内面は削位のナデ。	石英、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	
9	弥生土器 壺	- - 135	胴部肩追加1線直文(RL+2L、LR=2R:下→上)。底部直線は不明。内面は縦位のナデ、底面付近は磨面。	石英、角閃石、金 雲母、骨針	普通	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	



第42図 48号住居跡出土遺物

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 盃	- - 7.7	胴部縦縞不明の附加条縄文 (R・S・L・Z:下-上、 反対は同)。蓋部も同様。内面は斜立・斜位のナデ。外 面全体にまばらにスス付着。内面の胴部下部に帯状のコ ゲ。体は全体的にヨゴレ付着。	石英、長石、角閃 石	普通	外: 濃い黄褐色 内: 黒色	覆土中部 十三台式
11	弥生土器 盃	- - (5.3)	胴部縦縞不明の附加条縄文 (R・Z)。底部木両直。内 面はナデナ。内面コケ付着。	多量の石英・白色 鉄、赤色鉄	普通	外: 濃い黄褐色 内: 濃い黄褐色	十三台式+
12	弥生土器 盃	- - (5.8)	胴部縦縞不明の附加条縄文 (L・Z)。底部砂面。内面 は斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、多 量の白色鉄	普通	外: 灰黄色 内: 灰黄褐色	覆土上層 十三台式

図版 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
13	弥生土器 高坏	— — 6.6	胴部横位のナゲ(既知反時計回り)。脚端部木実痕。内面は脚部が横・斜位のナゲ。	石英、角閃石、金 雲母、骨針、赤色 鉄	良好	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	床面直上 覆土上層
14	十層形 沓	— — 3.25	外口はヘラケズリ→横・斜位のハケ。内面は横位のナゲ。外口スス付着。	多量の石英、角閃石、骨針	良好	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	覆土上層
15	十層形 紡錘器	— — —	径5.2、高2.7、口径0.95、重70.08g。表裏面ともナゲ調整。片割穿孔。	石英、角閃石、骨 針	良好	外: 灰黄褐色	覆土中層

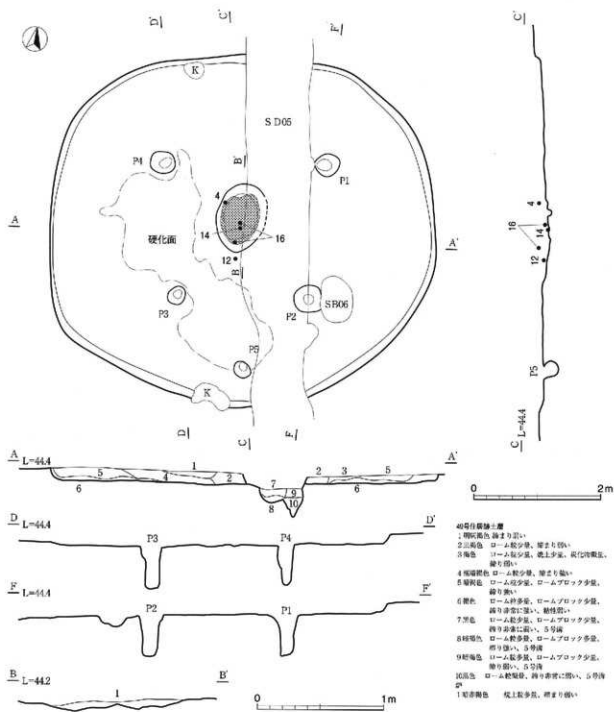
49号住居跡(第43・44図)

位置 A区北部、L4グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は5.58m、東西方向は6.06mを測る。平面形は楕円形。中世以降の5号溝が中央部を縦断し、多数のピットが重複する。また、古代の6号掘立柱建物跡の柱穴が重複している。主軸方位 N-10°-W 壁 壁高は5~20cmを測り、傾斜する。床はほぼ平坦である。P4からP5にかけて硬化している。ピット P1~4が主柱穴、P5が出入口ピットであろう。炉 床面中央に位置し、浅い皿状に掘り込まれ、火床面の被熱は顕著である。覆土 自然堆積状である 遺物 遺物の出土量はやや多く、中~大破片の割合が高い。4・12・14・15・16はいずれも中の直上にあたる覆土中から出土した。十層式後半期の土器が主体で5・9・10・12は櫛指文・縄文原体・胎土の特徴から二軒屋式系と考えられる。所見 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。住居規模は、比較的人きいが、建替えの痕跡は全く認められない。

表17 49号住居跡出土遺物観察表

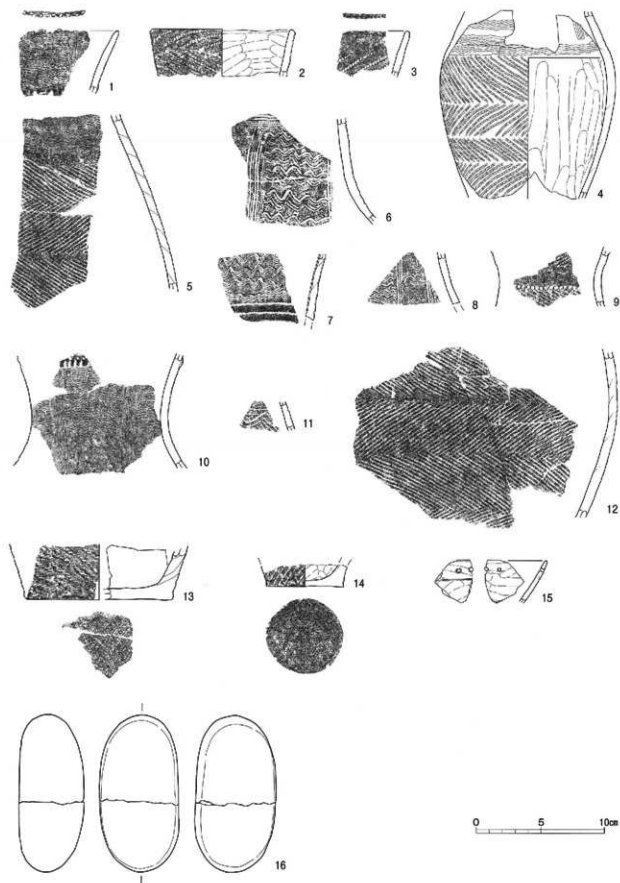
図版 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラケズリ。胴部薄いつゆ指輪帯→口部から本面の縦 加条線文→横位波状文(上→下)。内面は口唇部付着横位 のナゲ、以下は斜位のナゲ。外口スス付着。	石英	良好	外: 褐色 内: 灰黄褐色	上土台式
2	弥生土器 壺	— — —	口部縦線不明の附加条縄文(R・S・L・Z:上→下)。 内面は横・斜位のナゲ。	多量の石英	良好	黒褐色	十層式
3	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラケズリ。口部縦線不明の附加条縄文(R・S)。 内面は斜位のナゲ。	石英	良好	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	十層式 内: 灰黄褐色
4	弥生土器 壺	— — —	胴部縦線不明の附加条縄文(R・S・L・Z:上→下)。 →別器身5本面の横位波状文(反時計回り)→縦位 波状文、横位波状文。内面は縦位のナゲ。外口唇部にス ス付着。	石英、角閃石	普通	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	上土台式
5	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条1線縄文(R・L・Z・L・R+2R:上→下)。 頸部10本面の横位波状文。内面は斜位のナゲ。	多量の石英・長石 須石	良好	外: 灰黄褐色	十層式
6	弥生土器 壺	— — —	胴部5本面の横位波状文→横位波状文(上→下)→横位 波状文。内面は横・斜位のナゲ。	石英、金雲母、骨 針	不良	黒褐色	十層式
7	弥生土器 壺	— — —	頸部至文の盛り出し部帯→口唇部1本面の横位波状文。 内面は縦帯。	石英、長石、角閃石 、金雲母	良好	外: 灰黄褐色	十層式
8	弥生土器 壺	— — —	胴部4本面の縦位波状文→横位波状文(上→下)。内面は 横位のナゲ。	石英、金雲母、赤 色鉄	良好	黒褐色	十層式
9	弥生土器 壺	— — —	胴部縦線不明の附加条縄文(R・S)、胴部縦線不明の附 加条縄文(L・Z)→別器身丸縁状工具による横位の縦 加文1全。頸部に横文帯(横・斜位のナゲ)。内面は横・ 斜位のナゲ。外口スス、内面3ゴレ付着。	多量の石英・白色、角閃 石、角閃石	良好	黒褐色	二軒屋式





第43図 49号住居跡

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	- - -	口底部に交互斜交文を有する隆帯→胴部10本當の縦筋が 縦文→横位成状文(下→上)。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外：黒褐色 内：灰黄褐色	
11	弥生土器 壺	- - -	明部輪襷不明の付加条筋文(上・下)→胴部2本同時 施文による横位成状文→上開きの深溝文。内面は横位の ナデ。外面スリ行帯。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十五台式

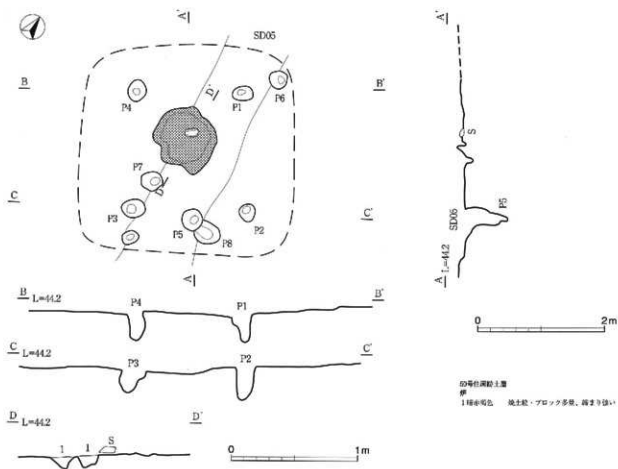


第44図 49号住居跡出土遺物

図版番号	種別	口徑 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
12	弥生土器 釜	— — —	胴部輪郭不明の附加条縄文 (R・S、L・Z:上→下)。内面は横・斜位のナデ。外面焼熱による赤色化、内面胴部中に帯状のコゲ付着。	多量の石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	二軒型式
13	弥生土器 釜	— — (114)	胴部輪郭不明の附加条縄文 (R・Z)。底部帯目肌。内面は斜路。	多量の石英・白色 鉄、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十五台式
14	弥生土器 釜	— — 60	胴部輪郭不明の附加条縄文 (R・S)。底部帯目肌。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
15	弥生土器 高杯	— — —	打り返し口縁。外面・内面ともに横・斜位のナデ。種條孔2箇所。	石英、金雲母	普通	にぶい褐色	
16	石器 磨石		自然産の表面全体に磨耗面。焼熱により表面全体が赤褐色に着色。石材：石英安山岩。長さ12.3cm・幅6.3cm・厚さ5.05cm・重さ509.7g。				

## 50号住居跡 (第45図)

位置 A区北部、L4グリッドに位置する。規模と平面形 炉と柱穴が確認されている。壱穴の規模は残存していないため不明であるが、45号住居跡を参考にして壱穴の推定破線を示した。中央を5号溝が縦断し、壊されている。主軸方位 N-37°-W 壁 残存していない。床 - ビット P1~4が主柱穴、P5が出入口ビットであろう。P6・7 (深さ39cm・34cm)は壁柱穴・補助柱穴であろうか。P8 (深

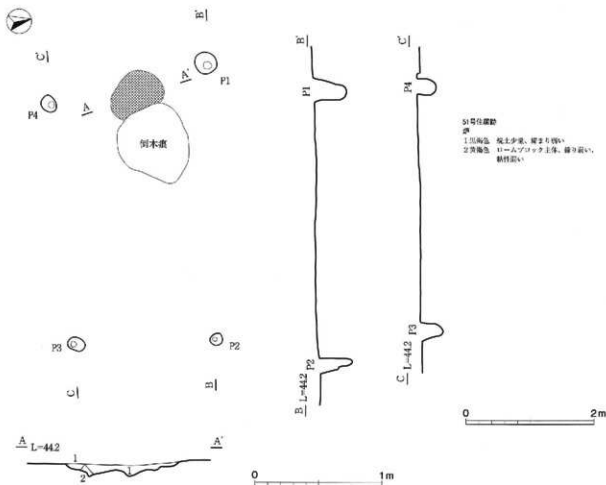


第45図 50号住居跡

さ23cm)は貯蔵穴の可能性ある。 炉 床面中央に位置し、掘りこみはなく、被熱は強い。火床面からわずかに浮いた位置で、炉石が出土している。 覆土 - 遺物 柱穴から弥生土器の小片がわずかに出土している。 所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

51号住居跡 (第46図)

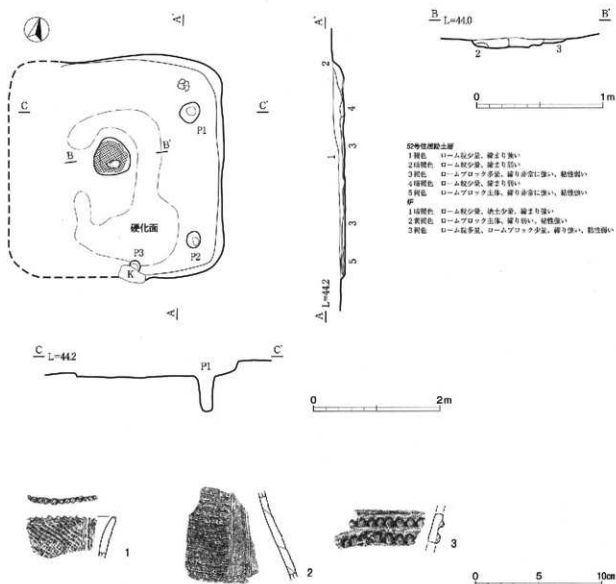
位置 A区北部、M4グリッドに位置する。 規模と平面形 竪穴は残存せず、支柱穴も確定できないため、規模・平面形は不明である。 主軸方位 - 壁 - 床 - ピット P1~4は、支柱穴の可能性あるが断定はできない。 炉 浅い皿状に掘り込まれ、被熱はやや強い。 覆土 - 遺物 - 所見 所属時期を判断する資料に欠けるが、炉や柱穴内の堆積土の状況から、弥生時代に帰属する可能性がある。



第46図 51号住居跡

## 52号住居跡 (第47図)

位置 A区北部、K4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は3.55mを測り、東西方向は約3.4mと推定する。平面は不整隅九正方形であろう。主軸方位 N-15°-W 壁 壁高は6~16cmを測り、傾斜する。床 南壁際にもみ貼床がある。炉の周囲を除いた中央部が硬化し、周辺よりもわずかに高い。ピット P1・2が主柱穴、P3が出入口ピットであろう。主柱穴は北東隅と南東隅に寄った位置にある。炉 床面中央に浅い皿状の炉があり、被熱は著しい。片岩系の自然礫を炉石としている。覆土 自然堆積状を呈する。遺物 遺物の出土量は少なく、大半が小破片で出土している。北東隅の覆土下層から、弥生土器の大型破片が出土している。十王台式主体で1は縦位の縞掛直線文と附加条1種縄文によるやや異質な文様構成を呈する。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第47図 52号住居跡・出土遺物

表18 52号住居跡出土遺物観察表

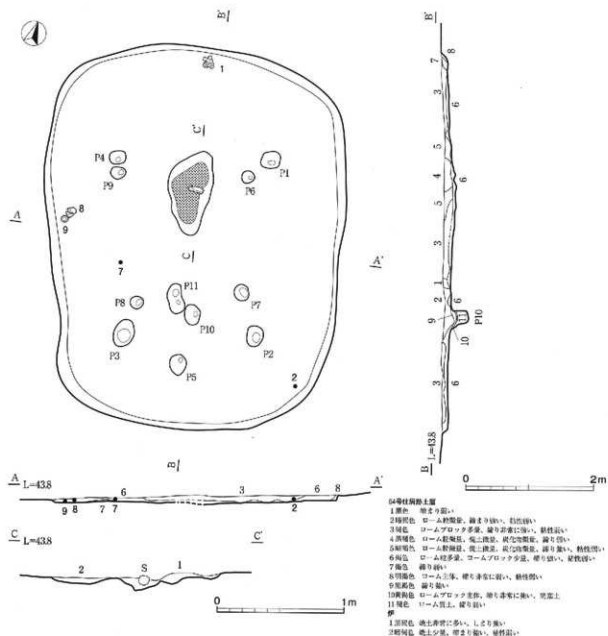
図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- -	口唇部高文帯によるキザミ、口縁部附加条1條横文(R-L+L)、輪溝小帯の附加条高文(R-S)を下へ上へ出文→2次時焼成文による縦位の横文、内面は横位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰褐色	
2	弥生土器 壺	- -	頸部3本の直立短条状文→頸部高文帯文→横位波状文、内面は縦位のナデ。外面スス、内面はゴレ付帯。	石英	良好	外：黄褐色 内：土色	十三古式
3	弥生土器 壺	- -	頸部高文帯のある厚い海胆文帯。内面は横位のナデ。	石英、灰石	普通	外：暗赤褐色 内：土色赤褐色	十三古式

## 54号住居跡(第48・49図、巻頭写真図版3)

位置 A区北部、L5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は6.11m、東西方向は4.76mを測る。平面は不整形長楕円形と不整形隅丸長方形の中間形状を呈し、いわゆる小判形に近い。主軸方位 N-18°-Wを指し、北北西に近い。壁 壁高は6~10cmを測り、傾斜する。床 ほぼ平坦な地床で、中央部がわずかに窪み、明瞭な硬化面は確認できない。ピット P1~4が新主柱穴、P6~9が旧主柱穴、P5が新出入口ピット、P10・11が旧出入口ピットと判断する。P1では、直径19cmの暗褐色土の柱痕とローム質土の根固めを明瞭に検出した。また、P6・9・10ではローム質土による閉塞あるいは貼床を確認している。P2~4は抜取と判断したが、P2底面では自然円礫を根石としていた。炉 床面中央北寄りに位置する。浅く掘り込まれ、被熱は著しい。平面は不整形で規模がやや大きく、同一地点で2時期の利用が考えられる。中央部には自然角礫の根石が設置されているが、火床面からわずかに浮いている。覆土 自然堆積状を呈するが、6層はローム粒・ブロックが多く、人為埋没の可能性がある。炉とP10の上では埋没の進行が遅く、特に4・5層については埋没過程においても炉の直上で被熱行為が継続したような状況が想定できる。遺物 北壁中央直下の床面において、1の略定形個体土器が横位で出土している。8・9弥生土器の底部が、西壁際から出土している。遺物の出土量は多く、中~大破片の割合が高い。十三古式後半

表19 54号住居跡出土遺物観察表

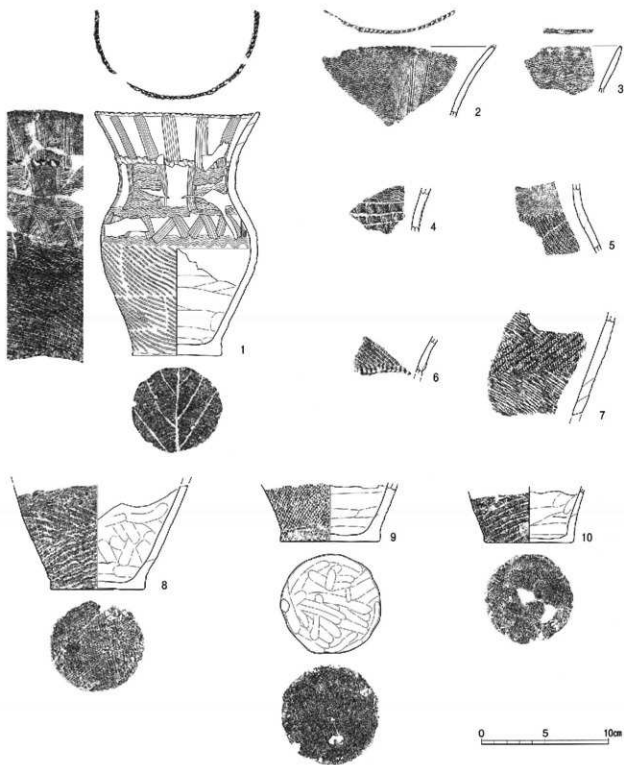
図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(127) 19.4 7.0	口唇部ヘラキザミ、頸部厚輪帯1条→口縁部5~6本面の縦位高文帯、頸部附加条1條横文(R-L+2L)と輪溝小帯の附加条高文(R-2)を下から上、反時計回りに出文→肩部→底部外に1条ずつ配列した波状文→肩部高文帯(反時計回りに)、頸部高文帯高文2・3条→6層位→頸部高文帯状文5条(下へ上)、底部高文帯、内面は横位・縦位のナデ。外面肩部より上に濃いスス付帯、頸部以下と底面周縁に薄いスス付帯、内面に根石金帯と肩部に帯状のゴレ付帯。	石英、内閉石、多量の白色粒	普通	灰青褐色	
2	弥生土器 壺	- -	口唇部ヘラキザミ、小穴状。口縁部高文帯高文3条→横位→横位波状文(下へ上)、口縁部高文帯に横位区間波状文1条、内面は横位のナデ。外面スス付帯。	石英	良好	外：黒褐色 内：土色赤褐色	十三古式
3	弥生土器 壺	- -	口唇部ヘラキザミ、口縁部5本面の横位波状文、内面は横位のナデ。外面スス付帯。	多量の石英・白色	普通	外：土色赤褐色 内：淡黄色	十三古式
4	弥生土器 壺	- -	頸部3条のヘラキザミ細比輪で横位区間→区間帯を覆った文で外側→口縁部5本面の横位波状文、内面は横位のナデ。	石英	普通	外：土色赤褐色 内：灰褐色	十三古式
5	弥生土器 壺	- -	頸部高文帯(横・斜位のナデ)、頸部高文帯(R-L)を横位高文。内面は横位のナデ、頸部高文帯が縦位のナデ、頸部下位が横位のナデ。	石英、骨針	良好	外：土色赤褐色	
6	弥生土器 壺	- -	口唇部附加条1條横文(R-L+2L)→口縁部下帯を同様の帯で押除く。内面は横位のナデ。外面スス、内面はゴレ付帯。	石英	普通	外：土色赤褐色 内：灰褐色	新川式系



第48図 54号住居跡

図版番号	層別	口径 器高 底径	特徴	出土	焼成	色調	備考
7	弥生土層 型	- -	胴部無筋縄文(R)と肩々段附加条1條縄文(附加条1條筋しノオを左に折った形状)を交互に下から上へ施文、内面は縦位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	
8	弥生土層 型	- 74	胴部無筋不明の肩加条縄文(L・S・L・Z：下→上)、底部を日直。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面コゲ付着。	多量の石英・長石、角閃石、金雲母、骨針、赤色粒	良好	にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土層 型	- 79	胴部附加条1條縄文(LR+2R：下→上)、底部ナデ無筋。内面は横位のナデ。内面全面にコゲレ付着。	多量の石英・長石	良好	にぶい黄褐色	二軒間式系
10	弥生土層 型	- 70	胴部附加条2條縄文(RL+2R、LR+2L：下→上)、底部を日直。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面コゲ付着。	石英、長石、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式

期の土器が主体だが、1は十王台式と二軒屋式の要素が混在する。5は頸部に無文帯を有し、胴部に単節R L縄文を施す。7は無節Rと前々段附加条1種の特殊な縄文原体を使用している。9は底部圧痕がなく、ナアによって調整されている。 所見 主柱穴配置は、P9を起点にして拡張・更新している。竪穴の拡張も十分想定できるが、その痕跡は見いだせなかった。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

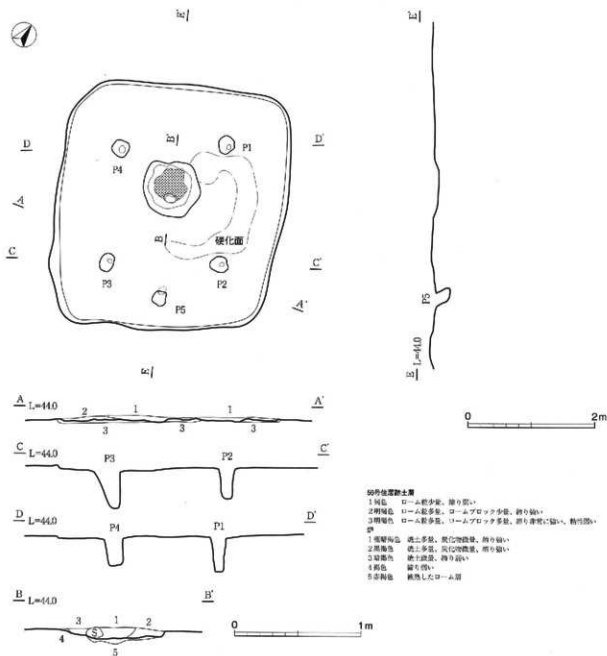


第49図 54号住居跡出土遺物



## 56号住居跡 (第50図)

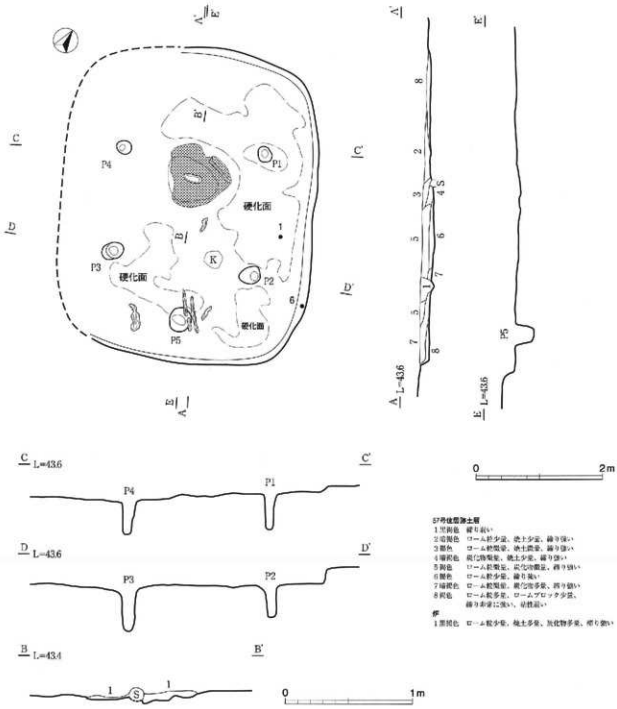
位置 A区北部、L5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は3.95m、東西方向は3.67mを測る。平面は不整隅丸長方形を呈する。主軸方位 N-33°-W 壁 壁高は4cmを測り、やや傾斜する。床 やや凹凸があり、炉の周りが馬蹄状に硬化する。薄い貼床を伴う。ピット P1~4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられる。P2では、直径10~15cmの軟弱な黒褐色土の柱痕を検出したが、ほかは抜取と判断された。P5は斜めに穿たれている。炉 床面中央やや北寄りに構築され、砂岩の自然円礫が炉石として設置されていた。覆土 自然堆積であろう。遺物 覆土中からごく少量の弥生土器が出土したものの、図示できる遺物はなかった。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第50図 56号住居跡

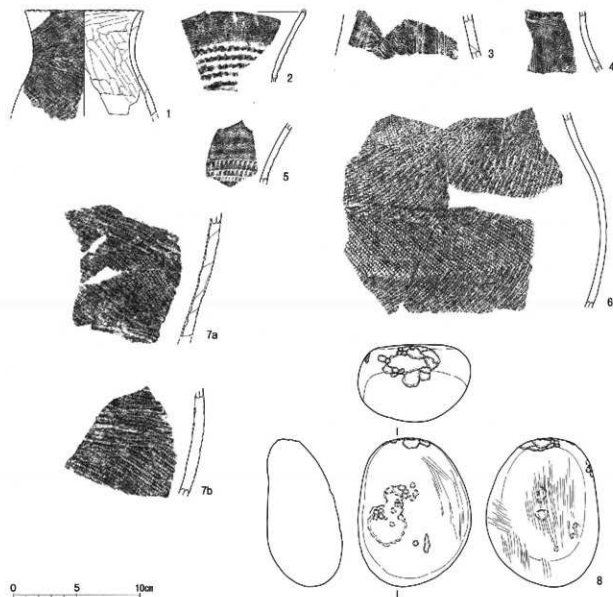
57号住居跡 (第51・52図)

位置 A区北部、L6グリッドに位置する。規模と平面形 西壁側は複乱によって壊されている。南北(主軸)方向は5.02mを測り、東西方向は約4.0mと推定する。平面は不整隅丸長方形であろう。主軸方位  $N-32^{\circ}-W$  壁 壁高は3~26cmを測り、傾斜する。床 やや凹凸があり、床面の東側から南側にかけて硬化する。ただし、支柱穴周囲と炉の南側はやや軟弱である。ピット P1~4を支柱穴、P5を出



第51図 57号住居跡

人口ピットと判断する。柱痕と根固めを明瞭に検出できたピットはない。 炉 床面中央やや北寄りに位置し、規模がやや大きい。被熱は顕著で、中央には砂岩の自然円礫が炉石として設置されている。ただし、石の被熱は弱い。 覆土 8層は人為埋没の可能性がある。7層は炭化材が含まれる層である。2～4層の堆積状況は、炉直上の埋没が最も遅かったことを示しており、埋没過程にあっても、炉が使用され続けていた可能性がある。 遺物 遺物の出土量はやや少なく、小～中破片の割合が高い。南東隅の覆土上層から6の胴部の大型破片が、東壁近くの竪穴中央部からは1の口縁部破片が出土している。十玉台式土器が主体である。5は頸部に帯状判突文が3条施文される。6・7は附加2条の附加条1種縄文が施文されている。竪穴南側と炉の南側および炉内から、床面から少し浮いた位置で炭化材を検出している。 所見 8層埋没後に上層が焼失したものと想定する。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



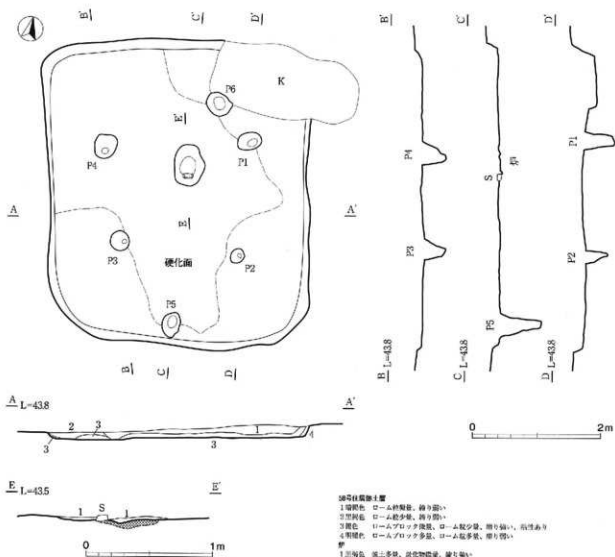
第52図 57号住居跡出土遺物

表 20 57号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(9.2) - -	口唇部ヘラネザミ、口縁→頸部附加条1種焼文(RL+L、 LR+R/下→上)→口縁部ヨコナデ、内面は頸→胴部斜位 のナデ→口縁部ヨコナデ、外面にスス付着。	石英、角閃石	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部小突起、頸部押痕深帯5条→口縁部5本条の横位 波状文(下→上)、頸部横位波状文、内面は口唇部付立横 位のナデ、他は斜位のナデ。	石英、炭石、多量 の金雲母	良好	外：にぶい黄色 内：暗灰黄色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部5本条の横位波状文2条→半位→横位波状文(下→ 上)、内面は斜位のナデ。	石英、角閃石、金 雲母、赤色粒	普通	外：にぶい黄色 内：灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部爪状のある押痕深帯→7本条の横位波状文→横位波 状文(下→上) 頸部深帯直下の横位波状文、内面は横位 のナデ、外面スス付着。	石英、角閃石、赤 色粒	普通	灰黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	頸部横位のヘラネザミ頭比前→横位波状文3条→口縁部5 本条の横位波状文、内面は横位のナデ。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	頸→頸部附加条1種焼文(RL+2L、LR+2L;D →上、反時計回り)、内面は頸部が横位のナデ、胴部が縦・ 斜位のナデ。	石英、角閃石、曹 鉛、赤色粒	良好	外：にぶい黄色 内：灰黄褐色	
7	弥生土器 壺	- - -	頸部附加条1種焼文(RL+2L;D→下)を横・斜位焼文、 内面は器底穴、剥落、外面焼熱による剥落、内面コゲ 付着。	多量の石英・炭石	普通	外：にぶい黄色 内：灰黄褐色	
8	石器 磨石類	- -	筒・長筒(筒一帯)、上凸(筒一帯)、自然磨の表面全体に磨耗面や溝面、表・裏面や上面に縦打痕、下面に 放射状溝、石材：石英安山石、長さ11.7cm・幅8.9cm・厚さ6.1cm・重さ877.0g。				

## 58号住居跡(第53・54図)

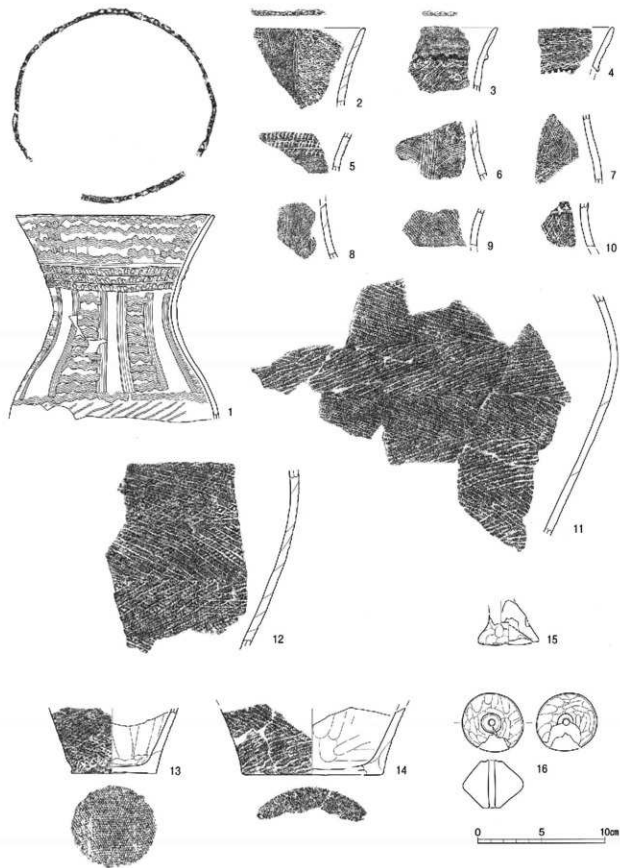
位置 A区中央部、L6グリッドにある。規模と平面形 4.60×3.90mのやや縦に長い長方形。主軸方向 N-2°-W 壁 壁高は10cmを測り、やや外傾する。床 P5から住居中央部、さらにP4周辺部にかけて硬化している。ピット 6箇所。P1~4は主柱穴。P5は炉の対面の壁際にあり、出入り口ピットと考えられる。P6は性格不明。炉 長径60cm、短径45cmの楕円形で深さ4cm。覆土 床上を全体に暗褐色土主体とした2枚の層が被覆している。遺物 住居中央部や東側の床面から弥生時代後期の煮の破片が出土している。遺物の出土量は多く、中~大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体で1は頸部隆帯に棒状工具による刺突が加えられ、表面は濃いススが付着している。5は頸部に帯状刺突文が施文される。6は櫛指文の特徴・胎土から二軒屈式系と考えられる。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第53図 58号住居跡

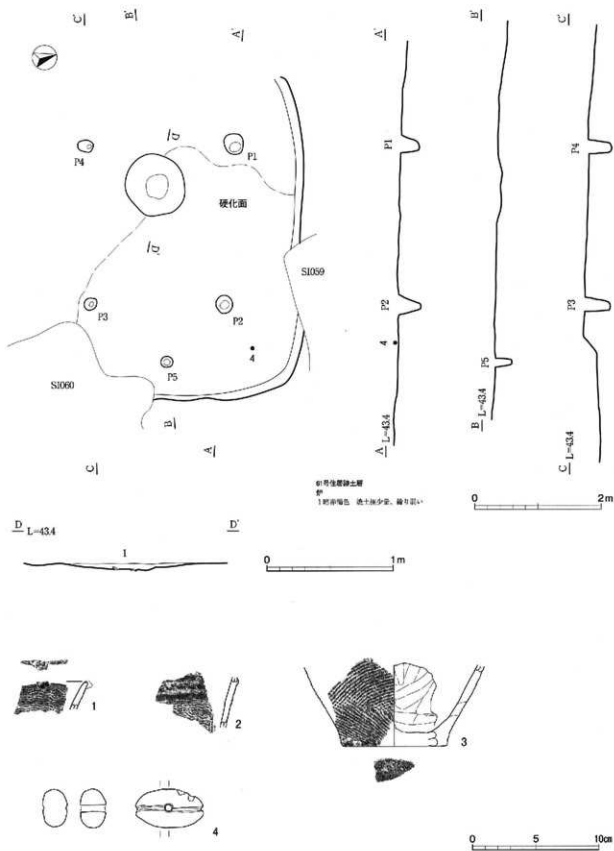
表21 58号住居跡出土遺物観察表

図録番号	類別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	15.2 — —	口唇部丸棒状工具によるキザミ。頸部同様の工具によるキザミ痕跡3条→口縁部4～5本向の縦位直線文(一部)→縦位波状文(下→上、反時計回り)。頸部斜線不規則加糸縦文(R・S)→頸部厚線位区画成状文→頸部縦位直線文2条×6単空→横位波状文。(下→上、右→左)。内面は頸部縦位、頸部斜位、口縁部横位のナザ(乾ね下から上へ調整)。外側頸部上位～口縁部、頸部下段～胴部上位に濃いスス。内面は斑点状のゴブレ付着。	石英、角閃石、骨針	良好	外:にぶい褐色 内:にぶい黄褐色	十五古式
2	弥生土器 甕	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本向の縦位直線文2条→横位波状文(下→上)、スリット内山形文(左→右)。内面は横位のナザ。	石英、角閃石、赤色粒	良好	にぶい黄褐色	十五古式
3	弥生土器 甕	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部無文(横位のナザ)。頸部斜位縦帯1条→頸部加糸1種縦文(L・R+R)。内面は横位のナザ。外側スス付着。	石英	普通	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色	



第54図 58号住居跡出土遺物





第55図 61号住居跡・出土遺物



表 22 61号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	--	口唇部編文キザミを施した突起筋付(ヘラキザミー)に、 腹部3本筋の横位波状文(下→上)、内面は横・斜位のナデ、 外面スス付着。	石英	普通	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十三白式
2	弥生土器 壺	--	頸部薄い平切縁を3条→口縁部3本筋の横位波状文、頸 部筋位直線文→横位波状文(上→下)、内面は横・斜位の ナデ。	石英	普通	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十三白式
3	弥生土器 壺	-- (3.2)	唇部附加条1横線文(R・L+2L、L・R+2R;上→下)、 底部砂痕、内面は斜位のナデ。外面まばらなスス、内面 濃いヨゴレ付着。	多量の石英・長石	良好	外:明褐色 内:褐色	
4	十王台 土器	--	長3.3、幅3.0、厚2.0、孔径(0.55)、重(31.77)g。表裏 面緑なナデ刷漆。片割穿孔。	多量の石英・角閃 石、赤色鉄	普通	淡灰色	

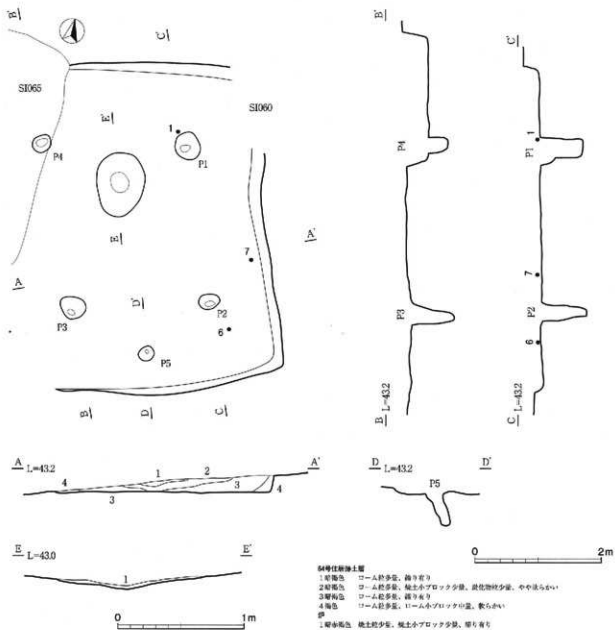
## 64号住居跡(第56・57図)

位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 5.03×(3.50)mで、60・65号住居によって床面の一部が壊されている。主軸方向 N-17°-W 壁 壁高は約23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床住居全体に弱く硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は深さ50cmで斜に約68°の角度で掘りこまれている。出入り口ピットと考えられる。炉 長径94cm、短径73cmの楕円形で深さ5cm。覆土 ローム粒を多量に含んだ暗褐色土を主体にした覆土。遺物 P1の周辺から1、P2の周辺からは6・7の弥生土器が覆土3層中より出土している。遺物の出土量はやや多く、中〜大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とする。4・5は十王台式でなく、4は頸部に無文帯を有し、単筋RLとLRの原体により羽状縄文が構成されている。5は肩部に竹管文が施文される。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表 23 64号住居跡出土遺物観察表

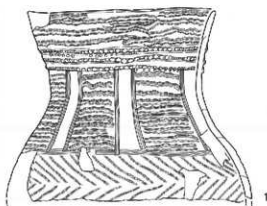
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(149)	頸部丸帯状工具によるキザミ降着3条→口縁部3本筋の 横位波状文(下→上、反時計回り)、胴部輪不明の附加 条縄文(R・Z、L・S;上→下、反時計回り)→頸 部昇状位直線波状文・頸部底位直線文2条×6単位→横 位波状文(上→下、右→左)、内面は横位波状のナデ、 胴部は斜位のナデ。外面全体まばらなスス付着。唇部付 着は濃いスス付着。	石英、長石、多量 の赤鉄	良好	にぶい黄褐色	十三白式
2	弥生土器 壺	--	口唇部編文キザミ、口縁部無文(横位のナデ)、頸部砂痕 隆帯。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	普通	褐灰色	十三白式
3	弥生土器 壺	--	頸部砂痕隆帯→口縁部4本筋の山形文(反時計回り)、内 面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、長石、金雲 母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	--	L形→胴部は無文(横・斜位のナデ、砂痕)、唇部以下単 筋縄文(R・L、L・Rを横位施文;上→下)、内面は頸部斜 位のナデ、胴部は横位のナデ。	多量の石英・長石、 骨針	普通	にぶい黄褐色	福方
5	弥生土器 壺	--	胴部輪不明の附加条縄文(R・S)。唇部は唇縁隆帯 で底位部に竹管状工具による斬文。内面は横・斜位の ナデ。	多量の石英・白色 鉄、金雲母	不良	黄灰色	
6	弥生土器 壺	(100)	唇部附加条1横線文(R・L+2L)、輪縁不明の附加条縄 文(R・S)を下→上へ施文。内面は横・斜位のナデ(器 面元れ)、底部砂痕、唇か研痕。外面まばらなスス付着。	石英、長石、角閃 石、金雲母、骨針	良好	外:赤褐色 内:にぶい褐色	
7	弥生土器 壺	(70)	胴部輪不明の附加条縄文(L・Z)。底部有目環、内 面は横・斜位のナデ。外面まばらなスス付着。	石英、長石、骨針	普通	外:灰褐色 内:にぶい褐色	十三白式

第IV章 A区の遺構と遺物

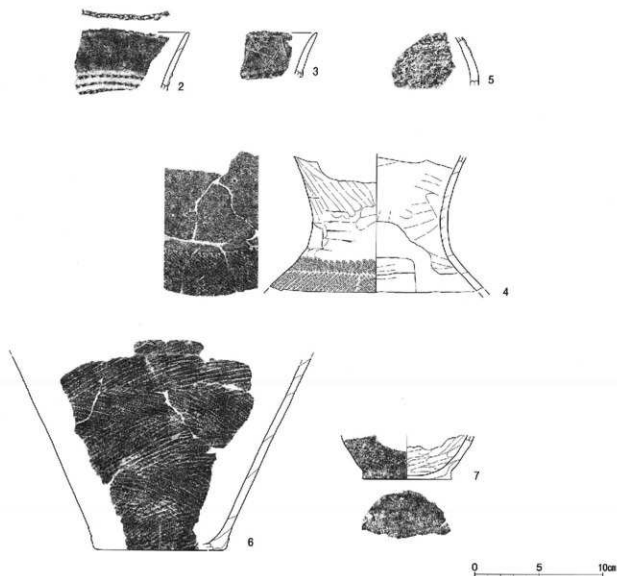


64号住居跡土層

- 1 粘板瓦 コーム粒多量、焼りあり
- 2 粘板瓦 コーム粒多量、焼土小ブロック少量、炭化物粒少量、やや湿らぬ
- 3 焼板瓦 コーム粒多量、焼りあり
- 4 褐色 コーム粒多量、11cm小ブロックの遺、散らぬ
- 5 砂
- 6 粘板瓦 焼土粒少量、焼土小ブロック少量、焼りあり



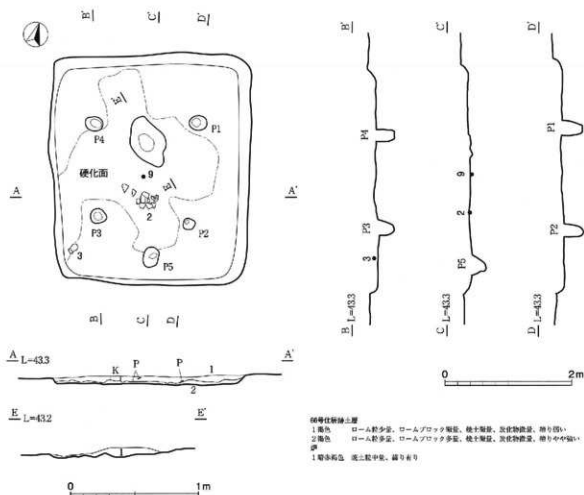
第56図 64号住居跡・出土遺物①



第57図 64号住居跡出土遺物②

## 66号住居跡 (第58・59図)

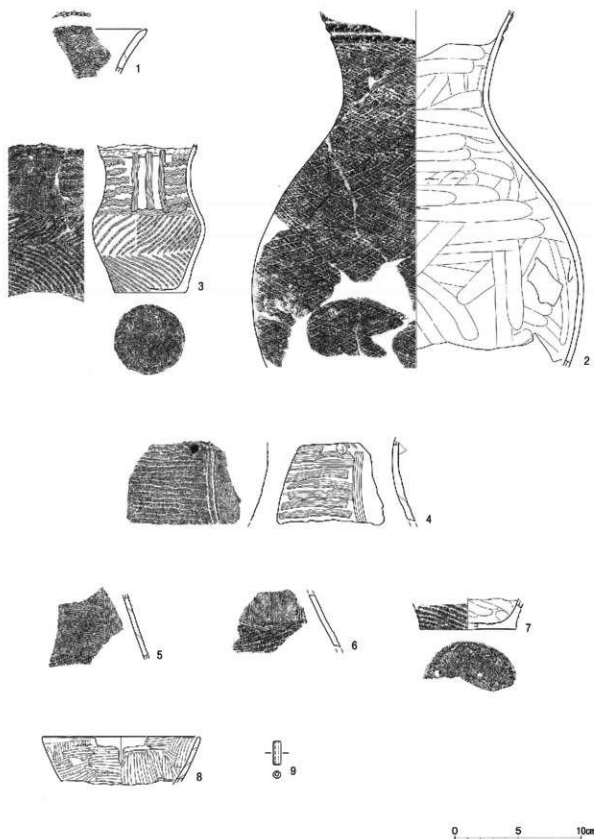
位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 290×340mの縦長長方形。主軸方向 N-12°-W 壁 壁高は約13cm、やや外傾して立ち上がる。床 住居の中央部を中心に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径82cm、短径51cmの楕円形で深さ7cm。覆土 褐色土を主体にした覆土で、床面を直接被覆する下層堆積にはロームブロックが多量に含まれる。遺物 炉の南側床面から9の緑色凝灰岩製の管玉が、住居南西隅の床面から3の小型壺が出土している。遺物の出土量は多く、大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とする。4は円錐状の貼り付け文を施す。8は土師器の埴でミガキが施されている。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第58図 66号住居跡

表24 66号住居跡出土遺物観察表

図番番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 皿	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本面の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰青褐色	十王台式
2	弥生土器 甕	- - -	底部爪直のある押捺帯3条→胴部附加条2種縦文(L+1、R+α:下→上)。内面は横・斜位のナデ→横位のナデ。外周まばらな黒澱。	石英、粘土、角閃石、チャート、金雲母	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式
3	弥生土器 甕	- - 5.6	胴部輪縄不明の附加条縦文(R・S、L・Z:下→上)。口唇部深い押捺帯。胴部4本面の横位区画波状文→底部横位縦文3条×4単位→横位波状文(下→上、時計回り)。底部多目直。内面は胴部横・斜位のナデ。胴部はあばた状の前透きしい。外周全体にス付着。胴→唇部は赤化著しい。	石英	普通	灰青褐色	十王台式
4	弥生土器 甕	- - -	胴部輪縄不明の附加条縦文(R・Z)→4本条の横位縦文→横位波状文(下→上)→円錐形の突起。内面は横・斜位のナデ。	石英、多量の角閃石、骨針、赤色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式
5	弥生土器 皿	- - -	胴部輪縄不明の附加条縦文(R・S)→胴部5本条の縦位直刺文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式
6	弥生土器 甕	- - -	胴部輪縄不明の附加条縦文(R・S)→胴部5本条の縦位直刺文3条→胴部帯横位区画波状文(反時計回り)→胴部横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、骨針	良好	外：にぶ黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式



第59圖 66号住居跡出土遺物

第IV章 A区の遺構と遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
7	弥生土器 壺	- - (7.5)	頸部切取糸文(上+Rカ)。底部有目珠・植物種子 片痕カ。内面斜位のナデ。外面まばらにスス、内面金口 にコケ付着。底面には粘土付着。	石英、粘土、角閃 石	普通	外：灰黄褐色 内：黒褐色	十玉台式
8	十玉器 埋	(12.5)	口縁部底位のミガキ一帯位のミガキ。口唇部付着機位の石灰、赤褐色 ナデ。内面は機位のハケメ一線・斜位のミガキ。	滑石	普通	灰黄褐色	
9	石製品 灰土		長1.85、幅0.6、厚2.0、孔径0.3、重11g。片割製ナ。丁寧な滑石、緑色或灰岩質。				

67号住居跡(第60回)

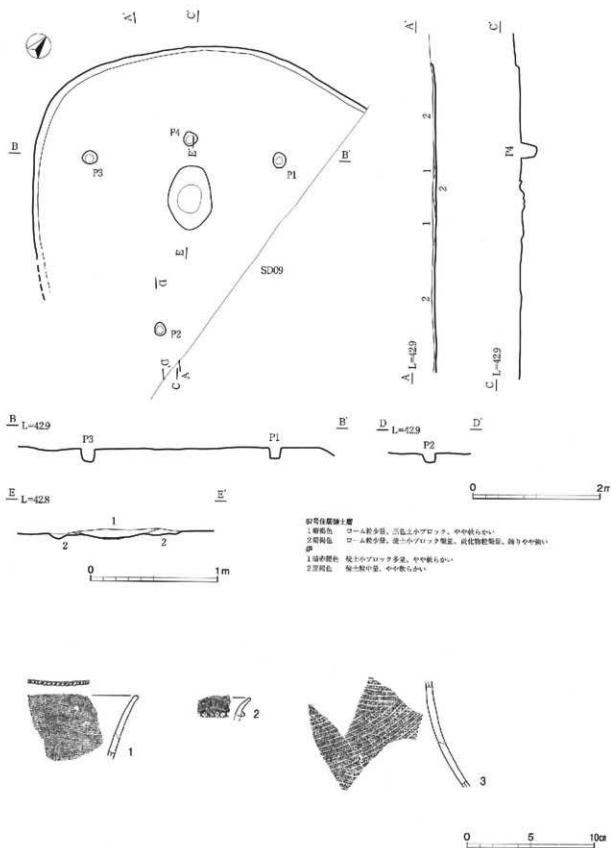
位置 A区中央部、M8グリッドにある。規模と平面形 4.22×3.98m 主軸方向 N-2°-E 壁  
壁高は約4cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に弱く硬化している。ピット 4箇所。P1は深さ  
13cm、P2は深さ12cm、P3は深さ16cm、P4は深さ23cm。炉 長径96cm、短径66cmの長楕円形で深  
さ6cm。覆土 暗褐色土を主体としている。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、大半が小〜中破片  
で出土している。弥生時代後期の壺小片が出土している。すべて十玉台式期の所産と考えられるが、詳細な  
時期は不明である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表25 67号住居跡出土遺物観察表

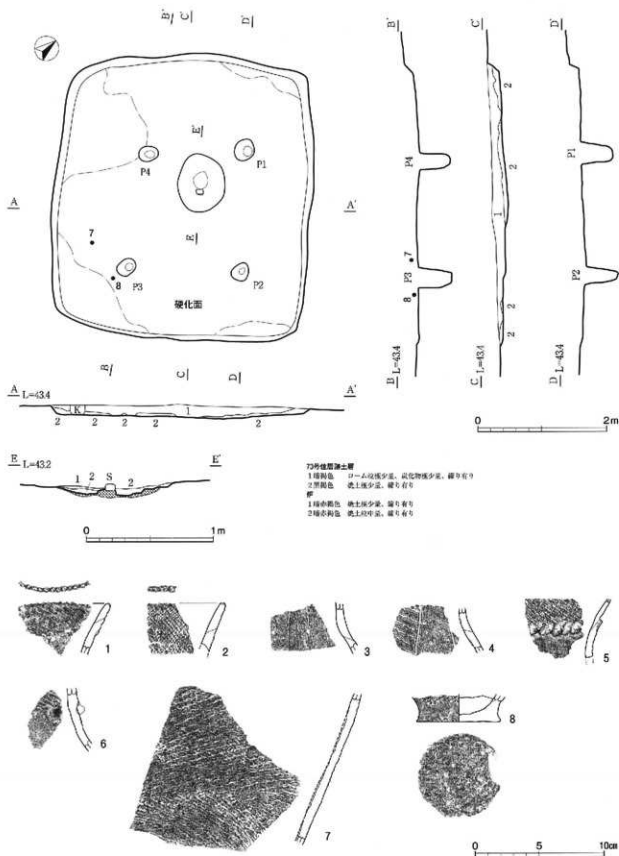
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘウキゼミ。口縁部6等分の機位底状文(斜割製 石英、粘土、 角閃石)。内面は機位のナデ。	石英、粘土	普通	にぶい黄褐色	十玉台式
2	弥生土器 壺	- - -	口縁部単文(機位のナデ)。頸部切取文形によるキザミ痕 着。内面は機位のナデ。	石英、多量の赤土、普通 滑・白土粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：黒褐色	
3	弥生土器 壺	- - -	頸〜唇部切取糸文(上+R)。絶削不明の玉耳赤土 文(L・Z)を上→下へ換文。内面は機・斜位のナデ。	石英、角閃石、赤 土	普通	灰黄褐色	十玉台式

73号住居跡(第61回)

位置 A区中央部、M6・M7グリッドにある。規模と平面形 3.9×4.35mの僅かに縦長の方形。主  
主軸方向 N-48°-W 壁 壁高は約17cm。床 全体に硬化しているが、住居四隅とP4の西側の硬化が  
弱い。ピット 4箇所。P1からP4は主柱穴。炉 長径92cm、短径74cmの楕円形で深さ7cm。灰  
石を持つ。覆土 暗褐色土主体の覆土である。遺物 P3付近の覆土から、8の壺底部片、7の胴部片  
が出土している。遺物の出土量は少なく、小〜中破片の割合が高い。十玉台式主体だが、二軒壓式系(5・6)  
やその他の系統の土器(2)も含んでいる。所見 出土遺物から弥生時代後期の十玉台式期の住居跡と考  
えられる。



第60図 67号住居跡・出土遺物



第 61 図 73号住居跡・出土遺物



表 26 73号住居跡出土遺物観察表

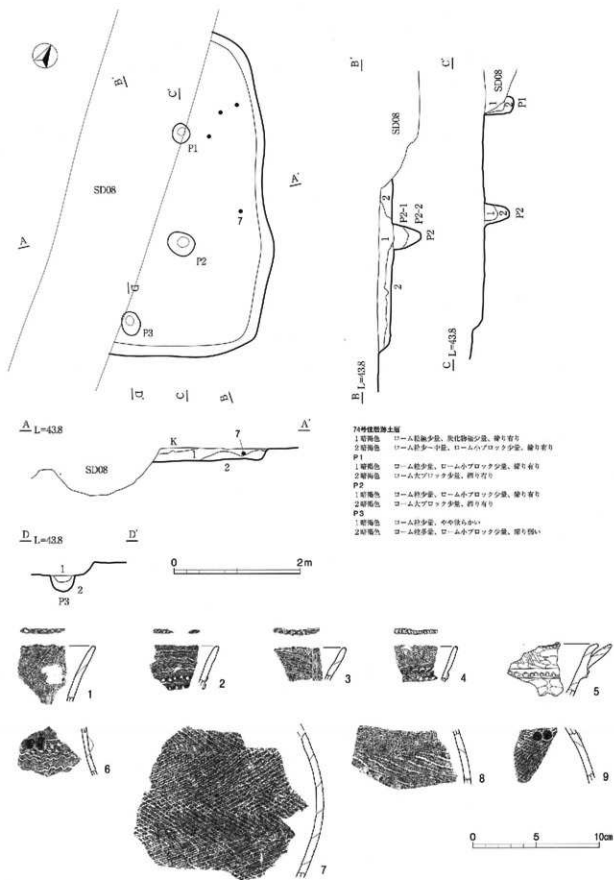
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	-	口縁部端先キザミ、口縁部別居先1種焼文(R-L-Z)。口縁上縁に帯状工具によるキザミ、内面は傾位のナデ、外周スス付着。	多量の石英・炭石	普通	にぶい褐色	二脚式
2	弥生土器 甕	-	口縁部ヘラキザミ、口縁部別居先焼文(R-L)、一部ナデ滑し、内面は縦・斜位のナデ。	石英、炭石、角閃石、赤色粒	良好	明褐色	
3	弥生土器 甕	5.6	胴部7本歯の横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。	石英、炭石、角閃石	普通	外：灰青色 内：黄褐色	十五台式
4	弥生土器 甕	-	胴部4本歯の横位波状文→横位波状文。内面は縦・斜位のナデ、剥落。	石英、角閃石、多量の白色粒	不良	外：黄褐色 内：黄褐色	十五台式
5	弥生土器 甕	-	口縁部無文(横位のナデ)、縦線圧痕のある帯付→通線不調の帯加糸織文(L-Z)。内面は口縁部傾位のナデ、胴部は縦・斜位のナデ。	石英	普通	黄褐色	
6	弥生土器 甕	-	口縁部通線不明の帯加糸織文(L-Z)→口縁部下縁に點付文(窪みに押し込む)、胴部無文(横・斜位のナデ)、内面は横位のナデ。	多量の石英・炭石	良好	外：にお美褐色 内：褐色	十五台式
7	弥生土器 甕	-	胴部通線不明の帯加糸織文(R-Z、L-S:ア→ド)。内面は縦・斜位のナデ、大半が剥落。	多量の石英・炭石、角閃石、赤色粒	良好	褐色	
8	弥生土器 甕	6.7	胴部下縁横位のナデ→胴部通線不明の帯加糸織文(R-S)。底部キリ痕。内面は剥落、底面にヘラ状工具の剥落痕。	石英、角閃石、赤色粒	良好	褐色	十三台式

## 74号住居跡(第62図)

位置 A区中央部、M6グリッドにある。規模と平面形 5.20×(2.24)mで、8号溝に住居の西側半分を壊されている。主軸方向 N-32°-W 壁 壁高は約22cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや軟質な床面である。ピット 3箇所。P1は深さ48cm、P2は深さ19cm、主柱穴と考えられる。P3は深さ25cm、出入り口ピットと考えられる。炉 覆土 炭化物を極少量含んだ暗褐色土が主体である。遺物 遺物の出土量はやや少なく、中～大破片の割合が高い。十五台式前半期の土器が主体であり、5は片口壺である。覆土1層から7の胴部片が出土している。所見 出土遺物から弥生時代後期の十五台式期の住居跡と考えられる。

表 27 74号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	-	口縁部ヘラキザミ、口縁部スリット内に3本歯の山形文(反時計回り)、縦位波状文→横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、多量の角閃石、赤色粒	普通	浅黄褐色	
2	弥生土器 甕	-	口縁部九種状工具によるキザミ、口縁部3本歯の横位波状文、内面は縦・斜位のナデ、外周スス付着。	石英、炭石	普通	外：灰青色 内：にぶい黄褐色	十五台式
3	弥生土器 甕	-	口縁部九種状工具によるキザミ、口縁部5本歯の縦位波状文→横位波状文(上→下)、内口は横位のナデ。	石英、角閃石、炭石	良好	浅黄褐色	十三台式
4	弥生土器 甕	-	口縁部ヘラキザミ。胴部帯付→帯加糸織文を帯付→口縁・胴部帯付上に附加糸1種焼文(R+2R)。内面は横位のナデ、外周スス付着。	石英	普通	外：灰青色 内：黄褐色	
5	弥生土器 片口壺	-	口縁部、胴部帯付に九種状工具によるキザミ。内面は口縁部横位のナデ→斜位のミダキ。胴部横位のナデ、内面は縦・横位のナデ。	石英、角閃石、金	良好	外：灰青色 内：にぶい黄褐色	十五台式



第62図 74号住居跡・出土遺物

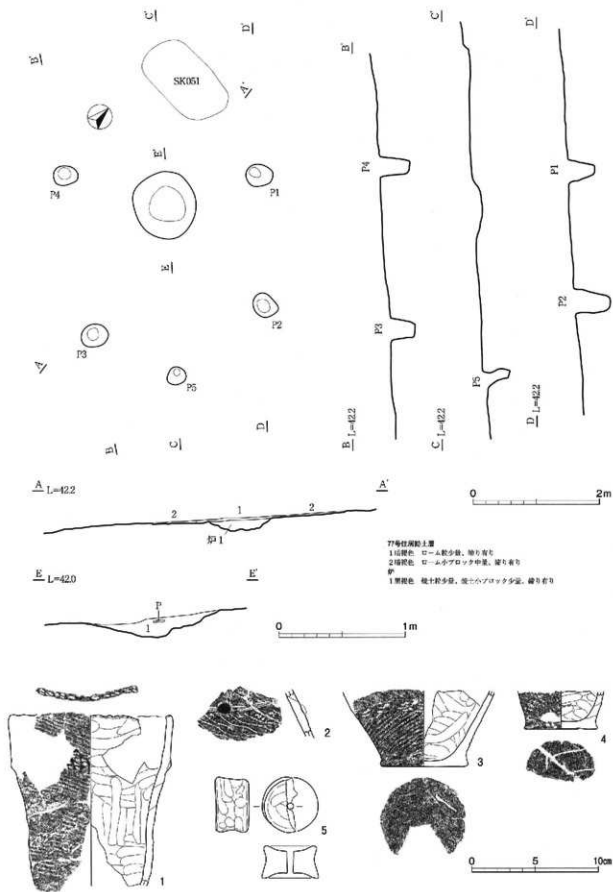
図版番号	種別	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
6	赤土土器 壺	-	器部管内底の残る非製作留付工具による横位沈衝→同様の工具による横位沈衝文、丸線状工具による刻突文→2個・対の點付文。内面は斜位のナゲ。	石灰	普通	灰青褐色	
7	赤土土器 壺	-	器部輪縁不明の附加条線文(R・Z、L・S:ド→七)、内面は横・斜位のナゲ。胎土結核部を横位のナゲ。	石灰、長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外: 黒褐色 内: にぶい黄褐色	
8	赤土土器 壺	-	器部輪縁不明の附加条線文(L・Z)→器部管5本の横位区画条線文→器部底位置線文→横位沈衝文。内面は横・斜位のナゲ。外面スス付着。	石灰、長石、多量骨針	普通	外: 灰青褐色 内: にぶい黄褐色	十三台式
9	赤土土器 壺	-	器部管中央1條線文(LR+2R)、輪縁不明の附加条線文(L・Z)→器部管3本以上の横位条線文→2個・対のボタン状點付文。内面は横位のナゲ。	石灰、角閃石	普通	外: 灰青褐色 内: にぶい黄褐色	

## 77号住居跡(第63図)

位置 A区中央部、O7～O8グリッドにある。規模と平面形 - 主軸方向 N-48°-W 壁 - 床 全体にやや締りのある床面として確認された。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は入り口ピットと考えられる。炉 長径106cm、短径98cmの楕円形で深さ15cm。覆土 極薄く暗褐色土が残存していた。遺物 炉の覆土から壺の底部や胴部片、紡錘車等が出土している。遺物の出土量はやや少なく、中～大破片の割合が高い。1は十干台式の深鉢形土器である。所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表28 77号住居跡出土遺物観察表

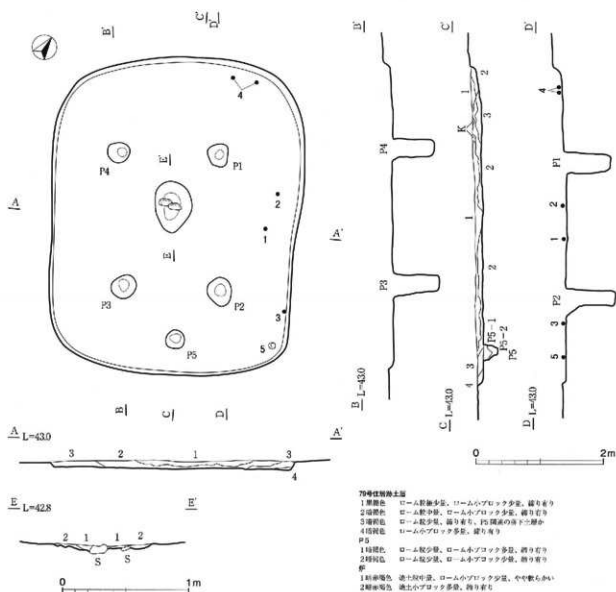
図版番号	種別	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	赤土土器 深鉢	-	口縁→器部輪縁不明の附加条線文(L・S、L・Z)で一部羽状構成。口唇部、器部に同様の胎土による横文ナゲと、内面は口縁・器部輪縁のナゲ。器部底・斜位のナゲ。外面は口縁部に赤いスス、以下に薄いスス付着。内面は口縁→器部にコグレ付着。	石灰	普通	外: にぶい黄褐色 内: 灰青褐色	十三台式
2	赤土土器 壺	-	器部管中央2條線文(L・L)→器部管3本の横位区画条線文→器部底位置線文→ヘラ型斜位ナゲ(左上がり→右上がり)→器部管ボタン状點付文。内面は横位のナゲ。外面スス付着。	石灰、長石、骨針、赤色粒	普通	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	十三台式
3	赤土土器 壺	67	器部輪縁不明の附加条線文(R・S、R・Z:ド→上・中・下回り地文)。器部管5本。内面は横・斜位のナゲ。斜位のヘラナゲ。外面まばらにスス付着。底面は横一付着。内面まばらにコグレ付着。	石灰、角閃石、骨針	普通	外: にぶい黄褐色 内: 灰青褐色	十三台式
4	赤土土器 壺	(56)	器部輪縁不明の附加条線文(L・Z)→器部管5本の横位のナゲ。底面不平整。内面は斜位のナゲ。	石灰	普通	外: 灰青褐色 内: にぶい黄褐色	
5	土器品 紡錘車		径(4.4)・高27.9(器高0.5)・重[27.9]g。表裏面ナゲ調整。背面は横・斜位のナゲ調整。片取穿孔。	石灰、長石、骨針	良好	にぶい黄褐色	



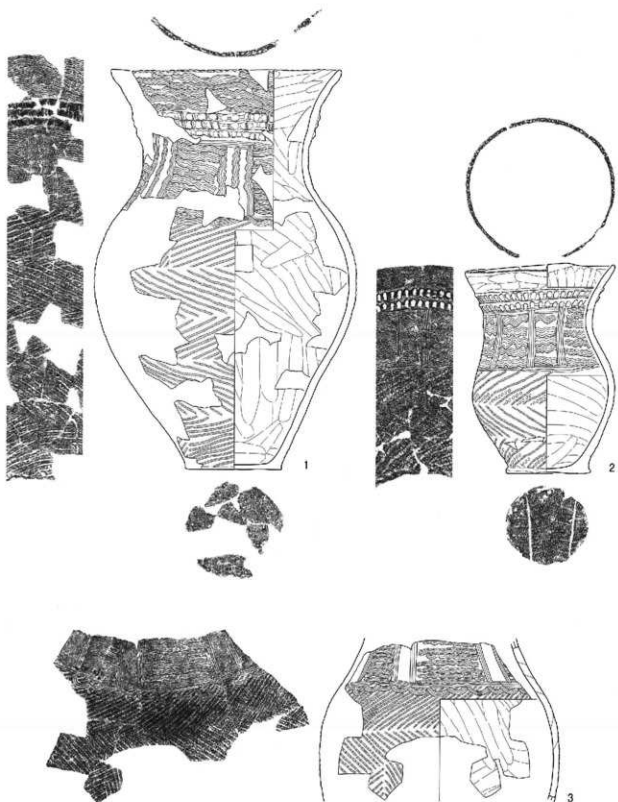
第63図 77号住居跡・出土遺物

## 79号住居跡 (第64~66図)

位置 A区中央部、M8グリッドにある。規模と平面形 5.07×3.90mの縦に長い長方形。主軸方向 N-38°-W 壁 壁高は約11cmである。床 全体にやや弱いが硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径82cm、短径59cmの楕円形で深さ5cm。中央やや南寄りに自然石を2つ設置して炉石としている。覆土 上層が黒褐色土層、下層が暗褐色土の自然堆積層。遺物 1・2は東壁際、3・5は南東隅の壁際、4は北東隅の壁際で床面から僅かに浮いた状態で出土している。また、1は小~中破片でまとまり、2は形状をとどめ、横倒しの状態で出土している。遺物の出土量は多く、中~大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とし、明確な二軒屋式土器は出土していない。1は頸明界の区画文に直線と波状文、3は直線文と上開きの連弧文が施文される。所見 出土遺物から、弥生時代後期十王台式期の住居跡と考えられる。

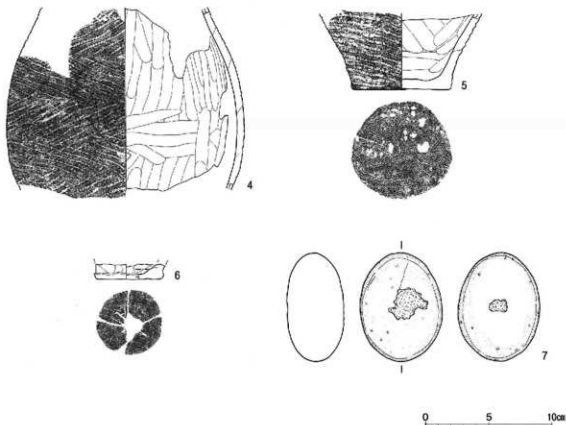


第64図 79号住居跡



0 5 10cm

第 65 図 79号住居跡出土遺物①



第66図 79号住居跡出土遺物②

表29 79号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器名	口徑 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 鉢	(180) 318 (75)	口唇部無彫刻文(R)を四転縁文 $\sigma$ 。腰部爪痕のある押捺帯3条 $\rightarrow$ 口縁部4本歯の横位波状文。胴部縁線不明の附加条縁文(r・S・L・Z:上 $\rightarrow$ 下)。一口唇部・頸部半横位直縁文 $\rightarrow$ 上向き垂風文 $\rightarrow$ 附加横位波状文3条 $\times$ 筋部下半横位のナゲ。底面付着側のナゲ。他は斜位のナゲ。外面胴部中位から上はスス、以下はスス酸化消失。内面はススに対応するヨゴレが付着。一部帯状をなす。	石英、骨針	良好	灰青褐色	十三台式
2	弥生土器 壺	115 168 65	口唇部ヘラキザミ。口頸部尖棒状工具によるキザミ筋部2条 $\rightarrow$ 口縁部横文(横位のナゲ)。胴部下半横位の附加条縁文(頸部1横文(L・R+2R)と軸通不明の附加条縁文(L・Z)を下から上へ施文 $\rightarrow$ 頸部4本歯の横位直縁文 $\rightarrow$ 胴部2条一線位の縦位直縁文 $\rightarrow$ 横位波状文(下 $\rightarrow$ 上、右 $\rightarrow$ 左)。底面本葉巻。内面は口縁部縦位のナゲ。口唇部有冠・筋 $\rightarrow$ 胴部は横・斜位のナゲ。胴部下半は深いスス。まばらな赤色化。口縁部・筋 $\rightarrow$ 胴部上半は部分的に濃いススで筋は深いスス付着。内面は胴部下半 $\rightarrow$ 胴部に濃い帯状のヨゴレ。以上は薄いヨゴレ付着。	石英	良好	にぶい褐色	十三台式
3	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条1横縁文(R・L+2L・L・R+2Rを横・縦位施文:下 $\rightarrow$ 上) $\rightarrow$ 胴部4本歯の横位直縁文 $\rightarrow$ 上向き垂風文(反時計回)。胴部縦位直縁文2条 $\times$ 3単位以上 $\rightarrow$ 横位波状文(下 $\rightarrow$ 上)。内面は縦・斜位のナゲ。外面胴 $\rightarrow$ 肩部に濃いスス。他は深いススが全面に付着。内面は深いヨゴレがまばらに付着。	石英、角閃石、金雲母、赤色粒	良好	灰青褐色	十三台式
4	弥生土器 壺	- - -	胴 $\rightarrow$ 肩部縁線不明の附加条縁文(R・S・L・Z:上 $\rightarrow$ 下)。内面は胴部上・下位に縦位のナゲ。胴部中に横位のナゲ。外面胴 $\rightarrow$ 胴部上位に濃いスス。他は金雲母深いスス付着。内面は胴部下部に帯状の濃いヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒、赤色粒	普通	外: にぶい黄褐色 内: にぶい褐色	十三台式

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調		備考	
						外	内		
5	弥生土器 壺	- 77	頸部輪郭不明の附加糸織文(L・Z:時計回り)。底面布目状。外面は部分的にスス付着、赤色化。内面は残面付着が濃いゴブレ、以上が濃いヨゴレ付着。	石英、長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外: 濃い黄褐色 内: 灰青褐色	十玉台式		
6	弥生土器 壺	- 52	胴部下段位のナデ。胴部本管部一層部ナデ消し。内面は横位のナデ。脱模面を再加工。底部脱模後に穿孔あり。	石英	良好	外: 濃い黄褐色 内: 灰青褐色			
7	土師 器石	-	自然産を素材とし、裏面中央に小さな観打痕。裏面に骨刺痕。石材: 石英安山岩。長さ85cm・幅65cm・厚さ43cm・重さ3570g。						

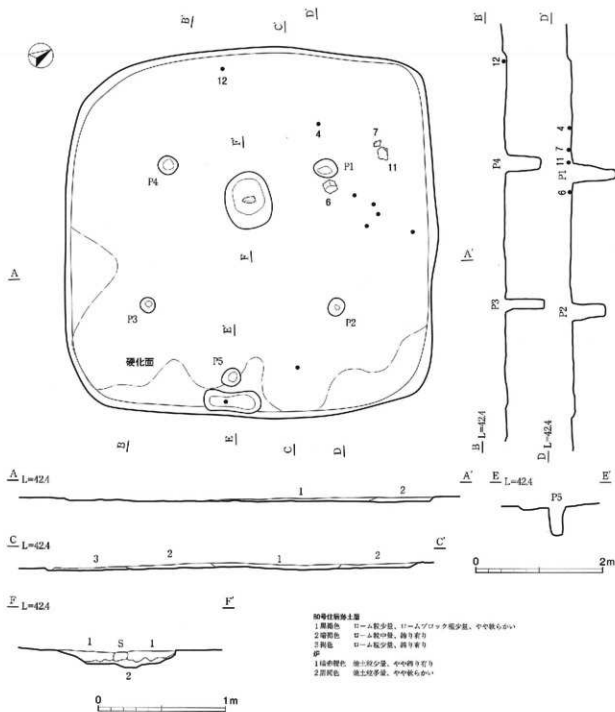
80号住居跡(第67・68図)

位置 A区南部、M8・N8・M9・N9グリッドにある。規模と平面形 5.88×5.82mの方形。主軸方向 N-62°-W 壁 壁高は約8cm。床 全体に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径88cm、短径72cmの楕円形で深さ13cm。中央部に炉石が設置されている。覆土 中央部には黒褐色土、周辺部に行くにたがいで褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は多く、小〜中破片の割合が高い。4・6・7・11はP1周辺の床面上から出土している。十玉台式前半期の土器を主体とするが、4・13・15など二軒屋式系の比率がやや高い。所見 出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

表30 80号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部横位のナデ→ヘラキザミ。頸部深い海胆産器3条→口縁部3本並の横位産器文、内面は横位のナデ。外面スス付着、赤色化。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	灰青褐色	十玉台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口縁部3本並の横位産器文(反時計回り)。内面は横・斜位のナデ。	石英、多量の骨針	良好	にぶい藍色	十玉台式
3	弥生土器 壺	-	口唇部丸縁状。具によるキザミ。口縁部糸文(横・斜位のナデ)。頸部利懸産器。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針	普通	にぶい黄褐色	十玉台式
4	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口唇部下側に先鋒状工具によるキザミ。附加糸1條織文(LR+2R)。頸部3本並以上の横位産器文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石・白色粒、角閃石	不良	灰青褐色	二軒屋式
5	弥生土器 壺	-	口唇部横位のナデ、キザミ等。口縁部輪郭不明の附加糸織文(R・S)→口縁部下側に横位産器文→柄杓状の胎付文。内面は横位のナデ。外面スス付着、赤色化。	石英	普通	外: にぶい藍色 内: 灰青褐色	P4
6	弥生土器 壺	-	頸部附加糸2條織文(RL+2R・L+r)→頸部6本並の横位産器文→頸部縦位産器文2条×横位4本→附帯産器文(上→下、一層下→上、右→左)。内面は頸部下位に斜位のナデ。頸部内側に縦位のナデ。外面まばらにスス付着、内面頸部下位にコゲ付着。	多量の石英・角閃石	良好	灰青褐色	十玉台式
7	弥生土器 壺	-	頸部輪郭不明の附加糸織文(R・Z・L・S:下→上)→頸部3本並の横位産器文→頸部縦位産器文→頸部縦位産器文。内面は丁寧な縦・斜位のナデ。外面スス付着、赤色化。	石英、金葱砂、多量の白色粒	良好	外: 灰青褐色 内: にぶい黄褐色	十玉台式
8	弥生土器 壺	-	胴部へつ張り横位産器文→紐文等を1層積み、つ張り骨刺付文(ふしがり→右上がり、右上がり→左上がり)を1層。内面は横位のナデ。唇部産器。	石英、長石、骨針、赤色粒	良好	外: にぶい藍色 内: にぶい黄褐色	十玉台式
9	弥生土器 壺	-	頸部3本並の横位産器文→頸部縦位産器文2条→縦位産器文、横位産器文。内面は縦位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	良好	外: 灰青褐色 内: にぶい黄褐色	P2 十玉台式

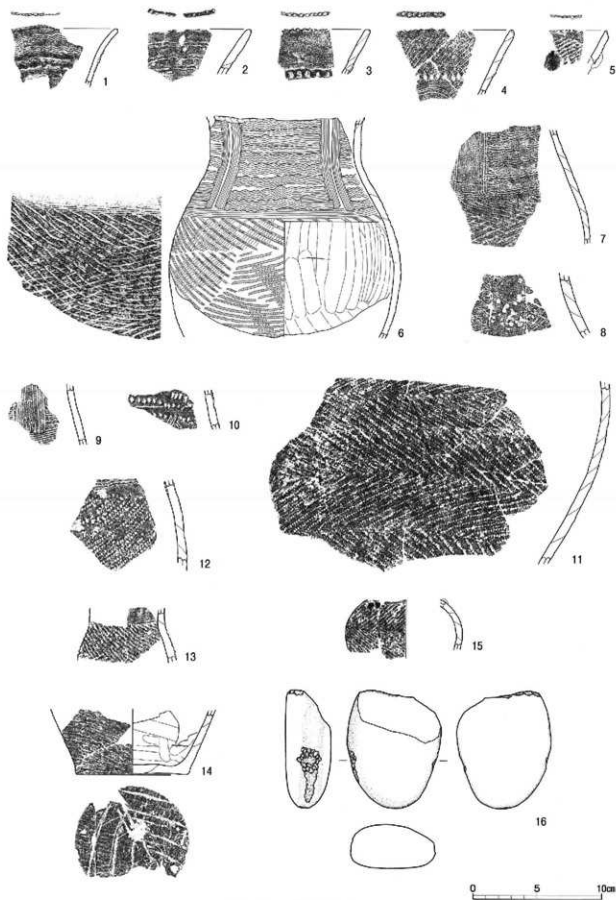




第 67 図 80号住居跡

図版番号	種別	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 盃	- - -	頸部厚い隆帯で隆帯上・下に竹筴状工具による刻痕文。頸部4本歯の縦位羽状文(左上がり→右上がり)内面は新位のナデ。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	十王台式
11	弥生土器 甕	- - -	胴部輪襷不明の肩加高縄文(R・S・L・Z:上→下)。内面は縦・斜位のナデ。外面胴部下位にスス、内面は胴部下位に羽状のコグレ付着。	石英、炭石、角閃石、金雲母、雲母、赤色粒	不良	黄褐色	十王台式

第IV章 A区の遺構と遺物

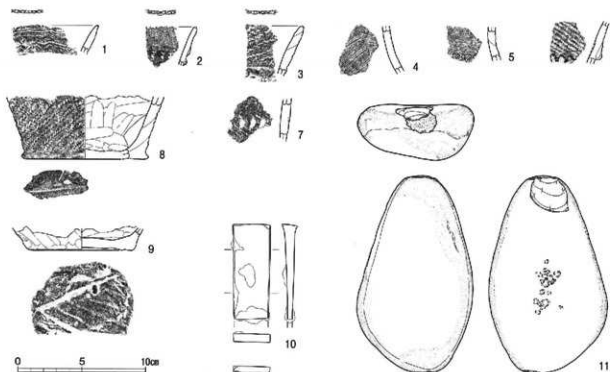


第 68 図 80号住居跡出土遺物

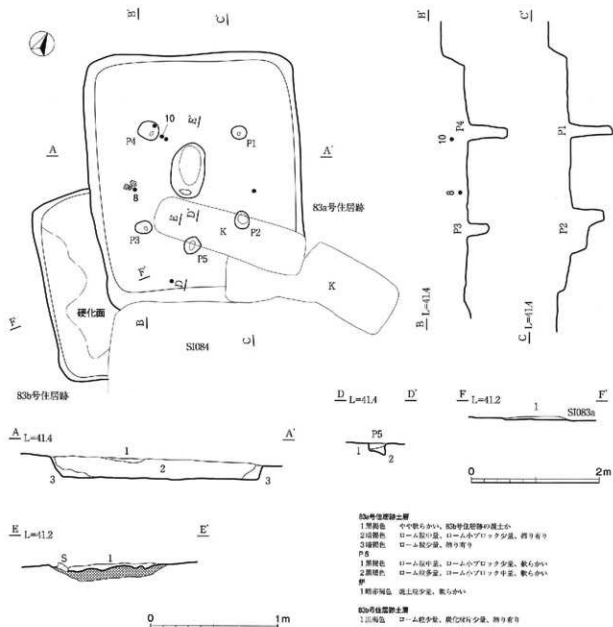
調査 番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
12	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条1種横文(L・R+R)→胴部界3本帯の價位 区画並次ないし直横文。内面は塊・斜位のナデ。	石英、長石、角閃 石、金雲母、雲母、 赤色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄色	
13	弥生土器 壺	— — —	胴部無文帯(横位のナデ)。胴部附加条1種横文(R・L+ 2L)。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	不良	外：にぶい黄色 内：灰黄色	P 6 二軒屋式系
14	弥生土器 壺	— — 8.8	胴部横文不明の附加条横文(R・Z:時計回り)。底面 木炭痕。内面は塊・斜位のナデ。内面全面にコケ付着。	石英、長石、青灰 色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄色	
15	弥生土器 壺	— — —	胴部横文不明の附加条横文(r・S、l・Z)一部位 3本帯の縦位区画並次文→2條一對の円形結付文×推 定7~8単位。内面は砂面荒れ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：明褐色	二軒屋式系
16	石器 磨石類		磨一組。自然産の表・裏面に磨耗面。左側面に磨着な磨打痕。上端部に割離面および磨耗面。 石材：石英安山岩。長さ9.25cm・幅7.4cm・厚さ3.5cm・重さ3200g。				

## 83a号住居跡(第69・70図)

位置 A区中央部、南東部N9・O9・N10・O10グリッドにある。規模と平面形 3.80×3.34mのやや縦長長方形。83b号住居跡に壁と覆土上層を掘りこまれている。主軸方向 N-30°-W 壁 壁高は約30cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径90cm、短径32cmの楕円形で深さ5cm。覆土 ローム粒を含んだ締りのある暗褐色土が主に堆積している。遺物 遺物の出土量は少なく、小破片のみの出土である。十王台式主体であるが、5・6など二軒屋式系の比率がやや高い。9は底面に木炭痕を有する土師器の壺、10は鍛造品の板状鉄斧である。いずれも覆土2層中から出土している。所見 出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第69図 83a号住居跡出土遺物



第70図 83a・b号住居跡

表31 83a号住居跡出土遺物観察表

図様 番号	種別 器型	口徑 器高 底徑	特徴	胎土	焼成	色面	備考
1	赤生土器 壺	- - -	口唇部丸縁状工具によるキザミ。口縁部3本歯の横位旋状文。内面は横位のナデ。外用スズ付着。	石英、角閃石、多量の白色点	普通	明赤褐色	十五台式
2	赤生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部黒文（横位のナデ）。胴部黒文原体（無筋状）を特徴した隆帯。内面は横位のナデ。	石英、骨針	普通	外：黒褐色 内：にぶい褐色	
3	赤生土器 壺	- - -	口唇部丸縁状工具によるキザミ。口縁部縦線不明の筋加条縦文（L・S）。胴部薄い稜状隆帯。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石、骨針、赤色粒	普通	褐色	十五台式

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 盃	--	頸部5本歯の縦位短状文(上上がり→右上がり)。内面は縦位のナデ。外側スス。内面はゴレ付着。	石英	良好	外: ぶい黄褐色 内: 褐色	十王台式
5	弥生土器 盃	--	頸部ス加ホ1型編文(L・R+2Rα)→頸部10~11本歯の横位短状文(横位短状文(内計りナデ)→内面は縦位短状文。内面は横・斜位のナデ。外側スス付着。	石英、角閃石	普通	ぶい黄褐色	二軒式
6	弥生土器 盃	--	頸部編文(無筋L)を印した後部→口縁部縦編不明の肩部編文(L・Z)。頸部縦位の短状文(面及不明)。内面は割着。	多量の石英・長石、角閃石	良好	外: 明赤褐色 内: 褐色	二軒式
7	弥生土器 盃	--	頸部編文(横位のナデ)。縦編不明の肩部編文(L・Z)と同様の肩部編文を肩部に印す。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	普通	外: ぶい黄褐色 内: ぶい褐色	
8	弥生土器 盃	--	胴部正並2型編文(R・L+2Rα)。胴部下層縦位のナデ。外側スス。内面はゴレ付着。	石英、角閃石	良好	外: ぶい黄褐色 内: ぶい褐色	
9	十王 土器	--	胴部下層ヘラケズリーナデ。外側スス。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外: 褐色 内: 明赤褐色	
10	鉄器 鉄釜	--	径7.5。最大径2.95。最小径2.75。底部厚1.2。板状鉄片(取込品)。刃部欠損。				
11	石器 横石	--	第一期。自然産の長・扁所に磨耗面。上・下層部や底面の一部に幾行彫。磨耗面は焼土により黒色に着色。長石粒・砂。長さ15.45cm・幅9.1cm・厚さ4.5cm・重さ819.0g。				

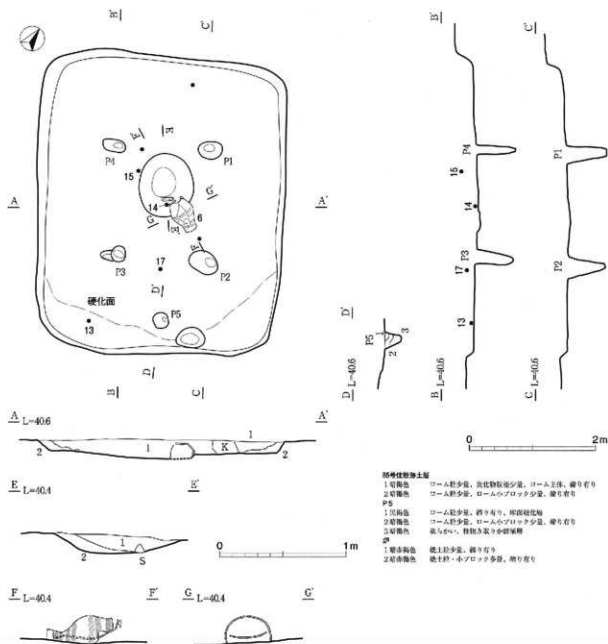
## 85号住居跡(第71~73図)

位置 A区南東部O10グリッドにある。規模と平面形 4.76 × 3.90 mの長方形。主軸方向 N-34°-W 壁 壁高は約18cm。床 南側のコーナー部を除いて全体に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径100cm、短径86cmの楕円形で深さ16cm。覆土 ロームを多く含んだ暗褐色土が堆積している。遺物 炉の南東側床面に、6の大形杓が横位で出土している。遺物の出土量は多く、中〜大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とするが、十王台式以外の土器も目立つ。4・5・10は二軒形式、16はS字結節文を施文する南関東系土器と考えられる。所見 出土遺物から、弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。

表32 85号住居跡出土遺物観察表

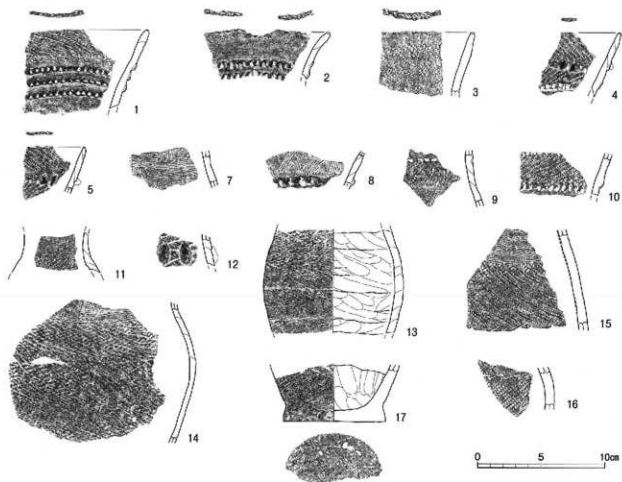
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 盃	--	口唇部編文(無筋)によるキギザミ。胴部編文(無筋)によるキギザミ。底面3条→頸部5本歯の縦位短状文。内面は口縁部縦位のナデ。頸部斜位のナデ。	石英、骨針、赤色	普通	ぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 盃	--	口唇部編文(無筋)によるキギザミ。胴部竹筴状工具による両面のある後部→口縁部編文(横位のナデ)。内面は横位のナデ。外側スス付着。	石英、角閃石	普通	黒褐色	十王台式
3	弥生土器 盃	--	口唇部編文(無筋)によるキギザミ。口縁部正並編文(R・L)→口唇部正並・斜位のナデ。内面は横位のナデ。	石英、骨針	良好	褐色	
4	弥生土器 盃	--	口唇部ヘラケズミ。口縁部縦編不明の肩部編文(R・S、L・Z)。口縁部下層に同様の底面によるキギザミと縦位の短状文。内面は横・斜位のナデ。5と長一留付。	多量の石英・長石	良好	褐色	二軒式
5	弥生土器 盃	--	口唇部ヘラケズミ。口縁部縦編不明の肩部編文(R・S、L・Z)→2葉一對の短状文。内面は横位のナデ。4と同一体。	多量の石英・長石	良好	褐色	二軒式
6	弥生土器 盃	162	胴部正並状工具によるキギザミ。底面2条以上→胴部附加ス1型編文(R・L・L、L・R+R)。胴部下層から上は下→上短文。胴部下層から下は上→下短文。底部縦編。内面は底面付付着部のナデ。面は割着。	多量の石英・長石、角閃石、白色粒		ぶい黄褐色	

第IV章 A区の遺構と遺物



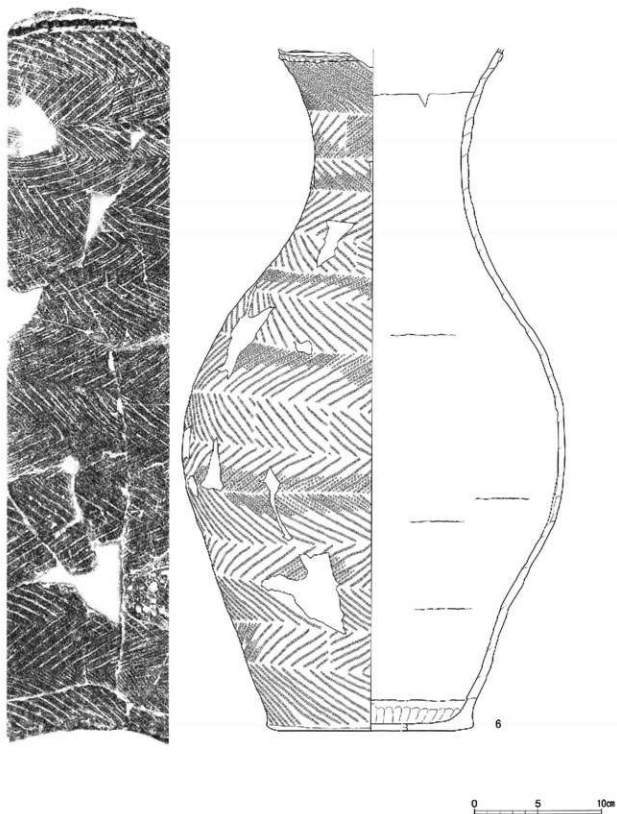
第71図 85号住居跡

図面番号	種別	口徑 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	赤土土器 壺	- - -	頸部4本筋の横位区画直線文→横位直線文→横位波状文、 内面は横交のナデ。	多量の石英・炭石、 骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式
8	赤土土器 壺	- - -	頸部押捺塗帯→口縁部3本筋の山形文(時計回り)、内面 は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、炭石、角閃 石、多量の白色粒	不具	にぶい黄褐色	十王台式
9	赤土土器 壺	- - -	頸部無文帯(横位のナデ)を挟んで竹管状工具による刺 突文2条、車跡横文(L.R)。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	普通	灰黄褐色	



第72図 85号住居跡出土遺物①

図版番号	種類	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	- - -	口縁部附加糸1種縄文(L・R+2R)、口縁部下側に同様の模様による平ずり。頸部2本線以上の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	良好	外：暗灰黄色 内：にぶい黄褐色	二野皿式
11	弥生土器 壺	- - -	頸部無文帯(輪位のナデ)。胴部輪襷不明の附加糸縄文(R・S・L・Z)。内面は縦位のナデ。柱土継接合部は横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	明黄褐色	
12	弥生土器 壺	- - -	頸部有段。附加糸2種縄文(R・L+2L)。→2割一対の縦位文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針、赤色粒	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	
13	弥生土器 壺	- - -	胴部附加糸不明の附加糸縄文(L・S・L・Z:下→上)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	褐色	
14	弥生土器 壺	- - -	胴部附加糸2種縄文(L+L)→頸部糸4本線の横位区間波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は頸部斜位のナデ。胴部縦位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石、角閃石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	- - -	胴部附加糸2種縄文(L+L)と輪襷不明の附加糸縄文(R・S)を下→上へ追文→胴部糸3本面の横位区間直線文→横位波状文。内面は斜溝。	石英、赤色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：褐色	十王台式
16	弥生土器 壺	- - -	胴部S字輪飾文、単線縄文(L・R)。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	褐色	
17	弥生土器 壺 (81)	- - -	胴部附加糸1種縄文(L+L)と輪襷不明の附加糸縄文(L・Z)を下→上へ追文。胴部下端横位のナデ。底部布目直→ナデ調整。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄色	

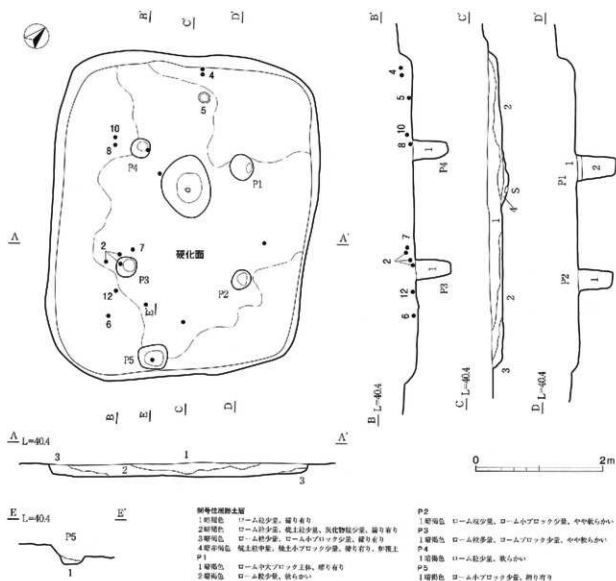


第73図 85号住居跡出土遺物②

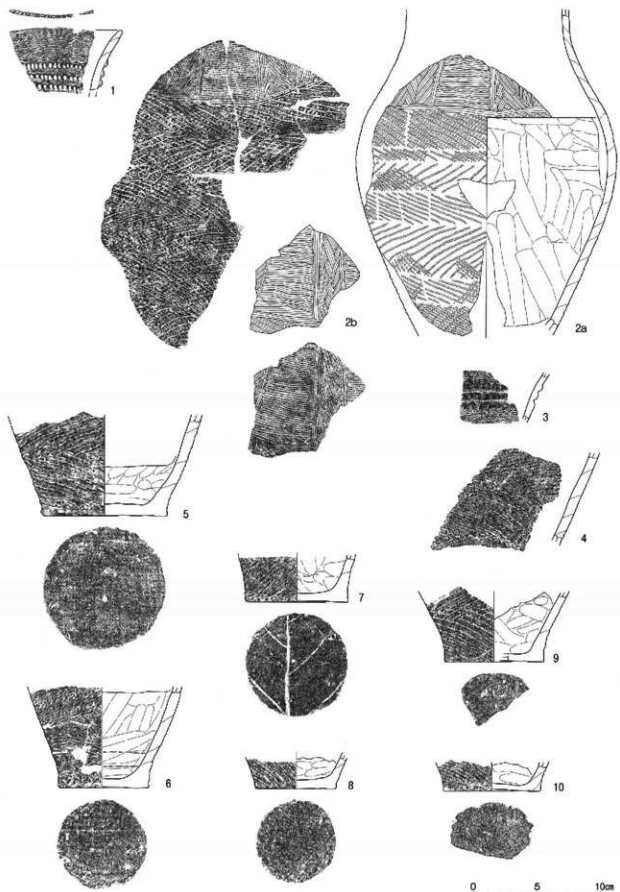


## 86号住居跡 (第74~76図)

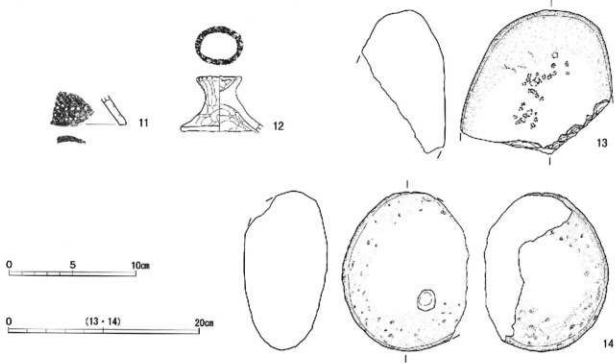
位置 A区南東部、O10・O11グリッドにある。規模と平面形 5.08 × 4.92 mの隅丸長方形。主軸方向 N-45°-W 壁 壁高は約20cm、やや外傾して立ち上がる。床 住居のコーナー部と西壁際を除いて硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径98cm、短径73cmの楕円形で深さ16cm。炉の中央やや南寄りに小型の炉石が設置されている。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 覆土中の遺物の出土量はやや多く、中〜大破片の割合が高い。北壁中央部(4・5)、P3周辺(2・6・7・12)、P4周辺(8・10)に遺物の集積が認められる。4は壁際の1層上位、その他は1層下位〜2層中より出土している。十王台式前半期の土器を主体とする。7は二軒屋式系、11は2列の円形刺突文が施文される高坏、12は蓋形土器と考えられる。所見 出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。



第74図 86号住居跡



第75図 86号住居跡出土遺物①



第76図 86号住居跡出土遺物②

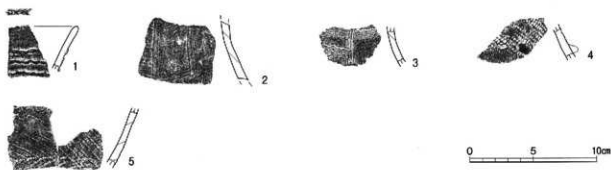
表33 86号住居跡出土遺物観察表

図録 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口縁部ヘツキザミ、頸部丸縁状工具によるキザミ筋帯3条 →口縁部4本条の横位波状文、頸部縦位直線文、内面は横 位のナデ、外面スス付着。	石英、角閃石、赤 色粒	良好	外：黒褐色 内：灰褐色	十五台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部附加条2種縄文（R・L+R、L・R+2L；下→上、 反時計回り）→頸部帯3本条の横位区画直線文→頸部縦 位直線文→縦位波状文（左→右、下→上）、握り幅の小さ い横位波状文、内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、骨 針、多量の白色粒	良好	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十五台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部盛り出しの押捺帯帯3条→口縁部・頸部3本条の 横位波状文、内面は横位のナデ、外面スス付着。	石英	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部縦線不明の附加条縄文（R・S、R・Z；下→上）、 内面は横・斜位のナデ。	石英	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい赤褐色	十五台式
5	弥生土器 壺	- - 9.75	頸部縦線不明の附加条縄文（R・Z、L・S）、頸部下 端横位のナデ。底部布目直。内面は底部付近横位のナデ、 他は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、骨 針	良好	褐色	十五台式
6	弥生土器 壺	- - 7.1	頸部附加条1種縄文（R+R、L+L；上→下、時計回り）、 頸部下端横位のナデ。底部布目直（格子状の圧痕あり）、 内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	- - 8.1	頸部附加条1種縄文（L・R+2R；反時計回り）、底部大 直筋（中央部ナデ消し）、内面は横・斜位のナデ、外面スス、 内面全面ヨゴレ付着。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒風式
8	弥生土器 壺	- - 6.3	頸部附加条1種縄文（R・L+2L）、底部布目直、内面は 横位のナデ。外面スス、内面帯状のヨゴレ付着。	石英、骨針、多量 の白色粒。	不良	にぶい黄褐色	
9	弥生土器 壺	- - (7.8)	頸部附加条2種縄文（L+L・a、R+R・a；下→上）、底 部布目直（船土付着）、内面は横・斜位のナデ。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：浅褐色	十五台式
10	弥生土器 壺	- - (7.6)	頸部縦線不明の附加条縄文（L・Z）、底部ナデ調整（光 沢を帯びる）、内面は横位のナデ、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・長石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 高杯	- - -	脚部輪周不明の附加糸縄文(L・Z)→竹管状工具による刺突文2条。脚部部ホリ肌。内面は横位のナデ。	石英	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	
12	弥生土器 壺	- - -	狭口口唇部ホリによるキザミ。口唇部縦位のナゲ→横位のナゲ。受け部縦位のナゲ。内面は横糸・受け部とも斜位のナゲ。受け部の破損部再加工。積み径3.3cm。	石英、角閃石	良好	明赤褐色	
13	石器 斧石		板→磨。欠損部。大型の表面中央に磨耗面および磨打痕。下縁部に欠損後の磨痕。石材:砂岩。残存長15.15cm・残存幅15.83cm・残存厚8.7cm・重さ2288.1g。				
14	石器 磨石		磨→凹。欠損部。自然磨の表・表面中央に磨痕面。表面下部に凹穴。石材:石英安山岩。残存長12.5cm・残存幅9.7cm・厚さ6.55cm・重さ1026.7g。				

## 88号住居跡(第77・78図)

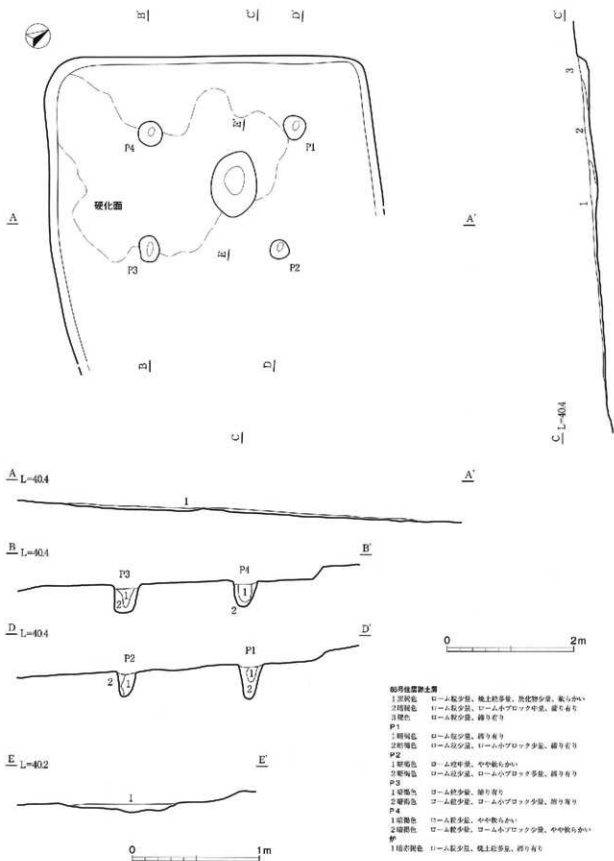
位置 A区南東部、O9・P9グリッドにある。規模と平面形 5.22 × (4.60) mで東側が地形傾斜によって削平されている。主軸方向 N-30°-E 壁 壁高は約6cm。床 炉の周囲から南西側が特に硬化している。ピット 4箇所。P1からP4は支柱穴。炉 長径104cm、短径72cmの楕円形で深さ6cm。覆土 褐色土主体の堆積土が床上を薄く覆っている。遺物 覆土から弥生土器の壺片が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。十王台式主体で4は単節RL縄文を施文する。所見 出土遺物と炉や柱穴の配置関係から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第77図 88号住居跡出土遺物

表34 88号住居跡出土遺物観察表

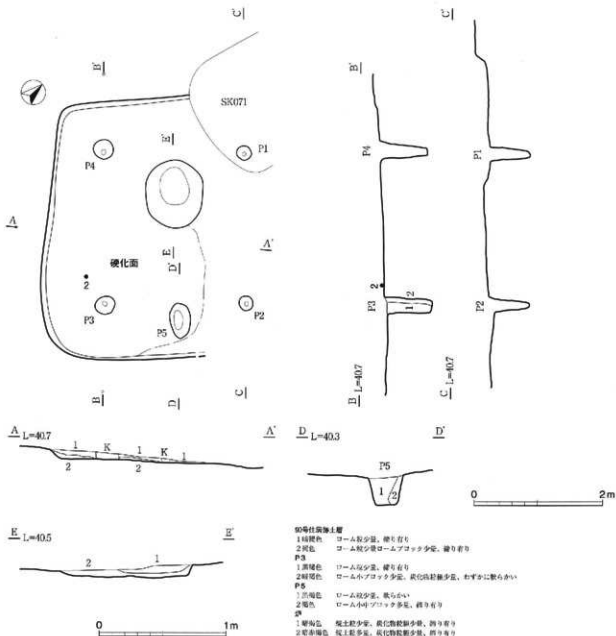
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文キザミ。口唇部縦文(横位のナゲ)。頸部帯い押捺痕。内面は横・斜位のナゲ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	外:灰青褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	縦割券7~8本歯の横位直線文→縦部縦位直線文を繰り返して→縦部縦位直線文なし、流状文。内面は横・斜位のナゲ、磨面欠け。	多量の石英・長石、金雲母、骨針	普通	外:にぶい褐色 内:明褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部6本歯の縦位直線文→横位流状文。スリット内に横位流状文1条。内面は縦位のナゲ→横位のナゲ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外:黒褐色 内:にぶい褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	縦部単節縄文(R・L)。無支管(横位のナゲ)→内縁状の斜位文。内面は横・斜位のナゲ。	石英、角閃石、金雲母、多量の白色粒	良好	にぶい黄褐色	
5	弥生土器 壺	- - -	頸部附加糸1條縄文(R・L・2L、L・R・2R・下→上)。内面は斜位のナゲ。内面全面ににぶい付着。	石英	普通	外:にぶい褐色 内:黒褐色	



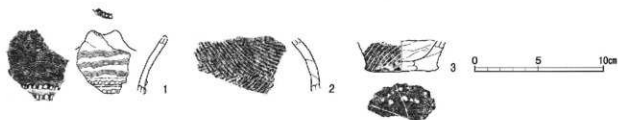
第78図 88号住居跡

90号住居跡 (第79・80図)

位置 A区南東部、O8グリッドにある。規模と平面形 4.14 × (2.50) m。主軸方向 N-48°-W  
 壁 壁高は約14cm、外傾気味に立ち上がる。床 床面東側が地形の傾斜によって削平されている。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径108cm、短径88cmの楕円形で深さ9cm。覆土 自然堆積と考えられる暗褐色～褐色土が堆積している。遺物 床面直上から2の壺胴部片が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、小破片の割合が高い。1は十王台式の片口壺、2・3は二軒屋式系の土器である。所見 出土遺物と炉や柱穴の配置関係から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第79図 90号住居跡



第80図 90号住居跡出土遺物

表35 90号住居跡出土遺物観察表

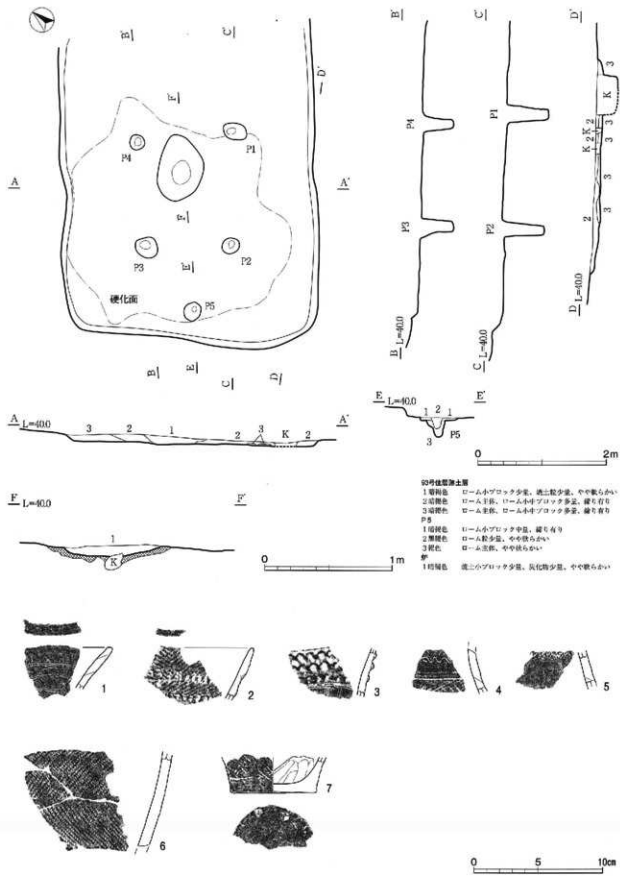
図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	弥生土器 壺	- - -	片口壺。口唇部丸縁状工具によるキザミ。口縁部4本の横位波状文。胴部凸帯と同位のキザミ隆帯。内面は(横・斜位のナデ)。注ぎ口付近に黒疵。	石灰、角閃石、赤色粒	普通	外：ぶい黄褐色 内：ぶい黄褐色	十玉台式
2	弥生土器 壺	- - -	胴部附加糸1極縄文 (R・L・2L・L・R・2R・上→下)。 →胴部5本帯以上の等間隔止め波状文 (時計回り)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外：ぶい黄褐色 内：ぶい黄褐色	二軒屋式
3	弥生土器 壺	- - (5.8)	胴部附加糸1極縄文 (L・R・2R)。底部木炭痕。内面は横・斜位のナデ。	石英	普通	外：ぶい黄褐色 内：灰青色	二軒屋式

## 93号住居跡 (第81図)

位置 A区南東部、P9・P10グリッドにある。規模と平面形 (5.00) × 4.10 m 主軸方向 N - 50° - E 壁 壁高は約10cmである。床 主柱穴から出入口ピットにかけて全体に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径104cm、短径72cmの楕円形で深さ14cm。覆土 - 遺物 遺物の出土量は少なく、小〜中破片の割合が高い。十玉台式前半期の土器を主体とするが、二軒屋式 (2・4・5) の比率も高い。所見 出土遺物や遺構の形態から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

表36 93号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部施文不明。口唇部3本帯の横位波状文。内面は横位のナデ。外側スス付着。	石灰、角閃石	普通	外：褐色 内：ぶい黄褐色	十玉台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部縦文キザミ。有段口縁を呈し、口縁部上段は軸絶不明の附加糸縄文 (R・S・L・Z: 反時計回り) を横位施文し、縦位の羽状隆帯を呈す。下段は軸絶不明の附加糸縄文 (R・S) を横位施文。口唇部下段は縦文原形によるキザミ。内面は横位のナデ。外側スス付着。	石英、長石	普通	外：ぶい黄褐色 内：ぶい黄褐色	二軒屋式
3	弥生土器 壺	- - -	胴部深い折縁隆帯 (上下から折縁) 3条→胴部直下に3本帯の横位区画波状文→胴部縦位縦文。内面は斜位のナデ。外側スス付着。	石英	普通	外：灰黄褐色 内：ぶい黄褐色	十玉台式
4	弥生土器 壺	- - -	胴部軸絶不明の附加糸縄文 (R・S・L・Z) →胴部7〜8本帯の横位区画直線文、胴部波状文。内面は横位のナデ。外側スス付着。	多量の石英・長石、赤色粒	普通	外：灰黄褐色 内：ぶい黄褐色	二軒屋式
5	弥生土器 壺	- - -	胴部附加糸1極縄文 (L・R・2R) →胴部縦文帯 (縦位のナデ→横位のナデ)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外：ぶい褐色 内：褐色	二軒屋式
6	弥生土器 壺	- - -	胴部附加糸縄文 (R・L・R) を横位施文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒、多量の白色粒	普通	外：ぶい褐色 内：ぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	- - (6.6)	胴部附加糸2極縄文 (L・L)。底部目取→ナデ調整。内面は斜位のナデ。内面ヨグレ付着。	石英、長石、角閃石、赤色粒	普通	外：ぶい黄褐色 内：ぶい黄褐色	十玉台式

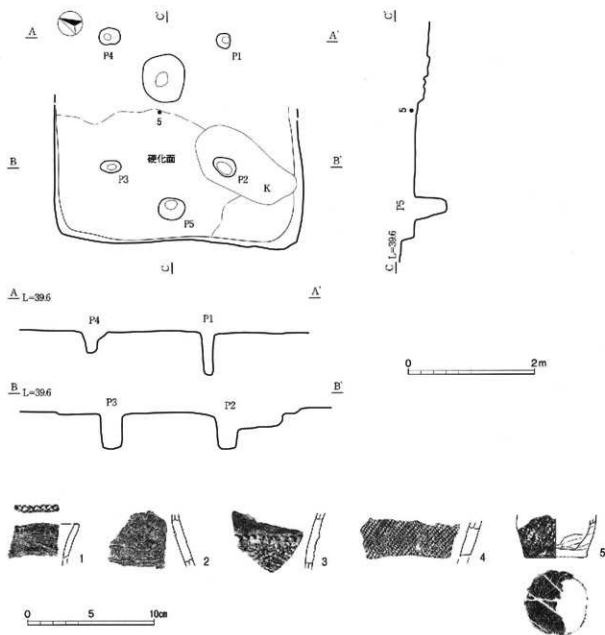


第81図 93号住居跡・出土遺物



## 96号住居跡 (第82図)

位置 A区の南東部P9グリッドにある。規模と平面形 3.86 × (3.40) mで、94号住居跡に壁の一部が壊されている。主軸方向 N-63°-E 壁 壁高は約20cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の西側半分は硬化面が残存しているが、東半分は傾斜地形によって削平されている。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径76cm、短径66cmの楕円形で深さ6cm。覆土 西壁際に暗褐色のやや軟らかい覆土が堆積している。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。覆土中から5の壺底部片が出土している。4は単節LR縄文を施文する。所見出土遺物や遺構の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第82図 96号住居跡・出土遺物

表 37 96号住居跡出土遺物観察表

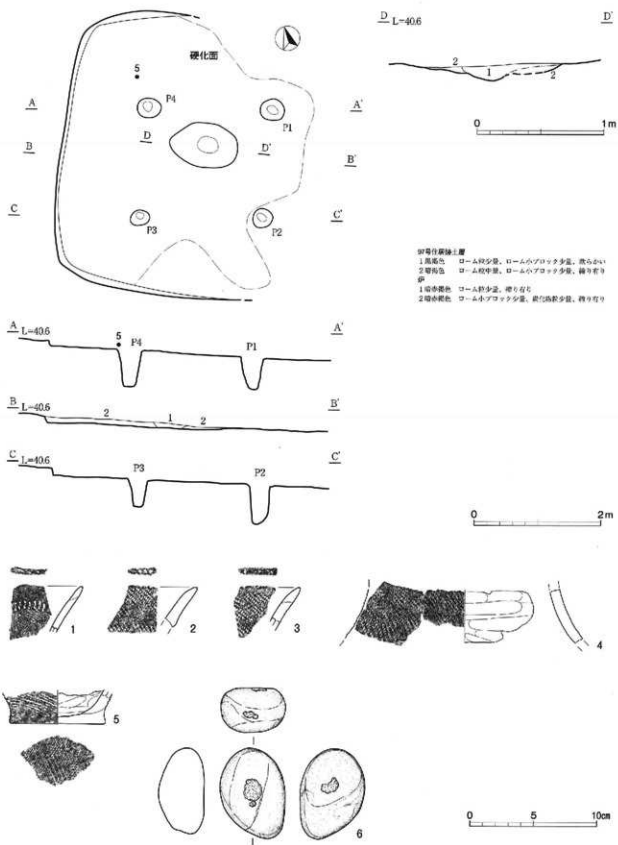
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	-	口唇部編文キザミ(帯筋Z1)。口縁部5本歯の横位流紋文(T→1)。内面は横位のナデ。	石英	普通	外:オリーブ黒色 内:明黄褐色	十五台式
2	弥生土器 甕	-	胴部輪縁不明の附加糸織文(R-Z)。頸部界6本歯の横位区画編文→一段部縦位流紋文→縦り幅の大きい横位流紋文(T→上)。内面は横位流紋文。	石英、灰石、多量 不貞の 白色粒	-	外:にぶい黄褐色 内:明黄褐色	十五台式
3	弥生土器 甕	-	口唇部編文(横位のナデ)。頸部押捺1編文キザミ融合1条→胴部輪縁不齊の附加糸織文(R-Z)。内面は横位流紋文のナデ→横位のナデ。外面はスス付。	石英	良好	にぶい褐色	十五台式
4	弥生土器 甕	-	胴部編文(LR)を横位編文、内面は斜位のナデ、縁面見れ。	石英、灰石、白内 石	普通	外:にぶい黄褐色 内:褐色	-
5	弥生土器 甕	4.85	胴部輪縁不明の附加糸織文(R-S)。胴部下帯横位のナデ。底面は横・斜位のナデ。外面はスス付。底径2.5倍。	石英、灰石、多量 の白色粒	普通	外:にぶい黄褐色 内:明黄褐色	-

97号住居跡(第83図)

位置 A区の南東部O9グリッドにある。規模と平面形 4.96×(3.60)m。主軸方向 N-25°-E。壁 壁高は約14cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体が硬化している。ピット 4箇所。P1からP4は主柱穴。炉 長径108cm、短径70cmの楕円形で深さ11cm。覆土 下層にはロームの含有の多い暗褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。十五台式後半期の土器を主体とする。1は頸部に帯状刺突文が施文される。単筋編文を施文する個体(2-4)が日立つ。5の壺底部は床面から出土している。所見 柱穴の配置と炉の位置、出土遺物などから弥生時代後期十五台式期後半の塚穴住居跡と考えられる。

表 38 97号住居跡出土遺物観察表

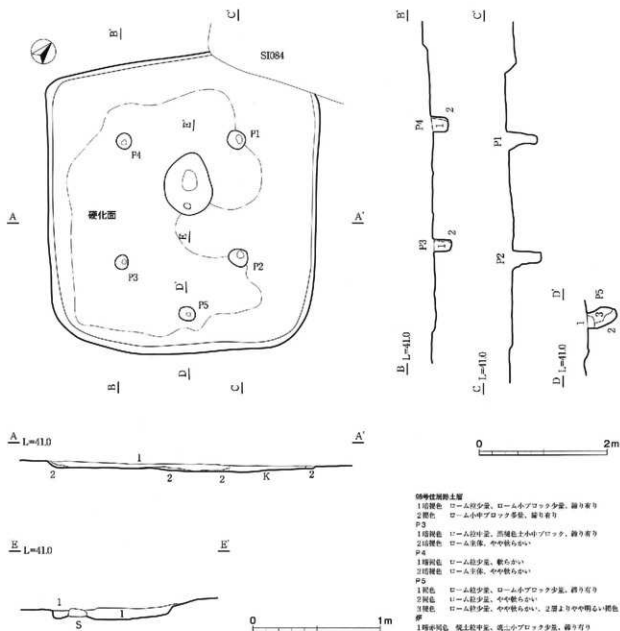
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	-	口唇部ヘラキザミ、口唇部編文(横位のナデ)、編文区画(帯筋Z1)による押捺文2条、頸部6本歯の横位編文→一段部縦位流紋文、内面は頸部斜位のナデ→胴部編文のナデ、外面はスス付。	多量の石英・灰石	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	十五台式
2	弥生土器 甕	-	口唇部ヘラキザミ、口唇部編文(RL)を横位編文、内面は横位のナデ。	石英	普通	にぶい黄褐色	-
3	弥生土器 甕	-	口唇部ヘラキザミ、口唇部編文のナデ、底面編文(RL)を横位編文、内面は横位のナデ。	石英	普通	にぶい黄褐色	-
4	弥生土器 甕	-	胴部単筋編文(RL)を横・斜位編文。内面は横位のナデ、外面はスス、内面はゴレ付。	石英、多量の白色 粒	普通	外:黒褐色 内:灰黄褐色	-
5	弥生土器 甕	(7)	胴部輪縁不明の附加糸織文(R-Z)。底面は横・斜位のナデ。外面はスス付、内面はゴレ付。	石英、多量の白色 粒	良好	にぶい褐色	十五台式
6	石製品 塚石	-	小形塚の表・裏面や上層部に散在。 石材:輝緑岩、長さ71cm・幅51cm・厚さ355cm・重さ186kg。	-	-	-	-



第83图 97号住居跡・出土遺物

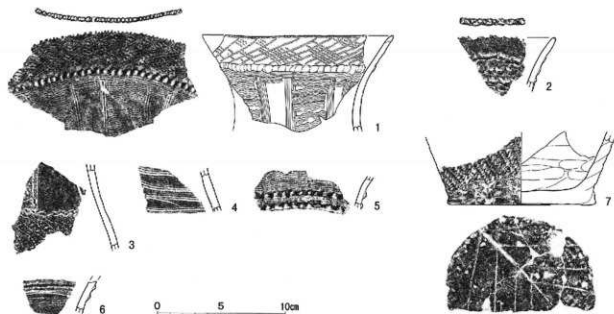
98号住居跡(第84・85図)

位置 A区の南東部O10グリッドにある。規模と平面形 4.76×4.24m。主軸方向 N-44°-W。壁 壁高は約10cm。床 住居中央から南側にかけて硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径100cm、短径76cmの楕円形で深さ18cm。覆土 締りのある暗褐色～褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。十王台式を主体とするが、新旧の體が混在する。所見 出土遺物などから弥生時代後期後半の竪穴住居跡と考えられる。



- 弥生時代後期土層
- 1 腐植土 コーム粒少量、ローム小ブロック少量、腐り有り
  - 2 腐植土 コーム小中ブロック多量、腐り有り
  - P3 1 腐植土 ローム粒少量、赤褐色土小中ブロック、腐り有り
  - 2 腐植土 コーム多量、やや軟らかい
  - P4 1 腐植土 ローム粒少量、軟らかい
  - 2 腐植土 ローム多量、やや軟らかい
  - P5 1 腐植土 コーム粒少量、ローム小ブロック少量、腐り有り
  - 2 腐植土 ローム粒少量、やや軟らかい
  - 3 腐植土 ローム粒少量、やや軟らかい、2層よりやや明るい褐色
  - 4 腐植土 粘土粒中量、或土小ブロック少量、腐り有り

第84図 98号住居跡



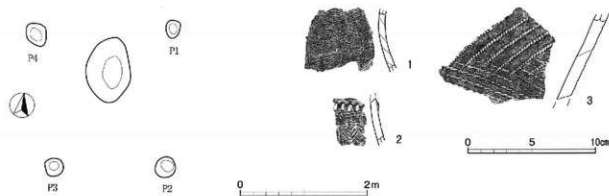
第85図 98号住居跡出土遺物

表39 98号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 盃	-- -- --	口唇部丸縁状工具による今ザミ。口周界押捺痕帯1条→口縁部附加条2種純文(L+R)。隆部直下に5本面の横位区画波状文→頸部縦位直線文2条→単位→横位波状文(上→下)。内面は頸部斜位のナデ→口縁部横位のナデ。外面澁いスス付着。	石英、骨針	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄色	十五台式
2	弥生土器 盃	-- -- --	口唇部細文キザミ。口縁部純文(横位のナデ)。胴部薄い押捺痕帯3条→3本面以上の横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、金雲母	普通	灰黄褐色	十五台式
3	弥生土器 盃	-- -- --	胴部附加条2種純文(L+L)→胴部3本面の横位区画波状文→胴部縦位直線文→横位波状文。内面は横位のケズリ→縦位のナデ。	石英、金雲母、骨針、赤色粒	普通	灰黄褐色	十五台式
4	弥生土器 盃	-- -- --	頸部3本面の横位直線文。内面は横位のナデ。器割先れ。	石英、黄閃石、多量の白色粒	良好	外：明褐色 内：橙色	
5	弥生土器 盃	-- -- --	胴部薄い押捺痕帯→3本面の横位直線文なし。波状文。内面は斜位のナデ。	多量の石英・白色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十五台式
6	弥生土器 盃	-- -- --	頸部純文の隆帯(断面三角形)→3-4本面の縦位直線文、横位波状文。内面は斜位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十五台式
7	弥生土器 盃	-- 11.5	胴部準筋理文(L)を斜位筋文。胴部下横位のナデ。底部木炭痕。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石・骨針、赤色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	

## 99号住居跡(第86図)

位置 A区の南東部N9グリッドにある。規模と平面形 ビットと炉が確認されている。主軸方向 N-13°-W 壁 - 床 削平されて残存していない。ビット 4箇所。P1~P4は主柱穴。炉 縦長の楕円形で、火床面は焼土化している。覆土 - 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。所見 柱穴の配置と炉の位置から弥生時代後期後半の竪穴住居跡と考えられる。



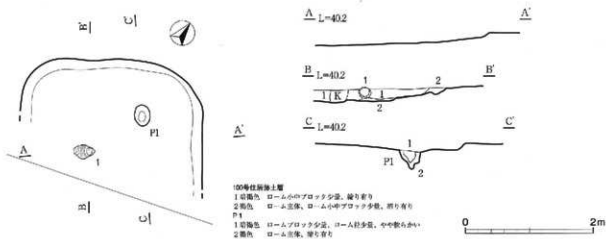
第86図 99号住居跡・出土遺物

表40 99号住居跡出土遺物観察表

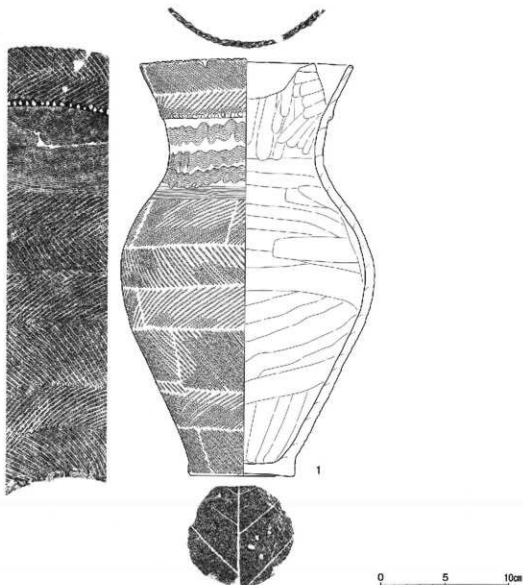
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色相	備考
1	弥生土器 壺	- - -	腰部7本歯の環状直線文→横位波状文(下→上)。内面は斜位のヘラナデキ→縦位のヘラナデキ。外歯ス入行着。	多量の石英・白色粒	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部丸棒状工具によるキザミ段帯→造管直下に4本歯の斜位区画+波状文→頸部縦位直線文→縦位羽状文(右→左、下→上)。内面は横位のナデ。外歯ス入行着。	石英	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
3	弥生土器 壺	- - -	胴部縁線不明の附加糸織文(R・S、R・Z：下→上)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒	良好	にぶい黄褐色	十五台式

100号住居跡 (第87・88図)

位置 A区の南東部O11グリッドにある。規模と平面形 290 × (240) m。主軸方向 N-38°-W 壁 壁高は約12cm。床 - ビット 1箇所。P1は深さ28cm。炉 - 覆土 ローム小中ブロックを含んだ締りのある覆土である。遺物 1は二軒屋式のほぼ完形個体である。その他、十五台式土器の小片が極少量出土している。所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第87図 100号住居跡



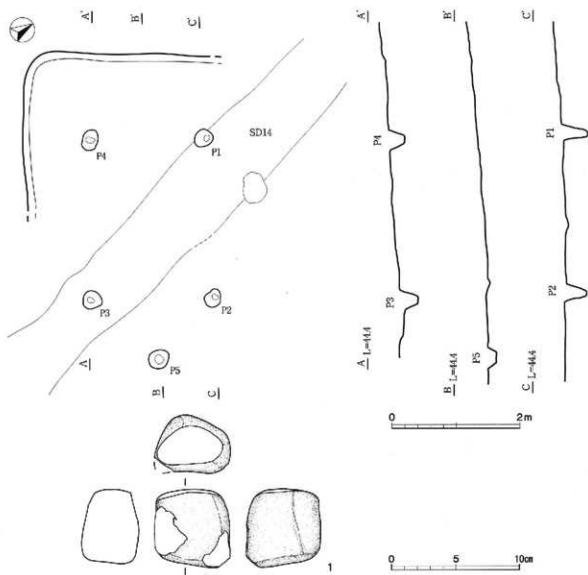
第88図 100号住居跡出土遺物

表 41 100号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器物別	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(169) 331 82	口唇部縄文キザミ。口縁部は折り返し状を呈し、附加垂1體縄文(RL+2L, LR+2R;下→上)を横位施文。胴部附加垂1體縄文(RL+2L, LR+2R;下→上)→胴部9本筋の横位区画直線文1帯→横位直線文3条(上→下、反時計回り)。底部木簡状。内面は胴部下位は垂折位のヘラナデヨ。腰-口縁部は斜位のナデ。外面肩-頸部、腹部下位に濃いス付着。胴部中位はス稀化消失。内面は胴部中位以下に縦着なヨゴレ。以上は薄いヨゴレ付着。	多量の石英・長石	良好	外：灰青褐色 内：黒褐色	二軒期式

101号住居跡（第89図）

位置 A区中央部、M7・N7グリッドにある。規模と平面形 (5.08) × (3.88) m。主軸方向 N-62°-E 壁 - 床 硬化した床は残存していない。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入口ピットと考えられる。覆土 非常に浅くほとんど残存していない。遺物 - 所見 柱穴の配置と炉の位置などから弥生時代後期の竪穴住居跡と見られる。



第89図 101号住居跡・出土遺物

表 42 101号住居跡出土遺物観察表

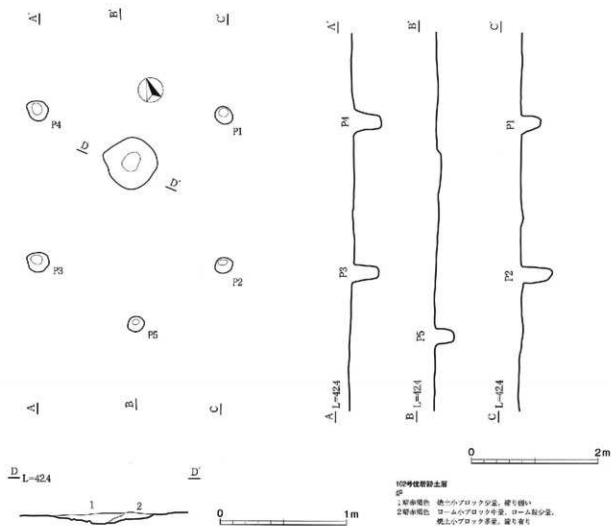
遺物 番号	器 種	口 縁 器 底 径	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	石部 磁石		自然理の上面に顕著な砂鉄質。磁鉄面の一部は赤褐色に変色。両側縁の一部に硬砂痕。 石材：砂岩、長さ6.15cm・幅5.9cm・厚さ4.25cm・重さ243.0g。				

102号住居跡（第90図）

位置 A区中央部、N7グリッドにある。規模と平面形 ピットと炉が確認されている。主軸方向 N-17°-E 壁 - 床 削平されて残存していない。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は



出入り口ピットと考えられる。 炉 長径86cm、短径80cmの楕円形で深さ8cm。 覆土 - 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみのため図示し得ない。 所見 柱穴の配置と炉の位置などから弥生時代後期の堅穴住居跡と見られる。

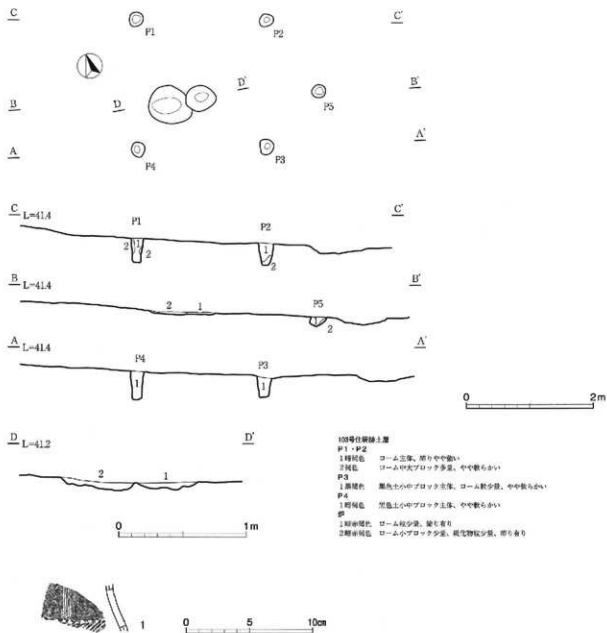


第90図 102号住居跡

## 103号住居跡 (第91図)

位置 A区南部、N10グリッドにある。 規模と平面形 床面は削平を受けており、4本の主柱穴と出入り口ピット穴、炉跡の掘り込みが確認されたのみで、遺構の平面形は捉えられなかった。 主軸方向 N-73°-W 床 大部分は削平されている。 ピット 5箇所。 P1からP4は主柱穴。 P5は出入り口ピットと考えられる。 炉 2か所ある。 炉1は、長径48cm、短径40cmの楕円形で深さ5cm。 炉2は長径70cm、短径60cmの楕円形で深さ6cm。 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。 1は十王台式の範端だが、頸胴界を縄文原体端部(無筋R)で押捺し、区画する。 所見 柱穴の配置と炉の位置、出土遺物などから弥生時代後期の堅穴住居跡と考えられる。

第IV章 A区の遺構と遺物



第 91 図 103号住居跡・出土遺物

表 43 103号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	発生土器 壺	- - -	胴部輪理不明の得加金馬文(R-S)→胴部同様の忍 体筋部による押捺列→胴部8本筋の横位波状文→縦位直 線文。内面は横位のナア。外面スチ付着。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰青色	十王台式

## 2 遺構外出土遺物

1～5、9～17、23～27は十王台式土器の範疇で捉えられる壺である。4は口縁部の最上段に上開きの櫛描連弧文が施文される。9は傾きの程度から壺としたが、高坏の可能性もある。口縁部の内外面に櫛描波状文が施文される。15は縦位の櫛描波状文と横位区画直線文が施文される細頸壺でやや異質な文様構成を呈する。16は櫛描直線文と附加条縄文を縦位に施文する希少な個体である。胴部は軸縄不明の附加条縄文(23・25・27)、ないし附加条2種縄文(24・26)が施文され、底部は布日痕(26・27)である。

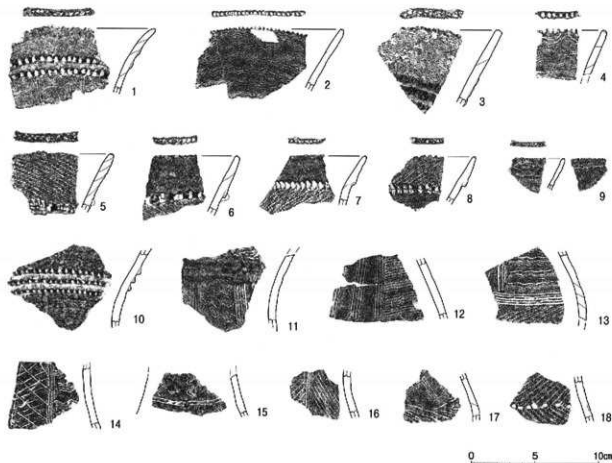
18は円形の刺突列と附加条1種縄文が施文され、19は頸部に無文帯を有し、単節LR縄文・円形貼付文が施文される。いずれも霞ヶ浦沿岸から南関東に出自をもつ土器群と考えられる。

20～22・28・29は二軒屋式土器の範疇で捉えられる壺である。多条の櫛描文(20～22)、附加2条の附加条1種縄文(22・29)、底部の木葉痕(28・29)、多量の石英・長石が含まれる胎土などの諸特徴を備える。

30～34は弥生系(十王台式カ)の高坏である。脚部の成形技法には中空のもの(30・32)と中実のもの(31・33・34)の2種類が認められる。

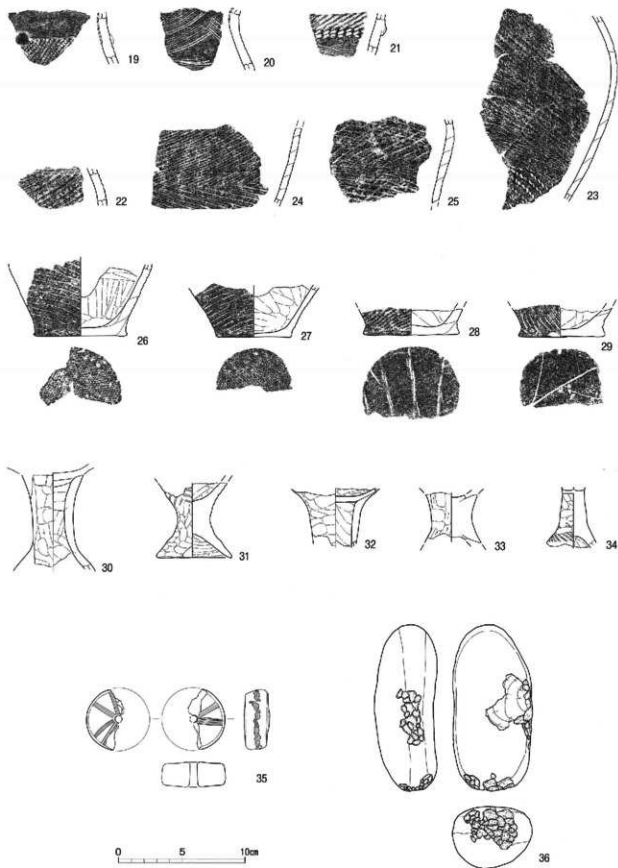
35は土製紡錘車である。表裏面に3本歯の櫛描放射状文、側面に櫛描波状文が施文される。

36は磨石類である。36には磨耗痕とともに顕著な敲打痕が認められる。



第92図 遺構外出土遺物①

第IV章 A区の遺構と遺物



第93図 遺構外出土遺物②

表44 A区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器物種	口径 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	--	口縁部縄文印付キザミとヘラキザミ。頸部横状工具によるキザミ隆帯2条→4本帯の横位直線文→横位直線文(下→上)。内面は口縁部横位のナダ。頸部横位のナダ。	多量の石英・白色粒、角閃石	良好	外：黒褐色 内：褐色	SI076 流入 上層式
2	弥生土器 甕	--	口縁部ヘラキザミ。口縁部4本帯の横位直線文。内面は口縁部斜位のナダ→口縁部付足直位のナダ。外側スス付。	石英	良好	外：灰青褐色 内：にぶい黄褐色	表十 十五台式
3	弥生土器 甕	--	口縁部縄文印付(黒線シカ)キザミ。頸部押捺帯3条カ→口縁部6本帯の横位直線文(下→上)。内面は横・斜位のナダ。	石英、金雲母	良好	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	表十 十四内式
4	弥生土器 甕	--	口縁部ヘラキザミ。口縁部4本帯の上開き直線文・横位直線文。内面は横位のナダ。	石英、骨針	良好	にぶい褐色	SI065・09 西の 表十
5	弥生土器 甕	--	口縁部無縄文(L)を四横線文。口縁部無縄文不明の附加糸縄文(R・Z、R・Sカ)→口縁部3本帯以上の横位直線文→頸部斜付文。内面はナダ。外側スス付。	石英、角閃石	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	SI201 流入
6	弥生土器 甕	--	口縁部縄文印付(黒線シカ)キザミ。頸部附加糸1横線文(R・L+2L)→口縁部横帯状1本による肩突→2帯一対の貼付文。内面は斜位のナダ。外側スス付。	多量の石英・火石	良好	外：黄褐色 内：緑灰色	SI13A 流入
7	弥生土器 甕	--	頸部無縄文不明の附加糸縄文(R・S)→口縁部肩撞の痕跡でキザミ。内面は横位のナダ。外側スス付。	石英	普通	にぶい黄褐色	SI092 流入
8	弥生土器 甕	--	口縁部丸棒状工具によるキザミ。口縁部附加糸；横線文(L・R+2R)→口縁部下帯黒線の痕跡によるキザミ；頸部直線文(横位のナダ)。内面は横位のナダ。外側スス付。	多量の石英・炭石	良好	にぶい黄褐色	SI082 流入
9	弥生土器 甕	--	口縁部ヘラキザミ。口縁部4本帯の横位直線文(下→上)。内面は横位直線文1条。以下は横位のナダ。	石英、赤色粒	普通	外：褐色 内：淡黄褐色	SI007 流入
10	弥生土器 甕	--	口縁部丸棒状工具によるキザミ隆帯3条→口縁部4本帯の横位直線文。頸部押捺の痕跡によるキザミ；頸部直線文(横位のナダ)。外側スス付。	多量の石英・白色粒	普通程度	外：にぶい黄褐色 内：褐色	A区一括
11	弥生土器 甕	--	口縁部無縄文不明の附加糸縄文(R・S)。口縁部隆帯の指先一帯部6本帯の横位の直線文→横位直線文。内面は横・斜位のナダ。外側スス。内面口縁部付。白色粒	石英、角閃石	普通	黄褐色	SI055 流入
12	弥生土器 甕	--	頸部肩撞不明の附加糸縄文→頸部直線直線文3条一帯部→横位直線文。内面は横・斜位のナダ。外側スス。内面口縁部付。	石英	良好	外：緑灰色 内：にぶい黄褐色	SI13B 流入
13	弥生土器 甕	--	頸部附加糸1横線文(L+2L)→頸部肩撞の痕跡による横位直線文→頸部直線直線文→横位直線文。内面は頸部が横位のナダ。頸部が斜位のナダ。外側スス付。	石英、角閃石、骨針、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	3号地下式坑流入
14	弥生土器 甕	--	頸部5本帯の横位直線文→ヘラ棒状斜付子文→横位直線文。内面は横・斜位のナダ。	石英、角閃石、赤色粒	良好	褐色	3号地下式坑流入
15	弥生土器 甕	--	頸部二本帯の頸部直線文による横位の区間直線文→3本帯の肩撞直線文。内面は横・斜位のナダ。外側スス。内面口縁部付。	石英	普通	黄褐色	SI082 カマド流入
16	弥生土器 甕	--	頸部4本帯の横位直線文→附加糸1横線文(L・R・2R・L・2L)を横位直線文。内面は横位のナダ。外側スス付。	石英、角閃石、赤色粒	普通	外：緑灰色 内：褐色	SI060 流入
17	弥生土器 甕	--	頸部無縄文不明の附加糸縄文(L・Z)→頸部肩撞3本帯の山形文(反時計回り)。内面は斜位のナダ。外側スス付。	石英、骨針	普通	外：黄褐色 内：明赤褐色	SI061 カクラン
18	弥生土器 甕	--	頸部附加糸1横線文(L・R+2R、R・L+2L)を横位直線文。未沢縄文の収束部に丸棒状工具による横位の刺突文1条。内面はナダ。外側スス付。	石英、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	3号地下式坑流入
19	弥生土器 甕	--	頸部直線直線文(L・R)を横位直線文。縄文地端部に横位の直線文(横位のナダ)→口縁部付文。内面は斜位のナダ。器面直線文。	多量の石英、角閃石	良好	外：明褐色 内：褐色	SI03 上層
20	弥生土器 甕	--	頸部8本帯の横位直線文。上開きの直線文ないし、山形文(反時計回り)。内面は横位のナダ。	多量の石英・炭石	普通	外：明黄褐色 内：褐色	6号地下式坑流入 一層厚式
21	弥生土器 甕	--	口縁部無縄文(L)を横位直線文。口縁部下帯は同様の痕跡によるキザミ。頸部は8本帯の下の直線直線文(時計回り)。内面は横位のナダ。	多量の石英、赤色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：褐色	SI007 流入 二層厚式
22	弥生土器 甕	--	頸部附加糸1横線文(L・R+2R)→頸部肩撞直線直線文の刺突文(反時計回り)。内面は横・斜位のナダ。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	SI082 流入 二層厚式

第IV章 A区の遺構と遺物

図版番号	類別種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
23	炊火土器 甕	-	胴部輪縄不明の附加糸縄文 (R・Z、L・Z:ゾーエ) 下から2枚目のホR・Z。糸羽状構成。内面は肩部が斜位のナデ。胴部が縦位のナデ。外側スス (胴部に縦帯)、内面胴部下半にNブレコ帯。	内皮、灰石、骨針、赤色粒	良好	外: 褐色 内: にぶい黄褐色	表土 十瓦台式
24	炊火土器 甕	-	胴部附加糸2線縄文 (R1+2R、LR-2L:ゾーエ)、反時計回り。内面は斜位のナデ。	石灰、灰石、角閃石、金灰母	良好	外: にぶい褐色 内: にぶい黄褐色	SD09 混入 十三瓦台式
25	炊火土器 甕	-	胴部輪縄不明の附加糸縄文 (R・S、L・Z:ゾーエ)。内面は縦・斜位のナデ。外側スス付着。焼跡による赤色化・割裂。	石灰、多量の白色粒	普通	外: 灰褐色 内: にぶい黄褐色	炊火土器混入 十瓦台式
26	炊火土器 甕	(7.8)	胴部附加糸2線縄文 (L+L)。灰部布目状。内面は縦位のヘラナデ→縦位のヘラナデ。	石灰、角閃石、骨針	良好	にぶい黄褐色	5号地下式坑混入 十瓦台式
27	炊火土器 甕	- (5.9)	胴部輪縄不明の附加糸縄文 (R・S、L:身竹四り)。灰部布目状。内面は横・斜位のナデ。外側スス付着。	石灰、角閃石、多量の白色粒、赤色粒	普通	外: にぶい黄褐色 内: 黄褐色	5号地下式坑混入 十瓦台式
28	炊火土器 甕	- 7.3	胴部輪縄不明の附加糸縄文 (R・S)。灰部布目状。内面は斜位のナデ。縦横四再立L。	多量の石灰・灰石、赤色粒	良好	暗灰褐色	4号地下式坑混入 二軒皿式
29	炊火土器 甕	- (5.6)	胴部附加糸1線縄文 (R L-2 L)。灰部布目状。内面は斜位のナデ。外側スス付着。	多量の石灰・灰石	普通	にぶい黄褐色	5X01 混入 二軒皿式
30	炊火土器 高杯	-	胴部中央。胴部縦位のヘラナデリコ→縦・斜位のナデ。内面は横・斜位のナデ。	石灰、角閃石、骨針	普通	にぶい黄褐色	SE47 混入
31	炊火土器 高杯	- (6.0)	胴部中央。胴部輪縄不明の附加糸縄文 (L・S、L・Z:反時計回り)。胴部縦・斜位のナデ→縦位横位のナデ。内面は縦位横・斜位のナデ。胴部縦位のナデ。	石灰、角閃石、赤色粒	良好	にぶい黄褐色	SD05 混入
32	炊火土器 高杯	-	胴部中央。胴部・胴部縦・斜位のナデ。内面は斜位のナデ。	石灰、角閃石、多量の白色粒・赤色粒	普通	にぶい黄褐色	SD08 混入
33	炊火土器 高杯	-	胴部中央で灰部をソケット状に飾る。胴部縦位のヘラナデリコ→横位のナデ。内面はナデ。	多量の石灰・白色粒、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	SP02 混入。表土
34	炊火土器 高杯	-	胴部中央。胴部縦・斜位のナデ。胴部輪縄不明の附加糸縄文 (L・Z:時計回り)→横位のナデ。内面は縦部斜位のナデ。	石灰、角閃石、赤色粒	普通	にぶい褐色	SE26 カクラン
35	土製品 紡錘車	-	径 15.0、高 2.0、孔径 0.6、重 126.47g。表裏面ナデ擦磨→3本線の放射状灰線文。胴部両側の工具による痕跡状。片側単孔。	石灰、多量の白色粒	普通	灰黄褐色	SG017 混入
36	石製 磨石類	-	第一站。自然産の灰面全体に磨耗痕。表面は平滑。両側面や下部部に顕著な磨痕。石粒・石灰質灰質。長さ13.05cm・幅6.3cm・厚さ4.9cm・重さ602g。				A区1号溝のカクラン内二

## 第3節 古墳時代

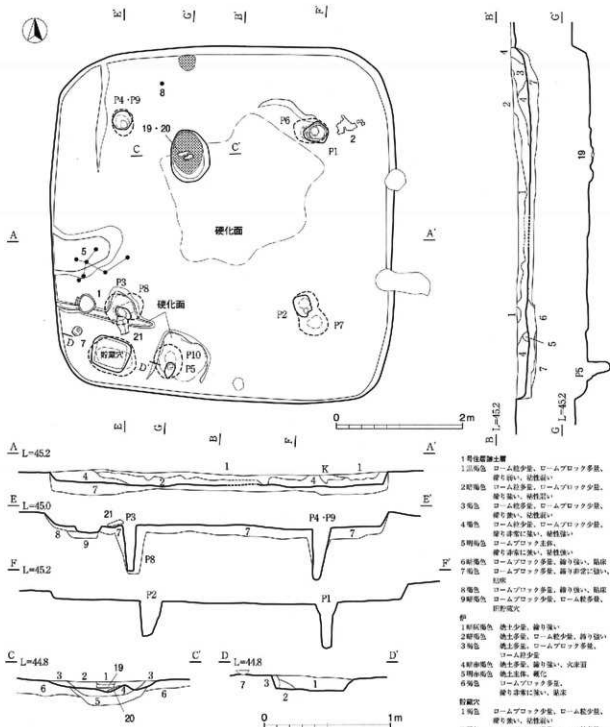
## 1 竪穴住居跡

## 1号住居跡(第94~96図)

位置 A区北端、L1グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向5.62m、東西方向5.46mを測り、台形に近い隅丸正方形を呈する。弥生時代の2・3号住居跡を壊し、1号溝によって東壁の一部が壊される。主軸方位 N-2°-W 壁 壁高は26cmを測り、やや傾斜する。床 中央部が硬化する。また、出入り口部周辺と貯蔵穴の周堤北側の2箇所が高まりが認められる。掘り方平面図は掲載していないが、壁際に幅60~100cm程の浅い溝状掘り方がある。ピット 10箇所ある。P1~4が主柱穴、掘り方で確認したP6~9が古い主柱穴、P5・10が出入口ピットであろう。P1~4の掘り方とP6~9は破線で表現してある。P1~3は直径約20cmの柱痕が断面で観察され、P1~5、P8~10の柱穴底面には直径10cm前後の灰褐色化した硬化圧痕を明瞭に検出した。P4・9はほぼ同一地点を利用しており、P4の硬化は痕を掘り抜くと、黒色土を挟んでP9の硬化圧痕が現れた。P5は斜めに穿たれている。南西隅部には隅丸形状の貯蔵穴がある。北側には硬化した周堤が設けられる。炉 竪穴中央北西寄りに位置する。平面は不整形円形で、浅い皿状を呈する。被熱は顕著である。中央部に平たい棒状に成形・焼成された土製品が2個並んで設置されており、炉石として使用したと思われる。覆土 竪穴中央最上層から壁際下層にかけて、暗~黒褐色土、褐色土、明褐色土の順に自然堆積する。遺物 貯蔵穴の西脇からほぼ完形の7の鉢が逆位で、貯蔵穴北側の周堤上から1の壺が横位の状態で出土している。P3の脇には21の台石が置かれている。所見 P5の出入り口部の高まりと貯蔵穴および周堤は軸方向がほぼ一致するが、竪穴主軸とは直交していない。貯蔵穴も新井が認められ、古い貯蔵穴(破線で表現)の底部を貼床状に埋め戻している。各主柱穴はほぼ同一位置で建て直されている。住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。

表45 1号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	十部器 壺	14.9 --	口縁部ヨコナテ、外面飾部~胴部ヘラケズリ後にヘラミガキ、口縁部内面滑順、内面胴部ナテ、胴部外面に赤彩の痕跡。	石英灰	良好	にぶい黄褐色	内面頸部以下あばた状剥離
2	十部器 壺	11.2 --	口縁部ヨコナテ、胴部~底部外面ヘラケズリ後に胴部ナテ、胴部~底部内面ナテ。	石英、雲母	普通	にぶい褐色	口縁外周スス、底部~底部内面あばた状剥離
3	土師器 壺	-- --	胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ後にヘラナテ。	雲母	良好	にぶい黄褐色	
4	土師器 壺	-- 3.7	胴部外面ヘラケズリ後にナテ、底部外面ヘラケズリ、胴部~底部内面ナテ。	石英、チャート、 雲母	良好	にぶい黄褐色	胴部~底部内面あばた状剥離
5	土師器 鉢	18.4 11.7	口縁部ヨコナテ後に外面ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部内面ヘラナテ。	石英、雲母、白色 灰	普通	褐色	外胴部中央にスス、内面胴部下あばた状剥離
6	土師器 鉢	29.8 --	口縁部内外面ハケメ。	石英、角閃石	普通	褐色	
7	土師器 鉢	12.6 11.7	口縁部ヨコナテ、胴部ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ、胴部~底部内面ナテ後にヘラミガキ。	石英、雲母、角閃石	普通	にぶい黄褐色	内口胴部中央以下に褐色物質付着
8	土師器 鉢	15.9 --	口縁部~底部外面ヘラミガキ、口縁部~底部内面ハケメ後にヘラミガキ。	石英、雲母	普通	明黄褐色	内外周縁部、底部内面あばた状剥離

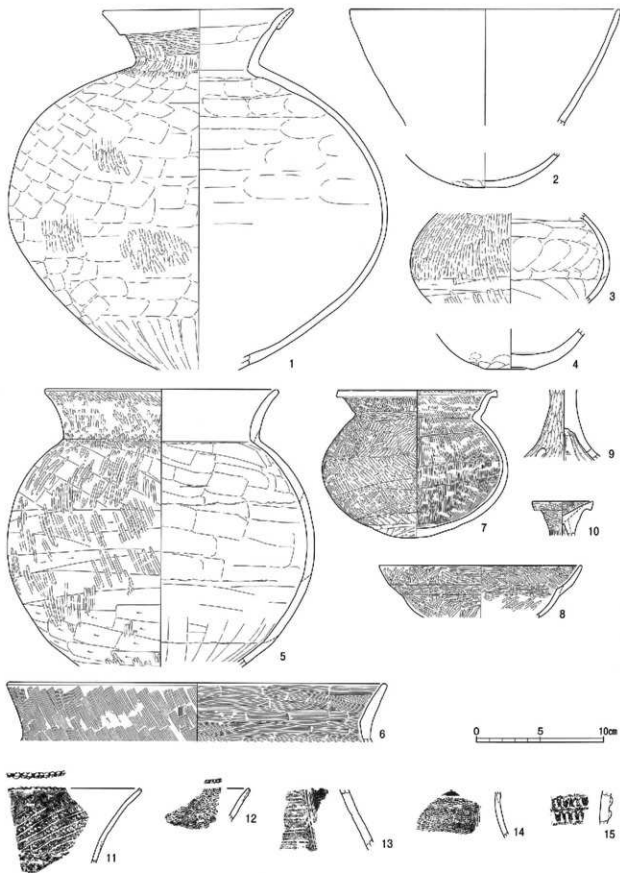


第94図 1号住居跡

- 1号住居跡土層
- 1 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 2 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 3 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 4 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 5 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 6 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 7 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 8 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 9 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 10 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 11 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 12 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 13 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 14 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 15 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 16 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 17 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 18 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 19 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 20 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 21 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 22 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 23 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 24 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 25 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 26 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 27 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 28 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 29 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 30 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 31 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 32 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 33 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 34 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 35 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 36 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 37 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 38 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 39 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 40 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 41 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 42 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 43 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 44 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 45 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 46 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 47 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 48 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 49 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い
  - 50 褐色 土層少量、ロームアブロック多量、硬り強い、粘り強い

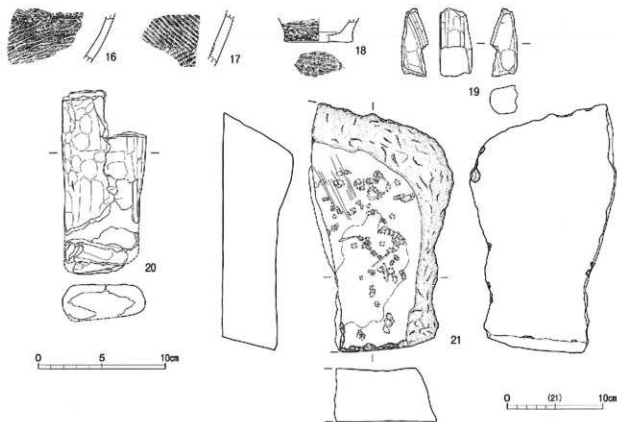
図版番号	種別	口径	特徴	出土	焼成	色調	備考
9	土師器 高杯	-	胴部3方向に透孔。胴部外面ヘラケズリ線にヘラミガキ、胴部内面ヘラナア。	雲母、角閃石、褐色粒	普通	浅黄褐色	
10	土師器 高杯	48	口縁部内外面雑なヘラミガキ。	石英、雲母	普通	淡黄褐色	





第95图 1号住居跡出土遺物①

第IV章 A区の遺構と遺物

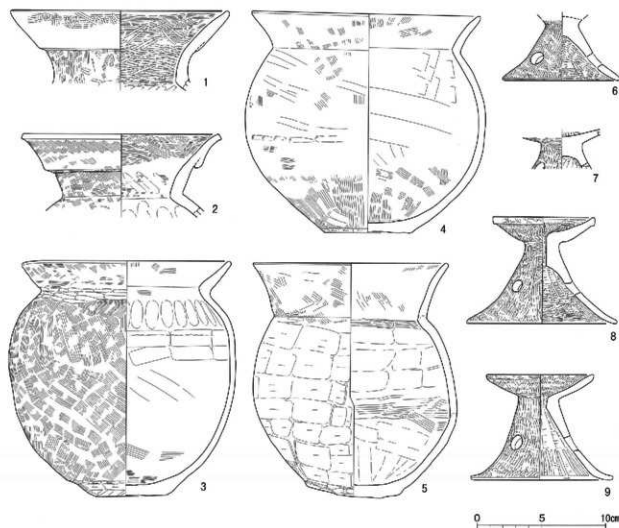


第96図 1号住居跡出土遺物②

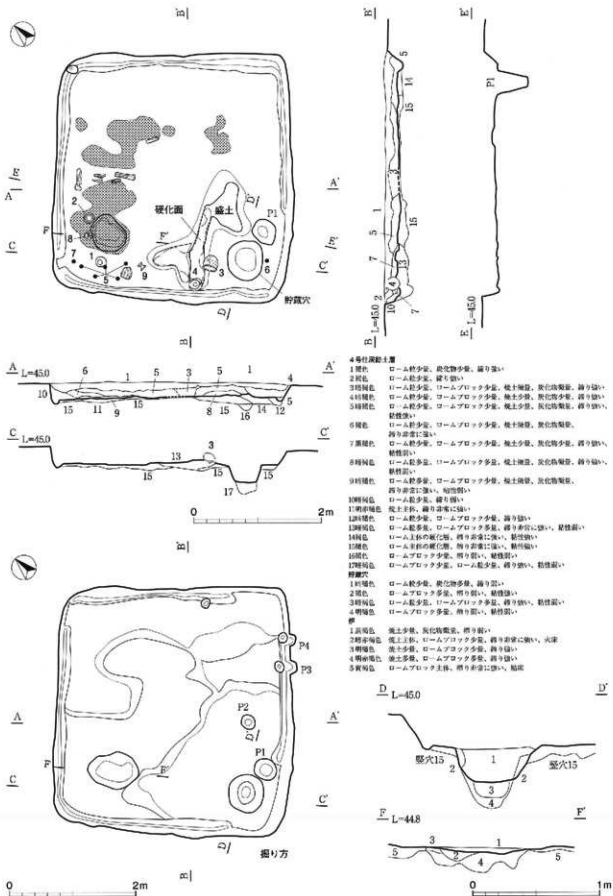
図録番号	類別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	赤生土器 皿	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部附加高2種々種文。	雲母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十三台式
12	赤生土器 皿	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の横位波状文。	石英、雲母	普通	褐色	十三台式
13	赤生土器 皿	— — —	頸部6本歯の横位直線文→縦位直線文→横位波状文。	石英、チャート	普通	褐色	十三台式
14	赤生土器 皿	— — —	頸部6本歯の縦位直線文→横位波状文。外面スス付帯。	雲母	普通	にぶい黄褐色	十三台式
15	赤生土器 皿	— — —	頸部器帯上にヘラキザミ。	雲母、角閃石	普通	にぶい黄褐色	
16	赤生土器 皿	— — —	頸部軸線不明の附加条線文(R・S)。	石英、雲母、角閃石	普通	灰黄褐色	十三台式
17	赤生土器 皿	— — —	頸部軸線不明の附加条線文(R・S、L・Z:上→下)。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十三台式
18	赤生土器 皿	— — (54)	頸部軸線不明の附加条線文(R・S)。底部布目痕。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	十三台式
19	土製品 不明		残長54cm、厚さ21cmの板状土製品。外面ナデ。	石英、チャート	普通	褐色	炉
20	土製品 不明		残長147cm、幅6.6cm、厚さ2.8cmの板状土製品。外面にナデと拍頭痕。二次的な焼熱による威嚇される。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい褐色	炉
21	石鈔 台石		欠損品。炭一筋。大型板状準の表・裏面に顕著な磨耗痕。裏面は平滑。表面に細打痕および擦痕。石材：砂岩。残存長26.25cm・残存幅15.2cm・残存厚7.2cm・重さ3850g。				平面直上

## 4号住居跡 (第97~99図)

位置 A区北端、L1~L2グリッドに位置する。規模と平面形 主軸方向3.77m×3.96m、隅丸正方形に近い。主軸方位 N-42°-W 壁 壁高は26cmを測り、やや傾斜する。床 貯蔵穴北側にある周堤盛土が硬化する。周溝はほぼ全周する。掘り方は、貯蔵穴周辺がやや深く掘り込まれている。ピット 4箇所。P1は出入口ピット。P2~4は掘り方で確認した。P3・4は堅穴壁にやや斜めに穿たれている。南西隅には、ほぼ楕円形の貯蔵穴があり、断面漏斗状である。炉 位置は北西隅に近い。平面は不整楕円形で、浅皿状を呈する。炉の東側床面は著しく被熱しており、上屋焼失時のものと推測される。覆土 1・2・10層以外からは焼土塊・炭化材が検出され、上屋の焼失が想定できる。遺物 貯蔵穴北側の周堤状の高まり部の直上から、正位・横位の状態で2点の甕(3・4)が出土している。炉の周りの床面からも、1・2の壺口縁部や8・9の器台が出土している。所見 住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。同時期の焼失事例には23号住居跡が挙げられ、炉の周りの床面が著しく焼けている点や主柱穴をもたないことが共通する。貯蔵穴施設周辺からはほぼ完形の土器が出土する事例は1号住居跡でも認められ、生活時の状況を反映している可能性がある。



第97図 4号住居跡出土遺物①



第98図 4号住居跡



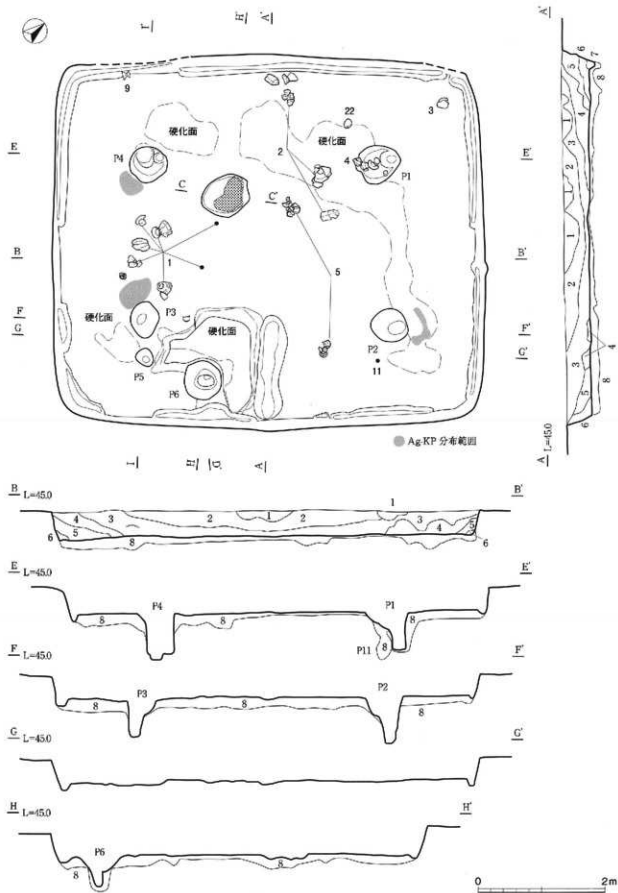
第99図 4号住居跡出土遺物②

表46 4号住居跡出土遺物観察表

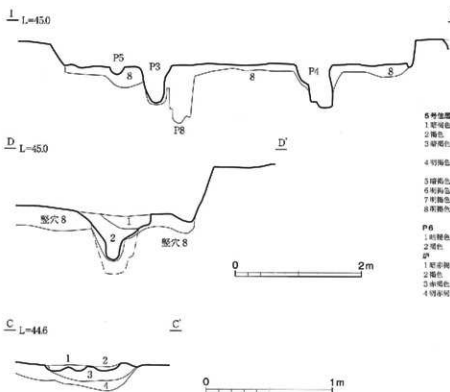
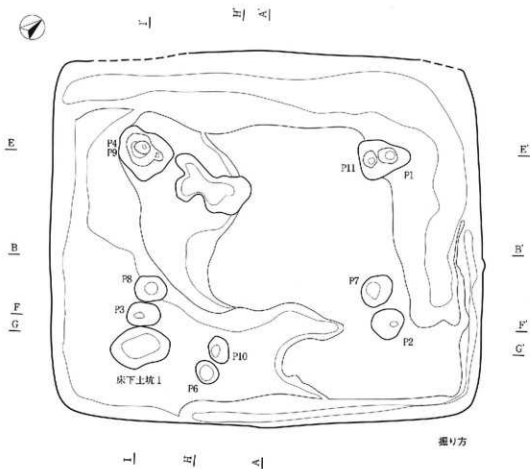
図版番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	17.2 — —	口縁部ハケメ後にヘラミガキ。	石英、チャート、 骨針	普通	褐色	胴部打ち欠き調整し 器台使用
2	土師器 壺	15.7 — —	口縁部外面ハケメ後にナデ、口縁部内面ハケメ後に塗部 ナデ。	石英、雲母、白色 粒	良好	褐色	胴部打ち欠き調整し 器台使用
3	土師器 甕	16.5 18.7 5.5	口縁部内外面ハケメ後にヨコナデ、胴部外面ナデ、胴部 外面ヘラケズリ後にハケ状具、底部外面ヘラケズリ、胴 部内面ヘラナデ、底部内面ハケメ。	石英、骨針	普通	褐色	胴外面にスス、 内面胴部中位以下 あばた状調整
4	土師器 壺	17.9 12.5 6.3	口縁部内外面ハケメ後にヨコナデ、胴部外面ハケメ後に 上半ナデ、外面胴部下端～底部ヘラケズリ、内面胴部上 半ヘラナデ、下半～底部ハケメ後にヘラナデ。	石英、雲母	普通	にぶい褐色	外面胴部上半に スス付着
5	土師器 壺	15.3 18.6 7.5	口縁部ハケ状具後にヨコナデ、胴部～底部外面端なヘラ ケズリ、内面胴部～底部ハケ状具とヘラナデ。	石英、雲母	普通	褐色	外面調整とス ス、胴部中位以 下あばた状調整
6	土師器 甕 環	— — 9.2	胴部3方向に透孔。胴部内外面ハケメ後にヘラミガキ。	石英、チャート、 白色粒	良好	褐色	
7	土師器 甕 環	— — —	胴部3方向に透孔。耳部～胴部外面ヘラミガキ、環部内 面ヘラミガキ、胴部内面ナデ。	石英、骨針	良好	明赤褐色	
8	土師器 砂台	7.8 8.5 11.7	胴部3方向に透孔。環部内外面ヨコナデ後にヘラミガキ、 胴部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリと ヨコナデ後にヘラミガキ。	石英、チャート、 骨針	普通	褐色	環部と胴部の内 面あばた状調整
9	土師器 砂台	8.4 8.3 (11.1)	胴部3方向に透孔。環部内外面ヨコナデ後にヘラミガキ、 胴部外面ヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ後に鎌なヘラ ミガキ。	石英、チャート、 骨針	良好	褐色	
10	弥生土器 壺	— — —	口縁部縄文キギザミ。口縁部輪縁不明の奇加奈縄文(L・ Z)。	雲母	普通	にぶい黄褐色	十三台式
11	弥生土器 壺	— — —	胴部4本の横位波状文、弧状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	十五台式
12	弥生土器 壺	— — —	胴部縄文帯体によるキギザミ後帯→口縁部5～6本の横 位波状文。頸部縦位波状文→横位波状文。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十五台式
13	石製品 礎石	— — —	欠損品。4面使用。表面はいずれも平滑。 石径・底径約。残存長6.1cm・幅2.55cm・厚さ1.65cm・重さ48.5g。				

## 5号住居跡 (第100～103図)

位置 A区北端、L2グリッドに位置する。規模と平面形 5.95m × 6.77mで、隅丸長方形。古代の1号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。主軸方位 N-51°-W 壁 壁高は42cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床 やや凹凸があり、主柱穴をつなぐように帯状に硬化する。P6の周堤も硬化し、主軸上に浅い溝がある。溝状掘り方を伴う。ビット 11箇所ある。P1～4が主柱穴で、掘り方面で確



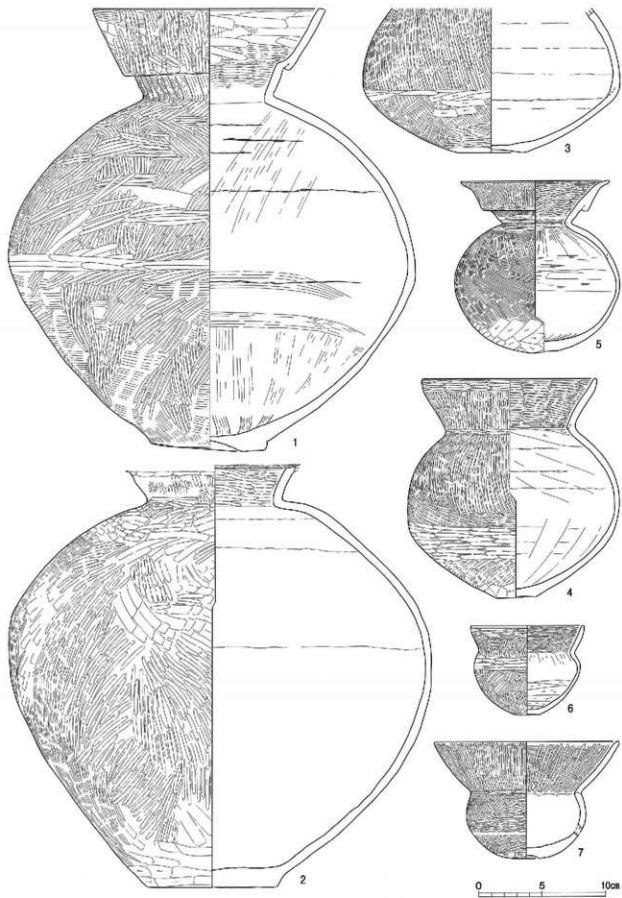
第100図 5号住居跡



5号住居跡土層

- 1 堆積色 コーム粒少量、餅り強い
  - 2 褐色 コーム粒少量、ロームブロック少量、餅り強い、粘り強い
  - 3 堆積色 コーム粒少量、ロームブロック少量、餅り強い、粘り強い
  - 4 堆積色 コーム粒少量、ロームブロック少量、餅り強い、粘り強い
  - 5 堆積色 コーム粒少量、ロームブロック少量、餅り強い
  - 6 堆積色 コームブロック多量、餅り強い、粘り強い
  - 7 堆積色 コームブロック多量、餅り強い、粘り強い
  - 8 堆積色 コーム粒多量、ロームブロック多量、餅り強い、粘り強い
- P6
- 1 堆積色 コーム粒少量、餅り非常に強い、粘り強い
  - 2 褐色 コーム粒少量、餅り強い、粘り強い
- P7
- 1 堆積褐色 粘土多量、餅り強い、粘り強い
  - 2 褐色 粘土多量、餅り強い
  - 3 堆積色 粘土多量、餅り非常に強い、火痕あり
  - 4 堆積褐色 粘土多量、ロームブロック多量、餅り非常に強い

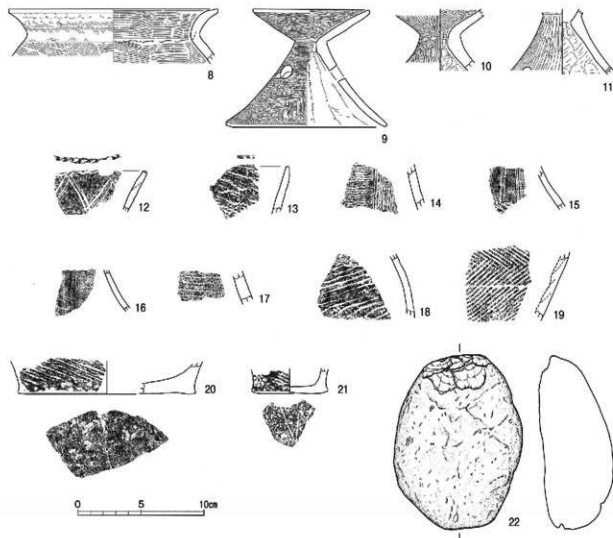
第101図 5号住居跡掘り方



第102図 5号住居跡出土遺物①



認したP7~9・11(深さ65~92cm)は古い主柱穴、P6が新しい出入口ピットで、P10が古い出入口ピットと考えられる。主柱穴配置は拡張して建替えられており、拡張規模を柱穴心々距離から測定すると、西方向に約19cm、東方向に約28cm、南方向に約58cmとなる。P2~4の脇の床面にのみ、Ag-KPブロックが検出され、新主柱穴掘削時の排土をそのまま貼床にしたのであろう。P5は掘り方調査で、その下部から貯蔵穴と推測される床下土坑1を確認した。この土坑は貼床によって埋め戻されており、古い主柱穴に伴うものと想定される。P6は断面漏斗状を呈し、硬化した盛土で囲まれる。炉 竈穴中央北西寄りに位置する。平面は不整楕円形で、浅い皿状を呈する。被熱部は東側に偏っている。平面的に炉の位置に新旧の差は認められない。覆土 褐色~暗褐色土の自然堆積状である。遺物 竈穴中央部や北壁際の覆土上層~下層にかけて、破碎した壺類が出土している。西隅付近の北壁直下からは9の完形の器台が出土している。また、P1覆土上層には壺(4)が含まれている。住居跡廃絶時にP1の柱材を抜取り、その穴に遺棄あるいは廃棄されたものと推測する。所見 住居跡の廃絶および構築時期は、古墳時代前期に比定される。



第103図 5号住居跡出土遺物②

表47 5号住居跡出土遺物観察表

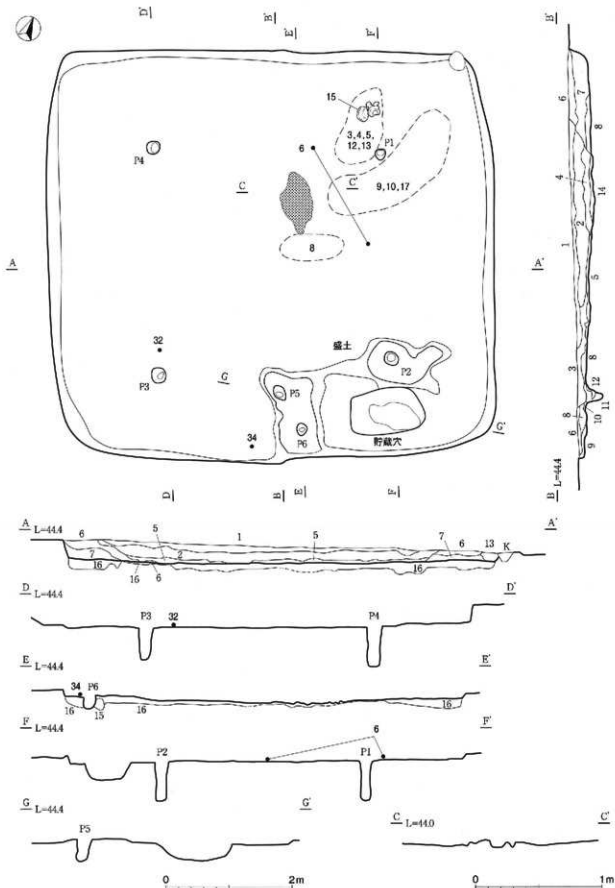
図録番号	種別 種類	口径 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	18.2 35.2 9.2	口縁部→胴部外面ハケメ後に繪なへラミガキ、底部外面ヘラケズリ、口縁部内面ハケメ後に繪なへラミガキ、胴部→底部内面ヘラケズリ。	石灰、白色粒、骨粉	良好	褐色	胴部外面に繪なへラミガキ、土一ト層
2	土師器 壺	- 10.2	胴部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリとハケメ後に繪なへラミガキ、底部外面ヘラケズリ後にナゲ、口縁部内面ヘラミガキ、胴部→底部内面ナゲ。	石灰、白色粒、骨粉	良好	褐色	口縁打ち欠き、胴部→底部内面あばた状残存
3	土師器 壺	- 5.2	胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ、胴部→底部内面ヘラケズリが陶質。	石灰、白色粒、骨粉	普通	褐色	覆上丁層
4	土師器 壺	13.8 17.4 3.1	口縁部→胴部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部下層→底部外面ヘラケズリ、口縁部内面ハケメ後にヘラミガキ、胴部内面ナゲ後に繪なへラミガキ。	石灰、白色粒、角閃石	良好	明赤褐色	胴部→底部内面あばた状残存 P: 1層
5	土師器 壺	11.7 14.7 2.9	口縁部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部外面ハケメ後のヘラミガキ陶質、胴部→底部外面ヘラケズリ後のヘラミガキ陶質、胴部外面ヘラケズリ、胴部→底部内面ヘラケズリ。	石灰、角閃石、白角閃石	良好	褐色	覆上丁層
6	土師器 壺	8.9 7.1 1.8	口縁部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後のヘラミガキ陶質、底部外面ヘラケズリ、胴部→底部内面ナゲナゲ、胴部→底部内面ヘラケズリ。	石灰、チャート、角閃石	普通	褐色	胴部→底部内面あばた状残存
7	土師器 壺	14.6 9.3 2.2	口縁部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部→底部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部内面ナゲ。	石灰、角閃石、骨粉	普通	にぶい黄褐色	胴部→底部内面あばた状残存
8	土師器 壺	(16.5)	口縁部ハケメ後に口コナゲと割開痕、胴部内面ハケメ。	石灰、角閃石	良好	褐色	
9	土師器 壺	9.2 9.4 12.7	胴部3方向に透孔。受部→底部外面ヘラミガキ、受部内面ヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ。	石灰、チャート、角閃石	普通	褐色	覆上丁層
10	土師器 壺	-	受部→底部外面ヘラミガキ、受部内面ハケメ後にヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ。	石灰、角閃石、白色粒	普通	にぶい赤褐色	
11	土師器 壺	-	胴部3方向に透孔。胴部外面ヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ。	石灰、角閃石、骨粉	普通	褐色	覆上丁層
12	弥生土器 壺	-	口縁部縁文のみキザミ。口縁部4本處の山形文(反時計回り)。	石灰、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十五台式
13	弥生土器 壺	-	口縁部縁文原形によるキザミ。口縁部縁文不明の附加条縄文(R-Z)。	石灰、チャート、角閃石	普通	褐色	十五台式
14	弥生土器 壺	-	胴部4本處の縦位直線文→横位直線文。	石灰、骨粉	普通	にぶい黄褐色	十三台式
15	弥生土器 壺	-	胴部縁文不明の附加条縄文(L-Z)→胴部4本處の縦位区画直線文→横位区画直線文→横位直線文。	石灰、骨粉	普通	にぶい黄褐色	十五台式
16	弥生土器 壺	-	胴部5本處の縦位直線文→横位直線文。	石灰、骨粉	普通	にぶい黄褐色	十五台式
17	弥生土器 壺	-	胴部7～8本處の横位直線文。	石灰、骨粉多量、骨粉、チャート	普通	にぶい黄褐色	
18	弥生土器 壺	-	胴部附加条2種縄文(R+)→胴部7本以上の縦位区画直線文。	石灰、骨粉	普通	にぶい黄褐色	十五台式
19	弥生土器 壺	-	胴部縁文不明の附加条縄文(R-S-L-Z+上→下)。	石灰多量、骨粉	普通	にぶい褐色	二軒型式カ
20	弥生土器 壺	14.0	胴部縁文不明の附加条縄文(L-Z)。底部有目尻。	石灰、チャート、白色粒	普通	にぶい黄褐色	
21	弥生土器 壺	- 6.0	胴部原形不明の縄文。底部本縁文。	石灰、角閃石	良好	褐色	
22	石製品 板石	-	自然産の上層部に割開痕。石材:チャート。長さ138cm・幅10.13cm・厚さ59cm・重さ1087.2g。				覆上丁層

## 8号住居跡(第104~108図)

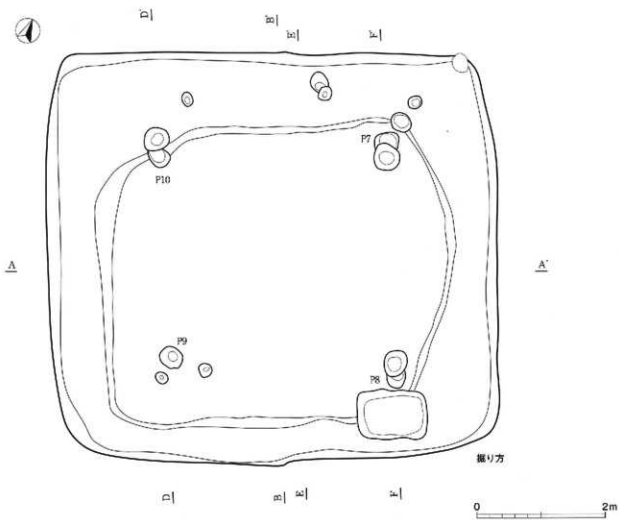
位置 A区北端、M2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向6.55m、東西方向7.07mを測り、隅丸正方形に近い形状を呈する。弥生時代の9号住居跡を破壊する。主軸方位 N-26°-Wを指向し、12・33号住居跡に非常に近似する。壁 壁高は8~31cmを測り、やや傾斜する。床 貯蔵穴~出入り口部にかけて硬化した周堤状盛土がみられる。住居床下の掘り方は壁際がわずかに窪んでいる。ピット 10箇所ある。P1~4が支柱穴、掘り方面で確認したP7~10が古い支柱穴、P5・6がいわゆる出入口ピットであろう。P1~4は直径18~24cmを測り、それぞれ軟弱で均質な黒色土・褐色土の柱痕とローム質土の根固めを検出した。新旧支柱穴はほぼ同位置に掘削されており、上層規模に大きな変化はなかったと推測される。P6には柱痕を検出できなかったが、非常に軟弱な土質であった。旧支柱穴(深さ59~69cm)はロームブロックを多く含む土で一様に埋め戻されていた。南東隅部には、隅丸長方形の貯蔵穴があり、同一地点での造り替えを確認した。古い貯蔵穴は掘り方面で確認でき、暗褐色土で底面・壁面を硬く埋め戻して、一回り小さい規模の新しい貯蔵穴を構築していた。貯蔵穴の北側には明瞭に硬化した周堤状の盛土があり、P2はこの盛土を掘り込んでいる。炉 竈穴中央北寄り位置し、ほぼ主軸ライン上である。平面は菱形状の不整形円形である。火床は赤色硬化し掘り込みはない。覆土 竈隙から竈穴中央最上層にかけて、明褐色土・褐色土・暗~黒褐色土の順に自然堆積する。遺物 P1の周りと炉の南東側一帯(破線で表示)で、多量の土器が出土している。該個体の甕や鉢等が、竈穴北東隅から廃棄された状況で、壁際の覆土上層から炉付近の床面直上まで、埋没上のレンズ状堆積と同様の出土状態を呈する。床面からは32・34などの磨石・砥石類が出土している。また、南西隅部付近の覆土中位から、炭化材を1点検出した。所見 支柱穴・貯蔵穴は造り直しているが、炉や竈穴にはその痕跡が認められない。住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。

表48 8号住居跡出土遺物観察表

図面番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	土師器 壺	(154) -- --	口縁部内外面コ罗纳後にヘラミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	褐色	口縁部内面あばた状剥離
2	土師器 壺	-- -- --	口縁部内外面ハケミ後、胴部外周部帯付後にヘラミガキと刷毛。胴部外面ヘラミガキ、胴部内面折衝痕。	石英、角閃石、骨針	普通	褐色	
3	土師器 壺	-- -- 49	胴部内外面ナデ、胴部木葉痕。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	
4	土師器 片	92 55 16	口縁部内外面ヘラミガキ、胴部一局部外面ヘラミガキ後に胴部ヘラミガキ、胴部一局部内面ヘラミガキ。	石英、角閃石	普通	褐色	胴部一局部内面あばた状剥離
5	土師器 壺	197 261 62	口縁部内外面コ罗纳後にハケミと内面ヘラミガキ、胴部外面ヘラミガキ後に上中ハケミ、胴部外面ヘラミガキ、胴部一局部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、 骨針	普通	褐色	外面にススと吹きこぼれ痕、内面あばた状剥離
6	土師器 壺	241 -- --	口縁部外面コ罗纳後にハケミ、胴部外面ヘラミガキ後にハケミ、口縁部一局部内面ヘラミガキ後にヘラミガキ。	石英、チャート、 骨針	普通	にぶい褐色	外面胴部中位にスス付
7	土師器 片	(181) -- --	口縁部内外面コ罗纳後に埋らなヘラミガキ、胴部外面ヘラミガキ後に埋らなヘラミガキ、胴部内口の一部にハケミ、胴部内面ヘラミガキ。	角閃石、雲母	普通	にぶい黄褐色	
8	土師器 壺	(177) -- --	口縁部内外面コ罗纳後にハケミと内面ヘラミガキ、胴部外面ミガキ状のナデ、胴部外面ハケミ、胴部内面ヘラミガキ。	石英、雲母	普通	にぶい褐色	

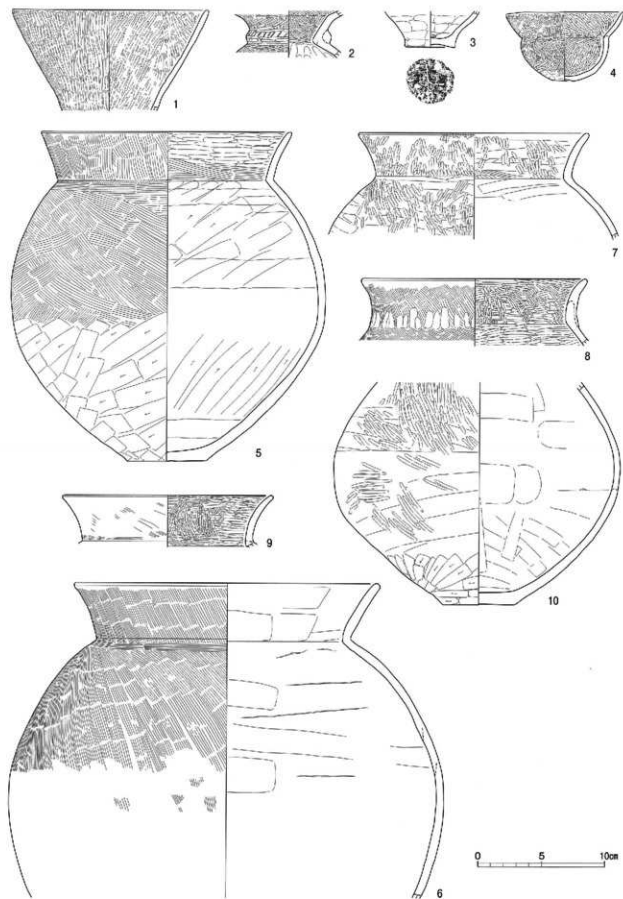


第104図 8号住居跡

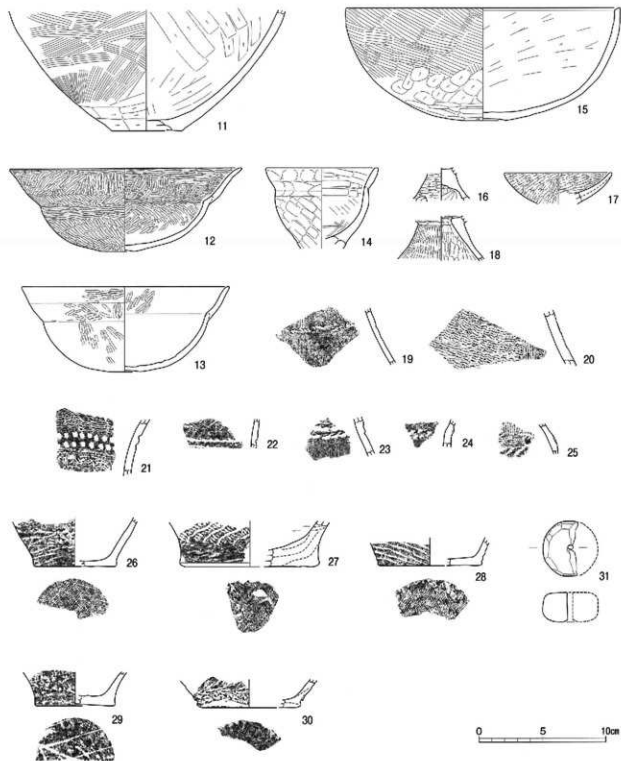


- 8号住居跡1層
- 1層彩色 塗り跡い
  - 2層彩色 ローム粒少量、塗り跡い
  - 3層彩色 塗り跡い、磁器跡い
  - 4層彩色 ローム粒少量、粘土多量、塗り跡い、磁器跡い
  - 5層彩色 ローム粒多量、ロームブロック少量、塗り跡い、磁器跡い
  - 6層彩色 塗り跡い、磁器跡い
  - 7層彩色 塗り跡い、磁器跡い、磁器跡い
  - 8層彩色 ローム粒多量、ロームブロック少量、塗り跡い、磁器跡い
  - 9層彩色 ローム粒多量、塗り跡い、磁器跡い
  - 10層彩色 ローム土層、塗り跡い、磁器跡い
  - 11層彩色 ロームブロック少量、塗り跡い、磁器跡い
  - 12層彩色 ローム粒多量
  - 13層彩色 ローム質土
  - 14層彩色 ローム粒多量、粘土多量、塗り跡い、戸取土
  - 15層彩色 磁器跡い、ロームブロック多量、ローム粒多量、塗り跡い、磁器跡い
  - 16層彩色 ロームブロック多量、塗り跡い、P.5塗り方

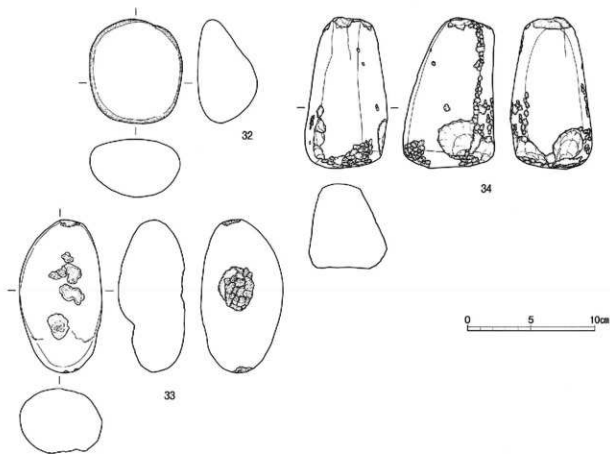
第105図 8号住居跡掘り方



第106図 8号住居跡出土遺物①



第107図 8号住居跡出土遺物②



第108図 8号住居跡出土遺物③

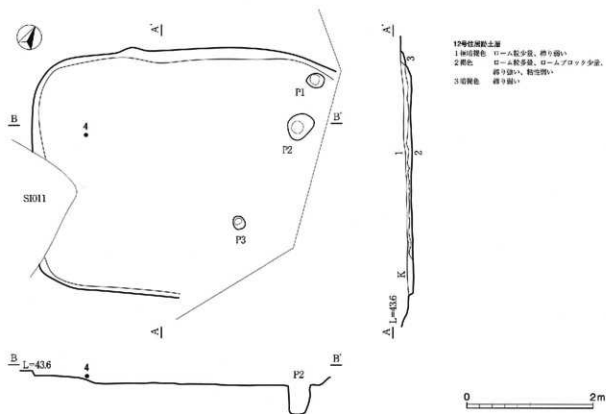
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土師器 甕	(16.5) — —	口縁部外面ハケメ後にヨコナデ、口縁部内面ヨコナデ後にヘラミガキ。	石灰、角閃石、骨針	良好	明赤褐色	口縁部外面に吹きこぼれ痕
10	土師器 甕	— — 5.6	外面腹部上半ハケメと緑なヘラミガキ、胴部下平ヘラケズリ後に緑なヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ、胴部～底部ヘラナデ。	石灰、角閃石、雲母	良好	にぶい黄褐色	外面胴部中位にスス付着
11	土師器 甕	— — 5.4	胴部外面ハケメ、胴部下端～底部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部内面ヘラケズリ後にヘラナデ。	石灰、チャート、雲母	良好	褐色	底部内面あばた状剥離
12	土師器 鉢	(18.2) 6.6 2.6	口縁部内外面ヘラミガキ、体部～底部外面ヘラケズリ後に体部ヘラミガキ、体部内面ヘラミガキ。	石灰、チャート、角閃石	普通	褐色	体部内面あばた状剥離
13	土師器 鉢	(16.3) 8.7 2.5	口縁部内外面ヨコナデ後に緑なヘラミガキ、体部～底部外面ヘラケズリ後に体部緑なヘラミガキ。	石灰、チャート、角閃石	普通	褐色	内面体部～底部あばた状剥離
14	土師器 鉢	(8.9) — —	口縁部外面ヨコナデと控断面、体部外面ヘラナデ、口縁部～体部内面ヘラナデ。	チャート、雲母	普通	明赤褐色	口縁部外面にスス付着
15	土師器 鉢	21.6 13.9 3.2	薬末成分の転用（口唇部に黒染）。口唇部はヘラケズリにより曲がり、体部～底部外面ヘラケズリ後に体部ハケメ、体部～底部内面ヘラケズリ後にヘラナデ。	石灰、雲母	良好	褐色	体部外面スス、内面体部～底部あばた状剥離



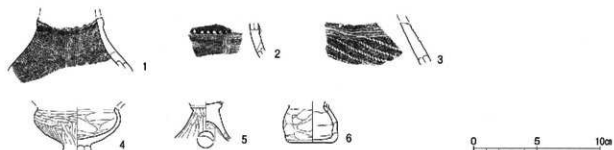
国版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
16	上縁部 高坏	-	胴部3方向に通孔。胴部外面ヘラミダキ、胴部内面ナデ。	石英、白色胎	良好	褐色	
17	土師器 器台	85	受部内外口ヘラミダキ。	石英、角閃石、骨針	良好	棕色	
18	土師器 器台	-	胴部外口ヘラミダキ、胴部内面ヘラナデ。	石英、チャート、角閃石	普通	明赤褐色	
19	赤土土器 壺	-	胴部3本指の縦位置線文と同様の三具による横位刺突文。	石英、雲母、チャート	普通	褐色	
20	赤土土器 壺	-	胴部4本指の縦位置線文→横位刺突文。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	十三台式
21	赤土土器 壺	-	胴部3～6本指の横位区角線状文→縦位置線文→横位刺突文。区画線状文上に2条の横位刺突文。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十三台式
22	赤土土器 壺	-	胴部隆帯3条。口縁部胎体不明の縄文。	雲母	普通	灰黄褐色	
23	赤土土器 壺	-	胴部キザミ隆帯3条→5本指の縦位置線文。	チャート、骨針	普通	褐色	
24	赤土土器 壺	-	胴部隆帯上にヘラ状三具先鋒による刺突列。	石英	普通	にぶい黄褐色	
25	赤土土器 壺	-	胴部輪縁不明の附加糸縄文(R・S)→胴部6本指の横位区画線文→縦位置線文→内形刺突文。	雲母	普通	にぶい黄褐色	
26	赤土土器 壺	66	胴部輪縁不明の附加糸縄文(R・S)。底部布目紋。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十三台式
27	赤土土器 壺	110	胴部附加糸2種縄文(R+H)。底部布目紋。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十三台式
28	赤土土器 壺	80	胴部輪縁不明の附加糸縄文(L・Z)。底部布目紋。	石英、骨針	普通	にぶい黄色	十三台式
29	赤土土器 壺	64	胴部胎体不明の縄文。底部木葉紋。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	
30	赤土土器 壺	82	胴部輪縁不明の附加糸縄文(R・S)。底部布目紋。	石英、雲母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
31	土師器 紡錘車	-	径4.5cm、厚さ2.3cm、孔径4cm。わずかに多角形状を呈する。	雲母、骨針	普通	灰褐色	
32	石製 磨石類	-	底→円。自然理の表面全体に磨耗痕。上・下縁部に磨打痕。表・裏面に凹穴。被熱により赤褐色に変色。 石材：石英安山岩。長さ12.1cm・幅6.5cm・厚さ3.2cm・重さ507.0g。				床面直上
33	石製 磨石	-	自然理の表面に磨耗痕。石材：ホルンフェルス。 長さ8.25cm・幅7.2cm・厚さ4.7cm・重さ378.4g。				床面直上
34	石製 磨石	-	底→扇。6面使用。底面はいずれも平滑。上・下縁部や各端面の縁上に磨打痕。 石材：緑色片麻。長さ11.9cm・幅6.45cm・厚さ7.1cm・重さ725.4g。				床面直上

12号住居跡（第109・110図）

位置 A区北東端、N2グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向3.89m、東西方向4.78mの隅丸形状と推測する。11号住居跡に西壁の一部を壊されている。主軸方位 N-21°-W 壁 壁高は17cmを測り、ほぼ垂直に近い。床 はほぼ平坦である。ピット 浅い柱穴が3箇所あるが、いずれも主柱穴ではない。炉 覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、弥生時代の住居跡の土層堆積と似た堆積状況である。遺物 覆土中から少量の弥生土器片と4・5の土師器高坏、器台、6のミニチュアの壺が出土している。所見 炉と主柱穴が認められないことから、竪穴状遺構と考えられる。時期は、古墳時代前期と考えられる。



第109図 12号住居跡



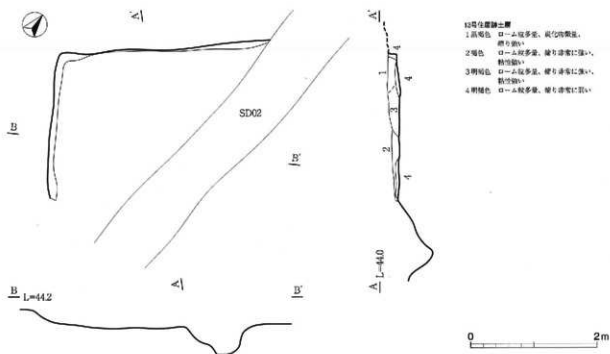
第110図 12号住居跡出土遺物

表 49 12号住居跡出土遺物観察表

図面番号	類別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 豆	— — —	型柄深い押捺器→3本筋の縦位並線文→横位並線状文、内面は縦・斜位のナデ。	石英、長石	良好	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
2	弥生土器 壺	— — —	口部は舟橋状工具による刺突を施した器→4本筋の縦位並線文（反時計回り）→縦位並線文、横位並線状文。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい黄褐色	十五台式
3	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条2種編文（L+L）→胴部4本筋の横位並線文（反時計回り）→縦位並線文、横位並線状文。内面は横位のナデ。	石英	良好	にぶい黄褐色	十五台式
4	土師器 高坏	— — —	外面は横・斜位のミガキ。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	にぶい黄褐色	覆土中層
5	土師器 高坏	— — —	外面は横位のミガキ。内面は縦位のナデ。臀部3方向に透孔。	石英、赤色粒	普通	黒色	
6	土師器 ミニチュア甕	— — 34	外面は横・斜位のナデ。内面は横なナデ。	石英、長石、角閃石	良好	にぶい黄褐色	

## 13号住居跡（第111図）

位置 A区北端、M2～N2グリッドに位置する。規模と平面形 東西方向（3.39）m、南北方向（2.33）m。南側は地形の傾斜によって消失し、堅穴中央部には攪乱が入り、東側は2号溝によって壊されている。主軸方位 — 壁 壁高は16cmを測る。床 わずかに凹凸があり、掘り方はない。ピット — 炉 — 覆土 褐色～黒褐色土による自然堆積である。遺物 図示の困難な細片が出土している。所見 遺物からは時期を特定できないが、覆土の特徴は古墳時代の住居跡に類似する。



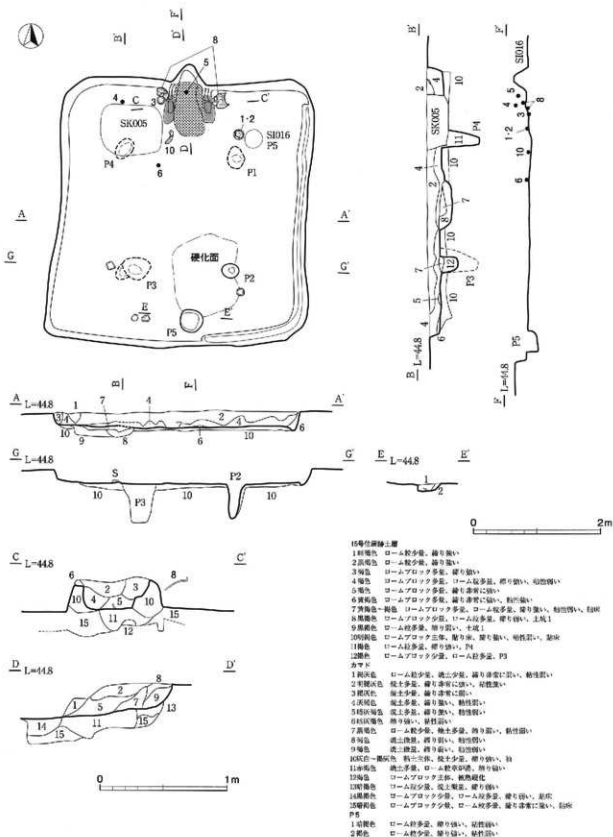
第111図 13号住居跡

## 15号住居跡(第112~114図)

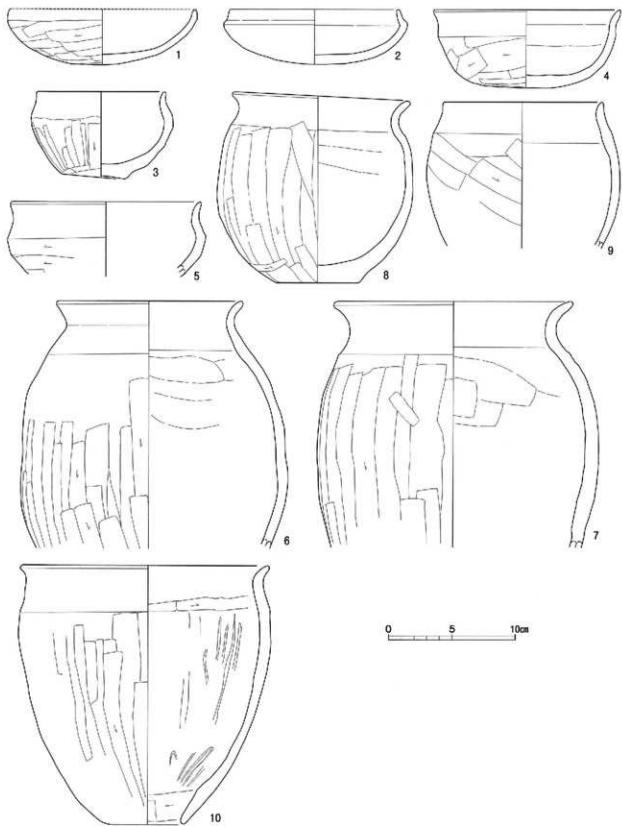
位置 A区北端、K3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向4.27m、東西方向4.07mを測り、隅丸縦長長方形を呈する。弥生時代の16号住居跡を壊している。竪穴北西部は5号土坑によって壊されている。東壁～南壁中央部にかけての床面の縁には周溝がみられる。主軸方位 N-1°-E 壁壁高は24cmを測り、傾斜している。床 やや凹凸があり、P2とP5の周辺が硬化する。北壁周辺の掘り方が幅広い溝状を呈する。ピット 5箇所ある。P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットである。P1・3・4は掘り方調査時に確認した。竪穴中央部西壁寄りには、不整形形の土坑1があり、床面を壊した後で埋め戻され、貼床で閉塞されている(7～9層)。カマド 北壁中央に付設され、煙道部は16号住居跡の床面と覆土を切り込んで構築されている。両袖は良好に残り、赤変化も顕著である。覆土 均質な褐色～黒褐色土による自然堆積状を呈する。遺物 カマド右袖脇からはほぼ完形の8の土師器甕が、左袖脇からは3の土師器甕が出土している。P1付近の床面からは、1・2の2点の土師器甕が重ねられた状態で出土し、P3脇の床面からは扁平で正方形の板状自然礫が置かれたように出土している。丸底の坏、やや深身でL縁部が小さく外反する鉢、甕や小型甕、胴部が膨らんだ単孔式の甕など、体部ヘラケズリの6世紀後半頃の土器が主体となっている。所見 住居跡の時期は、古墳時代後期6世紀後半頃と考えられる。

表50 15号住居跡出土遺物観察表

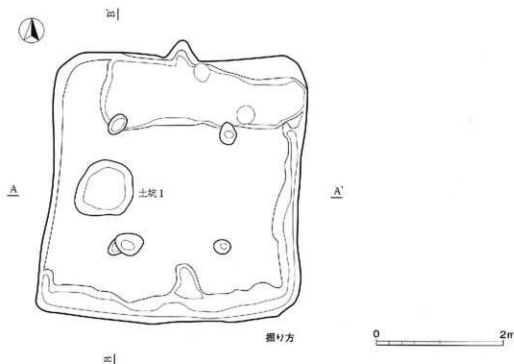
図版番号	種別 図様	口徑 器高 器底	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	14.8 4.5 —	体部外面ヘラケズリ、内面ココナデ。	長石、石英、骨針	良好	棕色	床面直上
2	土師器 坏	(13.2) — 8.4	体部外面厚孔。	長石、石英、内陶石	良好	褐色	床面直上
3	土師器 坏	11.2 6.9 5.8	口縁部内外面ココナデ、体部外面縦方向ヘラケズリ。	長石、石英	良好	によい白色	覆土下層
4	土師器 坏	14.6 6.2 —	口縁部内外面ココナデ、体部外面ナデ後ヘラケズリ。	長石、石英、骨針	普通	によい赤褐色	覆土上層
5	土師器 坏	(14.8) — —	口縁部内外面ココナデ、体部外面縦方向ヘラケズリ。	石英	普通	赤褐色	カマド
6	土師器 甕	14.0 — —	口縁部内外面ココナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラケズリ。	長石、石英、骨針	普通	褐色	覆土中層
7	土師器 甕	(18.8) — —	口縁部内外面ココナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラケズリ。	長石、石英	普通	によい褐色	
8	土師器 甕	13.7 14.9 6.5	口縁部内外面ココナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラケズリ。	長石、石英	普通	によい白色	90% 覆土下層
9	土師器 小型甕	12.4 — —	口縁部内外面ココナデ、胴部外面斜方向ヘラケズリ、内面ココナデ。	長石、石英	普通	によい棕色	
10	土師器 甕	(19.6) 20.5 (6.0)	口縁部内外面ココナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ミガキ。底部単孔式。	長石、石英	良好	によい白色	90% 覆土下層



第112図 15号住居跡



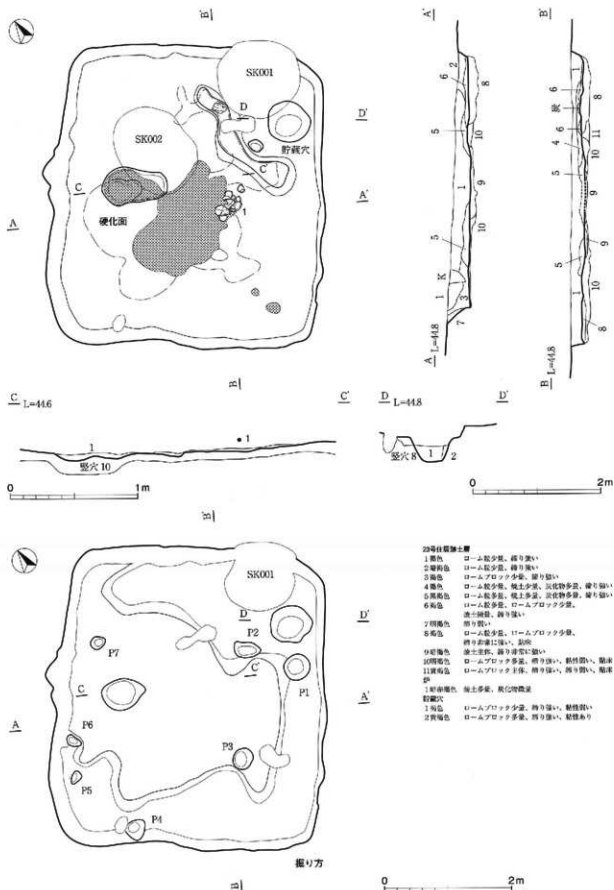
第113図 15号住居跡出土遺物



第114図 15号住居跡掘り方

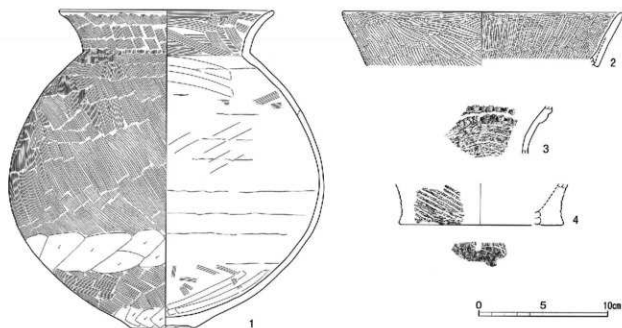
## 23号住居跡 (第115・116図)

**位置** A区北端、L2～M2グリッドに位置する。規模と平面形 4.81 m × 4.31 mの隅丸長方形状を呈する。1・2号土坑によって一部壊されている。床面にはピット状の攪乱も多数みられた。主軸方位 N - 53° - Wを示し、5号住居跡に近似する。壁 壁高は37cmを測り、傾斜して立ち上がる。床 凹凸があり、あまり平坦・水平ではない。中央部と、貯藏穴西側の周堤盛土が硬化する。また、床面中央部は広範囲に著しく被熱しており、4号住居跡との類似性が注意される。ピット 7箇所ある。P 1 (深さ32cm) が通称出入口ピット、P 4・5・6・7 (各深さ22cm・22cm・19cm・10cm) が壁柱穴、P 2・3は用途不明である。東隅には貯藏穴と考えられる円形の土坑を確認した。この土坑の周囲には、不整形な周堤状の高まりがある。炉 中央部北寄りに位置する。平面は不整形円形で、浅い皿状を呈する。被熱による赤変硬化は著しい。被熱範囲は炉の南西側に広く展開している。覆土 褐色～暗褐色土の自然堆積状である。遺物 壁穴中央部の覆土下層から、甕のほぼ完形個体(1)が出土した。覆土中～床面からは少量ながら炭化材や焼土ブロックが検出されている。所見 床面の炉以外の広い被熱範囲は上屋焼失に関わる痕跡とみられる。住居の時期は、古墳時代前期に比定される。



第115図 23号住居跡





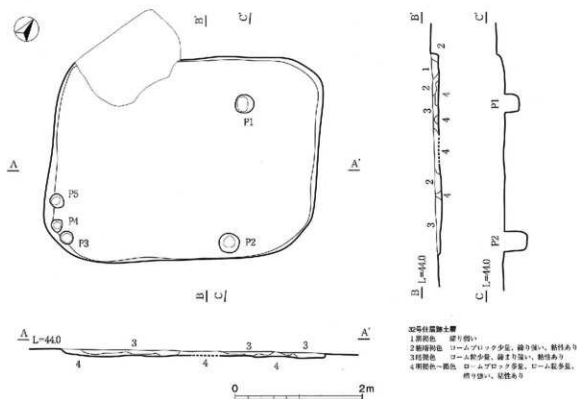
第116図 23号住居跡出土遺物

表51 23号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器名	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	16.8 25.3 4.8	口縁部内外面ヨコナデ後にハケメ、胴部～底部外面ヘラケズリ後に胴部ハケメ、胴部～底部内面ハケメ後にヘラナデ。	石灰、チャート、角閃石	良好	赤色	内面胴部～底部あばた状遺跡
2	土師器 土	21.8 —	口縁部内外側ハケメ後にヘラミガキ。	雲母、角閃石、骨針	良好	明赤褐色	口縁部外面赤彩の残跡。
3	弥生土器 甕	— —	胴部押捺陰帯。陰帯の上下は歯数不明の横位波状文。	石灰、雲母	普通	にぶい黄褐色	十五台式
4	弥生土器 甕	— — 12.8	胴部附加糸1種横文(RL+2L)、底部木製痕。	石灰多量	普通	褐色	

## 32号住居跡 (第117図)

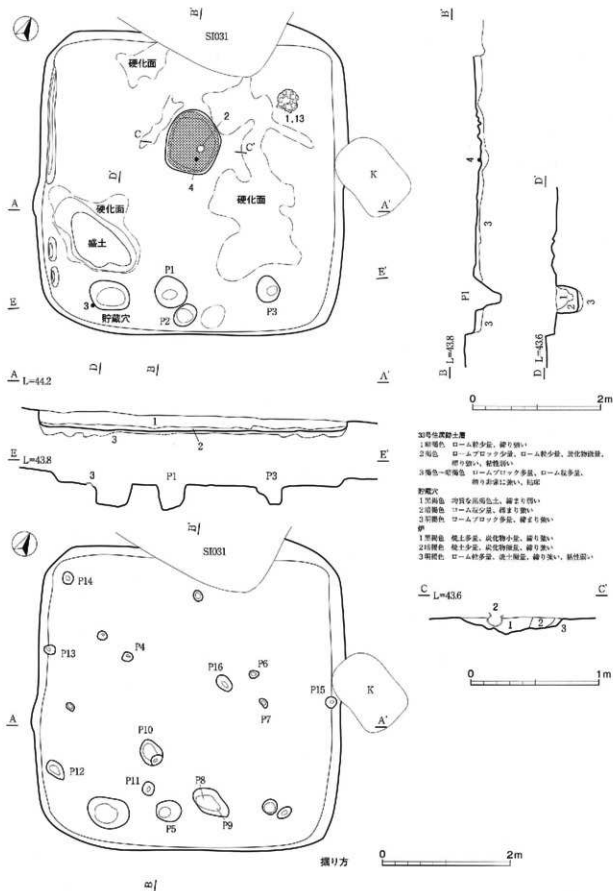
**位置** A区北東部、M3グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北方向3.2m、東西方向4.19mを測り、平行四辺形に近い隅丸長方形である。北東隅は攪乱に壊されている。 **主軸方位** N-27°-W 壁 壁高は11cmを測り、傾斜する箇所と垂直に立ちあがる部分がある。 **床** 平坦で、掘り方はない。 **ピット** P1・2・3・4・5 (各深度35cm・28cm・30cm・36cm・25cm)、いずれも支柱穴ではない。P1・4は断面観察で柱痕と根固めを検出した。 **炉** 覆土 褐色～暗褐色土の自然堆積状を呈する。 **遺物** 図示できない土器細片がわずかに出土している。 **所見** 出土遺物に乏しいため時期を特定できないが、覆土の色調・土質、平面形は古墳時代前期の住居跡に似ている。



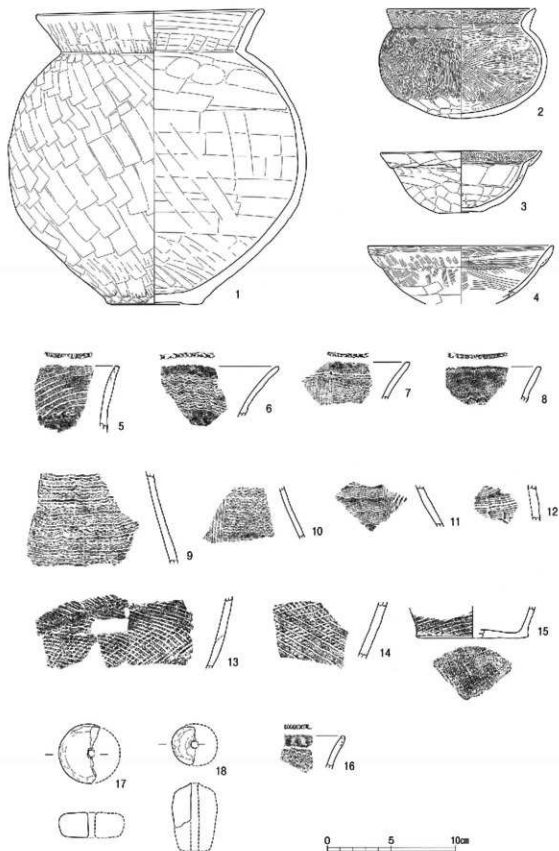
第117図 32号住居跡

### 33号住居跡 (第118・119図)

**位置** A区北東部、M3グリッドに位置する。規模と平面形 4.80m × 4.82mの隅丸正方形。31号住居跡に北壁中央を壊されている。主軸方位 N-25°-W、8・12号住居跡に近似する。壁 壁高は24cmを測り、やや傾斜する。床 中央部東側や炉の周り、貯蔵穴北側にある周堤盛土などが部分的に硬化する。ピット 床面で3箇所 (P1~3)、掘り方面で小ピットが13箇所 (深さ10~35cm・平均22cm) ある。P1が出入口ピットで、柱材採取痕を確認できた。P2 (深さ17cm) も出入口に関係する柱穴であろう。P3 (深さ30cm) の用途は不明である。南西隅部には、平面形が隅丸長方形の貯蔵穴があり、底面はローム質土で埋め戻されていた。貯蔵穴の北側には硬化した周堤状の高まりが見られる。炉 中央部の北寄りに位置する。平面不整形円形で浅い皿状を呈している。全体に赤変硬化が顕著である。覆土 褐色土・暗褐色土の2層で、自然堆積であろう。遺物 壁穴北東隅付近の覆土下層から、ほぼ完形の1の甕が横位につぶれた状態で出土している。炉からも完形の2の鉢が出土しているが、火床面には接地しておらず、住居廃絶時の遺棄遺物かどうか判断が難しい。貯蔵穴脇の床面からは、ほぼ完形の3の鉢が逆位で出土している。また、覆土中から土製紡錘車と土錘が出土している。所見 周溝は西壁にのみ認められている。壁穴・炉の造り替えは認められなかったが、2箇所の出入口ピットと貯蔵穴の底部高上げは、部分的な造り替え痕跡と判断できる。住居跡は、古墳時代前期に比定される。



第118図 33号住居跡



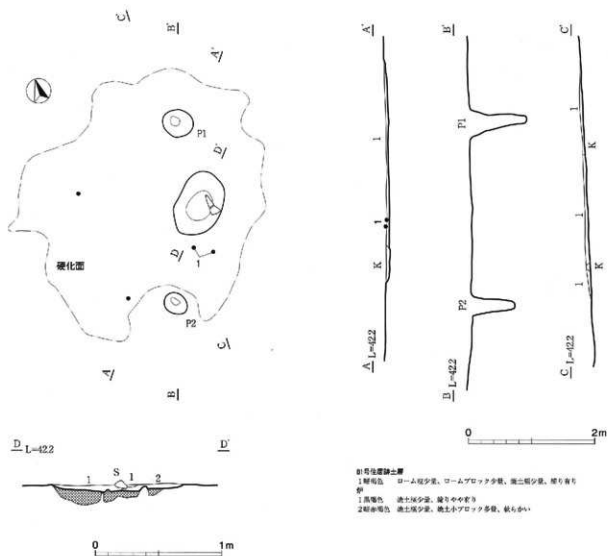
第119図 33号住居跡出土遺物

表 52 33号住居跡山土遺物観察表

図版 番号	種 別 部 種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	十編器 蓋	178 235 74	口縁部コナテ後に頸部外面ナテ、胴部～底部外面ヘラケズリ後に縁面ヘラケテ、口縁部～底部内面ヘラケテ。	石英多量、炭母	良好	褐色	表上下層
2	土器器 鉢	116 87 —	口縁部コナテ後にヘラミガキ、胴部～底部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部～底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、角閃石	普通	褐色	中
3	上頸部 鉢	126 49 3.0	口縁部外面強いナテ後に縁面ヘラミガキ、胴部～底部ヘラケズリ後に縁面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ、胴部～底部内面ヘラケズリ後に縁面ヘラミガキ。	石英、雲母、角閃石、骨針	普通	明茶褐色	蓋縁内外面に黒珪灰面露上
4	十編器 鉢	145 — —	口縁部～胴部内外面ハケテ、底部外面ヘラケズリ。	炭母、骨針	普通	褐色	中
5	弥生土器 蓋	— — —	口唇部ヘラキザミ。口唇部輪縁不明の附加条縄文(R・S)。胴部2条の押型附帯。	炭母、骨針	普通	明茶褐色	十玉白式
6	弥生土器 鉢	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部6本位の横位線状文(下→上)。	雲母、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十玉白式
7	弥生土器 蓋	— — —	口縁部5本位・3条一帯位の縦位直線文→横位直線文。	石英、炭母	普通	にぶい黄褐色	十玉白式
8	弥生土器 蓋	— — —	口唇部ヘラキザミ。口唇部無文(横位のナテ)。胴部押型附帯。	炭母	普通	にぶい黄褐色	
9	弥生土器 鉢	— — —	胴部4本位の縦位直線文→横位直線文。	石英、雲母、骨針	普通	明茶褐色	十玉白式
10	弥生土器 蓋	— — —	胴部4本位の縦位直線文→横位直線文。	炭母	普通	にぶい黄褐色	十玉白式
11	弥生土器 蓋	— — —	胴部5本の縦位直線文→横位直線文。輪縁不明の附加条縄文(R・S)。	石英、炭母	普通	にぶい黄褐色	十玉白式
12	弥生土器 蓋	— — —	胴部輪縁不明の附加条縄文(L・Z)→胴部10本位の等間隔上めs帯状文(反時計回り)、横位直線文。	石英多量	普通	にぶい黄褐色	二軒器式a
13	弥生土器 鉢	— — —	胴部輪縁不明の附加条縄文(R・S、L・Z:上→下)。	石英、チャート、骨針	普通	にぶい褐色	十玉白式
14	弥生土器 蓋	— — —	胴部附加条2種類文(R・R、L+L:下→上)。	石英、炭母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十玉白式
15	弥生土器 蓋	— (88) —	胴部輪縁不明の附加条縄文(R・S)。底面布目状。	石英、角閃石	普通	にぶい褐色	十玉白式 内面底部輪縁に コゲ付着
16	弥生土器 蓋	— — —	口唇部ヘラキザミ。口唇部折り返し口縁。胴部3本位の縦位直線状文。高杯の可能性もあり。	炭母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
17	上頸部 粘土器 蓋	— — —	径4.7cm、厚さ2.0cm、孔径5.0cm。表面は、平なナテ。	雲母、角閃石、骨針	普通	にぶい黄褐色	
18	上頸部 粘土器 蓋	— — —	径4.3cm、残存長3.5cm、孔径5.0cm。表面に指研痕。	石英、チャート	普通	黒褐色	

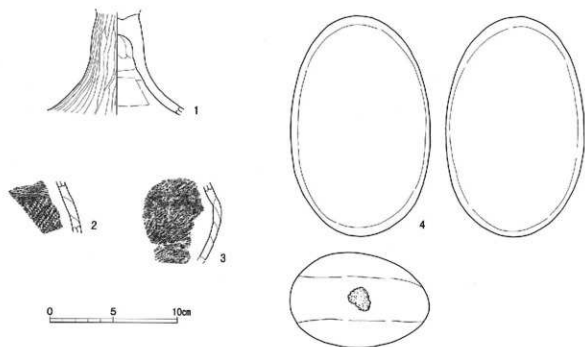
81号住居跡 (第120・121図)

位置 A区南部、N8・N9グリッドにある。規模と平面形 - 主軸方向 - 壁 - 床 炉とピット周辺に床面が残存している。ピット 2箇所。P1は深さ89cm、P2は深さ70cm。炉 長径104cm、短径68cmの楕円形で深さ16cm。中心から東側に僅かに寄った位置から炉石が出土している。覆土 床上に締りのある暗褐色土が薄く堆積している。遺物 炉の南側から、基部が細く中空で裾部が「ハ」の字に開く1の土師器の高坏脚部片が出土している。所見 炉及び炉石を持つことと出土遺物から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。



81号住居跡土層  
 1 層褐色土 ローム状少量、ロームブロック少量、炭土層少量、硬り有り  
 2 硬り褐色土 炭土層少量、硬り有り  
 3 硬り褐色土 炭土層少量、硬り有り  
 4 硬り褐色土 炭土層少量、硬り有り

第120図 81号住居跡



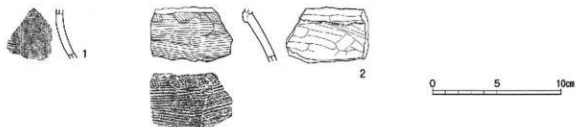
第121図 81号住居跡出土遺物

表53 81号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口縁 高 底径	特 徴	胎土	焼成	色面	備考
1	土師器 高坪	- - -	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。外面ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、骨針	良好	にぶい赤褐色	
2	弥生土器 土	- - -	脚部軸端不明の附加条縄文〔R・S〕→即眼帯5本條の横位条縄文→横位或伏文。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	普通	にぶい赤褐色	
3	弥生土器 壺	- - -	胴部無節縄文〔L:下→上〕と附加条1條縄文〔L+L〕で非羽状堆成。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外・にぶい赤褐色 内・明褐色	
4	石器 磨石面		第一号。大型磨の表面全体に磨耗面。上・下両部に敲打痕。表面の一部に鉄分が沈着。 石材：砂岩。長さ17.5cm・幅10.8cm・厚さ7.6cm・重さ2012.6g。				

## 83b号住居跡（第70・122図）

位置 A区南東部N10・O10グリッドにある。規模と平面形 3.00 × 0.10 m。主軸方向 N-10°-W 壁 壁高は約6 cm。床 - ビット - 覆土 炭化材片を含んだ黒褐色土が堆積している。遺物 覆土から、土師器壺片が出土している。所見 出土遺物から古墳時代の小型住居跡と考えられる。



第122図 83b号住居跡出土遺物

表54 83b号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁部高 直径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	赤土器 壺	- -	胴部5本首の縦位直線文→縦位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石灰、骨針、赤色粒	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十正台式
2	土師器 壺	- -	外面横位のハケメ→縦位のハケメ。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石灰、肉内石	良好	外：黒褐色 内：にぶい赤褐色	

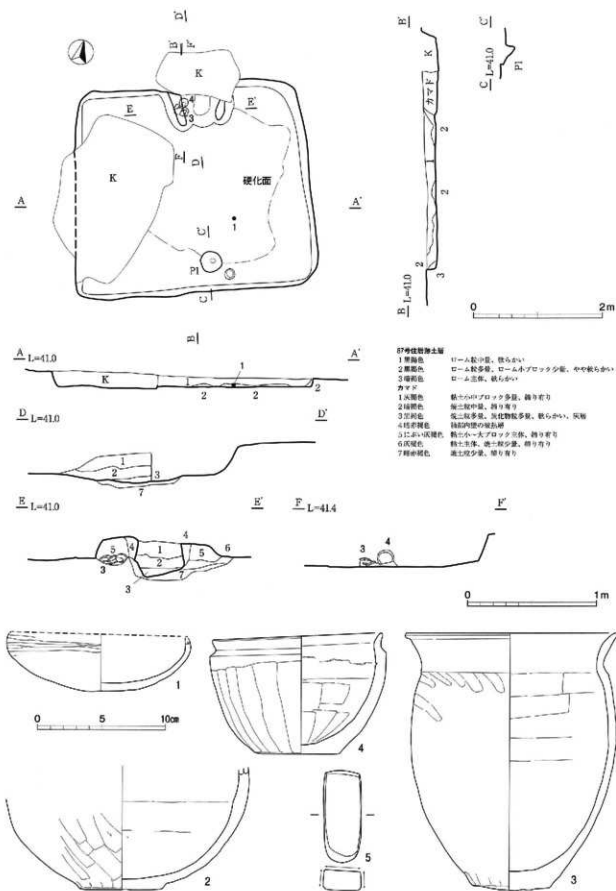
## 87号住居跡（第123図）

**位置** A区南東部O9グリッドにある。規模と平面形 3.68 × 3.32 mの方形。主軸方向 N-20°-W 壁 壁高は約16cm。床 P1の北側から住居中央部が特に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ12cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 煙道部分は覆乱によって壊されている。焚口部から住居の北側壁を結ぶ線までは約50cmあり、カマド袖部や燃焼部を住居内に突出させたしっかりとしたカマドで、袖部幅は109cm、灰褐色粘土と土師器の甕を袖部構築の芯材として使用している。覆土 下層にローム粒・ロームブロック混じりの黒褐色土が、上層には自然堆積と思われる黒褐色土が堆積している。遺物 丸底で体部に横位のミガキを施した1の土師器が床面から出土している。カマド左側袖部内からカマド構築材として使用されたと見られる、4のやや小型の土師器壺と3の器高の低い鉢型の土師器が出土している。所見 床面出土の土師器から見て古墳時代後期の住居跡と考えられる。

表55 87号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁部高 直径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	(132) (45) -	体部外面ミガキ、内面ココナデ。	長石、石灰	普通	黒褐色	
2	土師器 壺	- 64	胴部外面ナデ、下半部ヘラケズリ、内面ナデ。底部ヘラケズリ。	長石粒、石灰	普通	黒褐色	
3	土師器 壺	16.7 21.4 6.1	口縁部内外面ココナデ、胴上半部ヘラナデ。内面ヘラナデ。	長石・石灰細粒	良好	にぶい褐色	ほぼ定形
4	土師器 鉢	13.4 9.6 6.5	口縁部内外面ココナデ。胴部縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。蓋部ヘラケズリ。	長石、石灰	良好	黒褐色	ほぼ定形
5	石製品 磁石	長7.3cm、幅2.9cm、厚1.6cm、重70.68g、焼灰岩					

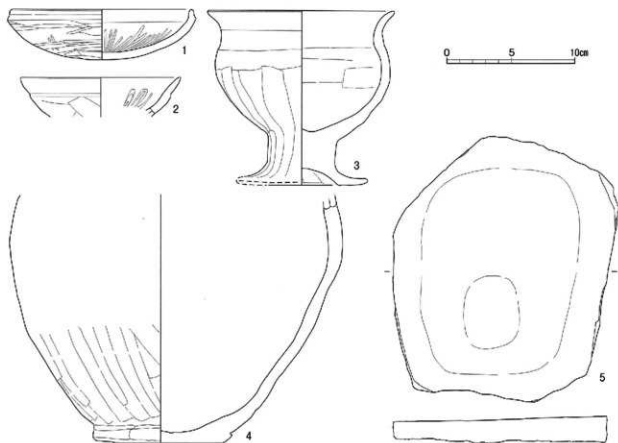




第123図 87号住居跡・出土遺物

92号住居跡(第124・125図)

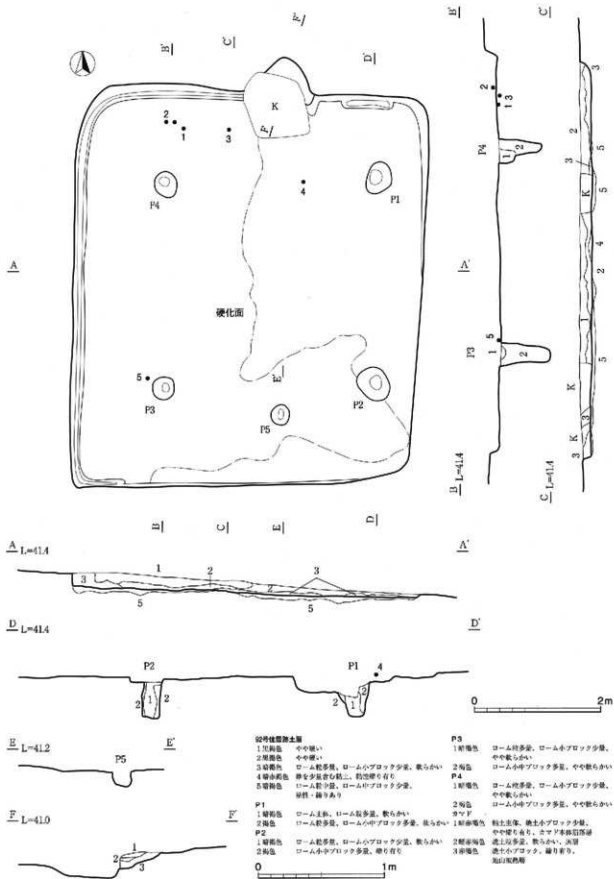
位置 A区南東部、O8グリッドにある。規模と平面形 6.36×5.56m、やや縦長の方形。主軸方向N-3°-E 壁 壁高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の南側寄りと西側半分が硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。カマド 攪乱穴によって中心部が壊されている。煙道部に向かう、壁外への掘り込みは約28cmある。覆土 やや硬化した黒褐色土を主体とした覆土である。遺物 1の土師器の坏、3の脚台の付いた鉢はカマド左側の床面から出土している。5の板状の砥石はP3近くの床面から出土している。所見 出土遺物から古墳時代後期の住居跡と見られる。



第124図 92号住居跡出土遺物

表56 92号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	14.1 4.0 -	口縁部ヨコナデ。体部内外縦ミガキ。	骨付	普通	褐色	80%
2	土師器 坏	12.6 -	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	目立つ砂粒・紙質 粒なし。積込	普通	黒褐色	口縁部片



図号住居跡土層

- 1 灰褐色 中々硬い
- 2 黒褐色 中々硬い
- 3 暗褐色 ローム状多量、ローム小ブロック少量、散らかり
- 4 暗赤褐色 礫を少量含む粘土、均質層有り
- 5 暗褐色 ローム状多量、ローム小ブロック少量、均質、礫有り

- P1 1 暗褐色 ローム土層、ローム状多量、散らかり
- 2 黒褐色 ローム状多量、ローム小ブロック少量、散らかり
- P2 1 暗褐色 ローム状多量、ローム小ブロック少量、散らかり
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量、礫有り

P3

- 1 暗褐色 ローム状多量、ローム小ブロック少量、中々散らかり
- 2 黒褐色 ローム小ブロック多量、中々散らかり
- 3 暗褐色 ローム状多量、ローム小ブロック少量、中々散らかり
- 4 黒褐色 ローム小ブロック多量、中々散らかり
- 5 暗褐色 粘土土層、礫土小ブロック少量、中々硬り有り、ミッド本露出箇所
- 6 暗赤褐色 礫土多量、散らかり、均質
- 7 赤褐色 礫土小ブロック、礫有り、灰白灰土層

0 1m

第125図 92号住居跡

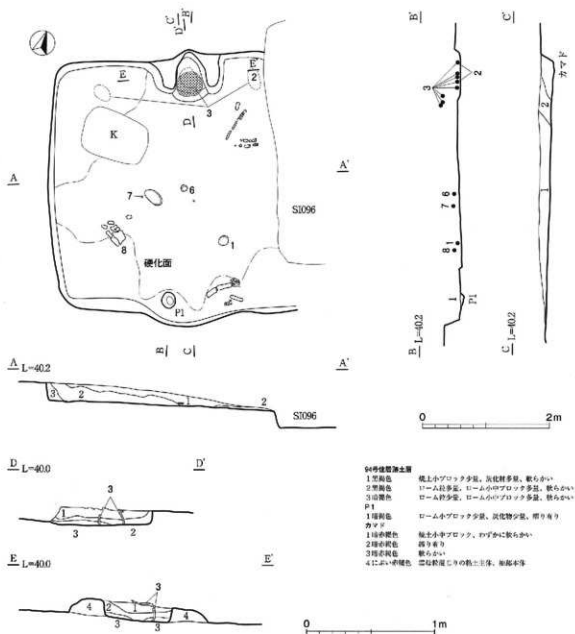
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	十徳形 即付鉢	14.7 13.9 (9.8)	口縁部コナナテ。体部1枚外面ナテ、下半部～肩部ヘラケズリ。体部内面ヘラナテ。	灰石、石英	良好	暗褐色	80%
4	土師器 罌	- 11.0	底部ヘラケズリ。肩部外面上半部ミガキ状のナテ、下半部ヘラケズリ後ヘラナテ。内面ナテ。	灰石、石英	普通	褐色	
5	石製品 磁石	長20.7cm、幅16.8cm、厚2.1cm、重1185g、砂岩。					

94号住居跡(第126・127図)

位置 A区南東部、P9グリッドにある。規模と平面形 4.40×(3.60)m。主軸方向 N-23°-W。壁 壁高は約46cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部が特に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ10cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 焚口部から煙道部までは82cm、袖口幅90cmで、壁外への掘り込みは12cmである。覆土 壁際にロームブロックやローム粒を多く含む下層堆積があり、全体を被覆する上層堆積は、炭化材を多量に含む覆土である。遺物 2の土師器等は床上から、他の土器や石製品は覆土1層中から出土している。所見 土層の堆積状況から、住居は廃絶後暫くしてから焼失している。古墳時代後期の焼失家屋と見られる。

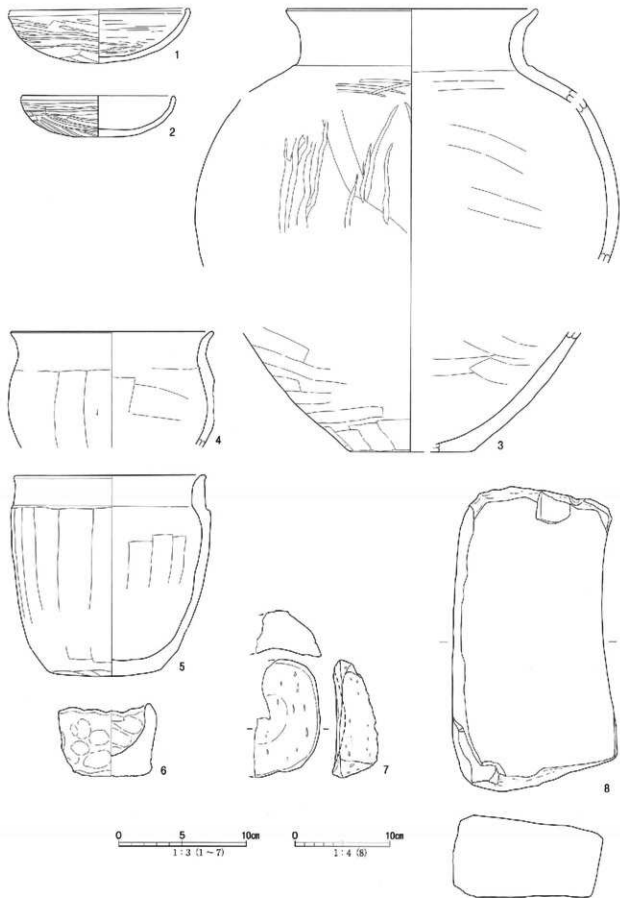
表57 94号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 平	14.0 4.3 -	体部内外面ミガキ。底部外面ヘラケズリ。	灰石、石英、骨針	良好	暗褐色	変形
2	土師器 鉢	12.0 3.3 -	体部外面ミガキ。内面コナナテ。	灰石、石英	良好	暗褐色	50%
3	土師器 罌	19.8 - 9.4	口縁部内外面コナナテ。胴上半部ミガキ、下半部ヘラナテ。内面ヘラナテ。	灰石、石英	良好	によい褐色	80%
4	土師器 罌	(16.0) -	口縁部内外面コナナテ。胴上半部ヘラケズリ、内面ヘラナテ。	石英、灰石	不良	によい褐色	
5	土師器 罌	15.5 (16.0) 8.8	口縁部内外面コナナテ。胴部縦方向ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰石、石英	良好	暗褐色	80%
6	手捏土師	(7.0) 3.8 6.3	外面塗灰。右両指ナテ。	石英	普通	黒褐色	90%
7	石製品 磁石	長8.9cm、幅-cm、厚3.1cm、重25.6g、磁石製。					
8	石製品 磁石	長32.0cm、幅17.1cm、厚8.6cm、重7.65g、粘板岩製。					



第126図 94号住居跡

第IV章 A区の遺構と遺物



第127図 94号住居跡出土遺物

## 2 包含層及び遺構外出土遺物 (第128図)



第128図 包含層及び遺構外出土遺物

表58 包含層及び遺構外出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口縁 器高 直径	特 徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	土師器 鉢	—	口縁部外部ハケメ後にヘラミガキ、腰部～底部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部～底部内部施なヘラミガキ。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい褐色	包含層
2	土師器 甕	—	口縁部ヨコナデ、胴部～胴部外面ハケメ後に線ナデ、胴部内面ナデ。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい褐色	包含層
3	土師器 甕	—	口縁部ヨコナデ、胴部～胴部外面ハケメ、胴部内部ハケメ、胴部内面ヘラケズリ後に施なヘラミガキ。	石英、チャート、骨針	普通	にぶい褐色	包含層
4	土師器 砂合	—	胴部の3方向に透孔、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後にヘラミガキ、胴部内面ハケメ。	石英、角閃石、骨針	普通	にぶい黄褐色	包含層
5	土師器 砂合	—	口縁部内外面ヨコナデ後にヘラミガキ。	雲母、角閃石、骨針	普通	にぶい黄褐色	包含層
6	土師器 有孔鉢	—	底部に焼成前穿孔、口縁部ヨコナデ、胴部～底部外面ヘラケズリ後にナデ、胴部～底部内面ナデ。	石英、角閃石、骨針	普通	にぶい黄褐色	包含層
7	土師器 甕	—	折り返し状口縁。口縁部横位のナデ。胴部縦位のナデ→横・縦位のミガキ。内面は口縁部縦位のナデ→縦位のミガキ。胴部縦位のナデ。外面スス、内面胴部にヨゴレ付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	表土 古墳前期
8	土師器 甕	—	胴部縦位のハケメ。底部ヘラケズリ→ナデ。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒、角閃石、骨針	普通	外：にぶい褐色 内：黒褐色	S1082混入 古墳前期
9	土師器 甕	—	胴部中空。環状横位のナデ。胴部縦・斜位のミガキ。内面は縦位のハケメ→胴部縦位のナデ→胴部縦位のミガキ。	多量の石英・白色粒、長石、角閃石、骨針	良好	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色	表土 古墳前期
10	土師器 甕	—	胴部中空。胴部縦位のミガキ。一部剥落。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	カクラン 古墳中期

## 第4節 奈良・平安時代

## 1 竪穴住居跡

## 7号住居跡(第129~131図)

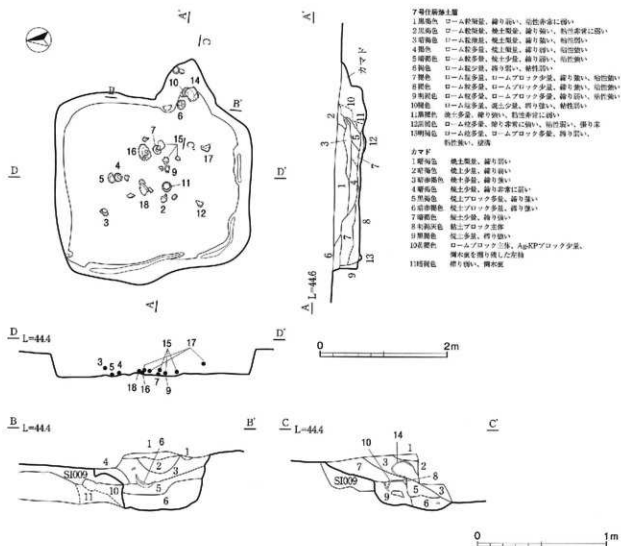
**位置** A区北端、M2グリッドに位置する。規模と平面形 東西方向は295m、南北方向で3.06mを測り、不整隅丸台形を呈する。弥生時代の9号住居跡と風倒木炭を壊している。主軸方位 N-93°-E

**壁** 壁高は38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床 やや凹凸があり、全体によく締まる。掘り方はなく、部分的に周溝がめぐる。ピット - カマド 東壁のやや南寄りに付設され、9号住居跡の炉を壊して構築されている。ローム層の地山を掘り残した短い左袖が残っている。火床面よりもやや浮いた位置で、支脚と推定される不整直方体状の自然堆積物が横位で出土し、その上には高台付坏を逆位に被せていた。坏の直上からは土師器の甕が横に倒れて出土している。カマド廃絶時にこの状態で遺棄されたものと推測される。覆土 均質な褐色~黒褐色土による自然堆積状を呈するが、4層は人為堆積と思われる。遺物 カマドから、6の須恵器坏や10の高台付坏、14の土師器甕などが出土している。竪穴中央部の覆土下層~中層からは須恵器、土師器が数多く出土している。覆土4層の堆積時に大半が一括投棄され、順次1・3層の埋没に伴って廃棄され続けたものと推測される。出土遺物は、8世紀後葉~9世紀前葉頃の須恵器を主体としており、壺、坏、盤、短頸壺、甌、甕が見られる。10の高台付坏と12の甕はロクロ成形の酸化焙焼成である。10の高台付坏は内・外面に漆状の付着物が見られ、二次的に撥明皿として使用されており内面に油煙痕が残る。所見 掘り方をほとんどもたない小型の住居で、時期は9世紀前葉頃と考えられる。

表59 7号住居跡出土遺物観察表

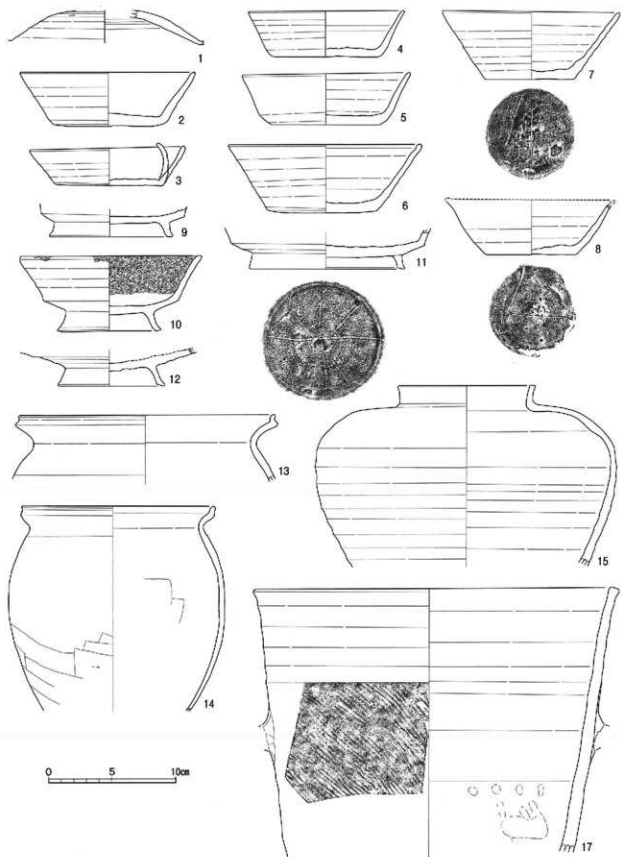
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺	- -	破断片。天井部は種やかなドーム状で、天井部の1/2の範囲に丁寧な細輪ヘラケズリ。	褐色、白色焼粒	良好	灰色	25%
2	須恵器 坏	(140) 4.3 8.6	底面四輪ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、石英、チャート 薄骨粉	良好	灰色	
3	須恵器 坏	12.7 3.1 8.6	底面四輪ヘラケズリと後部四輪ヘラケズリ、体部下端回転方向の半周分持ちヘラケズリ。焼き歪み。	長石、石英、薄骨粉	良好	灰~暗灰色	定形
4	須恵器 坏	12.2 3.7 8.1	底面四輪ヘラケズリと一方ヘラケズリとオサエ、ロクロ右回転。	長石、石英、薄骨粉、黒色角礫	良好	灰色	ほぼ定形
5	須恵器 坏	13.2 4.2 8.5	底面四輪ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、石英	良好	灰色	定形
6	須恵器 坏	14.8 5.4 8.4	底面一方角礫散在のヘラケズリ、口縁端部を小さな玉粒状に仕上げた。	長石、石英、チャート、薄骨粉	不良	明灰色	ほぼ定形 薄骨粉 カマド
7	須恵器 坏	14.0 5.5 6.8	底面一方角ヘラケズリ、ヘラ記号「十」、体部外面火焼痕。	白色・白黄色肉丸 礫、薄骨粉	普通	赤褐色	ほぼ定形
8	須恵器 坏	- 6.2	底面ヘラ切りオサエ。ヘラ記号「井」。	長石、石英、チャート、黒色焼出粒(径4mm大)	良好	灰色	口縁部欠損
9	須恵器 高台付坏	- 9.7	底面四輪ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、チャート、薄骨粉	普通	灰色	



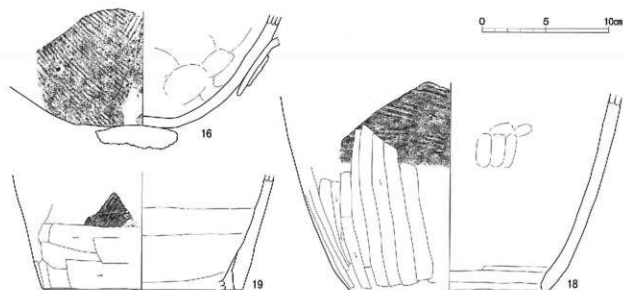


第129図 7号住居跡

図版番号	種別	口径 深さ	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須惠器 高台付杯	142 6.0 7.9	須惠器の高台付杯の器形だが、酸化焙焼成でロクロ目が見え、特に内面に油煙痕が強く、外面にも油煙痕と見られる炭化物が付着している。	長石、石英、赤褐色骨針	普通	明黄褐色	透明皿、空形カマド
11	須惠器 盤	- 12.1	底部外面へテ記号「*」。	長石、黒色炭粒	良好	灰色	
12	須惠器 盤	- 8.6	酸化焙焼成。	長石、石英、海緑骨針	普通	明黄褐色	
13	土師器 壺	(20.0) -	口縁部内外面にコナダ、腹部内外面ナダ。	細砂粒	普通	濃い褐色	
14	土師器 壺	14.7 -	口縁部縮み上げ、胴部外面ナダ、下半部斜位のヘラケズリ。	長石、石英	やや不良	濃い褐色	カマド
15	須惠器 短床壺	(10.7) -	口縁部は平紐で、口縁部は深く立ち上がる。胴部は上位に最大径を持つ。	長石粒・塵	やや不良	黄白灰色	



第130图 7号住居跡出土遺物①



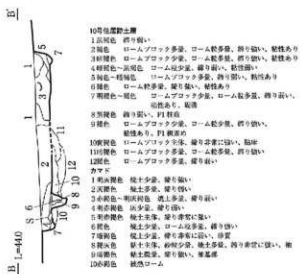
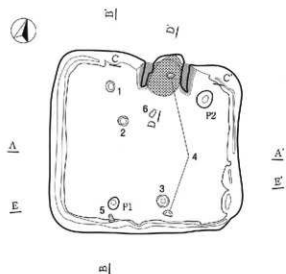
第131図 7号住居跡出土遺物②

図版 番号	類別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
16	須恵器 突	-	底部片。丸底で、底部に灰底砂、須恵器坏体部片が露出。 胴部外面平行叩き、内面車の止痕。	長石粒・礫、黒色 粒	良好	灰色	
17	須恵器 瓶	(28.8) -	胴部外面斜空の平行叩き、口縁部外面～内面口クロナテ。 体部に一對の把手が付く。	長石粒・礫、海綿 骨針、石英	良好	灰色	
18	須恵器 瓶	- (15.0)	胴下部破片。胴部外面斜位の平行叩き、下部縦方向 のヘラケズリ。底部穿孔式。	長石、石英、チャート	普通	明灰色	
19	須恵器 瓶	- (15.7)	胴部外面斜位の平行叩き、下部縦方向のヘラケズリ。底 部二孔式。	石英	良好	にぶい藍色	

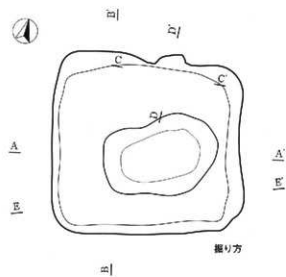
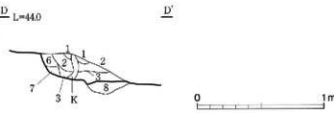
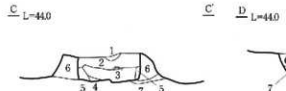
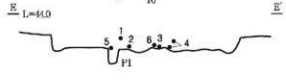
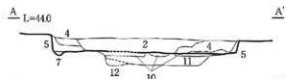
## 10号住居跡（第132・133図）

**位置** A区北東端、N2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は東側で262m、西側で289m、東西方向で2.94～3.0mを測り、隅丸正方形に近い。北壁はカマドの東西で段違い状になり西側が突出している。主軸方位 N-11°-W、60号住居跡と近似する。壁 壁高は25cmを測り、わずかに傾斜する。床 全体的に硬化し、中央部に大きな床下土坑を確認した。周溝はほぼ全周する。ピット P1は、カマドを通る堅穴主軸からは外れているが、出入口ピットと推測される。カマド脇のP2は深さ約15cmで灰褐色粘土が充填されていた。カマド 北壁の中央やや東寄りに付設され、煙道が非常に短い。覆土 壁際に暗褐色～黒褐色土が自然堆積し、堅穴中央はロームブロックの多い褐色～明褐色土で人為的に埋め戻されたものと判断される。遺物 カマドの南西や堅穴南壁付近から8世紀後半頃の須恵器が出土している。3は高台部が欠損している大振りな稜椀で生焼けである。2の須恵器坏は高温焼成で焼き至みが激しい。カマド前面の床面からわずかに浮いて、6の土製支脚が出土している。遺存率の良好な資料が出土したものの、すべて廃棄遺物で、住居跡廃絶時に遺棄されたものではない。所見 本遺跡の古代住居跡の中では、最も小型の一群に含まれる。住居跡の廃絶時期は、8世紀後半頃と考えられる。

第四章 A区の遺構と遺物



- 10号住居跡土層
- 1 土間色 礫り強い
  - 2 間色 ロームブロック多量、ローム粒多量、礫り強い、壁性あり
  - 3 間層色 ロームブロック少量、ローム粒多量、礫り強い、壁性あり
  - 4 間層色-土間色 ローム粒少量、礫り強い、壁性強い
  - 5 間色-間層色 ロームブロック多量、礫り強い、壁性あり
  - 6 間色 ローム粒多量、礫り強い、壁性あり
  - 7 間層色-間色 ロームブロック少量、ローム粒多量、礫り強い、壁性あり、壁
  - 8 間層色 礫り強い、P1存在
  - 9 間色 ロームブロック少量、ローム粒少量、礫り強い、壁性あり、P1存在あり
  - 10 間層色 ロームブロック少量、礫り強くない、壁性
  - 11 間層色 ロームブロック多量、ローム粒多量、礫り強い
  - 12 間色 ロームブロック多量、礫り強い
- カマド
- 1 灰土層色 礫り少量、礫り強い
  - 2 灰土層色 礫り多量、礫り強い
  - 3 赤褐色-明灰褐色 礫り少量、礫り強い
  - 4 明灰褐色 礫り少量、礫り強い
  - 5 明灰褐色 礫り少量、礫り強い
  - 6 間色 礫り少量、ローム粒多量、礫り強い
  - 7 間層色 礫り少量、礫り強くない、壁質
  - 8 間層色 礫り少量、礫り強くない、壁質
  - 9 間層色 礫り少量、礫り強くない、壁質
  - 10 間層色 礫り少量、礫り強くない、壁質
  - 11 間層色 礫り少量、礫り強くない、壁質
  - 12 間層色 礫り少量、礫り強くない、壁質



掘り方

第 132 図 10号住居跡



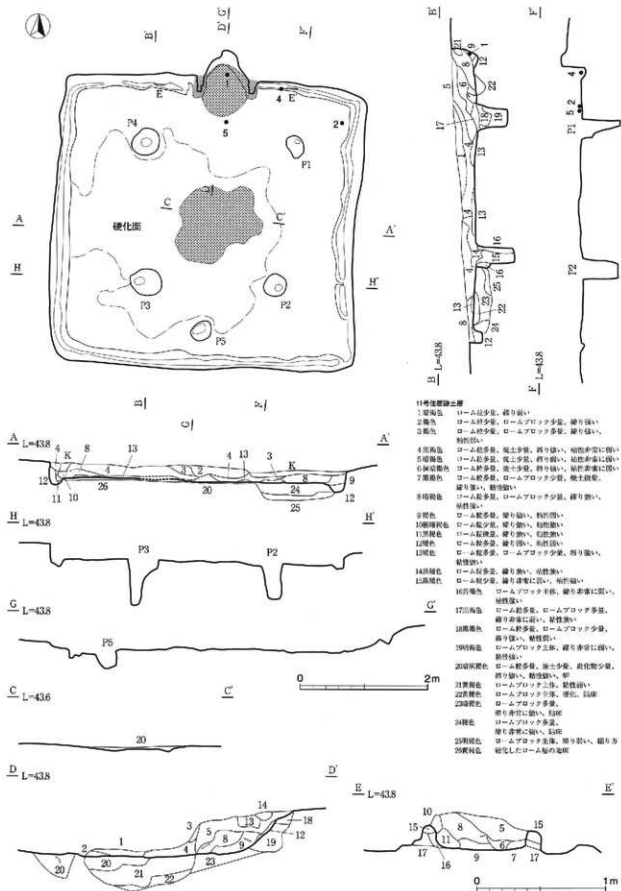
第133図 10号住居跡出土遺物

表60 10号住居跡出土遺物観察表

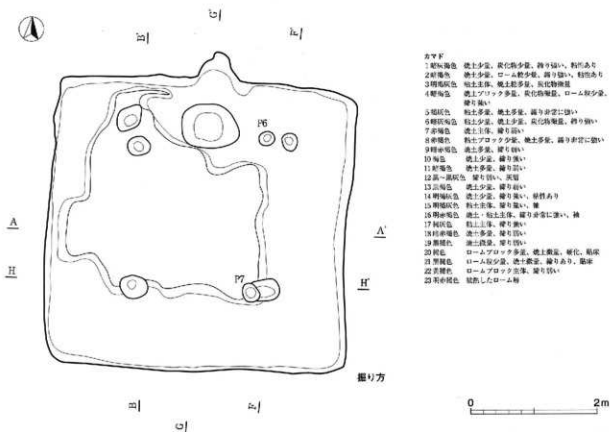
図版 番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	135 4.0 6.3	底部一方向ヘラケズリ。ヘラ記号「一」	長石織、石英	やや不 良	灰白色	完形
2	須恵器 坏	141 4.9 19.5	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。焼き直み。	石英、海綿骨針、 黒色滑石粒	良好	灰色	ほぼ完形
3	灰志器 高台付坏	181 — —	底部下端回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。後物形状。	石英	不良	灰白色	
4	須恵器 坏	136 4.3 9.1	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、チャート礫	普通	灰白色	
5	石製品 硯石	長 12.9cm、幅 8.0cm、厚 5.9cm、重 611g、砂層製。					
6	土製品 支脚	長 [14.5] cm、幅 6.8cm、厚 6.2cm、重 690g。		長石、石英	良好	褐色	

## 11号住居跡（第134～136図）

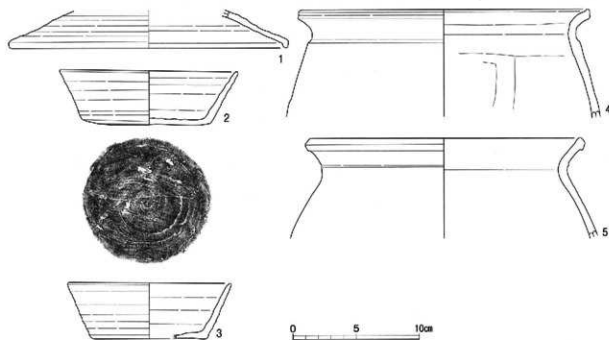
**位置** A区北東端、N2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は4.47～4.68m、東西方向は4.78mを測り、正方形を呈している。主軸方位 N-1°-Wで、ほぼ真北を指向する。壁 壁高は15cmを測り、垂直に近い。床 周溝はほぼ全周する。主柱穴に囲まれた中央部の周囲が溝状の掘り方となる。主柱穴周囲の床面はやや軟弱である。ピット P1～4は主柱穴、P6・7は古い主柱穴、P5は出入口ピットであろう。P3には柱痕状の断面を観察したが、ほかの主柱穴は抜取痕と判断した。カマド・炉 カマドは北壁中央に構築され、煙道部でわずかに灰層を検出した。竪穴中央部の床面は明瞭に被熱



第134図 11号住居跡



第135図 11号住居跡掘り方



第136図 11号住居跡出土遺物

し、赤変硬化が顕著であるため、炉と判断する。 覆土 全体に自然堆積状を呈している。堅穴中央部覆土上層にはローム粒の多い褐色土が堆積し、人為埋没の可能性がある。 遺物 カマド前面の覆土下層からは8世紀後半頃の土師器甕が、北東隅の床面直上からは同じ頃の須恵器坏が出土している。 所見 P6・7はP1・2と同等の深さをもち、主柱穴はP6・7・3・4からP1~4へと建替えしたものと判断できる。出土遺物は多くないが、住居跡の廃絶時期は、8世紀後半頃と考えられる。

表61 11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 甕	(22.2) —	口縁部片。口縁端部を下方に折り返す。	灰石、海綿骨針	普通	灰色	カマド
2	須恵器 坏	14.2 4.2 10.1	同軸ヘラ切り履一方向ヘラケズリ。ヘラ記号「一」。	灰石粒、石灰、海綿骨針	普通	灰色	窠形
3	須恵器 坏	(13.0) 4.5 (9.0)	底面同軸ヘラケズリ。ロクロ石回転。	灰石、石灰、海綿骨針	不良	灰白色	
4	土師器 甕	(23.1) —	口縁部内外面ココナテ、胴上部ナデ、内面ヘラナデ。	灰石、石灰、海綿骨針、角閃石	良好	褐色	
5	土師器 甕	12.4 —	口縁部内外面ココナテ、胴上部ナデ、内面ヘラナデ。	灰石、石灰	普通	にぶい褐色	

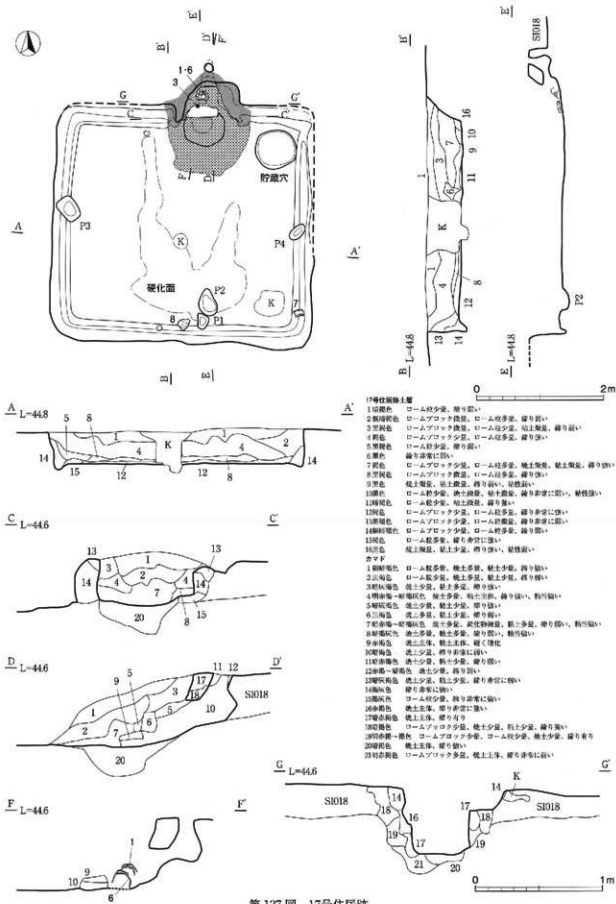
17号住居跡（第137・138図）

位置 A区北西端、K3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は3.88m、東西方向で4.12mを測る。平面は正方形。弥生時代の18号住居跡の南西側約1/3を壊して構築されている。堅穴中央と南東隅は攪乱ピットによって一部壊されている。3号掘立柱建物跡とも重複するが、調査時には柱穴を確認できず、本住居跡の方が新しいものと推測する。 主軸方位 N-3°-Eで、ほぼ真北を指向する。 壁 壁高は56cmを測り、垂直気味に立ち上がる。床 平坦で凹凸がなく、堅穴中央部がよく硬化している。周溝はほぼ全周する。掘り方はない。ピット P1・2（深さ15cm・13cm）は出入口ピット。P3・4（深さ31cm・23cm）は主柱穴であろうか。北東隅には略円形の浅い貯蔵穴（深さ7~10cm）が構築されている。 カマド カマドは北壁中央や東寄りに構築され、煙道部周辺の天井が残存していた。袖は非常に短く、粘土は煙道部の側壁にも一部貼り付けられ、袖・天井・煙道の内壁や底面は著しく被熱していた。カマド中央において須恵器坏・土師器坏・土師器甕を逆位に積み重ね、それを支脚として使用している。支脚の前面では、赤変した板状の天井内壁が落下した状況が窺えた。 覆土 中層はローム粒・ブロックを斑状に含み、人為的な埋め戻しや周堤の崩壊などが想定される。 遺物 出土遺物は、須恵器の坏・甕・甗、内黒土師器の坏、小型甕等9世紀中葉~後葉頃のものである。壁際の覆土下層から、須恵器甕の破片が出土している。 所見 床面は平坦で凹凸がなく、堅穴中央部がよく硬化する。掘り方はなく、地床である。周溝はほぼ全周する。出土遺物から、住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。

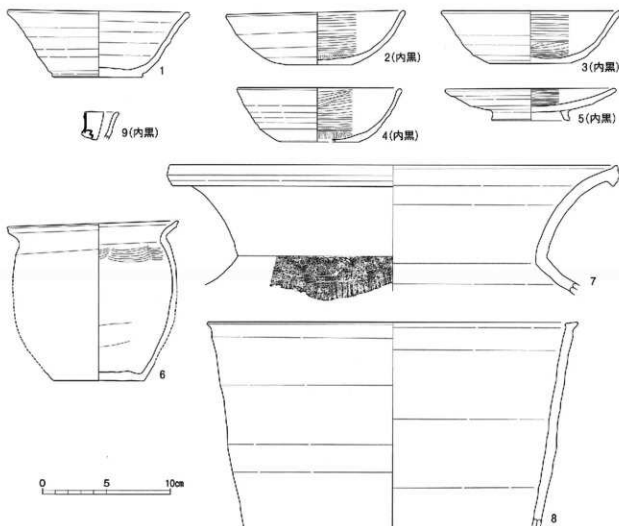
表62 17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	14.3 5.3 6.6	底面ヘラ切り履し後2方向ヘラケズリ。	チャート、灰石、普通海綿骨針		灰色	
2	土師器 坏	13.0 1.4 0.2	後1半部外面ココナテ、下半部一度同軸ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。ロクロ石回転。	チャート	良好	褐色	





第137図 17号住居跡



第138図 17号住居跡出土遺物

図版 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土師器 坏	140 42 62	体上半部外面ロクロナデ、下半部～底部回転ヘラケズリ。 内面黒色処理・ミガキ。	石英、炭石、内閃 石	良好	褐色	
4	土師器 坏	138 43 70	体上半部外面ロクロナデ、下半部～底部回転ヘラケズリ。 内面黒色処理・ミガキ。ロクロ右回転。	石英、金雲母	普通	残黄褐色	
5	土師器 皿	(13.1) 26 (5.1)	体部外面ロクロナデ、内面黒色処理・ミガキ。	石英	良好	にぶい褐色	25%
6	土師器 小段塀	132 125 72	口縁部内外面ロクロナデ、胴上半部ナデ、下半部摩耗。底 部外面粗く、敷物圧痕状のものあり。	炭石、石英、海綿 骨針	普通	褐色	
7	須恵器 甕	(35.5) — —	口縁部内外面ロクロナデ、胴部外面平行叩き。ロクロ右 回転。	長石類、石英	普通	黄灰色	
8	須恵器 甕	(24.0) — —	底部破損。体部内外面ロクロナデ。	石英、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	
9	土師器 坏	— — —	体部外面磨き。内面黒色処理・ミガキ。	海綿骨針	良好	にぶい褐色	

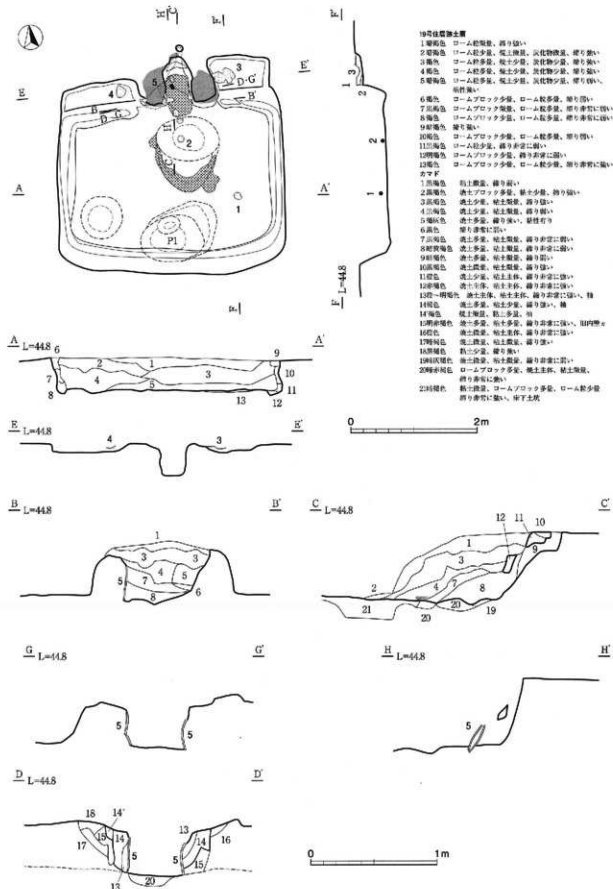
## 19号住居跡（第139・140図、巻頭写真図版3）

**位置** A区北西端、K3～L3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は東側で2.92m、西側で2.65mを測る。北壁には、棚状施設が構築されているため、それを加えると東側3.46m、西側3.03mとなる。東西方向は3.6mを測り、平面では横向きの不整隅丸台形を呈する。主軸方位 N-8°-Eで、真北に近い。壁 壁高は52cmを測り、南壁が傾斜するものの、ほかは垂直に近い。床 全体に硬化している。周溝は全周する。基本的には地床だが、床下土坑（破線表示）を伴う。南西隅土坑は深さ23cmである。ピット 掘り方調査時にP1（深さ22cm）を確認した。出入口ピットと想定されるが、堅穴壁からはやや離れている。カマド・炉 北壁中央やや東寄りに構築されている。袖は堅穴側にはほとんど張り出さず、幅は上面幅でも40cm前後と広い。袖裁ち割りでは、内壁被熱面の内側にも間層を挟んで顕著な被熱面を検出した。内壁面に粘土を貼り直した痕跡と見られる。煙道部の天井は一部残存していた。両袖の前面端部には5の須恵器製の胴部片が補強材として埋設されており、底面中央には、同じく須恵器製の胴部片2点を埋設して支脚に転用していた。支脚材は煙道部方向へ斜めに傾いた状態で確認したが、本来は立位埋設の状態だったものと見られる。いずれも同一個体を細長く分割して再利用したものである。カマド覆土中からも同一個体破片が出土しており、天井部の補強材にも使用されていたものと想像される。床面中央部には、平面三日月状の顕著な被熱面を検出しており、炉と考えられる。被熱面の直下には床下土坑（深さ15cm）が見られた。覆土 下層は褐色土、上層は暗褐色土が主体で、自然堆積状を呈するが、ローム粒・ブロックがやや目立っている。6～11層は土壌化した単体の可能性が残る。遺物 東側からは3の土師器甕が、西側からは4の須恵器甕が破片で出土している。カマド前の覆土下層からカマド覆土中にかけて、土師器の内黒碗や甕が出土している。所見 住居規模は小さいながらも、比較的大きい床下土坑が3基ある。掘り方では、カマド焚口直下も含めて周溝が全周して確認できた。棚上から出土した土器は、本来置かれていたものがそのまま遺棄された可能性が考えられる。住居跡の廃絶時期は、10世紀前葉頃と考えられる。

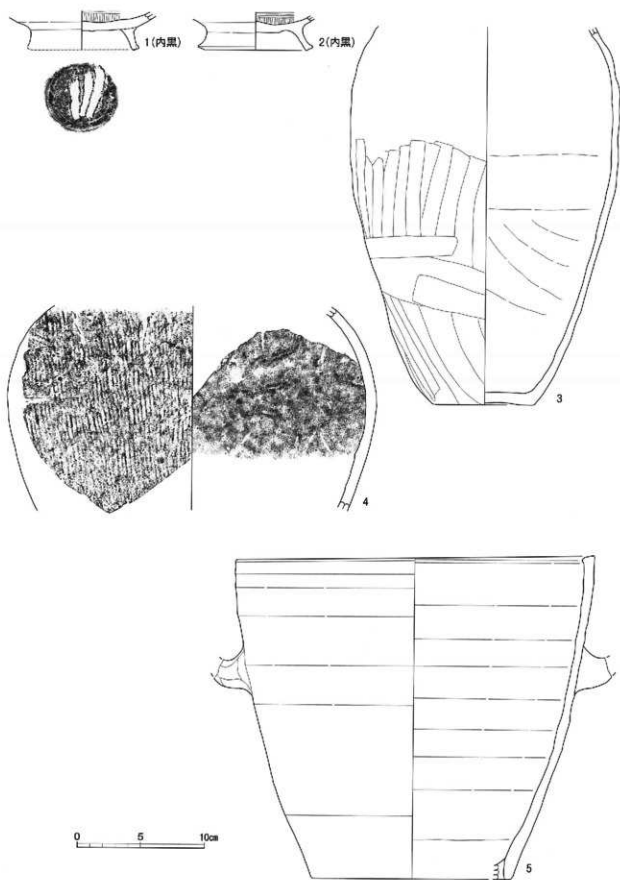
表63 19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高台付杯	- - 87	内面褐色地肌、ミガキ。底部外面にやや太い丸味を持った土具による「二」の線刻。	石英	良好	褐色	
2	土師器 高台付杯	- - 80	内面褐色地肌、ミガキ。口縁右回転。	石英	良好	褐色	
3	土師器 甕	- - 79	胴外面上半部ナデ、下半部縦方向のヘラケズリ、内面ヘラケズリ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
4	須恵器 甕	- - -	胴部外面斜め方向の平行印。	長石、石英少量、 褐色粘土物	良好	オリーブ褐色	
5	須恵器 甕	28.1 25.4 15.5	底部破損。体部内外面口コナダ。体部側面に一對の把手が付く。	長石、石英、チャート、 海綿骨粒	不良	浅黄褐色	70%

第四章 A区の遺構と遺物



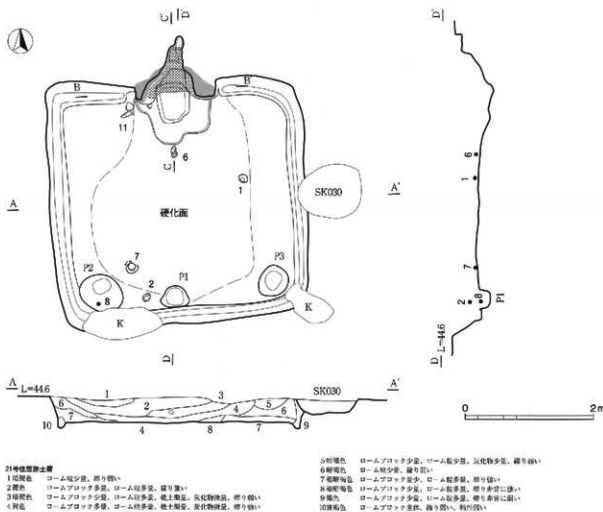
第 139 図 19 号住居跡



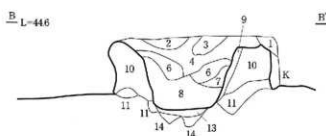
第140图 19号住居跡出土遺物

21号住居跡 (第141~143図)

位置 A区北西端、K3~L3グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は3.78~3.97m、東西方向は4.0mを測り、平面は正方形を呈する。主軸方位 N-4°-W 壁 壁高は39~43cmを測り、全体的には垂直に近く立ちあがり、北壁がやや傾斜する。床 カマドからP1にかけての床面中央部が硬化する。周溝は全周している。床下の掘り方をもたない。ピット P1はいわゆる出入口ピット。直径約10cmの柱痕を検出している。P2・P3 (深さ16cm・22cm)は、用途不明である。カマド 北壁中央に構築されている。右袖は幅広く、左袖も本来は同程度の規模と推測する。焚口部は一旦土坑状に大きく掘り込み、それをある程度埋め戻して、一部に貼床を施した状態で使用している。煙道部は先端付近までよく被熱している。覆土 壁際には極暗褐色土が、中層~上層には褐色~暗褐色土が堆積している。3~5層はロームブロックが多く、人為埋没の可能性がある。遺物 ほぼ床面直上から、須恵器壺1点(7)が出土している。下層からは高台付坏(6)と坏(2)が出土している。いずれも壁際から続く初期埋没土に含まれる。また、カマド左袖脇の覆土中層から土製支脚(11)が出土している。須恵器坏類は9世紀前葉頃のもので、5の小型の仏器のようなものもある。8の内黒土師器坏はP2覆土中から出土しており、P2は住居よりも新しい遺構の可能性がある。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀前葉頃と考えられる。



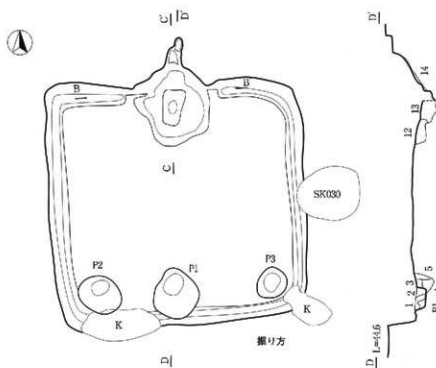
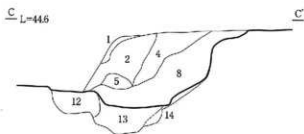
第141図 21号住居跡



21号住居跡土層

カマド

- 1 黒褐色 焼り跡、
- 2 灰褐色 粘土状、ローム砂多量、焼り跡、
- 3 暗褐色 粘土少量、ローム砂少量、粘土凝結、焼り跡、
- 4 暗褐色 粘土多量、ロームアロクク少量、ローム砂少量、
- 5 赤褐色 焼り跡、
- 6 赤褐色 粘土多量、粘土少量、焼り跡、
- 7 黄褐色 粘土少量、焼り跡、
- 8 黄褐色 粘土少量、赤化土凝結、粘土凝結、焼り跡、
- 9 赤褐色 粘土少量、焼り跡、
- 10 赤褐色 粘土少量、焼り跡、
- 11 赤褐色 粘土少量、焼り跡、
- 12 赤褐色 粘土少量、焼り跡、
- 13 赤褐色 粘土少量、焼り跡、
- 14 赤褐色 粘土少量、焼り跡、



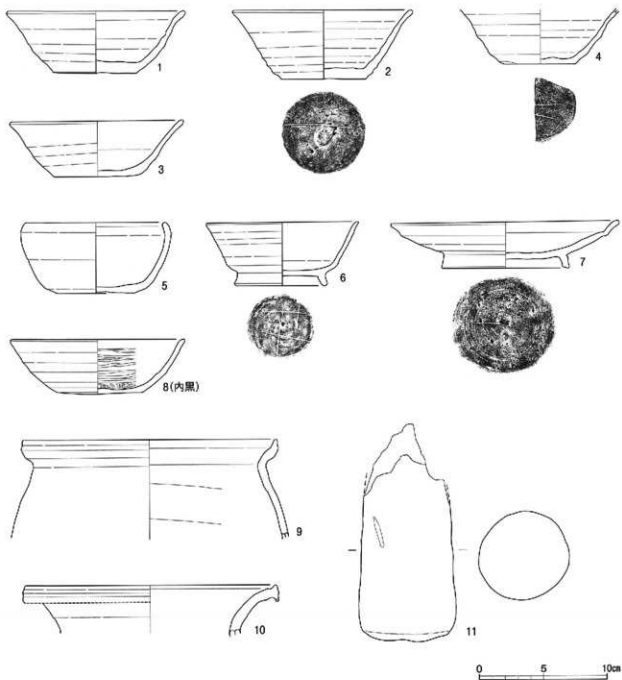
21号住居跡土層

P1

- 1 黒褐色 ローム砂少量、
- 2 赤褐色 焼り跡、
- 3 暗褐色 ローム砂少量、
- 4 赤褐色 焼り跡、
- 5 暗褐色 ロームアロクク少量、

第142図 21号住居跡カマド・掘り方

第四章 A区の遺構と遺物



第143図 21号住居跡出土遺物



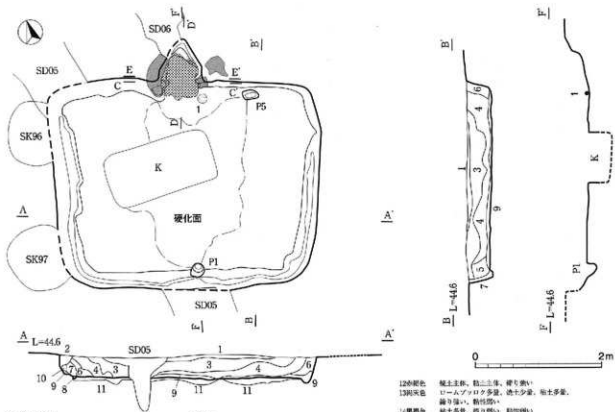
表 64 21号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成 色澤	備考
1	須恵器 環	141 50 65	底部回転ヘラ切り跡し後部一方向ヘラケズリ。ツクロト、海綿骨針	長石、石英、チャート、海綿骨針	良好 灰色	70%
2	須恵器 環	141 55 66	底部回転ヘラ切り跡し後ナデ。ヘラ記号「一」。ロクロ骨回転か。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通 灰色	50%
3	須恵器 環	136 45 68	底部回転ヘラ切り跡し後オサエ、袋了痕、ロクロ石回転か。	長石、石英	やや不良 青灰色	60%
4	須恵器 環	— (57)	底部ヘラケズリ後ヘラ記号。	石英、内四石、海綿骨針	不良 濃い橙色	30%
5	須恵器 環	(110) 56 (60)	作部は内湾して立ち上がる。底部回転切り跡し、歪脚盤。	長石、石英、海綿骨針	普通 暗灰色	60%
6	須恵器 魚舟付環	119 51 73	底部外面ヘラ記号「井」。	長石、石英、チャート	普通 灰褐色	90%
7	須恵器 蓋	179 38 99	底部外面ヘラ記号「一」。	長石、石英、黒色粒	普通 灰色	90%
8	土師器 環	(138) 43 68	底部外面下部回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面黒色焼痕、ミガキ、ロクロ石回転。	石英	普通 黄褐色	? 50%
9	土師器 蓋	(200) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	普通 濃い褐色	
10	須恵器 蓋	(200) — —	口縁部外面平行叩き後ロクロナデ。	長石、石英	良好 灰色	
11	土師器 支脚	長 17.2 cm、径 7.0cm、高 84.6g。		長石、石英、黒砂粒	普通 棕色	

## 22号住居跡 (第144・145図)

**位置** A区北端部付近、L3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は3.33m、東西方向は北壁側で4.31m、南壁側で3.95mを測り、平面は横長長方形を呈する。竅穴中央部は攪乱で、竅穴西壁は96・97号土坑に壊され、中世以降の5・6号溝が本住居跡を縦断する。また、本住居跡は弥生時代の30号住居跡を壊している。7号掘立柱建物跡とも重複し、調査時には竅穴覆土中・床面ともに掘立柱穴を確認できなかったため、本住居跡の方が新しいと判断する。主軸方位 N-19°-Eで、およそ北北東を指向する。

**壁** 壁高は37cmを測る。全体的には垂直に近く立ちあがり、西壁と北壁西側がやや傾斜する。床全体に貼床は薄く、北東隅の掘り方がやや深い。カマドからP1の間に硬化する。周溝は北壁以外にめぐら。ピット P1は、斜めに穿たれており、出入口ピットと思われる。P5は深さ10cm程しかなく、用途不明である。P2～4は掘り方で確認したもので、古い出入口ピットの可能性がある。カマド 北壁中央に構築され、6号溝に一部壊されている。ローム層の地山を掘り残して袖の基部としており、右袖の残りは良くない。煙道部掘り方の外側にも粘土を検出しており、攪乱による流失ではなく、粘土検出範囲が煙道天井部の立ち上がり部分の痕跡と推測する。覆土 下層は自然堆積状を呈するが、3層はロームブロックが斑状に多く含まれ、人為堆積の可能性ある。遺物 右袖手前の覆土下層から、ほぼ完形の内黒土師器碗1点が出土している。カマド覆土中からはI線端部断面が角形の土師器変成片が出土している。所見 P2～4を古い出入口ピットと捉えた場合、現況よりも一回り小さい竅穴を想定することができる。掘り方調査時では拡張痕跡は確認できなかった。住居跡の廃絶時期は、10世紀前半頃と考えられる。



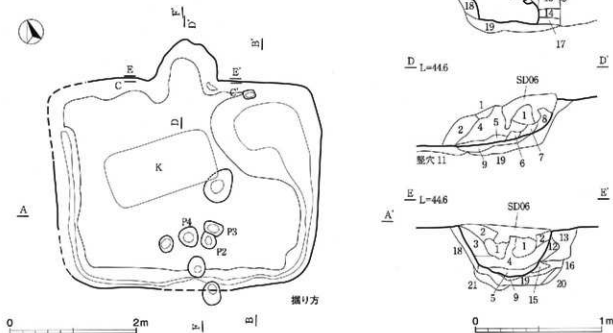
22号住居跡

- 1 埴輪色 ローム粘土少量、埴り強い
- 2 埴輪色 ロームブロック少量、ローム粘土少量、埴り強い
- 3 埴輪色 ロームブロック少量、ローム粘土少量、埴り強い、粘性強い
- 4 埴輪色 埴り強い
- 5 埴輪色 埴り強い
- 6 埴輪色 ロームブロック少量、ローム粘土少量、埴り強い
- 7 埴輪色 ロームブロック少量、ローム粘土少量、埴り強い
- 8 埴輪色 ロームブロック少量、ローム粘土少量、埴り強い、粘性強い
- 9 埴輪色 ロームブロック少量、ローム粘土少量、埴り強い、粘性強い
- 10 埴輪色 ロームブロック少量、埴り強い
- 11 埴輪色 ロームブロック少量、埴り強い、粘性強い

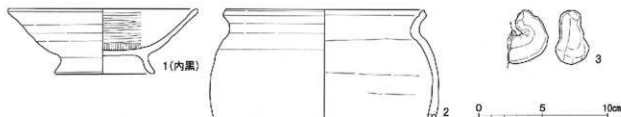
カマド

- 1 埴輪色 灰土焼成、粘土少量、埴り強い、粘性強い
- 2 埴輪色 灰土少量、埴り強い
- 3 埴輪色 灰土少量、灰化面焼成、粘土少量、埴り強い
- 4 埴輪色 灰土少量、埴り強い、粘性強い
- 5 埴輪色 灰土少量、埴り強い、粘性強い
- 6 埴輪色 灰土少量、埴り強い、粘性強い
- 7 埴輪色 灰土少量、埴り強い、粘性強い
- 8 埴輪色 灰土少量、埴り強い、粘性強い
- 9 埴輪色 灰土少量、埴り強い、粘性強い
- 10 埴輪色 灰土少量、埴り強い、粘性強い
- 11 埴輪色 灰土少量、埴り強い

- 12 埴輪色 灰土少量、埴り強い
- 13 埴輪色 ロームブロック少量、埴り強い、粘土少量、埴り強い
- 14 埴輪色 埴り強い、粘性強い
- 15 埴輪色 埴り強い、粘性強い
- 16 埴輪色 埴り強い、粘性強い
- 17 埴輪色 埴り強い、粘性強い
- 18 埴輪色 ロームブロック少量、埴り強い、粘性強い
- 19 埴輪色 埴り強い、粘性強い
- 20 埴輪色 ローム粘土少量、埴り強い、粘性強い
- 21 埴輪色 埴り強い、粘性強い



第144図 22号住居跡



第145図 22号住居跡出土遺物

表65 22号住居跡出土遺物観察表

図録番号	類別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色類	備考
1	土師器 碗	14.8 5.2 7.3	内面黒色処理、ミガキ。	長石、チャート、 海綿骨針	不注	にぶい褐色	定形
2	土師器 壺	(160) — —	口縁内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英	普通	暗褐色	
3	須恵器 瓦	— — —	板肥手瓦片。	石英微粒	普通	灰色	

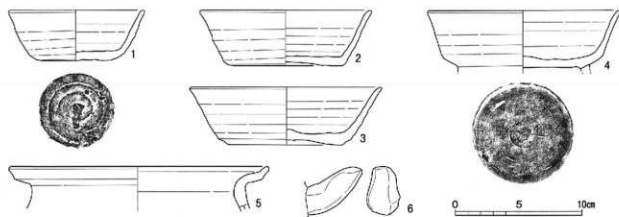
## 24号住居跡 (第146・147図)

**位置** A区北端部、L3～M3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は東側2.85m、西側3.16m、東西方向は3.66～3.84mを測り、平面は横長の長方形でやや台形状を呈する。主軸方位 N-7°-Eで、真北に近い。壁 壁高は36cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。床 中央部は平坦で、四隅がやや低い。主軸線よりも西側が硬化している。周溝は不整形ながら、北壁西側を除き全周する。掘り方は、周溝の内側で明瞭な段差を伴ってやや深く掘り込まれている。これは、古い堅穴の存在と堅穴の更新を示しているものと考えられる。ピット P1は深さ12cmと浅い。P2は出入口ピットであろう。P3は掘り方で確認しており、古い堅穴に伴う出入口ピットと考えられ、掘り方面からは深さ14cmを測る。

**カマド** 北壁中央に構築され、袖は幅広く、遺存状態は良好ではない。覆土 焼失住居であるため、下層には炭化材と焼土を含み、6層は焼土・炭化物以外にローム粒・ブロックが目立つことから、人為的埋没の可能性が高い。4・5層などは、埋没過程で穿たれた柱穴と判断される。遺物 南・東壁際にまとまって出土し、床面からの高さはまちまちながら、1～4の須恵器はいずれも初期埋没中に含まれる。炭化材や焼土ブロックも、堅穴南東側にまとまって検出された。カマド覆土上面からは土師器甕(5)が出土している。

**所見** 掘り方の構造やP3の存在は、堅穴の更新・拡張の痕跡と判断できる。おそらくは、カマドの位置もわずかに変更されているであろう。旧堅穴の平面形は新堅穴と相似形で、その下端で平面規模を推測すると、主軸方向東側で2.39m、西側で2.79m、東西方向で3.21mとなる。基本的には周溝部分のみを拡張しており、床面積の大幅な増加にはつながらない。壁体の腐食とともに壁自体の劣化も進行し、壁体構造全体の改築を行った結果として、堅穴の拡張という現象で現れているものと想像する。住居跡の廃絶時期は、8世紀後半頃に求められる。





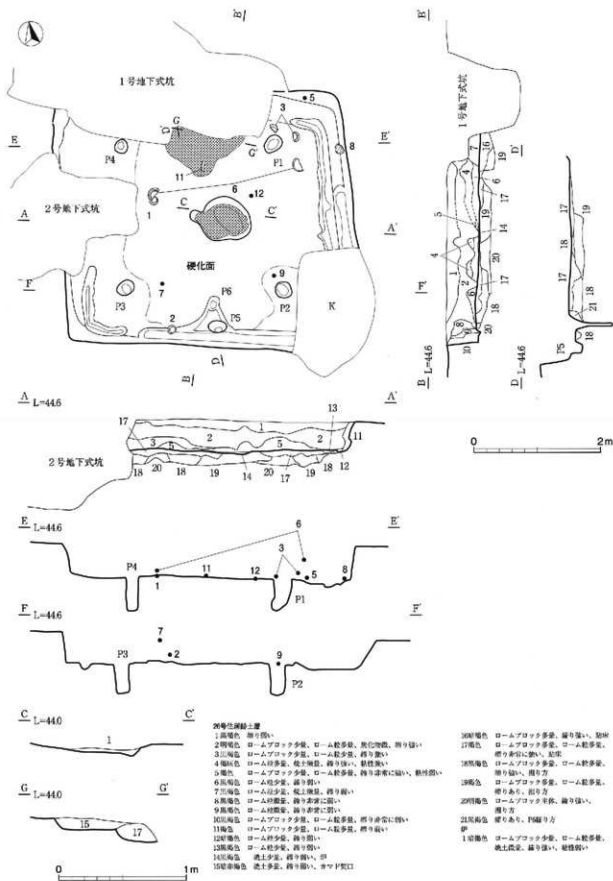
第147図 24号住居跡出土遺物

表66 24号住居跡出土遺物観察表

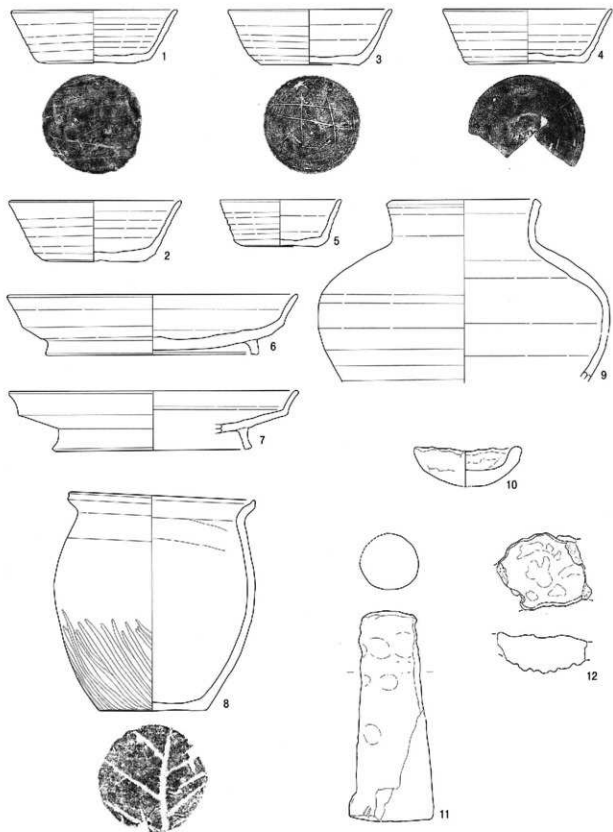
図面番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 杯	10.8 4.0 6.0	底部回転ヘラ切り跡し、無調整。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、海陽骨灰	普通	灰褐色	完形
2	須恵器 杯	13.6 4.4 9.0	底部回転切り難し、無調整。	長石礫、燧化礫、黒色小粒（還元金灰粒）	普通	灰色	70%
3	須恵器 杯	(15.0) 4.6 (8.8)	底部回転ヘラ切り難し後一方ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫、石英粒	良好	暗灰色	50%
4	須恵器 高台付杯	15.3 — —	高台部欠損。底部ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫	普通	灰色	
5	土師器 罌	(20.5) — —	口縁部内外側ココナテ。	長石、石英、雲母	良好	にぶい褐色	
6	土師器 瓶	— — —	瓶肥手。全体に器面卑稚。	長石、石英	不良	にぶい褐色	

## 26号住居跡（第148・149図）

**位置** A区北部、M2～M3グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北（主軸）方向は東側4.12m、東西方向は4.61mを測り、平面はわずかに横長長方形を呈する。北壁と西壁を1・2号地下式坑によって、南東隅を攪乱によって壊され、大きく失う。 **主軸方位** N-7°-E **壁** 壁高は44cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。 **床** 中央部は平坦で硬化し、主柱穴を含む四隅がやや低く軟弱である。周溝には新旧2条あり、内側が古い。南西隅では、新旧の周溝が接続してしまっていたが、最終使用時には古い周溝は埋め戻されていたであろう。掘り方は全体に深く、カマド前面部は地山のローム層が大きく掘り残されていた。また、古い周溝と合致するようない回り小さい壁穴の痕跡を確認することができた。 **ピット** P1～4を主柱穴、P5を新出入口ピット、P6を旧出入口ピットと考える。主柱穴底面には、硬化した圧痕を明瞭に検出している。 **カマド・伊** 1号地下式坑によって消滅しているが、北壁中央辺りに付設されていたものと推測する。焼土・灰混じりの黒褐色土は、壁穴中央付近まで広く分布する。掘り方調査時に明瞭な笑口範囲を検出した



第148図 26号住居跡



第149図 26号住居跡出土遺物

が、これは旧カマドに伴うものと推定する。また、床面中央部には明瞭な被熱部分がある。平面不整形凹形で、規模は98cm×73cmを測り、炉と判断した。覆土 覆土中層には、竪穴南壁付近までカマド崩落後の粘土ブロックが点在し、人為的埋没の可能性がある。9・10層については、土壌化した壁体が想定される。遺物 北東隅付近と、竪穴中央部西側の覆土上層～下層から、まとめて出土している。床面に遺棄されたような遺物は見られない。須恵器坏、盤類、土師器の小形甕は8世紀前半代頃のもの、9の須恵器短頸甕は湖西産の製品かと思われる。所見 本住居跡は、主柱穴配置を全く変更せずに竪穴を拡張し、カマド・出入口ピットを更新している事例である。IH竪穴の下端平面規模は、主軸方向3.3m、東西方向3.9mと推測され、平面は新竪穴と相似形であろう。住居跡の廃絶時期は、8世紀前半代頃に求められる。

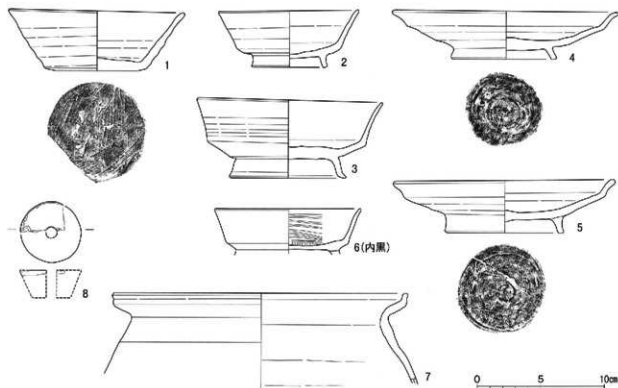
表 67 26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	133 42 88	底部・方向ヘラケズリ、ヘラ記号「キ」「一」。	長石、石英	普通	灰色	変形
2	須恵器 坏	137 49 82	底部回転ヘラケリ跡し、無調整。	長石、チャート産	普通	暗褐色	90%
3	須恵器 坏	130 46 89	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「井」、ロクロ右回転、内面使用痕、内面黒色付着物あり。	長石、チャート産	普通	灰色	80%
4	須恵器 坏	(134) 43 95	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「一」、ロクロ右回転。	長石産、石英産	良好	黒褐色	
5	須恵器 坏	(96) 37 62	底部ヘラ切り後一方向ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、チャート、普通 海砂骨針	普通	灰色	60%
6	須恵器 盤	230 48 169	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石産、海砂骨針	普通	暗褐色	80%
7	須恵器 盤	(230) 47 (156)	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け、ロクロ右回転。	長石産	良好	灰色	
8	土師器 小形甕	145 171 85	口縁部傾み上げ、取下半部ミガキ、底部半華典。	長石、石英	普通	褐色	80%
9	須恵器 加蓋型	(113) — —	口縁部は僅かに外傾し、唇部には洗練色の自然が掛かる。	灰色・白色含丸礫 産少量、鉄分粒少 量、精良	良好	灰白色	湖西産か
10	土師土器	85 34 —	外蓋鉢、内面物置系。	石英	良好	にがい褐色	
11	土師土器 支脚	長 166cm、幅 47cm、厚 4.5cm、重 298.8g。		長石、石英	普通	明赤褐色	
12	鉄滓	長 75cm、幅 60cm、厚 3.0cm、重 178.0g。					

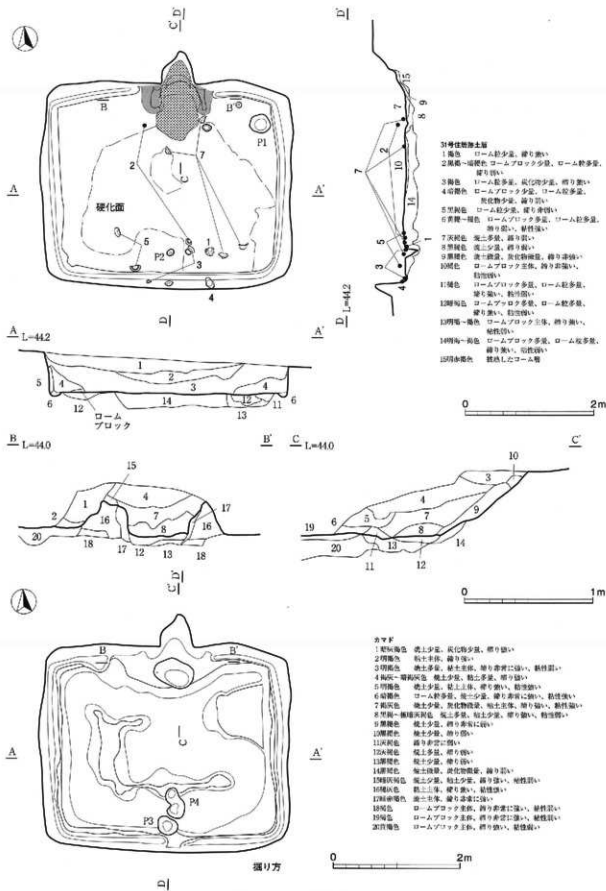


## 31号住居跡 (第150・151図)

位置 A区北端部、M3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は東側3.15m～3.31m、東西方向は3.88m～3.94mを測り、平面はわずかに横長の長方形を呈する。本住居跡が33号住居跡の北壁を壊している。主軸方位 N-3°-E 壁 壁高は45～65cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。床全体に平坦で、北東隅・北西隅・P2周辺を除き、よく硬化している。中央部には軟弱な部分があり、焼土や被熱痕跡は検出できなかった。周溝は全周する。掘り方はやや深く、周溝の内側で明瞭な段差をもっており、周溝部分のみを拡張しているものと思われる。掘り方中央部はL字状に地山ロームが掘り残されて土手状になる。ピット P1(深さ16cm)は貯蔵穴に、P2は新しい出入口ピット(P3は掘り方)に、掘り方で確認したP4は古い段階の出入口ピットに該当する。P2で葦割り調査を実施したところ、直径5～13cmの先細り状柱痕を検出した。カマド 北壁中央やや東寄りに構築され、燃焼部の被熱が著しい。西袖は遺存状態が比較的良好である。掘り方では、ローム層を掘り残して両袖の基部としていた。覆土 褐色土～黒褐色土による自然堆積状を呈する。西壁周溝上の5層は黒褐色に土壌化した壁体の痕跡の可能性はある。遺物 南壁直下および周辺の4層中から、8世紀後葉～9世紀前葉頃の須恵器杯・盤や土師器甕、土師器内黒高台付坏などがまとめて出土している。竪穴埋没初期に一括投棄されたような出土状態と見られる。2の高台付坏と7の土師器の甕の接合関係が類似する点も注意される。所見 竪穴と出入口ピットの造り替えは明瞭であったが、カマドの位置はほとんど変更していないようである。古い段階の竪穴の下端平面規模は、主軸方向2.51～2.72m、東西方向3.9mで、平面形は新しい段階の竪穴と相似形である。24号住居跡と同様、ほぼ周溝部分のみを拡張している。住居跡の廃絶時期は、9世紀前葉頃と考えられる。



第150図 31号住居跡出土遺物



第151图 31号住居跡

表 68 31号住居跡出土遺物観察表

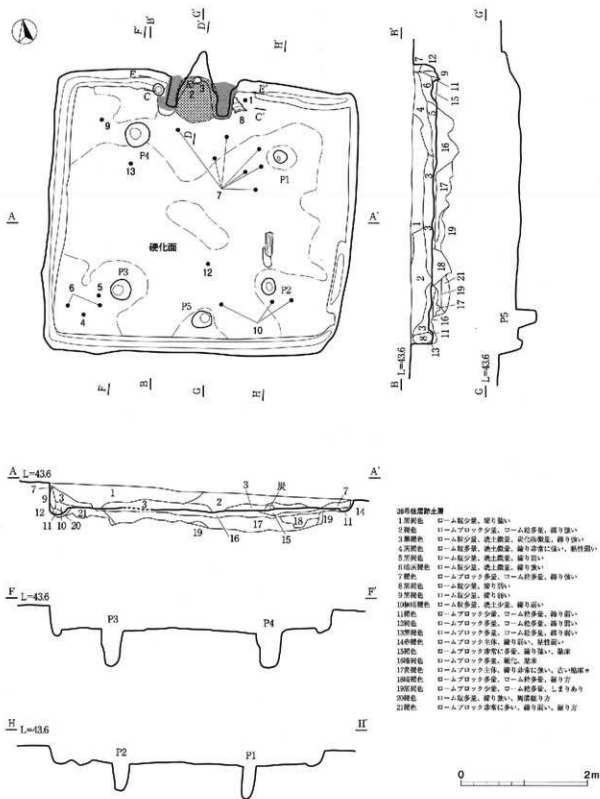
遺物番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	139 49 80	底部一方向ヘラケズリ、ヘラ記号「+」、クロロ石加配。	長石類、黒色鉄、 灰色絹片類	良好	褐色色	60%
2	須恵器 高台付坏	111 45 90	底部圓盤ヘラケズリ、高台貼り付け。	長石類、石英、海 綿骨針	良好	灰色	80%
3	須恵器 高台付坏	146 64 93	底部圓盤ヘラケズリ、高台貼り付け、クロロ石加配。	長石類、海綿骨針	普通	褐色色	60%
4	須恵器 小型罐	178 49 83	底部圓盤ヘラケズリ、高台貼り付け、ヘラ記号。	長石類、海綿骨針	やや不 良	灰色	
5	須恵器 小型瓶	174 42 92	底部圓盤ヘラケズリ、高台貼り付け、ヘラ記号「二」。	長石類、海綿骨針	不良	灰褐色	ほぼ完形
6	土師器 高台付坏	(115) — —	内面黒色焼酎、ミガキ。	長石、石英微粒	良好	褐色、黒色(内面)	
7	土師器 甕	233 — —	口径部内外面コナナ、胴部外面ナア、内面ヘラナア。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
8	石製土 紡織車	径(48)cm、径-cx、重3.87g、持板岩製。					

## 38号住居跡(第152~155図)

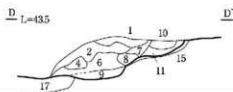
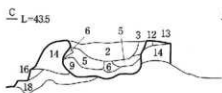
**位置** A区北部調査区際、M4~N4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は4.34m~4.51m、東西方向は4.67m~4.86mを測り、平面形は隅丸正方形に近い。主軸方位 N-12°-E 壁 壁高は14~38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床 やや凹凸があり、壁際やカマド前面、柱穴の周りを除いて硬化している。中央部に床面が軟弱な部分がある。中央部の床面は貼り直されており、5~10cm程度の嵩上げを行っているようである。掘り方は全体にやや深く、一回り小さい古い堅穴を確認した。ピット P1~4が最新主柱穴、P6~9・15(深さ30~50cm)が新主柱穴、P10~13(深さ25~40cm)が旧主柱穴、P5・14が新・旧出入口ピットと考えられる。柱穴配置は、(1期)P10~13とP14→(2期)P6~9・15とP5→(3期)P1~4とP5 という変遷を想定した。2期から3期へは連続的な拡張・更新であろう。P1・2は軟弱な柱痕部分のみを掘り上げた。P3・4は直径24~25cmの柱痕を断面で観察した。古い主柱穴はロームブロックを多量に含む土で埋め戻されている。カマド 北壁中央やや西寄りに構築されている。両袖はアーチ状に湾曲し、残存状態は比較的良好である。火床面の北西奥側で土製支脚が立位状態のまま出土し、支脚の上には2の須恵器坏が逆位で被せられていた。坏と支脚は粘土を貼り付けて固定されていたようで、支脚の周りは赤化した粘土が覆っていた。ローム層の地山を掘り残してカマド両袖の基部としている。旧堅穴に伴うカマド自体は残存しないが、掘り残しの両袖基部を確認している。

**覆土** 1層と2層は調査前の覆土上面において明瞭に分離できた。3~5層は焼土・炭化物および炭化材が含まれ、上層焼土後の人為埋没の可能性がある。

**遺物** 8世紀前葉から中葉頃の須恵器の蓋・坏・盤類と土師器甕等が多数出土している。大半は覆土1~3層に含まれ、カマドを除き、住居廃絶時に遺棄された遺物は認められない。所見 住居跡の廃絶時期は、8世紀中葉頃に求められる。本住居跡は、堅穴と柱穴配置の拡張・更新が明瞭である。新・旧堅穴は、3期と2期の柱穴配置に対応する。旧堅穴の下端平面規模は南北3.9m×東西4.2mである。主軸方位と平面形は新堅穴と同様であろう。1期の堅穴は不明ながら、一辺3.5m程度で主軸はほぼ南北方向と想定する。



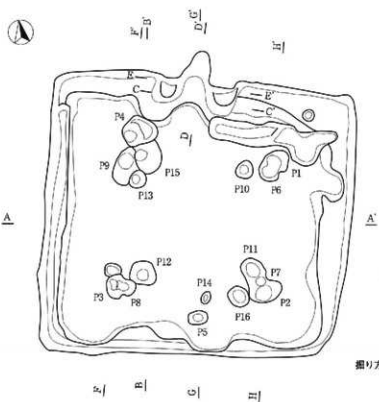
第152図 38号住居跡



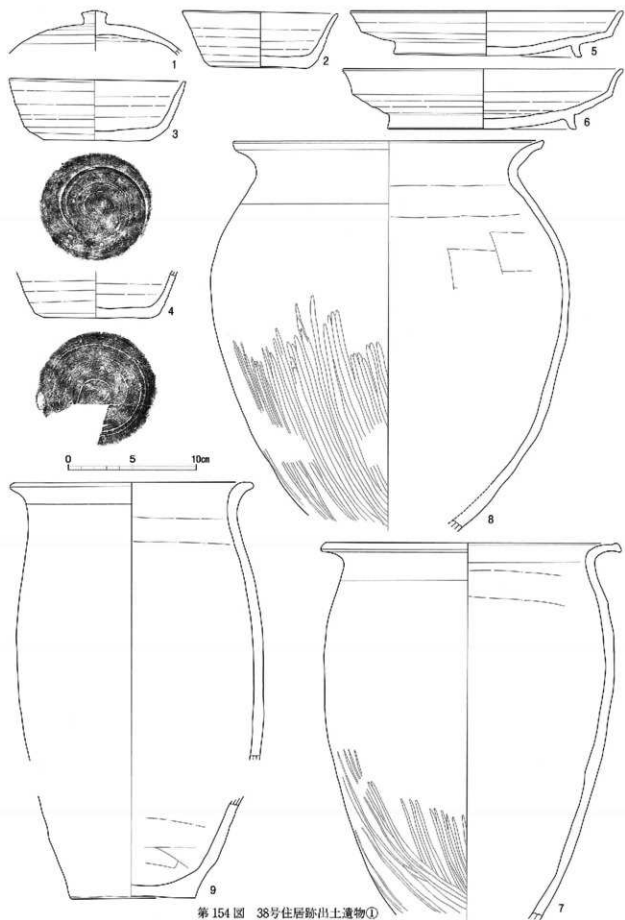
38号住居跡土層

カマド

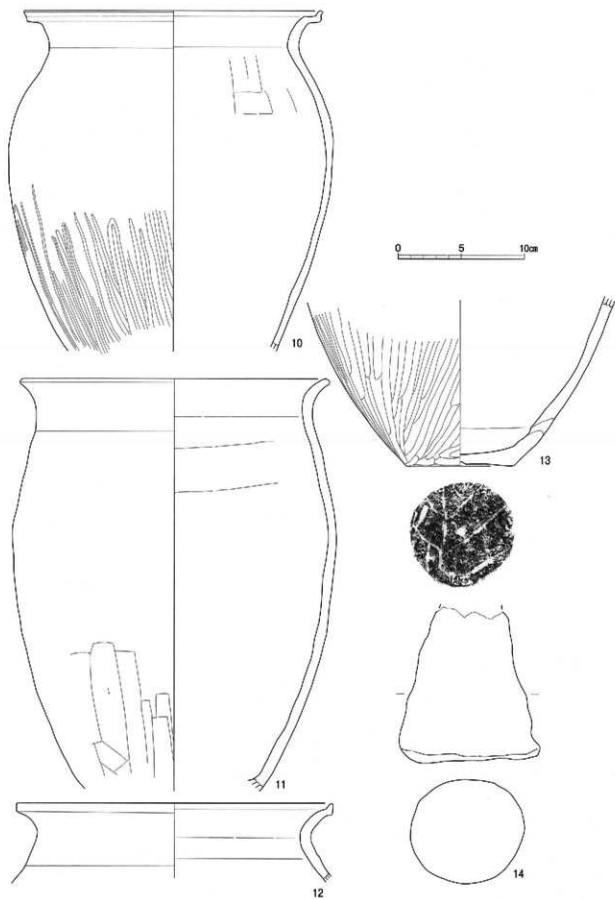
- 1 褐色 焼土少量、盛り高い
- 2 緑灰色-半褐色 焼土多量、盛り高い、粘性強い
- 3 暗褐色 焼土多量、盛り高い、粘性強い
- 4 赤褐色 焼土多量、盛り高い、粘性強い
- 5 緑褐色 焼土多量、盛り高い
- 6 暗褐色 焼土多量、盛り高い
- 7 黄褐色 焼土多量、盛り高い
- 8 暗褐色 焼土少量、盛り高い
- 9 暗褐色 焼土多量、盛り高い
- 10 褐色 ローム数多量、盛り高い
- 11 暗褐色 ローム数多量、盛り高い
- 12 褐色 焼土少量、盛り高い
- 13 暗褐色 焼土少量、盛り高い、粘り強い
- 14 暗褐色 焼土-焼土主体、粘り強い
- 15 灰褐色 焼土少量、盛り高い
- 16 暗褐色 焼土少量、盛り高い
- 17 暗褐色 焼土少量、盛り高い
- 18 黄褐色 ロームアワロケ土層、盛りあり、粘性弱



第153図 38号住居跡カマド・掘り方



第154図 38号住居跡出土遺物①



第155圖 38号住居跡出土遺物②

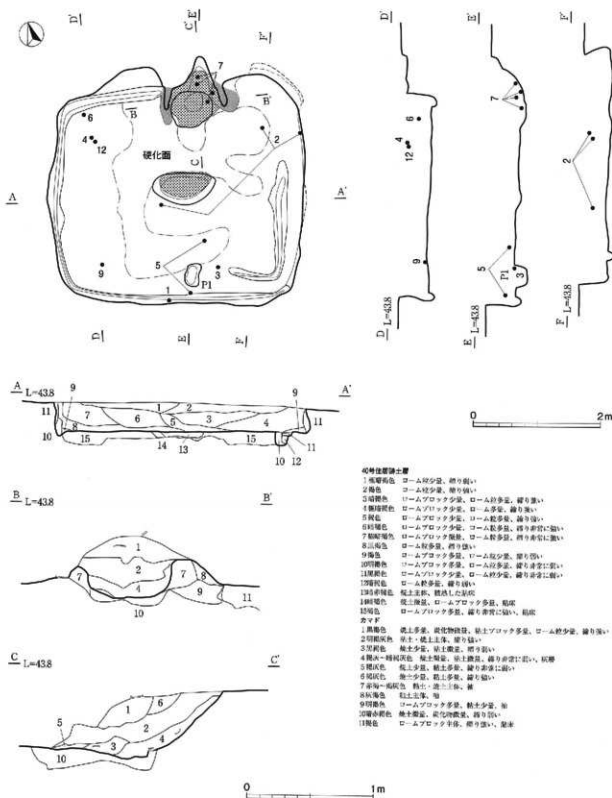
表 69 38号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口縁 部高 径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰土器 甕	-	天井部回転ヘラケズリ。口口口口口。	長石、石英、チャート、海綿骨針	不良	にぶい褐色	
2	灰土器 坪	12.3 4.6 7.6	体部下端回転ヘラケズリ、底部丁寧な回転ヘラケズリ。口口口口口。	長石、少量、チャート、海綿骨針	やや不良	灰白色	定形
3	灰土器 杯	(13.9) 4.9 8.2	体部下端回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ。口口口口口。	チャート連(角丸)、長石、石英、海綿骨針	不良	灰白色	60%
4	灰土器 片	-	底部やや傾き回転ヘラケズリ。口口口口口。	長石、チャート、海綿骨針	普通	灰白色	
5	灰土器 壺	(21.4) 3.6 15.2	内底面に厚さ約1cmの自然物の殻からない意匠焼き痕。	長石、石英、黒色粒	良好	褐色	50%
6	灰土器 壺	(21.9) 4.8 14.9	酸化鉄の生焼け製品で、高知からの廃棄品の利用か。	長石、チャート	不良	黄褐色	40%
7	土師器 壺	23.4 -	口縁部僅かに積み上げ、胴下半部ミガキ。	長石、石英	普通	淡黄褐色	
8	土師器 壺	(24.3) -	口縁部僅かに積み上げ、胴下半部ミガキ。	長石、石英	普通	にぶい黄色	
9	土師器 壺	(18.6) (23.0) 9.8	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	長石、石英	普通	淡黄褐色	
10	土師器 壺	(23.5) -	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ミガキ、内面ヘラケズリ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
11	土師器 壺	(24.5) -	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ヘラケズリ、内面上半部ヘラケズリ、下半部ナデ。	長石、石英	不良	にぶい黄褐色	
12	土師器 壺	(24.9) -	口縁部内外面ヨコナデ。	石英	良好	にぶい黄色	
13	土師器 壺	- 8.5	胴下半部ミガキ、底部木炭痕。	長石、石英、雲母	普通	灰褐色	
14	土製品 支脚	長 12.3 cm、幅 9.0cm、厚 8.3cm、重 906g。		長石、石英	普通	褐色	

40号住居跡(第156-158図)

位置 A区北端部付近、M4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は東側3.66m、西側3.43m(3.72m)、東西方向は4.00mを測る。北壁ラインは整わないが、基本形状は横向きの隅丸台形あるいは隅丸長方形であろう。主軸方位 N-28°-E 壁 壁高は40~46cmを測り、全体的にはほぼ垂直に立ち上がる。北壁東側は大きく抉れている。床 やや凹凸があり、炉の周りを除いた堅穴中央部が硬化する。北壁西側から南壁にかけて周溝がめぐる。また、東壁側には古い周溝を確認した。掘り方では、現況の堅穴よりも一回り小さい堅穴が認められた。古い周溝と合致するため、堅穴の拡張・更新と判断できる。ビット P1(深さ21cm)を出入り口ビットと推測する。カマド・炉 北壁中央やや東寄りに構築され、被熱は著しい。両袖にはオーバーハングする部分がある。右袖中央部には、補強材の土師器壺が逆位の状態で埋め込まれ、一部は内壁に露出している。掘り方面では、ローム層を掘り残した両袖の基部を確認している。床面中央部には強く被熱した炉があり、15cm程度掘りこまれる。覆土 全体にローム粒は多いが、褐色



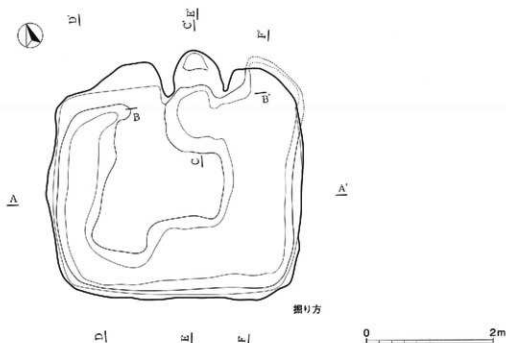


40号住居跡土層

- 1 地層褐色 コーム粒少量、焼石多い
- 2 雑色 コーム粒少量、焼石多い
- 3 暗褐色 ロームアロク少量、ローム粒多量、焼石多い
- 4 暗褐色 ロームアロク少量、ローム多量、焼石多い
- 5 褐色 ロームアロク少量、ローム粒多量、焼石多い
- 6 暗褐色 ロームアロク少量、ローム粒多量、焼石多量に多い
- 7 暗褐色 ロームアロク少量、ローム粒多量、焼石多量に多い
- 8 灰褐色 ローム粒多量、焼石多い
- 9 褐色 ロームアロク多量、ローム粒少量、焼石多い
- 10 暗褐色 ロームアロク多量、ローム粒多量、焼石多量に多い
- 11 暗褐色 ロームアロク少量、ローム粒少量、焼石多量に多い
- 12 暗褐色 ローム多量、焼石多い
- 13 暗褐色 焼土多量、焼土した灰灰
- 14 暗褐色 焼土多量、ロームアロク多量、焼土
- 15 暗褐色 ロームアロク多量、焼石多量に多い、焼土
- 16 暗褐色 焼土多量、炭化物多量、焼土アロク多量、ローム粒少量、焼石多い
- 17 暗褐色 焼土・焼土多量、焼石多い
- 18 暗褐色 焼土多量、焼土多量、焼石多い
- 19 暗褐色 焼土多量、焼土多量、焼石多量に多い、灰層
- 20 暗褐色 焼土多量、焼土多量、焼石多量に多い
- 21 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 22 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 23 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 24 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 25 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 26 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 27 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 28 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 29 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 30 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 31 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 32 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 33 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 34 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 35 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 36 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 37 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 38 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 39 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い
- 40 暗褐色 焼土少量、焼土多量、焼石多い

第156図 40号住居跡

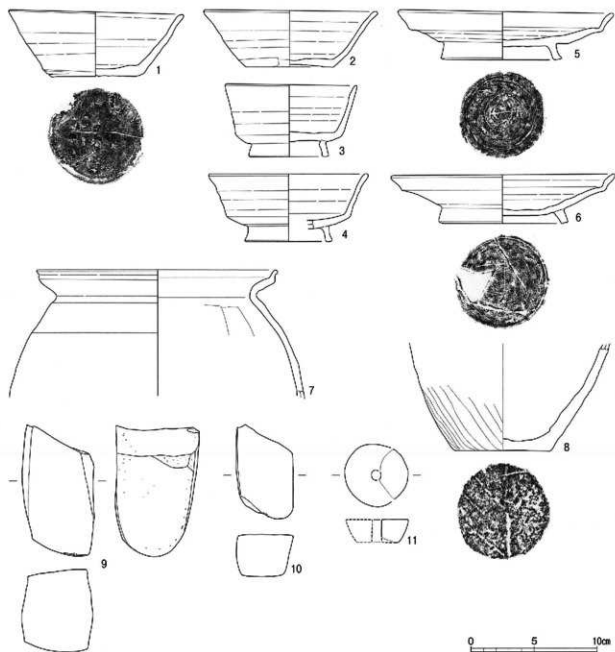
上～黒褐色土による自然堆積状を呈する。10・11層は土壌化した壁体の痕跡と思われる。西側の北壁直下では、堅穴壁が崩落して堆積したローム層と土壌化した壁体の痕跡（層厚7cmの11層が周溝際で垂直に堆積）を検出している。遺物 南壁上端際と南壁付近の床面直上から、ともにほぼ完形の須恵器坏・盤（1・5）が出土している。カマド覆土中からも土師器甕の大型破片（7）が出土している。須恵器の坏、高台付坏、盤、土師器の甕は9世紀前半～中葉頃の遺物である。所見 堅穴と周溝を拡張・更新した事例である。24・31号住居跡等と同様、ほぼ周溝部分のみを拡張している。カマドや炉は、わずかに北側へ移設されたものと推察する。旧堅穴の下端平面規模は、主軸方向2.95m、東西方向3.6mと推測され、平面は現況の新堅穴と相似形であろう。住居跡の廃絶時期は、9世紀中葉頃に求められる。



第157図 40号住居跡掘り方

表70 40号住居跡出土遺物観察表

調査番号	遺物種別	口縁輪高底径	特徴	胎土	気乾	色調	備考
1	須恵器坏	13.9 5.3 7.3	底縁輪縁割いナア、中央オサエ。体部下縁にヘラ切りのヘラ先痕。ロクロ右回転。底部外側へラ記号「一」。	長石 少量、 チャート角丸塵少量	普通	灰褐色	90%
2	須恵器坏	13.8 4.6 6.9	体部下縁手持ちヘラケズリ。底縁回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。	長石、石英、海綿骨針	やや不良	灰色	70%
3	須恵器高台付坏	(10.6) 5.8 (6.1)	底合部欠損。底部回転ヘラケズリ後高台盛り付??。	長石、海綿骨針	普通	暗灰色	床面直上



第158図 40号住居跡出土遺物

図様 番号	器 種	口徑 器高 底徑	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 高台付平 鉢	(12.5) 5.4 (7.0)	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石類、黒色粒	良好	灰褐色	
5	須恵器 鉢	17.1 4.0 9.4	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ヘラ記号「一」。焼き差み大。	長石類、黒色粒	良好	灰褐色	内面裏ね焼き痕 径 9.5cm
6	須恵器 鉢	17.8 3.8 10.3	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ヘラ記号「エ」。	長石類	不良	にぶい橙色	60%

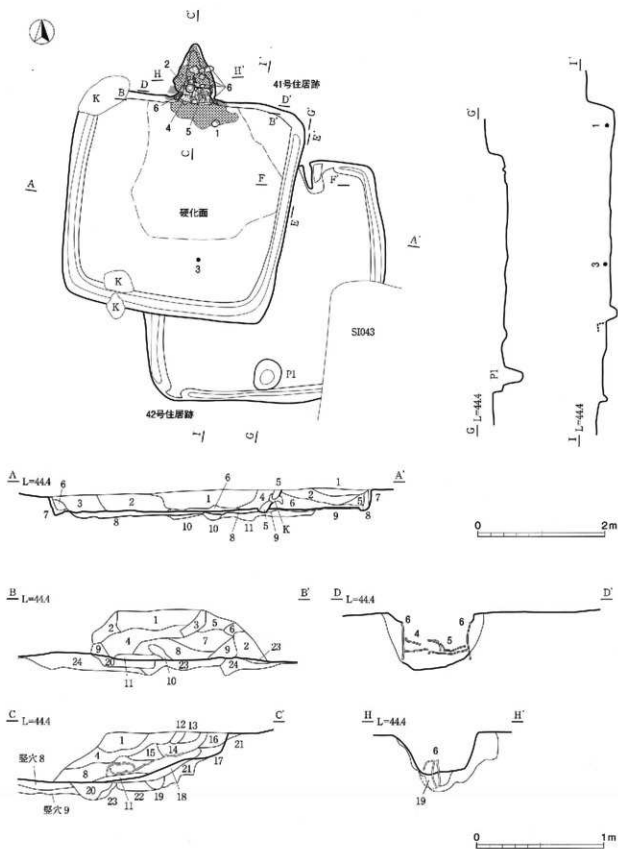
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土師器 甕	19.1 -	口縁部内外面コナナデ。胴部外側ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい藍色	
8	土師器 甕	- 7.7	胴下半部外面ミガキ。底部木腐痕。	石英、雲母	普通	橙色	
9	石製品 砥石	長10.2cm、幅5.6cm、厚6.4cm、重610g、安山岩製。					
10	石製品 砥石	長16.1cm、幅4.3cm、厚3.3cm、重142.94g、霞石岩製。					
11	土製品 乾漆草	径(4.0)cm、厚1.8cm、孔径(0.8)cm、重14.53g。					

#### 41号住居跡(第159～161図)

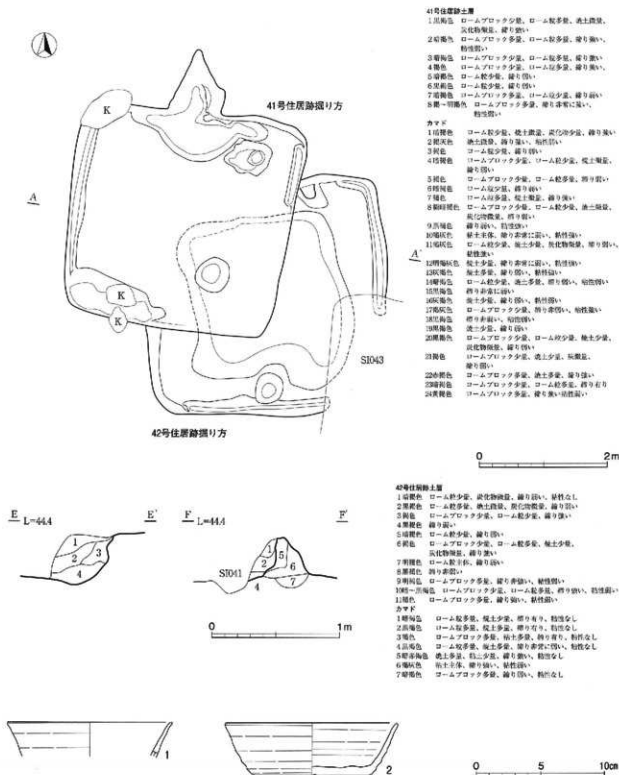
**位置** A区北西端部、K3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は3.39m～3.53m、東西方向は3.36m～3.57mを測り、平面は正方形を呈する。42号住居跡の北西部を壊している。主軸方位 N-9°-E 壁 壁高は25～40cmを測り、やや傾斜する。床 全体に平坦だが、中央部がわずかに窪む。カマドから床面中央部にかけてよく硬化している。北壁以外は周溝がめぐる。掘り方は、カマド前面が土坑状に掘り込まれており、その他は全体に浅い。ピット - カマド 北壁中央に構築され、袖は極めて短い。須恵器甕(6)を縦長破片に分割し、両袖前面に補強材として1枚ずつ貼り付け、燃焼部中央には2枚を立位埋設して支脚にしている。支脚上面には土師器甕の底部を被せている。また焚口部からは、天井補強材として両袖上に架かっていた土師器甕2個体(4・5)が、入れ子状に合わされた状態のまま落下していた。覆土 全体にローム粒は多いが、褐色土～黒褐色土による自然堆積状を呈している。遺物 懸架材となっていた土師器甕の上には完形の須恵器環(2)が置かれていた。天井部の落下・崩壊直後に遺棄されたものと考えられる。煙道部からは、袖補強材などと同一個体の須恵器破片が出土している。カマド前面の堅穴覆上下層からは1の須恵器環が出土している。所見 カマド袖の補強材や支脚に、分割した須恵器甕を再利用している状況は、19号住居跡(10世紀前葉)の構造と非常に似ている。棚状施設は確認できなかったが、支脚の位置や粘土分布範囲から類推すれば、堅穴北壁の外側にも屋内空間が存在したと思われる。住居跡の廃絶時期は、出土遺物から見て9世紀後葉頃と考えられる。

#### 42号住居跡(第159・160図)

**位置** A区北西端、K3～K4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は3.82m、東西方向は3.86mを測り、平面は不整隅丸正方形と推測する。41・43号住居跡によって、大部分を壊されている。主軸方位 N-3°-W 壁 壁高は7～27cmを測り、わずかに傾斜する。床 全体に平坦で、南西隅以外はよく硬化する。残存範囲内は周溝が全周する。掘り方は、堅穴中央部が方形状に深く掘り込まれている。ピット 1箇所。P1は出入口ピットであろう。カマド 右袖しか残存していない。北壁中央やや東寄りに構築され、カマド内面の被熱は弱い。覆土 3・6層はしまりが強く、ロームブロック・ローム粒も目立ち、人為埋没の可能性がある。8層は土壌化した壁体と推測する。遺物 覆土中から須恵器環など少量の遺物が出土している。所見 住居跡の廃絶時期は、出土遺物から見て、8世紀後葉頃と考えられる。

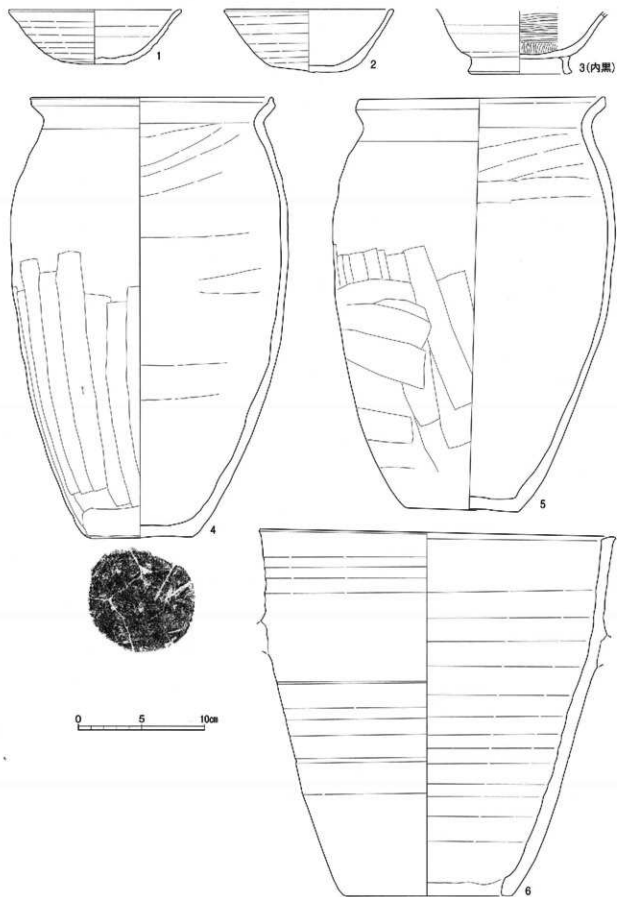


第159圖 41・42号住居跡



- 41号住居跡出土品
- 1号陶器 ロームアブロック少量、ローム粘多量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 2号陶器 ロームアブロック多量、ローム粘多量、線り強い、粘り強い
  - 3号陶器 ロームアブロック少量、ローム粘多量、線り強い
  - 4号陶器 ロームアブロック少量、ローム粘多量、線り強い
  - 5号陶器 ローム粘少量、線り強い
  - 6号陶器 ローム粘少量、線り強い
  - 7号陶器 ロームアブロック多量、ローム粘少量、線り強い
  - 8号一明色色 ロームアブロック多量、線り非常に強い、粘り強い
- キヤド
- 1号陶器 ローム粘少量、焼土少量、炭化少量、線り強い
  - 2号陶器 焼土少量、線り強い、粘り強い
  - 3号陶器 ローム粘少量、線り強い
  - 4号陶器 ロームアブロック少量、ローム粘少量、焼土少量、線り強い
  - 5号陶器 ローム粘少量、線り強い
  - 6号陶器 ローム粘少量、焼土少量、線り強い
  - 7号陶器 ロームアブロック少量、ローム粘少量、焼土少量、炭化少量、線り強い
  - 8号陶器 焼土少量、線り強い
  - 9号陶器 線り強い、粘り強い
  - 10号陶器 粘土少量、線り非常に強い、粘り強い
  - 11号陶器 ローム粘少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い、粘り強い
  - 12号陶器 粘土少量、線り非常に強い、粘り強い
  - 13号陶器 ローム粘少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 14号陶器 粘土少量、線り非常に強い、粘り強い
  - 15号陶器 粘土少量、線り強い、粘り強い
  - 16号陶器 ロームアブロック少量、線り非常に強い、粘り強い
  - 17号陶器 粘土少量、線り強い
  - 18号陶器 ロームアブロック少量、ローム粘少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 19号陶器 ロームアブロック少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 20号陶器 ロームアブロック少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 21号陶器 ロームアブロック少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 22号陶器 ロームアブロック少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 23号陶器 ロームアブロック少量、焼土少量、炭化物微量、線り強い
  - 24号陶器 ロームアブロック少量、線り非常に強い

第160図 41・42号住居跡、42号住居跡出土遺物



第161圖 41号住居跡出土遺物

表 71 41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁 高さ 直径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰土器 杯	(135) 4.4 5.3	底面回転ヘラ切り後一方向ヘラズリ・オサエ。口クロ右回転。	石英、海綿骨針	不良	浅黄褐色	60%
2	灰土器 杯	134 5.0 6.0	底面回転ヘラ切り後傾倒ヘラナデ。	石英、海綿骨針	不良	にぶい褐色	完形 カマド
3	土師器 高台付杯	— — 8.2	底面回転ヘラズリ後高台貼り付け。内面黒色焼痕。ミガキ。口クロ右回転。	長石、石英	普通	灰褐色	
4	土師器 壺	190 35.0 8.7	口縁部内外面口コナデ。胴上半部外面ナデ、下半部縦方向のヘラズリ。内面ヘラナデ。	バミス粒・糠多量	普通	にぶい褐色	90% カマド
5	土師器 壺	192 32.8 8.8	口縁部内外面口コナデ。胴上半部外面ナデ、下半部縦方向のヘラズリ。内面ヘラナデ。底面オサエ。	バミス粒・糠多量	普通	にぶい褐色	90% カマド
6	灰土器 杯	28.1 28.7 13.1	作部内外面口コナデ。底面2孔式。	長石、海綿骨針	不良	灰白色	カマド

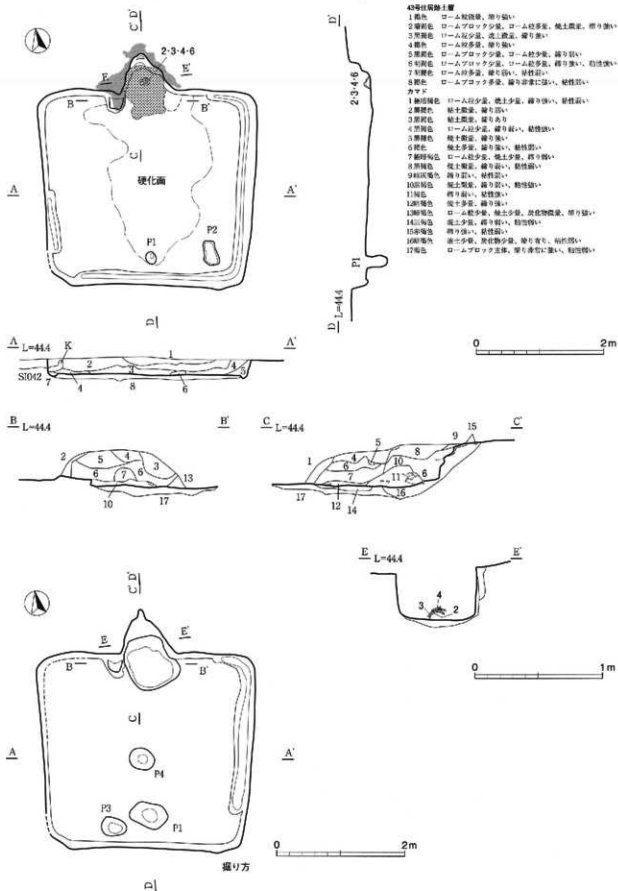
表 72 42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁 高さ 直径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰土器 杯	(130) — —	口縁部片。口クロ目隠い。前面内面酸化塩。表面還元塩。口クロ右回転。	白色微粒、海綿骨針微量	普通	灰色	
2	灰土器 杯	136 4.2 9.0	底面回転ヘラ切り後一方向ヘラズリ。作部外面メリハリのある口クロ右。内面の口クロ右は弱い。	石英、海綿骨針、海綿骨針	普通	褐色	酸化銅混成 50%

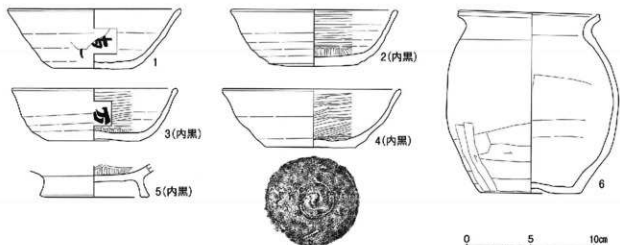
## 43号住居跡 (第162・163図)

位置 A区北端部付近、K3～K4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は3.14m、東西方向は北側3.44m、南側3.10mを測り、平面は逆台形に近い方形を呈する。42号住居跡の南東部を壊している。主軸方位 N-10°-E 壁 壁高は25cmを測り、わずかに傾斜する。床 全体に平坦で、カマドからP1にかけて帯状に硬化する。周溝は、北西隅を除いて廻っている。掘り方は全体に浅い。ピット P1が出入口ピット。P2は深さ5cmと浅い。P3・4(深さ28cm・15cm)は掘り方で確認したが、用途不明である。カマド 北壁中央に構築され、左袖の基部のみ残存する。燃焼部中央では、土師器杯・須恵器杯や土師器壺底部など計5点を逆位に積み重ねることで支脚としており、17号住居跡のカマド支脚と似ている。順序は下から2→3→4→6の底部、となる。カマドの掘り方の外側にも掘り跡の土を検出している。覆土 全体に自然堆積であるが、4層はローム粒が多く、人為的埋没や周堤の崩れた土が堆積した可能性がある。遺物 P2からは土師器壺の破片が出土している。カマド覆土中から焚口部周辺の床面直上にかけて、6の土師器壺の破片が散乱して出土した。本来は、この壺自体が支脚や補強材として使用されていたのであろう。カマド支脚に使われている土師器内黒杯や土師器小型壺は9世紀後葉頃のものである。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。支脚の位置と粘土分布の広がり、堅穴北壁外側にも屋内空間が存在していたことを示唆している。





第 162 図 43号住居跡



第163図 43号住居跡出土遺物

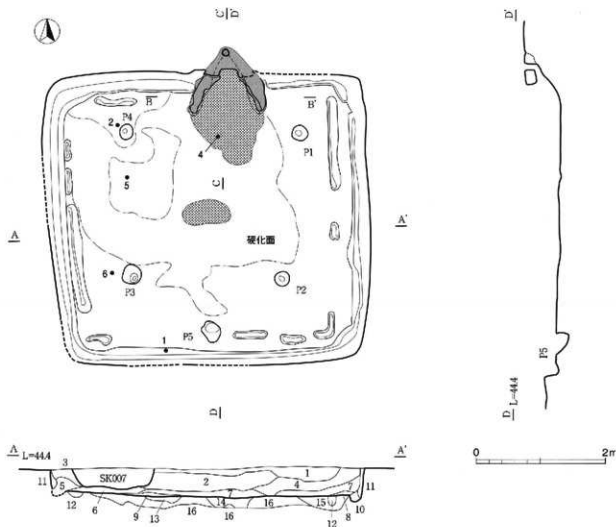
表73 43号住居跡出土遺物観察表

図面番号	類別 器種	口径 器高 底径	特徴	土土	焼成	色調	備考
1	須恵器 杯	(135) 4.7 5.7	底部回転ヘラ切り施し、無調整、ロクロ右回転。体部裏面墨書文字「□」。	灰石、石英	不良	灰白色	50%
2	土師器 杯	12.8 4.6 7.1	底部回転ヘラ切り施し、後ヘラナデ。体部外面ロクロナデ、内底面一方、体部内面ヨコ方向ミガキ。内面黒色処理。	石英、燧砂粒	良好	にぶい褐色	完形 カマド
3	土師器 杯	13.0 4.2 7.1	底部回転ヘラ切り施し、無調整。体部外部ロクロナデ、内底面一方、体部内面ヨコ方向ミガキ。内面黒色処理。体部斜線墨書「□万?」。	石英、長石、角閃石	良好	にぶい褐色	完形 カマド
4	土師器 杯	(13.9) 4.6 7.0	底部回転ヘラ切り施し、無調整。内底面環状・放射状ミガキ。内面黒色処理。	長石、石英	良好	にぶい褐色	50% カマド
5	土師器 高台付杯	- - 8.4	底部回転ヘラナズリ、ロクロ右回転。底部2方向ヘラナズリ。内面黒色処理・ミガキ。	長石、石英、角閃石	良好	にぶい褐色	
6	土師器 小皿型	(11.0) (14.2) 7.9	口縁部上方に輪まみ上げる。腹上半部ナデ、下半部ヨコ方向ヘラナズリ後、腹方向ヘラナズリ。底部外面ナデ調整で中央部が窪む。	燧砂粒、チャート	普通	にぶい褐色	30% カマド

46号住居跡(第164~166図)

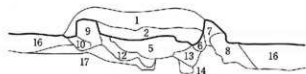
位置 A区北部、K4~L4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は4.5m、東西方向は4.88mを測り、平面形はわずかに横長の長方形である。時期不明の6~8・10・38・40号土坑に切られる。主軸方位 真北を指す。壁 35~43cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床 やや凹凸があり、床面中央部と北西側が硬化する。周溝は内外2条めぐり、内側が古い。壁際の新周溝は全周し、旧周溝は断続的である。掘り方は全体的にやや深く、旧周溝と合致するように、一回り小さい旧堅穴を確認している。中央部にはL字状の中島が掘り残されている。ピット P1・2・3・4(各深さ61cm・63cm・30cm・75cm)は新主柱穴、P6・7・8(掘り方面からの各深さ54cm・34cm・14cm)は古い主柱穴と考えられる。P1・2・4は軟弱な柱痕部分のみを掘削し、P3は直径24cmの柱痕を断面で確認した。古い主柱穴はロームブロックを多量に含む土で埋め戻されていた。P5(深さ33cm)は新旧共通の出入口ピットであろう。P9・10・11(各深さ18cm・19cm・16cm)の性格は判断が難しいが、主柱穴の可能性が残る。カ

マド・炉 北壁中央やや東寄りに構築されている。両袖はアーチ状に湾曲し、煙道部の天井が遺存しており、残存状態は比較的良好である。焼土と灰を含む薄い層がカマド前面に広く散布していた。ローム層の地山を掘り残してカマド両袖の基部としている。また、床面中央にはわずかに窪んだ被熱面がある。焼け込みが著しく、炉と判断する。 覆土 1層と2層は調査前の覆土上面において明瞭に分離できた。2・4層はローム粒が多く含まれ、人為埋没の可能性がある。 遺物 1・2の須恵器坏は床面から、4～6の土師器甕は覆土中～下層から出土した。手捏土器も出土している。 所見 住居跡の廃絶時期は、8世紀前半頃である。本住居跡は、柱穴配置や周溝、掘り方の状況から見て、堅穴の拡張・更新が明瞭である。主柱穴配置は(1期) P8・6・7・4 → (2期) P1～4 という変遷と考えた。ただし、堅穴の拡張に対して、主柱穴配置はわずかに縮小しているようである。古い堅穴の下端平面規模は南北3.65m×東西4.0mである。主軸方位と平面形は新しい堅穴と同様である。また、P9～11の配置は9世紀前半の47・75号住居跡と類似している。掘り方平面図に入れたが、本来は床面で検出できていた可能性が高いため、3期目の主柱穴と捉えることも可能である。



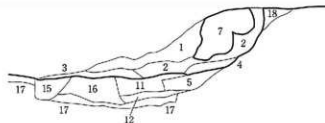
第164図 46号住居跡

B L=44.4



B'

C L=44.4



C'

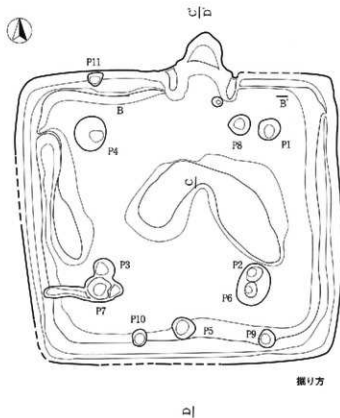
0 1m

46号住居跡土層

- 1層褐色 ローム較少量、焼り跡い
- 2層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 3層暗褐色 ローム較少量、焼り跡い
- 4層赤土 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 5層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り跡い
- 6層暗褐色 ローム粘土層、焼り有り
- 7層灰褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 8層赤土 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り跡い
- 9層褐色 ローム粘土層、焼り有り、粘土塊
- 10層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り跡い
- 11層暗褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 12層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り跡い
- 13層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り、粘土塊
- 14層暗褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 15層赤褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 16層赤褐色 ローム粘土層、焼り有り、粘土塊

9号マド

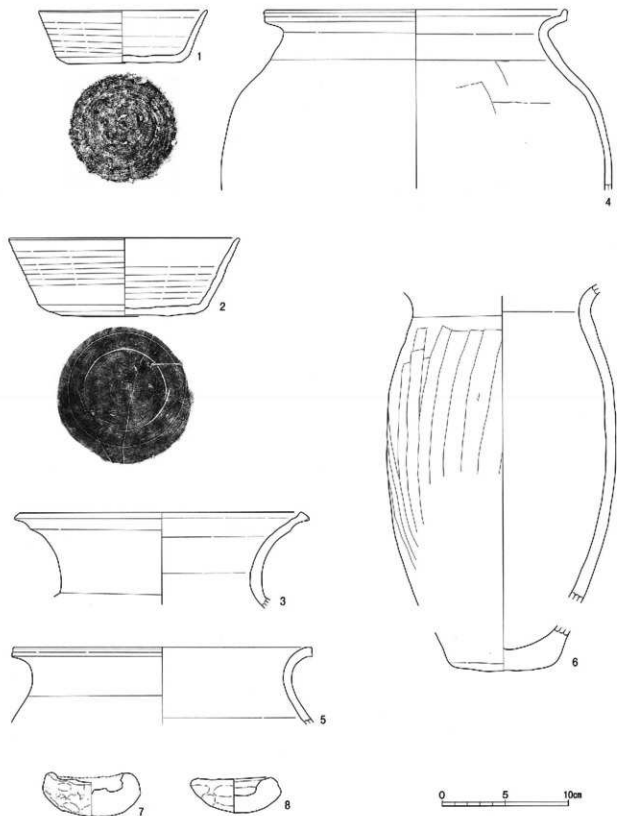
- 1層褐色 焼り跡い
- 2層褐色 ローム粘土層、焼り有り
- 3層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 4層赤褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 5層赤褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、粘土塊、焼り有り
- 6層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、粘土塊、焼り有り
- 7層灰褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り、粘土塊
- 8層褐色 ローム粘土層、焼り跡い、粘土塊
- 9層褐色 ローム粘土層、焼り跡い、粘土塊
- 10A層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り跡い
- 11層暗褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 12層褐色 ローム粘土層、ロームブロック少量、焼り有り
- 13A層褐色 ローム粘土層、粘土少量、粘土塊、焼り有り
- 14層暗褐色 ローム粘土層、焼り跡い、粘土塊
- 15層暗褐色 ローム粘土層、ローム粘土層、焼り有り、焼り層
- 16層暗褐色 ローム粘土層、ローム粘土層、焼り有り
- 17層暗褐色 ローム粘土層、ローム粘土層、焼り有り、粘土塊
- 18層暗褐色 粘土粘層、粘土少量、焼り有り、粘土塊



A'

0 2m

第165図 46号住居跡カマド・掘り方



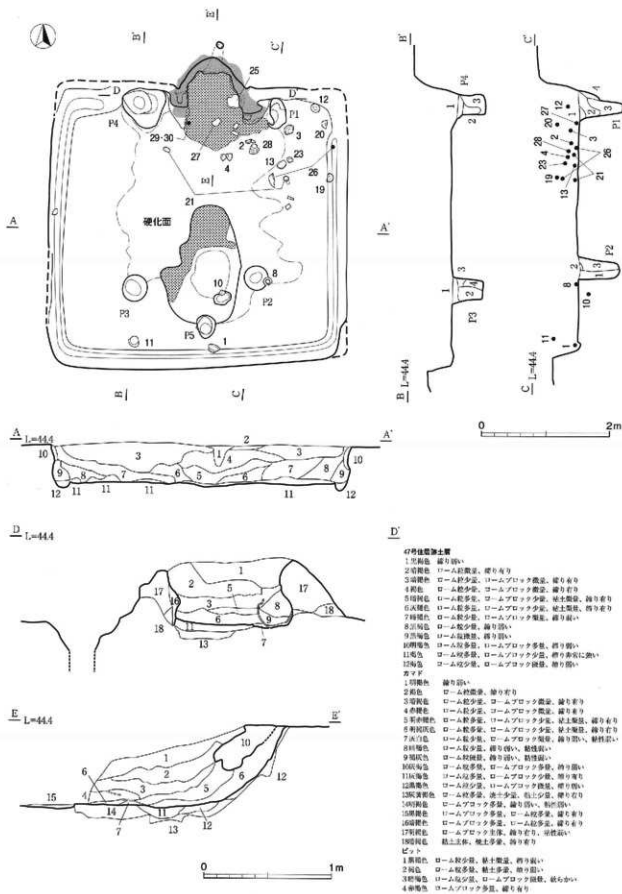
第166图 46号住居跡出土遺物

表 74 46号住居跡出土遺物観察表

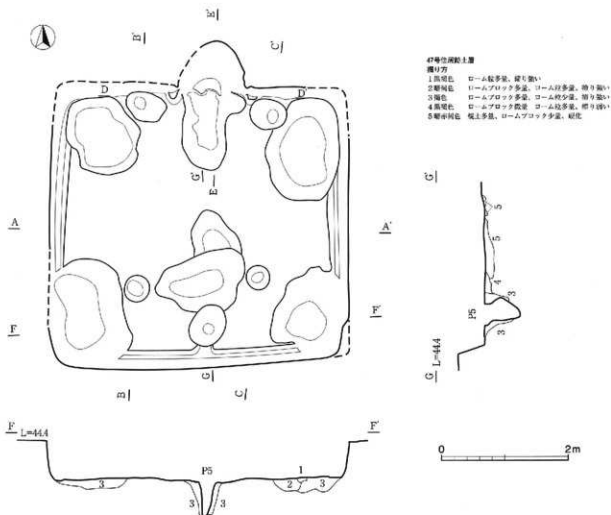
図版番号	種別 器種	口徑 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 杯	138 4.1 90	底面四角ヘラケズリ。縁の深い2次底部を持つ。内側全面に磨り溜りによる平滑化した空白面あり。コナテ左回転。	男人 5mm 程度の白色砂、白色泥、黒色粒、黒粒、黒粒、黒粒、黒粒	良好	暗灰色	90%
2	須恵器 杯	180 6.1 102	底部2段の同心円状の底面ヘラケズリ。2次底部も同心ヘラケズリ。ロクロ右回転。	白色微粒、長さの短い黒粒、黒粒	普通	灰白色	70%
3	須恵器 鉢	(221) — —	口縁部破片。内側面平直。口縁縁起は平直で、外面縁部5下に深い縁を持つ。	石灰、炭母	普通	暗灰色	
4	土器 釜	(235) — —	口縁部片。口縁部を上方に盛り上げる。口縁部内外面コナテ、胴部外面ナテ、内面ヘラケテ。	炭石、石灰、炭母	普通	にぶい灰色	
5	土器 釜	(236) — —	口縁部片。口縁部を平直面をつくる。口縁部内外面コナテ。	炭石、石灰、炭母	良好	にぶい褐色	
6	土器 釜	— 8.0 —	胴部外面前方の「平なヘラケズリ。内面ナテ。底部外縁部平直。内底面ナテ。	炭石、石灰主体の粗砂多量	普通	暗灰色	
7	土器 土器	6.7 3.4 —	口縁部片。口縁部を短く上方に盛り上げる。	長石、炭母、炭母、炭母	普通	にぶい灰色	
8	土器 土器	(60) 2.7 —	厚手で、断面が深い環状の残片。	炭母	普通	にぶい灰色	50%

## 47号住居跡（第167～171図）

位置 A区北部、L3～L4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は4.36m～4.67m、東西方向は4.67mを測り、平面形は正方形である。13・14・21・23・29号土坑によって部分的に壊されている。48号住居跡北壁と103号土坑西端を、本住居跡が壊している。主軸方位 真北を指す。壁 壁高は40～60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床 中央部から階際に向かってわずかに傾斜し、やや凹凸がある。主柱穴に囲まれた壁穴中央部とカマドから出入口部にかけての範囲がよく硬化している。周溝はほぼ全周する。掘り方は、壁穴四隅と出入口部に不整形な床下土坑がある。ピット P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットであろう。P1・2はカマド脇の北壁直下に掘り込まれているため、カマド両袖は柱穴の掘り方上に構築されている。各柱穴では、直径20cm前後の軟弱な柱痕と、ロームブロックを多量に含んだ根固め土を検出している。カマド・炉 北壁中央に構築され、煙道部の天井が良好に残存する。右袖の内側からは、底部～胴下部を欠損した土器器底(25)が逆位で出土した。覆土中には同一個体の破片が散見され、本来は懸け甕であったと推測する。床面中央部からP2・3・5の間にかけては、不整形楕円形の炉がある。浅い皿状に掘り込まれ、被熱面は北西に偏る。炉の覆土は埋め戻しの可能性が高い。炉の下部は床下土坑となっていた。覆土 5・6層は粘土のブロックが斑状に含まれ、4～6層の堆積がやや乱れることから、人為的埋没と推測する。炭化材等は検出されなかったため、焼失住居とは断定できない。床下の11層は非常に強くしり、堆積後に踏み固められた可能性がある。遺物 壁穴北東隅の覆土上層～下層から集中して出土している。また、南周溝際の9層からは完形の須恵器杯(1)が、北東隅周溝際の9層からは完形の須恵器盤(12)と内周土器器底(19)が、P2脇の床面からは須恵器杯(9)が逆位で、それぞれ出土している。カマド覆土中からは、鉄製品が2点出土しており(29・30)、同一個体の可能性が高い。所見 主柱穴の配置形式が特徴的である。住居跡の廃絶時期は、9世紀前半頃と求められる。



第167図 47号住居跡

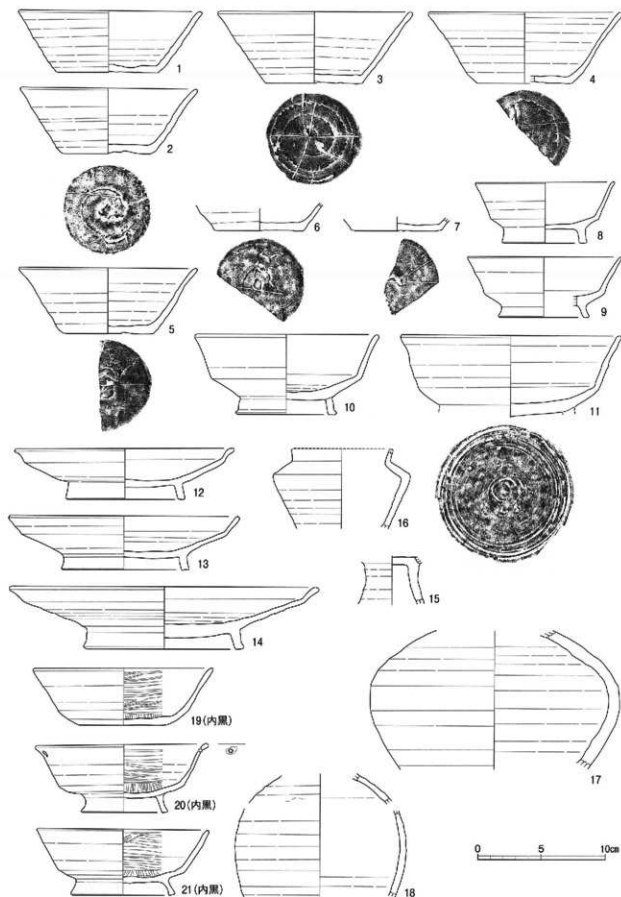


第168図 47号住居跡掘り方

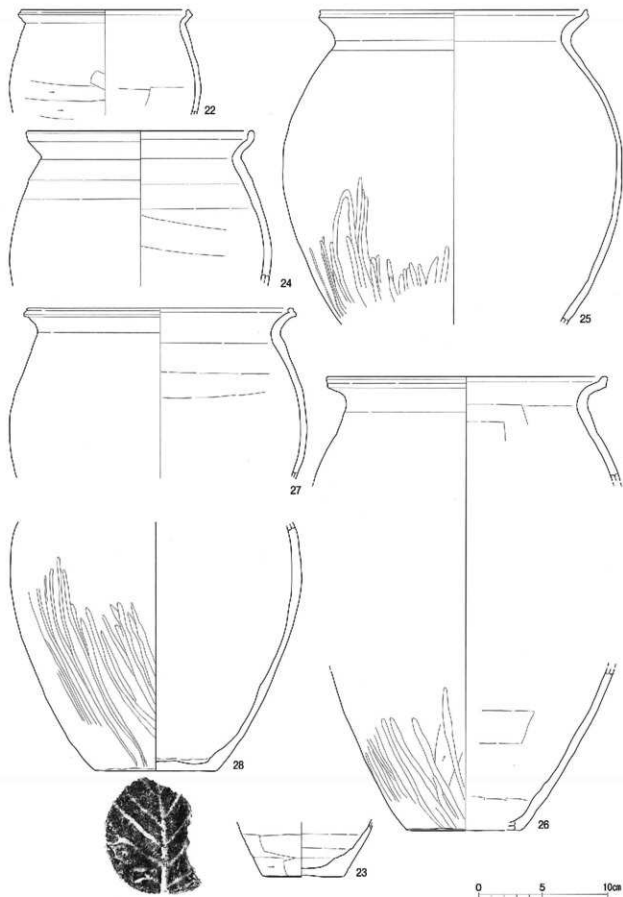
表75 47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 杯	14.2 4.9 7.9	底面回転切り難し無調整。ロクロ右回転。	長石類、黒色鉄、 チャート小粒	普通	灰色	完形
2	須恵器 杯	13.6 5.3 7.0	底面回転切り難し無調整。ロクロ右回転。ヘラ記号「一」。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	70%
3	須恵器 杯	15.2 5.7 7.6	底面回転切り難し無調整。ロクロ右回転。ヘラ記号「大」。	長石、チャート類	不良	靑灰色	60%
4	須恵器 杯	15.2 5.6 7.4	底面回転切り難し無調整。ロクロ右回転。ヘラ記号。	長石、石英、海綿 骨針	不良	灰白色	
5	須恵器 杯	14.0 5.3 7.0	底面回転切り難し後オヤエ。ロクロ右回転。ヘラ記号「一」。	長石類、黒色鉄分 粒、海綿骨針	普通	灰色	
6	須恵器 杯	- - 7.2	底面ヘラ切り難し後オヤエ。ヘラ記号。	長石類、黒色鉄分 粒	普通	灰色	

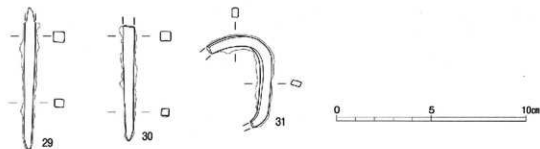




第169図 47号住居跡出土遺物①



第170図 47号住居跡出土遺物②



第171図 47号住居跡出土遺物③

図録 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	出土	焼成	色調	備考
7	須恵胎 環	- - 7.0	底部へくまり縁し後一方向へラケズリ。へく記号。	長石、黒色鉄分粒	普通	灰色	
8	須恵胎 高台付環	10.9 4.9 6.7	底部回転へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	良好	褐色色	80%
9	須恵胎 高台付環	12.1 4.8 7.2	底部回転へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、黒色鉄分粒	良好	褐色色	
10	須恵胎 高台付環	14.4 6.4 8.0	底部回転へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	60%
11	須恵胎 高台付環	17.2 - -	底部回転へラケズリ後高台貼り付け。	長石粒、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	
12	須恵胎 盤	17.3 4.1 9.3	底部回転へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石粒、海綿骨針	普通	褐色色	完形
13	須恵胎 盤	18.2 4.3 10.0	底部回転へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	50%
14	須恵胎 盤	24.4 5.0 12.6	底部回転へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	良好	褐色色	30%
15	須恵胎 高台	- - -	高台脚部断片。	長石、石英、海綿 骨針	良好	灰色	
16	須恵胎 小型碗	(7.8) - -	肩の張った、小型の短胴器。	長石、黒色鉄分粒	良好	灰褐色	
17	須恵胎 長頸瓶	- - -	肩一割断片。	長石、海綿骨針	普通	灰色	
18	灰釉陶器 長頸瓶	- - -	体部はやや小瓶で肩が張らない形状。	精良	良好	灰オリーブ色	
19	土師胎 環	14.1 4.5 6.8	外面体部下縁～底部回転へラケズリ、内面黒色染塵・ミガキ。ロクロ右回転。	石英、チャート、 海綿骨針	良好	にぶい褐色	60%
20	土師胎 高台付環	13.6 3.5 6.8	体部下縁～底部回転へラケズリ後高台貼り付け。内面黒色染塵・ミガキ。ロクロ右回転。口唇部に焼成後穿孔径2mm強、3か所。	石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	60%
21	土師胎 高台付環	13.6 5.2 8.2	体部下縁～底部回転へラケズリ後高台貼り付け。内面黒色染塵・ミガキ。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	良好	にぶい褐色	60%
22	土師胎 甕	13.0 - -	腹上半部断片。下半部縦方向のラケズリ。内面へラケズ。	石英	普通	にぶい褐色	
23	土師胎 甕	- - 6.4	腹部下端縦方向へラケズリ、底部オサエ。	石英、長石	良好	にぶい褐色	

図版番号	種別 器種	口徑 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
24	土師器 壺	140 — —	口縁部内外面ヨコナデ。朝顔外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、金雲母	良好	にぶい褐色	
25	土師器 甕	211 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外側ナデ、下半部ミガキ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	カマド
26	土師器 甕	(220) (89)	口縁部内外内ヨコナデ。胴下半部ミガキ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
27	土師器 壺	214 — —	口縁部内外面ヨコナデ。朝七半部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
28	土師器 甕	— — 96	胴下半部ミガキ。底部小突起。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
29	鉄製品 釘?	長 [7.5] cm、幅 0.5cm、厚 0.53cm、重 7.73g。					30と同一個体か
30	鉄製品 釘?	長 [60] cm、幅 0.53cm、厚 0.5cm、重 5.4g。					29と同一個体か
31	鉄製品 不明	長 [50] cm、幅 0.5cm、厚 0.3cm、重 8.49g。					

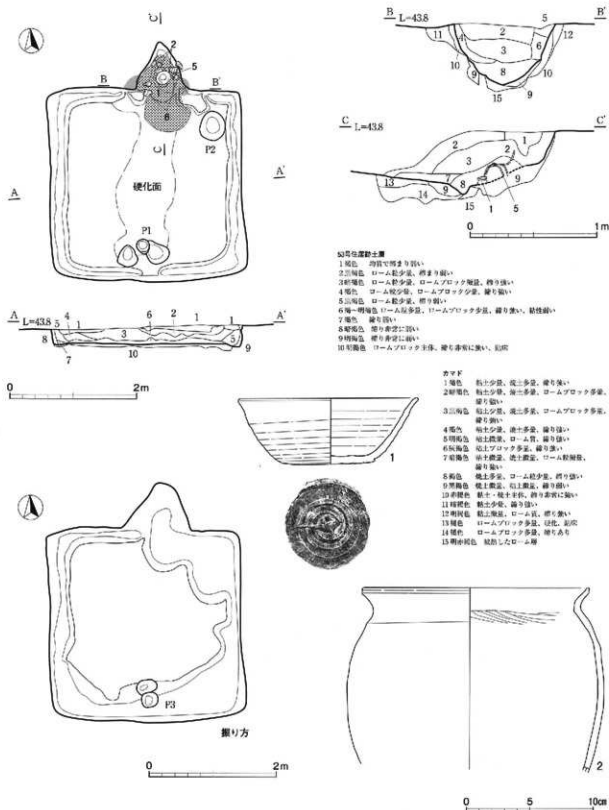
## 53号住居跡 (第172・173図)

位置 A区北部、L5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は3.12m、東西方向は3.11mを測り、平面形は不整隅丸正方形である。主軸方位 N-3°-E 壁 壁高は22~31cmを測り、わずかに傾斜する。床 ほぼ平坦で、カマドからP1にかけて帯状に硬化し、周溝は全周する。P1の両脇は浅く窪む。掘り方は全体に浅いが、周溝に合わせて溝際が溝状に掘り込まれる。ピット P1は出入口ピットであろう。P3は掘り方で確認し、これも出入口ピットの可能性がある。P2はいわゆる貯蔵穴であろう。カマド 北壁中央やや東寄りに構築される。右軸はわずかに張り出すが、左軸は残っていない。両軸ともに基部の高まりを確認した。焚口部はやや広い。カマド中央には、完形の須恵器坯(1)の上に土師器甕底部(5)を入れ子状に逆位に積み重ねた支脚が設置されていた。これらの上部からは、2と6の土師器甕が破砕して出土した。覆土 上層は自然堆積状を呈するが、4~6層はローム粒・ブロックを塊状にやや多く

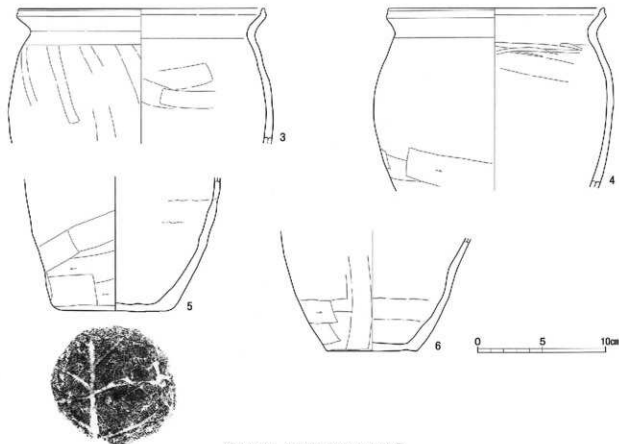
表76 53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 鉢	128 5.3 7.1	完形須恵ヘラ切り磨し黒銅器。底部ヘラ削り「J」、底部と底部の接合面が研がわり、段差を呈している。	長石、石英、海綿骨針	やや不良	明灰色	90% カマド
2	土師器 甕	17.7 — —	口縁~唇部片。口縁部は全体に広く短い、底部は上方に狭み上げる。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	海綿骨針	良好	にぶい褐色	朝外面に金雲母 塗りの粘土付 着、カマド
3	土師器 甕	(19.2) — —	口縁~唇部片。口縁部は全体に広く短い、底部は狭み上げる。体部外面ナデ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	にぶい褐色	
4	土師器 甕	(16.7) — —	口縁~唇部片。口縁部は全体に広く短い、底部は狭み上げる。体部外面ナデ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
5	土師器 甕	— 8.6	底部~胴下半部。胴下半部外面傾方向ヘラケズリ。底部小突起。	白色短多量、石英微粒。	普通	にぶい褐色	カマド
6	土師器 甕	— 7.6	底部~胴下半部。底部小突起後、ナデ。胴下半部傾方向のヘラケズリ微粒方向のヘラケズリ。	長石・石英微粒、普通チャート層	普通	にぶい褐色	カマド

含み、人為的埋没の可能性がある。また、8層は土壌化した壁体と推測する。遺物 カマド覆土中や支脚の直上から、土師器甕の個体が破砕した状態で出土した。本来は懸け甕であったと推測する。須臾器の坏や土師器の甕は9世紀中～後葉頃の遺物である。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。



第172図 53号住居跡・出土遺物①



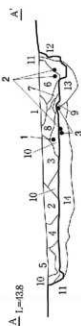
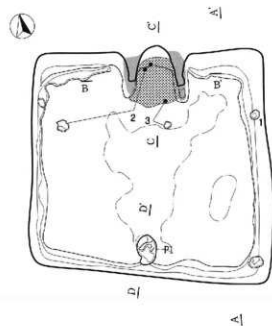
第173図 53号住居跡出土遺物②

55号住居跡（第174図）

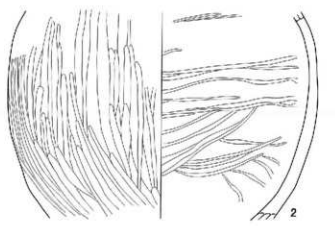
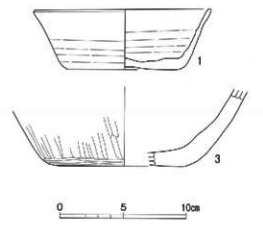
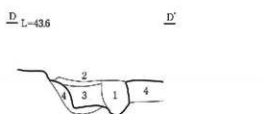
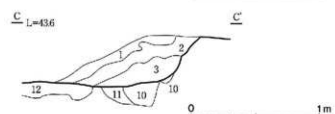
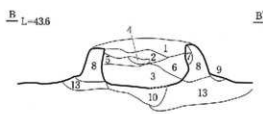
**位置** A区北部、K5～L5グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は西側3.37m・東側3.74m、東西方向は北側3.61m・南側3.84mを測り、平面形は横向きの不整形を呈する。主軸方位 N-14°-W 壁 壁高は18～33cmを測り、傾斜する。床 やや凹凸がある。カマドからP1にかけて帯状に硬化し、わずかに高い。掘り方は紙面の都合で平面図化できなかったが、西・南壁側は周溝に合わせて幅広く溝状（幅55～92cm）に掘り込まれる。カマド前は北東隅の周溝と接続した土坑状の掘り方になる。ピット P1は出入口ピットである。カマド 北壁中央に構築される。両袖は残りが良い。煙道部が非常に短い。覆土中から出土した2の土師器甕の大部分は、堅穴北東部の覆土下層から出土している。本来は懸け甕であった可能性がある。覆土 やや複雑な堆積状況を示す。カマドの粘土を含む土が広く埋没し、2の土師器甕は

表77 55号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	須恵器 平	12.8 5.3 7.4	底部距縁ヘラ部り離し面調整。底部ヘラ部「一」。底部と底部の接合部で線が入り、段差を生じている。	灰石織、歯輪骨針	やや不良	明灰色	90%
2	土師器 甕	17.7 — —	口縁一打部片。口縁部は全体に低く短い、端部は上方に積み上げる。外部外側ナデ、内面ヘウナデ。	微砂粒	良好	にぶい褐色	器外面に金盃母蓋じりの粘土付着
3	土師器 甕	(19.2) — —	口縁一断部片。口縁部は全体に低く短い、端部は積み上げる。外部外側ナデ。	灰石、石英、チャート、歯輪骨針	普通	にぶい褐色	



- 55号住居跡土層
- 1層色 ローム粒多量、ロームブロック少量、盛り高い、粘性強い
  - 2層色 ローム粒多量、ロームブロック少量、盛り高い
  - 3層色 ローム粒多量、ロームブロック少量、盛り高い
  - 4層色 ローム粒多量、ロームブロック少量、粘性強い
  - 5層色 ローム粒少量、ロームブロック少量、盛り高い、粘性強い
  - 6層色 ローム粒少量、ロームブロック少量、盛り高い、粘性強い
  - 7層色 ローム粒少量、粘土凝結、盛り高さ不明
  - 8層色 ローム粒少量、粘土凝結、盛り高い
  - 9層色 粘土少量、盛り高い
  - 10層色 ローム粒少量、粘土凝結、盛り高い
  - 11層色 盛り高さ不明、粘性強い
  - 12層色 ローム粒多量、ロームブロック少量、盛り高さ不明
  - 13層色 ロームブロック多量、ローム粒多量、盛り高い、粘性強い
  - 14層色 ロームブロック多量、盛り高さ不明、粘性強い
- 5層色 粘土少量、粘土凝結、盛り高い
- 2層色 粘土多量、粘土凝結、盛り高い
  - 3層色 粘土少量、粘土凝結、盛り高い
  - 4層色 粘土凝結、粘土凝結、盛り高い
  - 5層色 粘土少量、粘土多量、盛り高い
  - 6層色 粘土少量、粘土少量、盛り高い
  - 7層色 粘土、粘土凝結、盛り高い、有
  - 8層色 粘土凝結、盛り高さ不明、粘性強い
  - 9層色 粘土凝結、盛り高さ不明、粘性強い
  - 10層色 粘土凝結、盛り高さ不明、粘性強い
  - 11層色 粘土凝結、ロームブロック少量
  - 12層色 ロームブロック少量、ローム粒多量、盛り高い、粘性強い
  - 13層色 ロームブロック多量、盛り高さ不明、粘性強い
- F 1
- 1層色 ローム粒少量、盛り高い
  - 2層色 ローム粒少量、盛り高い、粘性強い
  - 3層色 ロームブロック少量、盛り高さ不明、粘性強い
  - 4層色 ロームブロック少量、盛り高さ不明、粘性強い

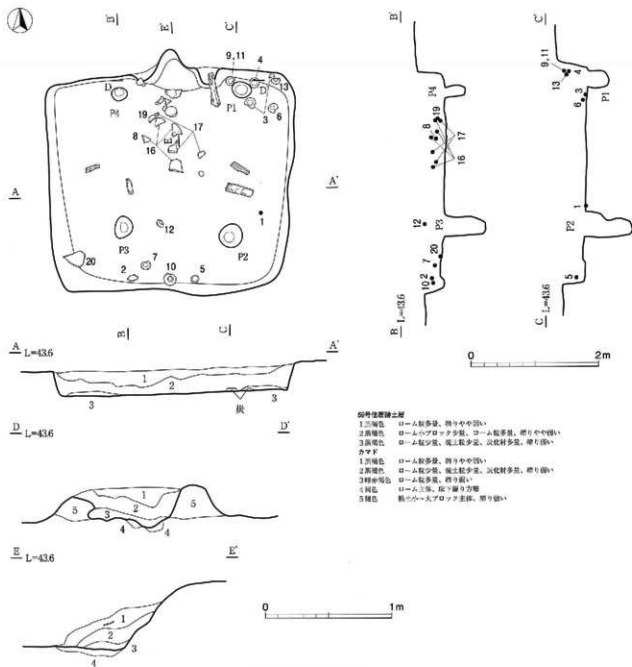


第174図 55号住居跡・出土遺物

8・10層堆積時に廃棄された可能性がある。遺物 1の須恵器杯は西壁際10・11層から出土した。カマド前面の下層からは3の土師器甕底部が出土した。これらの所産時期は8世紀中葉頃のものである。北西隅と南東隅の周溝上からは自然円礫が出土した。所見 住居跡の廃絶時期は8世紀中葉頃と考えられる。

59号住居跡 (第175~177図)

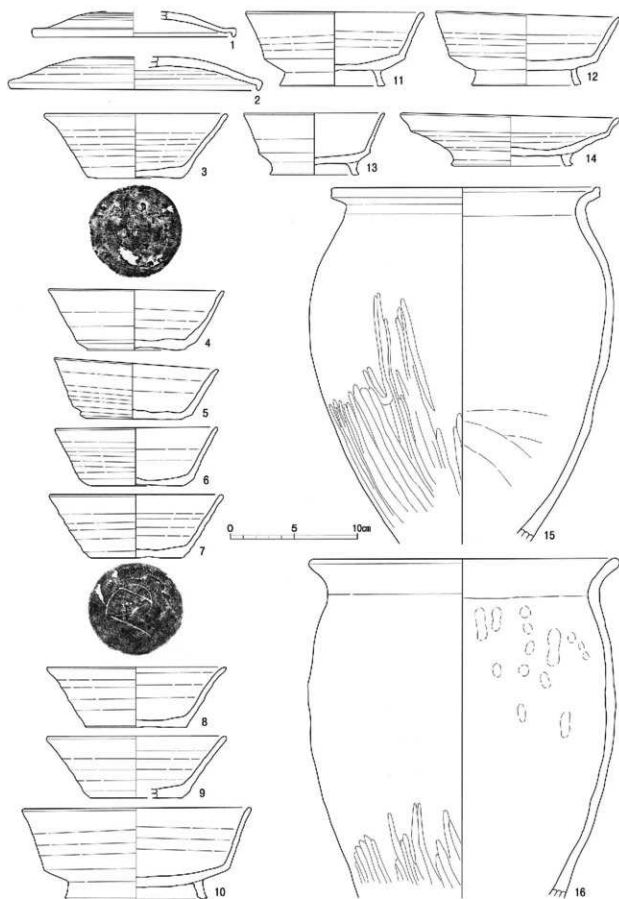
位置 A区中央部、L6グリッドにある。規模と平面形 3.70×3.40mのやや横に長い形で、61号住居跡と重複し、それよりも新しい。主軸方向 N-5°-W 壁 壁高33cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居全体が硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P1とP4は北壁の直下に位置している。カマド 北カマドで全体の幅は130cmで、燃烧室幅は60cm、奥行きは54cmある。袖部は粘土



- 59号住居跡の遺物
- 1 三輪色 ①—ム鉄多量、珪りや中強②
  - 2 黒褐色 ①—ム少、ロツク少、②—ム鉄多量、珪りや中強③
  - 3 黒褐色 ①—ム鉄少量、珪りや中強、②—ム鉄多量、珪りや中強
  - カマド
  - 1 三輪色 ①—ム鉄多量、珪りや中強②
  - 2 黒褐色 ①—ム鉄少量、珪りや中強、②—ム鉄多量、珪りや中強
  - 3 黒褐色 ①—ム鉄多量、珪りや中強②
  - 4 黒色 ①—ム鉄多量、珪りや中強
  - 5 黒色 ①—ム鉄多量、珪りや中強②

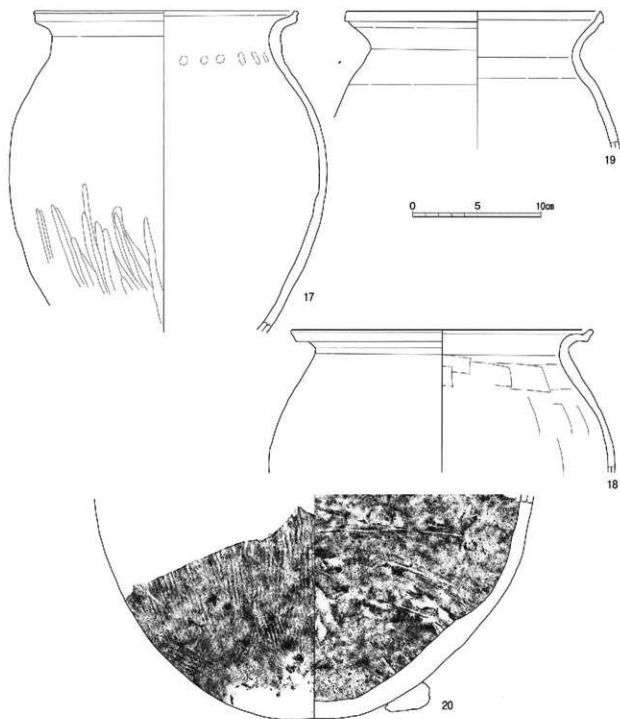
第175図 59号住居跡





第176図 59号住居跡出土遺物①

を使用して構築している。覆土 ローム粒を多量に含んだ黒褐色土を主体にしている。遺物 覆土中～下層にかけて須恵器の蓋、坏、高台付坏、盤、甕、土師器の甕が出土している。所見 出土遺物から見て8世紀後葉頃～9世紀前葉頃の住居跡と考えられる。住居跡の柱穴の配置は、8世紀後葉頃の住居跡に見られる壁際に寄った位置にあり、住居の構築は8世紀後葉と考えられる。



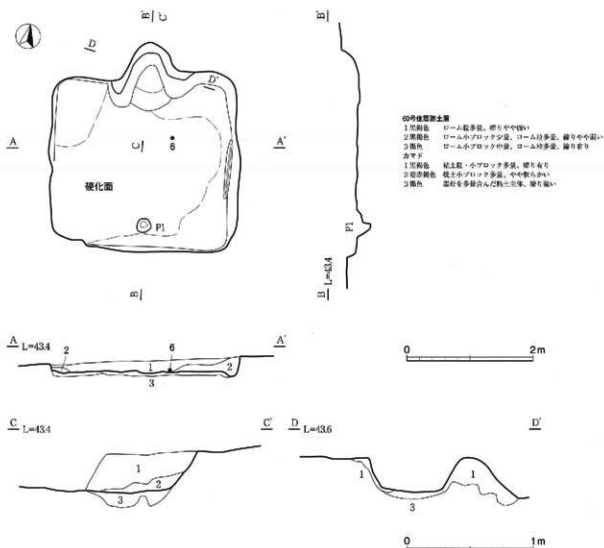
第177図 59号住居跡出土遺物②

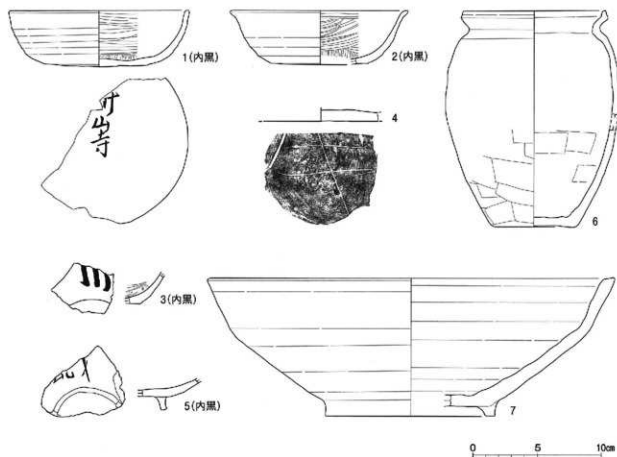
表 78 59号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 別 器 種	口徑 高さ 底徑	特 徴	胎土	施 成	色 調	備 考
1	須恵器 蓋	160 —	大舟部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	灰行、海緑骨針	普通	灰色	
2	須恵器 蓋	194 —	大舟部回転ヘラケズリ。	灰石、糖灰	良好	灰色	
3	須恵器 鉢	144 52 76	底部回転ヘラ切り後オウエ。ヘラ記号。	灰石、黒色鉄分粒、 海緑骨針	普通	灰色	95%
4	須恵器 鉢	138 49 77	底部回転ヘラ切り、黒陶地。ロクロ右回転。	灰石粒、石英、海 緑骨針、チャート	普通	灰褐色	紫影
5	須恵器 鉢	139 49 77	底部回転ヘラ切り後一方内ヘラケズリ。	石英、バミス、黒 色鉄分粒	普通	灰色	ほぼ完全
6	須恵器 鉢	126 46 76	底部回転ヘラ切り後一方内ヘラケズリ。	石英、バミス、黒 色鉄分粒	不良	灰褐色	90%
7	須恵器 鉢	138 51 73	底部ヘラ切り黒陶地。ヘラ記号。	灰石、チャート、 海緑骨針	普通	灰色	70%
8	須恵器 鉢	142 48 80	底部回転ヘラ切り黒陶地。ロクロ右回転。	灰石、赤褐色骨針、 黒色鉄分粒	普通	灰色	50%
9	須恵器 鉢	142 48 74	底部回転ヘラ切り黒陶地。ロクロ右回転。	灰石、石英、海緑 骨針、黒色鉄分粒、 チャート	普通	暗灰色	
10	須恵器 高台付鉢	180 73 111	底部回転ヘラケズリ後高台取り付け。ロクロ右回転。高 台輪郭平坦。	灰石粒、石英、海 緑骨針	普通	灰色	70%
11	須恵器 高台付鉢	141 59 83	底部回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	灰石粒、チャート	普通	灰褐色	70%
12	須恵器 高台付鉢	145 59 86	底部回転ヘラ切り後高台取り付け。ロクロ右回転。	灰石粒、黒色鉄分 粒	普通	灰色	60%
13	須恵器 高台付鉢	111 49 70	底部回転ヘラ切り後高台取り付け。ロクロ右回転。	灰石、石英、海緑 骨針、黒色鉄分粒	良好	灰褐色	30%
14	須恵器 蓋	172 43 95	底部回転ヘラケズリ後高台取り付け。ロクロ右回転。	灰石粒	良好	灰色	90%
15	土師器 釜	211 —	口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面ヘラナゲ。	灰石、石英	良好	にぶい褐色	
16	土師器 釜	244 —	口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面竹節状。	石英	良好	にぶい褐色	
17	土師器 釜	207 —	口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面竹節状。	灰石、石英	普通	褐色	
18	土師器 釜	(2)8 —	口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面ヘラナゲ。	灰石、石英、雲母	良好	褐色	
19	須恵器? 蓋	201 —	ロクロミは不明だが、内外面ともロココナゲと思われ る調査。	微砂粒	やや良 好	暗褐色	
20	須恵器 蓋	— —	丸底。外面平行円盤、内面平坦で丸底。	灰石、石英	良好	暗灰色	

60号住居跡 (第178・179図)

位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 2.96×2.77mのほぼ方形で、北壁に15cm程度の奥行き差がある。61・64号住居跡と重複し、それらよりも新しい。主軸方向 N-8°-W 壁 壁高19cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部から南西側にかけて硬化している。住居東壁に壁溝が一部確認された。ピット 1箇所。P1は深さ22cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 北カマドで全体の幅は135cmで、煙道部の壁外への突出は40cm以上ある。覆土 黒褐色土を主体にした自然堆積層である。遺物 6の土師器甕は床面出土の底部とカマド内出土破片があり接合していないが同一個体と判断した。他に内黒土師器杯が4点出土し、その中で1の杯の底部には「□山寺」の墨書文字が書かれている。7の須恵器鉢は、高台の付いた珍しい形態の鉢で、胎土に海綿骨針を含んでいる。所見 出土遺物から見て9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。住居は、平面形から見て本来カマド左側に棚を持つ形の住居跡と考えられる。





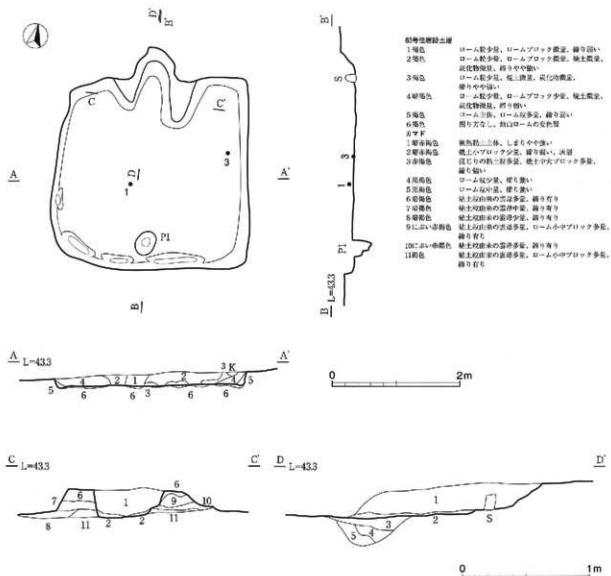
第179図 60号住居跡出土遺物

表79 60号住居跡出土遺物観察表

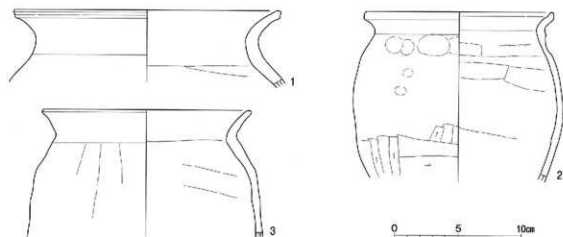
図版番号	種別 器種	口縁 高さ 直径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(142) 4.4 7.5	底部斜縁ヘラ切り無調整。内面黒色処理・ミガキ。ロクロ石用軌。底部外面書画「□山寺」。	長石、石英、海綿骨針	良好	残黄褐色	
2	土師器 坏	(139) 4.3 7.6	体部下端一底縁斜縁ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。ロクロ石用軌。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
3	土師器 坏	— — —	内面黒色処理・ミガキ。外面黄面書画「月」?	長石、石英、海綿骨針	良好	暗褐色	
4	須恵器 坏	— — —	底部ヘラケズリ。ヘラ記号。	長石、石英、海綿骨針	普通	灰色	
5	土師器 高台付杯	— — —	内面黒色処理・ミガキ。体部黄面書画。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
6	土師器 甕	(110) 19.2 6.4	口縁部内外面ヨコナデ。腹上半部外面ナデ、下半部僅方角ヘラケズリ、内面ヘラケテ。底部段縁ヘラケズリ、中央ナデ・オキヤ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい暗褐色	
7	須恵器 钵	(320) 13.4 (11.0)	底部、口縁部片。体部内外面ロクロナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	灰色	

63号住居跡 (第180・181図)

位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 3.10×2.90 m 軸方向 N-8°-W 壁  
 壁高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ25cm、  
 出入り口ピットと考えられる。カマド 幅140cm、焚口部から煙道部までの長さは110cm、燃焼部幅約38cm、  
 壁外への掘り込みは45cmある。右袖部の残りがよく長さ65cm、焼成部の中央に自然石を立てて支脚とし  
 たものが出土している。覆土 褐色土を主体にした自然堆積層。遺物 1・3の土師器甕は覆土から、  
 2の甕はカマドから出土している。いずれも9世紀代の遺物である。所見 出土遺物から9世紀代の住居  
 跡と考えられる。



第180図 63号住居跡



第181図 63号住居跡出土遺物

表80 63号住居跡出土遺物観察表

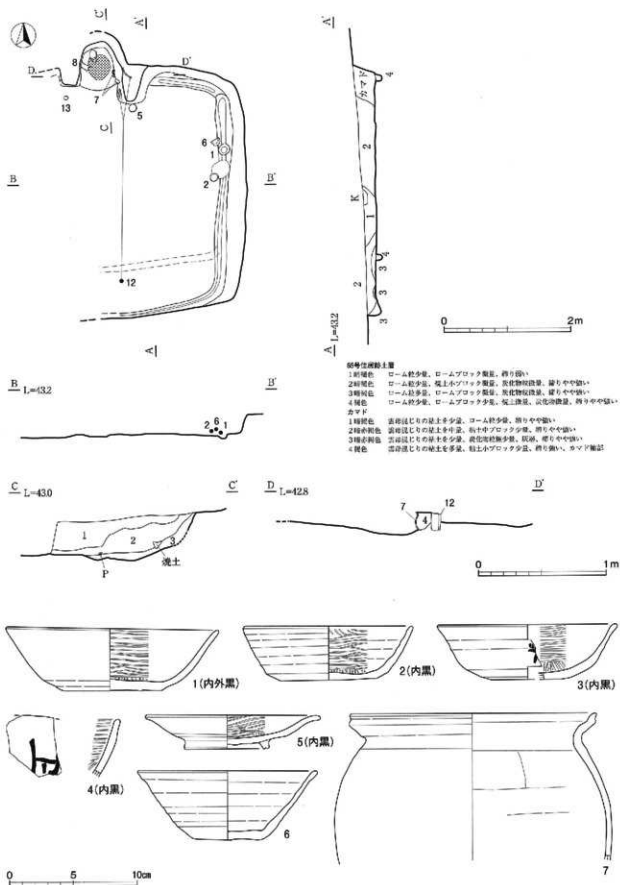
図版番号	種類	口径 器高 底径	特徴	胎土	産地	色澤	備考
1	土師器 壺	(209) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
2	土師器 壺	(147) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、石英、バミス	良好	にぶい褐色	
3	土師器 壺	(160) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	

## 65号住居跡（第182・183図）

位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 3.80 × (2.8) mで、64号住居の床面を壊している。主軸方向 N-5°-E 壁 壁高は約28cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化している。住居床面に古い時期の南壁の壁溝状の痕跡が見られる。ピット - カマド 幅135cm、焚口部から煙道部までは90cm、燃焼部幅約50cm壁外への掘り込みは約40cmある。右袖部には7の土師器甕、12の須恵器甗を構築材として使用している。覆土 暗褐色土を主体にした自然堆積層。遺物 東壁際の覆土下層から6の須恵器坏、1・2の土師器坏が、カマド前面の床面付近から5の土師器の皿、13の軽石製の砥石が出土している。いずれも9世紀後半頃の遺物である。所見 出土遺物から9世紀後半頃の住居跡と考えられる。

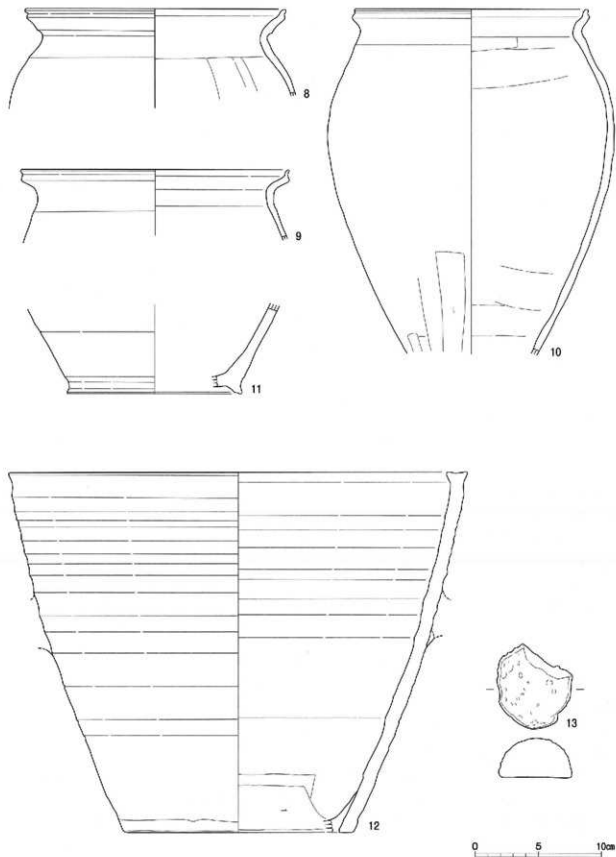
表81 65号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種類	口径 器高 底径	特徴	胎土	産地	色澤	備考
1	土師器 坪	16.2 5.0 7.6	体部内外黒色処理、内面ミガキ。底部回転ヘラ切り無顕著。	長石、石英	普通	黒褐色	完形
2	土師器 坏	13.2 4.3 7.5	体部内面黒色処理・ミガキ。底部回転ヘラケズリ。ロケロ右回転。	長石、石英	良好	にぶい褐色	80%
3	土師器 坏	(140) 4.4 5.5	体部下面回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。体部黒面書文字「L」。	石英、チャート、海緑骨針	良好	にぶい褐色	



第182図 65号住居跡・出土遺物①





第183圖 65号住居跡出土遺物②

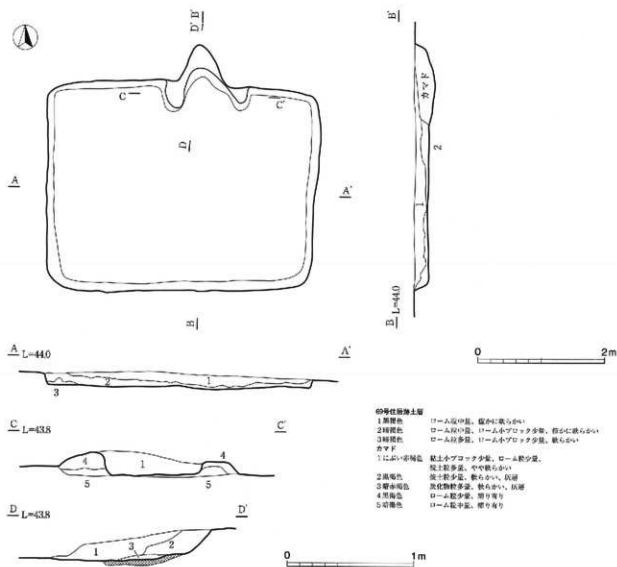
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	土師器 杯	- -	口縁部片。内面黒色処理・ミザキ。底部側面墨丹支那「口」	石英	良好	にぶい褐色	
5	土師器 釜	13.6 2.7 6.7	作部下縁部杯ヘラケズリ、底部縁部ヘラケズリ後高肉貼り付け。内面黒色処理・ミザキ。	長石、石英、チャート	良好	にぶい藍色	光彩
6	須恵器 杯	14.1 5.5 5.5	作部下縁部杯ヘラケズリ、底部内縁ヘラケズリ離し深縁部。	石英、チャート、薄緑苔目	普通	褐色	90%
7	土師器 釜	19.2 -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
8	土師器 釜	20.4 -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英を含む微砂粒	良好	にぶい褐色	
9	土師器 釜	(21.0)	口縁部内外面ヨコナデ。	長石、石英	良好	褐色	
10	土師器 釜	(18.2) -	口縁部内外面ヨコナデ。肩外面上半部ナデ、中部斜め方向ヘラケズリ後ナデ。下半部縦方向ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	褐色	
11	須恵器 須恵器	- (13.8)		長石、チャート	良好	青灰色	
12	須恵器 鉢	(36.4) (28.5) (18.0)	作部内外面ヨコナデ。一対の把手刺摩痕。底部2孔式。	長石、石英、チャート	普通	灰色	
13	石製品 瓦石?		長 [6.8] cm、幅 6.0cm、厚 3.1cm、重 22.25g、新石器。				

69号住居跡 (第184図)

位置 A区中央部、M5グリッドにある。規模と平面形 421 × 3.85 mの横長方形 主軸方向 N-2°-W 壁 壁高は約24cm、やや外傾して立ち上がる。床 全体にやや硬化が弱い。ピット - カマド 幅142cmで、焚口部から煙道部までは102cm、壁外への掘り込みは58cmである。覆土 黒褐色土から暗褐色土の自然堆積で、細かな攪乱が多く入り込んでいる。遺物 - 所見 隣接する住居跡との位置関係や主軸方向から見て、9世紀前半前後頃の住居跡と思われる。

70号住居跡 (第185図)

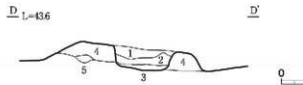
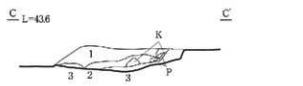
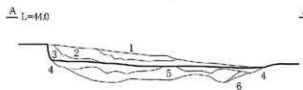
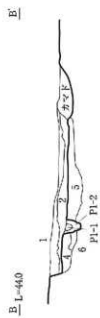
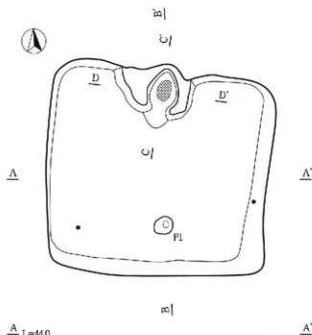
位置 A区中央部、M5グリッドにある。規模と平面形 335 × 3.42 mの方形。主軸方向 N-14°-E 壁 壁高は約20cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや硬化が弱い。ピット 1箇所。P1は深さ24cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅132cmで、焚口部から煙道部までは102cm、壁外への掘り込みは20cmである。覆土 黒褐色土から暗褐色土の自然堆積で、最近の植物の根の細かな攪乱が多く入り込み床下にまで放んでいる。遺物 9世紀前半頃の須恵器杯、刀子が覆土中から出土している。所見 出土遺物から9世紀前半頃の住居跡と考えられる。



第184図 69号住居跡

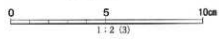
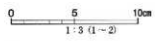
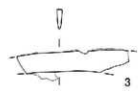
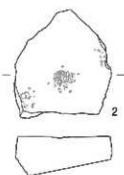
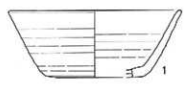
表82 70号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器物種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	須志器 鉢	(134) 5.5 (7.7)	底部へつ切り削し、無潤装。全体にロクロ目弱い。	石灰、チャート	不良	灰白色	
2	石製 台石	長8.3cm、幅5.5cm、厚3.1cm、重237.11g、安山質製。					
3	鉄製品 刀子	長 [5.8] cm、幅1.3cm、厚0.3cm、重5.22g					



70号住居跡土層

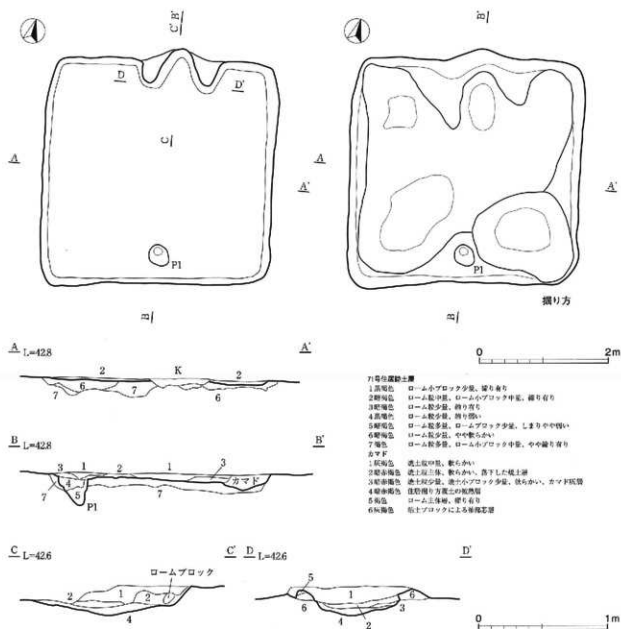
- 1 泥礫色 ローム粒少量、やや粒が小さい
- 2 凝礫色 ローム粒中量、ローム小ブロック中量、やや粒が大きい
- 3 凝礫色 ローム粒少量、盛り有り
- 4 凝礫色 ローム小ブロック少量、ローム粒中量、盛り有り
- 5 凝礫色 ローム小ブロック少量、ローム粒少量、盛り有り
- 6 凝礫色 ローム小ブロック中量、ローム粒中量、やや粒が大きい
- Pl 1 凝礫色 ローム粒少量、やや粒が小さい
- 2 凝礫色 ローム粒少量、ローム小ブロック中量、やや粒が有り
- Pl-1 凝礫色 粘土小ブロック中量、粘土多量、盛り有り
- 2 凝礫色 粘土小ブロック少量、やや粒が有り
- 3 凝礫色 灰化層少量、盛り有り、灰層
- 4 凝礫色 粘土多量、盛り有り
- 5 凝礫色 粘土多量、盛り有り



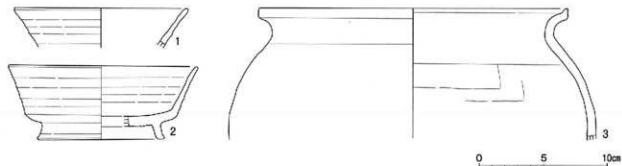
第185図 70号住居跡・出土遺物

## 71号住居跡 (第186・187図)

位置 A区中央部、N7グリッドにある。規模と平面形 3.50×3.44 mの方形。主軸方向 N-12°-W 壁 壁高は約8cm、外傾して立ち上がる。床 全体に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ42cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅170cmで、焚口部から煙道部までは130cm、壁外への掘り込みは18cmである。覆土 黒褐色土から暗褐色土の薄い堆積が見られた。遺物 覆土から須恵器杯、高台付杯、土師器甕が出土している。いずれも9世紀前葉頃の遺物である。所見 出土遺物から9世紀前葉頃の住居跡と考えられる。



第186図 71号住居跡



第187図 71号住居跡出土遺物

表83 71号住居跡出土遺物観察表

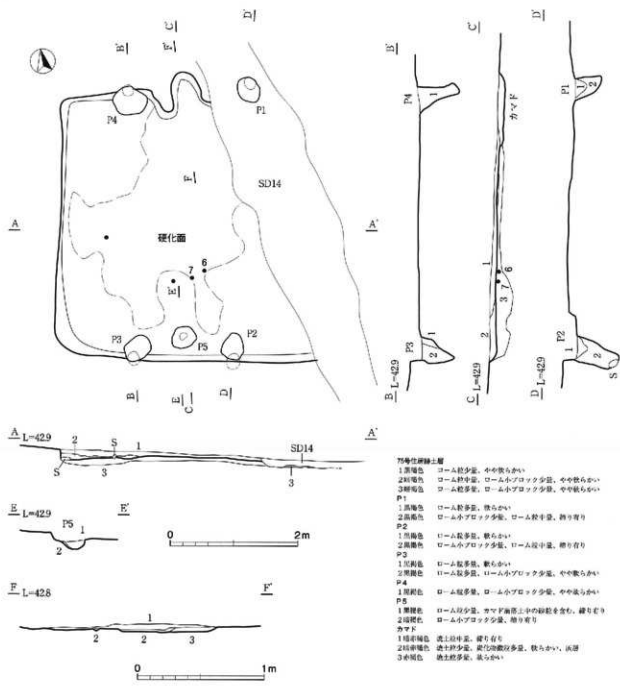
図録番号	種別 器型	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坪	(13.6) — —	口縁部片。	長石	普通	暗灰色	
2	須恵器 高台付坪	(14.8) 5.9 (9.9)	底部凹縁ヘラケズリ長高台跡り付け。	長石、黒色鉄分粒、 海綿骨針	普通	明灰色	
3	土師器 壺	(24.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	褐色	

## 75号住居跡(第188・189図)

位置 A区中央部、M7・N7グリッドにある。規模と平面形 4.56×4.12m。主軸方向 N-9°-E 壁 壁高は約12cm。床 出入り口ピットからカマド前面にかけてと西壁寄り特に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。P2の底部に自然石が入っている。カマド 左袖部の基底部が残存しており、やや住居内に袖部が伸びる。燃焼部の壁外への掘り込みは28cmである。覆土 黒褐色～暗褐色土が薄く堆積している。遺物 須恵器の破片、土師は床下から出土している。所見 壁際に斜立する支柱穴のある住居は8世紀後半から9世紀前葉に見られる。遺物は全体に9世紀前半から中頃のものかと思われる。

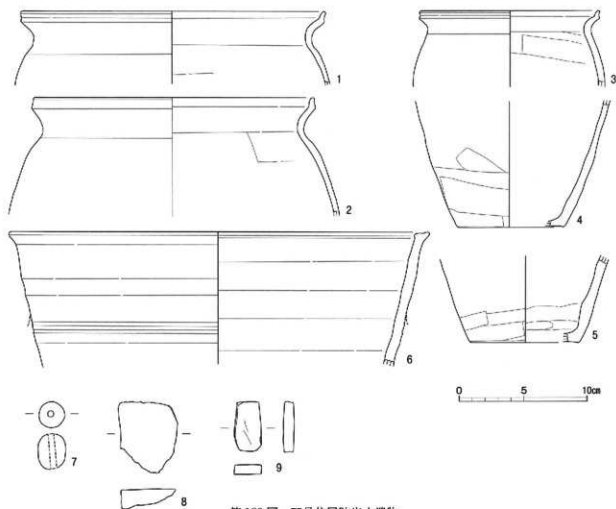
表84 75号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器型	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	(23.8) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
2	土師器 壺	(22.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
3	土師器 壺	(14.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	良好	にぶい褐色	
4	土師器 壺	— — (8.6)	胴下半横方向のヘラケズリ、内面砥粒。	石英	普通	褐色	



第188図 75号住居跡

図版番号	類別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	土製器 夾	- - (8.4)	側下部縦方向のヘタズリ、内面ヘラナテ。底部無頸縁。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
6	須臾形 瓶	(33.3) - -	破断面は灰色還元色だが、器表面はにぶい褐色の酸化面を受けている。二次的な酸化物か。	長石、石英、チャート、南極骨針	不良	にぶい褐色	



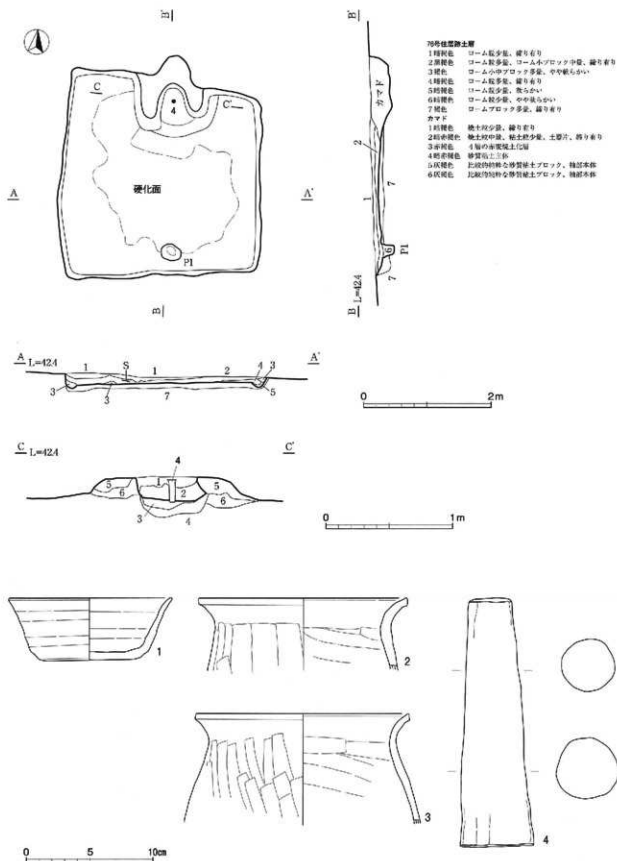
第189図 75号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土製品 土皿	径22cm、長29cm、孔径0.45cm、重10.42g					
8	石製品 砥石	長[5.6]cm、幅[4.6]cm、厚[1.5]cm、重44.37g、凝灰岩製。					
9	石製品 砥石	長40cm、幅20cm、厚0.8cm、重12.36g、凝灰岩製。					

76号住居跡（第190図）

位置 A区中央部、N8グリッドにある。規模と平面形 3.50×3.12m 主軸方向 N-6°-W 壁壁高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居跡中央部からカマド左側にかけて硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ18cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅120cmで、焚口部から煙道部までは130cm、袖部壁外への掘り込みは38cmである。覆土 下層の黒褐色土はロームブロックを比較的多く含む。遺物 カマド燃焼室中央部から円柱状の土製支脚が正立状態で出土している。所見 住居の形態から9世紀頃の堅穴住居跡と考えられる。ロームブロックを含んだ下層覆土は人為堆積の可能性が考えられる。





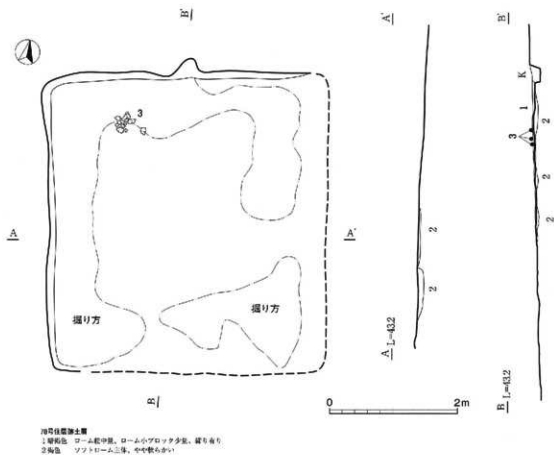
第190図 76号住居跡・出土遺物

表 85 76号住居跡出土遺物観察表

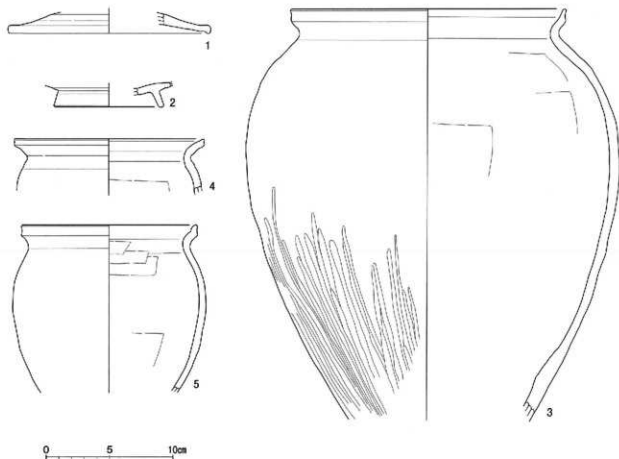
図面番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	磁器 環	(13.2) 50 80	底部回転ヘウ切り後一方向ヘウケズリ。底部黒色付着物。	長石礫、黒色軟分 粒	普通	灰色	60%
2	土師器 壺	(16.4) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	
3	土師器 壺	(16.8) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	
4	土製品 支脚	径32-58cm, 長198cm, 重574g		長石、石英	良好	にぶい褐色	

78号住居跡（第191・192図）

位置 A区中央部、M7・N7グリッドにある。規模と平面形 4.78 × 4.34 mの方形。主軸方向 N - 13° - W 壁 北壁から西壁にかけて僅かに残存している。床 住居跡床面はほとんど残存せず、床下の掘り方の範囲と地山ロームが露出している。ピット - カマド 北壁中央部に、僅かに壁外への掘り込みが見られる。覆土 覆土はほとんどなく、掘り方の覆土も浅く褐色のソフトロームが主体となっている。遺物 カマド左側前面の床上から土師器の壺が出土している。所見 主柱穴をもたないやや大型の住居跡で、出土遺物から8世紀後葉から9世紀前半頃の住居跡と考えられる。



第191図 78号住居跡



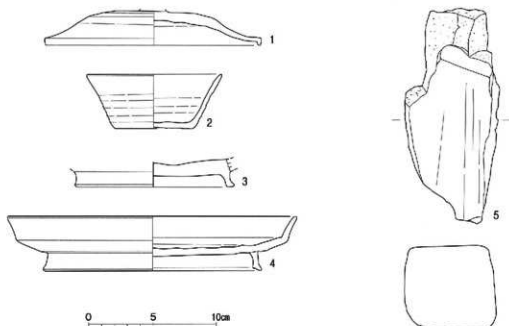
第192図 78号住居跡出土遺物

表86 78号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺	15.8 — —	口縁部片。口縁端部を下方に短く折り返す。内外面とも ロクロ目が弱い。	長石、石英	不良	灰白色	
2	須恵器 高台付杯	— — (8.6)	高台部片。	長石、石英	普通	灰色	
3	土師器 壺	(21.5) — —	口縁部内外面ヨコナデ、瓶上半部ナデ、下半部ミガキ、 内面ヘツナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	25%
4	土師器 壺	(15.0) — —	口縁部片。口縁端部を上方に折み上げる。	長石、石英	良好	黒褐色	
5	土師器 壺	(13.8) — —	口縁部片。口縁端部を上方に折み上げる。	石英、チャート	良好	褐色	外周破損

82号住居跡（第193・194図）

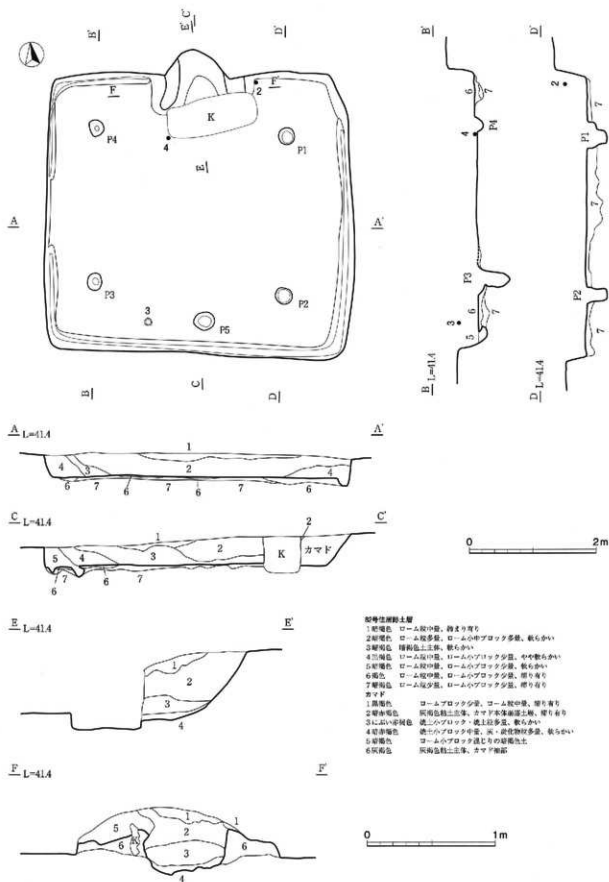
位置 A区の南東部N10グリッドにある。規模と平面形 4.88×4.84mの方形。主軸方向 N-5°-E 壁 壁高は約38cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 明瞭な硬化面が見られず、全体に残りが悪い。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。カマド 幅126cmで、煙道部の壁外への掘り込みは42cmである。覆土 南側からは、黒褐色土や褐色土の流入堆積層が見られ、その上層からは北側の床面を覆う主体層となる人為的な埋戻し堆積が見られる。遺物 須恵器杯、蓋、盤と砥石があり、須恵器杯は9世紀前半頃のもの、須恵器の蓋は8世紀後半頃のものである。所見 住居は四本柱穴を持った8世紀後半頃のものと思われる。出土遺物は8世紀後半～9世紀前半頃のもので廃絶時期を示すものと思われる。



第193図 82号住居跡出土遺物

表87 82号住居跡出土遺物観察表

図種番号	類別 器種	口径 器底 底径	特 徴	胎土	焼成	色類	備考
1	須恵器 蓋	17.0 —	天井部回転ヘラケズリ、口縁端部を下方に折り返す。	灰石	良好	灰色	
2	須恵器 杯	10.6 4.3 6.0	底部～底部外面障灰付着、底部調整不明。器内の焼き台として使用か？	長石礫、黒色粒	良好	灰褐色	50%
3	須恵器 盤	— 12.4	底部回転ヘラケズリ、後高台貼り付け。口右回転。	長石礫、海綿骨針	普通	灰色	
4	須恵器 盤	22.8 4.3 17.2	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	長石礫、石英	不良	灰白色	50%
5	石製品 砥石	長16.9cm、幅7.3cm、厚7.2cm、重1360g、雲母片付着。					



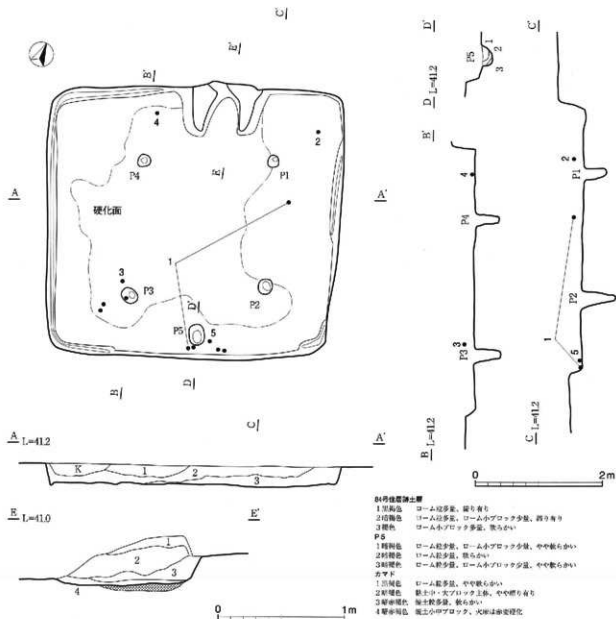
昭和住居跡土層

- 1 昭和色 ローム状の砂、粘り有り
  - 2 昭和色 ローム多量、ローム小片ブロック多量、軟らかい
  - 3 昭和色 礫質土主層、軟らかい
  - 4 昭和色 ローム状の砂、ロームの小ブロック少量、やや軟らかい
  - 5 昭和色 ローム状の砂、ロームの小ブロック少量、軟らかい
  - 6 昭和色 ローム状の砂、ロームの小ブロック少量、粘り有り
  - 7 昭和色 ローム少量、ロームの小ブロック少量、粘り有り
- マヤド
- 1 昭和色 ローム小ブロック少量、ローム状の砂、粘り有り
  - 2 昭和色 礫質土主層、マヤド本層面以上層、粘り有り
  - 3 古い昭和色 礫土の小ブロック、礫土多量、軟らかい
  - 4 昭和色 礫土の小ブロック少量、泥・炭化物多量、軟らかい
  - 5 昭和色 ローム小ブロック量同様の昭和土
  - 6 昭和色 礫質土主層、マヤド層

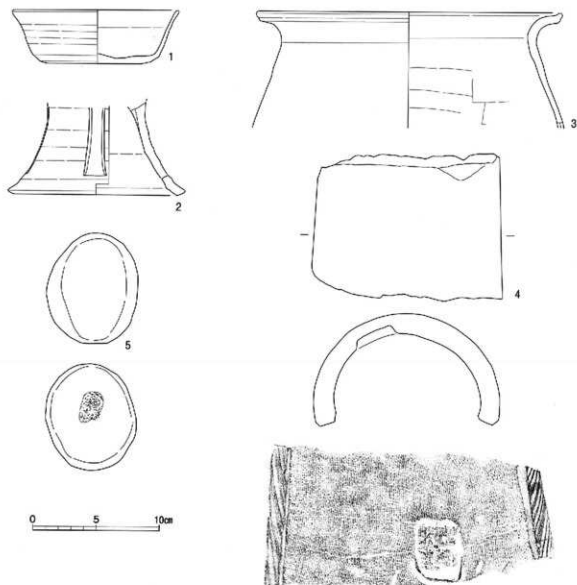
第194図 82号住居跡

84号住居跡 (第195・196図)

位置 A区南東部、O 10 グリッドにある。規模と平面形 4.68 × 4.40 m 主軸方向 N - 25° - W 壁壁高は約 30cm、外傾して立ち上がる。床 カマドの前面から 4 本柱穴の間と西側から P 3 の周囲にかけて特に硬化している。ピット 5箇所。P 1 から P 4 は主柱穴。P 5 は出入り口ピットと考えられる。カマド 全体の幅は 125cm、袖部の長さは 70cm、燃焼室の幅は 40cm、奥行約 50cm、煙道部の壁外への掘り込みがほとんど見られない。覆土 上層は黒褐色土、下層は褐色土主体の覆土。遺物 土器類は覆土下層から破片で出土しており、4 の丸瓦片はカマド左袖近くの床面から出土している。所見 出土遺物は土器類が 8 世紀代のもので、丸瓦は内面に布目痕の付く円柱に巻いて制作したものと思われ、内面に圧痕があるが、円柱原体の角状の突出物によるものと思われる。住居跡はカマド袖部の住居内への突出が長く、4 本主柱穴を持つことから 8 世紀代の竪穴住居跡と考えられる。



第 195 図 84号住居跡



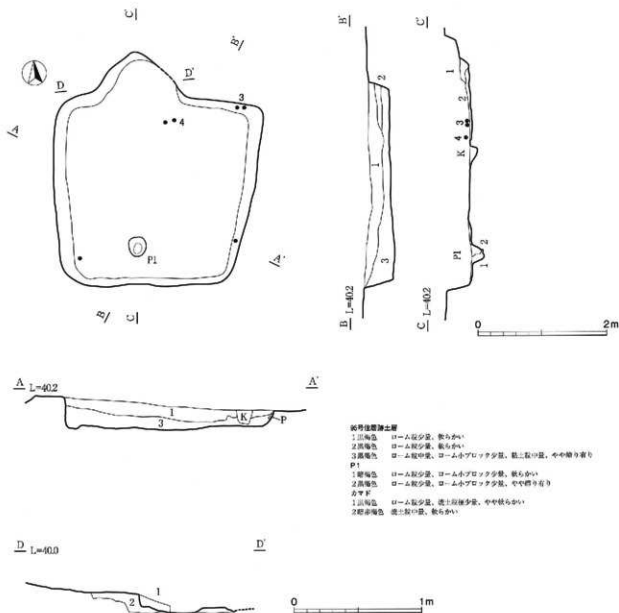
第196図 84号住居跡出土遺物

表88 84号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口縁 径 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰土器 平	13.1 4.3 7.5	灰土器製ヘラケズリ。ロクロ左回転。	灰石、石英、海綿 骨針	良好	灰色	80%
2	灰土器 高盤	- (14.0)	薄形片。四方透かし。	灰石、石英	不良	灰白色	
3	土器器 葉	24.0 - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外出ナデ、内面ヘラナデ。	灰石、石英	良好	暗褐色	
4	土製瓦 瓦	幅14.5cm、高さ8.7cm、厚1.7cm、重675g、外周ナデ、内面有目と押圧痕、胴部細取り2回。					
5	石製品 叩き石?	長8.5cm、幅7.0cm、重697g、褐色質安山岩製。					

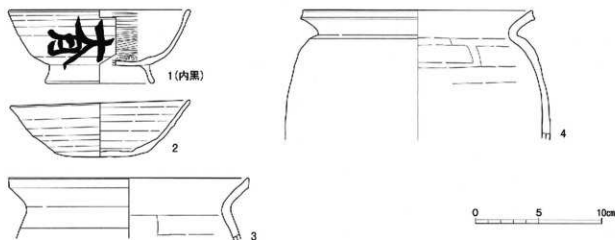
95号住居跡 (第197・198図)

位置 A区の南東部O8・P8グリッドにある。規模と平面形 3.68×3.28mの台形状。主軸方向N-4°-E 壁 壁高は約44cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居跡全体が硬化している。ピット1箇所。P1は深さ20cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 煙道部の壁外への掘り込みの範囲はとらえられたが、火床や袖部などは残存していなかった。覆土 黒褐色土主体で軟らかい。遺物 1・2の坏類は覆土から、3・4の土師器甕は床上から破片で出土している。所見 出土遺物や遺構の形態から、9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。



第197図 95号住居跡





第198図 95号住居跡出土遺物

表89 95号住居跡出土遺物観察表

図番 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	土師器 碗	144 59 86	底部回転ヘラ切り難し洗口ロナデ。外部外面口ロナデ、下部回転ヘラケズリ、内面黒色処理、ミガキ。	長石織、石英粒	良好	にぶい褐色	外部黒面墨書 「大月」
2	須恵器 杯	142 4.5 7.6	底部回転ヘラ切り難し洗オサニ。外部内外面口ロナデ。裏化粧施成。	石英、長石、チャート、微砂粒	普通	にぶい褐色	90%
3	土師器 蓋	190 — —	口縁部片。口縁端部に上方に積み上げられ、外面が直立した平組型となる。胴部外面斜位のヘラナデ。内面横方向のヘラナデ。	石英、長石、チャート、微砂粒	良好	にぶい褐色	
4	土師器 蓋	182 — —	口縁部片。口縁部は胴部に向かって肥厚し胴部は平組型となる。胴部外面ナデ。内面横方向のヘラナデ。	長石、石英、チャート	良好	にぶい褐色	

## 2 掘立柱建物跡

A区では、7棟の掘立柱建物跡を確認した。2・5・8～10号建物跡は欠番である。

### 1号掘立柱建物跡（第199図）

**位置** A区北部、L2グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 古墳時代前期の5号住居跡と重複する。2間×2間の東西棟と推定する。桁行3.91m×梁行2.57mを測り、長方形を呈する。 **主軸方位** N-7°-W **柱穴・覆土** 推定8本構造のうち、5箇所確認した。覆土の状況は、いずれも抜取であろう。P1底面には、柱材端部の硬化土痕（直径15cm）を検出した。 **遺物** 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。 **所見** 5号住居跡覆土中に本建物跡の柱穴を明瞭に確認できなかった。構築および廃絶時期は不明ながら、主軸方位は21・42号住居跡に比較的近い。

## 3号掘立柱建物跡(第199図)

**位置** A区北部、K3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 18号住居跡と26号土坑を破壊し、17号住居跡と重複する。2間×2間の南北棟である。桁行3.69m×梁行3.41mを測り、1.5方形に近い。主軸方位 N-3°-E 柱穴・覆土 6箇所確認した。本来は8本構造と推定する。全て抜取と判断した。遺物 P2抜取部分から2の須恵器甕口縁部が、P3抜取部分から1の須恵器坏が出土した。所見 17号住居跡の覆土を精査したが柱穴は確認できず、本建物跡の方が新しいと判断する。出土遺物から、廃絶時期は9世紀前葉頃と考えられる。

## 4号掘立柱建物跡(第200図)

**位置** A区北部、L3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 東西は北辺2間・南辺3間×南北2間で、中央に東柱状の小ピットを伴い、総柱構造である。桁行北辺3.72m・南辺4.2m×梁行東辺3.38m・西辺3.74mを測り、不整形形状を呈する。主軸方位 N-3°-W 柱穴・覆土 10箇所ある。P2-4・8では柱痕と根固めを検出したが、他は明瞭な抜取であった。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見 主軸方位は21・42号住居跡に近似している(梁方向N-3°-W)。

## 6号掘立柱建物跡(第200図)

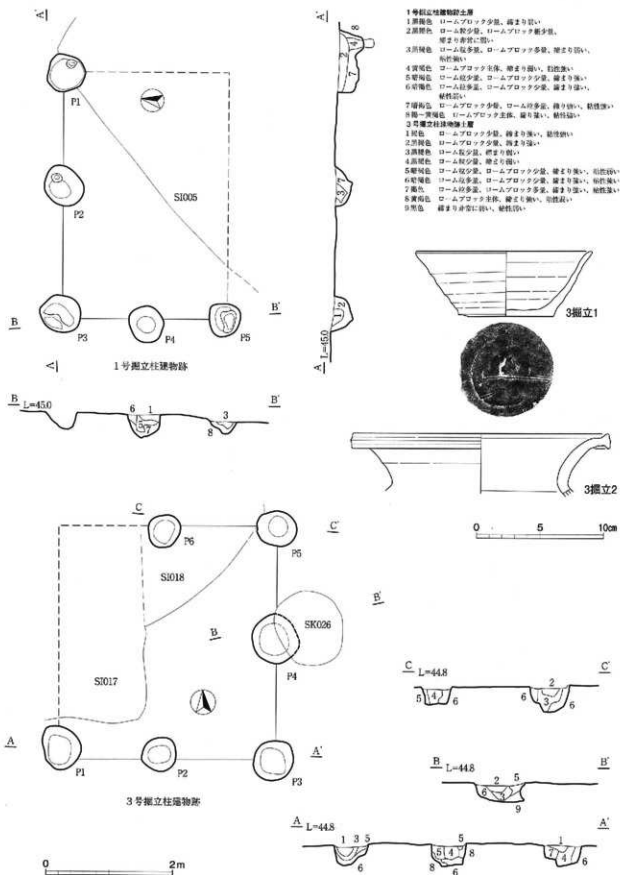
**位置** A区北部、L4グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行東辺3間・西辺2間×梁行2間で、南北棟の側柱構造である。桁行東辺3.78m・西辺3.57m×梁行東北辺3.27m・南辺3.0mを測り、逆台形状を呈する。主軸方位 N-17°-W 柱穴・覆土 9箇所ある。抜取痕は明瞭であった。P8・9は浅く小さい。遺物 土師器・須恵器の小片が出土した。所見 主軸方位が7号掘立柱建物跡に近似することから、9世紀代に帰属する可能性がある。

## 7号掘立柱建物跡(第201・202図)

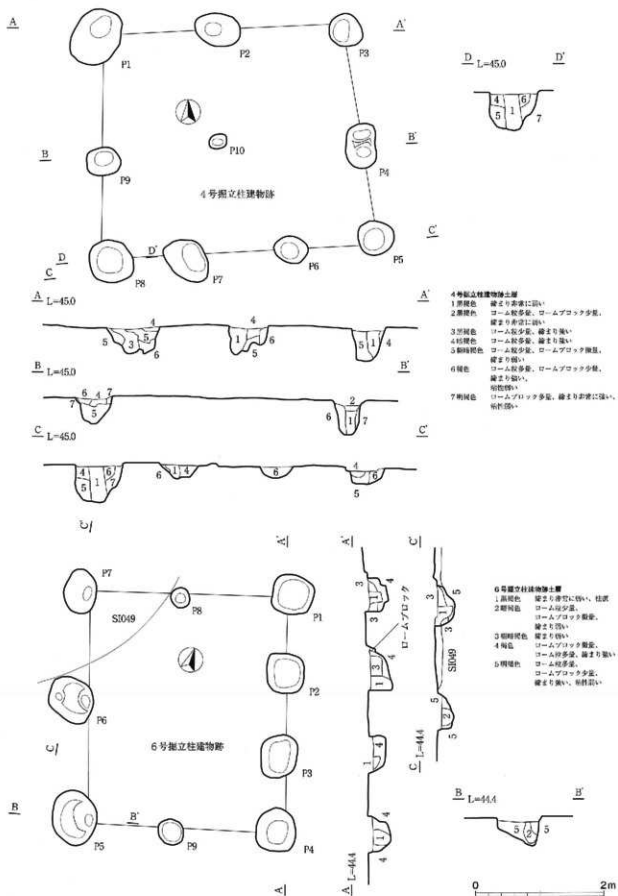
**位置** A区北部、L3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行3間×梁行北辺2間・南辺3間の身舎に、桁行3間×梁行1間の東庇が付く。身舎には東柱状柱穴が1箇所ある。桁行東辺と庇の柱穴群は連結する。桁行5.03m×梁行3.65m、庇梁行0.81mを測り、平行四辺形を呈する。主軸方位 N-18°-W 柱穴・覆土 身舎と庇で15箇所あり、他に小柱穴が5箇所ある。全て抜取で、ロームブロック主体土で完全に閉塞された柱穴もある。遺物 須恵器の蓋・盤・甕や土製土脚等が出土した。所見 主軸方位は6号建物跡に近似する。出土遺物から、廃絶時期は9世紀前葉頃であろう。小柱穴が点在し、建替えや補強の可能性がある。北西隅の柱穴は10世紀の22号住居跡によって消滅している。

表90 3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

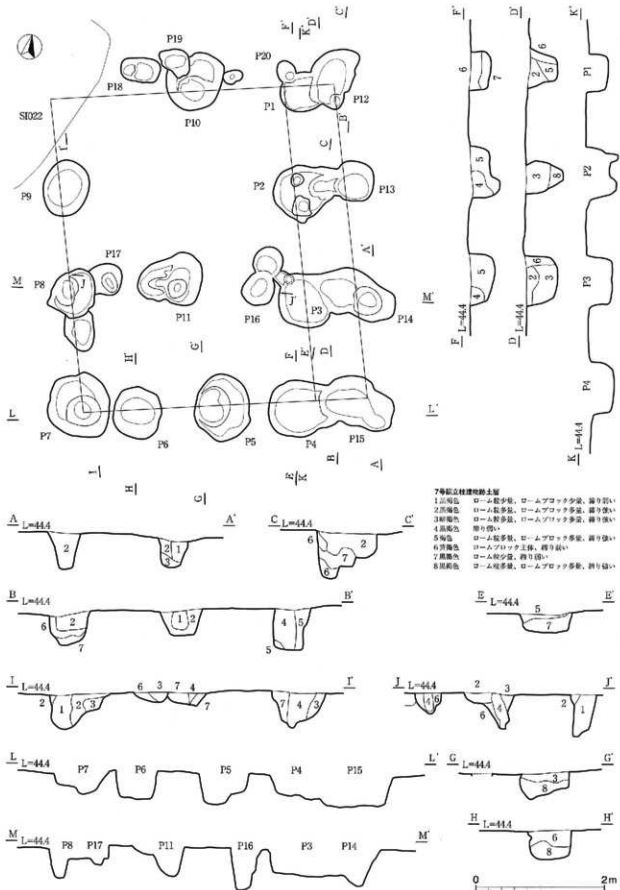
図版番号	種別	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 平	(13.6)	赤部高配ヘラ切り難し、ロケロ右四脚。ヘラ記号「-」。	灰白濁、海綿骨針、 黒色融出粒	普通	灰色	60%
		5.2 7.5					
2	須恵器 甕	(10.3)	口縁部片。	灰白	良好	灰褐色	
		— —					



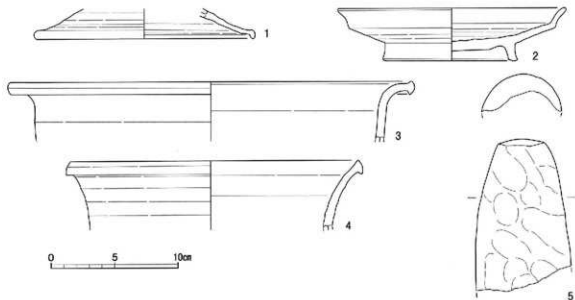
第199図 1・3号掘立柱建物跡・出土遺物



第200図 4・6号独立柱建物跡



第201図 7号掘立柱建物跡



第202図 7号掘立柱建物跡出土遺物

表91 7号掘立柱建物跡出土遺物観察表

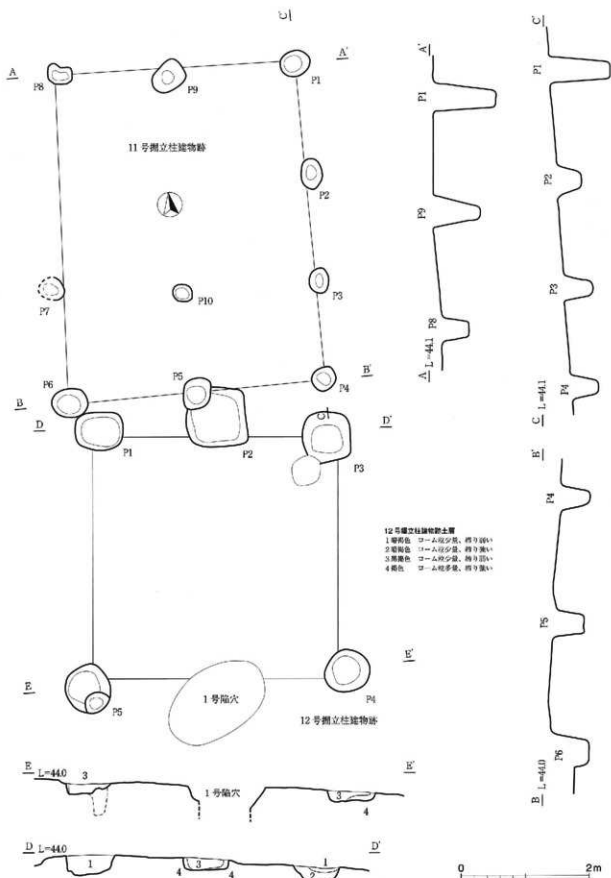
図面 番号	種別 種類	口径 器高 底径	特 徴	胎土	胎色	色澤	備考
1	須恵器 蓋	(17.2) —	口縁部片。口縁端部を下方に折り返す。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	灰色	
2	須恵器 蓋	(17.8) 4.2 10.5	底縁部縁へラズリ状突起付。	長石類、海綿骨針 微量	普通	灰色	40%
3	須恵器 蓋	(32.0) —	口縁部片。鉢（ハケツ）形の裏。	長石	良好	灰色	
4	須恵器 蓋	(23.0) —	口縁部片。	石英、長石	良好	暗灰色	P7出土
5	土製瓦 支脚	長 [120] cm、幅 7.4cm、厚 - cm、重 [131.7] g。		長石、石英、金雲母	普通	褐色	

11号掘立柱建物跡（第203図）

位置 A区北部、M3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行3間×梁行2間で東柱状柱穴が1箇所ある。桁行東辺5.09m・西辺5.23m×梁行北辺3.76m・南辺4.06mを測り、台形状を呈する。主軸方位 N-4°-E 柱穴・覆土 10箇所あり、桁行西辺の柱穴は攪乱によって破壊を受ける。P1・4・6・7で直径20cm前後の抜取痕を検出した。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見 主軸方位は21・31号住居跡と近似している。

12号掘立柱建物跡（第203図）

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行2間×梁行1間の東西棟であろう。桁行北辺3.54m・南辺4.12m×梁行3.96mを測り、台形状を呈する。主軸方位 N-7°-E 柱穴・覆土 6箇所ある。概して浅く、深さ20cm前後である。南辺中央の柱穴は縄文時代の1号陥穴と重複し、確認できなかった。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見 梁間が4m近くあり、中間に浅い柱穴が存在した可能性がある。本建物跡のP2は、11号掘立柱建物跡のP5によって切られている。

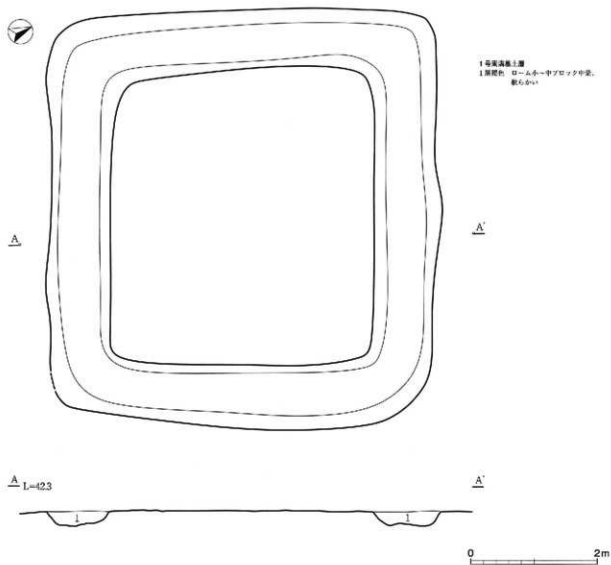


第203図 11・12号掘立柱建物跡

### 3 方形周溝状遺構

#### 1号方形周溝状遺構 (第204図)

調査区南部のN8～N9グリッドには、方形周溝墓に形似た、方形に廻る溝遺構がある。全体の規模は、南北方向6.10m×東西方向6.60m、溝幅は0.90～1.05mで、深さ約25cmを測る。出土遺物がなく時期は不明であるが、溝覆土は黒褐色土で軟らかく、奈良・平安期の遺構覆土と共通しているように思われる。



第204図 1号方形周溝状遺構



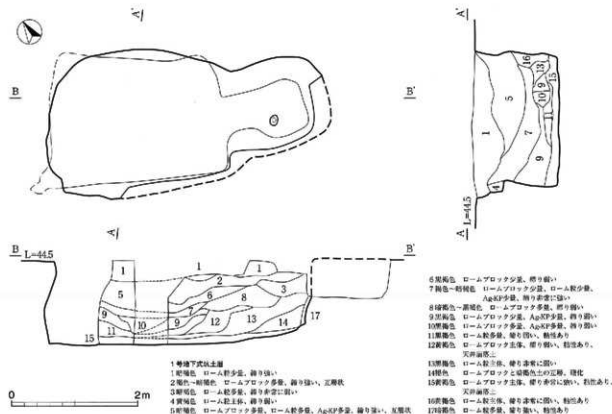
## 第5節 中世以降

## 1 地下式坑 (第205~209図)

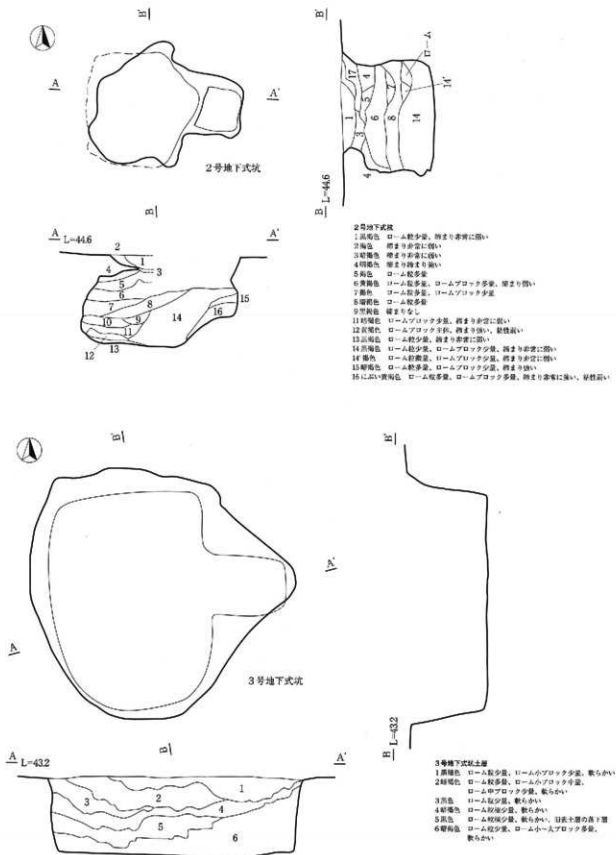
地下式坑は、調査区北部で1・2号地下式坑の2基 (ともに26号住居跡と重複)、中央部で3~6号地下式坑の4基、中央部東端で浅く小規模だが地下式坑と似た平面形の大形土坑があり、7号地下式坑としている。1~6号の地下式坑は竪坑入口部を東に向け、7号地下式坑は、西向きに開口している。竪坑から主室を見たときの主室の平面形は、1と6号が縦長で、3~5、7が横長平面形である。2号地下式坑は、主室の規模が他とくらべて特に小型で、天井が一部残り、主室と竪坑の間に段差が伴う。縦長平面の主室を持つ6号地下式坑は、竪坑の底面から主室の底面まで、緩やかな傾斜を持っている。その他の地下式坑は竪坑底面と主室底面は傾斜や段差をもたず平坦な状態である。6号地下式坑の出土遺物は古瀬戸の平埴など、15世紀代のもの、5号地下式坑出土の播鉢も低高台を持ち同じ頃のものかと思われる。規模等は一覧表に示している。

表92 地下式坑一覧表

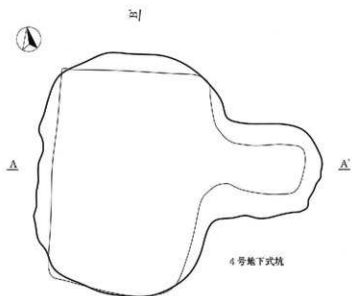
遺構名	位置	主室平面形態	規模 (長径×短径×深さ, cm)			備考
1号地下式坑	M2	縦長長方形	410	210	132	
2号地下式坑	M3	横長長方形	233	176	138	
3号地下式坑	M7	横長長方形	400	385	130	
4号地下式坑	M6	縦長長方形	410	380	140	常滑広口壺
5号地下式坑	M5	横長長方形	403	353	80	常滑播鉢、内耳鴨
6号地下式坑	M6	縦長長方形	554	250	130	古瀬戸平埴・深皿、内耳埴
7号地下式坑	D7	横長長方形	340	310	40	



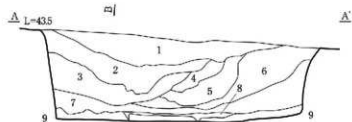
第205図 1号地下式坑



第206図 2号・3号地下式坑

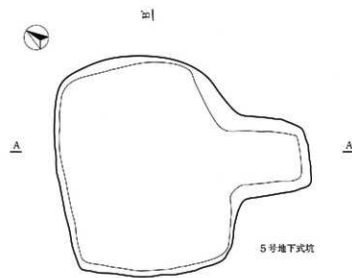


4号地下式坑

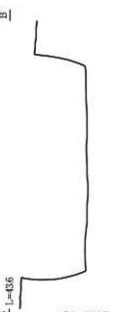
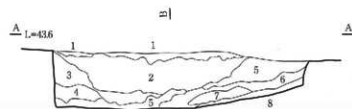


4号地下式坑上層

- 1 黒褐色 コーシ粒少量、中や散らかい
- 2 黒褐色 コーシ粒多量、中や散らかい
- 3 黒褐色 コーシ粒少量、散らかい、肌表才層か
- 4 黒褐色 コーシ粒少量、散らかい
- 5 散乱色 コーシ粒少量、散らかい  
肌表上層の底層
- 6 黒褐色 コーシ粒少量、コーシ小一太ブロック多量、散らかい
- 7 黒褐色 コーシ中等、天井コーシ直落土層、散らかい
- 8 散乱色 コーシ小ブロック少量、散乱若り
- 9 散乱色 コーシ小一太ブロック多量、散乱若り

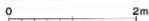


5号地下式坑

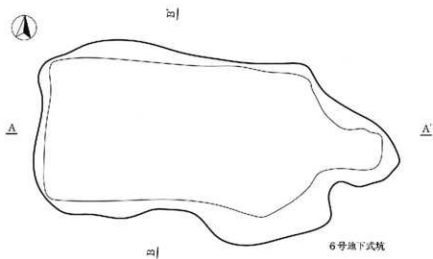


5号地下式坑上層

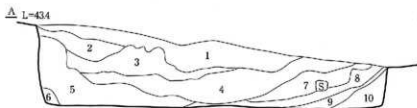
- 1 黒褐色 黒褐色土中ブロック、散らかい
- 2 黒褐色 コーシ粒少量、散らかい
- 3 黒褐色 コーシ小ブロック多量、散らかい
- 4 黒褐色 コーシ小一太ブロック多量、散らかい
- 5 黒褐色 コーシ粒少量、中や散乱若り、散乱若り
- 6 黒褐色 コーシ粒少量、コーシ小ブロック、散らかい
- 7 黒褐色 コーシ粒多量、散らかい
- 8 黒褐色 コーシ粒多量、散らかい



第207図 4号・5号地下式坑

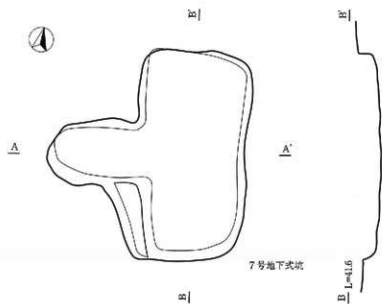


6号地下式坑



6号地下式坑土層

- 1 褐色 ローム状多量、ローム小・中ブロック多量、やや軟らかい
- 2 黒褐色 ローム状少量、やや軟らかい
- 3 暗褐色 ローム状中量、ローム小ブロック中量、やや硬く石多
- 4 黒褐色 ローム状少量、ローム小中ブロック少量、軟らかい
- 5 褐色 ローム大ブロック、軟らかい、天井面凹凸
- 6 褐色 ローム小ブロック中量、軟らかい
- 7 暗褐色 ローム状多量、軟らかい
- 8 褐色 ローム状少量、軟らかい
- 9 褐色 ローム小ブロック多量、瓦多量、縁り有り
- 10 暗褐色 ローム中量、ローム中ブロック少量、やや軟らかい



7号地下式坑

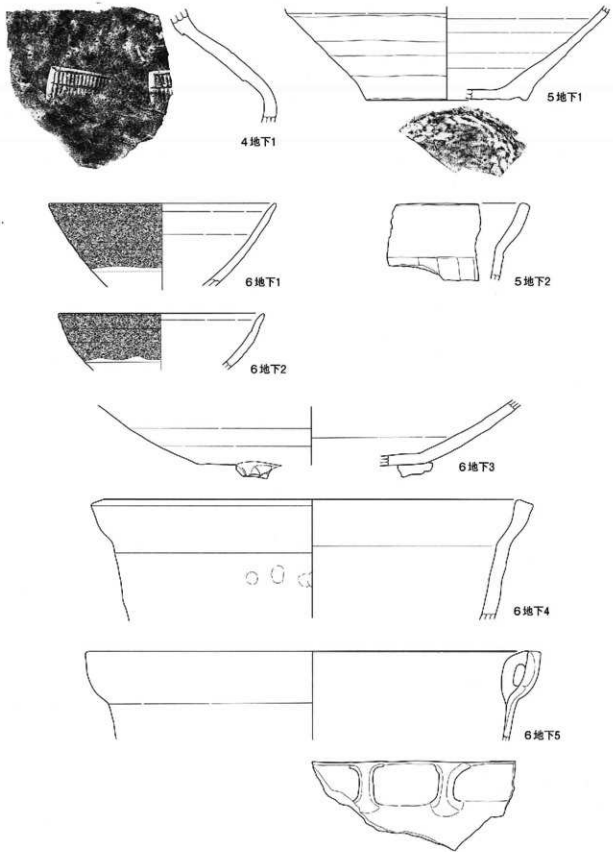


7号地下式坑土層

- 1 黒褐色 ローム状少量、軟らかい
- 2 黒褐色 ローム状少量、ローム小中ブロック少量、軟らかい
- 3 暗褐色 ローム状中量、ローム小ブロック中量、軟らかい



第208図 6号・7号地下式坑



第209圖 地下式坑出土遺物

表 93 地下式坑出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁部 高径係	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4地下 1	常滑 広口甕	-	肩部片。頸部ナデ、肩部ヘラナデ、スタンプ文を印刷する。	灰石	良好	灰黄褐色	
5地下 1	常滑 罎形	- (12.6)	体部外周上部部ロクロナデ、下部部回転方向のヘラナデリ。高内は低い三角高台。	灰石	良好	灰黄褐色	
5地下 2	内耳埴	-	体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面ロクロナデ、体部外面縦方向のヘラナデリ。	石灰を含む微砂状	良好	によい褐色(内)	
6地下 1	古瀬戸 平埴	(18.0)	口縁部片。体部は直線的に開く。	緻密	不良	灰白色	
6地下 2	古瀬戸 平埴	(16.2)	口縁部片。体部はやや内湾して立ち上がる。	緻密	良好	灰白色	
6地下 3	古瀬戸 深皿	(18.0)	体下半～底部片。底部に低い足が付く。	緻密	良好	灰黄色	
6地下 4	内耳埴	(35.0)	口縁部片。体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面ロクロナデ、体部外面縦線状。	石灰、陶片骨針	普通	によい褐色	
6地下 5	内耳埴	(32.0)	体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面ロクロナデ、体部外面縦線状。	微砂状少量	不良	灰黄褐色	

2 井戸(第5・210・211図)

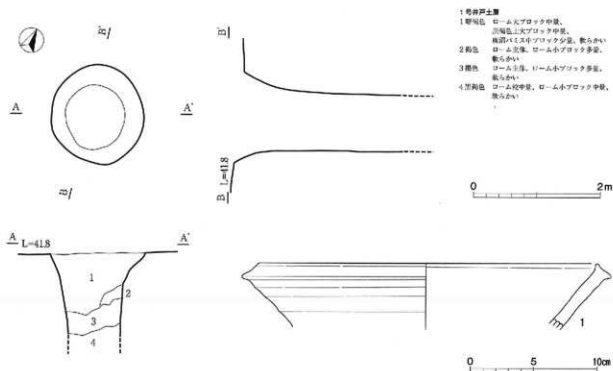
A地区中央部東端に1号・2号井戸の2基、南部に3号井戸1基の合計3基の井戸がある。1号井戸からは常滑播鉢片が、3号井戸中層からは、大きさ5～20cmの花崗岩・安山岩・砂岩等の被熱礫が38個と内耳埴片が出土している。出土遺物から見て中世以降の時期の井戸と見られる。その他規模等は遺構一覧表を参照していただきたい。

表 94 井戸一覧表

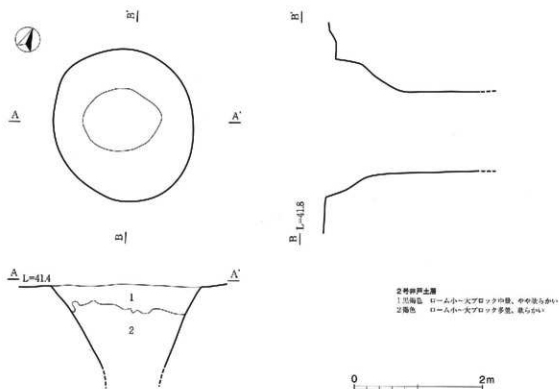
遺構名	位置	平面形状	規模(長さ×短径×深さ、cm)			備 考
			80	74	常滑播鉢	
1号井戸	D7	円形	284	226	240	
2号井戸	D7	円形	96	84	200	
3号井戸	O9	円形				

表 95 井戸出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁部 高径係	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1号井戸 1	常滑 播鉢	(29.0)	口縁部片。体部内外口ロクロナデ。	灰石、石灰	良好	褐色(外)	
3号井戸 1	内耳埴	-	体部と口縁部の境の屈曲が鋭く、体部から内筒気味に口縁部に出る。	灰石、陶片骨針	普通	灰黄色	旧S K 79



第210図 1号井戸・出土遺物

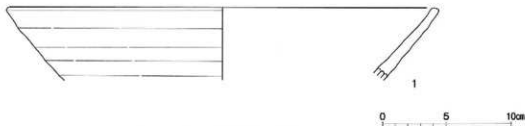


第211図 2号井戸

3 土坑（第5・212図）

A区全体で116基の土坑があり、A区北部では、略円形あるいは楕円形の土坑が計83基確認された。大きく分けると、直径0.9m前後の略円形、直径1.2m前後の略円形、長径1.4～1.6m前後楕円形の3種類がある。深さは12～47cmの間に収まり、30cm前後が主体である。その分布は集中し、土坑同士の重複事例が多い。覆土は暗褐色系で、多量のロームブロックを斑状に混入する場合もみられ、基本的にはほとんどが埋め戻されていると考えられる。出土遺物はほぼ皆無で、わずかに奈良・平安時代の須恵器や土師器の小片が認められたが、いずれも混入であろう。これらの土坑は弥生時代や奈良・平安時代の住居跡を破壊しているが、ただし、26号土坑は3号掘立柱建物跡P4によって切られていた。これら土坑群の構築時期が古代以降であることはほぼ間違いないが、個別遺構の詳細時期は不明とせざるをえない。近現代の円形の里芋穴が多く含まれる可能性も高い。

A地区南部では、地下式坑ほど大型ではないが、一辺2mを超えるやや大型の土坑がある。72号土坑は方形で、古瀬戸深皿片が出土している。出土遺物はないが中世の遺構の可能性のあるものは69号土坑で、底面にピットを2箇所持ち方形堅穴のような形状である。その他の土坑は長辺2m、短辺1m以下の長方形の土坑で、出土遺物がないが覆土は近世以降の時期に見られるような堆積土で芋穴的なものの可能性が考えられる。一覧表として掲載している。



第212図 72号土坑出土遺物

表96 72号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別 種類	口縁器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	古瀬戸 深皿	(34.0) —	口縁部片。内外面淡オリーブ色の灰釉掛け。	精土。灰色泥片	立好	淡黄色	



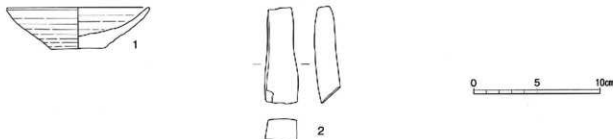
表 97 A区土坑一覽表

遺構名	位置	平面形態	規模 (cm)			備考
			長さ	短径	深さ	
1号土坑	L2	楕円形	145	110	30	23位より新しい
2号土坑	M2	円形	130	124	33	23位より新しい
3号土坑	K4	円形	125	130	31	
4号土坑	K4	円形	130	115	38	
5号土坑	K3	方形	96	79	32	13位より新しい
6号土坑	L4	楕円形	140	120	25	
7号土坑	K4	円形	—	—	—	46位より新しい
8号土坑	K4-L4	楕円形	75	—	25	
9号土坑	K4-L4	楕円形	155	123	30	
10号土坑	K4	楕円形	115	104	19	
11号土坑	L3-L4	楕円形	140	136	24	
12号土坑	L4	円形	135	125	21	
13号土坑	L4	楕円形	174	122	25	
14号土坑	L4	円形	110	109	38	
15号土坑	K4-L4	円形	130	135	32	
16号土坑	K4-L4	円形	130	128	26	
17号土坑	L4	楕円形	150	129	32	
18号土坑	L4	円形	130	—	21	
19号土坑	L4	楕円形	139	—	12	
20号土坑	N2	円形	123	—	16	
21号土坑	L3	楕円形	112	98	44	
22号土坑	N2	円形	82	—	20	
23号土坑	L3	楕円形	149	112	—	
24号土坑	L3	円形	116	—	45	
25号土坑	K3	楕円形	168	114	25	
26号土坑	K3	楕円形	118	105	43	3号溝より古い
27号土坑	K3	楕円形	135	123	34	
28号土坑	K3	楕円形	103	89	—	
29号土坑	L3	円形	121	116	47	
30号土坑	L3	楕円形	100	81	37	
31号土坑	L3	楕円形	88	75	15	
32号土坑	L3	円形	85	82	36	
33号土坑	L3	円形	97	—	18	
34号土坑	L3	円形	106	101	20	
35号土坑	L3	楕円形	100	75	13	
36号土坑	L3	楕円形	156	140	30	
37号土坑	K3	楕円形	70	66	—	
38号土坑	K4	円形	93	—	11	
39号土坑	K4	円形	120	110	22	
40号土坑	L4	楕円形	115	—	23	
41号土坑	L4	楕円形	104	90	25	
42号土坑	L4	楕円形	106	91	16	
43号土坑	L4	円形	120	115	22	
44号土坑	N7	長方形	72	—	37	
45号土坑	N7	長方形	—	95	30	
46号土坑	M5	長方形	163	52	97	
47号土坑	—	—	—	—	—	欠番
48号土坑	L5	長方形	100	—	40	59位より古い
49号土坑	N3	長方形	200	80	36	
50号土坑	—	—	—	—	—	欠番
51号土坑	D7	長方形	154	—	8	
52号土坑	D7	長方形	185	78	66	
53号土坑	D7	長方形	130	68	38	
54号土坑	N7	長方形	143	117	—	
55号土坑	N7	長方形	200	—	35	
56号土坑	N6	長方形	242	95	12	
57号土坑	N6	長方形	246	107	—	
58号土坑	N6	長方形	—	73	17	
59号土坑	N6	長方形	157	72	34	
60号土坑	N6	長方形	216	185	30	
61号土坑	N6	長方形	134	73	34	
62号土坑	N6	長方形	200	108	57	
63号土坑	N6	長方形	255	90	32	
64号土坑	N7	長方形	190	95	33	
65号土坑	N7	長方形	183	80	23	
66号土坑	N7	長方形	186	110	44	
67号土坑	D8	長方形	130	60	15	
68号土坑	D8	長方形	132	95	32	

遺構名	位置	平面形態	規模 (cm)			備考
			長さ	短径	深さ	
69号土坑	D8	長方形	256	190	75	方形竈穴
70号土坑	D8	長方形	410	156	20	
71号土坑	N7	長方形	260	175	18	
72号土坑	N7	長方形	230	300	61	穴竈跡
73号土坑	—	—	—	—	—	欠番
74号土坑	N6	長方形	230	230	30	
75号土坑	—	—	—	—	—	7号地下式坑に接続
76号土坑	—	—	—	—	—	欠番
77号土坑	—	—	—	—	—	欠番
78号土坑	—	—	—	—	—	欠番
79号土坑	—	—	—	—	—	3号井戸に接続
80号土坑	L4	円形	135	105	15	
81号土坑	L4	楕円形	—	110	24	
82号土坑	L4	楕円形	150	125	21	
83号土坑	L4	楕円形	—	94	16	
84号土坑	L4	楕円形	135	120	38	
85号土坑	L4	楕円形	134	112	20	
86号土坑	L4	楕円形	—	50	21	
87号土坑	L4	楕円形	109	85	39	
88号土坑	L4	楕円形	130	—	38	
89号土坑	L4	楕円形	—	94	37	
90号土坑	L4	楕円形	88	—	18	
91号土坑	L4	楕円形	123	110	32	
92号土坑	M4	楕円形	133	130	29	
93号土坑	L4	円形	130	115	25	
94号土坑	L4	円形	120	—	21	
95号土坑	L4	円形	119	105	14	
96号土坑	L3	楕円形	118	110	23	
97号土坑	L3	円形	105	—	20	
98号土坑	L3	楕円形	80	70	14	
99号土坑	L3	楕円形	148	119	30	
100号土坑	L3	楕円形	130	85	27	
101号土坑	L3	円形	120	115	40	
102号土坑	L3	円形	88	85	37	
103号土坑	L3	長楕円形	—	50	55	2号穴に接続
104号土坑	K1	楕円形	172	—	8	
105号土坑	—	—	—	—	—	欠番
106号土坑	K4	楕円形	156	130	18	
107号土坑	K1	円形	100	92	13	
108号土坑	K6	円形	95	90	10	
109号土坑	K1	楕円形	105	93	9	
110号土坑	K4	楕円形	118	100	36	
111号土坑	K4	楕円形	102	83	14	
112号土坑	—	—	—	—	—	欠番
113号土坑	—	—	—	—	—	欠番
114号土坑	K3	円形	122	102	21	
115号土坑	K3	円形	111	107	20	
116号土坑	K3	円形	111	107	20	
117号土坑	—	—	—	—	—	欠番
120号土坑	—	—	—	—	—	欠番
121号土坑	L2	—	—	75	24	
122号土坑	L2	楕円形	132	75	17	
123号土坑	—	—	—	—	—	欠番
124号土坑	L3	楕円形	134	110	36	
127号土坑	L3	長方形	122	80	42	
128号土坑	K4	楕円形	73	42	12	
129号土坑	K4	楕円形	116	105	42	
130号土坑	K1	楕円形	87	75	23	
131号土坑	—	—	—	—	—	欠番
132号土坑	M4	楕円形	89	70	31	
133号土坑	—	—	—	—	—	欠番
134号土坑	N4	楕円形	153	70	21	
135号土坑	—	—	—	—	—	欠番
136号土坑	—	—	—	—	—	欠番
137号土坑	N11	円形	112	110	18	

## 4 溜井状遺構（第5・213図）

南部の東端には、奥行き6m以上のくぼ地遺構がある。下層から中世のかわらけが完形で一点出土しており、中世の遺構の可能性はあるが、近代まで機能していた溝の落とし口にもなっており、かわらけを混入とすれば新しい時期のものの可能性もある。



第213図 溜井状遺構出土遺物

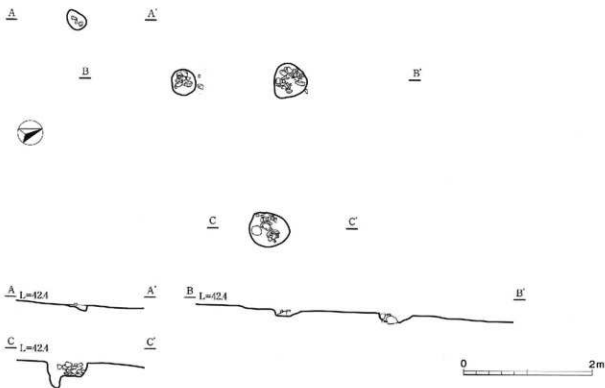
表98 溜井状遺構出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上野黄土器 小皿	11.3 3.3 4.1	底部回転ヘラズリ状高台跡有り。	灰石礫、海陸骨針 微量	普通	灰色	80%
2	石製品 礎石	長7.6cm、幅2.5cm、厚1.8cm、重51.26g、砥石岩製。					

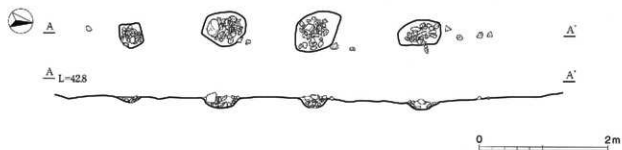
## 5 ビット群・ビット列（第214～216図）

直線的に並ぶビット列が、調査区の中央部で3列確認されている。1号ビット列は、径40～70cmの楕円形の浅いビットが1.4m間隔で並んでおり、2号ビット列と平行して並んでいる。各ビットの中には礫を主体に、常滑の播鉢片、鉄滓、不明鉄片が少量含まれている。自然礫は、大きさが4～20cmで、各ビットP1からP4まで、礫の個数は20、51、55、86個を数え、岩石の種類は安山岩が主体で、花崗岩も見られる。出土した陶器播鉢には卸目があり、近世期のものと思われる。2号ビット列は14号溝と重なっており、重なったビットは14号溝の底面で確認されている。深さが浅く底面形状は一定しておらず、覆土にしまりが無い。表土に近い堆積土のため、樹木の根穴痕跡のように見られる。一定の間隔をあけて並んでいるので、植栽列になるものかと思われる。3号ビット列も2号ビット列と同様な性格のものかと思われる。3号ビット列は、深さ5～26cm、径28～42cmの楕円形で間隔が1.1m前後で並んでいる。P5は攪乱土坑と重なって深くなっているものと思われる。

1号ビット群は1号ビット列と同様に、自然礫を詰めた小ビットで、不整なL字形に並んでいる。礫は3～20cm大の花崗岩と安山岩を主体とし、片岩、石臼片、土器・陶器片を含んでいる。陶器の中に近世の陶器片を含み、近世以降のものと思われる。



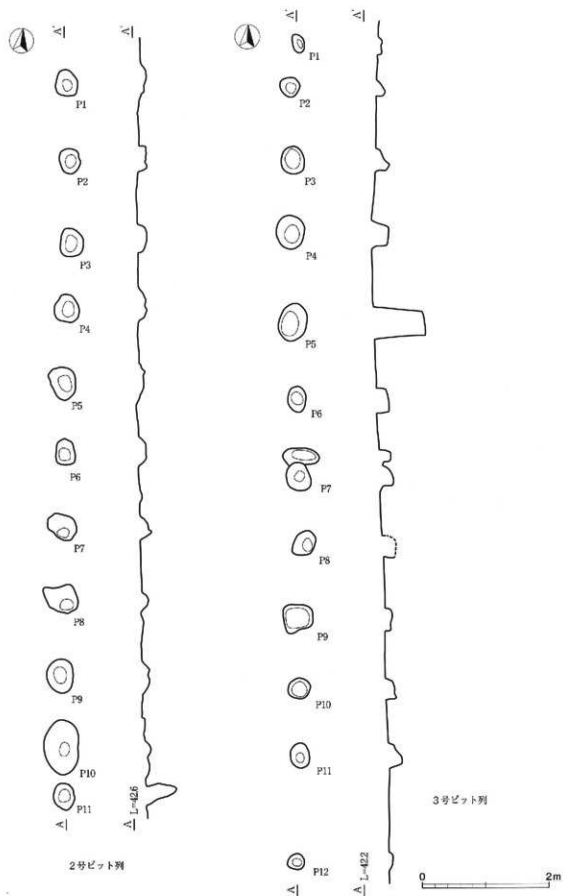
第214図 1号ピット群



第215図 1号ピット列

表 99 溝・道路跡出土遺物観察表

調査番号	種類	口徑 跡高 底径	特徴	胎土	焼成	色質	備考
9溝 1	古瀬戸 深皿	- - (22.2)	内底面に3本1單位四條が渡る。	雑岩、黒色小粒	良好	にぶい黄褐色	
1道路 1	常滑 広口壺	(34.8) - -	口縁部片。縁部上半部が上方に伏く立ち上がる。	長石	良好	灰青褐色	
1道路 2	常滑 甕	(37.6) - -	口縁部片。縁部上半部が上方に立ち上がる。	長石燻粒	良好	にぶい黄褐色	



第216図 2号・3号ピット列

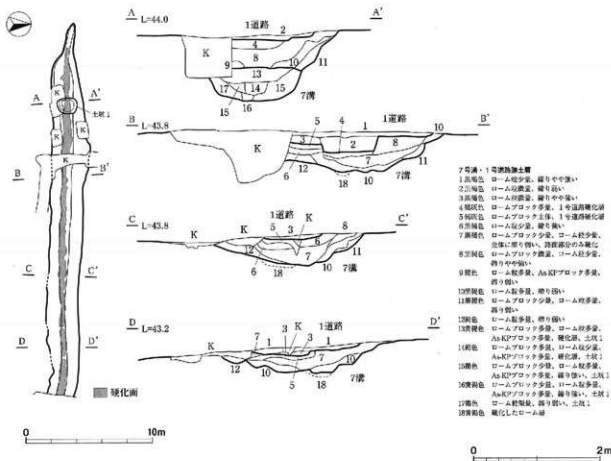
## 6 溝・道路跡(第5・217・218図)

A区北部では、古代～中世に構築されたと考えられる溝が6条確認された(4号溝は欠番)。1号溝はA区北端部を東西方向に12.8m 走行し、上面幅42～98cm、下面幅23～74cm、深さ20cm前後を測る。東端は攪乱で消滅し、調査区外へと延びる可能性がある。西端は1号住居跡の一部を破壊するが、さらに西側へは伸びないようである。底面には小ピットを伴う。3号溝は短く、2号溝および1号段切り状遺構に破壊され、上面幅74～101cm、下面幅50～70cmを測り、深さは15cm程度である。1・3号溝の覆土の状況は奈良平安時代の遺構覆土にも近似しており、構築時期は古代～中世と推定する。2号溝は平面クランク状を呈し、1号段切り状遺構と併せて同一遺構を形成する。南・北端は調査区外へと延びており、19.6m 確認した。上面幅70～96cm、下面幅14～42cm、深さはクランク部分を境にして北側で45～57cm、南側の段切り部で20cm前後である。北側西壁にはテラスが伴い、クランク箇所底面には間仕切り状あるいは障壁状の高まりや段差がある。規模は大きくないが、構造から見れば、構築時期は中世以降と推察する。幅の狭い5号溝は直線的に約60mにわたって南北方向(N-11°-W)に走行し、上面幅37～128cm、下面幅28～106cmを測り、深さは20cm以下である。底面には多数のピットが不規則に穿たれている。北端は自然消滅するが、南端は1号道路跡と8・9号溝の直前で止まる。平面位置や走行方向を考えれば、規模こそ大きく違うものの、5号溝と8・9号溝は同一の目的・機能を推測でき、7号溝・1号道路跡とも密接な関係を想定できる。6号溝は5号溝と並行する浅い溝で、形状・覆土等は5号溝と同様である。

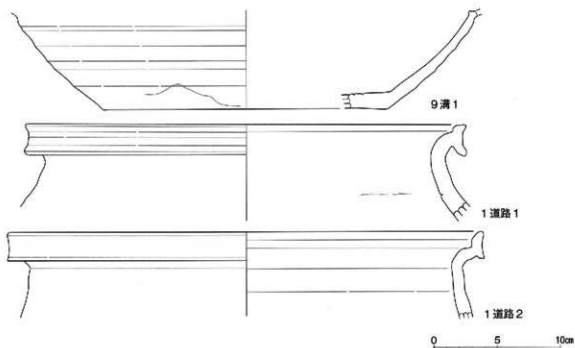
7号溝と1号道路跡は基本的に同一遺構である。上面幅2.08～2.83m、下面幅0.29～1.47m、深さ10～65cmを測り、総延長29.4mを確認した。断面形は逆台形～緩やかなU字状を呈する。全体に西端から東端へと緩やかに下り傾斜する。7号溝底面は踏みしめられて、幅15～74cmの硬化面が形成されている。ある程度まで7号溝が自然埋没した後に、1号道路の硬化面が形成される。よって7号溝の用途も本来は道路であろう。西端にはロームブロック・Ag-KPブロックで硬く埋め戻された土坑1がある。1号道路跡の硬化範囲・路面は平面図示していないが、7号溝を全く踏襲して構築されていた。B断面周辺は硬化面に明らかな段差を伴っていた。覆土からは13世紀後半～14世紀前半頃の常滑の甍口縁部片が2点出土している。8・9号溝は断面逆台形状の大溝で、ほぼ直線的に並走する。8号溝覆土上層は、9号溝掘削時の排土であるロームブロックで埋め戻されており、新旧関係は明瞭であった。底面には不規則にピットが穿たれる。規模は、8号溝が上面幅1.05～2.27m、下面幅0.32～0.79m、深さ46～62cm、9号溝が上面幅(1.02)～(1.57)m、下面幅0.39～1.02m、深さ36～91cmを測る。

A区南部では、近世以降近代までの時期の区画溝と考えられる溝が10条見られる。東西方向に短く延びる16・17号溝、南北方向では、15号溝のように短いものもあれば、10・11・14号溝は南北方向に連なるように長く延びるものもある。いずれも切り合い関係や覆土、出土遺物から見て新しい近世以降の時期のものと思われる。10・11・14号溝は北部で2・3号ピット列と重なり、北端で東へ折れ、18号溝として東の調査区外へ延びている。幅は0.5～1.3mで、深さ約20cm、全体では130m程の長さで直線的に延びており、区画とともに道の細溝的な役割があったかもしれない。東西方向に延びる12号溝と13号溝は、隣接して平行に走っており、13号溝は同じところで2回以上の掘り直しを行っている。出土遺物に近代の遺物があり、最近まで機能していた区画溝と思われる。13号溝底面は東へ向かって緩やかに傾斜し、水が流れるならば東端部でくぼ地に向かって流れ込むようになっていているものと思われる。

このほか、調査区北部と中央部の東端部斜面には、段切り状に斜面を平坦にする造成を行っている箇所がある。出土遺物がなく時期は不明である。



第217図 7号溝・1号道路跡



第218図 溝・道路跡出土遺物

## 第V章 B1区の遺構と遺物

## 第1節 弥生時代

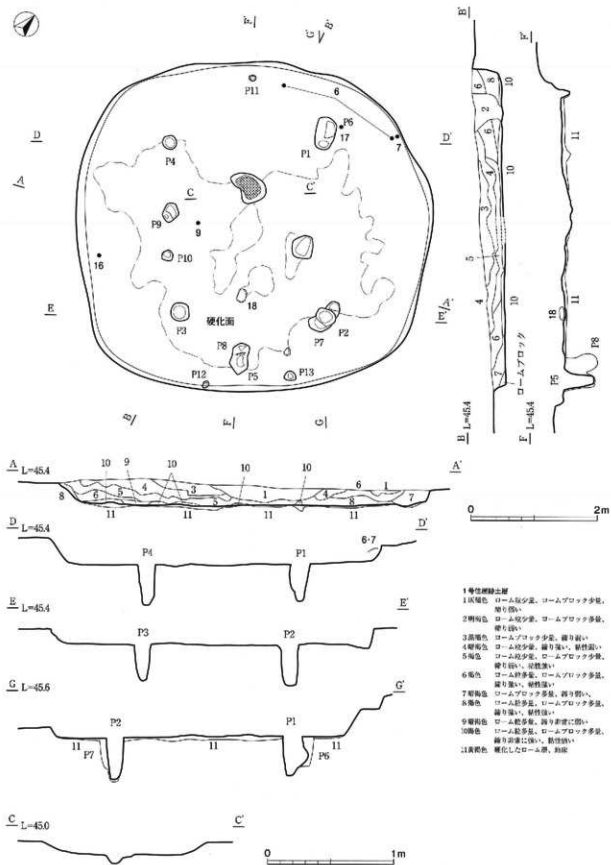
## 1 堅穴住居跡

## 1号住居跡(第219・220図)

位置 B1区、G3～H3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向5.24m、東西方向5.65mを測り、丸みを帯びた不整隅正方形を呈する。北東側の覆土上層は攪乱に切られる。主軸方位 N-40°-W 壁 壁高は20～43cmを測る。床 ほぼ平坦で、炉の北側と壁際以外は硬化する。ピット 10箇所ある。P1～4が新支柱穴、P6・7が旧支柱穴、P5・P8が新・旧の出入口ピットと考えられる。柱穴配置の変遷はP3・P4・P6～P8→P1～5と考えられる。P9(深さ45cm)・P10(同40cm)は貼床で閉塞されていたが、補助的支柱であろうか。P11～13は壁柱穴であろう。炉 60cm×43cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。覆土 堅穴中央部上層は黒褐色土、床面上～壁際は褐色土が堆積する。遺物 覆土上層には弥生土器の大型破片や個体(6・7)が目立つ。床面中央からは18の台石が出土している。遺物量は多く、小～中破片の割合が高い。ほぼ千石式後半期の土器で占められている。下層出土の17は土製の紡錘車である。所見 住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

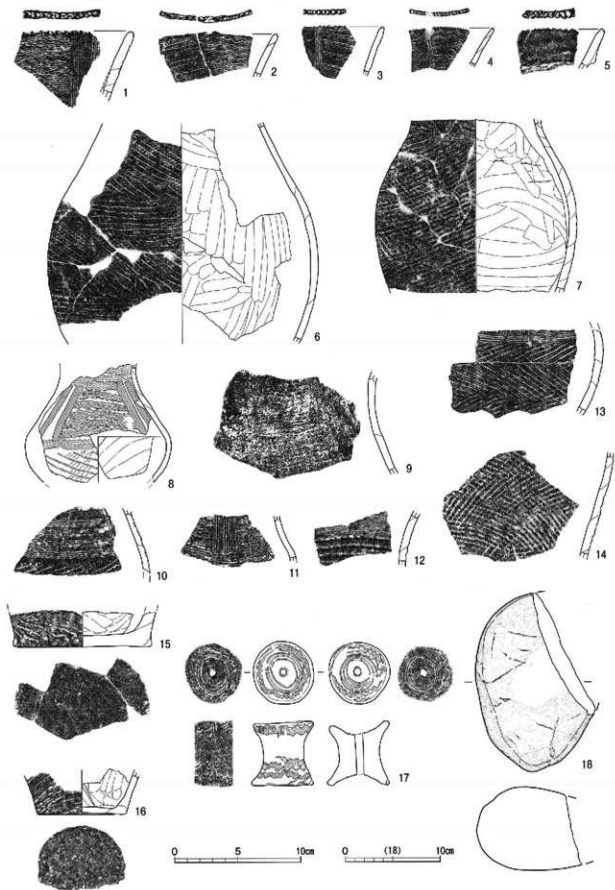
表100 1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 蓋	-	口唇部縄文彫刻によるキザミ。口縁部4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦位のナデ。	石灰、灰石、骨針	良好	淡黄色	十五台式
2	弥生土器 釜	-	口唇部縄文彫刻によるキザミ。口縁部5本歯の横位直線文。内面は横・斜位のナデ。	石灰、角閃石	良好	にぶい黄色	十五台式
3	弥生土器 碗	-	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本歯の縦位直線文→横位の波状文。内面は横・斜位のナデ。外面全面にスス付着。	石灰	普通	外: 褐色 内: にぶい褐色	十五台式
4	弥生土器 蓋	-	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石灰	良好	にぶい黄褐色	十五台式
5	弥生土器 蓋	-	口唇部縄文彫刻によるキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。胴部無文の彫刻。内面は縦・横位のナデ。外面スス付着。	石灰、金雲母、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十五台式
6	弥生土器 釜	-	胴部附加条2條縄文(R・L・L・L・下→上)。内面は縦位直線文・横位波状文(下→上)。内面は縦位直線文・横位波状文(下→上)。内面は縦位直線文・横位波状文(下→上)。内面は縦位直線文・横位波状文(下→上)。	石灰、多量の灰石、金雲母、骨針	良好	外: にぶい褐色 内: 褐色	上層出土 十五台式
7	弥生土器 碗	-	胴部附加条2條縄文(R・S・L・L・下→上)を不規則な羽状彫刻で施文。胴部は一部横・斜位のナデでナデなし。内面は縦位直線文・横位波状文(下→上)。外面無部にスス付着。	石灰、角閃石、金雲母、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	上層出土 十五台式
8	弥生土器 釜	-	胴部附加条2條縄文(L・L)→胴部5本歯の横位直線文・横位波状文1条→胴部横位の区画状波状文2条(1→3条→1条)の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦位直線文・横位波状文(下→上)→胴部上位横位のナデ。外面無部にスス付着。	石灰、角閃石、多量の白色粒	普通	淡黄色	十五台式
9	弥生土器 蓋	-	胴部5本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。内外面とも骨雲彫刻あり。	多量の石灰・灰石、金雲母	不良	にぶい黄褐色	上層出土 十五台式
10	弥生土器 蓋	-	胴部4本歯の縦位直線文→横位波状文。胴部附加条2條縄文(R・L・L・R)。内面は斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴリ付着。	多量の石灰・灰石、白色粒	不良	にぶい黄褐色	十五台式



第219図 1号住居跡





第220图 1号住居跡出土遺物

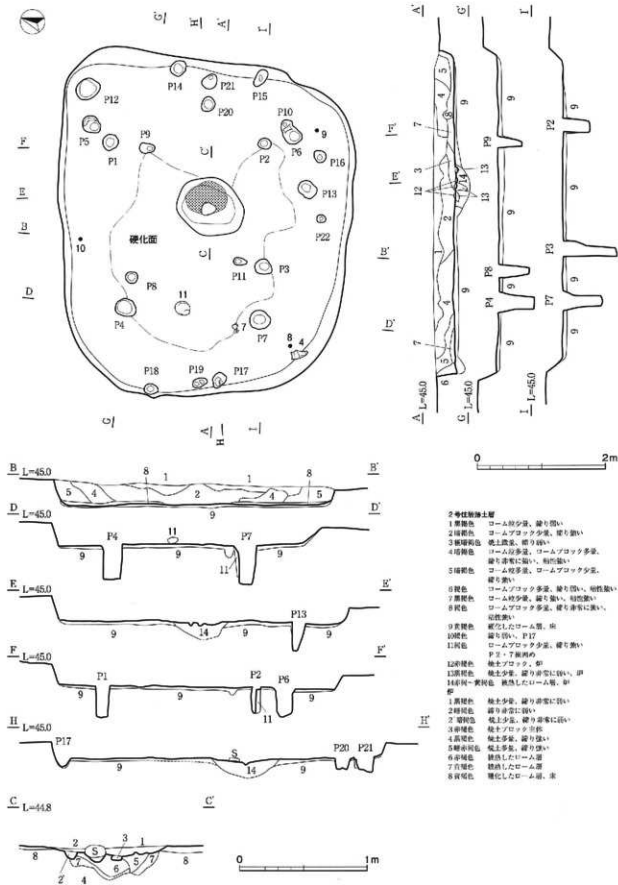
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土 鉢	-	縦割界4本道の横位区画直線文→頸部3条一単位の縦位直線文→横位直線文(上→下)。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	淡黄色	十五台式
12	弥生土 壺	-	縦割界出し段帯9.3条→7本道の縦位直線文・横位直線文、山形横位直線文(下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	良好	にぶい褐色	十五台式
13	弥生土 鉢	-	縦割界加帯2種横文(R+R、L+R→上)。一帯割界4本道の横位区画直線文(時折閉り)。内面は斜位のヘラナデ等。外面まばらにスス付着。縦割による赤色化、内面まばらにコブレ付着。	石英、角閃石	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
14	弥生土 壺	-	縦割縁不明の附加赤線文(R・S、L・Z:下→上)。内面は縦・斜位のナデ。内面全面に濃いコブレ付着。	石英、長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外：にぶい褐色 内：黒褐色	十五台式
15	弥生土 壺	(10.8)	縦割縁不明の附加赤線文(R・Z、L・S:下→上)。縦割帯も外縁部に3本道の直線文→直線文。横位は上下2階帯に3本道の縦位直線文→横位直線文。外周縁一帯部にスス付着。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十五台式
16	弥生土 鉢	(6.8)	縦割界加帯2種横文(R+R)、縦割帯も外縁部に3本の直線文→直線文。横位は上下2階帯に3本道の縦位直線文→横位直線文。全体的に顔面荒れ。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外：黄褐色 内：にぶい黄褐色	下層出土 十五台式
17	上新器 紡錘車	-	径(4.75~4.95)、高5.1、孔径(0.6)、重(32.9)g、X字形。表面粗くとも外縁部に3本道の直線文→直線文。横位は上下2階帯に3本道の縦位直線文→横位直線文。全体的に顔面荒れ。	多量の石英・白色粒、角閃石、金糸帯、骨針	普通	にぶい黄褐色	下層出土
18	石器 台石	-	欠損片。自然産の表石中央に磨耗痕。石質：砂岩。残存長28.9cm・残存幅12.5cm・厚さ8.8cm・重さ2602.2g。				表層出土

## 2号住居跡(第221・222図)

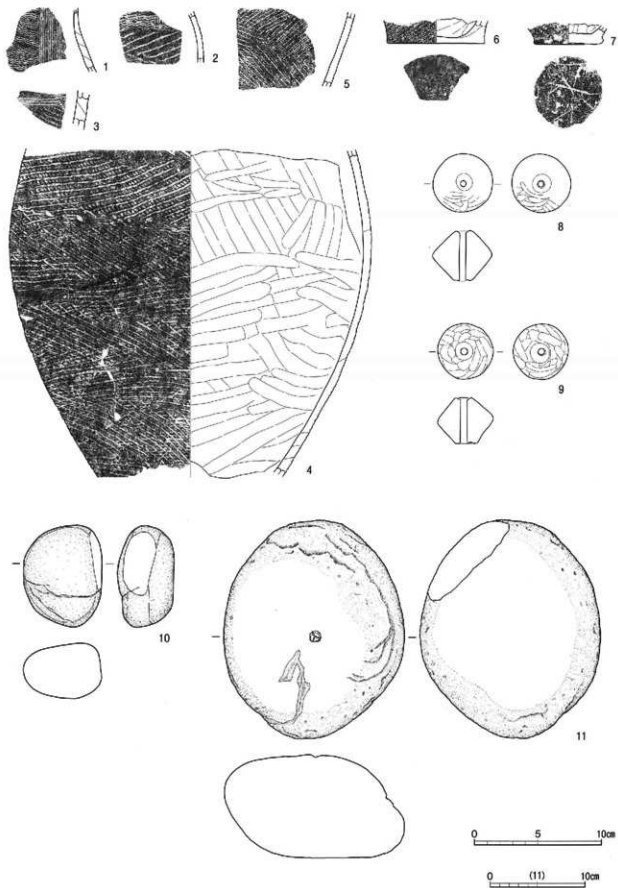
位置 B1区、H3~H4グリッドに位置する。規模と平面形 東西(主軸)方向5.28m、南北方向4.64mを測り、不整隅丸逆台形状を呈する。主軸方位(新)N-69°-E、(旧)N-21°-W 壁 壁高は24~40cmを測る。床 はほぼ平坦で、炉の東側と壁際以外は硬化する。ピット 2箇所ある。P1・4・6・7が新主柱穴、P2・3・8・9が旧主柱穴、P17・P13が新・旧の出入口ピットと考えられる。P10(深さ32cm)はP6の、P11(深さ51cm)はP3の補助柱穴と推測する。P12・14・15・18~21は新壁柱穴と推測され、深さは13~36cmを測り、平均22cmである。P5・16・22は旧壁柱穴と考えられ、深さは17~28cmを測る。炉 106cm×91cmの不整円形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。中央の炉石は被熱が弱い。覆土 堅穴中央部は暗~黒褐色土、床而上~壁際は褐色土が主体で、自然堆積状を呈する。遺物 南東隅とP6脇の下層から紡錘車(8・9)が出土した。P4-7の中間地点の床面には台石(11)が遺棄されていた。堅穴南西隅からは胴部大型片(4)が出土している。全体の遺物量は少なく、小~中破片の割合が高い。十五台式後半期の土器が主体で、5は二軒屋式と考えられる。所見 柱穴配置から、建替え並びに拡張が明瞭である。炉を起点にして主軸を90°、北から東へ変更している。旧堅穴の痕跡は不明である。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表101 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土 壺	-	頸部4本道・3条一単位の縦位直線文→横位直線文(上→下)。内面は斜位のナデ。外面全面にスス、内面コブレ付着。	石英	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
2	弥生土 鉢	-	縦割縁不明の附加赤線文(R・S、L・Z)→附加帯4本道の横位区画直線文→横位直線文。内面はナデ等。外面スス、内面コブレ付着。	石英	普通	にぶい黄褐色	十五台式
3	弥生土 壺	-	縦割縁不明の附加赤線文(L・Z)→頸部6本道の横位区画直線文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十五台式



第221図 2号住居跡



第222図 2号住居跡出土遺物

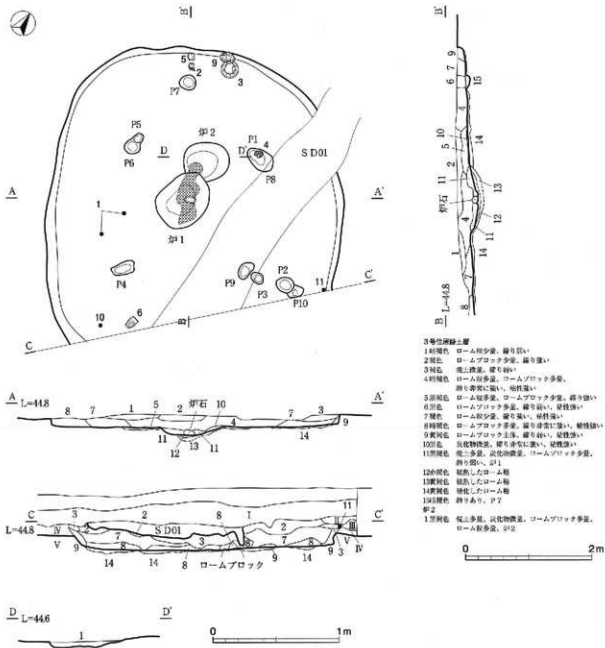
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	-	胴部附加条2根縄文(R+R、L+L;下→上)。内側は胴部中→下反折・斜位のナゲ、胴部上位側のナゲ。	石英、炭石、金言母	良好	外: ぶい・黄褐色 内: 灰黄褐色	下層出土 十五瓦式
5	弥生土器 壺	-	胴部附加条1根縄文(L+2L、L+R+2R;下→上、反時計回り)。内側は縦・斜位のナゲ、胴部下位は横位のナゲ。	石英、赤色粒	良好	外: 灰黄褐色 内: ぶい・灰黄色	
6	弥生土器 壺	(76)	胴部附加条1根縄文(L+R+2R)。底部有包縁。内側は縦・斜位のナゲ。外面スス付着。	石英、角閃石	良好	外: ぶい・黄褐色 内: 灰黄褐色	下層出土
7	弥生土器 壺	53	胴部輪縄不明の附加条縄文(L・Z)。底部水垂れ。内側は縦・斜位のナゲ。外面スス付着。	石英、赤石	不良	灰黄褐色	下層出土
8	土器 紡錘車	-	径46、高40、孔径0.45、重量65.20g。片断穿孔。表面白ナゲ塗。2/3剥落。	石英、黒石、角閃石、骨針	良好	ぶい・黄褐色	下層出土
9	土器 紡錘車	-	径40、高37、孔径0.5、重量39.30g。片断穿孔。表面白ナゲ塗。	石英、多量の白色粒	良好	ぶい・黄色	下層出土
10	石器 磨石	-	自然産の右側面に顕著な斜紋。石材: 砂岩。長さ8.00cm・幅6.2cm・厚さ4.45cm・重さ317.4g。				下層出土
11	石器 立石	-	欠品品。大型礫の表・裏面中央に磨石痕。磨石は平滑。表面中央に縦打痕。石材: 石英安山岩。長さ23.1cm・幅18.85cm・厚さ10.9cm・重さ6400.0g。				床面出土

## 3号住居跡(第223~225図)

位置 B1区G4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向4.77m以上、東西方向4.68mを測り、楕円形に近い形状を呈する。1号溝によって覆土上層が破壊される。主軸方位 N-36°-W 壁 壁高は14~34cmを測る。床 ほぼ平坦な地床で、全体に硬化する。ピット 10箇所ある。P1・3・4・6が新主柱穴、P8・9・4・5が旧主柱穴と考えられる。P3・P6が49cm・52cmと深く、他は20~40cmの間に収まる。P2は主柱穴の可能性が残る。炉 規模は91cm×72cmで、平而不整楕円形の浅皿状を呈する。被熱は著しい。中央に自然円礫の炉石を置く。覆土 褐色土主体で、上面が黒褐色土で覆われる。自然堆積状を呈する。遺物 全体の遺物量は非常に多く、十土台後半期の土器を主体とする。北壁際床面からは胴部個体(3・9)が出土しており、その周囲の覆土中にも略完形個体(2・5)が認められる。P1上面からも大型破片(4)が出土した。3は十土台式の頸部文様と円形浮文が施文され、胴部縄文は羽状構成をとらない。ほお木直の6は頸部に無文帯と刺突文を有し、附加条1根縄文が施文される。10の紡錘車は下層出土である。所見 主柱穴配置を更新しており、建替えと考えられる。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

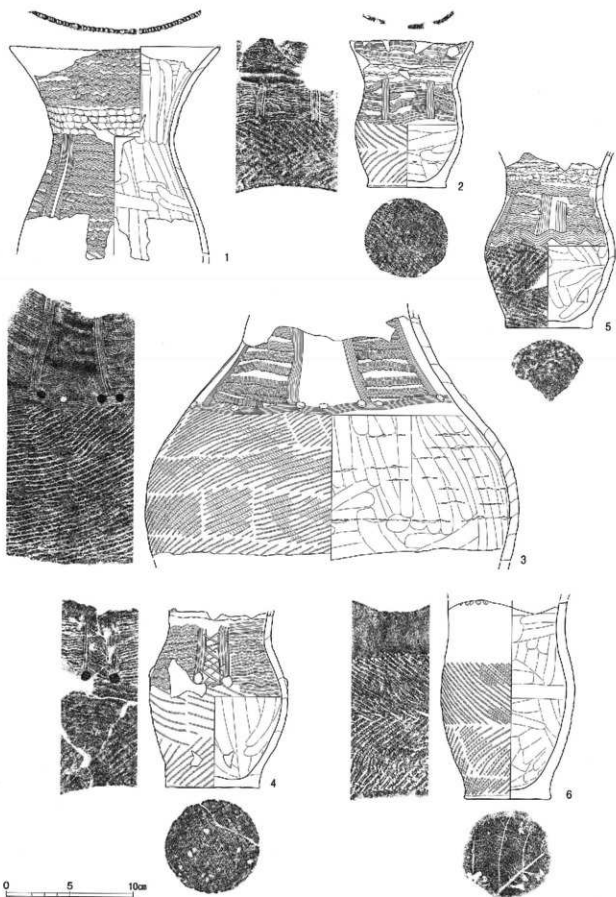
表102 3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(162)	口唇部ヘラネガミ、小突起。口縁部3本筋の横位波状文(上→下)。胴部薄い斜紋帯。胴部輪縄不明の附加条縄文(L・Z)→胴部厚位反折波状文→頸部3条一単位の縦位波状文→横位波状文(上→下)。内側は胴部・頸部単位に縦位のナゲ、他は縦位のナゲ。外面全体にスス、内面全体にはゴブレ付着。	石英、角閃石	良好	外: ぶい・黄褐色 内: 灰黄褐色	中→下層出土 十五瓦式
2	弥生土器 壺	(96) 117 61	口唇部ヘラネガミ。頸部薄い斜紋帯。胴部輪縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z;下→上)→胴部5本筋の横位波状文(下→上)→縦位波状文8条(スリットなし)。内側は口縁・胴部横位のナゲ、他は斜位のナゲ。外面全面にスス、胴部上唇→頸部下位に濃いスス付着。内側は胴部上より上にゴブレ付着。	石英、多量の白色粒	普通	外: 黒褐色 内: 灰黄色	下層出土
3	弥生土器 壺	-	胴部赤羽状構成の附加条2根縄文(R+R、L+L;下→上)→胴部厚7本筋の横位波状文→2条一単位の縦位波状文5条単位→頸部横位波状文(下→上)→2条一単位の円形貼付文18箇所。内側は縦・斜位のナゲ。頸部中位と胴部中位に并列する扉筋。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外: 灰黄色 内: ぶい・黄褐色	床面出土

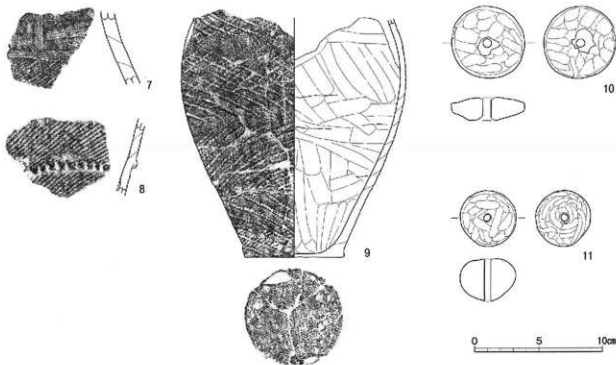


第223図 3号住居跡

原形番号	類別	口徑 最高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	発生土器 盃	- 7.4	頸部深い押捺隆帯、胴部縮減不明の附加糸文(R・S、L・Z:下→上)→頸部帯4本線の横位区画状文→胴部2条一単位の波線文→横位の波状文(下→上)、横位区画状文間にへくさる斜格子文(右上がり→左上がり)→2帯一対の四形刺付文、底帯有目紋、内面は胴部下壁が横位のナガ、帯は斜位のナガ、外面胴部より上にスス、帯は濃いスス付。内面はゴロン付帯。	多量の石英・灰石・白色粒	普通	外: 灰褐色 内: 濃い黄褐色	P1上面出土 十五瓦式
5	発生土器 盃	- (6.5)	頸部深い押捺隆帯、胴部縮減糸1條周文(R・L+2・L)と無縁不明の附加糸文(R・S)、頸部5本線で2条一単位の横位区画状文S単位→横位区画状文(下→上)→胴部縮減区画状文(時計回り)、底帯有目紋、内面は胴部縮減・斜位のナガ、胴部は斜位のナガ、外面全体にスス付帯。内面は胴部中央より上にゴロン付帯。	石英、灰石、多量の白色粒	普通	外: 灰褐色 内: 濃い黄褐色	上層出土 十五瓦式



第224图 3号住居跡出土遺物①



第225図 3号住居跡出土遺物②

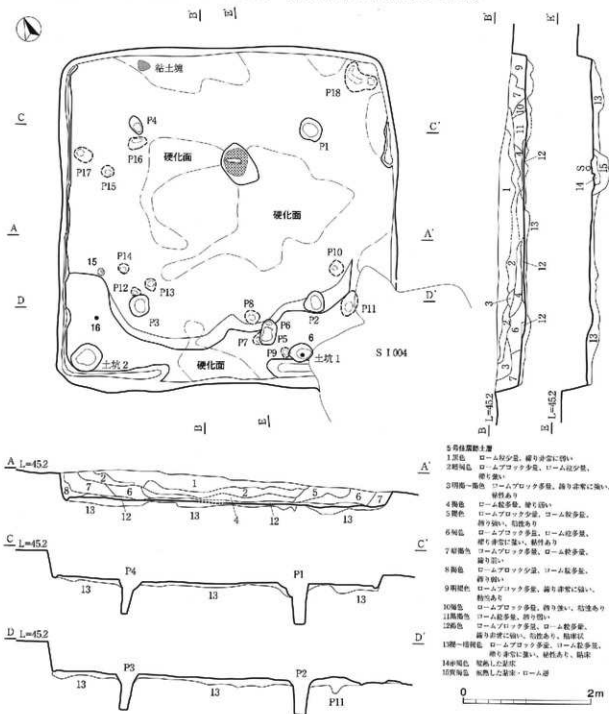
図版 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	施成	色調	備考
6	弥生土器 壺	- - 66	頸部上に丸部加工による横位刺突文、斜突文以下は無文帯(横位のナデ)。胴部附加条1横文(R・L+2・L, L・R+2・R;下→上)。底部木突痕。内面は縦・横位のナデ。外面まばらなスス、焼熱による赤色化。	多量の石英・白色 粒、角閃石	良好	にぶい褐色	扉面出土
7	弥生土器 壺	- - -	胴部種類不明の附加条横文(R・S)→胴部6本線の縦 位直線文→横位波状文→胴部縦位直線文。内面は横位 のナデ。外口スス付着。	多量の石英・白色 粒、角閃石、金雲 母	良好	にぶい黄褐色	土器白式
8	弥生土器 壺	- - -	口縁部附加条1横文(L・R+2・R)→口縁部下縁河様 の底面によるキズ。内面は横位のナデ、割条。	多量の石英・長石	良好	にぶい褐色	二軒遺式
9	弥生土器 壺	- - 77	胴部附加条2横文(L+L, R+R;下→上)。底部有 目取(周縁部ナデ消し)。内面は割部中位が横・斜位のナ デ、他は縦・斜位のナデ。外面胴部はまばらなスス、底 部は周縁にスス、割部上半は濃いスス付着。内面全体ロ グレ付着。	多量の石英・白色 粒、角閃石	普通	外: にぶい黄褐色 内: 黒褐色	上層出土 土器白式
10	土製品 初孫半	- -	径5.7、高1.8、孔径0.65、重量165.14g。片割穿孔。表 裏面ナデ調整。	石英、角閃石、多 量の白色粒	良好	黄灰色	下層出土
11	土製品 初孫半	- -	径4.4、高3.4、孔径0.5、重量64.55g。片割穿孔。表裏面 ナデ調整。	石英、骨粒	良好	にぶい黄褐色	上層出土

5号住居跡(第226・227図)

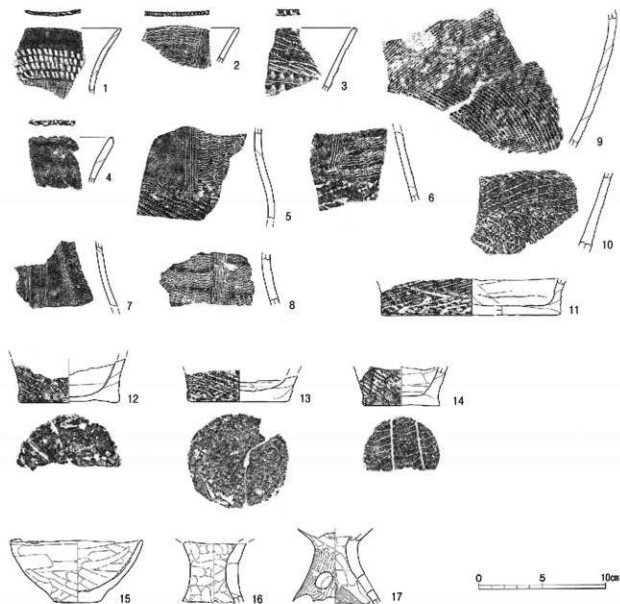
位置 B1区、G4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向5.3m、南北方向5.42mを測り、不整隅丸正方形を呈する。4号住居跡によって南東隅が破壊される。主軸方位 N-22°-E 壁 壁高は38cmを測る。床 炉の周りと壁際が部分的に硬化する。南側はベッド状に高い。壁際の掘り方は溝状に掘り込まれるが紙幅制約のため平面図は割愛した。ピット 18箇所ある。P1~4が新主柱穴、P5・6が新出入口ピットである。旧主柱穴はP1・10・16、P12・13・14のグループであろう。掘り方面で確認したピットは破線で表現した。P5の東脇に深さ11cmの土坑1が、南西隅に深さ8cmの土坑2がある。



非常に浅いが、貯蔵穴の可能性がある。 炉 規模は63cm × 43cmで、平面不整形円形、浅皿状を呈する。 被熱は強い。中央に自然棒状礫の炉石を置く。 覆土 褐色土主体で、上層は黒褐色土で覆われ、自然堆積状を呈する。北壁際の下層で粘土塊を検出した。 遺物 出土量はやや多く、小～中破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とする。1は頸部に筒歯状工具による帯状刺突文が施文される。9・12・14は二軒屋式系と考えられる。15・16は弥生系の鉢・高坏で、17は土師器の器台である。 所見 主柱穴配置から、建替えが判明している。出土遺物の主体は弥生土器であるが、住居構造や土師器の出土を考慮すると、住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代終末～古墳時代前期初頭に求められる。



第226図 5号住居跡



第227図 5号住居跡出土遺物

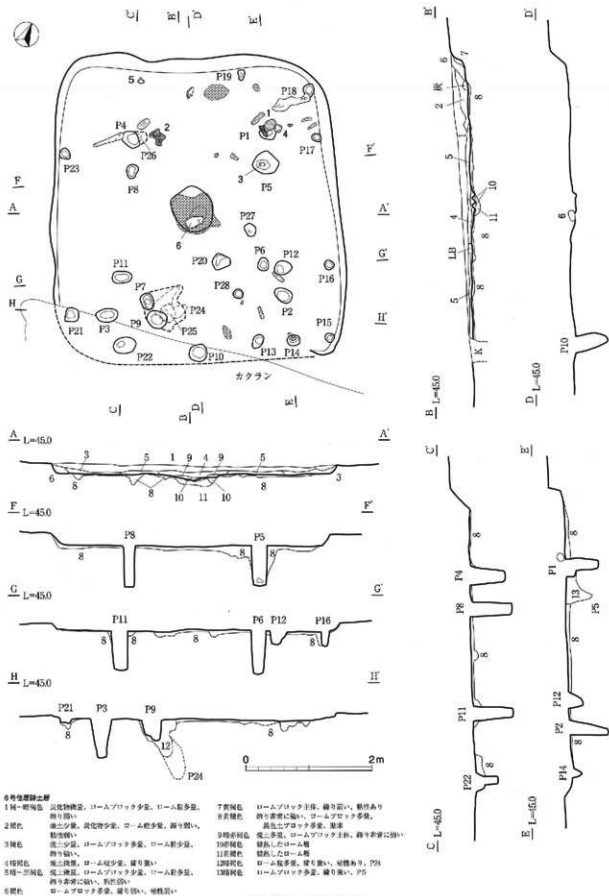
表103 5号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部無筋織文(L)を同版織文。口縁部無文(横位のナデ)。胴部斜織文具々による等次刺突文4条→5本位の縦位直線文→ヘラ掻き斜織文々。内面は斜位のナデ。外面スス。内面ヨゴレ付着。	石英・角閃石多量の白色砂	普通	外：暗灰青色 内：黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本位の縦位直線文→横位或状文。内面は横・縦位のナデ。外面スス。内面ヨゴレ付着。	石英	良好	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。胴部縦位のヘラ掻き種沈線。蓋の押捺跡等→口縁部輪種不明の羽加糸織文(L・Z)。外面スス付着。断面黒色。	石英	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	口唇部縦文キザミ々。口縁部無文(斜位のナデ)。内面は横位のナデ。外面スス付着。口唇部付着に帯状の濃いスス付着。	多量の石英、金雲母、骨針	普通	にぶい褐色	十王台式

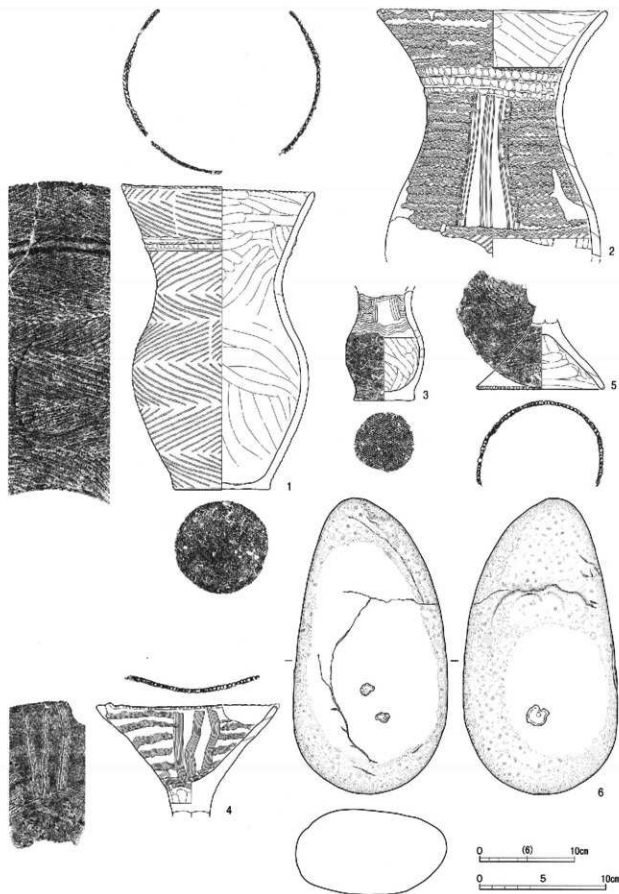
図版番号	種別 器種	口径 器高 器径	特 徴	胎土	焼成 色調	備考
5	弥生土器 壺	--	西部輪縄不明の附加糸縄文(L・Z)→頭部帯5本巻の縦位置短文→横位置短文(上→下)。内面は縦・斜位のナデ。外面は縦帯にスス。内面はコレ付帯。	石灰	良好 外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
6	弥生土器 壺	--	制部輪縄不明の附加糸縄文(R・S)→頭部5本巻の縦位置短文→頭部帯単位区画短文、頸部単位短文。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・白色 粒	普通 外：にぶい黄褐色(土坑)出土 内：黄褐色	十五台式
7	弥生土器 壺	--	頭部5本巻・3巻→単位縦位置短文→単位短文(上→下)。内面は縦・斜位のナデ。外面は縦帯にスス付帯。	石灰	良好 外：灰青褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
8	弥生土器 壺	--	頭部10本巻の縦位置短文→横位置短文(上→下)。内面は縦・斜位のナデ、割痕。	多量の石英・長石	普通 にぶい藍色	
9	弥生土器 壺	--	底部附加糸1巻短文(RL+2L)。密輪不明の縦位置短文(R・S)。内面は斜位のナデ。外面はスス付帯。	多量の石英・長石	普通 外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	一軒式
10	弥生土器 壺	--	制部附加糸2巻短文(LR+S)、輪縄不明の附加糸縄文(L・S・ト→上)。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	良好 外：にぶい黄褐色 内：黄褐色	十五台式
11	弥生土器 壺 (138)	--	西部輪縄不明の附加糸縄文(L・S)。底部砂痕。内面は縦・斜位のナデ。	石英、長石、多量の 金雲母	良好 外：にぶい黄褐色 内：灰褐色	十五台式
12	弥生土器 壺 (78)	--	制部附加糸1巻短文(RL+2L)。底部本巻帯。内面は縦位置短文。外面はほらにスス。被熱による赤色化。内面コレ付帯。	多量の石英・長石	普通 外：灰青褐色 内：にぶい藍色	一軒式
13	弥生土器 壺	79	制部附加糸2巻短文(L+L)。底部本巻帯。内面は横位のナデ。	石英、長石、角閃石、 金雲母、骨針	良好 黄褐色 内：にぶい藍色	十五台式
14	弥生土器 壺	60	西部輪縄不明の附加糸縄文(L・Z)。底部本巻帯。内面は横位のナデ。外面はスス付帯。	多量の石英・長石	良好 外：灰青褐色 内：にぶい藍色	二軒式
15	弥生土器 鉢	104 50 37	外面は横位のヘラケズリ→横・斜位のナデ。内面は縦・斜位のヘラケズリ→横・斜位のナデ。内面あばた状の割痕。	石英、多量の長石・ 白色粒、角閃石	良好 灰褐色 内：黄褐色	断面出土
16	弥生土器 高平	--	外内は縦・横位のナデ。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・白色 粒、骨針	普通 外：浅褐色 内：黄褐色	中層出土
17	土師器 香合	--	外面は体部斜位のナデ→斜位のミガキ、制部ナデ→縦・斜位のミガキ。内面は体部横位のナデ、脚部縦・斜位のナデ→斜位のハケメ。脚部3方向に通孔。	多量の石英、角閃石	普通 にぶい黄褐色	

## 6号住居跡(第228・229図)

位置 B1区、G5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向推定4.84m、東西方向4.63mを測り、不整隅丸長方形を早する。南壁は攪乱で消滅する。主軸方位 N-28°-W 壁 壁高は12~30cmを測る。床 ほほ平坦で、全体に硬化する。貼床が認められる。ピット 28箇所ある。P1~4・26が新主柱穴、P5・6・8・11・12が旧主柱穴と考えられる。P8・11はローム質土で閉塞されていた。P26はP4よりも古い。P12はP6の補助柱穴と想定する。P10は出入口ピットであろう。P13~19・21・22は壁柱穴で、深さは11~37cmを測り、平均20cmである。P7・9・20・24・25・27・28は用途不明である。特にP7・24・25がそれぞれ深さ70cm・90cm・53cmと概して深く、P24は斜めに掘り込まれる。炉 規模は76cm×54cmで、平面不整形の浅皿状を呈する。被熱は強く、南寄りに6の台石を灰石として置く。覆土 暗〜黒褐色土による自然堆積と想定する。堅穴北側の下層には少量の炭化材が含まれ、焼失住居と判断する。遺物 遺物の出土量は多く、略定形個体が多い。P1直上からは1・4が、P26の東側下層からは2が、北壁直下からは5が引出土した。また、P5底面には3のミニチュア土器が横位で遺棄されていた。十五台式後半期の土器を主体とし、4の高坪には壺の頸部文様が施文される。所見 主柱穴配置は大きく拡大しているが、壁柱穴配置は新・旧の主柱穴配置ともに整合することから、堅穴の規模・形状に大きな変更はないものと推測する。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第28図 6号住居跡



第229图 6号住居跡出土遺物

表104 6号住居跡出土遺物観察表

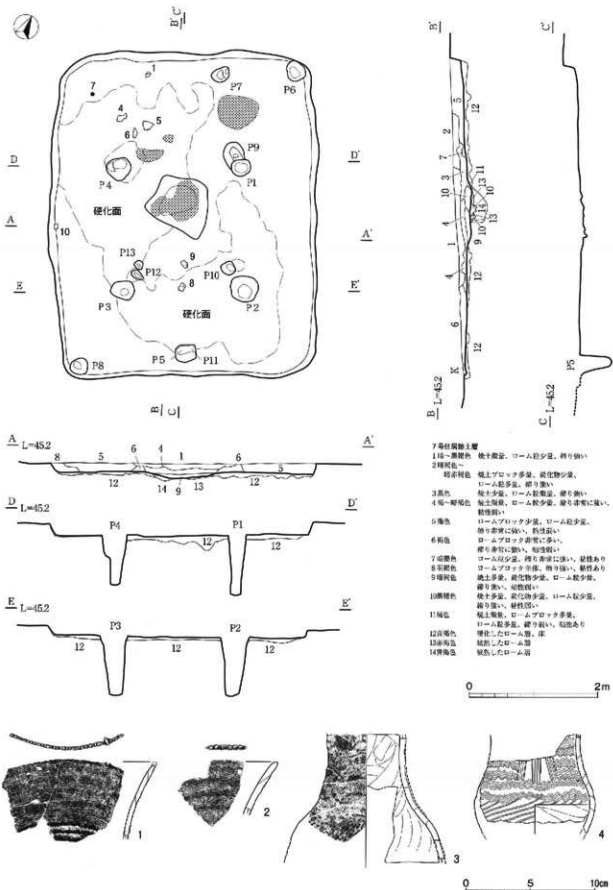
図版番号	種別 器種	口徑 底径 高径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	152 242 7.5	口唇部横文キズミ。胴部押捺痕跡2条、胴輪軸不明の附加条線文(R・S・L)。口唇部中央より下は下→上、反時計回り、胴部中央より下は上→下、反時計回り。底縁部外側、内面には縦刻線のないナデ。実用面全体に短長のスズ(銀→銅)が施し、外面の2/3にスズ付着。底部右側部にもスズ付着。他はスズ酸化消滅。内面は実用面半分にはゴロン付着。あばた状の剥離。	多量の石英・炭石、角閃石、骨針	良好	外：浅黄色 内：灰青褐色	P11面出土 11台式
2	弥生土器 壺	183 —	口唇部ヘラキザリ。胴部深い押捺痕跡、胴輪軸不明の附加条線文(R・S)→口唇部4本条の横位成状文(下→上)、胴部3条1単位の横位成状文4単位→逆刺拵位区画成状文→横位成状文(上→下)。内面は口唇部横・斜位のナデ、下から上へ逆刺、外面胴部に浅いスズ、内面ゴロン付着。	石英、多量の白色炭	良好	灰青褐色	下層出土 11台式
3	弥生土器 壺	— 47	ミニチュア型。胴輪軸不明の附加条線文(L・S・L・Z)附加条線3條あり。胴部中央より下は下→上、反時計回り。底縁部外側、内面には縦刻線のないナデ。実用面全体に短長のスズ(銀→銅)が施し、外面の2/3にスズ付着。底部右側部にもスズ付着。他はスズ酸化消滅。内面は実用面半分にはゴロン付着。	多量の石英・炭石、骨針、チャート	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰青褐色	P5底面出土 13台式
4	弥生土器 高杯	(141) —	口唇部ヘラキザリ、小尖突。胴部7本条の白線文カー3条1単位の縦位成状文4単位→横位成状文(下→上)、胴部横・斜位のナデ。胴部中央部外側上より下は下→上、内面は短横・斜位のナデ。外縁部と外面に黒化。	石英、多量の骨針	普通	外：浅黄色 内：にぶい黄褐色	P11面出土 11台式
5	弥生土器 高杯	— 99	胴部輪軸不明の附加条線文(R・S・反時計回り)を横・斜位成状文、赤土状帯状。胴部輪軸無キ。其によるキズミ。内面は短・斜位のナデ。マーブル状の胎土。	石英、チャート、多量の骨針	良好	暗赤褐色	下層出土
6	石器 斧石	—	磨一辺。大型厚の表・裏面中央に磨孔部。磨孔部の一部に磨打痕とみられる凹穴。表裏は焼熱により赤褐色に染れ。石針：長さ307cm・幅16.3cm・厚さ90cm・重量6860g。	—	—	—	燧石

## 7号住居跡(第230・231図)

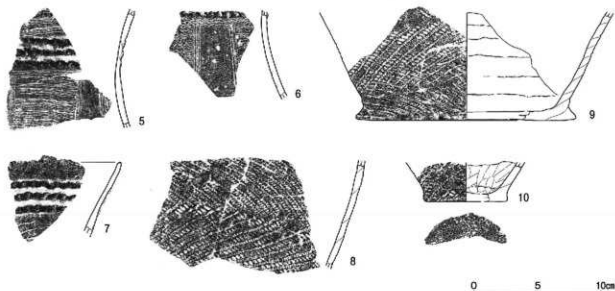
位置 B1区、F4～F5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向5.12m、東西方向4.18mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位 N-28°-W 壁 壁高は10～20cmを測る。床 ほぼ平坦で、中央部が硬化する。ピット 13箇所ある。P1～4が新主柱穴、P4・9・10・12・13が旧主柱穴と考えられる。P5・11は新・旧出入口ピットであろう。P9～13は硬化した地床を剥がして検出した。旧主柱穴は25～44cmと深くないが、新主柱穴は深さ90cmを超え、床面は硬化する。炉 規模は95cm×96cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。覆土 炉の上は覆土上層まで焼土混じりの黒褐色土が堆積し、埋没途中にも被熱していた可能性がある。また、堅穴北側の覆土上面にも焼土が散布する。遺物 遺物量はやや多く、大半は覆土下層からの出土である。小～中破片の割合が高く、十土台式後半期の土器を主体とする。3は二軒屋式の細頸壺である。所見 新旧の主柱穴配置はほぼ同地点を選択しており、建替えに伴う堅穴の変更・拡張はなかったと判断する。住居跡の築約および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表105 7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 底径 高径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	—	口唇部ヘラキザリ、小尖突。胴部深い押捺痕跡等一口唇部5本条の横位成状文。内面は横位のナデ。外縁スズ付着。内面ゴロン、あばた状の剥離。	石英、多量の白色炭	普通	外：黒褐色 内：灰青褐色	覆土下層出土 11台式
2	弥生土器 壺	—	口唇部横文キズミ。口唇部6本条の横位成状文。内面は横位のナデ。外面スズ、内面ゴロン付着。	石英、多量の白色炭	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	11台式
3	弥生土器 壺	—	胴部6本条の下向き深爪文(筒形磨り)。胴部附加条線文(R・L=2L)→横軸不明の附加条線文(R・S・L→下)。内面は短・斜位のナデ。外面腹部にスズ集中、内外面とも剥離多い。	多量の石英・炭石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式



第230図 7号住居跡・出土遺物①



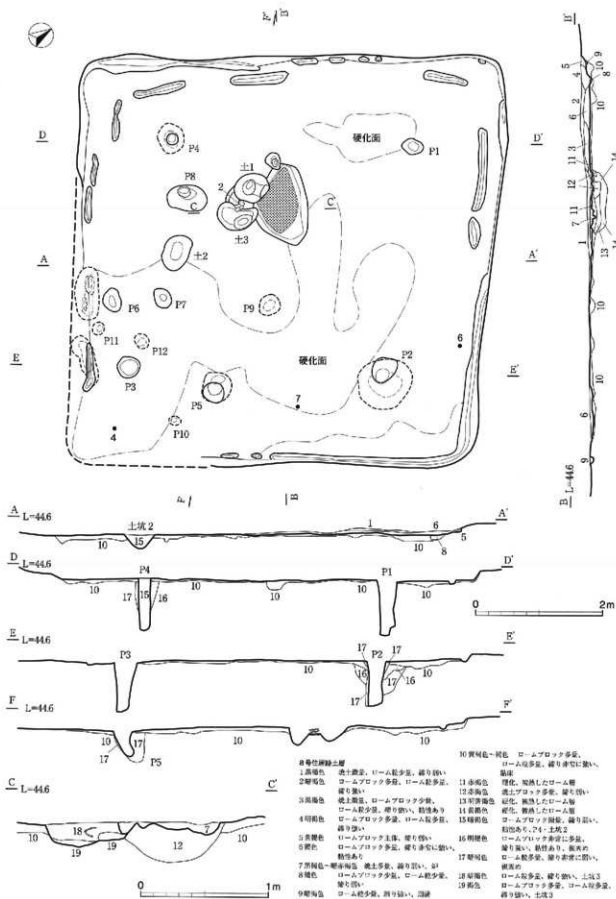
第231図 7号住居跡出土遺物②

図版番号	類別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	- - -	胴部無軸線不明の附加条縄文 (r・S、L、Z: F→上) →胴部4本宙の横位区画状文2条→胴部3条一単位 の縦位直線文3単位。内面は横・斜位のナデ。外周金 体にスス、焼熱による赤色化。内面胴部に帯状のコゴレ。	石英、多量の白色 粒	普通	外：灰青褐色 内：にぶい黄褐色	下層出土 十五台式
5	弥生土器 壺	- - -	胴部深い平縁除帯3条→口縁部5本宙の横位直線文。胴 部除帯直下に横位直線文→除帯2条一単位の縦位直線文 →横位直線文(1→下)。内面は横・斜位のナデ。外周スス、 内面コゴレ付着。	石英、金雲母、骨 針	良好	外：黒褐色 内：褐色	下層出土 十三台式
6	弥生土器 壺	- - -	頸部系眼のある平縁除帯一帯帯直下に4本宙の横位区画 状直線文→頸部2条一単位の縦位直線文→横位直線文 (1 →下)。内面は横・斜位のナデ。外周スス、内面コゴレ付着。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	下層出土 十五台式
7	弥生土器 壺	- - -	口縁部無軸線文 (L) を四輪施文。口縁部無軸線文 3条。胴部無軸線不明の附加条縄文 (R・S)。内面は縦位 のナデ、溝彫。	石英、多量の炭石・ 金雲母	普通	にぶい黄褐色	下層出土 十五台式
8	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文 (R + R、L + L: F→上)。内面は横・ 斜位のナデ。9と同一個体。。	石英、金雲母、多 量の白色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：灰青色	下層出土 十五台式
9	弥生土器 壺	- (17.2)	胴部附加条2種縄文 (R + R、L + L: F→上)。底縁砂眼。 内面は器面変。8と同一個体。。	石英、金雲母、多 量の白色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：灰青褐色	上層出土 十三台式
10	弥生土器 壺	- (5.4)	胴部附加条2種縄文 (R + R)。底縁布目織。内面は横・ 斜位のナデ。内面コゴレ付着。	石英、角閃石、金 雲母、骨針	良好	外：灰青色 内：にぶい褐色	下層出土 十五台式

## 8号住居跡 (第232・233図)

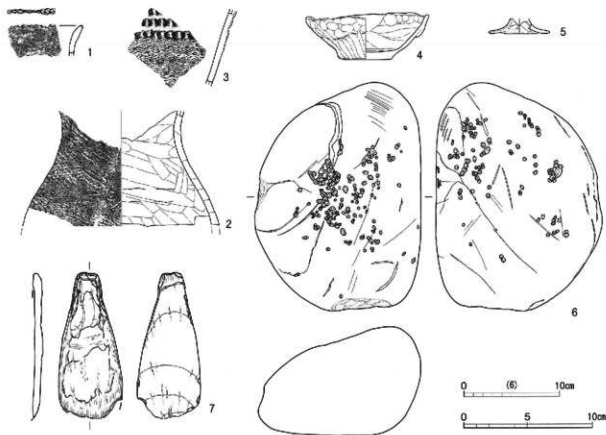
位置 B1区、F5～G5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向6.47m、東西方向6.3～6.72mを測り、不整隅丸正方形を呈する。主軸方位 N-59°-W 壁 壁高は10cmを測る。南側の壁は残存しない。床 やや凹凸があり、中央部がわずかに高い。硬化面は炉の南側と南壁際に広がる。周溝は断続的・部分的で、内側にも確認できたため堅穴を掘り直した可能性がある。掘り方は壁際が溝状に浅く掘り込まれるが紙幅制約のため平面図化していない。ビット 12箇所ある。P1～4が主柱穴、P5が出入口ビットであろう。P1～4は底面の硬化圧痕(あたり)が顕著であった。P6～12は用途不明で、P10～12は掘り方で確認した(破線で表現)。炉の周りにはP8(深さ40cm)も含めて小土坑(深さ29





第232図 8号住居跡

～36cm)が4基点在する。新旧関係は、土坑3→炉→土坑1となる。炉規模は126cm×86cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。覆土自然堆積であろう。遺物出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。十王台式主体と考えられる。2は土坑3から出土した。4は南関東系と考えられる鉢である。5はミニチュア高坏の脚部とした。下層から6の台石、床面から7の磨製石斧が出土している。所見 住居構造は古墳時代前期的様相と考えられるが、弥生土器しか出土していない。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半あるいは終末期～古墳時代前期初頭の過渡期と推測される。



第233図 8号住居跡出土遺物

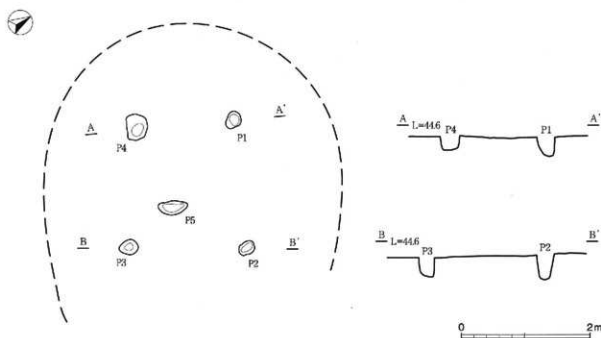
表106 8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 器	— — —	口唇部織文キザミ。口縁部無文(傾位のナデ)。内面は横・斜位のナデ。外面ス付着。	石英、内四石	普通	外：灰青褐色 内：灰黄色	P9出土 十王台式
2	弥生土器 器	— — —	胴部輪周不明の附加糸織文(L・Z、L・S：下→上)。内面は斜位のヘラナデ。ナデ。外面まばらにス付着。	石英、長石、金雲母、赤色粒	普通	外：淡黄色 内：にぶい黄褐色	土坑3出土 十王台式
3	弥生土器 器	— — —	胴部押線隆帯→木歯の横位成状文(下→上)。内面は斜位のナデ・ヘラナデ。	石英、多量の金雲母	良好	外：淡青色 内：灰黄色	掘り方山土 十王台式
4	弥生土器 鉢	96 37 41	折り返し口縁。胴部下半環・斜位のナデ→口縁部エビオサエ。ナデ。内面は体部横・斜位のナデ、口縁部エビオサエ。	石英、多量の白色粒	良好	にぶい黄褐色	下層出土

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	弥生土器 高杯 <small>ホ</small>	— — (48)	ミニチュア高杯。胴部横位のナデ、胴部上部ビオサニ。内面は縦・斜位のナデ。	石灰、多量の白色 灰	普通	黒褐色	
6	石笠 舟石		器一般。大面壁の表面全体に磨耗石。磨耗範囲の一部に捺痕や摩痕。表・裏面中央に敲打痕。石付：砂岩。長さ26.4cm・幅17.3cm・厚さ11.5cm・重さ6700.9g。				
7	石笠 磨製石斧		欠損品。細皮をもつ板状割片を素材とし研削による調整加工。万部両面は顕著な磨耗面。表・裏面の上部には欠損後の小さな割痕面。石付：粘板岩。残存長11.43cm・残存幅4.9cm・残存厚0.9cm・重さ31.7g。				下層出土

## 9号住居跡（第234図）

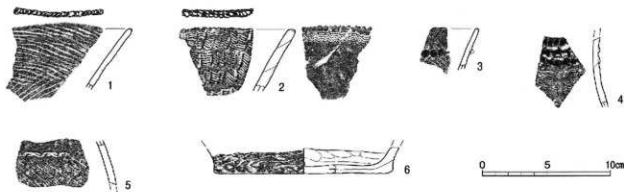
位置 B1区、G5グリッドに位置する。規模と平面形 聖穴が残存しないため不明。主軸方位 N-61°-W 壁・床・覆土 不明。ピット 5箇所ある。P1~4が支柱穴と判断する。P5は深さ10cm程度で、用途不明である。遺物 なし。所見 支柱穴配置は3号住居跡に近い。遺物はないが、周辺の遺構分布状況から、住居跡の所属時期は弥生時代後期後半と推測される。



第234図 9号住居跡

## 2 遺構外出土遺物（第235図）

1~6は遺構外出土の弥生土器である。1・4・6は十王台式の範疇で捉えられる。2は樽式土器に類似する振り幅の広い波状文が施文され、内面にも波状文が施文される。また、口唇部は縄文原体によるキザミを有する。5は回転結節文が施文されることから、南関東系の土器と考えられる。



第235図 遺構外出土遺物

表107 遺構外出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口縁器底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- -	口唇部ヘラキギミ。口縁部輪純不明の附加糸織文(R・S、L・Z:ド→上)。内面は横・斜位のナデ。	石英	良好	外:淡黄色 内:にぶい藍色	B1区一括 十王台式
2	弥生土器 壺	- -	口唇部織文草体によるキギミ。口縁部先筒管状の頸直状工具(6本歯)による横位波状文(下→上、時計回り)。内面は横位のナデ→口唇部直下に外周と同様の筒管状工具(後述は5本)による横位波状文1条。外周の波状文は直状文のように止めるが細文。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	B1区一括
3	弥生土器 壺	- -	折り返し口縁。口唇部輪純不明の附加糸織文(R・S)によるキギミ。口縁部無文(横位のナデ)。輪純不明の附加糸織文(L・Z)→口縁下縁に小突起3個。内面は横位のナデ。外周スス。内面ヨグレ付着。	石英、多量の白色粒	普通	外:にぶい藍色内: 内:黒褐色	B1区一括
4	弥生土器 壺	- -	頸部押除部→頸部6本歯の横位波状文(ド→上)。内面は横位のナデ。外周スス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外:黒褐色 内:灰黄褐色	B1区一括 十王台式
5	弥生土器 壺	- -	頸部附加糸1種織文(R L = 2 L:踏部縮部)、輪純不明の附加糸織文(L・S)。内面は横・斜位のナデ。外周スス、内面ヨグレ付着。	多量の石英	不良	外:にぶい藍色 内:黒褐色	B1区一括
6	弥生土器 壺	- (140)	頸部輪純不明の附加糸織文(L・S)。底部砂痕。内面は横位のナデ。内面ヨグレ付着。	多量の石英・長石、角閃石、金雲母	良好	外:淡黄色 内:黒褐色	B1区一括

## 第2節 奈良・平安時代

## 1 竪穴住居跡

## 4号住居跡(第236図)

位置 B1区、G4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向256~274m、東西方向275mを測り、不整隅丸正方形を呈する。南西隅の上端がやや張り出す。5号住居跡の一部を破壊する。主軸方位 N-4°-W 壁 壁高は14cmを測る。床 わずかに凹凸があり、出入口部が硬化し、北東半分は黒褐色土の軟弱な床である。ピット P1は深さ20cmで、出入口ピットであろう。カマド 燃烧部はやや窪み、煙道部にかけて赤化・硬化著しい。袖は残存しないが、両袖の基部にあたるわずかな高まりが残存する。中央部からは大きな焼土塊が出土し、支脚の可能性もある。覆土 暗~黒褐色土主体の自然堆積状である。遺物 カマド覆土中から土師器甕の個体が出土した。懸け臺と推測する。所見 住居跡の廃絶時期は、8世紀中葉頃と考えられる。



## 2 溝

## 1号溝 (第6図)

位置 B1区、G3・G4グリッドに位置する。規模と形状 上面幅0.46～1.64m、下面幅0.18～0.76m、深さ5～20cmを測る。総延長22.5mを確認した。断面形は浅皿状～緩やかなU字状(第223図C-C')である。走行方向 わずかに湾曲するが、ほぼ南北方向に走向する。N-15°-W 覆土 均質な黒色土が堆積する。遺物 須臾器差の破片が出土しているが、小片のため固化に至らなかった。所見 覆土の状況や出土遺物などから、構築時期は古代と推測する。4号住居跡と主軸方向が近似することも示唆的である。

## 第3節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物

## 1 時期不明の遺構

掘立柱建物跡と土坑・ピットが確認されている。1号掘立柱建物跡はG4～G5グリッドに位置する。調査区外にかかるため、桁行西辺しか調査できなかった。さらに調査区外では堅穴住居跡と重複するようである。桁行西辺2間、3.61m。桁行柱間1.7m・1.9m。主軸(桁方向)方位はN-75°-Eである。柱穴は3基確認し、全て抜取であった。

土坑は小規模で時期不明なものが5基点在する。1・2号土坑は隣り合って位置し、どちらも略円形で浅い。3号土坑もピット状で浅い。4・5号土坑は連結し、覆土は1号溝に類似する。いずれも壁面が硬化するが、土坑の性格は不明である。5基ともに時期判断すべき遺物に欠ける。計測値等は一覧表に記載した。

ピットは1号溝内やその周辺から、25基確認された。1・18号は欠番である。深さは16～68cmを測り、平均33cmである。覆土は褐色土主体と黒褐色土主体に分かれる。全て詳細時期不明ながら、1号溝とは何らかの関連が想定される。

表109 B1区土坑一覧表

遺構名	位置	平面形態	規模 (cm)			備考
			長さ	短径	深さ	
1号土坑	G4	不整円形	62	60	14	
2号土坑	G4	不整円形	90	88	16	
3号土坑	G4	不整円形	72	37	9	
4号土坑	F4	楕円形	106	103	47	5号土坑と重複
5号土坑	F4	楕円形	108	94	32	4号土坑と重複

## 2 遺構外出土遺物

縄文土器片が弥生後期の遺構や表土層から4点出土した。細別は中期中葉阿玉台Ⅱ式と晩期中葉(1)に比定され、他は縄文のみ施される胴部片である。



第237図 遺構外出土遺物

表110 遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁部 高 感度	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 片	-	口縁部～体部片、体部に平編縄文(乱)を横位施文→口縁部に多数竹管状工具の跡(口縁部をザミより擦過)による縦位の平行沈線→沈線間に同様の工具による斜列列、口唇部に多数竹管状工具による斜突、内面は横・縦位のミダキ。	多量の白色粒	良好	外: 褐色 内: 明黄褐色	B1区6号住居跡出土 晩期中葉

## 第VI章 B2区の遺構と遺物

## 第1節 旧石器時代

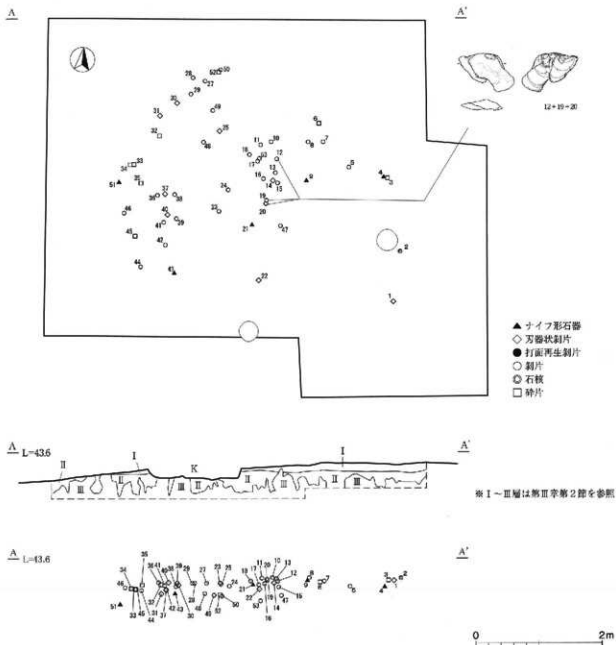
## 1 石器集中地点

## 1号石器集中地点(第238~241号)

**位置** 調査区の西側中央、G9グリッドに所在する。規模 東西4.56m×南北3.35m。標高4288m~4331m。層位 II層のソフトロームおよびIII層のハードローム中から出土し、その多くはII層中で検出された。III層中からも少量確認されているが、II・III層間が一定しないことに起因するもので、II層中の出土石器と同一のブロックに伴うものと見做される。

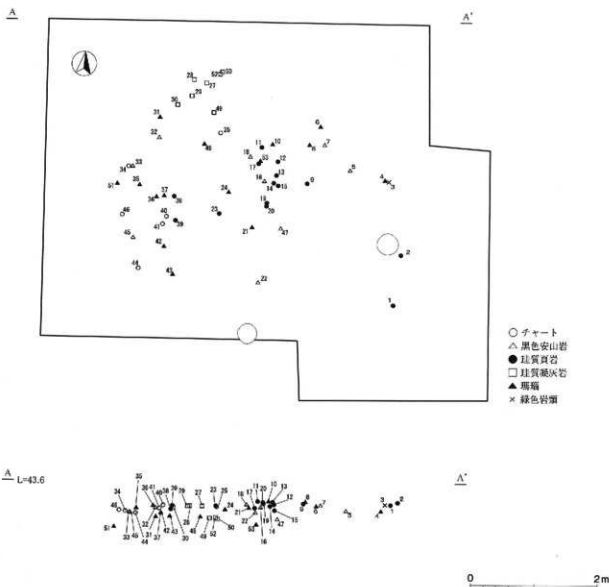
**遺物** 石器は59点出土した。ナイフ形石器5点、刃器状剥片8点、打面再生剥片1点、剥片34点、石核2点、砕片9点が認められており、総出土量における剥片や砕片の占める割合が高い(88%)。石器概要 2次加工が施された石器ではナイフ形石器5点(Na4・9・21・43・51)が検出された。しかし、完形品は少なくNa43以外は、先端部や基部が欠損している。各石器の製作工程を外観すると、素材剥片には単設打面石核および両設打面石核から剥片剥離された比較的小型の刃器状剥片が利用されており、単設打面石核から剥離されたものが多用されている。2次加工の部位は、剥片の末端部に施すNa21・51、打面周辺に施すNa4・9・43の2種類に分けられ、側縁加工が施されるNa4・9・43・51や二側縁加工が施されるNa21に細分される。各石器の2次加工技術は、Na4を除き主要剥離面側から背面側へ刃潰し加工が連続的に施されており、いずれも急角度(60°~71°)な剥離角をもつ。形態的な特徴については、基部が尖基状(V字状)に加工されるNa4・21・43や基部が方形状(打面が残存)のNa9・51の2種類が認められる。なお、尖基状の基部をもつNa4・43については、片側の打面周辺が大きく加工されていることから、刃潰しによる調整が施される前に切断している可能性が考えられる。また、Na43の基部には剥片剥離後の細長い剥離痕(樋状剥離)が認められることから、彫器としての機能を有している可能性も考えられる。刃器状剥片8点が検出されており、いずれも人為的な細部加工の痕跡は認められなかった。素材となる石核には、刃器状剥片の背面の剥離面構成により2点が単設打面石核、6点が両設打面石核が使用されている。これらの打面を観察すると、調整打面をもつNa1・22・37、平坦打面をもつNa30が認められる。しかし、Na14・25・31・40は剥片剥離後に打面が除去(斜位・平坦)されていることから、打面の状態が不明瞭である。石核は2点検出された。Na55はチャート製で切断面とみられる剥離面を除き、小型な剥離面が1箇所認められたのみである。Na2は球質頁岩製の小型石核であり、形状などから残核と考えられる。剥離面の構成から両設打面石核と判断され、刃器状剥片を連続的に作出していたと推測される。また、作業面や打面周辺には小型剥離痕が多く、打面再生や頂部調整などが頻繁であったことが窺える。剥片類43点は、打面・末端部が遺存していない小型剥片や小型不整形なものが主体であるが、珪質頁岩製の剥片Na19・20および砕片Na12による接合資料が1点確認されている。Na20は糜打面をもち、背面全体が原礫面に覆われていることから、剥片剥離工程における初期段階の剥片と判断される。Na19は、Na20に連続する剥片剥離作業により作出された剥片である。上記の石核Na2や接合資料Na12・19・20などは、本遺跡における素材剥片作出を目的とする剥片剥離工程の一端を示す良好な資料と言える。石材 チャート・黒色安山岩・球質頁岩・珪質凝灰岩・瑪瑙・緑色岩類などが使用されており、珪質頁岩・瑪瑙が半数以上を占める(54.2%)。それらの石材の多くは、ナイフ形石器や刃器状剥片に利用される傾向が認められる。

また、珪質頁岩製の石器 17 点では、礫皮・色調・混入物などの特徴などから、石核No.2 を除き接合資料No.12・19・20 と同一母岩と推測される。さらに、黒色安山岩・珪質凝灰岩・瑪瑙製の石器についても色調・混入物などの観察から、同一母岩である可能性が考えられる。なお、母岩別資料については、肉眼観察による識別である。分布状況 器種別の分布状況を見ると、ナイフ形石器・刃器状刮片・碎片などは集中地点内に散在しているのに対して、刮片は小規模な集中範囲が3箇所認められた。そのうち、北西寄りと中央の集中範囲2箇所では、石材別分布の珪質頁岩・珪質凝灰岩と同様の分布状況を示している。石材別の分布状況を見ると、黒色安山岩・瑪瑙は集中地点内に散在しているが、チャート・珪質頁岩・珪質凝灰岩は小範囲にまとまって分布している。所見 1号石器集中地点は出土層位や遺物から砂川期に推定され、器種別および石材別の分布状況などから、石器製作に関連する可能性が考えられる。



第 238 図 1号石器集中地点(器種別)

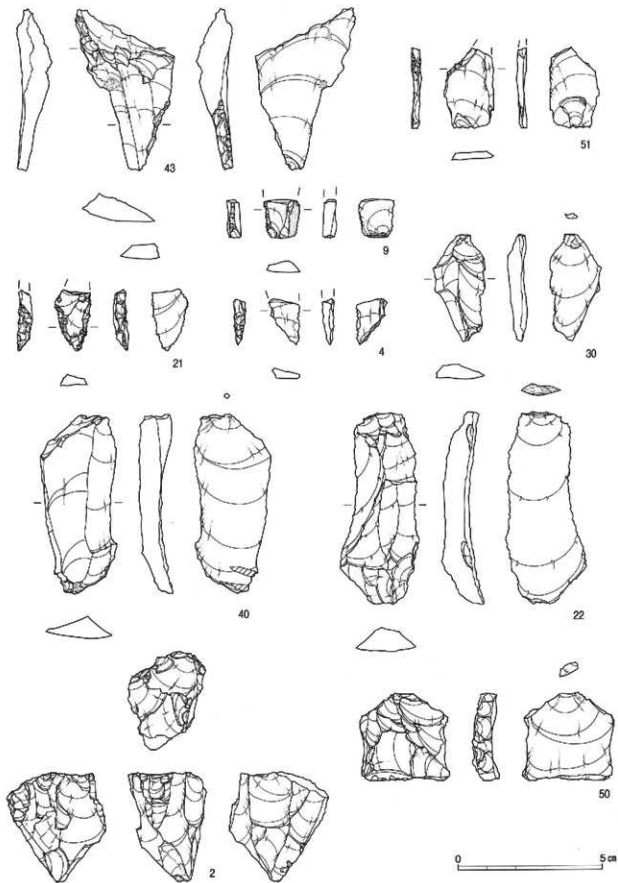




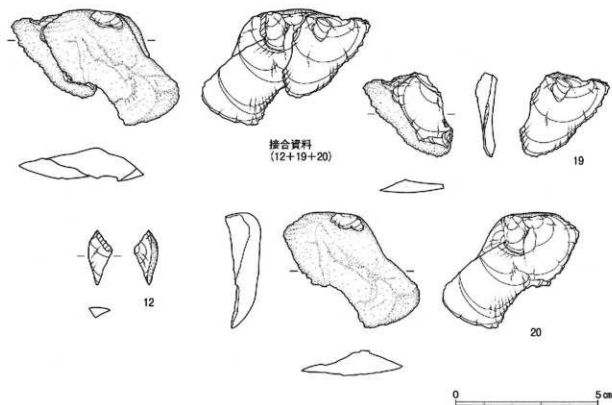
第239図 1号石器集中地点(石材別)

表111 1号石器集中地点出土石器組成表

	チャート	黒色安山岩	埴質頁岩	埴質凝灰岩	瑪瑙	緑色岩類	合計	
ナイフ形石器	0 6	0 0	1 0.89	3 0	4 13.62	0 0	5 14.71	
刃部欠損片	2 1.66	1 18.07	2 2.50	1 3.86	2 3.29	0 0	8 46.12	
打削再生製片	0 0	0 0	6 0	1 6.71	0 0	0 0	1 6.71	
製片	4 30.21	7 36.91	12 39.84	4 7.33	7 36.04	0 0	34 124.35	
石核	1 16.28	0 0	1 0.32	0 0	0 0	0 0	2 46.77	
砕片	1 6.04	3 1.25	1 0.37	1 0.18	2 1.01	1 0.14	9 3.27	
合計	8 41.21	11 36.53	17 79.11	7 17.68	15 34.15	1 0.14	89 222.23	上段:点数 下段:重量(g)



第240図 1号石群集中地点出土遺物①



第241図 1号石器集中地点出土遺物②

表112 1号石器集中地点出土石器一覧表

No	部 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損部位	背面の打撃方向	出土層位	報告書掲載	備 考
1	刃部状剥片	珪質頁岩	5.44	2.81	0.64	3.36		2方向	Ⅱ層		右端縁部に稜皮が残存。調整打面。
2	石核	珪質頁岩	3.88	2.75	3.45	30.49			Ⅱ層	○	両設打面石核。底部調整が顕著。
3	剥片	棕色岩類	(0.73)	(0.56)	(0.33)	0.14	端部		Ⅱ層		細少剥片。
4	ナイフ形石器	珪岩	(1.62)	(1.05)	(0.40)	0.47	先端部	1方向	Ⅱ層	○	基部に一側縁加工。打面欠損。
5	剥片	黒色安山岩	1.96	1.55	0.45	1.25			Ⅱ層		末端部は切欠*。
6	剥片	珪岩	1.80	0.60	0.45	0.39			Ⅱ層		一端縁に不連続な側縁面。
7	剥片	黒色安山岩	1.98	1.79	0.18	0.62		1方向	Ⅱ層		縁面にズリ有り。末端部は切欠*。
8	剥片	珪岩	0.98	0.72	0.24	0.17		1方向	Ⅱ層		末端部は切欠*。
9	ナイフ形石器	珪質頁岩	(1.33)	(1.25)	(0.49)	0.89	先端部	1方向	Ⅱ層	○	基部に一側縁加工。
10	剥片	珪岩	2.16	2.07	0.42	1.56		1方向	Ⅱ層		調整面が残存。末端部は切欠*。
11	剥片	珪質頁岩	0.93	1.36	0.33	0.38			Ⅱ層		調整剥片。
12	剥片	珪質頁岩	1.90	0.84	0.35	0.37			Ⅱ層	○	No.20の剥片副産に伴う剥片。
13	剥片	珪質頁岩	3.55	2.46	1.25	3.35		1方向	Ⅱ層		末端部に不連続な側縁面。
14	刃部状剥片	珪質頁岩	3.35	1.96	0.42	2.16		2方向	Ⅱ層		打面・末端部は切欠*。
15	剥片	珪質頁岩	3.54	2.79	0.99	9.98		1方向	Ⅱ層		稜皮が残存。
16	剥片	黒色安山岩	(1.85)	1.96	0.66	2.00	末端部	2方向	Ⅱ層		稜皮が残存。打面は切欠*。
17	剥片	珪質頁岩	2.51	1.63	0.49	1.08		1方向	Ⅱ層		稜皮が残存。
18	剥片	黒色安山岩	3.29	2.09	0.75	3.50		2方向	Ⅱ層		

第Ⅴ章 B2区の遺構と遺物

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損部位	背面の打撃方向	出土層位	報告書掲載	備考
19	削片	埴貫頁岩	3.00	3.23	0.76	3.33		1方向	Ⅱ層	○	Fig.20との組合資料。横打面。
20	削片	埴貫頁岩	4.10	4.80	1.25	12.97		背面	Ⅱ層	○	Fig.12-19との組合資料。横打面。
21	ナイフ形石器	海泡	(2.15)	1.25	0.50	1.15	先端部	1方向	Ⅱ層	○	基部に二輪加工。
22	刃部状削片	黒色安山岩	6.80	2.75	1.45	18.07		1方向	Ⅱ層	○	やや大型。平出打面。
23	削片	埴貫頁岩	1.82	1.62	0.42	1.09		1方向	Ⅱ層		横皮が残存。先端部は切断。
24	削片	珪瑁	2.77	2.35	1.31	7.10		2方向	Ⅱ層		前後面が残存。先端部は切断。
25	刃部状削片	チャート	1.90	1.19	0.26	0.49		1方向	Ⅱ層		打面・先端部は切断。
26	欠損										
27	削片	埴貫頁岩	1.78	1.48	0.33	0.66			Ⅱ層		両側削片。背面に横皮が残存。
28	削片	埴貫頁岩	3.60	2.95	1.42	5.67			Ⅱ層		打面両側削片。背面に基部調整痕。
29	削片	埴貫頁岩 (1.58)	(1.46)	0.41	0.72	右半部	1方向	Ⅱ層			先端部は切断。
30	刃部状削片	埴貫頁岩	3.30	1.80	0.65	2.88		2方向	Ⅱ層	○	先端部に小さな調整痕。ナイフ形石器。平出打面。
31	刃部状削片	珪瑁	2.55	1.30	0.79	2.30		2方向	Ⅱ層		打面・先端部は切断。
32	削片	黒色安山岩	1.68	1.31	0.30	0.94			Ⅱ層		小型。
33	削片	黒色安山岩	0.84	0.42	0.20	0.09			Ⅱ層		極少削片。
34	削片	チャート	0.76	0.53	0.14	0.04			Ⅱ層		極少削片。
35	削片	珪瑁	0.96	1.54	0.63	0.62			Ⅱ層		小型。風化が顕著。
36	削片	珪瑁	3.59	3.45	1.38	12.94		2方向	Ⅱ層		横皮が残存。
37	刃部状削片	珪瑁	2.39	1.38	0.31	0.59		2方向	Ⅱ層		調整打面。打面・先端部は切断。
38	削片	埴貫頁岩	0.91	1.23	0.18	0.21		1方向	Ⅱ層		打面・先端部は切断。
39	削片	埴貫頁岩	2.31	2.98	1.43	6.35		側面	Ⅱ層		縁辺にガブリ有り。
40	刃部状削片	チャート	6.30	2.65	1.15	14.17		2方向	Ⅱ層	○	二箇所の一部に調整調整痕。打面除去。
41	削片	チャート	2.74	3.88	0.90	7.83		1方向	Ⅱ層		前後面が残存。先端部は切断。
42	削片	埴貫頁岩	1.27	1.02	0.25	0.30		2方向	Ⅱ層		先端部は切断。
43	ナイフ形石器	珪瑁	5.70	3.45	1.27	10.72		2方向	Ⅱ層	○	基部に一輪加工。彫削の可能性有り。
44	削片	チャート	2.58	1.41	0.35	0.80		2方向	Ⅱ層		先端部は切断。
45	削片	黒色安山岩	1.42	1.04	0.49	0.52			Ⅱ層		小型。
46	削片	チャート	0.88	0.72	0.23	0.08		1方向	Ⅱ層		打面は切断。
47	削片	黒色安山岩	1.48	1.27	0.35	0.93		1方向	Ⅱ層		打面は切断。
48	削片	珪瑁	1.89	1.22	0.57	0.86		1方向	Ⅱ層		横皮が残存。
49	削片	埴貫頁岩	1.69	0.52	0.35	0.28			Ⅱ層		小型。背面に不連続な調整痕。
50	打面両側削片	埴貫頁岩	3.10	3.15	0.95	6.71			Ⅱ層	○	単打打面両側の打面両側削片。先端部は切断。
51	ナイフ形石器	海泡	(2.85)	1.73	0.35	1.48	先端部	1方向	Ⅱ層	○	先端部に一直線加工。
52	削片	埴貫頁岩 (1.56)	(0.59)	(0.17)	0.16	左半部	1方向	Ⅱ層			極少削片。
53	削片	珪瑁	1.60	0.96	0.47	0.61		1方向	Ⅱ層		打面・先端部は切断。
54	削片	珪瑁	3.79	2.58	1.61	12.80		2方向	Ⅱ層		風化が顕著。
55	石核	チャート	3.64	3.00	1.72	16.28	基部		Ⅱ層		横皮が残存。小型調整面が一部所。
56	削片	チャート	1.68	2.05	0.30	1.20			Ⅱ層		調整削片。
57	削片	埴貫頁岩	1.74	1.39	0.26	0.65		1方向	Ⅱ層		打面は切断。
58	削片	埴貫頁岩	1.04	1.16	0.10	0.13			Ⅱ層		小型。打面は切断。
59	削片	黒色安山岩	2.65	1.84	0.40	1.95			Ⅱ層		風化が顕著。右半部は切断。
60	削片	黒色安山岩	1.93	1.05	0.30	0.65			Ⅱ層		小型。風化が顕著。打面・先端部は切断。

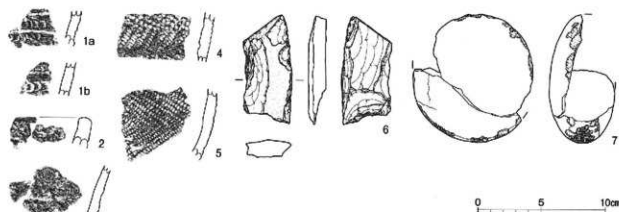
\*単位: cm. g ○内は残存値

## 第2節 縄文時代

## 1 竪穴住居跡

## 1号住居跡 (第242・243図)

位置 調査区の南東部、H9グリッドに所在する。規模と平面形 調査範囲や耕作痕による攪拌のため住居跡南端が不明瞭となる。[5.78以上]×3.86m。長方形。主軸方向 N-38°-W 壁 壁高は約12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床 硬化等は認められない。ピット 45基。P1~P6およびP7は主柱穴に想定される(深さ34~65cm)。そのうち、P1の掘り込みが非常に大きい。また、竪穴の壁際などに多数のピット(深さ10~40cm、平均21cm)が穿たれ、列状を呈するものも見出された。床下では北側に浅い掘り込みが散在する。B2区1号土坑が竪穴内に位置するが、その関係は不明である。炉 長径108cm、短径66cm、深さ8cmの長楕円形。さらに、P1脇でも被熱痕が見受けられた。覆土 黒褐色土や褐色土の1・

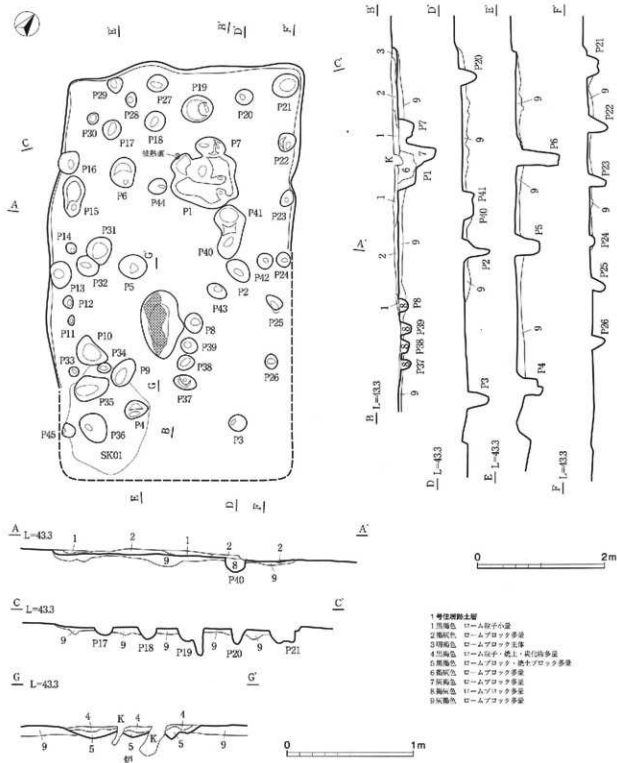


第242図 1号住居跡出土遺物

表113 1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口部 縁部 底面	特徴	土質	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	- -	口縁部片。平截竹管状工具の内面による横線の刻痕比喩。内面はミガキ。	繊維	不良	外: 暗黄・褐色 内: 明褐色	黒浜式
2	縄文土器 深鉢	- -	口縁部片。平截竹管状(RL)を横位断面。内面はナデ。	片岩・繊維	不良	外: 暗褐色 内: 暗褐色	床面出土 黒浜式
3	縄文土器 深鉢	- -	胴部片。縄文編文。内外両面に彫出荒れが著しい。	多量の石英、 繊維	不良	外: 褐色 内: 暗褐色	床面出土 黒浜式
4	縄文土器 深鉢	- -	胴部片。平截編文(RL・LR)を横位断面。内面はミガキで、磨削荒れが著しい。	繊維	不良	外: 暗褐色 内: におい黄褐色	黒浜式
5	縄文土器 深鉢	- -	胴部片。平截編文(RL・LR)を横位断面。内面はミガキ。	繊維	不良	外: 灰青褐色 内: 灰青褐色	黒浜式
6	石器 スクレイパー		薄皮を持つ割片の縁部(二説)に割離・微細網痕。石材: 片岩。長さ8.6cm・幅3.9cm・厚さ1.5cm・重さ56.6g。				南面出土 折損
7	石器 磨石・燧石		河石の自然産物を使用。表面面に横紋。縁部に磨行痕。腹筋により破砕。1/2欠損。石材: 砂岩。残存長10.2cm・残存幅9.5cm・残存厚5.1cm・重さ362.2g。				北面出土 組合

2層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする3層が堆積している。遺物 縄文時代前期中葉の土器片、石器が少量出土している。所見 住居の形態や他時期の混入が認められない遺物の検出状況から、縄文時代前期中葉黒浜式期の住居跡に比定される。



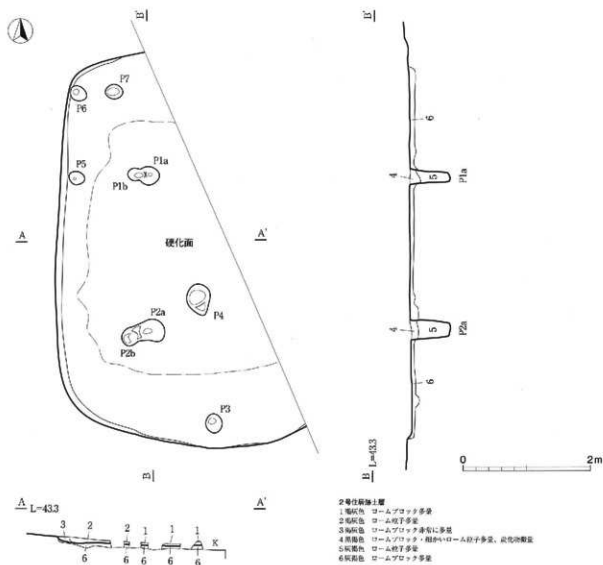
第243図 1号住居跡

## 第3節 弥生時代

## 1 竪穴住居跡

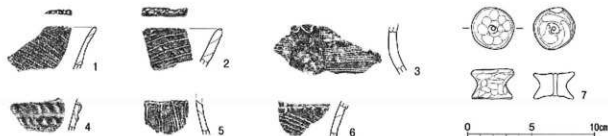
## 2号住居跡 (第244・245図)

位置 調査区の南東部、H9グリッドに所在する。規模と平面形 調査範囲や耕作痕による攪拌のため住居跡東側が不明瞭となる。[6.06以上]×[3.54以上]m。隅丸長方形。主軸方向  $N-0^\circ$ 。壁 壁高は約9cmで、傾斜して立ち上がる。床 支柱穴を囲む竪穴の中央が硬化する。ピット 9基。P1a・P1b・P2a・P2bは支柱穴に想定される(深さ60~67cm)。柱の付け替えが見受けられ、内側のP1a・P2a、外側のP1b・P2bが対応する。P1a・P1b、P2a・P2bはそれぞれ重複するが、耕作痕による攪拌のため新旧関係は観察できなかった。P3は出入り口ピットである(深さ36cm)。また、竪穴の中央やや南側にP4(深さ27cm)、北西壁に沿ってP5・P6・P7(深さ20~47cm)が認められる。炉 検出



第244図 2号住居跡

されなかった。耕作痕により削平されたものと考えられる。覆土 ロームブロックやローム粒子を含む褐灰色土の1・2層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする3層が堆積している。また、床面下の掘り方にはロームブロックを含む灰褐色土が認められた。遺物 弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、紡錘車(7)が検出されている。所見 住居の形態や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



第245図 2号住居跡出土遺物

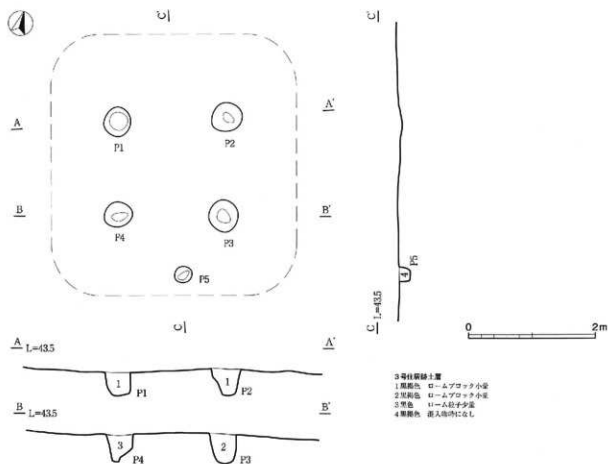
表114 2号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部輪縁不明の肩包条縄文(L・Z)。内面は横・斜位のナデ。外面はヒスス、内面ヒゴレ付着。	石英、肉閃石	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十五台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部附加条2輪縄文(R1+2R)を割断並文。口縁部河原の底体を横位並文。内面はナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：にぶい褐色	十五台式
3	弥生土器 壺	-	頸部4本条の縦位直線文→横位直線文ないし並文、スリット内に横位並文。内面は横・斜位のナデ。外面ヒスス付着。	多量の石英・白色粒、肉閃石、赤色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十五台式
4	弥生土器 壺	-	頸部附輪縁帯。4本条の横位直線文→縦位直線文。内面は横・斜位のナデ。外面ヒスス付着。5と同一個体か。外面ヒスス付着。	石英、肉閃石	良好	外：にぶい黄褐色 内：褐色	十五台式
5	弥生土器 壺	-	頸部附4本条の横位直線文→横位直線文。内面は横・斜位のナデ。外面ヒスス付着。4と同一個体か。外面ヒスス付着。	石英、肉閃石、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：褐色	十三台式
6	弥生土器 壺	-	頸部丸棒状1具によるキザミ隆帯(隆帯直下にも正転)。輪縁不明の附加条縄文(R・Z)。内面は横位のナデ。外面ヒスス付着。	多量の石英・白色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	
7	土製品 紡錘車	-	径3.3、高2.4、孔径0.3、重量23.50g。X字形。片切穿孔。表面はナデ・ヒゴレを調整。	石英、肉閃石、骨針、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	

### 3号住居跡 (第246図)

位置 調査区の中央やや南東側、G8・G9グリッドに所在する。規模と平面形 柱穴のみの確認で、不明である。主軸方向 N-16°-W。壁 削平されている。床 ほぼ削平されている。ピット 5基。P1~P4は主柱穴(深さ37~46cm)、P5は出入り口ピット(深さ19cm)に想定される。炉 検出されなかった。削平されたものと考えられる。覆土 柱穴の周りに褐灰色土が散在する。遺物 P2から弥生時代後期の土器片が1点出土した。所見 柱穴配置や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。





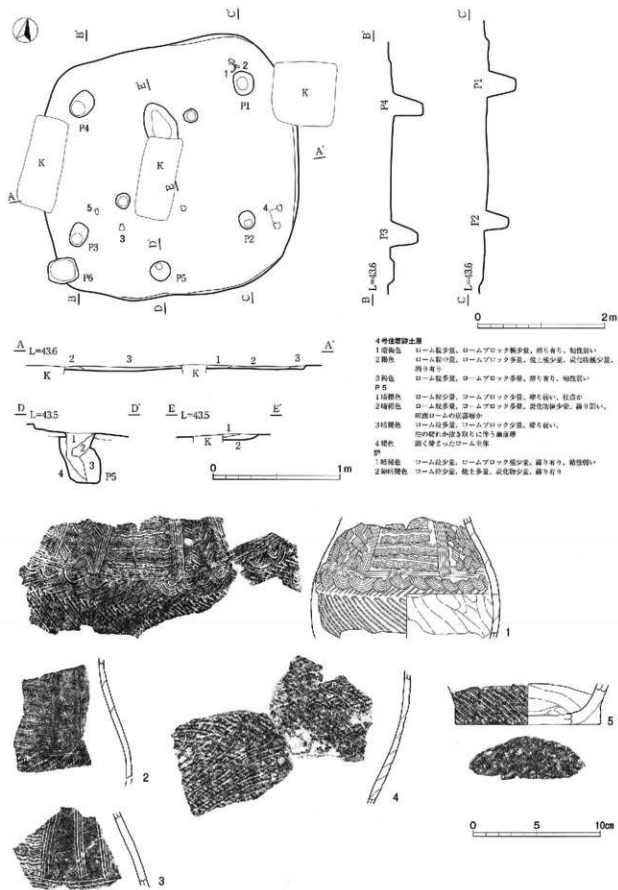
第246図 3号住居跡

## 4号住居跡 (第247図)

位置 B2区北部、F8・G8グリッドにある。規模と平面形 4.08 × 4.00 mの隅丸方形。主軸方向 N-11°-W 壁 壁高は約10cm、外傾気味に立ち上がる。床 床面全体に硬化している。ピット 6箇所。P1~P4は主柱穴と考えられる。P5は出入り口ピット、P6は深さ6cmの浅いピットである。炉 住居中央北寄りに位置し、縦長の楕円形になるものと思われる。攪乱穴によって南側を壊されている。覆土 暗褐色土を主体にした自然堆積層である。遺物 覆土下層から弥生時代後期の壺底部・底部片が出土している。所見 弥生時代後期の住居と考えられる。

表115 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼度	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	頸部軸理不明の附加糸理文 (R・S・L・Z:熟り戻し気味)→頸部第6本線の横位区直線文 (時計回り)→上肩の連続文 (反時計回り)、頸部2条一単位の縦位区直線文→横位区直線文 (上→下)、腹径部次文 (上→上、左→右)、一部縦位区直線文→頸部横位区直線文 (横位区直線文の短分あり)、内面は腹部斜位のナデ→腹部横位のナデ、外面に頸部2ヶ所、内面にも外面と対応する位置に深い黒線2ヶ所。	石英、角閃石、多量の金雲母・白色粒	良好	にぶい黄褐色	土王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部軸理不明の附加糸理文 (R・S)→頸部第7本線の横位区直線文→頸部縦位区直線文→横位区直線文 (上→下)、内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ゴレ付着。	多量の石英・白色粒、角閃石、骨針	普通	にぶい黄褐色	土王台式



- 4号住居跡層**
- 1 褐色色 ローム粒少量、ロームブロック少量、礫あり、粘土質
  - 2 褐色色 ローム粒少量、ロームブロック少量、礫少量、炭化植物少量、礫あり
  - 3 褐色色 ローム粒少量、ロームブロック少量、礫あり、粘土質
  - 4 褐色色 ローム粒少量、ロームブロック少量、礫あり、粘土質
  - 5 褐色色 ローム粒少量、ロームブロック少量、礫あり、粘土質
  - 6 褐色色 ローム粒少量、ロームブロック少量、礫あり、粘土質

第247図 4号住居跡・出土遺物

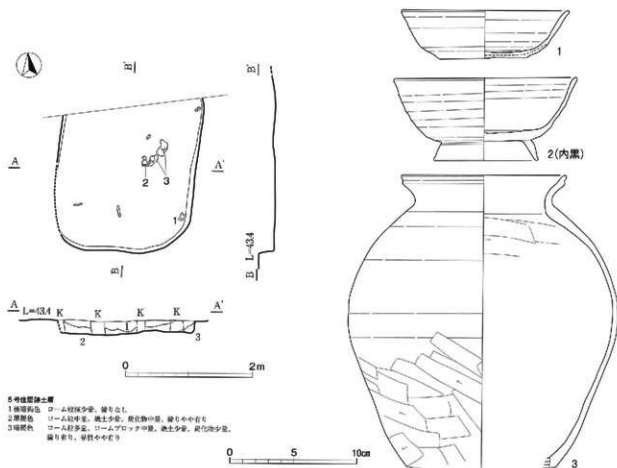
図版番号	類別	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 壺	- - -	頸部5本の縦位置直線文→頸部3条・単位の縦位置横文→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス。内面全体コゲ付着。	多量の石灰・長石	普通	外：にぶい黄色 内：黒褐色	十王台式
4	弥生土器 甕	- - -	頸部附加条2條横文（R・L+2R・L+L：下→上）※。内面は縦・斜位のナデ。	石灰、金雲母、骨粉、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - (11.4)	頸部附加条1條横文（R・L+2L）。底部布目痕（黒線ナデ消し）。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石灰、肉内石、骨粉、赤色粒、多量の白色粒	良好	外：にぶい黄色 内：にぶい黄褐色	

## 第4節 奈良・平安時代

### 1 竪穴住居跡

#### 5号住居跡（第248図）

位置 B2区北部、G7・G8グリッドにある。規模と平面形 2.18×2.30m以上の縦に長い隅丸長方形。主軸方向 N-16°-E 壁 壁高は約24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体にやや硬化している。ピット - カマド - 覆土 床上を全体に暗褐色土を主体とした2枚の層が被覆している。遺物 住居中央部やや東寄りの床面から土師器の壺と酸化焰焼成の須恵器甕が、南東部の床面から土師器壺が出土している。所見 出土遺物から平安時代10世紀以降の住居跡と考えられる。



5号住居跡出土物

- 1 横線陶色 コーム粒跡少量、線りなし。  
2 横線陶色 コーム粒中量、焼土少量、横位波状中量、線りやや中右有。  
3 横線陶色 コーム粒少量、コームプロット中量、焼土少量、炭化物少量、線り有り、線りやや中右有。

第248図 5号住居跡・出土遺物

表116 5号住居跡出土遺物観察表

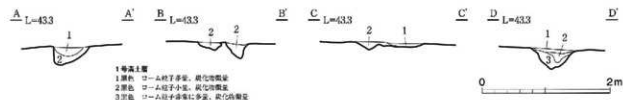
調査番号	種類	口径 器高 底径	特徴	胎土	施成	色澤	備考
1	土師器 杯	132 3.8 6.6	底部回転へう切り痕し、ロケ右肩転。体部内外面ロケロナデ、酸化部と黒化部があり、二次焼結を受けているか。	石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色(酸化部分)	70%
2	土師器 碗	144 6.6 8.1	体部内外面ロケロナデ。外面にぶい褐色内面黒化。	石英、角閃石	普通	にぶい褐色	80%
3	須恵器 突	(129) (232) (117)	口縁部外面斜め方向積み上げ、胴部外面ロケロナデ。胴部下半部へウケズリ。	長石、石英	良好	暗褐色	80%

## 第5節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物

## 1 溝

## 1号溝(第7・249図)

位置 調査区の南東部、H8・H9グリッドに所在する。規模と形態 調査範囲や耕作痕による攪拌のため部分的に不明瞭となる。南北に走向し、南側が屈曲する。幅36~160cm、深さ2~27cm。主軸方向 N-3~58°-W ビット 19基。性格は不明で、溝と同様の覆土が埋没する。(深さ5~50cm、平均25cm)。覆土 ローム粒子や炭化物を含む黒色土が堆積している。遺物 縄文時代前期前半や弥生時代後期の土器片が僅少出土した。所見 所産時期は不明である。流水の痕跡が認められないことから、区画等を目的とした溝と考えられよう。



第249図 1号溝

## 2 土坑・ピット(第7・250図)

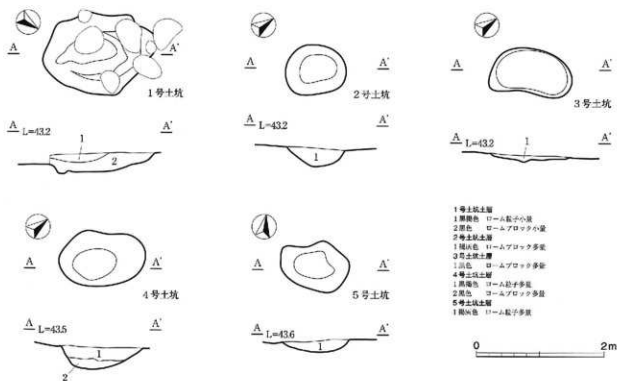
調査区内から5基の土坑が確認された(表117参照)。平面は楕円形ないし不整形楕円形、断面形は逆台形状・弧状等で一定しない。覆土は黒・黒褐色土(1・3・4号土坑)や褐灰色土(2・5号土坑)で、ロームブロックやローム粒子を含む。遺物はほとんど出土せず、時期判断が難しい。1号土坑は1号住居跡と重複するが、攪拌のため新旧関係は観察できなかった。5号土坑には根跡が多く、植栽の可能性がある。

ピットは64基確認された(P1~66、P9・10は欠番)。調査区北東部および南西部に集中するが、有意な配列等は認められなかった。平面は円形ないし楕円形を呈し、深さは一定しない(深さ14~85cm、平均35cm)。覆土はロームブロック

表117 B2区土坑一覧表

遺構名	位置	平面形状	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
1号土坑	H9	不整形円形	163	130	30	1位と重複
2号土坑	H9	楕円形	94	80	30	
3号土坑	H9	不整形円形	130	70	10	
4号土坑	G9	不整形円形	134	87	34	
5号土坑	G8	不整形円形	110	78	19	

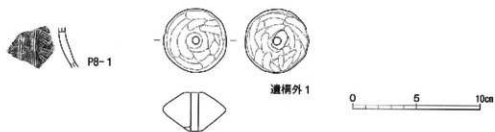
クを少量含む黒褐色土、ロームブロックを多量含む灰褐色土、ローム粒子を少量含む灰褐色土等である。遺物はほとんど出土せず、時期判断が難しい。P 8で弥生時代後期の土器片が出土した(第251図)。



第250図 1号～5号土坑

3 遺構外出土遺物(第251図)

1は無文の土製紡錘車で、ナデによって表裏面が調整されている。



第251図 ビット・遺構外出土遺物

表118 ビット・遺構外出土遺物観察表

図版番号	類別器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
P 8 1	弥生土器 釜	- - -	頸部2条一単位・3本歯の縦位瓦楞文→横位波状文。内 頂は横・斜位のナデ。外歯スス付着。	石英	普通	外：陶質黄色 内：じぶい黄褐色	十王台式
遺構外 1	土製品 紡錘車	- - -	径5.0、高3.1、孔径0.6、重量[59.52]g。片側穿孔。表 裏面ナデ調整。表面質越よる非色化。	多量の石英	普通	黒褐色	表土出土

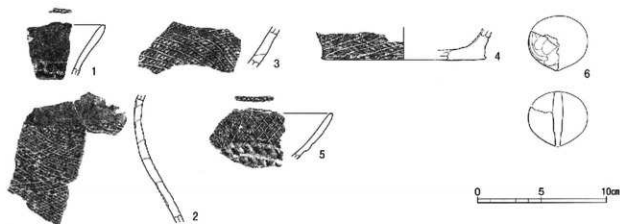
## 第Ⅶ章 B3区の遺構と遺物

## 第1節 弥生時代

## 1 竪穴住居跡

## 1号住居跡 (第252・253図)

位置 調査区の北西部、H11・H12グリッドに所在する。規模と平面形 削平のため住居跡西側が不明瞭となる。[5.94以上]×[3.74以上]m。隅丸長方形。主軸方向 N-29°-W 壁 壁高は約7.5cmで、やや傾斜して立ち上がる。床 硬化等は認められない。ピット 11基。P1~P8は支柱穴に想定される。柱の付け替えが見受けられ、内側のP1~P4(深さ55~67cm)、外側のP5~P8(深さ27~52cm)が対応する。P1に伴う浅い掘り込みは柱の抜き取り痕に推察されよう。P9・P10は出入り口ピットで、支柱穴の付け替えに対応する(深さ31・26cm)。P11は貯蔵穴の可能性もあるが、本遺構に伴うものか不

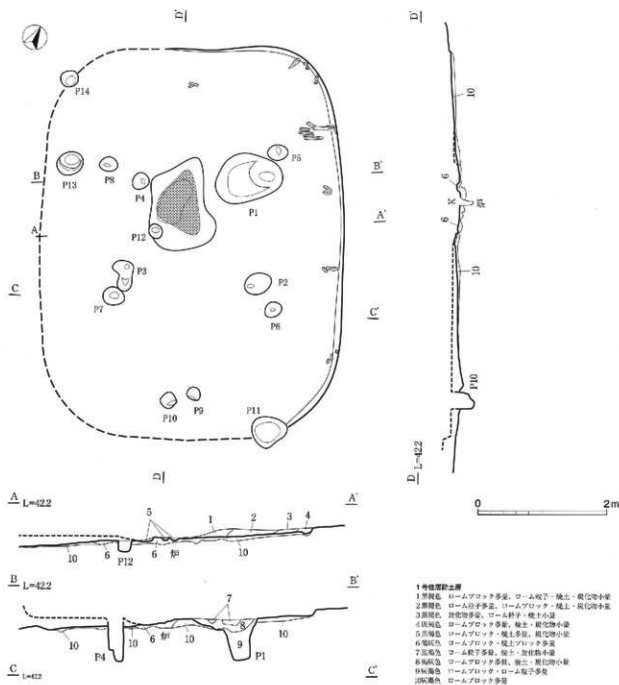


第252図 1号住居跡出土遺物

表119 1号住居跡出土遺物観察表

図録番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	- - -	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。 頸部孔部のある深い押捺痕帯。内面は横位のナデ。外面 全身に濃いス付着。	多量の石英・白色 粒、角閃石	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十玉台式
2	弥生土器 甕	- - -	頸部無文帯(横・斜位のナデ)。腹部附加条1縦縄文(R L+2L、LR+2R;下→上)。内面は頸部が横・斜位 のナデ、胴部が縦・斜位のナデ。	石英	良好	褐色	
3	弥生土器 甕	- - -	頸部附加条2縦縄文(L+L、R+R;下→上)。内面は 横位のナデ。外面ス付着・炭化による赤色化、内面口 ゴレ付着。	多量の石英、角閃 石、金雲母	良好	外：にぶい黄褐色 内：灰青褐色	腰り方 十玉台式
4	弥生土器 甕	- - (130)	頸部附加条2縦縄文(R+R)。底部砂痕。内面は副溝。	石英、長石、角閃 石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十玉台式
5	弥生土器 甕坏	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部深い押捺痕帯 →4本歯の山形文(右→左)・へう縮き斜格子文(左上が り→上上がり)→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、赤 色粒	普通	淡黄色	十玉台式
6	土製品 紡錘車	- -	径(4.6)、高(4.3)、孔径(0.6)、重(21.72)g。両側穿孔。ナ デ穴調整。	石英、長石、多量 の白色粒	普通	にぶい黄色	

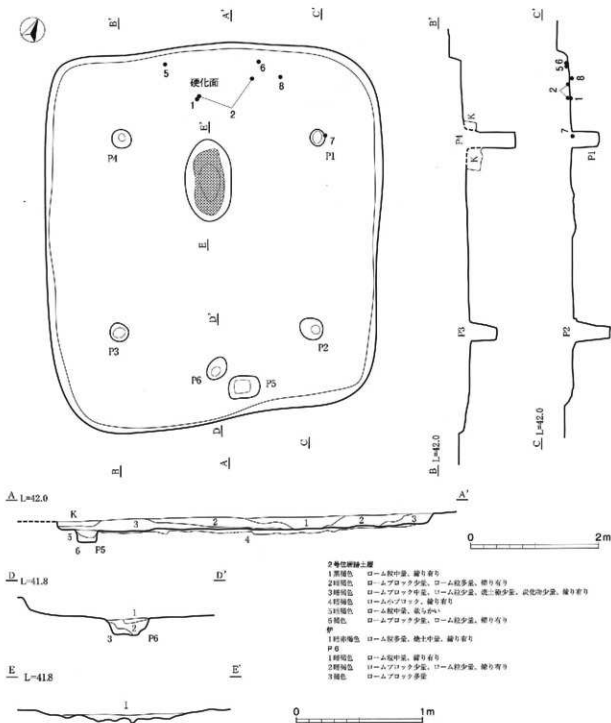
明である(深さ10cm)。 炉 長径141cm、短径96cm、深さ5cmの不整形。掘り方を有する。 覆土 ロームブロック・ローム粒子・焼土・炭化物を含む黒褐色土の1～3層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする4層が堆積している。また、床面下の掘り方にはロームブロックを含む灰褐色土が認められた。 遺物 弥生時代後期の上器片が少量出土した。また、球状の紡錘車(6)が検出されている。東壁際には炭化材や焼土塊が放射状に並ぶ。 所見 住居の形態や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



第253図 1号住居跡

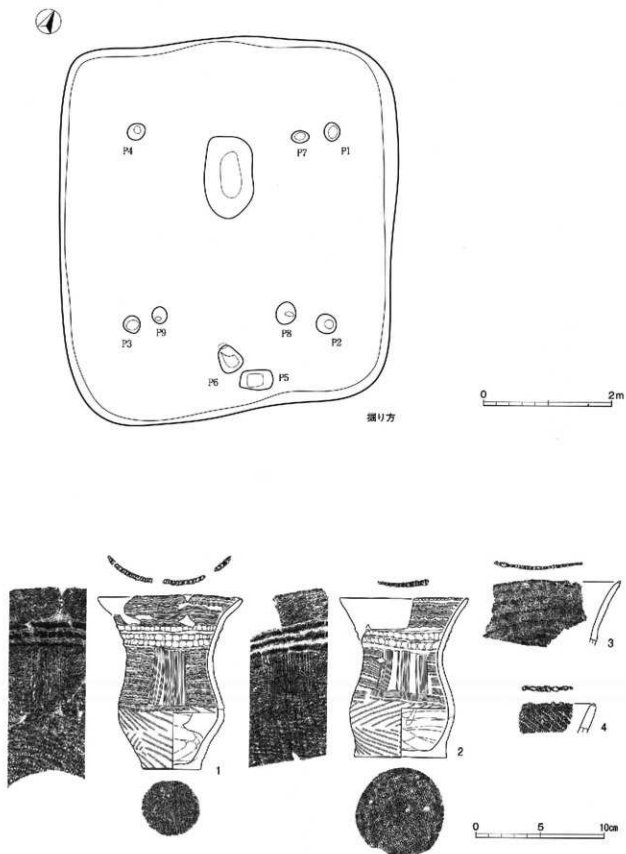
2号住居跡 (第254~256図)

位置 B3区北部、I12グリッドにある。規模と平面形 5.88 × 5.27 mの縦長長方形。主軸方向 N - 25° - W 壁 壁高20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部を中心に全体によく硬化している。ピット 6箇所。P1~4は主柱穴。P6は炉の対面の壁寄りになり、出入り口ピットと考えられる。P5は方形基調で深さ13cm、出入り口ピットと関連のある位置にある。床下掘り方で、P7~9が確認され



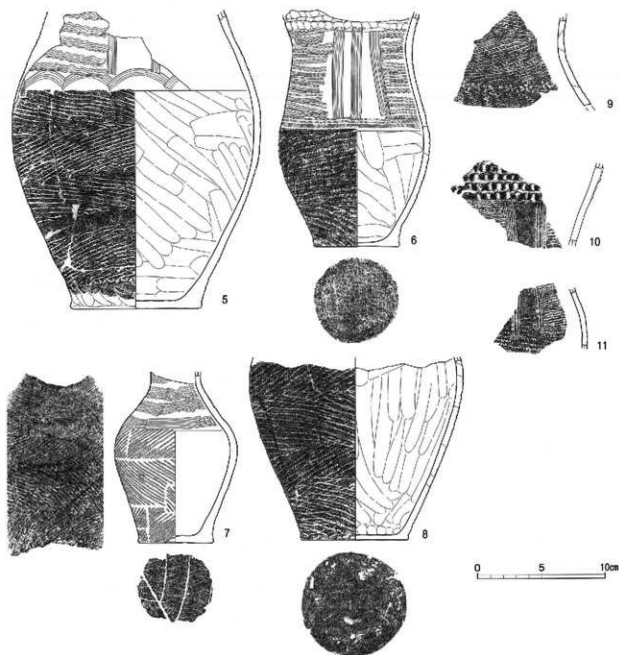
第254図 2号住居跡





第255図 2号住居跡掘り方・出土遺物①

た。深さは48～64cmあり、古い段階の柱穴と考えられる。 炉 長径120cm、短径72cmの楕円形で深さ4cm。 覆土 最上層は黒褐色の自然堆積層、下層の暗褐色土はロームブロックや遺物が多く混じっている。 遺物 6や8の壺は底部下端が床に接地し転倒した状態で、7の壺はP1の覆土上層中から出土している。出土遺物は多く、大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とし、那珂川流域(1・2・6)および久慈川流域(5・10)の特徴を有する土器がそれぞれ確認できる。7は二軒屋式の細頸壺である。 所見出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第256図 2号住居跡出土遺物②

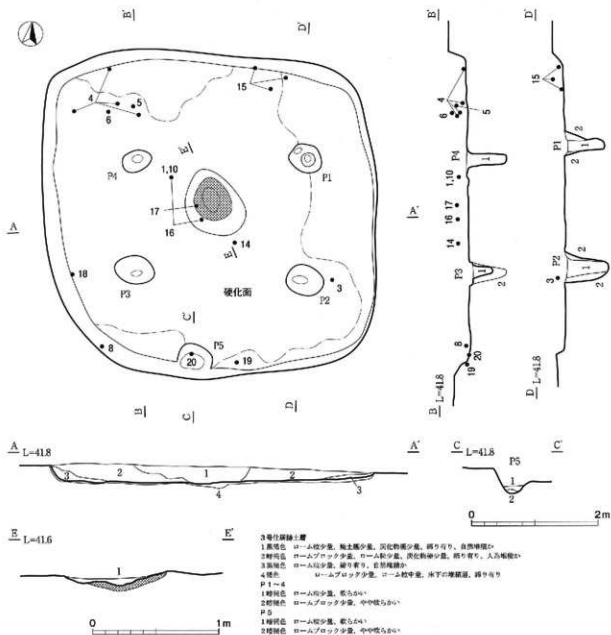
表 120 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(114) 139 46	胴部斜線帯3条→口縁部6本曲の横位波状文(ト→上、時計回り)。胴部輪帯不明の附加条文(L・S・L・Z:ト→上)。反時計回り)→胴部5条位波状文→胴部3条1単位の縦位直線文3単位→横位波状文(ト→上)。底部布目文(器底部分ナシ)。内面は口縁→胴部縦・斜位のナゲ、胴部中心横位のナゲ、胴部2位斜位のナゲ。外口縁→胴部まばらにスス、内面胴部中心位より下にヨグレ付着。口縁部付着は濃いヨグレ。	多量の石灰、角閃石、赤内粒	普通	外:灰黄色 内:灰黄色	十王台式
2	弥生土器 壺	(101) 127 73	口縁部ヘタキズミ、小突起、胴部輪帯不明の附加条文(R・S・L・Z:ト→上)→胴部斜線帯、胴部5本曲の横位区画波状文→口縁部斜位波状文(ト→上)、胴部3条1単位の縦位直線文3単位→横位波状文(ト→上)。内面は口縁→胴部のナゲ。底部布目文(器底部分ナシ)。外口縁→胴部まばらにスス、内面胴部中心位より下にまばらなヨグレ付着。	石灰、角閃石	普通	灰青色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	口縁部ヘタキズミ、小突起、口縁部7本曲の横位波状文(ト→上)。胴部5本の直線文(反時計回り)。胴部中心横位のナゲ、口縁部縦・横位のナゲ。外周全体にスス付着。	石灰	良好	外:黒褐色 内:灰黄色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	口縁部頸上突起部によるキズミ、横位のナゲ。口縁部輪帯不明の附加条文(L・Z)。内面は横位のナゲ。	多量の石灰、長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい褐色	
5	弥生土器 壺	- - 104	胴部附加条2横線文(R+2Rか)、輪帯不明の附加条文(L・Z)をト→上→施文。胴部斜位斜位のナゲ→胴部4本曲の直線文3単位(反時計回り)→胴部2条1単位の縦位直線文→横位波状文、角閃石粒。内面は胴部斜位のナゲ、底部付着横位のナゲ。外周胴部上位より上に濃いスス付着。内面胴部上位より下に器底の薄いヨグレ、その下に濃いヨグレ付着。	多量の石灰・金雲石・色粒、角閃石	良好	にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - 66	胴部輪帯不明の附加条文(R・S・L・Z:ト→上)→胴部斜線帯、胴部5本曲の横位区画波状文→胴部3条1単位の縦位直線文3単位→横位波状文8-9条(ト→上)。底部布目文。内面は縦・斜位のナゲ。外周全体にまばらなススとスス付着。底径部にはスス、内面胴部上位より上にヨグレ付着。	石灰、チャート、角閃石、多量の白色色粒、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - 60	胴部附加条1横線文(R+2L、L+2R:ト→上)、反時計回り)→胴部7本曲の2-3連位の横位波状文(時計回り、ゆがみあり)→胴部横位波状文(反時計回り)。胴部文の工具痕跡は横位、縦位本位の。内面は縦・横・横位のナゲ。以下は消滅。外周まばらにスス付着。	多量の石灰・長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰黄色	二軒屋式
8	弥生土器 壺	- - 184	胴部輪帯不明の附加条文(R・S)→附加条2横線文(L+2Lか、反時計回り)→胴部6本曲の横位区画波状文。底部布目文(器底部分ナシ)。内面は縦・斜位のナゲ。外周まばらにスス付着。底径による赤色化。内面全体に濃いヨグレ付着。	石灰、多量の白色色粒	良好	灰黄色	十王台式
9	弥生土器 壺	- - -	胴→胴部7位の1横線文(L+2R、R+2L:ト→上)。内面は縦・斜位のナゲ。外周スス、内面ヨグレ付着。	石灰、長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰黄色	
10	弥生土器 壺	- - -	口縁部斜線帯→胴部4本曲の縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナゲ。	石灰、金雲石	良好	外:にぶい黄褐色 内:浅黄色	十王台式
11	弥生土器 壺	- - -	胴部輪帯不明の附加条文(L・Z)。胴部4本曲の縦位直線文→横位波状文(ト→上)。内面は縦位のナゲ。外周スス、内面ヨグレ付着。	石灰	普通	灰黄色	十王台式

## 3号住居跡(第257~260図)

位置 B3区北部、I11・I12グリッドにある。規模と平面形 5.23×5.20mの方形。主軸方向 N-28°-W 壁 壁高24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 西壁側に寄った住居の3分の1の範囲を除いて硬化している。ピット 5箇所。P1~4は主柱穴。P5は南壁際に位置し、壁に向かって外傾しており出入り口ピットと考えられる。炉 長径75cm、短径62cmの楕円形で深さ10cm。覆土 床を被覆する2層はロームブロックを均質に含んでいる。遺物 住居北東隅から中央部にかけての覆土から土の破片が出土している。確認された住居跡の中では出土遺物が最も多く、略定形個体・大破片の割合が高い。十王台式前半期を主体とするが、施工方法等が一般的なものと異なる個体が多い。4は十王台式の頭部文様の一

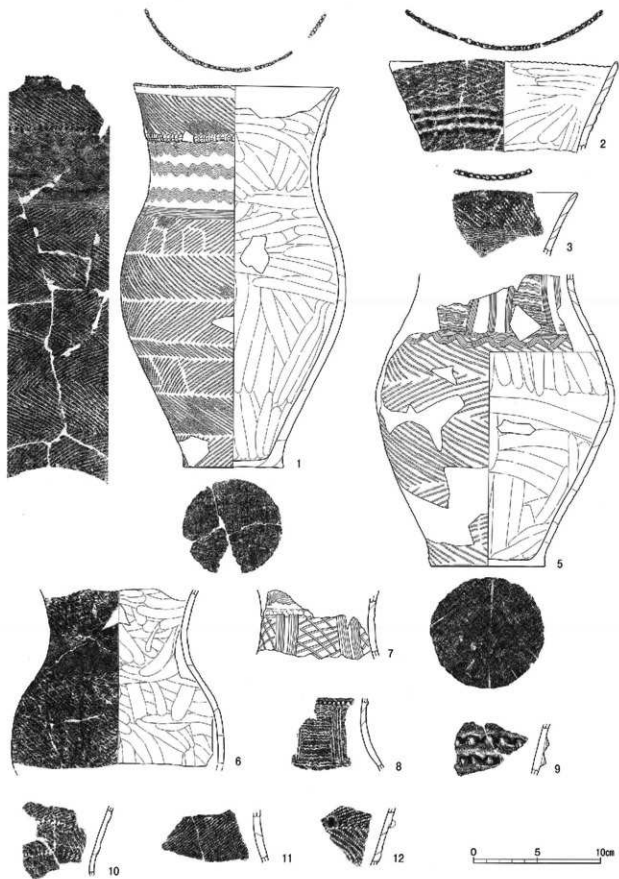
部に廢状文が用いられている。二軒屋式土器の出土量も多く、1・10～12・14が該当する。 所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



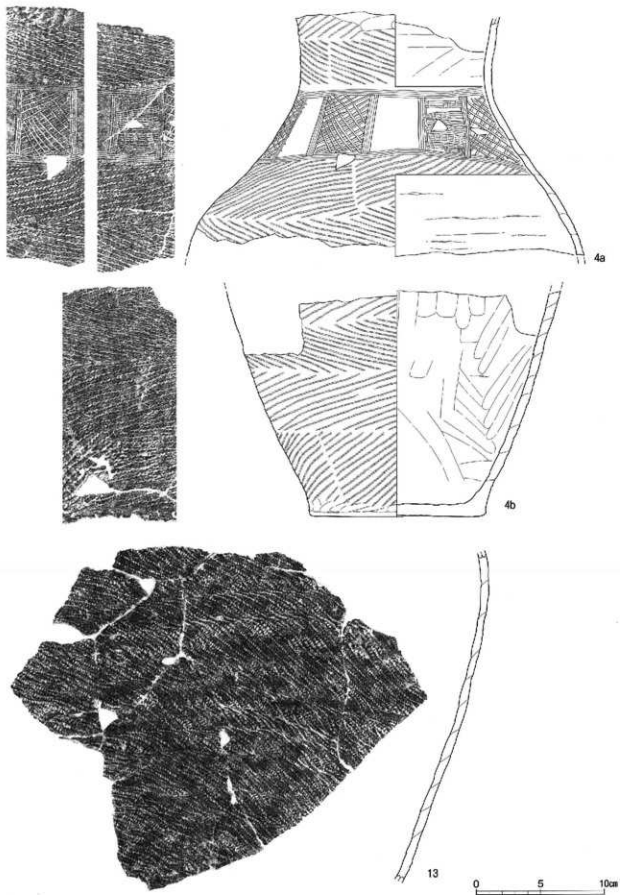
第257図 3号住居跡

表121 3号住居跡出土遺物観察表

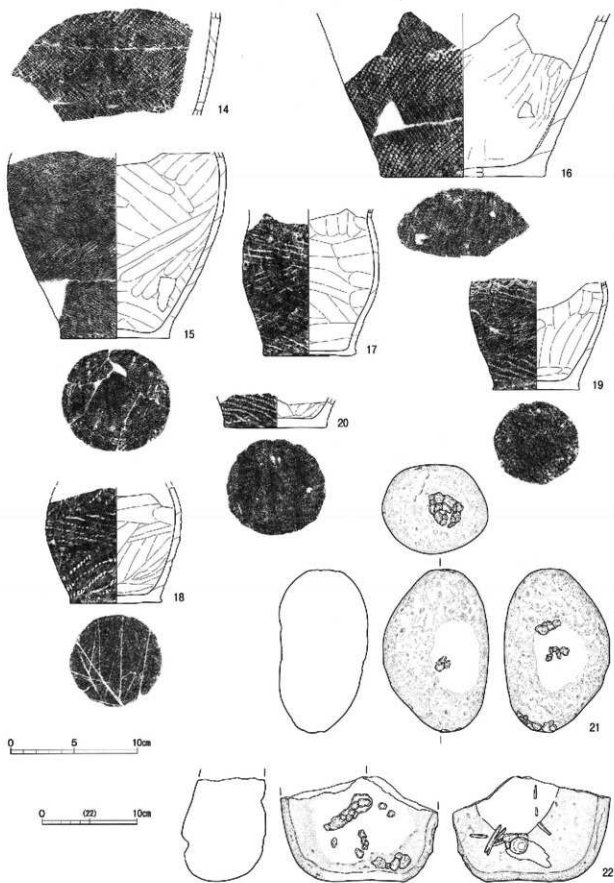
図版番号	種別 器種	口縁 筋高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	160 305 78	口縁部純文車体によるキザミカ、口縁部附加糸1 輪純文(R・L+2L)→口唇部付込横位のナデ、口縁部下残純文原形(実部L)によるキザミ、唇縁部追加1 輪純文(R・L+2L、L・R+2R)下→上、反局對稱リ→裏割穿7本筋の横位区画前縦文→唇縁部付込横文、底部有目筋(胎土付着)、内面は胴部中へ下笠履・斜位のナデ→口縁→頸部上位置・斜位のナデ、外面実面西へ半分ミス、内面は外側ミスと対応する位置に深いコグレ、底は金剛コグレ付着。	多量の石英・長石、赤色粒	良好	外：にぶい黄褐色内：黒色(コグレ)	二軒形式



第258圖 3号住居跡出土遺物①



第259図 3号住居跡出土遺物②



第260图 3号住居跡出土遺物③

図面番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
2	弥生土器 壺	(IR.0)	口縁部縄文彫刻によるキザミ。口縁部軸線不明の附加糸縄文(R・S・L・Z:上→下)。腹部深い押捺造形3条+地味不明の附加糸縄文(R・S)。内面は横・斜位のナガ。底面直れ・直溝。	石灰、長石、チャート、角閃石、骨針	普通	黄褐色	
3	弥生土器 壺	-	口縁部縄文彫刻(無印L・x)によるキザミ。口縁部附加糸1線縄文(R・L+2L)→頸部5平面的位直線文ないし斜位文→頸部直線文→横位直線文(下→上)。内面は斜位のナガ。外面全体スス付着。	石灰、角閃石、金 赤鉄、赤色粒	良好	外:灰黄褐色 内:褐色	1王台式
4	弥生土器 壺	139	口縁部・頸部軸線不明の附加糸縄文(R・S・R・Z:下→上)→頸部上段位のナガ。口縁部・頸部界4本条の横位直線文→頸部2条+単位の横位直線文(無印部5単位。文厚約7単位)→へつ抜き斜子文(右上がり→下上がり)。頸部は縦・横位のナガ(上→下、右→左)。一部横位直線文(宮崎)→斜位文→縦位直線文(右側)の部分あり。頸部下段横・斜位のナガ。底部斜位。内面は縦形横・斜位のナガ。頸部下段横・斜位のナガ。他は消悉。外面まばらにスス。頸部2所に対向する黒点。土障破断面黒色化。	多量の石英・長石、 角閃石	良好	外:ぶい黄褐色 内:明赤褐色	
5	弥生土器 壺	90	頸部附加糸1線縄文(R・L-2L)。軸線不明の附加糸縄文(R・S:下→上)→5本条+3条 単位の縦位直線文→頸部界横位直線文(一部縦位と横位の文厚直線文厚不平等)→後状文に浅い上開きの造形文。底部有目釘+木条直。内面は縦・横位ナガ。斜位のナガ。頸部上平位横位のナガ。外面頸部1段に管状のスス。底面付着・底面凹縁は焼熱による赤色化。内面は頸部中→下位にコゲ付着。	石灰、角閃石、多量 の白色粒	普通	外:ぶい黄褐色 内:ぶい黄褐色	1王台式
6	弥生土器 壺	-	頸部無文帯(丁字架、斜位のナガ)。頸・頸部附加糸3線縄文(L・L+1L)・x。内面は縦位・斜位のナガ→頸部横・斜位のナガ。外面頸部に集中してスス付着。内面全体にヨロシ付着。	石灰、骨針	普通	外:灰黄色 内:黒褐色	
7	弥生土器 壺	-	頸部取り出しの押捺造形1条(有段)。口縁部5本条の縦位直線文→後状文。頸部2条。底位の縦位直線文→へつ抜きと柱状工具による管状ナガ(右上がり→左上がり)。内面は縦位のナガ。外面全体スス付着。	石灰、多量の白色 粒	良好	外:灰黄褐色 内:褐色	1王台式
8	弥生土器 壺	-	頸部付着加工具による斜位線部。頸部界4本条の横位直線文→後状文→斜位直線文。頸部附加糸縄文。内面は縦・斜位のナガ。外面スス付着。	石灰、多量の白色 粒	普通	外:灰黄褐色 内:黄褐色	1王台式
9	弥生土器 壺	-	頸部ない押捺造形2条。内面は横位のナガ。	石灰、多量の白色 粒	普通	ぶい黄褐色	
10	弥生土器 壺	-	頸部軸線不明の附加糸縄文(R・S・L・Z)。口縁部下段文厚体の彫刻によるキザミ(無印R)。頸部4本条以上のア開き彫刻文ないし横位直線文。内面は縦・斜位のナガ。	多量の石灰・長石	不良	外:褐色 内:明黄褐色	2二段式
11	弥生土器 壺	-	頸部無文(無印のナガ)。頸部附加糸1線縄文(L・R+2R)。内面は頸部横位のナガ。頸部横位のナガ。外面スス付着。	石灰、白色粒	普通	ぶい黄褐色	T3
12	弥生土器 壺	-	頸部軸線不明の附加糸縄文(R・S・L・Z)→口縁部下段縄文厚体高部(無印R)を斜接。前面山形の突起。内面は縦・斜位のナガ。外面スス付着。	石灰、長石	良好	ぶい褐色	2二段式
13	弥生土器 壺	-	頸部附加糸2線縄文(L+L:1→下)で非貫孔状成。内面は斜位のナガ。器面直れ・直溝。	石灰、角閃石、多量 の白色粒	普通	ぶい黄褐色	
14	弥生土器 壺	-	頸部附加糸1線縄文(R・L+2R・L・R+2L:下→上)。内面は横位のナガ。外面スス、黒点。	多量の石灰・白色 粒	良好	外:ぶい黄褐色 内:褐色	2二段式
15	弥生土器 壺	87	頸部附加糸1線縄文(R+R・L+L)。底部有目釘。管状ナガ。内面は斜位のナガ。外面頸部上平に塗いスス。内面全体にヨロシ付着。	石灰、長石、骨針	普通	外:ぶい褐色 内:ぶい赤褐色	
16	弥生土器 壺	(130)	頸部無文帯(L・L・L・R:上→下)を横位直線文。底部有目釘。内面は斜位のナガ。直溝。	石灰、角閃石、赤 色鉄、多量の白色 粒	良好	外:ぶい黄褐色 内:ぶい黄褐色	
17	弥生土器 壺	74	頸部軸線不明の附加糸縄文(R・S・L・Z:上→下)。底部有目釘。内面は縦・斜位のナガ。外面全体スス。焼熱による顔面点の赤色化。	石灰、長石、金 赤鉄、多量の白色 粒	普通	外:黒褐色 内:ぶい黄褐色	1王台式
18	弥生土器 壺	74	頸部軸線不明の附加糸縄文(R・S・R・Z)。底部有目釘。内面は縦・斜位のナガ。外面スス付着。頸部下段横位による赤色化。	石灰、多量の骨針	普通	外:ぶい黄褐色 内:ぶい黄褐色	1王台式
19	弥生土器 壺	68	頸部軸線不明の附加糸縄文(R・S・L・Z:下→上)→頸部界3本条の横位直線文(上→下)。底部有目釘。内面は縦・斜位のナガ。外面まばらに焼熱による赤色化。スス付着(底面付着、底面凹縁)。内面頸部1平にヨロシ付着。	石灰	良好	外:灰黄褐色 内:ぶい黄褐色	



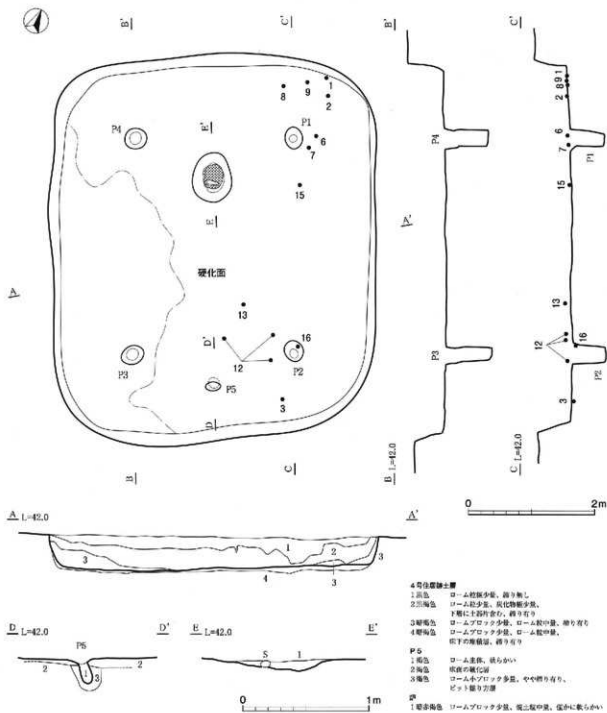
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
20	弥生土器 壺	— — 80	胴部輪溝不明の附加条溝文(L・Z)。底部有耳取。内・石灰、黄閃石	良好		外:黄褐色 内:黄褐色	
21	打鉢 磨石碗		表面(鼓→盪)表面(磨→脱)。自然産の表・裏面に磨耗痕や滑り痕。上・下腹部に打痕。石材:石英安山岩。長さ12.8cm・幅8.5cm・厚さ7.0cm・重さ1042.1g。				
22	石部 内石		欠損品。大型燧石の表・裏面が下腹面に残る磨耗痕。磨耗痕間は磨跡状に淡く着色。表・裏面の一部に紋付痕とみられる凹欠。前面に浅い溝状の痕。石材:砂岩。残存長11.0cm・残存幅16.6cm・厚さ8.85cm・重さ2385.9g。				

## 4号住居跡(第261~264図)

位置 B3区中央部、I12グリッドにある。規模と平面形 5.10 × 6.00 mの縦長長方形。主軸方向 N-27°-W 壁 壁高42cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化しているが、東側のやや北寄りの範囲と北壁の西寄りの範囲がやや軟質である。ピット 5箇所。P1~4は主柱穴。P5は南壁寄りにあり、外傾しており出入り口ピットと考えられる。炉 長径75cm、短径62cmの楕円形で深さ10cm。灰石を持つ。覆土 床面を覆う黒褐色土の2層は下層に土器を含んでいる。遺物 壺を主体とする土器類は住居跡北東隅とP2付近の床から出土している。北東隅の壺は完形品が多い。16の管玉はP2覆土上層から出土している。出土遺物は非常に多く、ほぼ完形個体・人破片の割合が高い。十玉台式後半期を主体とし、二軒屋式(9・11)も少量出土している。15は土製の紡績車、16は片割に段を有する緑色凝灰岩製の管玉である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

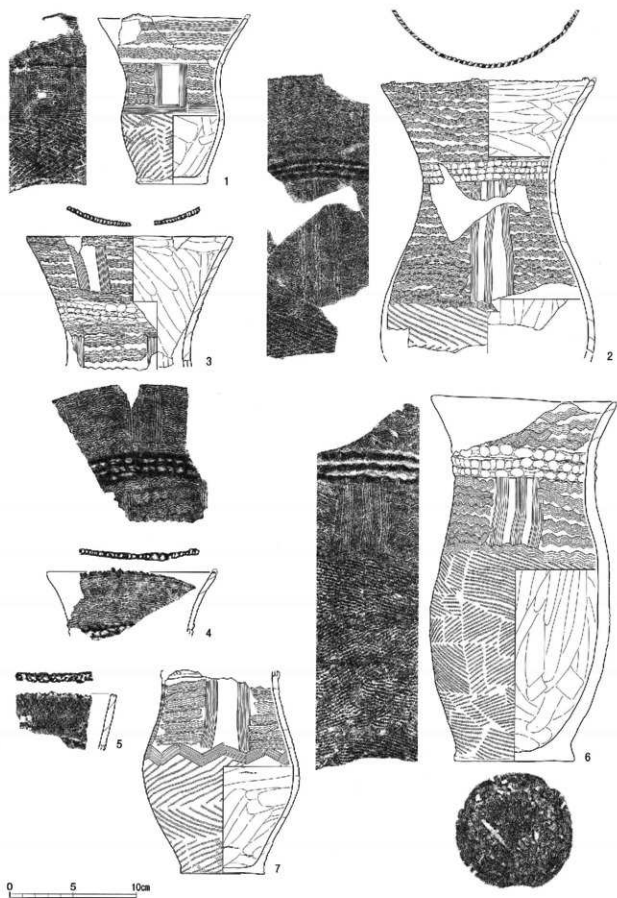
表122 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(120)	口部小突起、口部耳取、胴部輪溝不明の附加条溝文(R・L+2r・LR+21+上→下)→口部部5本歯の縦波状文(時計回り)3条、胴部耳取位区間条溝文→胴部2条一単位の縦波状文4単位→縦波状文(下→上)3~4条。底部砂岩。内面は縦・斜位のナテ。外面スス、内口まばらにヨゴレ付着。	石英、長石、金閃石	普通	外:褐色 内:黄褐色	十玉台式
		135 (56)	口部部へラキザミ、小突起鑑定4単位。胴部盛り出しの押捺所帯3条、胴部輪溝不明の附加条溝文(R・S、L・Z、下→上)→胴部5本歯・3条一単位の縦波状文3単位→口部部縦波状文(上→下、反時計回り)。胴部耳取位区間条溝文→胴部縦波状文(上→下、左→右)。内面は胴部上段縦位のナテ→胴部縦位のナテ→口部部縦・斜位のナテ(全体的に)等に仕上げられる。外面はほぼ全体に薄いヨゴレ。内面はほぼ全体に薄いヨゴレ。胴部中段は薄いヨゴレ。	石英	良好	外:褐色 内:黄褐色	十玉台式
2	弥生土器 壺	(167)					
3	弥生土器 壺	(156)	口部部丸棒状下具によるキザミ。胴部深い押捺所帯3条→口部・胴部5本歯・2条一単位の縦波状文→縦波状文(下→上)。内面は胴部縦位のナテ→口部部縦波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナテ。外面全体にスス付着。	石英、長石、黄閃石、多量の白色炭	良好	外:黄褐色 内:黄褐色	1層出土 十玉台式
		(133)	口部部へラキザミ、小突起。口部部4本歯の縦波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナテ。外面全体にスス付着。	石英、長石、内閃石	良好	外:褐色 内:黄褐色	1層出土
4	弥生土器 壺	—	口部部輪溝不明の附加条溝文(R・S)を縦波状文。口部部無文(縦・斜位のナテ)。内面は縦位のナテ。	石英、長石、金閃石	普通	黄褐色	十玉台式
5	弥生土器 壺	—	口部部輪溝不明の附加条溝文(L・Z)を横・斜位文(下→上、反時計回り)→口部部5本歯の縦波状文(下→上)。胴部3条一単位の縦波状文4単位→胴部耳取位区間条溝文→短形縦波状文(上→下)。底部有耳取(磨跡部ナテ消し)。内面は口部部縦・斜位のナテ。第一胴部縦・斜位のナテ、ヘラナテ等(下→上)。実測用の反時計スス集着。内面第一胴部まばらにヨゴレ付着。外面の1/3を縦波に覆う黒泥。胴部に赤彩カ。	石英、長石、ナテ、赤土	良好	外:黄褐色 内:黄褐色	十玉台式
6	弥生土器 壺	(146) 285 93					

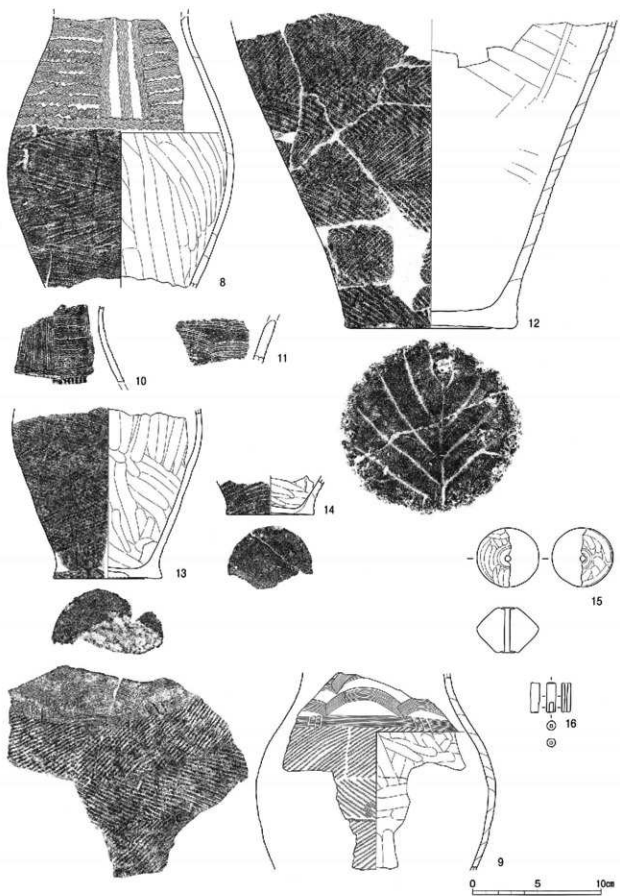


第 261 図 4号住居跡

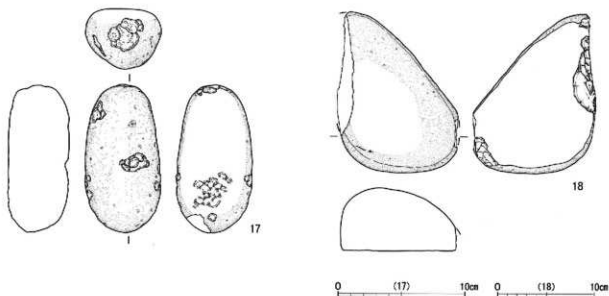
図面番号	種別	口徑 器高 底径	種類	胎土	焼成	色調	備考
7	葬土器 壺	- - 66	頸部系直のある押捺造型、頸部附加条2編組文(R+Z)、 無縁不明の附加条組文(L+Z)を下上へ編文→頸部 界5本線の山形文(砂引回り)→頸部2条一單位の縦 条組文→編組状文(上→下)。底部有目板。内面は胴部 斜位のナデ→底部横位のナデ、あばた状の溝彫。外面全 体にスス、底部打直はまばらにスス、内面にヨゴレ付着。	石英	良好	外：濃い黄褐色 内：褐色	十五台式



第262图 4号住居跡出土遺物①



第263図 4号住居跡出土遺物②

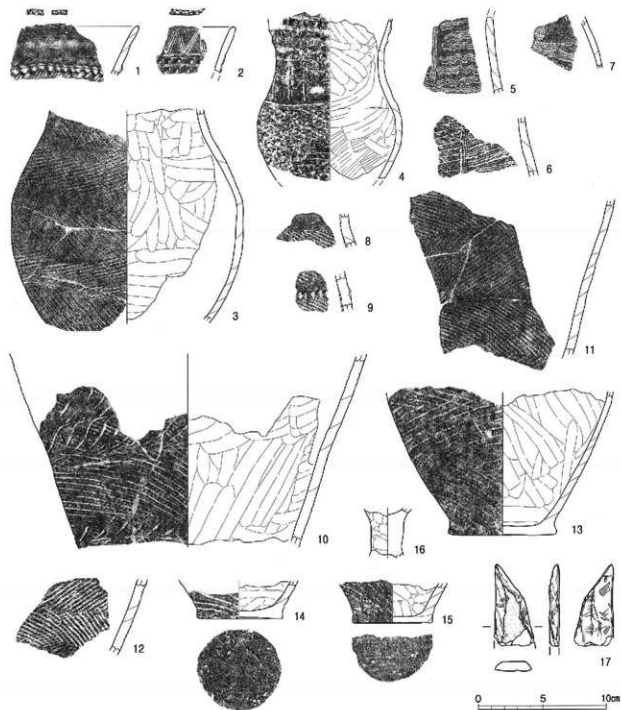


第264図 4号住居跡出土遺物③

図録 番号	種別 種類	口徑 胴高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
8	弥生土紡錘	- - -	断面輪郭不明の附加糸織文(R・S、L・Z:下→上)→器底の本體・3葉一組位の縦位波状文→胴部唇部位区間波状文→胴部縦位波状文(上→下)。内面は斜位のナデ(下→上)。外面胴部上半に淺いスス、胴部下半は薄いスス、内面は胴部下半にヨゴレ付着。	石英	良好	外: ぶい黄褐色 内: 褐色	土上台式
9	弥生土紡錘	- - -	胴部附加糸1種織文(R L + 2 L)、輪郭不明の附加糸織文(R・S)を胴部中位→上、下→器底→胴部唇部位区間の波状の波状文(時計回り)→胴部下部を地底文(反時計回り)。無文部は横位のナデ。内面は胴部斜位のナデ、胴部上位→中位・横位のナデ、胴部下部位縦位のナデ。全体的に丁寧に仕上げられる。外面全体に淺いスス、内面胴部下部に淺いヨゴレ、以上は淺いヨゴレ付着。	石英、黄土、多量の白色粒	良好	外: 灰褐色 内: 明赤褐色	二軒加工式
10	弥生土紡錘	- - -	胴部下部へラキ平ら隆部、胴部唇部本體の横位区間波状文→胴部縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面全体に淺いスス付着、内面に黒斑。	石英、多量の白色粒	良好	外: 褐色 内: 明赤褐色	1層出土 土上台式
11	弥生土紡錘	- - -	胴部7本體の下側を逆底文(上→下、反時計回り)。内面は斜位のナデ。外面全体にスス付着。腕口縁(再加工)。	多量の石英・長石	良好	外: 褐色 内: 明赤褐色	1層出土 二軒加工式
12	弥生土紡錘	- 1.31	胴部附加糸1種織文(R L + 2 L、L R + 2 R:下→上)、胴部本體面。内面は斜位のナデ、器底無紋。外面まばらにスス付着、胴部中位に底点状の黒斑。内面に波状のヨゴレ付着。	多量の石英・長石	普通	外: 淡黄色 内: ぶい褐色	1層出土
13	弥生土紡錘	- (8.5)	胴部附加糸2種織文(L + L)、輪郭不明の附加糸織文(R・S)→器底唇部3本體以上の横位区間波状文。底唇部自體、外面胴部上半にスス、内面にヨゴレ付着。	石英	普通	ぶい黄褐色	1層出土 土上台式
14	弥生土紡錘	- (6.7)	断面輪郭不明の附加糸織文(R・S)、底唇部自體。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	ぶい黄褐色	1層出土 土上台式
15	土製品 紡錘	-	径(4.7)、高3.55、孔径(0.45)、重(32.09)g。表面面ナデ調整、片側穿孔。	石英、多量の白色粒	普通	浅黄色	
16	石製品 碧玉	-	長2.3、径0.7、孔径0.25、重1.82g。全面研磨し、片側は改良をつけて加工。両側穿孔。緑色燧灰岩質。		普通	外: 淡黄色 内: 暗灰黄色	P2上層出土
17	石紡錘 磨石類	-	欠損品。縦→横。自然産の表面に磨き面磨耗痕。表・裏面中間部に磨耗面。上層部に縦・磨痕。石材: 石炭安山岩。長さ11.6cm・幅5.95cm・厚さ4.73cm・重さ490.0g。				
18	石紡錘 白石	-	欠損品。縦→横。表面に磨耗痕。裏面の磨耗に磨耗後の縦磨痕。石材: 安山岩。長さ16.95cm・残存幅12.6cm・厚さ6.7cm・重さ1938.2g。				

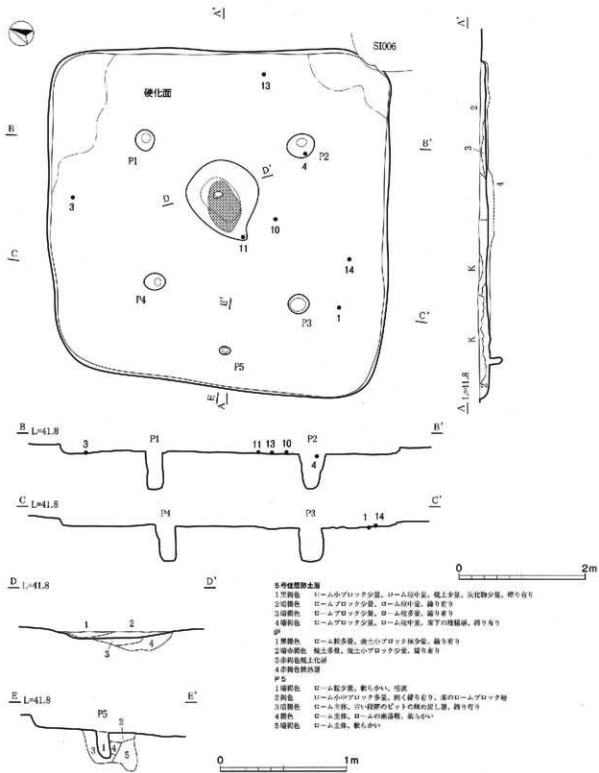
5号住居跡 (第265・266図)

位置 B3区中央部、I 12グリッドにある。規模と平面形 5.30×4.98 mのはほぼ方形。主軸方向 N-19°-W 壁 壁高10cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体に硬化している。ピット 5箇所。P1~4は主柱穴。P5は西壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。炉 長径112cm、短径107cmの楕円形で深さ5cm。炉石を持つ。覆土 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土の自然堆積層。遺物 ほとんどの遺物は床面が最下層中から出土している。出土遺物は多く、中〜大破片の割合が高い。十王台式前



第265図 5号住居跡出土遺物

半期を主体とする。8・9・12は二軒屋式系と考えられる。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第266図 5号住居跡

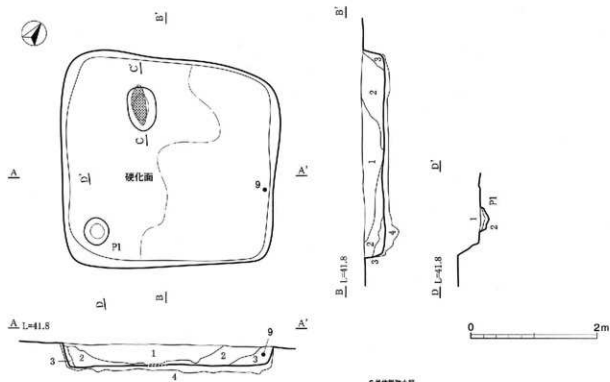
表 123 5号住居跡出土遺物観察表

図面番号	種別 器種	口徑 底径 高径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部縄文原形によるキズミ。口縁部無文(稜状のナデ)。 頸部爪痕のある押捺跡(1~2本指以上の横位波状文。内 面は斜位のナデ。	多量の石英・白色 土	良好	にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部縄文原形によるキズミ。頸部丸板状工具による割 突とスピオキエ(爪痕あり)による押捺帯(口縁部3 本指の山部文(特許印)。内面は斜位のナデ。外面全体 にスチ付。	石英、骨針	普通	外: 灰黄褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	胴部輪線不明の附加糸縄文(R・Z・L・S)。内面は 稜状のナデ→縦・斜位のナデ。外面筋部・唇部にスチ 付。底部下部は焼熱による赤色化。内面下部はヨゴレ付着。 外面3ヶ所、内面1ヶ所に底痕。	石英、角閃石、金 箔帯、骨針、多量 の白色土	普通	外: 灰黄褐色 内: にぶい黄褐色	
4	弥生土器 壺	-	胴部輪線不明の附加糸縄文(R・S・L・Z)→胴部 4本指の横位区画筋部文→底部3本指の縦位筋部 文→横位波状文。内面は胴部筋部のある斜位のヘチ ガ→胴部筋部のナデ。外面スチ付。焼熱による赤色化。 内口唇部にまばらなヨゴレ付着。	多量の石英・白色 土	普通	外: 明赤褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	胴部5本指の縦位区画筋部文→胴部縦位直線文→横位 波状文。内面は縦位のナデ。外面スチ、内面ヨゴレ付着。	石英、骨針	普通	灰黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	-	胴部3本指の縦位区画筋部文→ヘチ描き斜位筋部文(先上がり →先下がり)→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面ス チ付。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	-	胴部輪線不明の附加糸縄文(L・Z)→胴部筋部4本指の 横位区画直線文→上図キズミ文、縦位波状文→横位波状 文。内面は斜位のナデ。外面筋部スチ付。	石英、金箔帯	普通	外: にぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	-	胴部附加糸1種縄文(R+L+2L)→胴部無文帯(横位 のナデ)。内面は筋部。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式
9	弥生土器 壺	-	胴部附加糸1種縄文(R+L+2L)→胴部筋部の原形に よるキズミ隆起。内面は筋部。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式
10	弥生土器 壺	-	胴部附加糸2種縄文(R+R・L+L・F→上)。内面は 斜位のナデ→横位のヘチナデ。外面まばらにスチ付。	石英、角閃石	普通	明赤褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	-	胴部附加糸1種縄文(L・R+2R)、輪線不明の附加糸縄 文(L・Z・F)をF→上へ付す。内面は縦位のナデ→筋 部のナデ。	石英、角閃石、骨 針、多量の白色土、 赤色土	普通	外: 灰黄褐色 内: にぶい黄褐色	
12	弥生土器 壺	-	胴部附加糸1種縄文(R+L+2L・L+R+2R・F→上)。 内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	二軒屋式
13	弥生土器 壺	84	胴部輪線不明の附加糸縄文(R・S・L・Z・F→上)。 底部筋部。内面は横位のナデ→斜位のナデ。外面スチ、 内口ヨゴレ付着。	石英、金箔帯、骨 針、多量の白色土	普通	外: にぶい黄褐色 内: 灰褐色	
14	弥生土器 壺	67	胴部附加糸2種縄文(L+L+L)。底部口直(胴部筋部 ナデ無し)。内面は横・斜位のナデ。外面スチ、内面ヨゴレ 付着。	石英、角閃石、骨 針、赤色土	普通	外: 灰黄褐色 内: 明赤褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	64	胴部輪線不明の附加糸縄文(L・Z)。底部筋部直。内 面は斜位のナデ。外面スチ、内面ヨゴレ付着。外面底部 筋部→胴部にスチ付。	石英、角閃石、金 箔帯、骨針	普通	外: 内:	十王台式
16	弥生土器 壺	-	胴部中央。外面は横・斜位のナデ。内面はナデ。	石英	良好	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	
17	石器 磨石	-	尖部、縁部をもつ板状割片を素材とし割削研削による調整加工。磨石表面には筋部裏や縦筋が観察。表面 下部に溝状の小穴。石針: 軸長約6cm・径約3.0cm・残存厚0.8cm・重さ18.55g。				

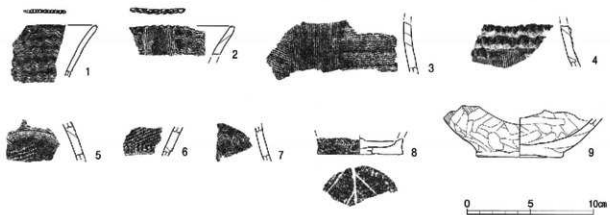
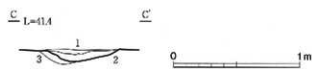
## 6号住居跡(第267図)

位置 B3区中央部、I12グリッドにある。規模と平面形 3.86×3.42mのほぼ方形で、5号住居の南東隅を壊している。主軸方向 N-27°-W 壁 壁高38cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 西側半分が硬化している。ピット 1箇所。P1は南西隅にあり、一般的に「貯蔵穴」と呼称されるピットと考えられる。炉 長径68cm、短径45cmの楕円形で深さ3cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 覆土中から弥生土器が少量出土している。小破片が中心である。十王台式後半期を主体とする。6は二軒屋式と考えられる。7は波状文がコンパス文風に描かれる。9は外面にハケメのある土師器壺である。所見 覆土中の遺物は弥生時代後期のものだが、遺構の形態からは古墳時代前期の小形住居跡の可能性も考えられる。





- 6号住居跡土層**
- 1 暗褐色 ローム粒多量、灰化層少量、腐り有り
  - 2 暗褐色 ローム粒多量、固く腐り有り
  - 3 暗褐色 ローム粒少量、固く腐り有り
  - 4 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒少量、灰化層粒少量、腐り有り
  - 5 暗褐色 硬土粒多量、硬土の小ブロック少量、腐り有り
  - 6 暗褐色 硬土粒多量、硬土の小ブロック少量、散らかり
  - 7 暗褐色 硬土粒多量、硬土の小ブロック少量、散らかり
  - 8 暗褐色 硬土粒少量、灰化層少量、やや散らかり
  - 9 ローム小ブロック少量、ローム粒多量、やや散らかり



第267図 6号住居跡・出土遺物

表 124 6号住居跡出土遺物観察表

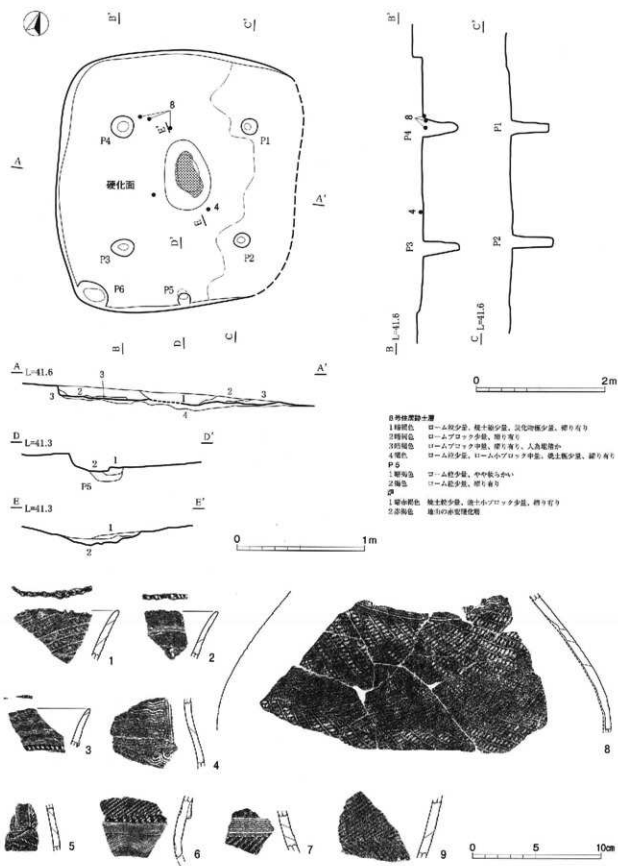
図版番号	種別 器種	口徑 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ、口縁部6本角の横位直状文(ド→上)。内面は口縁部直位のナデ→口唇部付直横位のナデ。外蓋ス文、内面コロン付蓋。	多量の石英・白色 泥	普通	黄灰色	十玉白式
2	弥生土器 壺	-	口唇部直キギミ(高部シヤ)。口縁部3本直・2条一單位の横位直横文→横位直状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面ス文付蓋。	石英、粘土、金雲母、多量の白色泥	普通	黄灰色	十玉白式
3	弥生土器 壺	-	頸部6本直・3条一單位の横位直横文→横位直状文(下→上)。内面は斜位のナデ。外面ス文付蓋。	石英、骨針、多量の白色泥	良好	外：ぶい黄褐色 内：褐色	十玉白式
4	弥生土器 壺	-	頸部直位押除除去→6本直の横位直横文。内面は斜位のナデ(下→上)→斜位のナデ。外面ス文付蓋。	石英、金雲母、多量の白色泥	普通	外：暗赤褐色 内：ぶい黄褐色	十玉白式
5	弥生土器 壺	-	頸部横位不明の附加条横文(L・S)。頸部厚4本直の下向き遠風文(短針開リ)。横位直状文。内面は斜位のナデ。外面ス文付蓋。	石英、金雲母、多量の白色泥	良好	外：果褐色 内：ぶい黄褐色	十玉白式
6	弥生土器 壺	-	口唇部附加条1條横文(L・R+2R)→口縁部下直横文。石英の厚さによるキギミ。頸部横位不明の横位直状文。内面は横位のナデ。	石英	良好	外：褐色 内：黄褐色	二軒形式
7	弥生土器 壺	-	頸部6〜7本直・コロン付直風の横位直状文(短針開リ)。内面は横位のナデ→横位のナデ。	多量の石英、角閃石	良好	褐色	
8	弥生土器 壺	(68)	頸部厚直状文(L・R)を横位直状文。底部木雲母。内面は斜位直状文。外面肩部に黒塗。	石英	普通	黄褐色	
9	土器 壺	68	頸部斜位のハタメ→斜位のナデ。内面は斜位のナデ。	石英、金雲母、多量の白色泥	不良	外：明赤褐色 内：ぶい黄褐色	

8号住居跡(第268図)

位置 B3区中央部東寄り、J12グリッドにある。規模と平面形 (3.85) × 4.08 m。主軸方向 N-15°-W 壁 壁高17cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 東壁寄りの部分を除いて全体に硬化している。ピット 6箇所。P1〜4は土柱穴。P5は南壁際であり、出入り口ピットと考えられる。P6は南西隅にあり、比較的浅いピットである。炉 長径112cm、短径72cmの楕円形で深さ4cm。覆土 上層は暗褐色土主体の自然堆積層で、最下層はロームブロックを多く含む人為堆積層。遺物 炉の周辺部の床面から壺破片(4・8)が出土している。出土遺物は少なく、小〜中破片が中心である。十玉白式前半期の土器が主体で6・7は二軒形式である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表 125 8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 高さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部直キギミ。底部起り出しの隆部→口縁部と中央部に附加条2條横文(R+R)。内面は横位のナデ。外面ス文付蓋。	多量の石英、骨針	普通	外：灰赤褐色 内：ぶい黄褐色	十玉白式
2	弥生土器 壺	-	口唇部丸縁式加工によるキギミ。頸部押除除去、4本直の横位直状文。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：ぶい褐色 内：ぶい黄褐色	
3	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。頸部横文状体によるキギミ兼付→3本直の横位直状文。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	良好	外：灰赤褐色 内：ぶい黄褐色	十玉白式
4	弥生土器 壺	-	頸部厚3本直の横位直横文、上向き遠風文(短針開リ)→頸部横位直状文→横位直状文(ド→上)。内面は斜位のナデ。外面ス文付蓋。	石英、骨針	普通	ぶい黄褐色	十玉白式
5	弥生土器 壺	-	頸部横位不明の附加条横文(L・Z)→頸部厚4〜5本直の横位直横文→横位直状文に近い上向き遠風文。内面は斜位のナデ。外面ス文付蓋。	石英、角閃石	普通	ぶい黄褐色	十玉白式
6	弥生土器 壺	-	口唇部横位不明の附加条横文(L・S)→口縁部下直横文の厚さによるキギミ。口縁部直下7本直の横位直横文→直状文に近い下向き遠風文。内面は横位のナデ。外面ス文付蓋。	多量の石英・粘土	普通	ぶい黄褐色	二軒形式
7	弥生土器 壺	-	頸部附加条1條横文(L・R+2R)→頸部厚10〜11本直の横位直横文→横状文。内面は横位のナデ。	多量の石英・粘土	良好	褐色	二軒形式

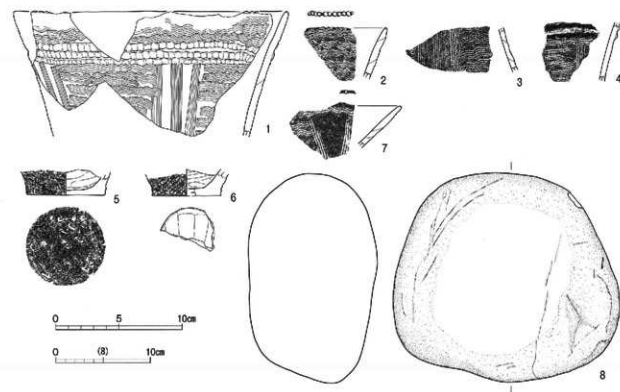


第 268 図 8号住居跡・出土遺物

図版番号	類別種	口縁部高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
8	弥生土器 罎	-	胴部附近条2横縄文(R+R、L+L:下→上)→胴部 界2本同時施文具による横段区單直線文、縦位直線 文、横位直線文。内面は肩位のナデ、割跡。	石英、金雲母、多 量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器 甕	-	胴部附近条1横縄文(LR+2R、Rし+2L:下→上)。 内面縦・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	良好	外:黒褐色 内:にぶい褐色	二軒器式

9号住居跡(第269・270図)

位置 B3区中央部南寄り、I 13グリッドにある。規模と平面形 4.55×4.73mのほぼ方形。主軸方向 N-22°-W 壁 壁高22cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 東壁寄りの部分を除いて全体に硬化している。ピット 5箇所。P1~4は支柱穴。P5は南壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。炉 長径72cm、短径77cmの楕円形で深さ6cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 少量の遺物が床面から出土している。小~中破片が中心である。十王台式後半期を主体とし、明確な二軒屋式土器は出土していない。また、図示できなかったが、土師器甕の胴部片が多数出土している。6は底面をヘラケズリーナデ調整する。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第269図 9号住居跡出土遺物

表126 9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	類別種	口縁部高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 罎	(21.4)	口唇部丸棒状工具によるキザミキ。口縁部押捺陰帯3条 →口縁部5本曲の横位直線文(上→下)、胴部3条一単位 の縦位直線文→横位直線文(上→下)。内面は横・斜位の ナデ。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式



図版番号	種別 種別	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
2	弥生土器 壺	-	口唇部を標決1具によるキザミ。口縁部5本歯の横位成状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい藍色	1千台式
3	弥生土器 壺	-	頸部3本歯・3条一単位の縦位成状文→横位成状文。内面は斜位のナデ。	石英、赤雲母	良好	外：灰青褐色 内：にぶい黄褐色	十土台式
4	弥生土器 壺	-	頸部中央部へ4本歯の縦位成状文→横位成状文(下→上)。内面は斜位のナデ。	石英、赤雲母	普通	外：浅黄褐色 内：にぶい黄褐色	十二台式
5	弥生土器 壺	- 6.2	胴部附加条2種縄文(L・L)。底部有耳痕。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十土台式
6	弥生土器 壺	- (3.4)	胴部輪軸不明の野加条縄文(R・S)。底部ヘラケズリ→ナゲ調整。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	
7	弥生土器 高坏	-	口唇部九指状二具によるキザミ。口縁部4本歯の縦位成状文→横位成状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。	石英	良好	外：橙色 内：にぶい黄褐色	
8	石器 石臼	-	大型の表面中央に磨耗痕。表面右上の部分は焼熱による破砕。石材：砂岩。長さ22.2cm・幅2.7cm・厚さ13.6cm・重さ9800.0g。				

## 10号住居跡(第271図)

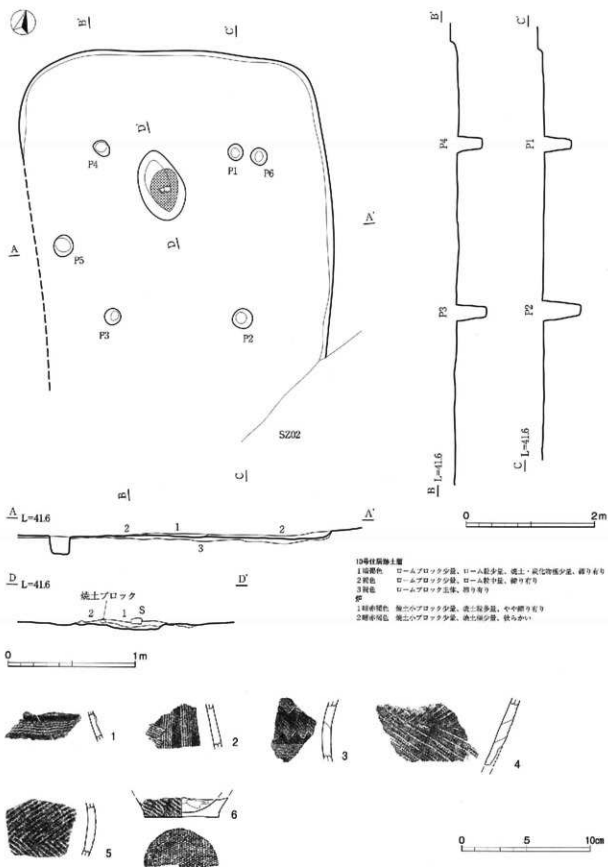
位置 B3区中央部、I13グリッドにある。規模と平面形 4.46×(5.00)mで、7号住居跡に南東部を壊されている。主軸方向 N-22°-W 壁 壁高8cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化は弱い。ピット 6箇所。P1~4は主柱穴、P6は古い段階の主柱穴か。炉 長径90cm、短径70cmの楕円形で深さ4cm。覆土 上層は暗褐色、下層は褐色土の自然堆積。遺物 出土遺物は少なく、小破片が中心である。十土台式を主体とする。3は二軒屋式、4は附加条1種縄文(附加1条)の胴部片である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表127 10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 種別	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	胴部無文の厚帯(断面三角形)→5本歯の横位成状文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、赤雲母	普通	灰青褐色	P2出土 十土台式
2	弥生土器 壺	-	胴部5本歯の縦位成状文→横位成状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、多量の白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	十土台式
3	弥生土器 壺	-	頸部5本歯・3条一単位の縦位成状文。横位成状文(反時計回り)。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：黄褐色	二軒屋式
4	弥生土器 壺	-	胴部附加条1種縄文(L・R・R、R・L+2・L、下→上)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	普通	外：灰黄褐色 内：黄褐色	二軒屋式か
5	弥生土器 壺	-	胴部附加条1種縄文(L・R+R、R・L+2・L、下→上)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、多量の白色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	二軒屋式か
6	弥生土器 壺	- (5.8)	胴部輪軸不明の野加条縄文(L・Z)。底部有耳痕。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、長石、赤雲母	良好	にぶい黄褐色	1千台式

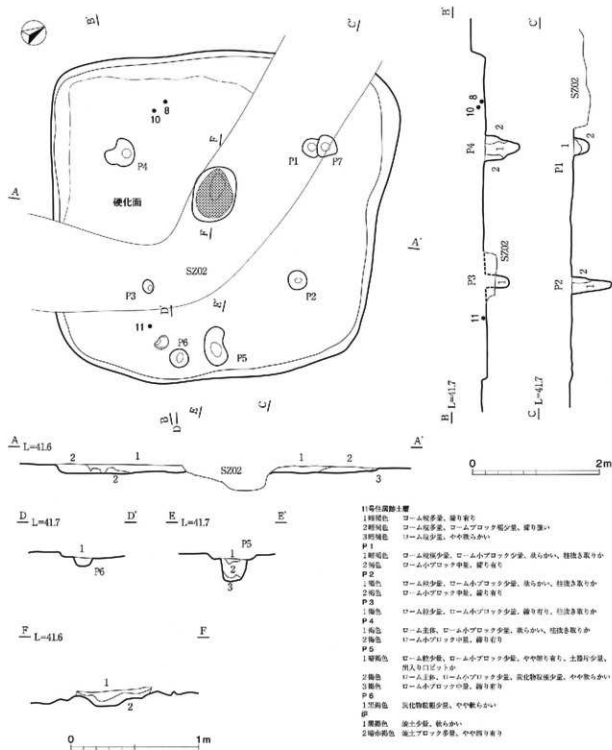
## 11号住居跡(第272・273図)

位置 B3区南部、I13・J13グリッドにある。規模と平面形 5.13×5.20mで、2号方形周溝墓に中央部を壊されている。主軸方向 N-25°-W 壁 壁高18cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 P4周辺が硬化している。ピット 7箇所。P1~4は主柱穴、P5は出入り口ピット。P6・7は不明である。炉 2号方形周溝墓の溝に上層部を削られ、溝の内側斜面に、長径85cm、短径68cmの楕円形の範囲が被熱を受けた状態で確認されている。覆土 1~2層はローム粒を均質に含む暗褐色土である。遺物 遺



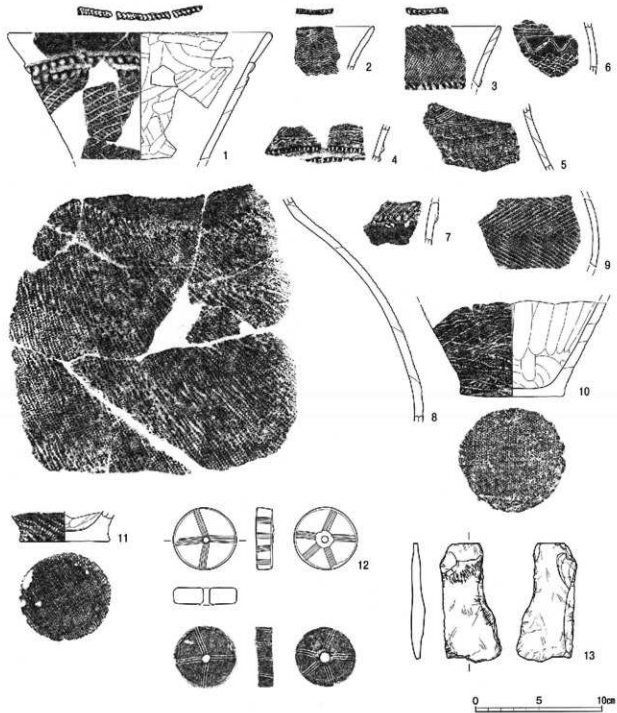
第271図 10号住居跡・出土遺物

物は床に近いレベルから破片で出土している。出土遺物はやや多く、中～大破片もある。十王台式前半期を主体とするが、二軒屋式(3・7)も目立つ。8は頸部に無文帯を有し、胴部には単筋RL縄文が施文される。12は表表面に菊歯状工具による放射状の直線文、側面に直線文が施文される。13は使用痕が顕著に見られる砥石である。 所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第 272 図 11号住居跡





第273図 11号住居跡出土遺物

表128 11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	類別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 陶片	(20.6) — —	口唇部縄文家体によるキザミ。口縁部無文(横位のケズリナダ)。腹部再地帯で2条一組加条2種縄文(R-R、L+L)。内面は縦・斜位のナダ→横位のナダ。	石英、長石、金雲母	普通	外: 黒褐色 内: 灰青褐色	P5出土 十五台式
2	弥生土器 甕	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本線の横位波状文(下→上)。内面は横位のナダ。外唇ス付着。	石英	良好	外: 黒褐色 内: 灰青褐色	十五台式

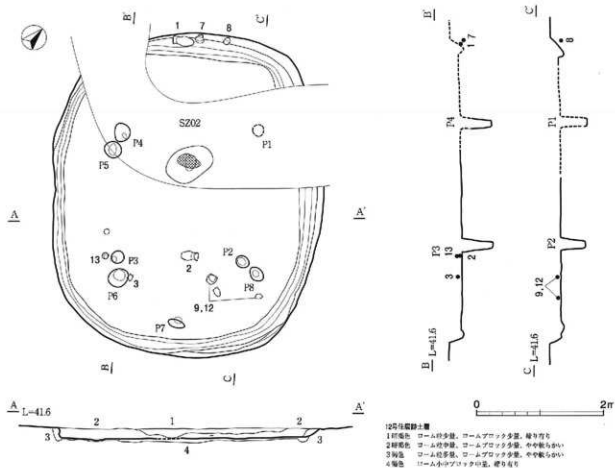
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 壺	-	口縁部・口縁部下縁列文原体によるキザミ。口縁部附加 条1條編文(L1+2L1, L1R+2R1; D→上)。内面は 埴土のナガ。外底スス付着。	石英	良好	外: 灰青褐色 内: ぶい黄褐色	二軒屋式カ
4	弥生土器 壺	-	口縁部丸縁状工具によるキザミ跡等→3本歯の横位成状文 。内面は埴土のナガ。外底スス付着。	石英、赤銅母、骨 針	普通	外: 灰青褐色 内: ぶい黄褐色	十玉台式
5	弥生土器 壺	-	底部4本歯の縦位成状文。横位成状文。内面は埴土。外底 スス、内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、多 量の白色粒	普通	ぶい黄褐色	十玉台式
6	弥生土器 壺	-	胴部輪文不明の附加条編文(L・Z・L・S)ないし 附加条3條編文→胴部縦3本歯の横位成状文→横 位成状文→横位成状文。内面は斜位のナガ。外底 スス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	外: 黒褐色 内: ぶい黄褐色	十玉台式
7	弥生土器 壺	-	口縁部附加条1條編文(LR+2R)→口縁部下縁列文 の原体によるキザミ。胴部編文(横・斜位のナガ)。内面 は横・斜位のナガ。外底スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・白色 粒	普通	外: 黒褐色 内: 灰青褐色	二軒屋式カ
8	弥生土器 壺	-	胴部無文帯(横位のナガ)。胴部附帯L1條文を横位編文 (非立状或下→上)。内面は埴土のナガ。外底スス、 斜位のナガ。外口まばらな埴土による赤化。	多量の石英・長石	普通	外: 黄褐色 内: 褐色	
9	弥生土器 壺	-	胴部輪文不明の附加条編文(R・S・L・Z; D→上)。 内面は横・斜位のナガ。外底スス、内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨 針	普通	外: 暗灰黄色 内: ぶい黄褐色	
10	弥生土器 壺	- 81	胴部附加条2條編文(L・L1)、輪文不明の附加条編文(L ・S)をD→上→編文。底面ヨゴレ付着。外底まばらなスス、 内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨 針、赤色粒	良好	外: 黄褐色 内: ぶい黄褐色	十玉台式
11	弥生土器 壺	- 71	胴部附加条2條編文(LR+2L1)。底部有耳痕(貼上付 着)。内面は横・斜位のナガ。外底スス付着。	石英、角閃石	普通	外: 灰青褐色 内: ぶい黄褐色	十玉台式
12	土製品 砂輪半	-	径(50)、高14、孔径(0.45)、重(41.69)g。表裏面3本 歯の放射状文。断面は底縁文11条、4型調整。片縁半丸。	石英、角閃石、骨 針	良好	淡黄色。にぶい 黄褐色	
13	石器 砥石	-	板状割片の表・裏面や両面に環状や線状が散在。上部部は粗面に より平滑。断面の一部に線状の凹凸。石材: 産地不明。長さ9.3cm・幅4.75cm・厚さ1.1cm・重さ28.9g。				

## 12号住居跡(第274~276区)

位置 B3区南部、I13・I14グリッドにある。規模と平面形(5.50)×(5.20)mのやや縦長長方形で、2号方形周溝墓に中央部北側を壊されている。主軸方向 N-38°-W 壁 壁高11cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体が硬化している。住居の古い段階で周溝を持っている。ピット 7箇所。P1~4は主柱穴、P5・6・8は古い段階の柱穴、P7は出入り口ピット。炉 2号方形周溝墓の溝に覆土を削られ、火床面以下が残存している。長径112cm、短径73cm。覆土 ロームブロックを少量含む暗褐色土が主体である。遺物 北壁際中央の床面から1の弥生土器が横倒し、7が斜位、8が立位の状態で出土している。また、P6-P8間で弥生土器がまとまって出土しており、2は覆土下層から横倒しの状態で、3・9・12は覆土上層から出土している。出土遺物は非常に多く、ほぼ完形個体・大破片の割合が高い。弥生土器は十玉台式後半期を主体とし、明確な二軒屋式系土器は出土していない。十玉台式は久慈川流域(1)、那珂川流域(2)の特徴を有する良好な個体がそれぞれ確認できる。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

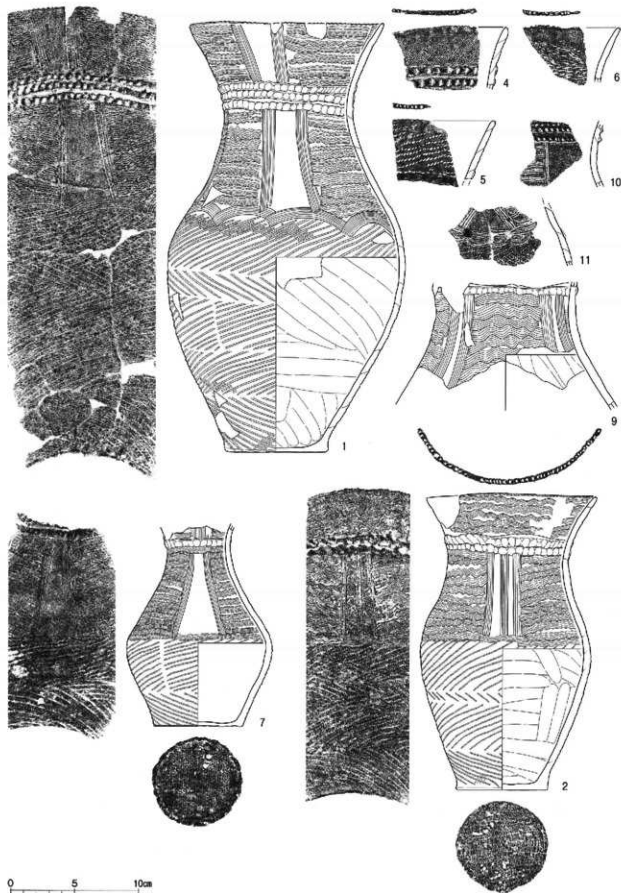
表129 12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	153 342 80	口縁部ヘラキザミ。胴部縦位成状文3条→口縁部6本歯・ 2条→単位の縦位成状文5単位→横位成状文5~6条(D →上)。胴部附加条2條編文(KL+2R1, LR+2L1; D→上、砂計測り)。胴部中央部有耳痕(横位)→胴部下 縁列文編文(半時計回り)→2条→単位の縦位成状文4 単位→横位成状文8条(D→上)。底部砂痕。内面は口縁 →口縁部編文・斜位のナガ。断面調整のナガ。腹→胴部編 文・斜位のナガ。外底断面より上にスス、内面胴部中央 より下に溝いけが付着。	多量の石英・長石、 チャート、赤銅母	普通	外: 灰青褐色 内: ぶい黄褐色	十玉台式

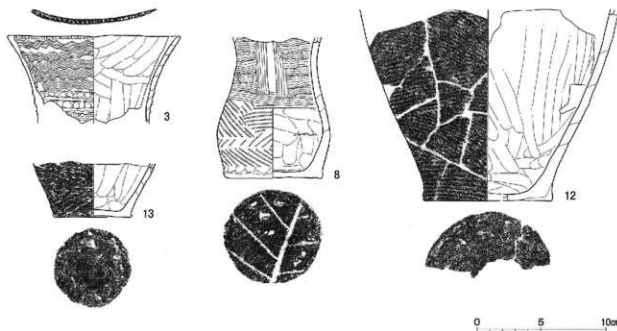


第274図 12号住居跡

遺座番号	種類	口径器高さ	特徴	土質	焼成	色調	備考
2	弥生土器壺	(133) 23.5 72	口唇部ヘラキザミ、頸部深い浮線隆帯2条、胴部輪郭不明の附加条縄文(R・S)、附加条2条縄文(L+L)を下へ上へ指文→口縁部4本線の横位波状文(上→下)5条、頸部3条一単位の横位波状文3単位→頸部外周位区系波状文→胴部横位波状文(下→上)13条、底部布目織。内面は口縁→胴部上位横・斜位のナデ、胴部下位横・横位のナデ。外面は口縁→胴部上位縦長にスス。以下はスス酸化消失。内面は複数段のヨブレ付着。	石灰、長石、チャート、多量の白色泥	普通	にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	(135) -	口唇部ヘラキザミ、頸部深い浮線隆帯3条→口縁部6本線の横位波状文(下→上)、胴部縦位直線文→横位波状文。内面は頸部縦位のナデ→口縁部斜位のナデ。外面スス、内面ヨブレ付着。	多量の石灰・白色泥	良好	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	-	口唇部ヘラキザミ、横位のナデ。胴部棒状工具によるキザミ隆帯→ヘラ軸き刺透子文(左上がり→右上がり)。内面は胴部凹れ。	石灰、多量の角閃石、赤色泥	普通	にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	-	口唇部丸棒状工具によるキザミ、胴部棒状隆帯→口縁部輪郭不明の附加条縄文(R・S)。内面は横位のナデ。外面スス、内面ヨブレ付着。	石灰、多量の白色泥、骨灰	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	-	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部輪郭不明の附加条縄文(R・Z)を新位施文。内面横・斜位のナデ、ナズリ。外面スス、内面ヨブレ付着。	石灰	普通	黒褐色	十王台式
7	弥生土器壺	- 70	頸部深い浮線隆帯1条、胴部輪郭不明の附加条縄文(R・S、L・Z：下→上)→胴部5本線の横位波状文→口唇部と胴部5本線・2条一単位の横位波状文3単位(深部)→横位波状文12→13条(上→下)→胴部隆帯直下の横位区系波状文。胴部有目織(胴部一帯ナズリ)。内面は頸部隆帯、胴→胴部横・斜位のナデ。	石灰、長石、骨灰	良好	灰色	十王台式



第275図 12号住居跡出土遺物①

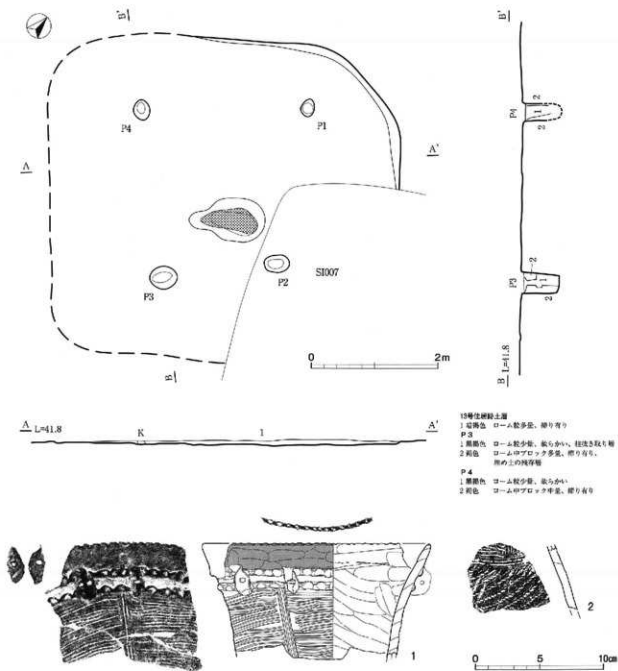


第 276 図 12号住居跡出土遺物②

図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色柄	備考
8	弥生土器 壺	— — 75	胴部軸線不明の附加糸縄文 (R・S・L・Z: ↑→上、反時計回り) を施し、斜紋直文→縦帯帯6本筋の帯位区画直線文→2条一帯位の帯位直線文3単位→胴部軸線法状文 (下→上)。底部木葉柄。内面は胴部上位・胴部斜位のナデ、胴部下位帯位のナデ。外面はほぼ全体にスス、一部スス剥化消滅、内面胴部下位より上にコゲ付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外: におい黄褐色 内: におい褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	— — —	胴部押捺隆帯→6本筋・2条一帯位の帯位直線文4単位→横波状文 (下→上)。内面は帯位のナデ→斜位のナデ (下→上)。内面に黒塗。	石英、骨針、赤色粒	良好	におい藍色	十王台式
10	弥生土器 壺	— — —	胴部尖棒状工具によるキザミ隆帯→3本筋の帯位直線文→横波状文。内面は斜位のナデ。外周スス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外: 黒褐色 内: 黒色	十王台式
11	弥生土器 壺	— — —	胴部軸線不明の附加糸縄文 (R・S・L・Z: ↑→上)、反時計回り) を施し、斜紋直文→上帯き直線文、胴部縦線直線文→縦波状文→円形彫文。内面は縦・斜位のナデ。	石英	普通	外: におい黄褐色 内: 灰白色	十王台式
12	弥生土器 壺	— — (101)	胴部軸線不明の附加糸縄文 (R・S・L・Z: ↑→上、反時計回り) ないし、無文。底部木葉柄 (周縁部隆帯不具)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面底部に薄いコゲ付着。	石英、角閃石、骨針	良好	におい黄褐色	十王台式
13	弥生土器 壺	— — 60	胴部軸線不明の附加糸縄文 (R・S・L・Z: ↓→上)、底部木葉柄 (周縁部は砂痕)。内面は縦・斜位のナデ。外周スス、内面コゲ付着。	石英、多量の白色粒	普通	外: 黒褐色 内: におい黄褐色	十王台式

## 13号住居跡 (第277図)

位置 B3区南部、I12・I13グリッドにある。規模と平面形 (5.35) × (5.02) mの隅丸縦長長方形で、7号住居跡に東部を壊されている。主軸方向 N-47°-E 壁 壁高4cm、やや外傾して立ち上がる。床 残存する床面は全体が弱く硬化している。南西部の床面は削平されている。ピット 4箇所。P1~4は支柱穴、P2は7号住居の床下から確認されている。P3の柱抜き取り穴径は、約7.5cmである。炉 住居中央南寄りに位置し、火床面は長楕円形を呈している。覆土 ローム粒を多量含む暗褐色土が主体である。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、1以外は小破片が中心である。十王台式前半期が主体と考えられる。1は穿孔された半月形の貼付文を有し、無文の口縁部が赤彩される特殊な壺である。2は1と同一個体の可能性がある。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第 277 図 13号住居跡・出土遺物

表 130 13号住居跡出土遺物観察表

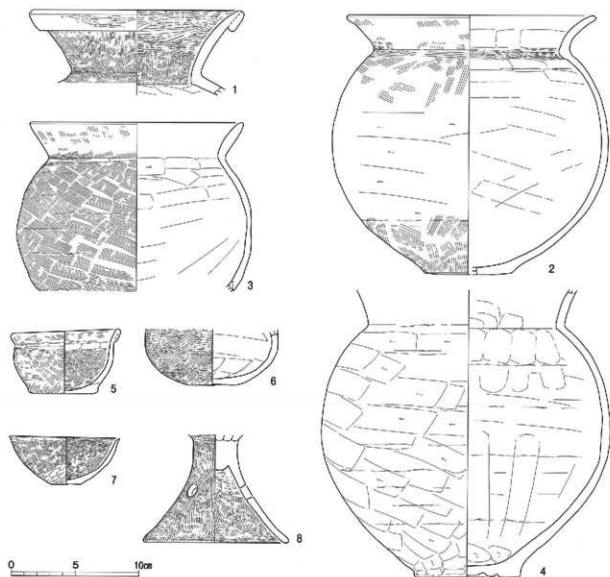
図版番号	埋 埋 種 類	口 径 器 高 蓋 径	特 徴	土 質	焼 成	色 調	備 考
1	赤生土器 壺	(180) — —	口縁部輪文帯体によるキザシ(無蓋型)。口縁部無文、赤赤。腹部厚い押捺線帯2条→3本帯の縦位家紋文→横位波状文(下→上)→胎帯部に穿孔を有する半月形の胎付文。内面は口縁部横位のナデ、頸部斜位のナデ。2と同一器体。	多量の石英・長石	良好	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	
2	赤生土器 壺	— — —	頸部附加条1神織文(L・L)→頸部帯3本帯の横位家紋文→縦位家紋文→横位波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。1と同一器体。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	

## 第2節 古墳時代

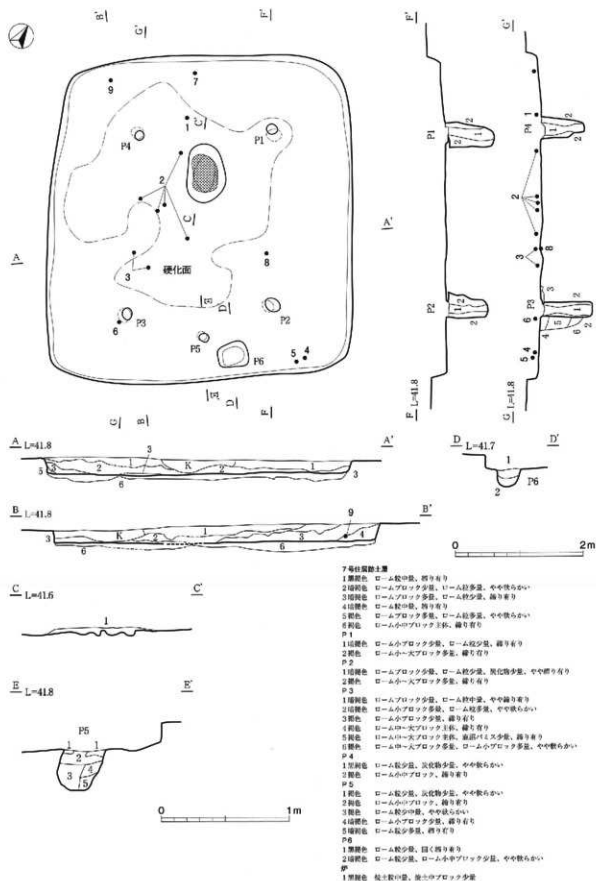
## 1 竪穴住居跡

## 7号住居跡 (第278~280図)

位置 B3区中央部、I12・I13グリッドにある。規模と平面形 4.82×5.15mのほぼ方形で、13号住居の南東部を壊している。主軸方向 N-30°-W 壁 壁高27cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の中央部から西壁側の一部にかけて硬化している。ピット 6箇所。P1~4は支柱穴。P5は南壁寄りの中央部にあり、出入り口ピットと考えられる。P6はP5と南東壁の間にあり、通常「貯蔵穴」と呼称されるピットと考えられる。炉 長径94cm、短径57cmの楕円形で深さ6cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 弥生時代後期の土器を含みながら、古墳時代前期の遺物を主体として覆土下層から出土している。所見 出土遺物と遺構の形態から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

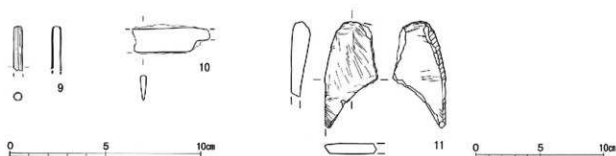


第278図 7号住居跡出土遺物①



第 279 図 7号住居跡





第280図 7号住居跡出土遺物②

表131 7号住居跡出土遺物観察表

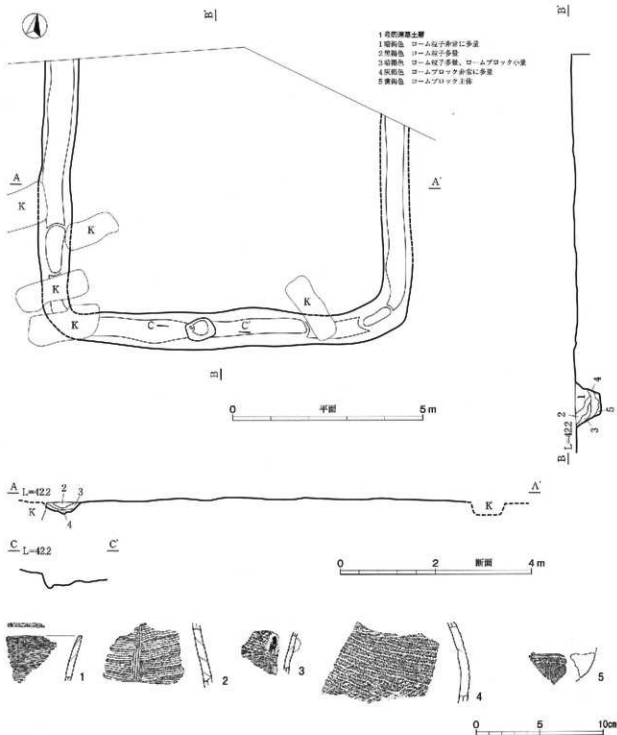
図版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	出土	焼成	色面	備考
1	土師器 鏃	169 — —	口基部外面ハケメ後にヘラミガキ、口基部内面ヘラミガキ。	石英、雲母、骨針	普通	褐色	口縁部内外面赤彩、土師台製用か
2	土師器 鏃	196 205 68	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後にハケメ、底部外面ナデ、胴部内面ハケメ、胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、チャート	普通	褐色	胴部上半外面にスス付着
3	土師器 鏃	168 — —	口縁部ヨコナデ、胴部～胴部外面ハケメ、胴部～胴部内面ヘラナデ。	石英、チャート、褐色粒	普通	にぶい黄褐色	胴部上半外面にスス付着
4	土師器 鏃	— — 84	胴部外面ヘラケズリ後にハケメだが磨減、底部外面ナデ、胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、チャート	普通	褐色	胴部上半外面にスス付着
5	土師器 鏃	86 51 55	口縁部ヨコナデと背割痕、胴部～底部外面ハケメ後にナデ、胴部～底部内面ハケメ後にヘラミガキ。	石英、骨針	普通	褐色	
6	土師器 鏃	— — 36	胴部～底部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、骨針	普通	にぶい黄褐色	胴部外面赤彩
7	土師器 鏃	86 38 22	口縁部ヨコナデ、胴部～底部外面ヘラケズリ後に胴部ヘラミガキ、胴部～底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、褐色粒	普通	明黄褐色	
8	土師器 高坏	— — 115	胴部3方向に通孔。胴部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部内面ヘラミガキ。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい黄褐色	胴部外面赤彩
9	陶製品 不明		残存長23cm、幅0.5cm、厚さ1mmの管状を呈する。				
10	鉄製品 刀子		残存長41cm、幅1.5cm、厚さ2.5mm。				
11	石製品 砥石		欠損品。3面使用。砥面には磨痕や組織が顕著。石質：流紋岩。残存長8.4cm・残存幅4.1cm・残存厚1.45cm・重さ45.3g。				

## 2 周溝墓

## 1号周溝墓(第281図)

位置 調査区の北部、H11グリッドに所在する。規模と平面形 調査範囲や耕作痕による掘拌のため遺構の北・東側が不明瞭となる。9.80×[7.40以上]m。矩形。主軸方向 N-10°-W 周溝 溝の幅は72～100cmで、ほぼ一定する。深さは15～38cmで、北側が浅い。また、南溝中央・東隅、西溝南側は段状に窪み、接続する溝より10cmほど深くなる。土坑 1基。南溝中央に穿たれる。下層(4層)上面でも掘り込みが区別できており、土坑構築の時機が窺われる。長径72cm・短径56cm・溝からの深さ20cmで、一部ピツ

ト状を呈する（深さ4cm）。覆土 上～中層に黒褐・暗褐色土、下層に多量のロームブロックを含む灰褐・黄褐色土が堆積する。土坑の掘り込み面を考慮すると、下層の4・5層は掘り方の可能性が導出されよう。遺物 弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、紡錘車が検出されている。所見 所産時期は、根拠となる遺物がいずれも小片であることから、不明である。



第281図 1号周溝墓・出土遺物

表 132 1号周溝墓出土遺物観察表

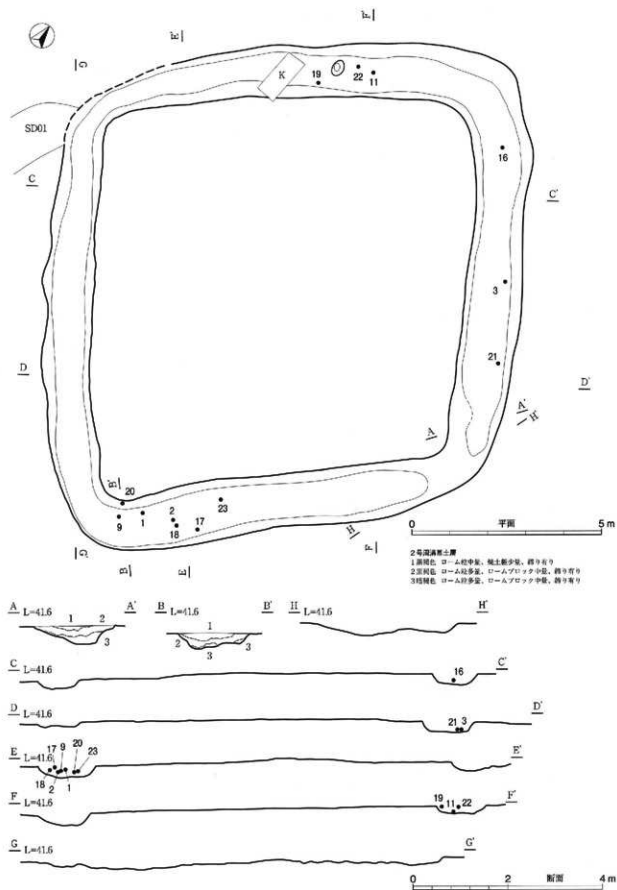
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	--	口縁部系線文(R)を全周施文。口縁部4本線の横位直線文ないし波状文(下→上、反時計回り)。内面は横・斜位のナガ。外面スリ付帯。	石英、角閃石	良好	明赤褐色	
2	弥生土器 壺	--	胴部4本線の横位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナガ。外面スリ。内面まぼろなヨゴレ付帯。	石英、赤色粒	良好	外：灰黄色 内：明赤褐色	十五斗式
3	弥生土器 壺	--	口縁部附加条2幅施文(L・L)→断面半円形の胎付文。胴部5本線の横位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナガ。外面スリ。内面ヨゴレ付帯。	石英	普通	淡黄色	
4	弥生土器 壺	--	胴部輪軸不明の附加条施文(R・S・L・Z:上→下)→胴部4~5本線の横位直線文。内面は横・斜位のナガ。外面スリ付帯。	石英、多量の骨針・白色粒	普通	にぶい黄色	十六斗式
5	土製品 紡錘車	--	径一、高一、孔径一、重(7.13)g。外面ナガ調整。二本回時地文具による縦・横位の直線文。	石英、チャート、多量の白色粒	普通	にぶい黄色	

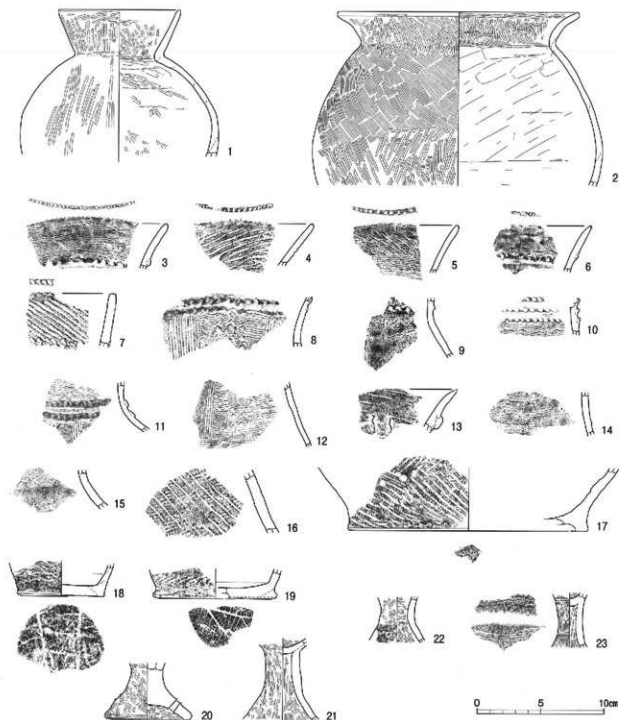
## 2号周溝墓(第282・283図)

位置 B区南部、E3~E4・D4グリッドにある。規模と平面形 方台部長南北方向10.4m、東西方向10.1mの僅かに菱形に歪んだ方形。周溝が11号住居と12号住居跡を壊して掘り込んでいる。主軸方向南北の周溝方向でN-7~11°-E 周溝 周溝幅は1.04~1.54m、深さは20~40cmで、南東コーナー部と西辺の中央部がやや浅くブリッジ状になっている。覆土 上層が暗褐色土下層が褐色土の自然堆積層である。遺物 周溝南西部の覆土中から土師器の壺と甕が、弥生の住居と重複する箇所は覆土中層から下層にかけて弥生土器が出土している。所見 弥生時代後期の住居跡との切り合い関係と出土遺物から古墳時代の方形周溝墓と考えられる。

表 133 2号周溝墓出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	(9.5)	口縁部一線部外面ハケメ後にミガキ及び赤帯。口縁部内面ハケメ後にミガキ及び赤帯。胴部内面ナガ後に縮なミガキ。	石英、骨針	良好	赤褐色	
2	土師器 壺	(18.6)	口縁部内面ヨコナガ。胴部外面ミガキ。胴部外面ハケメ。胴部内面ハケメ。胴部内面ヘラケズリ後にヘラナガ。	石英、骨針	普通	灰色	胴部外面にスリ付帯
3	弥生土器 壺	--	口唇部ヘラケザミ。口縁部輪軸付帯。6本線の横位波状文3条。	石英、赤母	普通	褐色	十五斗式
4	弥生土器 壺	--	口唇部輪軸文帯体によるキザミ。口縁部輪軸不明の附加条施文(R・S・L・Z:上→下)。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十五斗式
5	弥生土器 壺	--	口唇部ヘラケザミ。口縁部輪軸不明の附加条施文(L・Z)→7~8本線の横位直線文。	石英、骨針	普通	にぶい黄褐色	
6	弥生土器 壺	--	口唇部輪軸文帯体によるキザミ。口縁部無文(横位のナガ)。縮な帯体によるキザミと胎帯1条。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	--	口唇部輪軸文帯体によるキザミ。口縁部附加条1幅施文(R・L+2L)。縮な帯体によるキザミと胎帯。	石英、赤母	普通	明赤褐色	二折脚式
8	弥生土器 壺	--	胴部輪軸付帯→5本線の横位波状文→横位波状文。	石英、骨針、骨針	普通	にぶい褐色	十五斗式
9	弥生土器 壺	--	胴部竹管等状工具によるキザミ胎帯。胎帯下に5本線の横位直線文→横位直線文→横位波状文。	石英、チャート	普通	褐色	十五斗式
10	弥生土器 壺	--	胴部片棒状工具によるキザミ胎帯→3本線の横位波状文(下→上)。	石英、角閃石	普通	黒褐色	十五斗式
11	弥生土器 壺	--	胴部片棒付帯2条→口縁部6本線の横位波状文(下→上)。胴部輪軸付帯文→横位波状文。	赤母	普通	にぶい黄褐色	十五斗式
12	弥生土器 壺	--	胴部附加条施文→胴部非横位区面波状文→胴部6本線の横位直線文→横位波状文(下→上)。	石英、赤母	普通	にぶい赤褐色	十五斗式
13	弥生土器 壺	--	折り返し口縁。口縁部輪軸不明の附加条施文(L・Z)→断面半円形の胎付文2条。	赤母、チャート	普通	にぶい黄褐色	





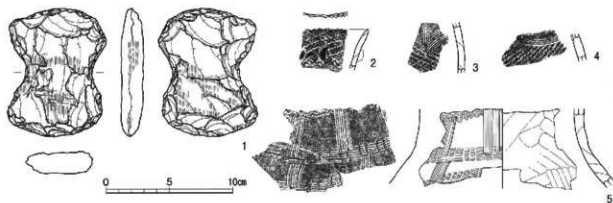
第283図 2号周溝墓出土遺物

図版番号	種類	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
14	弥生土器 壺	-	頸部3本歯の横位或状文、縷状文（反時計回り）。	雲母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
15	弥生土器 甕	-	頸部張り廻の広い6本歯の横位或状文。	石英	普通	にぶい黄褐色	
16	弥生土器 壺	-	胴部附加糸2種織文（L+L）。	石英、雲母	普通	明赤褐色	十王台式
17	弥生土器 壺	- (18B)	胴部附加糸1種織文（R L + 2 L 〇）。底部布目織。	石英、チャート、 骨針	普通	にぶい黄褐色	内面割断

図版番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
18	弥生土器 壺	(68)	胴部輪郭不明の附加条線文(R・S)。底部木炭痕。	石英、雲母	普通	にぶい褐色	
19	弥生土器 壺	(96)	胴部輪郭不明の附加条線文(R・S)。底部木炭痕。	石英、骨針	普通	にぶい黄褐色	
30	弥生土器 高坏	— 67	胴部縦或肩穿孔4ヶ所。内外面ナデ、鍍金ヘラミガキ。	石英、角閃石	普通	褐色	
21	弥生土器 高坏	—	胴部内外面ナデ、鍍金ヘラミガキ。	雲母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
22	弥生土器 高坏	—	胴部3〜4本面の横位条線文。内外面ナデ、鍍金ヘラミガキ。	雲母、骨針	普通	明赤褐色	
23	弥生土器 高坏	—	胴部4本面の横位条線文。ないし直條文。内外面ナデ、鍍金ヘラミガキ。	石英	普通	褐色	

### 第3節 遺構外出土遺物

弥生時代後期の遺構から打製石斧が出土した(1)。やや小型の分銅形で、縄文後・晩期に多い形態を呈する。当該期の痕跡はA区で後期初頭・前葉、B1区で晩期中葉の土器片が採取されているものの、本調査区では認められない。遺構や土器を伴わない活動痕跡を反映している可能性等が考えられよう。2〜5は弥生土器である。2・3・5は十王台式、4は二軒屋式土器の壺と考えられる。5も二軒屋式系とみなせるが、縦位の短い横直線文を単位をずらしながら施文するなど異質な特徴を有する。



第284図 遺構外出土遺物

表134 遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	石斧 打製石斧	—	分銅形。基部周辺に鋭利な刃が顕著。石材:ホルンフェルス。長さ10.6cm・幅7.68cm・厚さ1.75cm・重さ186.16g。				SI-11
2	弥生土器 壺	—	口縁部縄文原形によるナギミ。口縁部附加条線2種横文(R・R)→4本面以上の横位直線文、半月形の胎付文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	黄灰色	表土
3	弥生土器 壺	—	胴部附加条線2種横文(L・L)→胴部肩4〜7本面の下置き条線文→胴部縦位条線文→横位条線文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、金雲母	普通	黄灰色	表土
4	弥生土器 壺	—	胴部附加条線1種横文(L・R+2R)→胴部肩6〜7本面の横位直線文をいし上置き条線文。内面はナデ。	多量の石英・白色粒	普通	明赤褐色	表土 第七二軒屋式
5	弥生土器 壺	—	胴部7本面の半割部止め条線文(反時計回り)、後状文→縦位条線文。先部縦位條文の胎付文を付着。内面は縦・斜位のナデ。外表面熱による赤色化。	多量の石英・白色粒	普通	外:にぶい黄褐色 内:明赤褐色	表土

## 第VIII章 総括

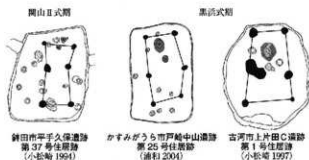
## 第1節 縄文時代

縄文時代の遺構として、前期中葉の竪穴住居跡1軒（B2区1号住居跡）、陥穴2基（A区1号陥穴・A区2号陥穴）が検出された。また、早期中葉から晩期中葉の縄文土器や石器が確認されている。ここでは本調査（境谷遺跡A区・B1～3区）で得られた成果について、潤沼前川から分岐する同じ支谷沿いの境谷遺跡C区（高野2008）・長峰東遺跡（土生2010）・長峰西遺跡（大賀2010）と合わせて概観したい。なお、当該遺跡群は友部丘陵南東端に位置し、小支谷がA区、B・C区、長峰東遺跡、長峰西遺跡を分断する（第1図）。C区はB区と同じ丘陵の先端に位置し、1基の陥穴が報告されている（C区3号土坑）。長峰東遺跡では重複する陥穴（1a・1b号陥穴）の他に、調査区北側の埋没谷上層（基本層序4層）で関山Ⅱ式および黒浜式期の遺物包含層が調査された。長峰西遺跡は少量の縄文土器や石器が散見された程度である。

これらの遺跡から確認された縄文土器は、早期前・中葉、前期中・後・末葉、中期前・後葉、後期初頭・前葉、晩期中葉に相当する。検出点数が少ないので有意な傾向を読み取ることは難しいものの、本地域が用益活動に繰り返し供されてきたことを窺わせる。とくに、前期中葉の資料が多くを占め、各調査地点に分布している。この状況はB2区1号住居跡など近在の集落<sup>1)</sup>から派生する活動域を反映したものと推察されよう。

B2区1号住居跡の所産時期は出土遺物から黒浜式古段階に比定された。住居跡の形態に着目すると、長方形の平面・長軸方向に偏る地床炉・6本の主柱穴・囲繞する壁柱穴など当該期の定型的な要素を備えており、土器型式と符号する<sup>2)</sup>。ただし、関東地方東部では住居の平面形や柱穴配置が弛緩する傾向にあり、平面が楕円形を呈する住居跡も多い（小松崎1997）。本事例は前期初頭から認められる系統だが、茨城県域では前期中葉関山Ⅱ式期ないし黒浜式期古段階から遅れて散見されるようになる（第285図）。壁周溝の非受容など異なる遷移を有するものの、関東地方西部からの影響を検証する必要がある<sup>3)</sup>。

陥穴はA区北側、C区、長峰東遺跡の5基が検出され、いずれも単体で設営されている。形態は、Ⅰ：平面が楕円形・短軸の断面がU字状（A区1号陥穴、C区3号土坑、長峰東遺跡1a・1b号陥穴）、Ⅱ：平面が長楕円形・短軸の断面がV字状（A区2号陥穴）の2種が認められ、長峰東遺跡1b号陥穴の底面には小穴が見受けられた。A区1号陥穴は遺物の出土状況から前期中葉関山Ⅱ式期に近い所産時期が予想される。茨城県下の陥穴を集成した武田石高遺跡の報告書（鈴木1998）では、形態Ⅰ・Ⅱ共に縄文前期以前に想定しており<sup>4)</sup>、本事例と整合する。当該期に比定されるB2区1号住居跡との関係は明瞭でない。



第285図 茨城県における縄文前期前半の6本主柱穴住居跡

注 1) B2区1号住居跡は陥穴の深度が浅く、残存状況が良くない。加えて、同じB2区に集中するピット（第7圖）などを考慮すると、型平されてしまった住居跡の存在が予想される。

2) 後森健一氏（藍澤 1981～1982）は関東地方西部における関山Ⅰ式～黒浜式の住居跡について、平面長楕形・6本主柱穴の系統を示した。3) 関山Ⅱ式期における定形的な6本主柱穴住居跡の事例は少数に止まる。また、前期前葉の事例が南小沢遺跡第79号住居跡（中村ほか1998）等で散見されるものの、関山Ⅰ～Ⅱ式期の様相を鑑みると本事例に直接系統するものではないようである。

4) 武田石高遺跡における分類では、ⅠがC類および底面に柱穴を有するC-p類に相当する。Ⅱは遺構上平の型平を鑑みA2類ないしB2類に比定されるが、陥穴の配置状況から縄文前期以前のA2類に帰属するものと見做した。

## 第2節 弥生時代

今回の調査で弥生時代の住居跡は69軒が確認された。平成19年度に調査されたC区(高野2008)でも10軒が確認されており、それらを含めると79軒になる。いずれも後期後半の十王台式期に比定され、笠間市域では最も住居軒数が多い集落となった。また、谷地を挟んだ西側の丘陵上には同時期の住居跡11軒が確認された長峰東遺跡(土生2010)が存在する。本節では、長峰東遺跡を含めた既往の調査成果を踏まえ、堀谷遺跡における弥生土器の編年と集落の変遷について検討していきたい。

### (1) 堀谷遺跡出土土器の変遷

十王台式土器は現在、鈴木素行氏により那珂川流域を中心に分布する型式群(薬王院式~武田式石高段階)と久慈川流域を中心に分布する型式群(富士山式~小祝式梶巾段階新期)に大別されている(鈴木素2010)。本遺跡の位置する瀬沼川流域の十王台式土器は茨城町大畑遺跡(長谷川1998)、矢倉遺跡(飯島1998)、人戸下郷遺跡(近藤2004、綿引・松木2006)などからなる大戸遺跡群の出土例から基本的には那珂川・久慈川流域系統の土器によって構成されていることが明らかになっている。本遺跡は瀬沼川の支流である瀬沼前川の左岸に位置しており、大戸遺跡群よりも約9km西に位置するものの、十王台式土器については、概ね同様な様相を呈している。ただし、典型的な那珂川・久慈川流域の十王台式土器から逸脱する資料も多いことから、本遺跡における十王台式土器の特徴を抽出してみたい。編年は鈴木素行氏の研究(鈴木素1998・2001・2010)を参考にしながら、その特徴を確認する。第286図では那珂川系の十王台式土器(1・3・4・11~13)、久慈川系の十王台式土器(2・5・6・14)を中心に掲載した。

1期 今回の調査区では確認されていないが、C区1・9号住居跡で該期の土器が出土している。薬王院式に並行する。

2期(1・2) A区37・64・74・85・86・98号住居跡、B2区4号住居跡、B3区11号住居跡、C区4号住居跡、1号竅穴が該当する。口縁部は幅が狭く、無文ないし縄文が施文されることが多い。隆帯は厚く、櫛歯の本数は3~4本と少ない傾向にある。頸胴界の区画文は直線文である。大畑式、富士山式に並行する。文様等から那珂川系・久慈川系を区分したが、区分は明瞭でない個体も多い。

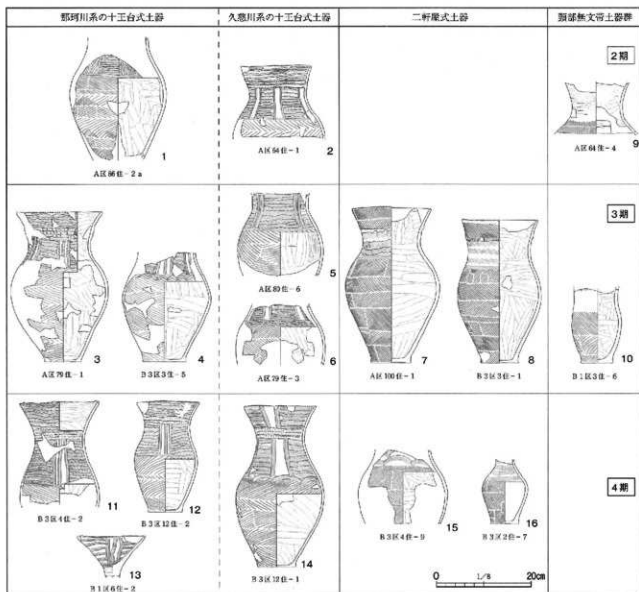
3期(3~9) A区16・18・27・29・39・44・49・52・58・66・77・79・80・100号住居跡、B1区1~3・6・7号住居跡、B3区3・5・8号住居跡、C区3号住居跡・1号竅穴状遺構、長峰東遺跡2・9号住居跡が該当する。口縁部は幅が拡張され、櫛歯文が施文される。また、頸胴界の区画には直線文と波状文ないし、上開きの連弧文が組み合わされたものが目立つ。武田式西端段階古期、小祝式兼塚段階に並行する。4期との区分は明瞭でなく、一部は4期に含まれる可能性もある。

4期(10~16) A区48・54号住居跡、B3区2・4・6・12号住居跡、C区2・10号住居跡、長峰東遺跡1・4・6・7号住居跡などが主な住居跡である。小祝式において頸胴界の区画文が下開きの連弧文となることを指標とする。武田式西端段階新期、小祝式梶巾段階古期に並行する。

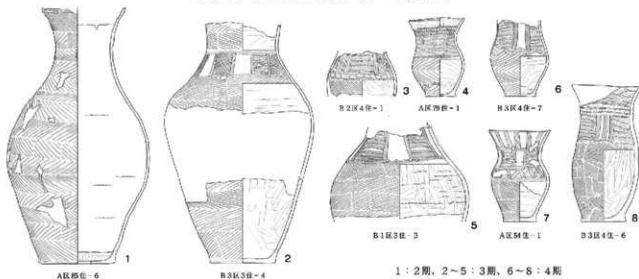
5期 本遺跡では非常に少なく、小片でしか確認できない。A区57号住居跡、B1区5号住居跡、長峰東遺跡12号住居跡などが該当する。武田式において頸部の隆帯が帯状刺突文に置き換わることを指標とする。長峰東遺跡12号住居跡ではS字寛B類と十王台式土器の共伴が確認されており、本時期には確実に土器器との共伴が確認できる。武田式石高段階、小祝式梶巾段階新期に並行する。

6期 古墳時代前期の上層器が主体的に出土する遺構を対象とした。古墳時代の上層器編年では前期後半の様相を呈する。A区1・4・5・8・23号住居跡、B3区7号住居跡、2号周溝墓が該当する。長峰東遺





第286図 弥生土器の変遷図（2～4期を抜粋）



第287図 典型的な十王台式土器から外れる個体

跡では3・5・10・11・13・14・15号住居跡が本時期に該当するが、このうち、3・5号住居跡は前期前半に帰属する。弥生土器も小片が伴うが多くは混入と考えられる。

## (2) 埴谷遺跡出土の十玉台式土器

第287図では典型的な那珂川・久慈川流域の十玉台式から外れる個体を抽出した。これらを概観すると製作技法において附加1条を典型とする附加条1種縄文の使用(1・4・7)、多量の石英・長石を含む胎土、底部の木葉痕、粘土を多量に使い、底部付近を厚く仕上げるなどの諸特徴がみられる。これらはいずれも二軒屋式土器の特徴であり、本遺跡の十玉台式土器は那珂川・久慈川流域の土器をベースとしながらも二軒屋式土器の製作技法を取り入れて造られていることが確認できる。文様要素では口縁部や頸胴界に櫛描山形文を施文することが目立つことがあげられる(7など)。これらは潤沼川中流域の遺跡群でも数点しか出土していない個体である。また、頸胴界の区画文に直線と一単位の幅が狭い上開きの連弧文を採用する個体(4)も目立つ。これらは在地の十玉台式土器の指標となる可能性があり、今後、類例の増加とともに型式学的検討が望まれる。

なお、胎土に金雲母を含むものは久慈川流域の製品であることが指摘されている(鈴木素1998)。A区27号住居跡4(第28図)は胎土に金雲母とともに多量の石英・長石を含み、頸部の縦直線文は3条一単位で那珂川流域の特徴を有する。A区61号住居跡1(第286図2)は頸部文様は久慈川系統ながら、胎土に金雲母を含まない。このように本遺跡では金雲母を含む胎土と久慈川流域における十玉台式土器の型式学的特徴が対応しない事例が多い。したがって、金雲母を含む個体をもって久慈川流域産の十玉台式土器と判断することはできず、金雲母の供給地を本遺跡周辺に求めることも視野に入れて考える必要がある。

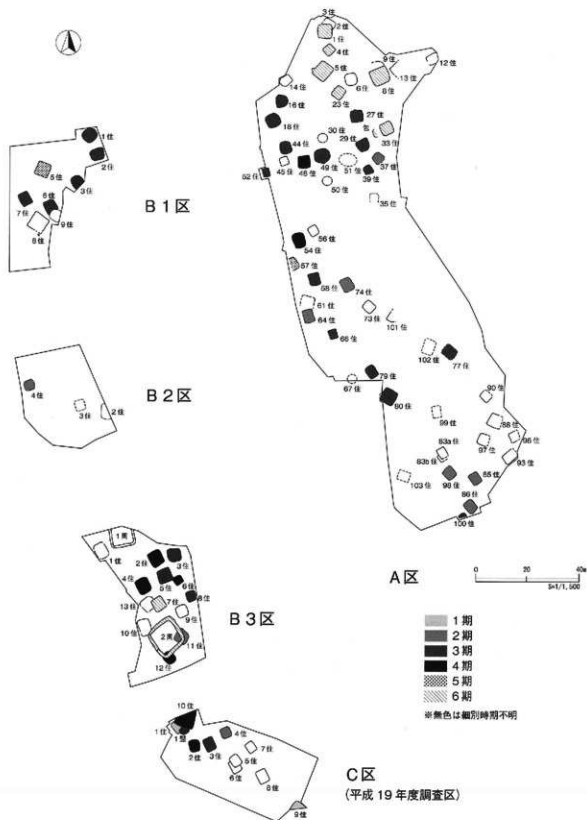
## (3) いわゆる二軒屋式土器について

「二軒屋式土器」は近年、鈴木正博氏による再検討(鈴木正1999・2008)の途上であり、型式名として使用することは適切でないかもしれないが、前項で触れた諸特徴に加え、8～10本歯の櫛描波状文・連弧文が施文されることなどから十玉台式土器とは明確に区別されるため、それらを指標として抽出した。

本遺跡出土の二軒屋式土器はA区100号住居跡(第286図7)、B3区3号住居跡(8)・4号住居跡(15)などで良好な個体が出土している。二軒屋式土器が確実に伴うのは3期からであるが、小片を含むと2～4期に伴出することが確認できた。十玉台式土器の層年に対応する形で変遷を見てみると、文様は3期までは頸部波状文、頸胴界の区画文が直線文であることが多いのに対し、4期では頸部文様は下開きの連弧文、頸胴界の区画は櫛状文であることが多い。埴谷遺跡出土の二軒屋式土器は出土弥生土器全体の約12%を占め、大戸遺跡群と比較すると、二軒屋式土器の組成比率が高い傾向にある。さらに、本遺跡の南方約600mに位置する友部町三本松遺跡(板野ほか2003)および、それ以西の遺跡では二軒屋式土器が主体となることから、本遺跡周辺が十玉台式土器の主体的な分布圏の西限と想定される。

## (4) その他の外来系土器・特殊な遺物

十玉台式・二軒屋式以外の土器で最も目立つのは頸部に無文帯を持つ土器群である。これらの土器群は現在数種類の型式名が与えられており、二軒屋式土器の中にも無文帯をもつものが存在するため、小片から型式を特定することは困難である。したがって頸部に無文帯を持つ土器群として一括した。出土弥生土器全体に占める比率は約1%である。第286図9は原体の異なる2種類の単節縄文を横位施文し、羽状構成をなしている。10は頸部に刺突文をめくらし、9と同様羽状構成をなす。原体は附加2条の附加条1種縄文である。いずれも潤沼川以南に系譜が求められる土器群である。その他、小片ながら回転結節縄文を施文する南関東系の土器がA区85号住居跡から1点(第72図16)、B1区の遺構外から1点(第235図5)、樽式土器の



第288図 弥生集落の変遷

模倣と考えられる土器が同じくB1区遺構外から1点(第235図2)出土している。土器以外の遺物では管玉2点(A区66住、B3区4住)鉄斧1点(A区83a住)が出土している。

(5) 集落の変遷

本遺跡では弥生時代後期以前の土器が確認できないことから、集落の継続期間は弥生後期後半から古墳時代前期後半までと推測する。以下では時期別に集落の変遷を概観する(第289図)。なお、B1~C区とA区の間は谷地となっており、谷地を「n」字状にとりまく舌状台地上に集落が立地する。

1期 住居はC区でのみ確認され、集落の開始期は舌状台地の先端部に住居が造られる。また、住居軒数も2~3軒の小規模な集落であったと考えられる。

2期 居住域の中心はA区南端部へと移行し、A区の中央部などにも住居が散在する。1期に比べやや住居軒数が増えるものの、10軒を超えることはない想定される。

3期 住居跡が急増する時期である。A区北端部からB1区にかけてこの時期の住居が集中する。B3区でもややまとまる。谷地を挟んだ西側の丘陵上でも集落(長峰東遺跡)の造営が開始される。

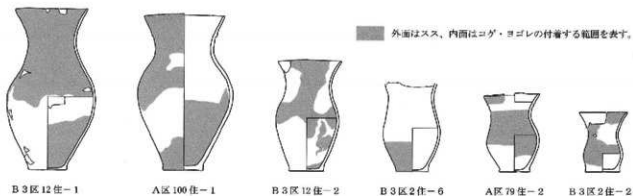
4期 分布はB3区~C区とA区北半~B1区、長峰東遺跡にまとまりが見られる。集落の中心が西ないし、北西方向へと移行していく様相が捉えられる。

5期 この時期の住居は極端に少なくなるが、5期に相当する土器が本遺跡でほとんど確認できないことから、4期とした土器がこの時期まで残る可能性もある。A・B1区、長峰東遺跡に住居が散在する。

6期 住居軒数は再び増加傾向にあり、A区の北端部や長峰東遺跡でまとまって住居が造られる。B3区では弥生時代の13号住居跡を壊して7号住居跡が造られ、4期の12号住居跡を壊して2号周溝墓が造成される。土器とともに住居構造・墓制を含めた古墳時代への移行が完了する時期と考えられる。

以上、埴谷遺跡における弥生時代後期の土器と集落の変遷を中心に概観してきたが、4期において確実な古墳時代の土器と弥生土器の共伴が確認できなかったものの、この時期に一部住居の形態が正方形を呈し、明確な貼床をもつ住居跡(B1区8号住居跡など)が出現する。このことから、4期は古墳時代への移行を示す一つの画期と言えよう。埴谷遺跡の所在する小原地区では近年、三本松遺跡、小原遺跡(吉田ほか2005)、長峰東遺跡、長峰西遺跡(大賀ほか2010)などで十玉台式期の集落が相次いで報告されており、従来不明であった該期の集落・土器様相が急速に判明しつつある。本遺跡では調査範囲外にも住居の分布が濃密であることが予想され、推定住居軒数は100軒を超すとみられる。当該期の集落としては大洗町髭釜遺跡や土浦市原田遺跡群に次いで茨城県内でも屈指の規模を有する。今後検討すべき課題は多いが、埴谷遺跡の調査成果は澗沼川流域における弥生・古墳時代研究に大きく寄与するものと評価できよう。

注 1) 鈴木正博氏のご教授による。



第289図 付図・弥生土器のスス・コグ

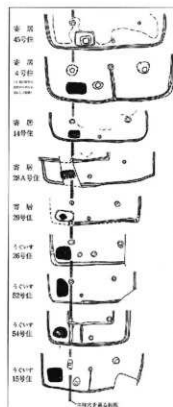
## 第3節 古墳時代

埴谷遺跡の古墳時代の住居跡は、前期が11軒、後期が4軒である。前期の住居跡は、A区に9軒、B区に2軒で、A区北部には7軒が集中しており、遺構の残存状態がよく遺物の量も多い。

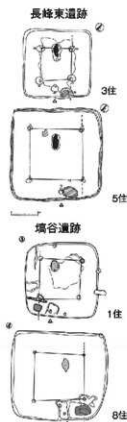
A区北部の住居は、大形で4本主柱穴を持つものが3軒、やや小形で主柱穴をもたないものが4軒ある。内部の施設は大形・小形とも炉、出入り口ピット、貯蔵穴を共通して持っており、小形の堅穴も独立した生活の単位と考えられる。大形の5号住居と小形の4号住居は出土遺物から見ると壺や器台に共通した形態的特徴があり、建物の配置や主軸方向も関連性が見られ、同時期に併存していたものと思われる。大形住居の1・5・8号住居の出土遺物には、有段の鉢形や直口縁の壺があり、壺・甕は胴部中に最大径があり丸く膨らみ形状で、埴の底部は小さく窪むといった特徴がある。1号住居には口縁端部を面取りする小形の甕や器台があり、8号住居には半球形の大形の鉢があるなど違う面もあるが、共通する器種構成から大きく捉えると、各住居は前期の後半の遺物を主体としていると考えられる。

古墳時代前期の住居の新旧を住居の形態的な特徴から捉える方法として、貯蔵穴の位置についての視点がある(第290図)。県南部の土浦市にある寄居・うぐいす平遺跡の古墳時代前期の住居群には、前期の古い時期の住居(寄45号住)から新しい時期(う15住)までの28軒の住居がある。古い時期の住居の場合、主柱穴を縦に結ぶ方向の線を基準として貯蔵穴の位置を見ると貯蔵穴は線の内側に位置している。新しい時期の住居の貯蔵穴は住居コーナー寄りであり、寄居14住や寄居28A住などその中間の位置にあるものもある。時期を追って並べた図が第290図で、貯蔵穴は住居の内側からコーナーに向かって移動しているように見える。埴谷遺跡周辺で同じ状況が見られるかを見てみると、埴谷遺跡に隣接する長峰東遺跡の3号・5号住居跡は、元屋敷系の大形の高坏、裾広がりの小形開脚高坏を持ち、古墳時代前期前半のものと考えられる。これらの住居の貯蔵穴の位置は住居の柱穴の縦方向を結ぶ線の内側に位置する。これに対し、埴谷遺跡の8号住居跡の貯蔵穴は住居の柱穴を結ぶ線の上かやや内側、1号住居は柱穴線上かそのやや外側の位置にある。出土遺物が示す年代は、住居が機能していた期間の後半～終末頃に使用されていた土器群であろうから出土遺物から見ると前期の後半に廃絶していると考えられるが、貯蔵穴の位置から見た集落の始まるの時期は、出土遺物から見る時期よりも古い時期となるものと思われる。

古墳時代後期の住居跡は4軒あり、A区北部に1軒、南部に3軒ある。出土遺物は、土師器では坏、鉢、甕、壺があり、石製品では不定形の大形



第290図「貯蔵穴の移動」より



第291図 長峰東・埴谷遺跡住居の比較

砥石や板状砥石、軽石がある。土師器環は、15号住居のように無赤彩のものを主体に赤彩品が少量ある組み合わせや92・94号住居のように体部内外面にミガキを入れたものが主体のものもある。丸底で口縁部が内湾形態の土師器環に黒色処理のものはないので、6世紀中頃から後半を主体とした時期のものと思われる。

#### 第4節 奈良・平安時代

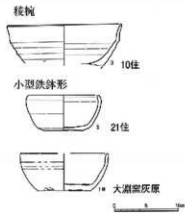
堀谷遺跡A区からは、奈良・平安時代の竪穴住居跡が33軒、B区からは2軒、掘立柱建物跡はA区から7棟、B区からは1棟確認されている。A区の竪穴住居跡を出土遺物から見ると、8世紀の前葉頃に廃絶しているものが1軒(46住)、8世紀中葉頃の廃絶が5軒(26・38・55・76・84住)、8世紀後半～後葉頃のものが6軒(10・11・24・42・59・82住)、9世紀前葉頃のものが8軒(7・21・31・47・69・70・71・78住)、9世紀中葉頃のものが4軒(40・63・65・75住)、9世紀後葉頃のものが6軒(17・41・43・53・60・95住)、10世紀前葉頃のものが3軒(19・22・95住)である。掘立柱建物は、7号掘立出土遺物が9世紀前葉頃のもので、3号掘立は、9世紀後葉頃の住居に壊されており、7号掘立は10世紀前葉頃の住居に壊されていることなどから、掘立柱建物は少なくとも8世紀後葉～9世紀代の中では竪穴住居とともに存在していたものと見られる。集落の変遷をまとめると、8世紀の前半に最大5軒程度から始まった集落は、8世紀中葉～後葉と次第に数を増し、掘立柱建物が建てられ、9世紀代には竪穴住居跡10軒を超える集落に成長したものと見られる。集落は9世紀をピークに10世紀前葉ころまで継続し、その後集落は断絶したと思われる。

集落を構成する竪穴住居跡の平面形状は、8世紀前半代は1辺5m前後のやや大型で4本主柱穴を持つものが主体で、8世紀後半代はやや小形化傾向が見られるとともに、4本主柱穴の柱穴の位置に変化が見られる。カマド側2本が北壁際に寄った位置に開くもの(59・47住)、さらに入り口側の主柱2本も壁直下に開くもの(75住)が見られる。その後、9世紀代には床上に主柱穴を持たない小形化した住居が主体になる。出入り口ピットは弥生時代後期・古墳時代から奈良時代、9世紀になっても傾斜する一本柱を設置した形式のものが続くが、9世紀後半代に床上には出入り口ピットの痕跡がなくなり、出入り口の位置が不明になるものもある。掘立柱建物については、集落の中心域に3群に分かれて建てられているが、それらの先後関係や竪穴住居の集落との関係は不明な点がある。

出土遺物は、土師器、須恵器、灰軸陶器、土製品、石製品、金属製品がある。土器類は、須恵器の供膳具が多く、つぎに土師器の甑



第292図 竪穴住居の変化



第293図 特殊な器形の須恵器

や須恵器の甕・壺が多い。土師器の供膳具は8世紀後半から9世紀前半段階で少量見られ、9世紀後半以降須恵器の供膳具と数量が逆転する。灰軸陶器は1点長頸瓶が出土しているのみで、非常に少ない。土製品は円柱状のカマド支脚が8世紀代の住居から5点出土している。土器祭祀に使われたと思われる手握上器は、8世紀前葉の46号住居から2点出土している。石製品は、砥石が6点あり、小形定形品は凝灰岩製で、大形定形のものや大形で不定形ものは砂岩、安山岩、雲母片岩製と多様な種類がある。鉄製品も少なく、70号住居から刀子が1点出土している。

最も数多く出土している須恵器の中には、8世紀中葉頃の38号住居の酸化焰焼成の盤、9世紀前葉頃の7号住居の焼き歪みの激しい坏、9世紀中葉頃の40号住居の焼き歪んだ盤といった、窯場近くで得られる不良品の継続的利用が見られる。また、8世紀中葉頃の26号住居の須恵器坏底部の「一」「井」のヘラ記号、9世紀前葉頃の7号住居の「\*」のヘラ記号、9世紀中葉頃の40号住居の須恵器坏・盤底部の「一」「大」のヘラ記号というように、ヘラ記号を多用した窯場製品の使用も、8世紀後半から9世紀中葉にかけて継続的に行っている点に特徴が見られる。ほとんどの須恵器は在地の製品であるが、8世紀中葉頃の26号住居からは河西産と見られる壺形の須恵器が出土している。

特殊な器形の須恵器では、10号住居跡出土の大型の残椀や、21号住居出土の小形鉄鉢形坏、60号住居出土の大形高台付鉢がある。21号住居の坏は、笠間市大淵窯のA地点1号窯の灰原出土品にやや似た器形のものがあがる。60号住居の大形高台付鉢は、須恵器生産窯で類似例は今のところ見られないが、同じ笠間市内の平安時代の寺崎台地遺跡から、似た器形のものが出土している。現在調査中の小原地区の遺跡からも類似品が少数確認されており、分布の地域的な偏りは、笠間市域がこの鉢型須恵器の生産地であることを推測させる。

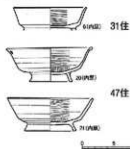
土師器の供膳具では、8世紀後半の31号住居の6の高台付坏や8世紀後葉頃の47号住居の20・21の高台付坏が非常に特徴のある土器である。これらは土器制作の前半段階に、須恵器と同じ器形イメージのもとロクロを使用して成形され、後半段階に土師器生産技術である内面黒色処理とミガキを施し、酸化焰焼成で仕上げられている。この須恵器の器形に近いロクロ使用内黒土師器は、他に図示できない細片が他の住居でも見られ、多くはないが一定量流通しているようである。

墨書土器は、9世紀後葉頃に見られ、大形高台付鉢須恵器を出土した60号住居から、土師器坏底部に「□



第294図 須恵器大形高台付鉢

土師器



第295図 8世紀の土師器供膳具



第296図 「□山寺」墨書(60住)

山寺」と書かれた寺院名を示すと思われるものが出土している。

## 第5節 中世

塚谷遺跡の中世の遺構は、A区の中央を南北に走る溝、溝と直交して東西方向に延びる道路状遺構、A区の中央部に分布する地下式坑である。溝は、南北で規模が違い、北側の溝は幅・深さとも区画の役割程度の溝で、南側の溝は底部が平坦で幅も広く堀のような防御の溝と見られる。南側の規模の大きい溝は同じ形状の溝を少しずらして2回掘削している。道路状遺構は、南北方向に延びる台地東斜面を切り通しの溝状に掘削し、道路として使用している。南北方向の溝と交差する部分で、溝が止まっており、道路面はさらに西に向かって延びていたものと思われ、道路と溝は一連の時期のものと考えられる。道路状遺構や溝からは古瀬戸の深皿や常滑広口壺破片が出土しており、中世後半代でも15世紀前後頃の遺構と考えられる。

地下式坑は、全部で7基あり、分布は中央部道路状遺構の北側に2基、道路状遺構の南側に5基ある。北側の1基は、主室が塚坑から見て、縦長の平面形状で、堅坑底面から緩やかなスロープを持っている。南側にも縦長平面の地下式坑があり、この覆土中から古瀬戸平坑が出土している。15世紀頃の遺構になるものと思われる。

### 参考文献

- 飯島一生 1998『矢倉遺跡』【北関東自動車道(友部～水戸)建設地内埋蔵文化財調査報告書】Ⅰ 財団法人茨城県教育財団  
 飯野善俊ほか 2003『三本松遺跡』友部町三本松遺跡調査会  
 茨城県考古学協会・十王町教育委員会 1999『茨城県における弥生時代研究の到達点～弥生時代後期の集落構成から～』  
 浦和敏郎 2004『戸崎中山遺跡』財団法人茨城県教育財団  
 海老澤隆 2000『茨城県における弥生後期の土器編年』【『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会  
 大貫健ほか 2010『長峰西遺跡』笠間市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi  
 小松時彦 1994『主要地方流水戸針田佐原遺跡道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団  
 小松崎彦彦 1997『一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書3』財団法人茨城県教育財団  
 近藤伊重 2004『大戸下郷遺跡』財団法人茨城県教育財団  
 菅森健一 1981～1982『縄文時代前期の住居と集落(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)』【『土曜考古』土曜考古学研究会  
 縄文時代研究班 1993『茨城県における縄文時代前期前半の住居跡の形態について』【研究ノート2号】財団法人茨城県教育財団  
 鈴木正博 1995『茨城弥生式の墓塚』【古代】100号 早稲田大学考古学会  
 鈴木正博 1999『北関東後期弥生式「二軒屋式」の研究』【日本考古学協会第65回総会 研究発表要旨】日本考古学協会  
 鈴木正博 2008『井頭遺跡から見た「二軒屋・須和田二極構造」への展望。』【栃木県考古学協会誌】29号 栃木県考古学協会  
 鈴木素行 1998『武田石高遺跡-旧石器・縄文・弥生時代編-』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社  
 鈴木素行 2001『武田西端遺跡-旧石器・縄文・弥生時代編-』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社  
 鈴木素行 2005『船塚遺跡』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社  
 鈴木素行 2010『弥生時代後期「十王台式」の集落構造。』【武田遺跡群 総括・補遺編】ひたちなか市教育委員会  
 高野浩之 2008『塚谷遺跡』笠間市教育委員会・(株)地域文化財コンサルタント  
 千草重樹 1995『寺崎台遺跡』笠間市寺崎台遺跡発掘調査会  
 中村敬治ほか 1998『茨城中央上乗田地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団  
 中山仁美 1987『笠間山大原遺跡』笠間市史編纂委員会  
 能高清光ほか 2007『小原遺跡発掘調査報告書』笠間市小原遺跡発掘調査会  
 長谷川彰 1998『大畑遺跡』【北関東自動車道(友部～水戸)建設地内埋蔵文化財調査報告書】Ⅰ 財団法人茨城県教育財団  
 土牛朗治 1994『貯蔵穴の移動について』【研究ノート】3号 財団法人茨城県教育財団  
 土生朗治 2010『長峰東遺跡』笠間市教育委員会・(有)毛野考古学研究所  
 藤田典夫 2000『栃木県における弥生後期の土器編年』【『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会  
 吉田寿ほか 2005『小原遺跡』友部町小原遺跡調査会・大成エンジニアリング株式会社  
 補編英樹・松本直人 2006『大戸下郷遺跡2』財団法人茨城県教育財団



# 写真図版





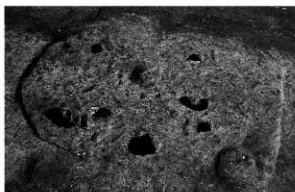
1号陥穴完掘状況(北東から)



2号陥穴完掘状況(東から)



6号住居跡完掘状況(南から)



14号住居跡完掘状況(南東から)



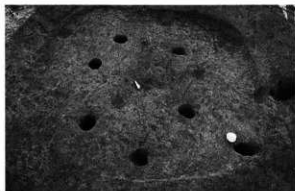
16号住居跡完掘状況(南から)



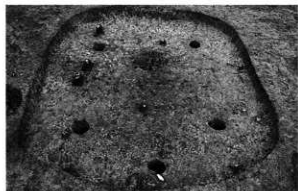
27号住居跡完掘状況(南から)



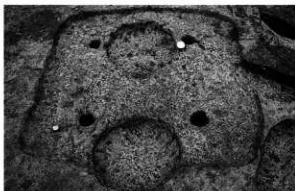
29号住居跡完掘状況(南東から)



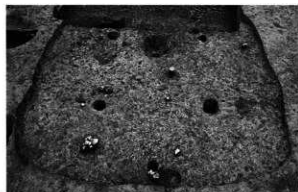
37号住居跡完掘状況(北東から)



41号住居跡完掘状況(南から)



45号住居跡完掘状況(南から)



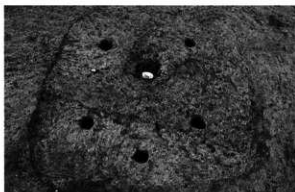
48号住居跡完掘状況(南から)



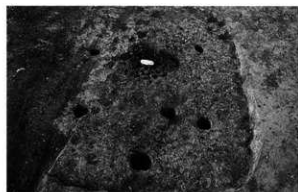
49号住居跡完掘状況(南から)



54号住居跡完掘状況(南東から)



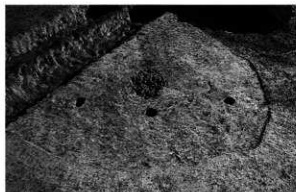
56号住居跡完掘状況(南東から)



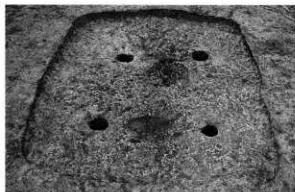
57号住居跡完掘状況(南東から)



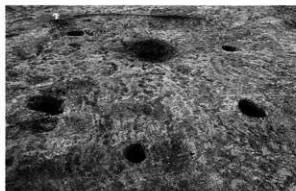
58号住居跡完掘状況(東から)



67号住居跡完掘状況(北西から)



73号住居跡完掘状況(南東から)



77号住居跡完掘状況(南東から)



79号住居跡完掘状況(南東から)



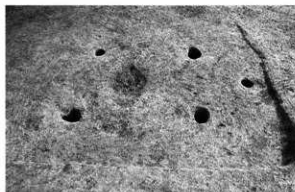
85号住居跡完掘状況(南東から)



85号住居跡遺物出土状況(南から)



86号住居跡完掘状況(北東から)



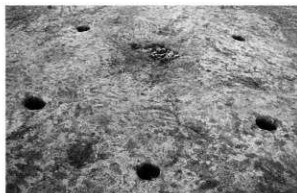
88号住居跡完掘状況(北西から)



93号住居跡完掘状況(北西から)



97号住居跡完掘状況(北東から)



102号住居跡完掘状況(南西から)



1号住居跡遺物出土状況(南から)



1号住居跡遺物出土状況(南西から)



1号住居跡掘り方完掘状況(南から)



4号住居跡完掘状況(南東から)



4号住居跡遺物出土状況(南東から)



5号住居跡遺物出土状況(南東から)



8号住居跡完掘状況(南から)



8号住居跡出入口ピット(西から)



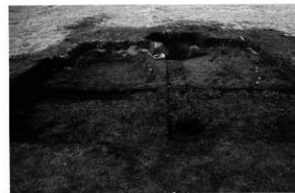
15号住居跡完掘状況(南から)



15号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



33号住居跡完掘状況(南東から)



87号住居跡掘り方完掘状況(南から)



92号住居跡完掘状況(南から)



7号住居跡遺物出土状況(西から)



7号住居跡カマド遺物出土状況(西から)



10号住居跡完掘状況(南東から)



11号住居跡完掘状況(南から)



17号住居跡完掘状況(南から)



17号住居跡カマド支脚出土状況(南東から)



19号住居跡完掘状況(南から)



19号住居跡カマド完掘状況(南から)



21号住居跡完掘状況(南から)



22号住居跡完掘状況(南西から)



24号住居跡完掘状況(南から)



24号住居跡遺物出土状況(南から)



26号住居跡完掘状況(南から)



31号住居跡完掘状況(南から)



38号住居跡完掘状況(南から)



38号住居跡カマド遺物出土状況(南から)





38号住居跡旧床面検出状況(南から)



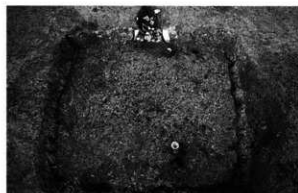
40号住居跡完掘状況(南西から)



40号住居跡カマド遺物出土状況(南西から)



41～43号住居跡完掘状況(南から)



41号住居跡完掘状況(南から)



41号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



41号住居跡カマド完掘状況(南から)



43号住居跡(南から)



43号住居跡カマド支脚出土状況(南から)



46号住居跡完掘状況(南から)



46号住居跡カマド完掘状況(南から)



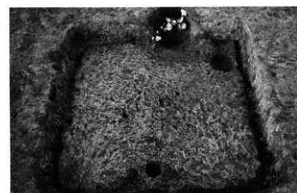
46号住居跡掘り方完掘状況(南から)



47号住居跡完掘状況(南から)



47号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



53号住居跡完掘状況(南から)



53号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



55号住居跡完掘状況(南西から)



59号住居跡完掘状況(南から)



60号住居跡完掘状況(東から)



60号住居跡掘り方完掘状況(南から)



65号住居跡完掘状況(西から)



65号住居跡掘り方完掘状況(西から)



75号住居跡完掘状況(南から)



84号住居跡完掘状況(南東から)



1号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



3号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



4号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



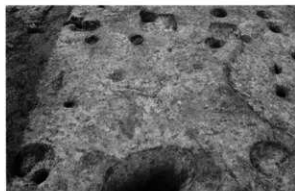
6号掘立柱建物跡完掘状況(南東から)



7号掘立柱建物跡完掘状況(南東から)



11号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



12号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



1号方形周溝状遺構完掘状況(南から)



1号地下式坑完掘状況(南東から)



2号地下式坑完掘状況(南から)



3号地下式坑完掘状況(西から)



4号地下式坑完掘状況(西から)



7号地下式坑完掘状況(東から)



1号井戸完掘状況(東から)



2号井戸完掘状況(東から)



A区北側土坑群完掘状況(東から)



溜井状遺構完掘状況(北東から)



1号溝完掘状況(西から)



2号溝・1号段切り完掘状況(南から)



5号溝完掘状況(北から)



7号溝・1号道路跡完掘状況(東から)



7号溝・1号道路跡完掘状況(西から)



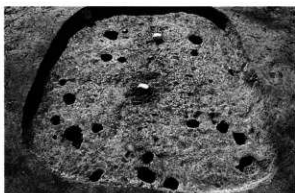
8・9号溝完掘状況(北から)



8・9号溝完掘状況(南から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



2号住居跡完掘状況(東から)



3号住居跡完掘状況(南東から)



3号住居跡遺物出土状況(北東から)



4号住居跡完掘状況(南から)



6号住居跡完掘状況(南東から)



7号住居跡完掘状況(南東から)



8号住居跡完掘状況(南東から)



1号石器集中地点遺物出土状況(北から)



1号石器集中地点遺物出土状況(北から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



1号住居跡掘り方完掘状況(南東から)



2号住居跡完掘状況(南から)



2号住居跡掘り方完掘状況(南から)



4号住居跡完掘状況(南から)



1号溝完掘状況(南東から)





1号住居跡完掘状況(南東から)



2号住居跡完掘状況(南東から)



3号住居跡遺物出土状況(南から)



3号住居跡遺物出土状況(東から)



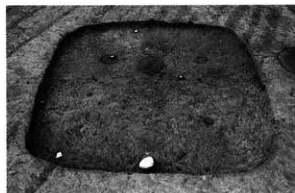
4号住居跡完掘状況(南東から)



5号住居跡完掘状況(南東から)



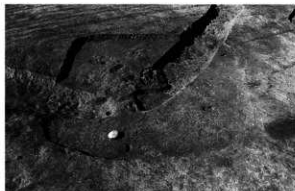
8号住居跡完掘状況(南から)



9号住居跡完掘状況(南から)



10号住居跡完掘状況(南から)



11号住居跡完掘状況(東から)



12号住居跡完掘状況(南東から)



7号住居跡完掘状況(南東から)



7号住居跡遺物出土状況(北東から)



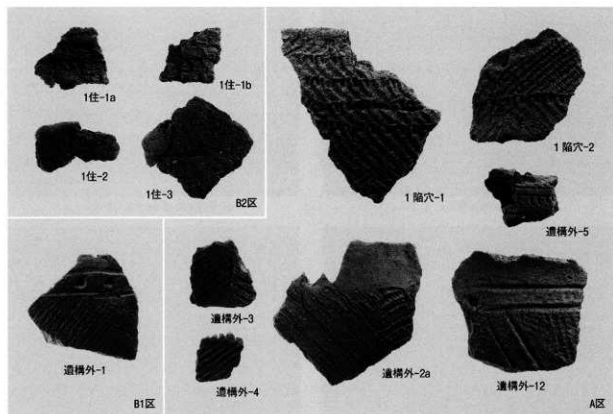
1号周溝墓遠景(北西から)



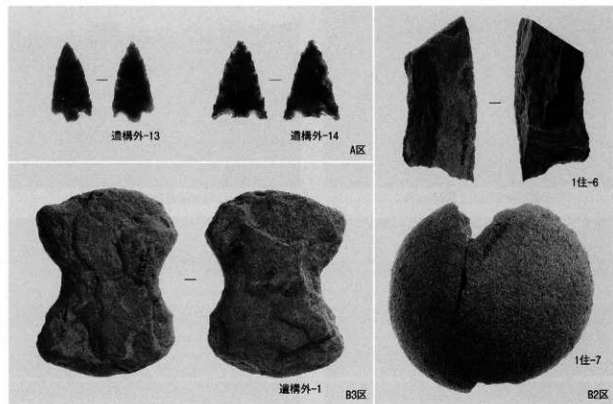
1号周溝墓完掘状況(南から)



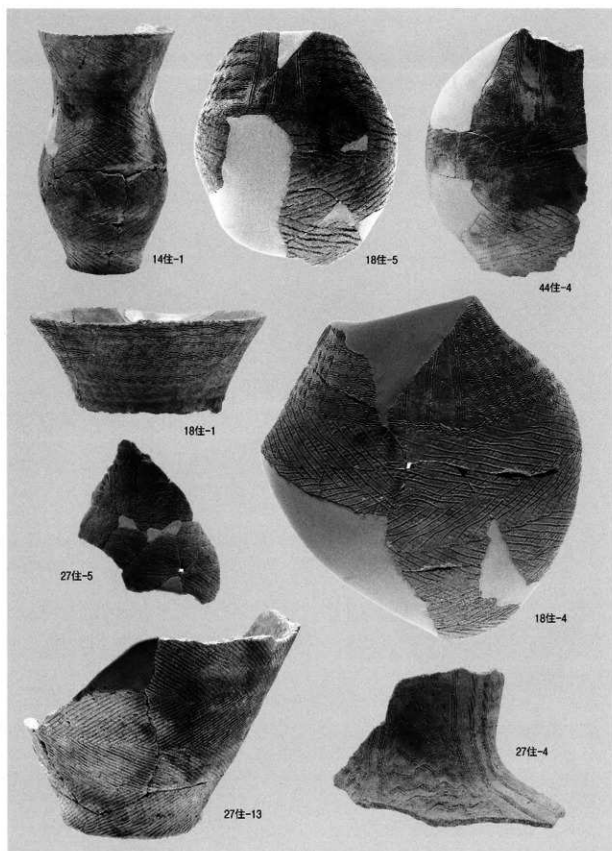
2号周溝墓完掘状況(北から)

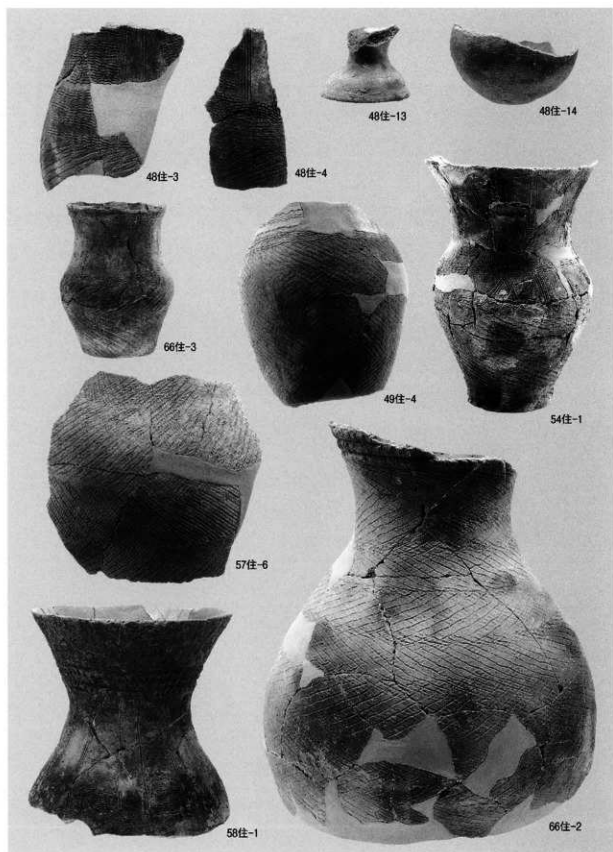


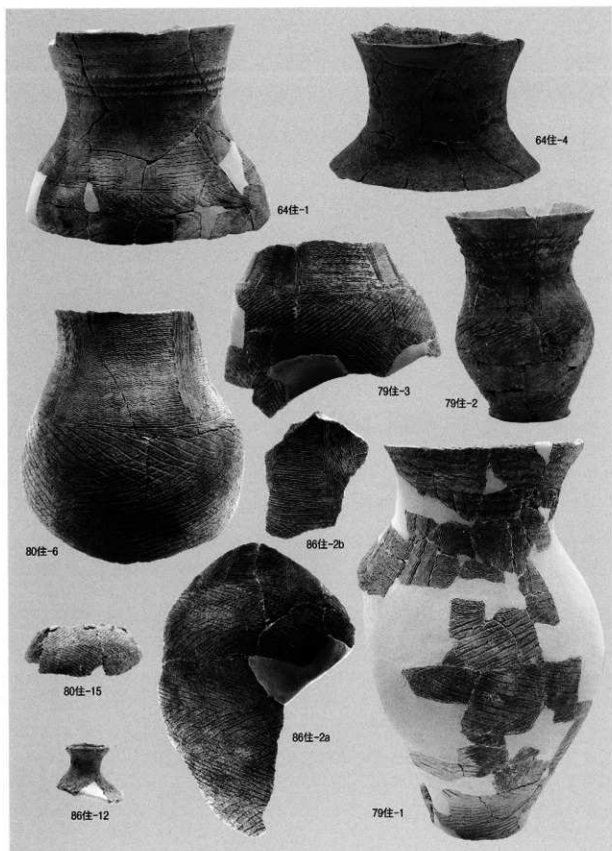
縄文土器 S=1/2

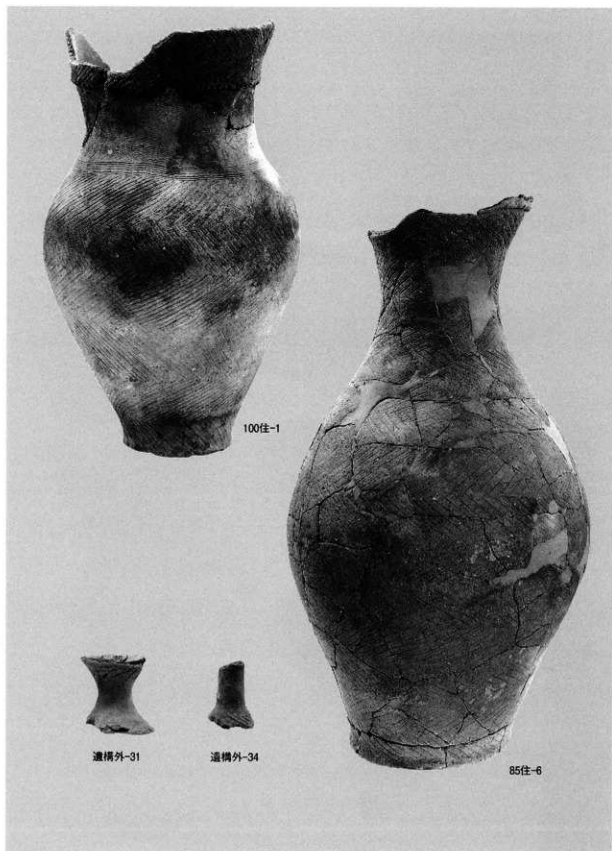


石器 S=1/1, 1/2

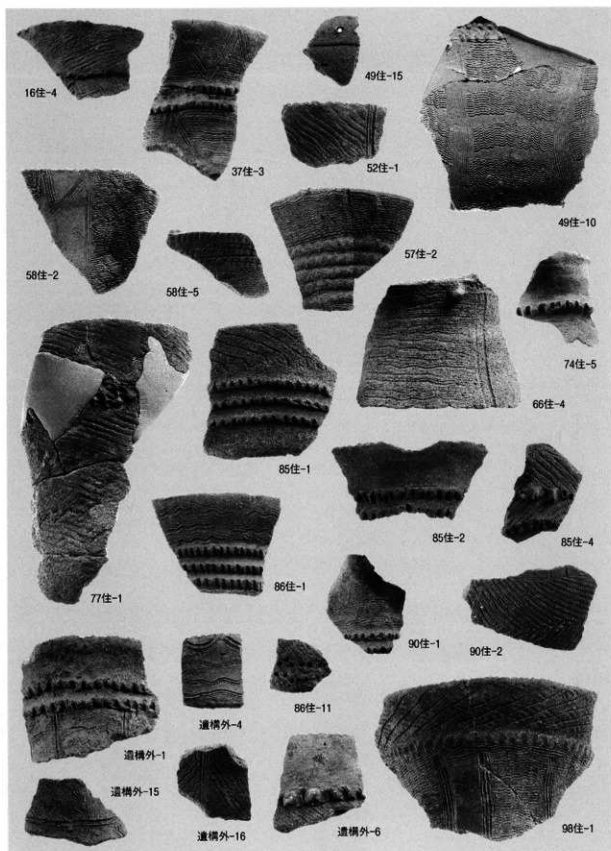




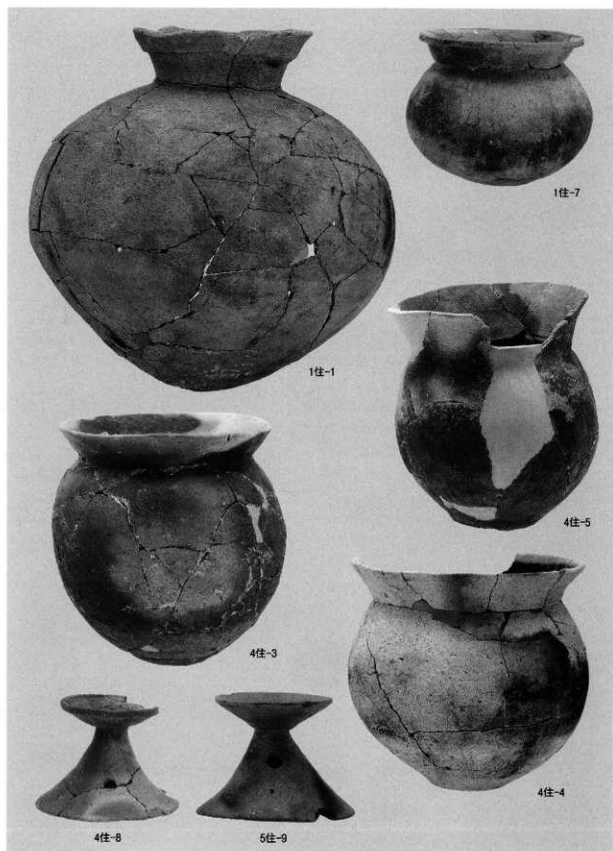




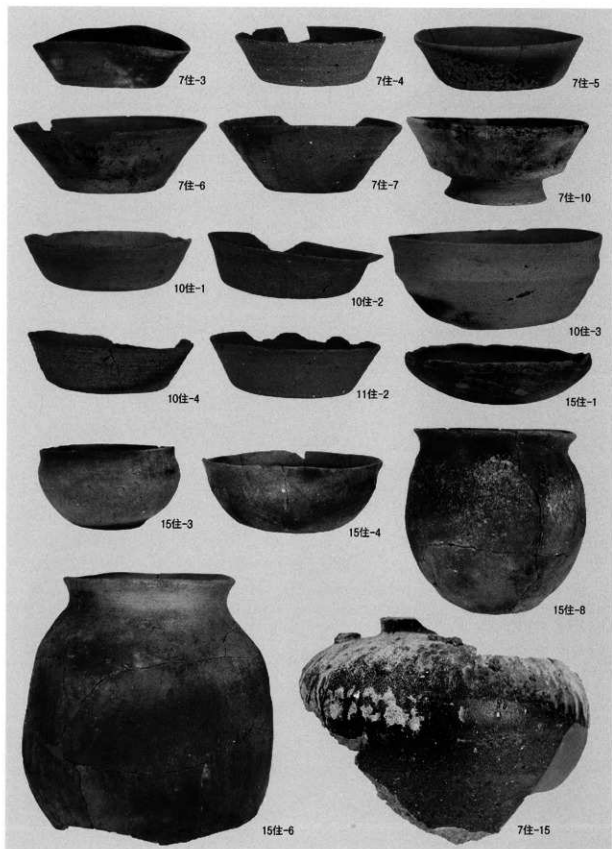
S-1/3(85住-6はS-1/4)

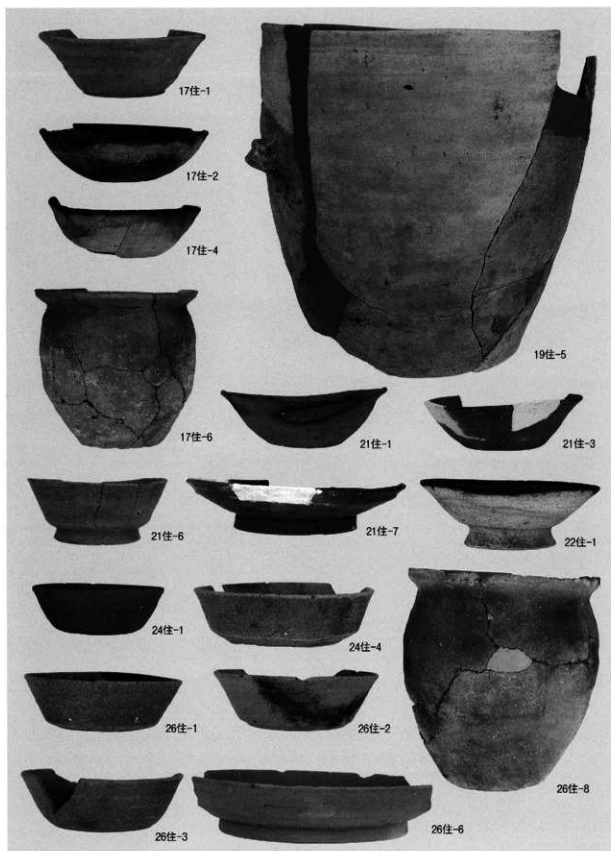


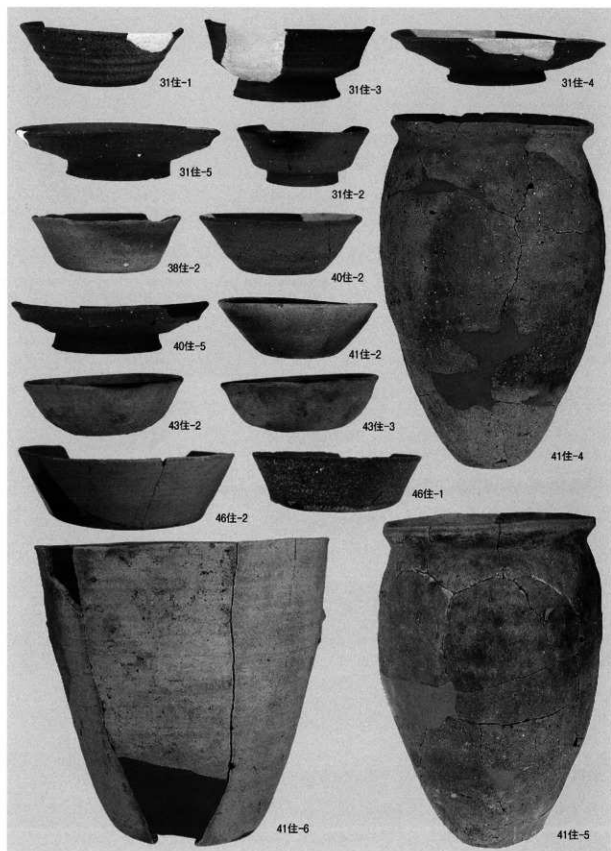




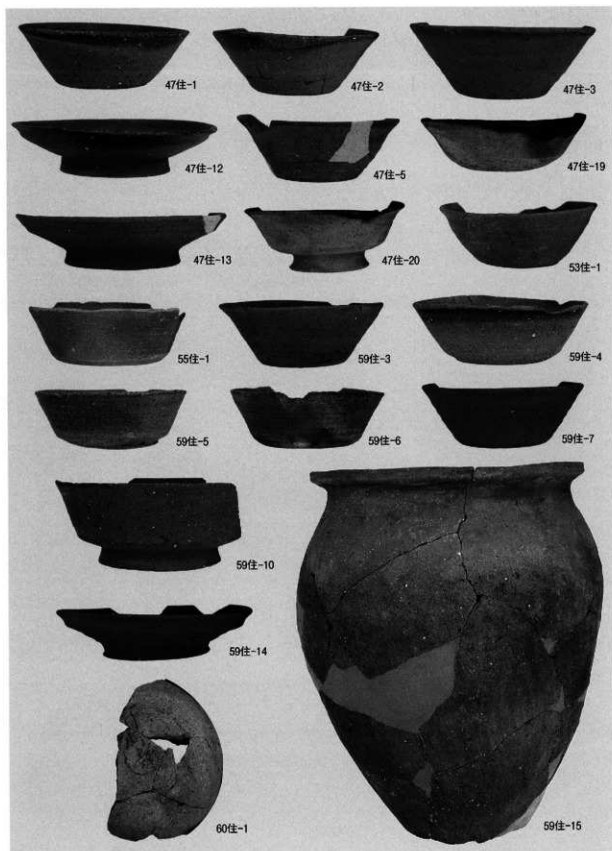


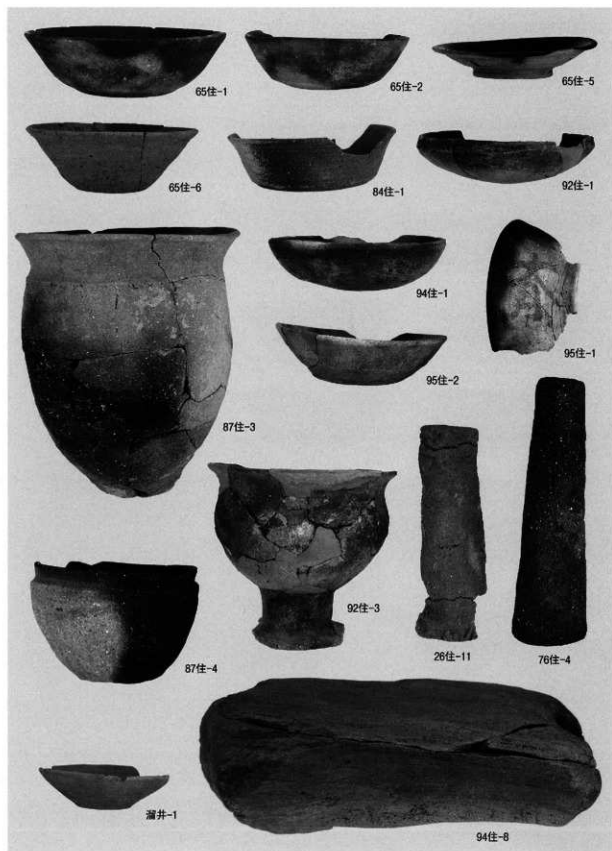


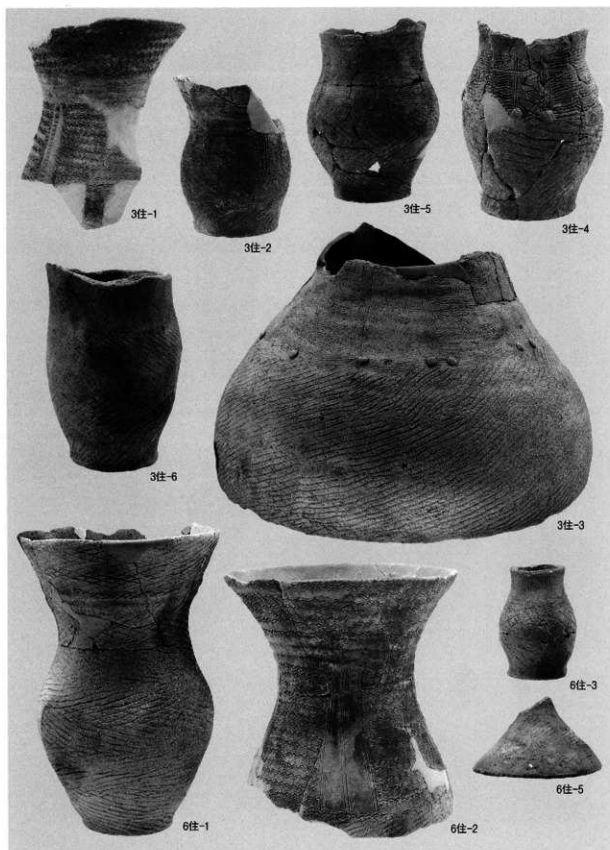




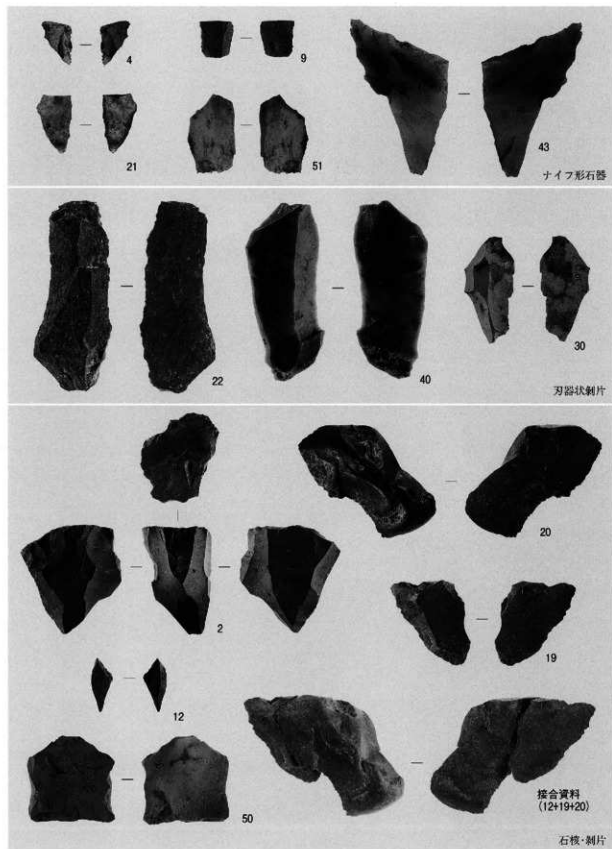
S=1/3(41住-4・5・6はS=1/4)

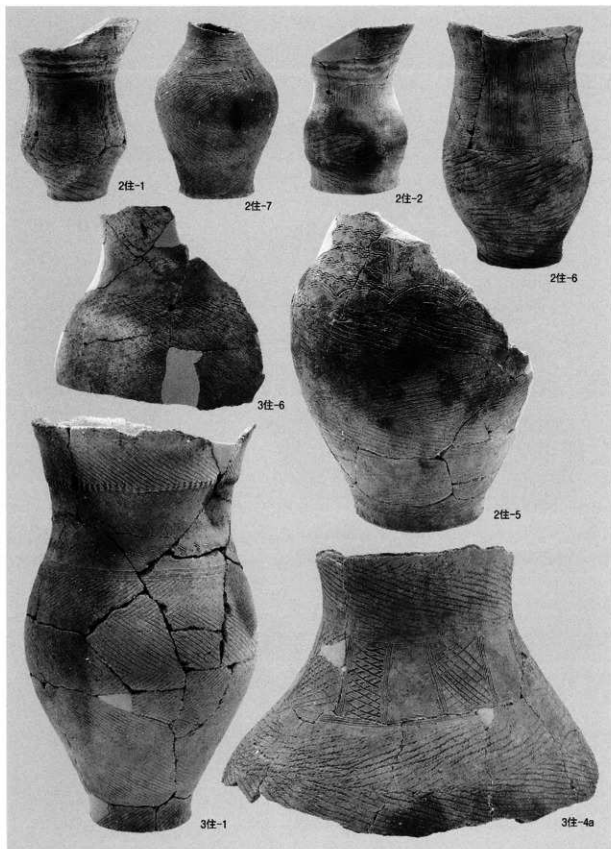


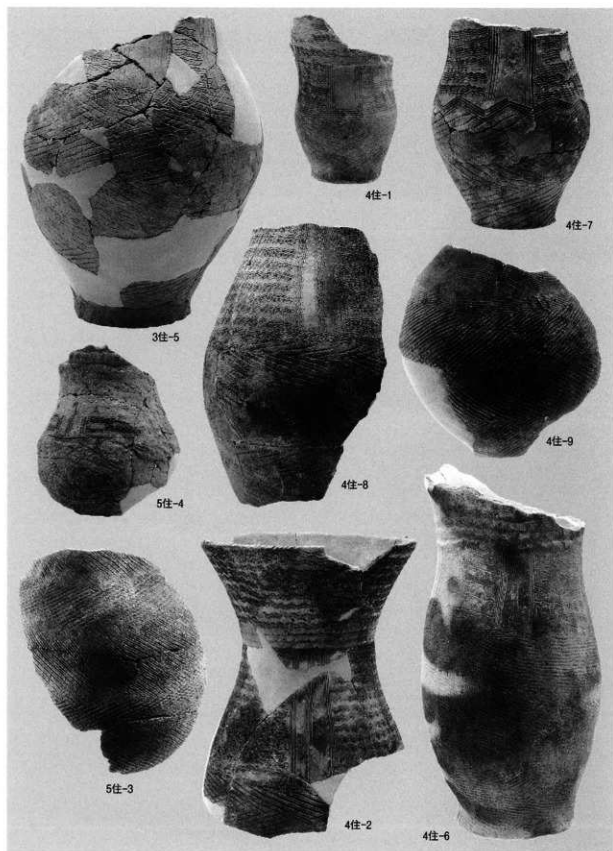


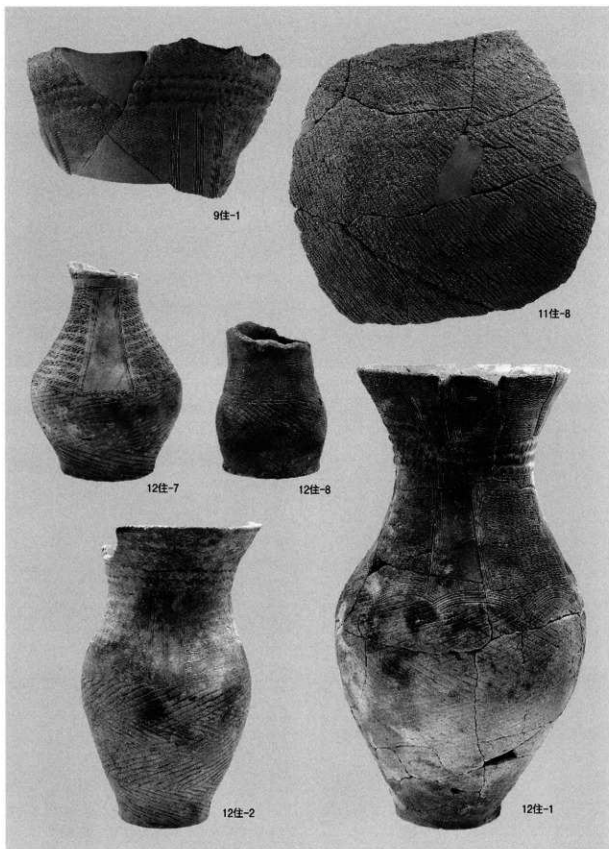


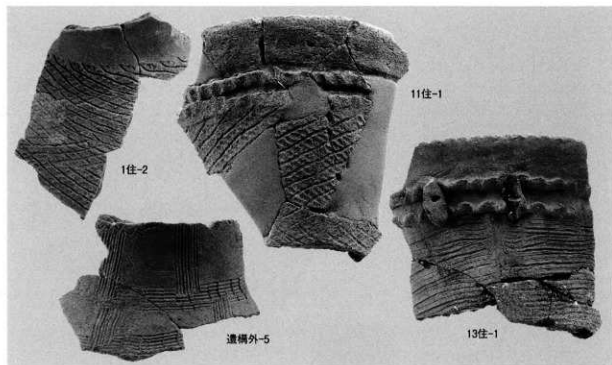




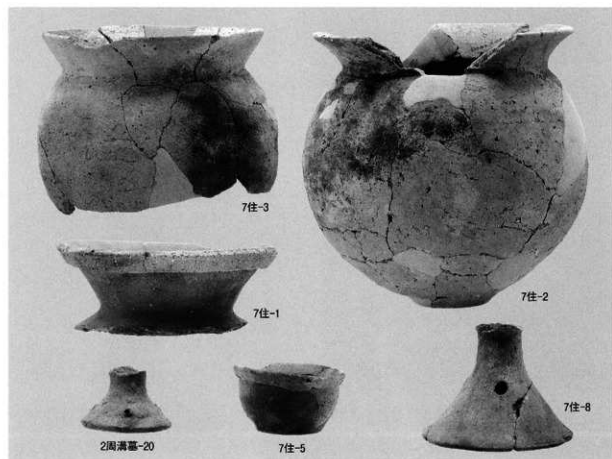




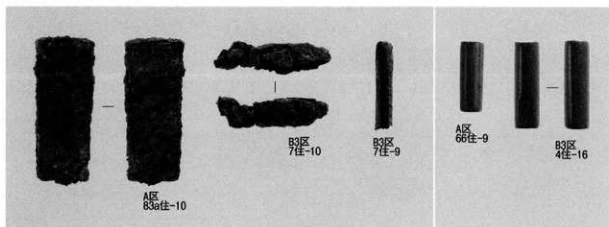




弥生時代 S=1/2

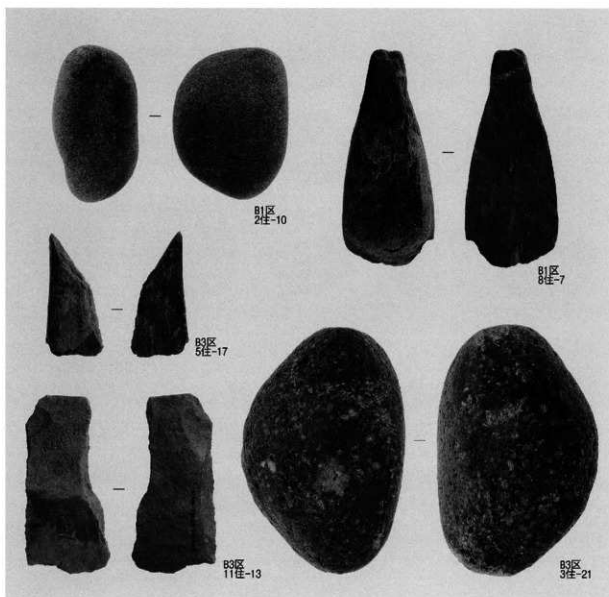


古墳時代 S=1/3

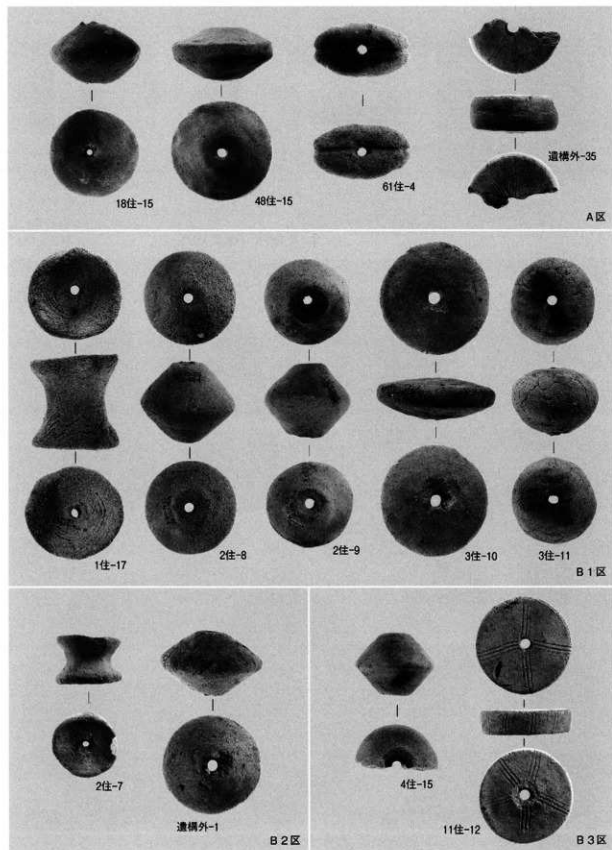


鉄製品 S=1/2、鋼製品 S=1/1

石製玉頸 S=1/1



石器 S=1/2



## 報告書抄録

ふりがな	はんがいのせき							
書名	堀谷遺跡2							
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	常深尚、上生朗治、南田法正、淺間陽、高橋清文、上井道昭							
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所							
所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1							
発行機関	笠間市教育委員会							
所在地	〒309-1698 茨城県笠間市石井717番地							
発行年月日	平成23年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村遺跡番号						
はんがいのせき 堀谷遺跡	かきましのせき 笠間市小原 48番地ほか	08321089		36° 22' 10"	140° 19' 59"	20080818 / 20090130	11,849㎡	県営畑地帯 総合整備事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
堀谷遺跡	集落	旧石器時代	石器集中地点	1箇所	ナイフ形石器、 刃器状刮片、打 面再生刮片、剥 片、石核、砕片	ナイフ形石器を含む 石器59点が集中する ユニットが1箇所確 認された。	ナイフ形石器を含む 石器59点が集中する ユニットが1箇所確 認された。	
		縄文時代	竪穴住居跡 陥穴	1軒 2基	縄文土器、石器	縄文前期中葉の住居 跡が検出された。	縄文前期中葉の住居 跡が検出された。	
		弥生時代	竪穴住居跡	69軒	弥生土器、土製 紡錘車・土錘、 磨石・台石・砥 石、管下、鉄斧	弥生後期後半の大規 模な集落を確認、B 3区3・4号住居跡 では土台式土器と 二軒層式土器の良好 な個体が出土した。	弥生後期後半の大規 模な集落を確認、B 3区3・4号住居跡 では土台式土器と 二軒層式土器の良好 な個体が出土した。	
		古墳時代	竪穴住居跡	16軒	土師器、土製紡 錘車・土錘、磨 石・台石・砥石・ 砥石、刀子、銅 製品	古墳前期の方形周溝 墓2基が確認され た。	古墳前期の方形周溝 墓2基が確認され た。	
	奈良平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 方形周溝状遺構	34軒 7棟 1基 1基	土師器、須恵器、 灰釉陶器、刀子、 磁石、紡錘車	奈良・平安時代の60 号住居跡からは「 山寺」黒書土器と高 台形の付いた鉢形の須 恵器が出土した。	奈良・平安時代の60 号住居跡からは「 山寺」黒書土器と高 台形の付いた鉢形の須 恵器が出土した。		
		中世以降	地下式坑 井戸 土坑 溜井状遺構 ピット群 ピット列	7基 3基 2基 1基 1基 2条	陶器（古瀬戸、 常滑）、内耳壺、 かわらけ、鉄滓	中世の区画溝は台地 上を縦走し、道路跡 がこれと直交する。 地下式坑を7基確認 した。	中世の区画溝は台地 上を縦走し、道路跡 がこれと直交する。 地下式坑を7基確認 した。	
			溝 道路跡 土坑	19条 1条 121基				
	時期不明							



茨城県笠間市

## 埴谷遺跡 2

— 県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

平成23年3月10日 印刷

平成23年3月15日 発行

編 集 有限会社 毛野考古学研究所  
〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1  
電話 027-265-1804 FAX 027 265 5352

発 行 笠間市教育委員会  
〒309-1698 茨城県笠間市石井717番地  
電話 0296-77-1101

印 刷 朝日印刷工業株式会社  
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地  
電話 027-251-1212

